

関越自動車道関係発掘調査報告書

し みずのうえ
清 水 上 遺 跡
(本文編)

1990

新潟県教育委員会

関越自動車道関係発掘調査報告書

し みずのうえ
清 水 上 遺 跡
(本 文 編)

1990

新潟県教育委員会

序

新潟県教育委員会ではこの十数年来、高速道路や国道バイパス建設に伴い、多くの遺跡——埋蔵文化財——の発掘調査を実施してきた。

本書は関越自動車道堀之内パーキングエリアの建設に先立って調査した北魚沼郡堀之内町の清水上遺跡の発掘調査報告書である。

清水上遺跡は縄文時代中期の大きなムラで、多くの長方形住居跡や竪穴住居跡から多量の土器や石器が出土した。縄文時代には文字による記録はまだなく当時の状況を知る術は遺跡の調査のみである。遺跡から出土する土器や石器はそれだけではなにも語ってくれないが、研究を積み重ねることによって実際に雄弁に当時の状況を語ってくれる。例えば、今回出土した多くの土器や石器は当時の人々が遠く県外の諸地域とも深く交流を持っていたことを語ってくれるし、発掘された住居跡は、人々が四千年前から雪などには負けずに暮していたことを私達に示してくれたのである。

本書は縄文時代の研究に資するところ大である。また、今回明らかにされた先人の暮しぶりが物語るもののが地方発展の一契機となれば幸いである。

なお、調査に当たっては、日本道路公団より特段のご配慮を賜り、堀之内町教育委員会並びに町民の皆様には多大なる御協力とご援助を頂いた。ここに深甚なる謝意を表するものである。

平成2年3月

新潟県教育委員会

教育長 田 中 邦 正

清水上遺跡

遺跡名称 清水上遺跡（しみずのうえいせき）
遺跡地図番号 新潟県 73（小平尾） 地図番号 58 市町村番号 19
『新潟県遺跡地図』 1979 新潟県教育委員会
遺跡所在地 新潟県北魚沼郡堀之内町大字根小屋字清水上 5,233 番地ほか。
調査主体者 新潟県教育委員会
調査担当者 中島栄一（新潟県教育庁文化行政課文化財主事）
調査期間 第1次調査 昭和 56 年 10 月 19 日から 11 月 21 日
第2次調査 昭和 57 年 4 月 12 日から 7 月 3 日
調査面積 昭和 56 年 2,083.5 m²
昭和 57 年 4,311.7 m² 合計 6,395.2 m²
調査協力機関 堀之内町教育委員会 小千谷市教育委員会 川口町教育委員会 小出町教育委員会
守門村教育委員会 広神村教育委員会 湯之谷村教育委員会
日本道路公団新潟建設局小出工事事務所 東急建設 堀工務店



第1図 遺跡位置概念図

例　　言

- 1 本書は新潟県北魚沼郡堀之内町大字根小屋字清水上 5,233 番地他に所在する清水上遺跡（しみずのうえいせき）の発掘調査報告書である。本書は本文編と図版編に 2 分冊した。
- 2 遺跡発掘調査は関越自動車道新潟線の堀之内パーキングエリア建設に伴い、新潟県教育委員会が日本道路公団新潟建設局から受託して実施した。
- 3 発掘調査は 2 次にわたって行われ、第 1 次調査は昭和 56 年 10 月 19 日から 11 月 21 日まで、第 2 次調査は昭和 57 年 4 月 12 日から 7 月 3 日まで行われた。
- 4 出土遺物と調査にかかる資料は全て新潟県教育委員会が保管している。遺物の註記記号は「SM」「SU」とし、記号のあとに出土地点を記した。
- 5 遺構・遺物実測図・写真は図版編として別冊に一括した。遺物の実測番号は土器・石器・土製品・石製品ごとに一連の通し番号を付し、写真図版を含め全てこの番号を使用した。
- 6 文中の註は脚註とした。引用文献は著者と発行年を〔西暦〕で文中に示し、各章・節末に一括して掲げた。
- 7 本書の作成は文化行政課曾和分室で行い、文化行政課職員と日々雇用職員がこれに当たった。整理参加者については第 I 章に記した。
執筆者と執筆箇所については下記の通りである。
第 I 章 田海義正、第 II 章 1 節 柳 恒男、2・3 節 田海、第 III 章 田海、第 IV 章 1 節 高橋 保・池田敏郎・川村浩司、2 節 高橋保雄〔2 節 B 14)・21)・22) 高橋保雄・鈴木俊成 2 節 B 23)・C 1) 本間桂吉〕編集は田海が行った。
- 8 石器の石材鑑定では、新潟県立教育センター地学研究室の村松俊雄氏に御教授を頂き、高橋保雄が個々の石材認定を行った。
- 9 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多くの御教示、御協力を頂いた。記して御礼申し上げる。また、この他にも特に整理中にご意見を賜った方もおられるが、あまりにも多数であるため一部割愛させて頂いた。(敬称略、五十音順)
赤山容造 甘粕 健 石井 寛 伊藤正義 伊藤光義 達藤孝司 達藤正夫 小熊博史
小野 昭 可児通宏 金子拓男 日下部善己 児玉 準 小林達雄 駒形敏朗 佐藤雅一
田中耕作 寺内隆夫 中西 充 古川知明 堀金 靖 前山精男 増子正三 三浦圭介
目黒吉明 渡辺 誠

目 次

第 I 章 序 説.....	1
1 調査に至る経緯.....	1
2 調査の経過.....	3
3 調査の方法.....	4
A グリッドの設定.....	4
B 基本層序.....	5
4 調査の体制.....	7
5 整理の体制と方法.....	8
A 整理期間と体制.....	8
B 整理作業の新しい試み.....	8
第 II 章 遺跡の環境	10
1 地理的環境	10
2 周辺の遺跡	13
第 III 章 遺 跡	15
1 遺跡の概要	15
2 遺 構	17
A 住居跡	17
B 柱穴列	32
C 土坑類	33
1) フラスコ状土坑	34
2) 土坑	35
3) 溝状土坑	38
4) 集石土坑	38
D 埋設土器	39
E その他のピット	39
3 まとめ	39
A 住居跡	39
1) 各類の細分と特徴	40
2) 住居跡の分布	42
3) 住居跡の変遷	42

4) 新潟県内における縄文時代中期の住居跡	45
5) 結論	47
a 大型住居跡の性格	47
b フラスコ状土坑・土坑	49
c 溝状土坑	49
引用・参考文献 遺構	49
第 IV 章 遺物	51
1 土器	51
A 資料提示の方法	51
1) 資料の取扱いについて	51
2) 図化の方法	53
3) 観察表の記載方法	53
4) 部位名称	55
5) 土器分類	55
a 系統	55
b 器形	56
c 時期	57
B 土器各説	58
1) 遺構出土の土器	58
2) 包含層出土の土器	123
a D地区	123
b 表採	124
c Aトレンチ	125
d A地区Na付土器	125
e A地区	128
f B地区	131
g C地区	132
3) その他の土器	133
C 分析	133
1) A地区出土の土器について	133
2) 各遺構出土土器について	137
3) 清水上遺跡における出土土器の編年について	143
4) 越後系土器について	149

5) 東北系浅鉢の系譜について	158
6) まとめ	160
引用・参考文献 土器	160
2 石 器	163
A 石器の記述	163
1) 記述の方針	163
2) 資料の提示方法	163
a 一覧表の記載	163
b 実測図の表示方法	164
c 観察表の記載	166
B 出土石器の分類と分析	170
1) 石 錐	170
2) 尖頭器	173
3) 石 鍤	173
4) 石 匙	178
5) 両面加工石器	179
6) 三脚石器・板状石器	180
a 三脚石器	181
b 板状石器	186
7) 打製石斧	190
8) 磨製石斧	199
9) 穰 器 類	203
10) 磨 石 類	206
11) 砥 石	215
12) 石 盆	216
13) 両極剥離痕のある石器（略称両極石器）	220
14) 不定形石器	222
a A 類	226
b B 類	228
c C 類	229
d D 類	232
e E 類	234
f F 類	236

g G	類	238
h H	類	240
i I	類	242
j J	類	243
k 分類不可		245
15) 石 錘		248
16) 台 石		248
17) 部分的に研磨のある石斧		248
18) 擦痕のある剝片		248
19) 摂 器		248
20) 分類不明石器		249
21) 石 核		250
22) 剝 片 類		254
23) 土 製 品		264
24) 石 製 品		264
C ま と め		266
1) 三脚石器の分布・時期・性格について		266
2) 器種の石材選択		268
3) 石器組成について		269
4) 石器の出土分布状況と遺跡のあり方		272
引用・参考文献 石器		272
第 V 章 ま と め		275
要 約		277

挿 図 目 次

第1図 造跡位置概念図	前書	第11図 住居跡配置図	40
第2図 編之内バーニングエリアと造跡範囲	2	第12図 住居跡模式図	41
第3図 ダリッド設定図	5	第13図 住居跡分布模式図	43
第4図 基本層序	6	第14図 新潟県内の大型住居跡検出造跡(中期)	45
第5図 実測用土器写真	9	第15図 新潟県内で検出された	
第6図 石器台帳への記入例・実測器を用いた		大型住居跡(中期)	46
実測作業	9	第16図 五丁歩道跡	46
第7図 周辺の地形と造跡分布	12	第17図 土器各説における地区割図	52
第8図 造跡の地形と道路公園用地	15	第18図 土器文様の表現方法	53
第9図 舞 状 土 技	38	第19図 土器法量測定位置及び部位名称	54
第10図 1号埋設土器	38	第20図 器形分類図	56

第21図	A地区及びAトレンチ出土土器	134
第22図	斜行沈殿文系土器出土遺跡	136
第23図	各遺構出土土器（1）	138
第24図	各遺構出土土器（2）	139
第25図	各遺構出土土器（3）	141
第26図	清水上遺跡における土器編年試案（1）	150・151
第27図	清水上遺跡における土器編年試案（2）	152・153
第28図	清水上遺跡における土器編年試案（3）	154・155
第29図	越後系土器の展開	156
第30図	東北系浅鉢出土遺跡分布図	159
第31図	図の展開例の模式図	165
第32図	実測図の主な表現例	166
第33図	素材の計測部位と名称	167
第34図	主なる器種の部位名称と計測基準	168
第35図	石器出土分布図	172
第36図	石器長幅分布図	172
第37図	石器重量分布図	172
第38図	石器出土分布図	175
第39図	石器長幅分布図	176
第40図	石器重量分布図	176
第41図	両面加工石器出土分布図	179
第42図	両面加工石器長幅分布図	180
第43図	両面加工石器厚さ分布図	180
第44図	両面加工石器重量分布図	180
第45図	三脚石器・板状石器細分類図	182
第46図	三脚石器出土分布図	183
第47図	三脚石器長幅分布図	184
第48図	三脚石器厚さ分布図	184
第49図	三脚石器重量分布図	184
第50図	板状石器出土分布図	187
第51図	板状石器A・C・D類長幅分布図	187
第52図	板状石器B類長幅分布図	187
第53図	板状石器重量分布図	188
第54図	打製石斧複形・短圓形の分類基準図	190
第55図	打製石斧出土分布図	192
第56図	打製石斧A類長幅分布図	193
第57図	打製石斧B（1・2・4）類長幅分布図	193
第58図	打製石斧B3類長幅分布図	193
第59図	打製石斧C・D類長幅分布図	193
第60図	打製石斧重量分布図	194
第61図	打製石斧遺存部分と破損の仕方	197
第62図	磨製石斧出土分布図	200
第63図	磨製石斧長幅分布図	200
第64図	磨製石斧重量分布図	200
第65図	穂器類出土分布図	204
第66図	穂器類長幅分布図	205
第67図	穂器類重量分布図	205
第68図	磨石類A・B・C類出土分布図	208
第69図	磨石類D・E・F・G・H類出土分布図	208
第70図	磨石類A類長幅分布図	210
第71図	磨石類B類長幅分布図	210
第72図	磨石類C類長幅分布図	210
第73図	磨石類D類長幅分布図	210
第74図	磨石類E類長幅分布図	210
第75図	磨石類F類長幅分布図	210
第76図	磨石類G・H類長幅分布図	210
第77図	磨石類厚さ分布図	212
第78図	磨石類重量分布図	212
第79図	石皿出土分布図	217
第80図	石皿長幅分布図	218
第81図	石皿重量分布図	218
第82図	両極石器出土分布図	220
第83図	両極石器長幅分布図	221
第84図	両極石器重量分布図	221
第85図	不定形石器A類出土分布図	227
第86図	不定形石器A類長幅分布図	227
第87図	不定形石器A類重量分布図	227
第88図	不定形石器B類出土分布図	228
第89図	不定形石器B類重量分布図	229
第90図	不定形石器B類長幅分布図	229
第91図	不定形石器C類出土分布図	230
第92図	不定形石器C（1・2）類長幅分布図	231
第93図	不定形石器C（3・4）類長幅分布図	231
第94図	不定形石器C類重量分布図	231
第95図	不定形石器D類出土分布図	232
第96図	不定形石器D類長幅分布図	233
第97図	不定形石器D類重量分布図	233
第98図	不定形石器E類出土分布図	234
第99図	不定形石器E類長幅分布図	235
第100図	不定形石器E類重量分布図	235
第101図	不定形石器F類出土分布図	237
第102図	不定形石器F（1・2）類長幅分布図	237
第103図	不定形石器F3類長幅分布図	237
第104図	不定形石器F類重量分布図	237
第105図	不定形石器G類出土分布図	238
第106図	不定形石器G類長幅分布図	239
第107図	不定形石器G類重量分布図	239
第108図	不定形石器H類出土分布図	240
第109図	不定形石器H類長幅分布図	241
第110図	不定形石器H類重量分布図	241
第111図	不定形石器I類出土分布図	242
第112図	不定形石器I類長幅分布図	242
第113図	不定形石器I類重量分布図	242
第114図	不定形石器J類出土分布図	243
第115図	不定形石器J類長幅分布図	244
第116図	不定形石器J類重量分布図	244
第117図	剥片類石材別・形状別長幅分布図（1）	262
第118図	剥片類石材別・形状別長幅分布図（2）	263
第119図	三角形土版・三角形岩版・三脚石器（A類）の分布	267

表 目 次

第1表	フ拉斯コ状土坑觀察表	36	第34表	磨製石斧分類別出土數	199
第2表	土坑觀察表	37	第35表	磨製石斧石材表	201
第3表	主な出土石器の固化数量と 固化率	165	第36表	磨製石斧遺存部分と破損の仕方	201
第4表	主な器種の縮尺率	166	第37表	磨製石斧使用痕	201
第5表	石器の器種別数量	170	第38表	機器類分類表	203
第6表	石器分類表	171	第39表	機器類分類別出土數	204
第7表	石器分類別出土數	171	第40表	機器類石材表	205
第8表	石器石材表	172	第41表	磨石類分類表	207
第9表	石器分類表	174	第42表	磨石類分類別出土數	207
第10表	石器分類別出土數	175	第43表	磨石類石材表	214
第11表	石器石材表	176	第44表	石皿分類表	216
第12表	石器維部断面形表	177	第45表	石皿分類別出土數	217
第13表	両面加工石器石材表	180	第46表	石皿石材表	218
第14表	三脚石器・板状石器区別表	181	第47表	石皿遺存状態表	218
第15表	三脚石器分類表	183	第48表	兩極石器分類別出土數	221
第16表	三脚石器分類別出土數	183	第49表	兩極石器石材表	221
第17表	三脚石器石材表	185	第50表	不定形石器分類別出土數	223
第18表	三脚石器自然面集計表	185	第51表	不定形石器分類表（1）	224
第19表	三脚石器遺存状態表	185	第52表	不定形石器分類表（2）	225
第20表	板状石器分類別出土數	186	第53表	不定形石器石材表	226
第21表	板状石器石材表	188	第54表	不定形石器素材（剥片）觀察表	247
第22表	板状石器自然面集計表	188	第55表	剥片剥離作業工程表及び分類表	249
第23表	板状石器遺存状態表	188	第56表	石核分類別出土數	252
第24表	打製石斧分類表	190	第57表	石核石材表	253
第25表	打製石斧分類別出土數	192	第58表	剥片遺構別出土數	255
第26表	打製石斧石材表	195	第59表	遺構外出土剥片石材表	256
第27表	打製石斧素材表	195	第60表	剥片類石材別觀察集計表（1）	259
第28表	打製石斧自然面集計表	196	第61表	剥片類石材別觀察集計表（2）	260
第29表	打製石斧遺存部分と被損の仕方	197	第62表	剥片類石材別觀察集計表（3）	261
第30表	打製石斧刃部平面形	197	第63表	土製品・石製品觀察表	265
第31表	打製石斧刃部断面形	197	第64表	主な出土石器の組成	270
第32表	打製石斧使用痕	198			
第33表	打製石斧つぶし	198			

第 I 章 序 説

1 調査に至る経緯

今回発掘調査された清水上遺跡は、小出インターチェンジと越後川ロインターチェンジとの間にある掘之内バーティングエリアの建設予定地にあった。昭和 56・57 年に新潟県教育委員会(以下、県教委)は建設工事に先立ち、遺跡の内容・性格を記録に残すために発掘調査を実施した。以下、調査に至るまでの経緯を簡単に記述する。

昭和 32 年に「国土開発幹線自動車道建設法」が公布され、昭和 38 年関越自動車道予定路線の発表となつた。昭和 46 年には長岡・湯沢間の法線の発表がされ、県教委は昭和 47 年に長岡・湯沢間の遺跡分布調査を実施した。その結果、掘之内町大字根小屋集落背後の河岸段丘上の畑地に縄文時代の遺跡があることが確認された。これが「清水上遺跡」である。その時点で約 4,000 m²が遺跡範囲と考えられ、日本道路公团新潟建設局(以下、道路公团)に回答した。昭和 52 年 4 月に道路公团と県教委の間で掘之内バーティングエリア設置の協議がなされ、県教委は「施行地域内の遺跡調査については、別途協議すること」との意見を付して了解した。

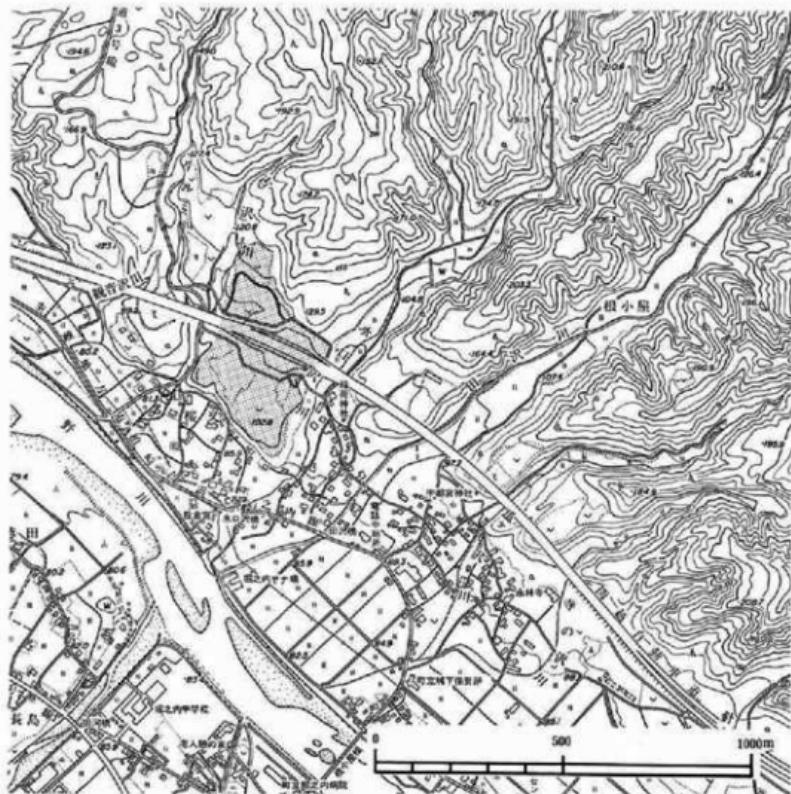
この間に再度清水上遺跡の分布調査が行われたが、バーティングエリア建設予定地は、耕作土が比較的厚く堆積し遺物の散布が少ないと考えられた。これら関越自動車道の遺跡調査計画とは別に、昭和 53 年に北魚沼郡を対象とした「遺跡詳細分布調査」が県教委によって行われた。その結果、掘之内町大字根小屋字清水上 5,233 番地を中心とした約 100 × 200 m の範囲が遺跡カードに登録された。また、これらの資料とは別に、バーティングエリア設置計画以前の道路部分と切り土部分を全て遺跡範囲として、確認調査が必要とした資料も存在したが、道路公团との正式な協議には提出されなかった。

こうして双方が調査に必要な遺跡面積について共通した数字を持たないまま、昭和 57 年秋の供用開始を前提に、昭和 55 年度に清水上遺跡の発掘調査依頼が道路公团より県教委宛に出された。これを受けて昭和 56 年 10 月 19 日から 11 月 21 日まで第一次の発掘調査が行われた。

調査面積は当初の予定では 1,500 m²であったが、実質調査面積は 2,083.5 m²である。調査は遺跡の北側部分で道路本線にかかる地点から始めた。段丘上の更に一段高い部分に着手したが、遺構は縦薄で遺物の検出も少なかった。しかし、下段からは発掘面積が少ないにもかかわらず多くの遺物と土坑等が良好な状態で検出された。調査が終了する頃、遺跡範囲外としたバーティングエリア工事部分の黒土に遺物が認められ遺跡範囲の拡大が予想された。

昭和57年1月雪の中でパーキングエリア部分の試掘を行い、当初の4,000m²と合わせて工事対象区域だけでも約6,600m²が遺跡範囲と確認された。しかし、新たに確認された部分の殆どは既に削平等を受け、盛り土展圧がなされているなど工事が進行していた。この結果を道路公団に連絡したが、開通時期が決定されていて工事期間もそれによって計画されているため、5月中旬までに全ての調査を終了するよう要請された。これに対して県教委は急いでも4月から7月の始めまでは調査期間が必要として調査に入った。

第2次の調査は、昭和57年4月12日から7月3日まで行われた。調査は原則として昨年度終了部分から続けて行うこととしたが、構造物等の建設される部分から優先的に調査することで合意した。そして、調査の終了した部分から道路公団に引き渡したため、調査区全体の写真撮影などはできなかった。



第2図 堀之内パーキングエリアと遺跡範囲（堀之内町平面図 1：10,000から転載）

2 調査の経過

昭和 56 年度の調査日記抄

10月 19 日 器材整理・基本杭確認。掘之内町・小出町各教育委員会に挨拶。20日 作業初日調査概要等の説明後、表面採集を行ったが遺物なし。男性 19名、女性 13名出席。21日 A-1・2区、A・B-5区から掘り始める。土層は上から表土層 30~40 cm。黒色土 0~10 cm。淡褐色地山漸移層 5~10 cm。地山土（砂礫質土）となっている。26日 遺物の出土が極端に少なく、表土が予想以上に厚いため重機を入れて表土の除去を始める。31日 Aトレンチ（排水路）の調査を始める。地山上面より中期前葉の土器が多量に出土し始めた。11月に入ると雨続きで作業が大幅に遅れ出した。また、8日には約 20 cm の積雪があり除雪しながらの作業となつた。12日 Aトレンチ終了。H-3区の側道部分発掘。高い面では明確な遺構は少ない。18日 G・H-3区の土坑の調査。3基検出。土坑が検出された低い面に遺構・遺物が多い。20日 各グリッドの写真撮影、コンタ図作成。全体の実測終了。21日 器材片付け、調査終了。

昭和 57 年度の調査

4月 15 日 事前準備に入る。表土層を重機により除去する。19日 発掘調査開始。作業員 136名出席。諸説明・注意の後ベルトコンベヤーを設置。D-5区、E-4・5区、F-3~5区、G-3~5区からジョレンかけを行う。21日 C-6区からE-4区に礫群が検出される。その礫の間に遺物が混在する。E-4区の礫群は土石流の可能性が考えられたが遺物が多量に出土していることから、遺構との共伴も考えられ実測を行うこととする。この礫群が本遺跡の中心的な遺構となると考えられた。27日 G・H・I-7・8区、H・I-9区にも礫群が見られたことから河川の流れ込みによるものではないかと考えられた。5月 6日 H・I-11区の包含層剥ぎで多量の遺物が出土した。住居跡などの存在が予想される地域である。11日 公園より新たな期限と範囲提示がある。最初の引き渡しが 5月 20日であるが未着手部分が多くあり、作業の終了が危ぶまれる。実測は航空測量を導入するよう係長から指示があった。NHK のニュースで当遺跡が紹介された。H・I-7区遺構掘り。焼土を確認できる面での遺構確認は難しく、約 5 cm 下げて遺構を確認する事にした。14日 H・I-7~9区を 5月 22日に公園へ引き渡す範囲とする。15日 遺構検出作業は F・G-6区、G-8~10区、H・I・J-11区。発掘中は G-8区、H・I-7区、H-8区、I-9区。17日 航空測量の打ち合わせ。引き渡し範囲の H・I-7区はピット・土坑等が多く作業の能率アップが問題である。19日 測量写真を撮影。H・I 区の礫流入地域の礫を 1 点ずつ確認しながら除去する。22日 H・I-7~9区を公園に引き渡す。次回は 5月 30日に F・G・H-5区、F・G-6区を引き渡す予定。25日 角屋久次新潟県議会議員来訪。26日 引き渡し範囲を重点的に調査。住居跡が多く絡み

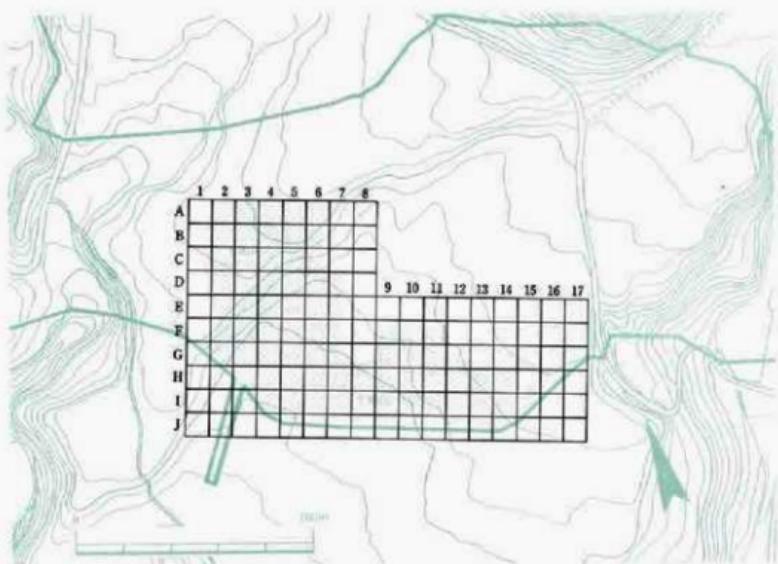
発掘に手間取る。H-5・6区にかけて、長軸がほぼ東西方向となる大住居跡らしきもの（3号住居跡）検出される。広神中学校の生徒遺跡見学。28日 表土剥ぎ終了。遺構発掘には作業員数が多過ぎるため、地元堀之内地区の人には通しで出動してもらい、小出町・小千谷市方向の人には1週間交代で出動してもらう。このまえにF・G-8～10区の展示部分の客土を除去してもらう。6月1日 遺構が調査予定区域外へ延びることが確定的になったため、公園と協議してG-11・12区を拡張する。4日 堀之内小学校6年生が遺跡見学。F・G-3～7区、H-3～5区（一部）を引き渡す。5日 地元「根小屋老人クラブ」約20名遺跡見学。H-4～6区（一部）、I-4～6区、J-5・6区は10日に引き渡しとする。6日 堀之内小学校5年生約100名が遺跡見学。H・I・J-10・11区の遺構検出と発掘に入る。11日 農道東側H-15・16区、I-15区の調査終了。地山面が相当削られ、遺構が少ない。15日 16号住居跡より打製石斧が5本壁際で検出される。この間に調査の重点は10列より東側に移る。16日 10日までに引き渡しを予定していた地区を19時45分まで実測して公園に引き渡す。17日 G-9～11区で大きなフ拉斯コ状土坑が連続して検出される。20・21号住居跡を掘り進めている。21号住居跡付近のピットより土偶の頭部出土。21日 16・20・21号住居跡の調査を終結。21号住居跡東南壁際より舟形の土器出土。22日 広神小学校6年生71名が遺跡見学。角屋県議来訪。23日 F・G-8～10区終了。引き渡し可能。20号住居跡東側の浅い掘り込みは住居跡となる可能性がある（後の25号住居跡）。24日 発掘作業の主体も本日で終了する。16・20・21号住居跡は隣接しているが、作業員の仕事量が少くなり、テント移動・遺物洗い・器材整理を行う。25日 H・I-12・13区の住居跡群の作業。本日で発掘作業は終了となる。28日 最終の週。住居跡群と11列から東側は全部実測終了まで持つていかなくてはならない。G-11区で新発見の土坑（37号フ拉斯コ状土坑）には浅鉢と深鉢が各1個壁際に置かれていた。30日 バス通勤者の関係市町村教育委員会へ挨拶回りをする。湯之谷村井ノロ小学校3年生約50名見学。7月2日 住居跡群、11～14列間で全て実測・写真撮影終了。この間作業は8時から19時まで行った。器材整理、荷造り、関係方面挨拶回り。3日 器材・遺物搬出。発掘調査終了。

3 調査の方法

A グリッドの設定（第3図）

グリッドは段丘面の地形に合わせるために、道路公園の工事用杭STA. 69と70を結んだ線を基線とした。それをもとに10m方眼の大グリッドを組み、東西方向に数字、南北方向にアルファベットを付してグリッド名を表示した。大グリッドの10m方眼をさらに2m方眼の小グリッドに分割して南東隅を1、南西隅を5、北東隅を21、北西隅を25のごとく表示した。グリッドの

表示は「G-4-20」等とした。グリッドは国土地理院の座標軸に対して約21.5度東偏している。

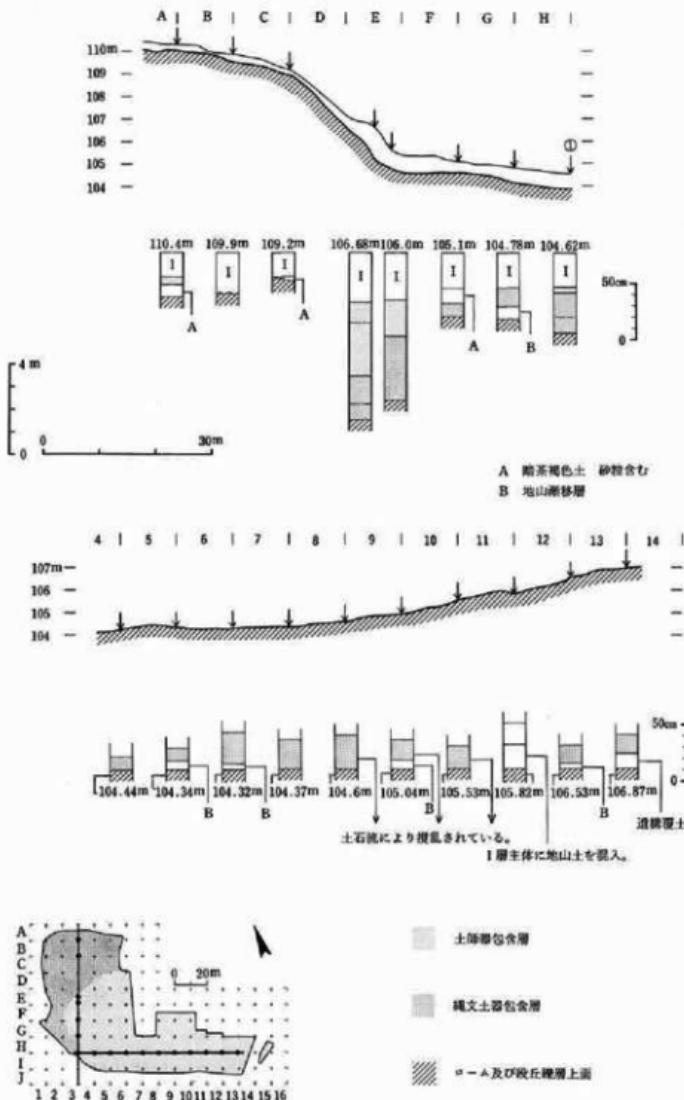


第3図 グリッド設定図

B 基本層序(第4図)

本遺跡では昭和56年度調査区(1地区)と57年度調査区(2地区)では、土層堆積状況に大きな差がある。昭和56年度調査区のA・B-3・4区周辺では、30~40cmの黒褐色の耕作土が堆積しており、その下部には平安時代の遺物包含層が確認できる。また、この一段高い面では縄文時代の遺物包含層は認められない。昭和57年度調査区は東から西へ緩やかに傾斜し、さらに段丘先端に向かって緩傾斜している。2地区的H・I列の東西セクションの東方は工事の際に削平を受けたため、土層の正確な状況は捉えられなかった。I-4区北西隅セクション①は、遺跡における土層堆積の典型的な例である。基本的層序は下記の通りである。

- I層 黒褐色土 耕作土。厚さ10~40cm。
- II層 黒褐色土 平安時代遺物包含層。厚さ2~14cm。上部から平安時代の土器が出土する。
土層は縮りがあり、小礫・炭化物粒を多く含む地点がある。
- III層 焦げ茶~暗褐色土 縄文時代遺物包含層。厚さ25~60cm。地点により若干の色調の相違がある。小礫を若干含み、炭化物粒を割合多く含む。土層の性質も粘性を持ち緻密で縮



第4図 基本層序

りのあるところが多いが、一部に土石流の跡や小砂利・砂を部分的に多量に包含する層がある。

IV層 灰褐色～暗黃褐色土 地山漸移層。

V層 地山層。調査区全体を段丘堆積物が覆っていて、礫層の上部に約1～1.5m程度の黄褐色シルト、砂層が堆積している。G-5区では約1mの黄褐色シルトが見られるが、H-11区では硬層が露出していた。

4 調査の体制

調査は新潟県教育委員会（教育長 久間健二）が主体となって、以下の体制で実施した。

昭和 56 年度

総 括 南 義昌（教育庁文化行政課課長）

管 理 石山欣弥（文化行政課課長補佐）

庶 務 近藤信夫（ タ 庶務係係長）

　　獅子山隆（ タ タ 主事）

調査指導 金子拓男（ タ 埋蔵文化財係係長）

調査担当 中島栄一（文化行政課文化財主事）

調査員 波田野至朗（ タ 学芸員） 折井 敦（文化行政課学芸員）

　　高橋 保（ タ 学芸員） 田辺早苗（ タ 頼託）

　　佐藤雅一（ タ 頼託） 田海義正（ タ 頼託）

昭和 57 年度

総 括 南 義昌（教育庁文化行政課課長）

管 理 歌代莊平（文化行政課課長補佐）

庶 務 飯口 眞（ タ 庶務係主任）

　　若杉幸三（ タ 庶務係主事）

調査指導 金子拓男（ タ 埋蔵文化財係係長）

調査担当 中島栄一（ タ 文化財主事）

調査員 横山勝栄（ タ 文化財主事） 岡本郁栄（文化行政課文化財主事）

　　山本 雄（ タ 学芸員） 田海義正（ タ 頼託・学芸員）

　　田辺早苗（ タ 頼託） 高橋 勉（ タ 頼託）

古川知明（新潟大学人文学部研究生）

5 整理の体制と方法

A 整理期間と体制

清水上遺跡の報告書作成のための整理作業は、主として昭和61年(1986)9月から平成元年(1989)3月まで、新潟市曾和にある文化行政課曾和分室で行った。整理は遺構・土器・石器の3班に分かれて実施した。整理参加者は以下のとおりで、主に担当したところを記しておく。

遺構 田海義正 土器 池田敏郎・川村浩司・高橋 保 石器 高橋保雄・鈴木俊成・本間桂吉 このほかに日々雇用職員が整理にあたった。原稿の執筆分担は例言に記したとおりである。

B 整理作業の新しい試み

整理の状況と新しく取り入れた整理の方法について、各章の記述と重複する部分もあるが、ここで述べておく。

遺構 各遺構に対して位置・規模・層序・出土遺物・所見その他必要事項を記入した遺構カードを作成した。現在は発掘調査終了と相前後してカードを作成するようになったが、昭和57年当時は遺構実測図面や日誌類を整理して作成する時間的余裕がなく、整理まで時間をおいたために遺構の詳細について不明の点も少なくなかった。

土器 土器復元を別にすれば、図版作成までに最も時間のかかる遺物実測の時間を短縮するために新しい図化の方法を試みた。主に完形品に用いた方法であるが、土器を写真に撮ってそれを現物と比較しながら、写真をトレースする方法である。作業の手順としては、実測する面を決めて撮影する。この際、歪んだ像にならないように800mmの望遠レンズを使用した。当初は200mm程度のレンズを使用したが、土器の口縁部や底部に歪みが出てしまったため使用できなかった。撮影前の準備として、土器の隆帯や文様の不鮮明な部分にチャコペン等で線を入れておくと、鉛筆トレースが楽であった。その写真にマイラーベースを貼り鉛筆トレースを行い、手取り実測した断面図を加えてトレースした。以上の方法で土器実測・トレースを行った結果、土器の大小や文様構成の粗密等によって差があるが、手取りの実測に比べて約1/3程の時間でトレースまで行うことができた。複雑な隆帯などを持つ大型破片の文様の図化については、後述する石器実測の器具を用いて実測の効率化を図った。

石器 石器台帳の作成 第6図のようなカード(B4版)を遺構別・グリッド別に作成した。カードは器種別出土数と個々の石器の写真を貼り付けたものである。遺構別またはグリッド別

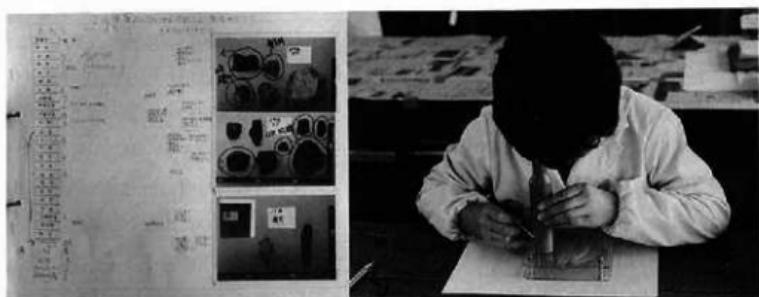
出土石器の状況が簡単に把握でき、しかも、器種内の細分類等において他の遺構やグリッドの石器と混ぜても混乱はなかった。

実測図の作成 下図右にあるような実測器を作り実測した。透明なアクリル板に石器を挟み、OHP用紙を貼り、鉛筆で輪郭や剖面を写し取る方法である。従来のやり方に比べ、簡単で早く、しかも実測方法もやさしいため初めて実測する人でもすぐにできる利点があった。なお、断面図は手取りで行った。リングやフィッシャーは調査員が描いた。また、アクリル板・OHP用紙を通しての実測のため、実測終了後は実物と照らし合わせチェックが必要である。

以上のこととは、小さな遺跡では効果的といえないと、大きな面積で遺構数・遺物数の多い遺跡においては、整理作業の煩雑さの解消や効率化等において少なからず効果を発揮したと考えられる。



第5図 実測用土器写真（OHP用紙を貼り鉛筆トレースをした。実測図番号304）



第6図 石器台帳への記入例

実測器を用いた実測作業

第二章 遺跡の環境

1 地理的環境

新潟県の越後側は地形の起伏量と傾斜分布から東部山地区、西部山地区、中部平野山地丘陵区の3つの地形区（新潟第四期研究グループ 1971）に区分することができる。特に主に先第三系からなる東部山地区と主に新第三系および第四系からなる中部平野山地丘陵区との境界は、北北東—南南西方向のきわめて明瞭な直線であり、これは地質構造線、新発田一小出線（山下 1970）に相当する。

本遺跡が所在する位置は、ほぼ県中央部にある。地形区によれば新発田一小出線に近い中部平野山地丘陵区の東縁であり、信濃川との合流点に近い魚野川右岸にあたる。

中部平野山地丘陵区の地質構造は、新第三系の地質構造でもあるが、この新発田一小出線と同方向に雁行状に走る背斜軸・向斜軸の配列、即ち褶曲構造で特徴づけられる。そして地形はこの地質構造をよく反映している。

本遺跡周辺の地形も例外ではない。列記するならば、信濃川や三国山脈を源とする魚野川、そして第四期火山の守門岳・浅草岳を源とする破間川（あぶらまがわ）の流路。これらの河川に沿って船底形に発達する十日町盆地と六日町盆地の長軸方向。両盆地に挟まれた魚沼山地（=魚沼丘陵標高400~1,000m）の稜線。これらは全て北北東—南南西の方向性をもつものである。この地質構造に支配された地形が前提になるならば、破間川が合流する地点から信濃川に合流する地点までの魚野川は、西方に向かって流路を変更し、しかも魚沼山地を横切る短い区間に変化に富んだ流れをすることで注目される。具体的には、破間川との合流地点、小出町四日町を経ると県指定史跡下倉山城跡の所在する山地の張り出しで、一時的に谷は狭くなるが、また直ちに谷は開ける。堀之内町の小盆地である。そして、この小盆地は川口町の東部、中山付近で閉じ、魚野川はここで山地を陥入蛇行しつつ深い谷を作り信濃川に達する。以上の魚野川の流れの変化も、実は地質構造を反映した地形として理解できる。つまり、堀之内町の小盆地は一般方向に走る銀治屋敷向斜を横切り、川口町中山の深い谷は同方向の田麦山背斜を横切ることに起因していると考えられる。信濃川と合流する魚野川の初期の流路とその変遷については、現時点では記述を避けるが、魚野川が新発田一小出線を越えて西流することの營力については、魚野川と破間川の強い集水力と、下流部の銀治屋敷向斜による造盆地性の運動等によるものと推測される。また、田麦山背斜を横切る營力についても豊富な水量の作用がその一因と

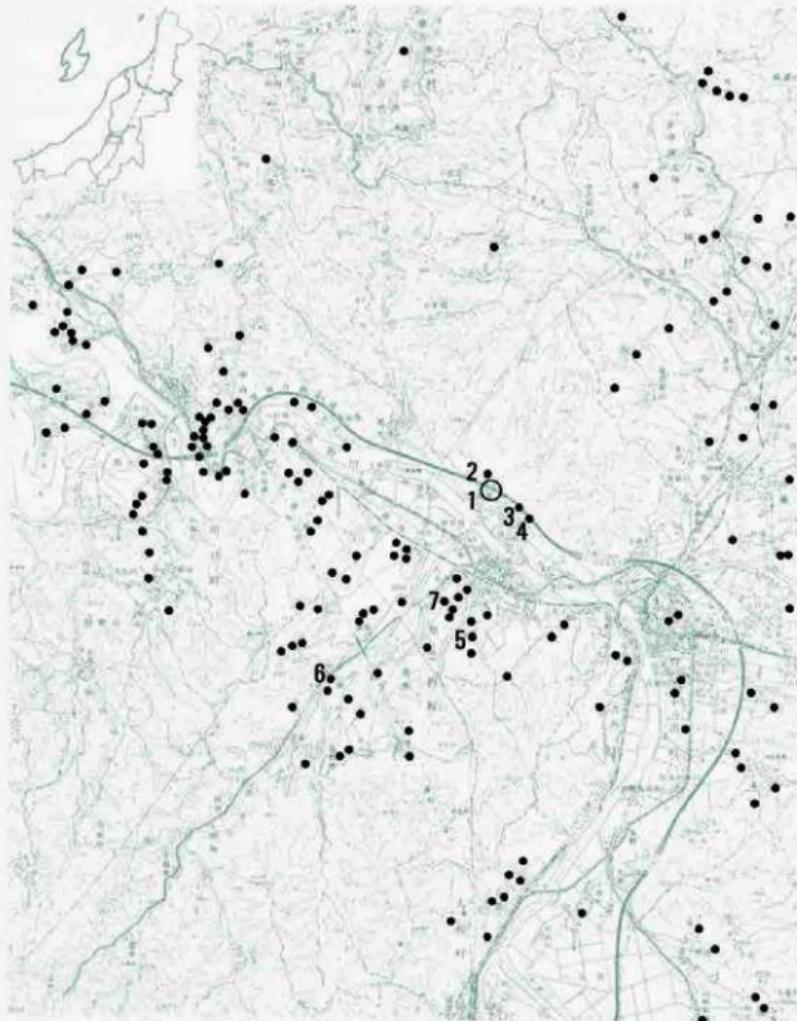
考えられる。

堀之内町の小盆地の周縁部には、数段の河岸段丘面が発達する。このことは、先に鉛治屋敷向斜の造盆地性の運動を推測してきたが、洪積世後期以降にはこの造盆地性の運動を上回る隆起運動があったことを物語る。鈴木氏はこの周辺において最近の活発な地殻変動により段丘面の分類・対比は困難であるとしながらも、7段の洪積世段丘面、3段の沖積世段丘面に細分した（鈴木 1976）。

魚野川右岸根小屋牧場の最上位面（標高 380 m）は破間川に向かって南東方向に傾斜している。そして、魚野川の作用によって形成された段丘面の分布は、ほとんどその左岸に限られていることになる。このことは特筆すべき特徴であるといえる。つまり左岸の段丘面の最も内縁の位置は、現川床から南へ約 1.5 km～2 km も入るのに対し、右岸のそれは北へ 0.5 km にも満たない。このような段丘面上には、数多くの縄文時代の遺跡が所在する。本遺跡は魚野川右岸に小規模に発達した段丘面上に位置する。標高は約 105～110 m、現河床からの比高は約 30 m である。本遺跡の背後に続く山地性の丘陵について鈴木氏は、根小屋放牧場の最上位段丘面の開析過程で丘陵化したものと説明している。実際、遺跡の発掘調査において、縄文時代の遺構を多量の砂礫層が広範囲にわたって覆っていることが確認された（図版 2）。その礫は大～巨礫であったが、比較的円磨されているため、単なる土石流起源のものではなく、上流の段丘礫層を供給源としていることがうかがえる。しかも、北東から南西へ向かう若干の imbrication¹⁾が観察されるところもある。数十万年間に及ぶ地形発達は、日常で観察できるものではないが、地滑りや土石流などの自然災害は人類の歴史を通して日常的に発生していたのではないかと推測されるところである。

堀之内町周辺の現在の気象条件は年間平均日照率 38%、年間平均気温 11℃ 前後、年間降水量 2,700 mm 前後、年間平均累積降雪量 13.54 m であり、冷涼・多雪地帯（佐藤 1985 a）を特徴づけるものである。

1) 瓦状構造。川原・河岸段丘などの礫が重なり合う状況。礫は上流部が低くなり下流側は上がった状態になる。



第7図 周辺の地形と遺跡分布 (国土地理院「小千谷」1:50,000原図 昭和59年発行)

1 水上遺跡 2 中林遺跡 3 種現平遺跡 4 瓜ヶ沢遺跡

5月岡遺跡 6 原・居平遺跡 7 布施平D遺跡

上記は福之内町の遺跡で報告書及び資料が刊行されているもの。(2を除く)

ドットは縄文時代の遺跡のみ。

2 周辺の遺跡

堀之内町周辺では、早くから地元の研究者により精力的に遺跡分布調査が実施されてきた。掘之内町の小盆地の南側は河岸段丘が広く発達しており、遺跡の存在も多く知られている。今までの調査の歴史について佐藤氏がまとめているので(佐藤 1985 b)、それを参考にしてみたい。明治 14 年、根小屋村の星野藤右衛門氏が桜又地内の俗称古林の古墳を発掘している。昭和 30 年代には星野芳郎・井口通泰両氏によって精力的な分布調査が行われた。昭和 50 年に佐藤泰治氏が、さらに昭和 53 年には新潟県教育委員会によって遺跡分布調査が行われ、堀之内町全体で 78ヶ所の遺跡が確認された。

今回調査された清水上遺跡は、河岸段丘の発達が比較的弱い魚野川右岸にある。この右岸には地形的な要因によるものと思われるが、魚野川の左岸に比べると遺跡数は極端に少ない。

次に関越自動車道の開通で調査された遺跡と、この地域で以前に調査されている遺跡について簡単に記してみたい。魚野川北岸の段丘部分に関越自動車道の建設が計画され、建設工事に先立ち遺跡の発掘調査が実施してきた。堀之内町周辺では、新潟県教育委員会によって昭和 55 年に権現平遺跡、翌 56 年には瓜ヶ沢遺跡、两年にわたり滝沢の塚が調査された。権現平遺跡(佐藤 1985 c)では、先土器時代の遺物集中地点が 2ヶ所と縦群 1基が検出された。遺物は尖頭器・斧形状石器・石刃・搔器・折とり剣片等が検出された。本遺跡の隣にある瓜ヶ沢遺跡¹⁾(佐藤ほか 1985)は、標高約 130 m の河岸段丘面先端部に位置する。調査の結果、4基の住居跡が確認された。それらの住居跡は 6 本の柱穴が亀甲状に巡る共通性を持っている。時期は縄文時代後期から晩期と考えられている。また、本遺跡でも検出されている溝状土坑が 4 基検出されているが、その帰属年代は不明である。関越自動車道開通以外の発掘調査は、いざれも魚野川の南岸に発達する河岸段丘上で行われている。昭和 43 年 8 月には長岡市立科学博物館の中村孝三郎氏等によって、先土器時代の細石刃文化期の石器群が出土した月岡遺跡(中村 1968・中村ほか 1975)の発掘調査が行われた。同遺跡出土資料は、川口町荒屋遺跡の石器群と最も似た特徴を示すことで知られている。発掘終了後の昭和 43 年 12 月県教委に提出された報告書²⁾によると、縄文時代中期の住居跡が 1 基、良好な状態で確認されていたことが分かる。住居跡の規模は、直径約 6.1 m × 5.6 m で平面形はほぼ円形を呈する。中央に長方形の石囲い炉があり、内部には土器が埋設されている。柱穴は中央の石囲い炉を囲むように 7 本配置されている。原・居平遺跡

1) 瓜ヶ沢遺跡では 4 基確認されており「V字形溝状造模」と呼んでいる。この類例には中頸城郡板倉町峯山 B 遺跡(秦ほか 1986)があり、41 基の「陥し穴状土坑」が列状に並んで検出されるなど、県内の資料も増加しつつある。

2) 手書きの発掘調査報告書が 1 部県教委に提出されたが、印刷物とはなっていない。

(池田 1981) では中期後葉から末葉の住居跡が 14 基検出されている。また、埋甕も良好な状態で 10 個体検出されている。布場平 D 遺跡(池田ほか 1985)では縄文時代中期の所産と考えられる住居跡 2 基、所属時期不明の柱穴方形列 1 基、土坑 20 基、V 字形溝状土坑 3 基他が検出されている。

引用・参考文献 遺跡の環境

- い 池田 亨 1981 「原・居平遺跡」『掘之内町文化財調査報告書第 2 輯』 新潟県掘之内町教育委員会
- 池田 亨・佐藤雅一 1985 「掘之内町文化財報告書第 3 輯 布場平 D 遺跡」 新潟県掘之内町教育委員会
- き 佐藤雅一 1985 a 「第 II 章 1 地理的環境とその背景」『掘之内町文化財報告書第 3 輯 布場平 D 遺跡』 新潟県掘之内町教育委員会
- 佐藤雅一 1985 b 「第 II 章 2 遺跡周辺の考古学的研究略史」『掘之内町文化財報告書第 3 輯 布場平 D 遺跡』 新潟県掘之内町教育委員会
- 佐藤雅一 1985 c 「椎見平遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 24』 新潟県教育委員会
- に 新潟第四期研究グループ 1971 「地形分類図よりみた新潟県の地形区一新潟県の第四系・その XIV」『新潟大学教育学部高田分校研究紀要第 16 号』 新潟大学高田分校教育学部
- は 奉 繁治・岡本都栄 1986 「V まとめ 4 陥し穴状遺構」『板倉町埋蔵文化財報告第 1 峰山 B 遺跡』 新潟県板倉町教育委員会
- や 山下 昇 1970 「柏崎一鏡子線の探査」「島弧と海洋」 東海大学出版会

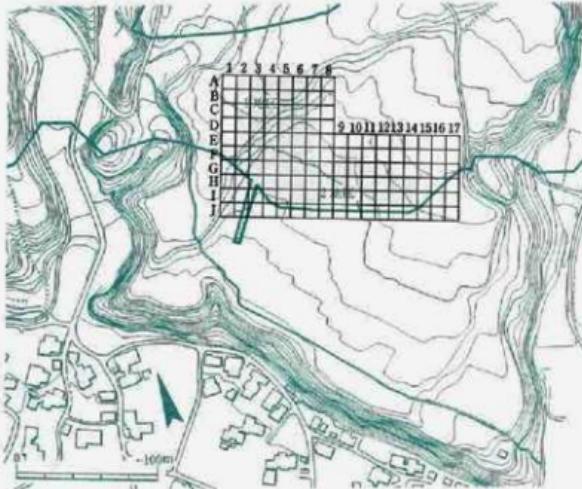
第III章 遺跡

1 遺跡の概要

遺跡の地形（第8図） 魚野川右岸に小規模に発達した段丘上に遺跡は位置する。鈴木郁夫氏の分類（鈴木1977）に依れば、洪積世段丘の第VII面に相当するとされている。この段丘面を小さな沢が浸食し、遺跡の東には水口沢川、西には古沢川が段丘面を刻んでいる。本遺跡が立地する段丘面の規模は段丘先端部で幅約300m、背後の丘陵部との境に近い法線内センター付近の幅で約280mである。丘陵部が緩傾斜になる辺りから先端部までの距離は約400mである。

調査区内では北西側のA～E区に向かって、北東から南西方向に一段高い面（1地区）があり、その南東側G～I区付近との比高は4～5mある。この一段高い面には遺構が少ない。その面より一段低い面（2地区）では、I・J～L区が標高約104mと調査区内で一番低く、そこから東に向かって緩やかに上がり、H～M区では標高約107.5mである。この地点から緩やかに傾斜し段丘先端部の崖線際の標高は約100mで、下位の沖積面との比高は約15mである。

遺跡の範囲 遺跡範囲は第1図に示した網の部分である。遺跡規模は最大幅で南北約570m東西約370m、面積は約112,000m²および、縄文時代中期を主体とする大遺跡である。



第8図 遺跡の地形と道路公団用地(太線) 網は調査範囲

遺跡は昭和47年に確認された。その後、関越自動車道の堀之内パーキングエリアの設置に関連して、昭和55年に再度分布調査を行った。その結果、法線にかかる遺跡面積は約14,000 m²であることが判明した。この調査の際に段丘先端部でもフレイク類の散布が顕著であることから、昭和53年の分布調査で確認した範囲をさらに拡大して、段丘先端部までも遺跡であるとした。また、同じ段丘面の最奥部にある中林遺跡も打製石斧が表採されており、清水上遺跡との線引きは必要がないと考え包括することにした。

遺跡の現状 遺跡の立地する段丘は先端部に向かって緩傾斜している。この地は関越道建設以前は畠や墓地として利用されていた。現在もパーキングエリア周辺部は旧状のままである。遺跡周辺は黒色土の堆積が比較的厚く、表土層下の遺物包含層は、耕作の影響があまり及んでいないと予想される。調査終了後に遺構配置を念頭に置き表面採集を行った。その結果は土器細片と打製石斧・三脚石器破損品等が採集できたが、遺物散布量からは地下の集落跡を予想することは困難であった。

遺構 今回の調査では堅穴住居跡44基、柱穴列2基、土坑63基、フ拉斯コ状土坑56基、集石土坑1基、溝状土坑1基、埋設土器2基、焼土6ヶ所、ピット多数、そのほかに土石流跡が検出された。遺構の分布は昭和56年調査区の大半であるA～E-1～4区では極端に少ない。この地区は背後の丘陵からの張り出し上にあり、他地区より一段高くなっている。昭和57年度調査区では遺構群が南側に開く形で弧状に展開していた。そのなかでH-8区の過半とH-9区、I・J-8・9区には遺構が比較的少なく、広場的な空間を形成している。また、Aトレントとして排水路部分にも、土坑らしい落ち込みが確認されたが、詳細は不明である。遺構集中区は調査区外にも延びていることが予想され、円形もしくは馬蹄形の集落構造が考えられる。

図版1の遺構分布図では住居跡を色別した。そのなかで大型で長方形の平面形を持つ堅穴住居跡は長軸方向を中心部に向けて築かれているものが多い。堅穴住居跡では平面形に多様性があり、先述の長方形に加え梢円形、隅丸台形、円形等の別が見られる。柱穴列としたものは基本的には長方形の柱穴配置をとるが柱穴の間隔等に相違があり、炉の痕跡を持たないものを言う。土坑とフ拉斯コ状土坑の分類は断面形を基本とした。それぞれの分布はD-5・6区にあって遺構集中地区を離れたものやH-10区、I-9・10区に9基の土坑が認められるほかは、弧状に巡る遺構集中地区に散在するものと理解できる。G-3・4区、H-3区で集中して検出されている大土坑は後期の土器を包含していた。H-4区で検出された溝状土坑は隣の瓜ヶ沢遺跡に類似が見られるが、今回の調査では1基認められるのみであった。

遺物 土器・土製品は平箱(54×34×20 cm)に約160箱出土した。そのうち復原できた土器は約100個体ある。土器の時期は縄文時代中期前葉から中葉のものが主体を占め、前者はD・E-4～6区の土石流跡を中心とした地域(A地区=土器の節参照)とAトレントから主に出土し、後者は遺構集中地区に分布している。前葉の土器は北陸地方に分布の中心を持つ新崎式

土器に対比されるもので、当時は北陸地方の文化の強い影響下にあったことが窺える。中葉には在地系の王冠型土器が登場する。また、東北地方南部の大木8a式系土器文化の影響を強く受けている。これらの土器に混じって中部高地系、関東系の土器も少量検出された。土器の出土状況で注目されるものは3・16・20号住居跡等の大型住居跡に投棄された状態で多量の土器が検出された。特に16号住居跡出土土器は、本遺跡の土器編年の基礎資料となっている。

石器・石製品は約3,200点出土した。これらは遺構集中区及びその付近からの出土が大半を占める。器種別では磨石類642点(約20%)、打製石斧594点(約19%)、不定形石器1,275点(約40%)が石器の主体を占め、なかでも従来あまり報告されていなかった不定形石器の出土量が注目される。このほか特徴的な石器に三脚石器68点(約2%)、板状石器106点(約3%)があり、他遺跡で検出量の少ない石器が比較的多く出土している。出土点数の少ない石器では石鏃38点、石匙5点、礫石鏃2点である。以上の資料を分析することによって縄文時代中期前半期の集落における石器組成の一端が窺えると考える。

2 遺 構

A 住 居 跡

今回の調査では44基の竪穴住居跡が検出された。以下に各住居跡の規模や特徴を述べたい。(住居跡番号が抜けているものは、番号を付けたが住居跡と確認されなかったものや、主として長方形住居跡に多いが1つの住居跡に2つの番号を付けた例がある。途中で遺構番号を変更すると遺物註記との間に混乱が起きる恐れがあるため、欠番はそのままにした。)

1号住居跡(図版14・276)

位置：F・G—4区。平面形：柱穴の配置から梢円形と考えられる。規模：柱穴中心間距離長軸(p1とp4)3.3m、短軸(p2とp7)2.88m。壁：確認されていない。炉：地床炉。床面中央からやや北西よりに1ヶ所検出されている。30×17cmの範囲が赤変している。柱穴：9本で構成され、ピット9と炉を結ぶ線を中心に対称となっている。ピット1は根固め石を有する。ピット8は柱根部埋め土に暗茶砂質土が入る。ピット9は地山ブロックを入れて版築状に固めている。柱穴は直径25~45cm、深さ50~60cmと比較的細く深いことが特徴である。床：遺構確認面では硬い面が認められないが、地床炉と同一面から遺物の出土が見られるので、そのレベルが床面と考えられる。遺物は床面、柱穴より爪形文施文の北陸系の土器が検出されている。

1号住居跡と同様な柱穴の配置を示すものに31号住居跡がある。これらの住居跡は遺構集中地区の北西縁辺に位置している。

遺物実測図：土器 1～7 石器 1～6

3号住居跡（図版 15・276）

位置：H・G—5・6 区。平面形：掘り込みの平面形は隅丸長方形で、柱穴配置は長方形である。長軸線を中心部に向ける。規模：上端長軸 11.75 m（最大 11.9 m）、上端短軸 3.7～5.058 m を測り北側が狭くなっている。面積：46.6 m²。壁：急角度に掘られ、確認面からの深度 4～20 cm。掘り込みは南側が全般に浅い。柱穴：主柱穴 8 本、支柱穴 4 本。主柱穴は片側 4 本が直線上に並ぶ。主柱穴の規模は上端長軸が 120～150 cm、短軸 100～120 cm である。柱穴中心間距離 長軸（p1 と p6）10 m、短軸（p4 と p7）3.15 m。ピット 5・8・44 は根固め石を持ち、なかでもピット 5 は 40～70 cm 程の大型礫を用いている（図版 276）。柱穴底部に灰色に変色した部分があるが、これは柱根が接する部分に粘土を入れたものと考えられる。柱根跡の直径はピット底部の計測で約 20～30 cm である。炉：全て地床炉であったと考えられる。中央部長軸方向に沿って 4 ケ所床面が焼けており、そのほかに床面付近で 3 ケ所焼土ブロックがある。焼土 1 の周囲には礫が抜かれたような痕跡が認められたが詳細は不明である。焼土の規模は焼土 1 120×70 cm、焼土 2 120×85 cm、焼土 3 165×80 cm、焼土 4 95×40 cm の範囲が赤変していた。床：床面には段差があり、北端から 1/3 付近に 2～4 cm の段がある。各面はほぼ平坦である。周溝：北側短辺部に 2 本、北東側長辺部に所どころ見られるが、対辺はない。深さ 5～14 cm と一定しない。その他の施設：住居跡の南端部壁際に、細長く大きな川原石が 4 個並べられていた。作業途中で取り上げたこともあり、機能・性格等は確認できなかったが注目される遺構である。

遺物：覆土中より多量の遺物が出土した。ピット 1 の上部付近の床面直上に土器（95）が一括出土しているが、床面より若干上部からの出土が多い。重複：4・18・39 号住居跡。7・8 号フラスコ状土坑。4 号住居跡の方が古いか。39 号住居跡が古い。18 号住居跡が古いと思われるが詳細は不明である。7・8 号フラスコ状土坑が古い。

本住居跡は主柱穴 8 本で床面には段差を持ち、調査区では 16 号住居跡に次ぐ規模である。床面の段差から拡張の可能性が指摘されたが、段差が柱穴間を弧状に結ぶことや周溝の連續性などを考えあわせると、8 本柱は当初からのものと考えられる。覆土や柱穴からの遺物の出土も多く、一部排水溝に切られているものの保存状況の良い遺構である。

遺物実測図：土器 8～121 石器 7～35

4 A・4 B 号住居跡（図版 16・277）

位置：G—5 区。2 基の住居跡が重複する。4 A 号住居跡 平面形：長方形。規模：長さ約 9 m、幅約 3.1～4.5 m。柱穴中心間距離 長軸（p5 と p8）8.55 m、短軸（p1 と p8）2.55 m、（p4 と p5）3.5 m。面積：32.7 m²。壁：確認されない。柱穴：主柱穴 8 本、支柱穴 8 本（1 本は排水溝に切られている）。主柱穴の規模に差がありピット 1 は上端の直径が約 45 cm、ピット 4 が約 70 cm と大きく違い、南側ほど柱穴間の幅も広がっている。主柱穴の内側に長軸方向に

沿って直径 25~35 cm の支柱穴が設けられる。炉：地床炉で、中央部より長軸方向のやや北東側にある。72×40 cm の範囲が赤変していた。周溝：北東隅に一部見られる。

支柱穴の内側に支柱穴が 2 列並ぶ特徴のある柱穴配置をとる。類例は調査区内にはない。

4 B 号住居跡 平面形：長方形。規模：ピット外縁間の規模は長さ約 7.1 m、幅約 3.15 m。柱穴中心間距離：長軸 (p2 と p4) 6.5 m、短軸 (p2 と p7) 2.7 m。壁：確認されない。柱穴：主柱穴 6 本 (p2・4・7・17・26 と排水路で 1 本不明)。ピット 2 は底部に根固め石を持つ。周溝：長辺部東側の半分に周溝を持つ (周溝 3)。重複：4 A・4 B 号住居跡の新旧関係は確認できない。3 号住居跡。本住居跡の方が古いか。

2 基の住居跡とも床面は確認面より上部にあったと思われる。

遺物実測図：土器 122~159 石器 36~41

5 号住居跡（図版 14・277）

位置：G・H—8 区。平面形：不整梢円形。規模：上端長軸 4 m、上端短軸 2.85 m。壁：確認面から 10~20 cm の深さを持ち、斜めに掘り込まれる。柱穴：ピットは 12 個確認できたが主柱穴は確定できない。炉：地床炉。中央部に 1 ケ所ある。（搅乱坑に切られている。）床：中央部が硬く踏み固められている。その他の施設：ピット 7 は伴う土坑である。このピットから完形土器が出土している (162)。重複：32 号住居跡。新旧関係は不明である。

本住居跡は、平面形が不整梢円形から不整台形に近い形である。

遺物実測図：土器 160~166

6 号住居跡（図版 17・277）

位置：G—6 区。平面形：確認できないが、柱穴の配置から梢円形か。規模：南北 8.8 m 東西 6.2 m の範囲を想定した。壁：確認されていない。柱穴：主柱穴は特定できない。柱穴が並ばず不揃いである。炉：地床炉 2 ケ所。焼土 1 は 53×33 cm の範囲が赤変していた。焼土 2 は不明。床：地山面には掘り込まれていない、床面中央部分は硬い。住居跡北側周辺部にわずかな立ち上がりが認められる。床面に土器が存在した。周溝：床面北側に細長いピットがあるが周溝とは認められない。重複：40・41 号住居跡。焼土 2 が 41 号住居跡ピット 8 の上部にあることから、41 号住居跡よりは新しいと考えられるが、詳細は不明である。

本住居跡はほとんど掘り込みがなく、構成されるピットも不詳である。幾度かの建て替えが行なわれた可能性を指摘するに留まる。住居跡中央部を排水路が横断し破壊されているため、住居跡の把握を一層困難にしている。

遺物実測図：土器 167~186

7 号住居跡（図版 18・278）

位置：G—6・7、H—7 区。平面形：長梢円形。規模：上端長軸 9.8 m、上端短軸 4.2 m。面積：32.8 m²。壁：住居跡北半部と南半部とは床面の高さに大きな差がある。北側部分は壁が

検出されていないが、南側は一番深いところで確認面よりも 60 cm も掘り込まれている。壁の立ち上がりはやや緩い。柱穴：主柱穴 10 本。主柱穴となるものもビット 3 の根固め石を持つもの以外は、上端の直径約 35~40 cm と比較的細いことに特徴がある。炉：地床炉。3ヶ所。焼土 1 幅 75 cm 長さ不明。焼土 2 55×45 cm。焼土 3 60×35 cm の範囲が赤変していた。床：床面には大きな一段深い掘り込みがあって、北端部床面高と南側部分では約 70 cm ものレベル差がある。掘り込み部分の南北軸は約 4 m、東西約 3.6 m である。床面の最低部と、排水溝際の中位面では 35 cm の差があった。床面は皿状を呈する。その他の施設：南側壁に数個の不整形の掘り込みや段があるが、入り口部分の施設かと思われる。北側床面端部に埋設土器があった（187）。深鉢形土器で頸部以下が遺存する。検出時には地山面に約 $\frac{2}{3}$ 程、正位に埋まっていた。土器を埋設したビット等について、詳細は不明である。重複：41 号住居跡、59・60 号土坑。41 号住居跡ビット 3 は本遺構覆土を切って構築されている。従って 41 号住居跡が新しい。59 号土坑は焼土 2 の下にあるため住居跡より古い。60 号土坑は住居跡よりも古いか。

本住居跡は中央部を排水路で切られている。北側部分の範囲は壁を確認出来なかつたため特定できない。平面形が長楕円形で床面に段差をもつタイプである。ただ、他の住居跡でこのタイプの 3 号住居跡は柱穴も大きく整然とした柱穴配置を見せており、本住居跡は主柱穴となるものがやや貧弱で並びかたも不整である。

遺物実測図：土器 187~190 石器 42~50

8 号住居跡（図版 19）

位置：F-6・7 区。平面形：梢円形。規模：柱穴中心間距離 長軸（p1 と p6）5.85 m、短軸（p3 と p10）3.7 m。壁：確認できない。柱穴：小型の住居跡で主柱穴は存在せず、全柱穴で構成されていると思われる。床：地山面には掘り込んでいない。また、攪乱により大半が破壊されている。柱穴の配置から、梢円形の住居跡と考えられるが詳細は不明である。

遺物実測図：土器 191~204 石器 51~53

9 号住居跡（図版 20・278）

位置：G-10 区。平面形：長方形。規模：柱穴中心間距離 長軸（p4 と p6）6.4 m、短軸（p2 と p5）3.4 m。壁：確認されない。柱穴：主柱穴 6 本。直径 60~70 cm、深さ 50 cm 以下で均一である。根固め石をもつビット（p2）がある反面、認められないものがあるなど作り方に一定の法則は認められない。炉：地床炉。中央部に 1ヶ所と、その南東に隣接して小型のものが 1ヶ所。焼土 1 の内側に「コ」の字形に礫が置かれていたが、外見では焼け跡が認められないことから、その機能等については不明である。焼土 1 120×108 cm。焼土 2 45×40 cm の範囲が焼けていた。床：遺構確認面では床面は確認できない。上部にあったと考えられる。その他の施設：焼土 1 の北側約 20 cm、G-10-14 区に斜位埋設土器が検出された。王冠型土器で 1 個体分の胴下半部分と口縁部の一部が認められる（205）。土器は遺構確認面で検出され、開口部

を焼土側に向け埋設されていたが口縁部の大半を欠き、一部は内部に落ち込んでいた。掘り方は確認できず、土器と同規模のピットを掘ったものと思われる。重複：17号住居跡。新旧関係は不明。長方形の柱穴配置をもつ住居跡は主柱穴8本が多く、6本柱穴は数が少ない。同類のものに4B・17・37・40・44・45号住居跡がある。また、住居跡の方向も中央の遺構空白部分に長軸方向を向けるのが一般的であるが、本住居跡は長軸を中心方向に直交させている。

遺物実測図：土器205～227 石器54～56

11号住居跡（図版20・279）

位置：H-5区。平面形：楕円形で北西側の幅がやや膨らむ。規模：上端長軸6.9m、上端短軸6m。面積：26m²。柱穴中心間距離（p10とp19）3.65m、（p11とp25）2.95m、（p11とp19）3.8m。壁：遺構確認面より4～20cmの掘り込みがある。南西側長辺では床面まで1mほどの幅があり、その間に段を設けたり、深さ30cm位の掘り込みが見られ何らかの施設を考えられる。柱穴：主柱穴は6本。長軸方向にやや開き気味に配置される。支柱穴は10本。上端直径20～35cmで、そのほとんどが壁の部分に巡る。炉：地床炉。中央に1ヶ所。炉の脇に大小9個のピットがあり、炉の関連施設かと考えられる。また、炉の周囲は若干掘り窪めている。焼土範囲65×50cm。床：平坦ではない。床面北端部と南西部では20cmの高低差がある。周溝：確認できない。重複：15・38号住居跡、2号フラスコ状土坑。15号住居跡焼土4が上にあることから本住居跡の方が古いと考えられる。38号住居跡とは新旧関係は不明。2号フラスコ状土坑は全てのピットに切られている。

平面形が楕円形の住居跡では本遺構が最も大きいものである。

遺物実測図：土器228～246 石器57～64

13号住居跡（図版21・279）

位置：H-1-4・5区。平面形：長方形。規模：柱穴中心間距離 長軸（p1とp4）9.6m、短軸（p2とp7）2.7m。壁：確認できない。柱穴：主柱穴8本。各ピットは柱痕部が明らかで、その周囲には埋め土が版築状に認められる。ピットの底面に柱根部の変色した部分があり、直径20～30cmを測る。炉：3号フラスコ状土坑の埋没途中の窪みを炉として利用している。窪みには焼土が厚く堆積し、その焼土に接して地面に穴が掘られ、上半のない土器（248）が焼土の方に傾けて設置されていた。なお、3号フラスコ状土坑の下部は土層断面の観察から人為的な堆積と思われる。床：炉の周囲の標高が104.04mであり、埋設土器内に置かれた石の上面が104.17mである。埋設当時の床面のレベルは石よりも高かったと推定されるので、床面は遺構確認面より約10cmほど上部の遺物包含層中にあったと推定される。周溝：不詳。その他の施設：埋設土器 住居跡南東方向の柱穴外に埋設されていた（247）。同一個体を2ヶ所に別けて埋設する。1つは胴部を埋めその脇に半円形に土器を置く。また、南に隣接して掘られたピットにも土器底部が横たえられていたが、いずれも内部に自然礫を置く。土器を円形に配したところ

の掘り方は径 22 cm である。土器は確認されたときに上部はなくなっていたが、土坑 34 より出土したものと接合することから、土器埋設後に上部が削られた可能性がある。1 個体で 2 つの施設を作っているため、土器の遺存状態は良くない。重複：15・37 号住居跡。15 号住居跡とは土層断面等で切りあいの確認ができなかったが、地床炉の脇に土器を埋設する手法をとる本住居跡のはうが新しいと考える。しかし、出土土器をみると若干古い様相を呈している。

長方形の住居跡で 8 本柱を持つ典型的なタイプである。地床炉の脇に土器を埋設する技術は新しいものと考えられる。同様な炉は 23 号住居跡にも認められる。

遺物実測図：土器 247～275 石器 65～73

14 号住居跡（図版 22・280）

位置：I・J-5・6 区。平面形：掘り込みの平面形は隅丸長方形。規模：上端長軸 10.4 m 上端短軸 4.7 m。壁：地山面を掘り込んでいる。壁の立ち上がりは緩い。深さは確認面から 20～30 cm である。南東隅の一部は排水溝に切られている。柱穴：主柱穴は 8 本である。やや浅めで柱痕がビット底面に残ることに共通性がある。炉：中央部の両側縁近くに地床炉があるが、いずれも規模は小さい。焼土 1 約 60×45 cm、焼土 2 50×30 cm、35×20 cm（2ヶ所）の範囲が焼土面である。床：床面が 2 段構造になっている。北東側 1/3 程が他よりも 7～20 cm 高くなっている。3 号住居跡と同様な形態である。その他の施設：南東側端部の中央の掘り込みが内彎して掘られているが、住居出入り口の施設があったと考えられる。重複：37・43 号住居跡。37 号住居跡よりも古い。43 号住居跡よりも古い。

本住居跡の形態から見ると、地山面に長大な焼け面をもつのが普通であるが、ここではそれが確認できなかった。存続期間が原因しているのであろうか。床面に段差を持つものに 3・7 号住居跡がある。

遺物実測図：土器 276～295 石器 74～77

15 号住居跡（図版 23・280）

位置：H-5、I-5・6 区。平面形：長方形。規模：柱穴中心間距離 長軸 (p1 と p14) 9 m、南西短軸 (p15 と p18) 3.1 m、北東短軸 (p1 と p16) 1.8 m、(p3 と p8) 2.87 m。壁：確認できない。柱穴：主柱穴 11 本 5 組である。1 本は南東側短辺の中央にあり棟持柱的なものか。柱穴は 13 号住居跡などに比較して割合に細く、支柱穴やその他のビットが主柱穴間に多く並ぶ。炉：地床炉。4ヶ所。焼土 1 は長軸方向に長く中央より若干北側によっている。北端部の焼土 4 は 11 号住居跡のビットの上位にあることから、新旧関係が分かる。焼土 1 135×65 cm、焼土 2 55×30 cm、焼土 3 35×20 cm、焼土 4 38×30 cm の範囲が焼けている。床：住居跡やビットの重複が激しく床面は不明である。周溝：確認できない。重複：11・18・38 号住居跡。11 号住居跡よりも新しい。他は不明。

平面形が長方形であっても他と違う特徴は、支柱穴その他のビットが主柱穴間に多く作られ

ることである。

遺物実測図：土器 296

16号住居跡（図版 24・280・281）

位置：G・H-12 区。平面形：長方形。規模：長軸中央部で推定復原長 12.2 m、短軸約 5 m。柱穴中心間距離 長軸 (p 11 と p 24) 11 m、短軸 (p 3 と p 22) 4 m。面積：49.9 m²。壁：東側短辺と南側長辺の東半に遺存する、造構確認面と床面の最大差は約 30 cm である。西側と北側は削平を受けて、壁は見られない。柱穴：主柱穴 8 本。上端直径は 70~80 cm が平均的な規模である。ピット 11 は柱根周辺に埋め土をもち、根固め石を入れている（図版 24）。炉：地床炉。長軸に沿って 4 ヶ所の大きな焼土面が認められる。南西部は床面が削平されているため、焼土面の存否は確認できない。焼土面のはかに投棄と思われる焼土塊が見られる。焼土 1 約 180×90 cm、焼土 2 約 220×90 cm、焼土 3 約 140×90 cm、焼土 4 約 150×90 cm の範囲が焼けている。床：住居跡南西側は削平され床面・周溝とも確認できない。遺存する床面は硬い。周溝：南側に 2 本、東北辺に 1 本ある。周溝 1 は切り合ひからみてピット 11 より新しい可能性がある。周溝 1 は深さ 14 cm、周溝 2 は北東短辺部で床面からの深さが 28 cm 程度と深い。その他の施設：南東部の周溝 1 と周溝 2 の間に幅 15~20 cm で、床面より 15 cm ほど高い細長い面をもつ。遺物：調査された住居跡のなかで最も多くの遺物が出土した。特殊な出土例としては、床面直上付近から打製石斧が 5 本一括出土した（117~121）（図版 281 右上）。石斧は側面を上向きにして刃部を 3 本揃えたものと、その逆の向きに 2 本並べてあった。出土状態からみて何かに包むか、紐のようなもので縛ってあったと考えられる。他に覆土の一部を水洗したところ、クルミ殻の炭化物が乾燥重量で 10.1 g 検出された。重複：45・46 号住居跡。两者より 16 号住居跡の方が新しい。

長方形の住居跡のなかで一番大きなものである。焼土が中央部に大きく 4 ヶ所も連なり、特異な炉の形態をとる。本住居跡は上部を工事のために削平され、且つ展圧がなされたために約 10 cm の覆土中から多量の遺物が出土した。

遺物実測図：土器 297~415 石器 78~157

17号住居跡（図版 25）

位置：F-9、G-9・10 区。平面形：長方形。規模：柱穴中心間距離 長軸 (p 1 と p 7) 約 7.3 m、短軸 (p 1 と p 6) 3 m。壁：確認できない。柱穴：主柱穴 6 本。ピット 2 は柱痕部が断面で確認できた。柱穴の規模は上端で直径約 65~80 cm、確認面からの深度約 80 cm を測る。炉：地床炉。中央部より南寄りに 1 ヶ所。60×35 cm の範囲が赤変している。床：不詳。重複：9 号住居跡。新旧関係は不明。

整理途中で住居跡と確認したため、造構の詳細は不明である。

遺物実測図：土器 416~418 石器 158~162

18号住居跡（図版25）

位置：H・I-6区。平面形：長方形。規模：柱穴中心間距離 長軸（p1とp4）9m、短軸（p4とp5）3.15m。壁：確認できない。柱穴：主柱穴8本。ピット底面に柱痕を持つものあり（p5）、ピット7は根固め石を持つ。炉：南西部に2ヶ所の焼土面あり。床：確認できない。重複：3・37号住居跡。3号住居跡よりも古いか。

整理途中で住居跡と確認したため、遺構の詳細は不明である。

遺物実測図：土器419～428 石器163・164

19号住居跡（図版19）

位置：F-6・7区。平面形：柱穴配置は台形。規模：柱穴中心間距離 長辺（p1とp11）6.8m、短辺（p7とp8）2m、長辺と短辺間3.4m。壁：確認できない。柱穴：10本を確認。主柱穴は不詳。炉：地床炉。1ヶ所。90×55cmの範囲がよく焼けている。床：平坦でよく踏み固められて硬いが、大きな搅乱が入り遺存状態はよくない。

柱穴配置が台形状を呈し特異な形態を表わす。この配置から平面形を推定すると、橢円形か不整円形になるものと思われる。

20号住居跡（図版26・281）

位置：I-12・13、J-12区。平面形：長方形。中央部で膨らみ長軸両端部の幅にも差が見られ、やや不整な長方形である。規模：上端長軸10.7m、上端短軸最大7m、平均4.7m、西側端部幅4.9m、東側端部幅3.55m。面積：38.4m²。壁：東西両端部は比較的急な立ち上がりであるが、長辺部の壁は緩く落ち込んでいる。特に南側の壁は2段に掘り込まれている。確認面との差は最大で65cm、掘り込み深度は住居跡西側で確認面から約15cm、東側では約65cmと傾斜する地山面に掘り込んでいるため、深さに大きな差がある。柱穴：主柱穴10本。等間隔で並ぶものではなく、西端部と中央部では主柱穴が隣接して対応している。また、16号住居跡などに比較して、主柱穴の規模は小さい傾向にある。炉：地床炉2ヶ所。焼土2は40×50cmの範囲で、浅く掘り込まれたピット1の上半に位置する。焼土3は75×65cmの範囲が赤変しておりピット18・19を覆う。そのほかに焼土塊が3ヶ所ある。床：中央部が窪んでいる。床面には殷丘疊が露出している。周溝：なし。焼土3の南側に長さ1.5m、幅15cm、深さ16cmの溝が確認されたが、その機能は不明である。その他の施設：50号フラスコ状土坑は本住居跡に伴うと考えられる。両側縁の壁部分は斜めに緩く掘られ、掘り込みの面積を広げている。ピット6・22・23は規模からみて貯蔵穴か。遺物：覆土中より多量の遺物が出土している。床面直上から火焰型土器（430）等が出土している。重複：25・30号住居跡。47・48・49号フラスコ状土坑。25号住居跡は本住居跡に切られていて、本住居跡の方が新しい。30号住居跡よりも古いか。フラスコ状土坑との重複はいずれも住居跡の方が新しい。

本住居跡は長辺の両側を拡張して、利用できる空間を広く作り出していることに特徴がある。

上端の面積に比して、平坦な床面が狭いことも一つの特徴である。

遺物実測図：土器 429～505 石器 165～215

21号住居跡（図版 27・282）

位置：H-12、I-11・12 区。平面形：長方形。規模：長軸（掘り込み上端）推定 10.9 m、幅 4 m。柱穴中心間距離 長軸（p 18 と p 10）10.8 m、短軸（p 13 と p 14）2.85 m。壁：東から西に地山面が傾斜しているため、東半分には壁が遺存し、東壁際で確認面から 37 cm の深さがある。東壁の確認面からの深さ 6～10 cm のところに、幅 20～30 cm の細長い段がある。西側では壁は認められない。柱穴：主柱穴 8 本、支柱穴 4 本。そのうち 2 本は東側の壁外に 2 本対の柱穴としてある。主柱穴は上端の直径が 80～100 cm 前後、深さが 80 cm 程である。ピット 2・5・12 は底部に柱根の圧着痕が残り、その部分の土が変色した。炉：地床炉 2 ケ所。中央部と東端部から 1/3 の位置にある。两者とも長軸方向に並んでいる。ピット 9 の脇には焼土がある。焼土 1 は 65×55 cm、焼土 2 は 55×40 cm の範囲が赤変している。床：段丘疊上面が露出し不整である。床面は硬くなく、西へ僅か傾斜している。住居跡覆土は大別すると上層が黒褐色、下層が暗褐色である。上下層とも意図的な遺物の出土状況はない。また、両層とも木炭細片が多量に混入する。周溝：東端部と東北長辺部の一部に見られる。幅 15～25 cm、深さ 2～7 cm と浅い。その他の施設：東側端部の外側に一对の壁外柱穴を持つ。ピット 8 は本住居跡に伴う土坑である。遺物：土器は覆土全体から主に細片で出土し、床面直上からの出土は少ない。東端部の壁際に密着して舟形の土器（529）が出土した。重複：47 号住居跡。21 号住居跡の焼土 3 が 47 号住居跡の柱穴に切られているため、本住居跡の方が古い。

長方形主柱穴 8 本の住居跡であるが、長軸方向に片側のみであるが壁外柱穴を持つ珍しい例である。

遺物実測図：土器 506～570 石器 216～252

22号住居跡（図版 28）

位置：F・G-9 区。平面形：柱穴の配置が不整台形であることから、不整台形の掘り込みを持つものか。規模：柱穴中心間距離 長辺（p 3 と p 5）4.55 m、短辺（p 1 と p 8）2.25 m、短辺と長辺間 2.9 m。壁：確認されていない。柱穴：8 本。上端直径が 35～50 cm と比較的小さい。焼土をほぼ中心に、対称に柱穴が配置される。炉：地床炉。中央部に 1 ケ所。60×25 cm の範囲が赤変している。床：ほぼ平坦であるが詳細は不明。一部に試掘トレンチが入り搅乱されている。周溝：確認できない。

柱穴配置から見るとピット 1～3 とピット 5～8 が焼土を中心ハ字形に対称となり、ピットの間隔の開いた長辺上のやや外側にピット 4 が掘られる。

遺物実測図：土器 571

23号住居跡（図版 29・282）

位置：H-10、G・H-11区。平面形：長方形。規模：柱穴中心間距離 長軸(p5とp8)9.4m、短軸(p4とp5)3.3m。壁：確認できない。柱穴：主柱穴8本。南西側の端部の2本の柱穴は他の柱穴より、一回り小さい。炉：地床炉。2ヶ所。焼土1は住居跡北東側にある。直径2.6mの浅い掘り込みをさらに一段下げるビット(1.3×1m)を利用している。この焼土の北東側に接して、胴部下半以下の土器が焼土の方にやや傾けて埋設されていた。焼土1は110×65cm、焼土2は100×65cmの範囲が焼けていた。床北東側2/3程は平坦面を形成されているが、南西側は地表面が傾斜しており、造構検出のために下げているので不整である。周溝：不詳。遺物：ビット8出土の土器と炉の脇の埋設土器が接合した。ビット5出土の彫刻石皿（図版288）は盗難された。重複：44号住居跡。新旧関係は不明。

炉に埋設土器を持つタイプの住居跡は、このほかに13号住居跡に見られる。盗難された石皿は両側縁の上面に弧状の彫刻が施されていた。

遺物実測図：土器 572～598 石器 253～255

25号住居跡（図版 28）

位置：I-13区。平面形：不整橢円形。規模：長軸5.1m、短軸3.8m（推定）。面積13.2m²。壁：立ち上がりが急である。確認面から床面までが3～27cmと全体に浅い。柱穴：主柱穴が4本確認されている。20号住居跡に切られていて全体は不明であるが、本来は5～6本が予想される。22号住居跡の例から推測すると短辺2本、長辺3～4本の柱穴をもつと思われる。他に6本のビットがある。炉：地床炉か。ほぼ中央部に直径約1mの焼けた痕跡は認められるが、赤変した焼土面は作られない。床：水平に掘られている。割合に硬い。床面上から少し浮いたところに、台付鉢(600)が置かれていた。周溝：短い溝が部分的に壁際を巡る。重複：20号住居跡と切り合う。土層断面から本住居跡の方が古い（図版283）。

平面形が長方形の住居跡と直接切り合うのは、本住居跡のみである。本例が20号住居跡よりも古いことから、形態が類似する不整橢円形の住居跡は長方形の住居跡よりも古いことが予想される。

遺物実測図：土器 599～611

27号住居跡（図版 30）

位置：H-I-13・14区。平面形：不整橢円形か。規模：長軸約5m。短軸不詳。壁：北東側に約1/3遺存する。確認面から深いところで13cmの掘り込みが認められる。柱穴：主柱穴は確認できない。ビットは22まである。炉：地床炉。4ヶ所にある。焼土1は80×70cm、焼土2は40×25cm、焼土3は65×30cm、焼土4は径40cm。床：ほぼ平坦であるが、南側は不確実である。南側が削平を受け、全容はつかめないが25号住居跡とほぼ同規模と思われる。ビットも小規模で主柱穴等は不明で、細い柱で上屋を支えていたものと思われる。

遺物実測図：土器 612～624

28号住居跡（図版 30・283）

位置：H-12・13 区。平面形：柱穴配置から台形か。規模：柱穴中心間距離 短辺（p1 と p3）1.9 m、長辺（p2 と p4）3 m。長辺と短辺間 2.2 m。壁：確認されない。柱穴：4 本。上端径が 30～40 cm、深さが 50 cm ほどと比較的細く深い。炉：地床炉。中央部に 1 ケ所。70×30 cm の範囲が赤変している。床：不詳。周溝：ピット 1 からピット 3 に直線的に延びる。確認面から 22～25 cm の深さである。

柱穴配置が台形で、掘り込みも確認されない住居跡である。本遺跡の住居跡のうちで、最も小規模な住居跡である。

29号住居跡（図版 31）

位置：G-8・9 区。平面形：梢円形。規模：上端長軸 4.7 m、上端短軸 3.25 m。面積 9.7 m²。壁：遺構確認面から 10 cm 程度の掘り込みをもつ。壁の立ち上がりは緩い。柱穴：ピットは 10 個あるが、主柱穴等は確認できない。炉：地床炉。中央部に 1 ケ所。長さ 55 cm 遺存、幅 20 cm の範囲が赤変していた。床：床面はほぼ平坦である。硬度は弱い。周溝：なし。重複：11 号土坑に切られている。

柱穴の配置は不整である、5 号住居跡と同規模であることから、時期的にもほぼ並行していると考えられる。

遺物実測図：土器 625・626 石器 256・257

30号住居跡（図版 31）

位置：H-12 区。平面形：柱穴の並びから梢円形を呈すると思われる。規模：柱穴中心間距離 長軸（p6 と p10）3.65 m、短軸（p3 と p7）3.3 m。壁：確認できない。柱穴：12 個確認されている。床面からの深度は 30～50 cm、浅いもので 10 cm 台がある。炉：地床炉。中央に焼土塊が 2 ケ所ある。焼土 1 55×25 cm の範囲が焼けている。床：炉の北東側を囲むように、床面から 10 cm の掘り込みがある。この掘り込みのなかに礫が散在するが、焼けた痕跡がないことから石囲い炉の礫とは認められない。掘り込みは南側では確認されていない。周溝：確認されない。重複：20 号住居跡と切り合う。本住居跡の方が新しいか。

整理途中で住居跡と認定されたものである。20 号住居跡との切り合いはピット 7 が 20 号住居跡の覆土を切っているので、本住居跡の方が新しいと考えられるが、これまででは小型の住居跡の方が古い傾向にあるので、ピットの拾い方に問題があるのかもしれない。

遺物実測図：土器 627・628 石器 258～260

31号住居跡（図版 32・283）

位置：F-6 区。平面形：柱穴の配置から梢円形か。規模：柱穴中心間距離 長軸（p4 と p8）4.6 m、短軸（p2 と p6）3.1 m。壁：確認できない。柱穴：8 本。柱穴の配置は梢円形を構成す

るが長軸辺、短軸辺にそれぞれ2本ずつ組になって掘られている。柱穴の上端径は40~50cmである。ピット6は根固めの石を入れている。炉：確認できない。床：不詳。周溝：確認されない。

柱穴配置が椭円形で、対称となるものは1号住居跡に見られる。時期も同期のものと考えられる。

32号住居跡（図版32）

位置：H-8区。平面形：柱穴の配置から椭円形と考えられる。規模：柱穴中心間距離 長軸(p1とp5)4m、短軸(p4とp6)2.65m。壁：確認されない。柱穴：8本。椭円形に配置される。また、焼土北側に1個の柱穴があるが、その機能等は不明である。炉：地床炉。ほぼ中央に1ヶ所。約55×28cmの範囲が焼けている。床：不詳。周溝：不詳。重複：5号住居跡。新旧関係は不明。

遺物実測図：土器629 石器261・262

33号住居跡（図版33）

位置：H-13区。平面形：柱穴の配置から椭円形と考えられる。規模：柱穴中心間距離 長軸(p2とp5)3.25m、短軸(p1とp3)2.53m。壁：確認できない。柱穴：7本。焼土を中心ピット1~3と4~6が相対している。ピット7は西側長辺間の中心からやや南に寄ったところに位置する。柱穴の規模も不揃いで、上端径がピット3(25×21cm)とピット4(53×44cm)とでは大きな違いがある。炉：地床炉。中央に1ヶ所。約40×20cmの範囲が赤変している。床：平坦である。周溝：確認されない。

整理途中で住居跡と確認した。7本の柱穴が等間隔に巡るのではなく、北辺と南辺に偏在する。

34号住居跡（図版33）

位置：I・J-13区。平面形：柱穴の配置から長方形と考えられる。規模：柱穴中心間距離長軸(p2とp5)5.75m、短軸(p1とp2)2.3m。壁：東南側短辺に約5cmほどの掘り込みが見られるが、他は確認されていない。柱穴：主柱穴を7本確認している。南東隅は排水路で切られている。炉：地床炉。中央部に1ヶ所ある。35×23cmの範囲が赤変している。床：東側と西側では約20cmの差があり、平坦ではない。西側は地山面が傾斜している影響で、床面は上部の包含層中にあったと考えられ、既に遺存していない。周溝：北東側長辺柱穴間に2本見られる。周溝1は長さ55cm、周溝2は長さ1.2mである。その他の施設：7本の柱穴のほかに12個のピットがあるが、全てが本住居跡に伴うものかどうかは不明である。

整理途中で住居跡と確認した。壁状の立ち上がりが見られるが不整である。柱穴の配置は長方形であるが、柱穴間距離が最大で5.75mと短く、比較的大型の住居跡が多い長方形の住居跡のなかでは特異な存在である。

遺物実測図：土器630~632

35号住居跡（図版34）

位置：H-6・7区。平面形：柱穴の配置から長方形と考えられる。規模：柱穴中心間距離 長軸（p11とp26）6.26m、短軸（p5とp19）3.8m。壁：確認されていない。柱穴：27個。主柱穴は確認できない。炉：地床炉。1ヶ所、北西側短辺中央部の柱穴列から約80cmの位置にある。焼土は35×25cmの範囲が赤変している。床：焼土から東1.4m位まで、黄褐色の硬い面が認められる。黒色土のブロックが混入し床面を成している。このほかはピット等に切られているために、床面の確認はできない。重複：42号住居跡。本住居跡柱穴間に42号住居跡の焼土があることから、本住居跡が古いと考えられる。

本住居跡の特徴は、上端の直径が30~40cmと比較的小さいピットが、連続して掘られていることがある。このタイプの住居跡は調査区内に限れば他に類例がない。調査時点で一部の柱穴は判明していたが、全体が捉えられたのは整理段階である。焼土は柱穴際に1ヶ所確認されたが、本来は他にもあったと予想される。

遺物実測図：土器 635~637

36号住居跡（図版34）

位置：I-6・7区。平面形：橢円形。規模：柱穴中心間距離 長軸（p13とp32）6.3m、短軸（p5とp25）5.1m。壁：確認できない。柱穴：合計50個。上端径30~50cmの比較的小さな柱穴が連なり、橢円形に2重に巡る。炉：確認できない。床：不詳。周溝：不詳。重複：土坑36。新旧関係は不明。

整理途中で住居跡と確認した。本遺跡では、本例のほかに検出されていないタイプの住居跡である。また、全てのピットが関係しているのかも不明である。他の住居跡等との切り合いがないため、時期は不明である。

遺物実測図：土器 633・634

37号住居跡（図版25）

位置：I-5区。平面形：長方形。規模：柱穴中心間距離 長軸（p4とp6）6.7m、短軸（p1とp6）2.95m。柱穴：主柱穴のみ6本。柱穴は上端径40~60cm、深さ50~65cmと重複する14号住居跡よりも全体に深く細いことに特徴があり、14号住居跡との区分が可能になった。壁：確認されない。炉：地床炉。1ヶ所。85×45cmの範囲が赤変している。床：不詳。重複：14号住居跡。本遺構の方が新しい。周溝：確認できない。

整理途中で住居跡と確認した。柱穴が長方形の配列をとる典型的な例である。片列3本で相対し、計6本の類例は9・17号住居跡などに見られる。

遺物実測図：土器 638~645 石器 263~265

38号住居跡（図版35）

位置：H-4・5区。平面形：長方形。規模：柱穴中心間距離 長軸（p1とp4）7.52m、短軸（p4とp5）2.7m。壁：確認されない。柱穴：8本主柱穴。柱穴上端径30~40cm、深さ

42~67 cmと比較的細く深い。炉：地床炉。中央よりやや北西側に 1ヶ所。直径約 55 cmの範囲が赤変している。床：不詳。周溝：なし。時期：出土遺物からは古い傾向が見られる。重複：11・15 号住居跡。15 号住居跡よりも古いか。11 号住居跡とは新旧関係不明。

整理途中で住居跡と確認した。本遺構は 8 本柱長方形の住居跡のなかでも、比較的細い柱穴を持つやや小型の住居跡である。出土土器から若干古い時期のものと考えられる。

遺物実測図：土器 646・647

39号住居跡（図版 35）

位置：H-5・6 区。平面形：長方形。南東側端部の柱穴幅がやや広がる。規模：柱穴中心間距離 長軸 (p5 と p8) 9.08 m、短軸 (p4 と p5) 2.25 m、(p1 と p8) 2.37 m。壁：確認されない。柱穴：主柱穴 8 本。深さ 40~60 cmほどの柱穴が多い。炉：不詳。3 号住居跡より古いために破壊されていて検出不能である。床：不詳。周溝：確認されていない。重複：3・11 号住居跡。本住居跡ピット 1 が 3 号住居跡廃土 2 の下より検出された。従って 3 号住居跡の方が新しいと考えられる。

整理途中で住居跡と確認した。8 本柱穴で 3 号住居跡より古い住居跡である。

遺物実測図：土器 648~653 石器 266~268

40号住居跡（図版 35）

位置：G・H-6 区。平面形：長方形。規模：柱穴中心間距離 長軸 (p4 と p6) 5.1 m、短軸 (p3 と p4) 3.08 m。壁：不詳。柱穴：主柱穴 6 本。柱穴上端径が 40~60 cm と不揃いであるが、深さはピット 1 を除いて 70 cm 台と深い。ピット 1 は柱根部が確認でき、埋め土は版築状となっている。炉：不詳。床：不詳。重複：41 号住居跡。新旧関係は不明である。

整理途中で住居跡と確認した。詳細は不明である。

遺物実測図：石器 269

41号住居跡（図版 36）

位置：G・H-6 区。平面形：長方形。規模：柱穴中心間距離 長軸 (p5 と p8) 6.95 m、短軸 (p1 と p8) 2.33 m。壁：不詳。柱穴：主柱穴 8 本。ピット 4・5 と他のピットの規模に違いがある。他の 6 本のピットは直径 60~90 cm あるのに対して、ピット 4・5 は直径 30~50 cm と小規模である。炉：不詳。床：不詳。周溝：不詳。重複：7・35・40 号住居跡。本住居跡ピット 3 が 7 号住居跡の覆土に切り込んでいるため、7 号住居跡よりも新しい。35 号住居跡よりも古い。整理途中で住居跡と確認した。8 本主柱穴の住居跡であるが、南東端部の 2 の柱穴は他に較べてやや小さい。また、柱穴埋め土に版築状の構造を持つ柱穴が多い (p1・3・5・6・8)。

底面近くに、根固め石様の礫がある柱穴もある (p7)。本住居跡はしっかりした柱穴を持つ住居跡である。

遺物実測図：石器 270

42号住居跡（図版36）

位置：H-6・7区。平面形：長方形。規模：柱穴中心間距離 長軸(p5とp8)5.5m、短軸(p1とp8)2.42m、(p4とp5)2.9m。壁：確認されない。柱穴：柱穴規模は直径30~50cmが平均。ピット3・6は直径70cm程で大きい。ピット6は埋め土が版築状となっている。柱痕部の底径は約20cmである。西端部の2本の柱穴は長軸方向に1.1~1.3mと他のピットの間隔に比べ、約1/2の距離となっている。炉：地床炉。中央部に1ヶ所。45×25cmの範囲が焼けている。床：ピットの重複が多く不詳である。周溝：不詳。重複：35号住居跡。本住居跡が新しい。

整理途中で住居跡と確認した。I-8・9区の遺構空白部を中心として、3・16号住居跡等多くの建物は長軸方向を中心に向けているが、本住居跡等は18号住居跡と同じく短軸方向を中心に向ける。

遺物実測図：石器271

43号住居跡（図版36）

位置：I-5、J-5・6区。平面形：長方形。規模：柱穴中心間距離 長軸(p1とp4)6.6m、短軸(p1とp7)2.9m。壁：確認できない。柱穴：主柱穴8本。平面形は不揃いで、直径はピット5の25cmからピット7の70cmと大きく異なる。ピット1・2は共に根固め石を持つ。炉：地床炉。床：不詳。重複：14号住居跡。本住居跡の方が新しいか。

整理途中で住居跡と確認した。長軸面を中央部に向け構築している。柱穴のみから見ると非常に貧弱な建物である。

遺物実測図：土器654~656 石器272~274

44号住居跡（図版37）

位置：H-10・11区。平面形：長方形。規模：柱穴中心間距離 長軸(p4とp6)6.12m、短軸(p1とp6)2.18m。壁：確認できない。柱穴：主柱穴6本。上端径50~75cm、深さ46~68cm。ほぼ均一な柱穴である。炉：確認できない。床：不詳。土石流で地山面が荒れているため、確認面は均一ではない。重複：23号住居跡。新旧関係は不明。

整理途中で住居跡と確認した。長辺面を中央部に向け構築している。

45号住居跡（図版37）

位置：H-11・12区。平面形：長方形。規模：柱穴中心間距離 長軸(p1とp3)8.64m、短軸(p1とp6)2.67m、(p3とp4)3.88m。壁：確認できない。柱穴：主柱穴6本。東側短軸間2.67m 西側短軸間3.88mとその差1.21mの開きがあり、西側に大きく広がる。炉：確認できない。床：16号住居跡と重複しているため確認できない。また、西側は地山面が傾斜しているため不明である。重複：16・46号住居跡。16号住居跡よりは古い。46号住居跡は古いか。

整理途中で住居跡と確認した。本住居跡と16・46号住居跡は、長軸方向もほぼ重複していることから、同一場所に立てられた一つの建物の建替え例であろう。また、16号住居跡と45号住

居跡との大きな相違は、前者が8本柱であるのにたいして、後者が6本柱であることである。

46号住居跡（図版37）

位置：H-11・12区。平面形：長方形。規模：柱穴中心間距離 長軸(p5とp8) 7.2m、短軸(p1とp8) 2.86m、(p4とp5) 2.95m。壁：確認できない。柱穴：主柱穴8本。東端の2本は、確認面から20cm前後と他よりも浅く、長軸方向の間隔も他の1/2程と狭くなっている。6本が主柱穴でピット1・8は支柱穴のものであろう。炉：確認できない。床：不詳。西側は地山面が傾斜しており、床面が残っていたとしても、包含層中であると思われる。周溝：南側長辺間ピット2と3の間にある。16号住居跡床面が確認面であるが、そこから約10cmの深度をもつ。長さ1.5m程遺存するのみで全体は地山面が下がっていることもあり、不詳である。重複：16・45号住居跡。16号住居跡より古く、45号住居跡よりも新しいか。

整理途中で住居跡と確認した。16号住居跡の建替え例として45号住居跡では扱ってきたが8本柱（実際には6本主柱穴）や周溝を持つことから16号住居跡に近い形態を備えている。これらから45→46→16号住居跡の順になるのではないだろうか。

遺物実測図：土器657～660 石器275～278

47号住居跡（図版38）

位置：I-11・12区。平面形：長方形。規模：柱穴中心間距離 長軸(p1とp4) 8.3m、短軸(p4とp5) 3.05m。壁：確認できない。柱穴：主柱穴8本。上端径40～60cm。確認面から深いもので約60cmと比較的しっかりしたものである。ピット3は根固め石を持ち、ピット7は柱痕が確認できる。炉：確認できない。床：西側は地山面が傾斜していて、造構検出面が低いため、床面は相当削られている。重複：21・48号住居跡。21号住居跡よりも新しい。48号住居跡とは新旧関係は不明。

整理途中で住居跡と確認した。21号住居跡と長軸方向が一致し、規模もやや小さいだけであることから、建替えの住居跡と考えられる。

遺物実測図：石器279

48号住居跡（図版38）

位置：I-11、J-11・12区。平面形：長方形。規模：柱穴中心間距離 長軸(p1とp4) 9.2m、短軸(p1とp7) 2.82m。壁：確認されていない。柱穴：主柱穴8本。南西端の1本は排水路に切られている。炉：中央に焼土があるが、焼土ブロックか。黒褐色土に混じっている状態で地床炉とは言い難い。床：不詳。周溝：不詳。重複：47号住居跡。新旧関係は不明。

整理途中で住居跡と確認した。中央部に長辺を向ける住居跡である。

B 柱穴列

柱穴列1（図版39）

位置：I-9 区。平面形：長方形。規模：柱穴中心間距離 長軸（p2とp8）5.45m、短軸（p1とp2）1.32m。柱穴：主柱穴 8 本。ピット 4・6 は椭円形で長径 70~80cm、短径 55~60cm とやや大きく、他は直径 35~50cm とやや小型である。覆土は黒褐色土で根固め石、柱痕等は認められない。

遺構群に囲まれた中央部にあり、遺跡内においては特異な位置を占める。他の遺構と関わりが認められなく、柱穴のみで焼土、床面などが認められることと柱穴列間の並びが狭いことなど住居跡とは認め難く、柱穴列とした。本遺構は周辺の遺構群とは異なる時期の所産と考えたほうがよい。

遺物実測図：土器 661

柱穴列 2 (図版 39)

位置：H・I-7 区。平面形：長方形。東西方向に 1m 程長いが方形に近いものである。規模：柱穴中心間距離 長軸（p1 と p3）4m、短軸（p3 と p4）3.07m。柱穴：4 本。大型の柱穴である。ピット 1 は上端径が 1.3×1.4m、一番小さなピット 3 でも 1.16×0.9m と一見すると土坑と間違えるような規模である。深さは北東側のピット 1・2 が 50~60cm、南西側のピット 3・4 は 81~90cm と深度の違いが注目される。ピット 4 には片側に礫が多く入れられており、根固め石の効果を意図したものと考えられるが詳細は不明である。重複：42 号住居跡。新旧関係は不明である。

各柱穴が土坑並の規模をもつ。ピット 3 には根固め石様の礫が入れてあり、柱痕部分の直径は約 50cm にもなる。I-8・9 区の遺構空白部に近く、長辺部分が中心部に面していて、他の遺構と全く違う在り方をしているわけではない。焼土・床等は不明であり、柱穴の規模、配置も特異であることから本遺構を住居跡とするには疑問があるため柱穴列とした。

遺物実測図：石器 280~283

C 土 坑 類

土坑・フラスコ状土坑 本遺跡では土坑 62 基、フラスコ状土坑 54 基が検出された。その分布は主に昭和 57 年度調査地区（2 地区）に集中していて、1 地区では、3 基の土坑が確認できたのみである。分布を見ると D-5・6 区に遺構集中区から離れて 5 基が認められる。G・H-3・4 区にも土坑が集中している。また、I-8 区を中心とする遺構空白部に近い H-10 区、I-9・10 区にも 9 基の土坑が集中するが、土石流の流路にあるため覆土が攪乱されたり、上端の形状が変形しており詳細は不明である。その他の土坑、フラスコ状土坑は遺構集中区の遺構分布とほぼ重複して、調査区内を南北に開く形で弧状に展開している。

分類基準 土坑・フラスコ状土坑共に直径が約 1m 以上のものを原則として扱っているが、それ以下でも深さ、土層や遺物の出土状態によっては同類として扱っている。

堆積状況 土坑・フラスコ状土坑の土層堆積状況は次の3つに大別できる。1自然堆積 2人為堆積 3自然堆積と人為堆積の両方の作用によるもの。この他に堆積状況の判然としないものもある。自然堆積では黒色土～暗褐色土がレンズ状に堆積している。土器・炭化物・焼土粒の混入も多い。人為堆積では黒色土が充填土の大半を占めるが、地山土の黄色土等がブロック状に堆積したりする場合が多い。一部には焼土層や投棄された土器が検出される。自然堆積と人為堆積の両方の堆積に因るものは、主としてフラスコ状土坑に多い。堆積状況は底部に壁の崩落土が堆積したり、巨礫が投入されたりする。また、全部を埋めるものは少なく、半分ほど埋めて上部は自然堆積というものが多い。

1) フラスコ状土坑(第1表 図版42~45・286・287)

断面形が造構確認面の開口部より底径の方が大きく、壁の傾斜が対称な、いわゆるフラスコ型容器に類似する形状の土坑を「フラスコ状土坑」と呼ぶ。この定義から言えば「フラスコ」状のものだけを呼ぶべきであるが、構築時の姿を留めたものはむしろ少なく、壁が崩落しているものの方が多いため、調査時にフラスコ状土坑と認めたものについては完掘後の姿が一般的の土坑と変わりなくとも、土坑とは区別した。崩落しやすい開口部の地山土が、底部中央に多く堆積していることが認められたものなどについては、フラスコ状土坑とした。しかし、一般的傾向としては壁全周が崩落してしまう例は少なく、開口部よりも底部が地山に切り込んで、広くなっているものの方が多い。

フラスコ状土坑の分類は平面形態と断面形を考慮して分類すべきであるが、前述のように原形を保っているものが比較的少ないために、フラスコ状土坑の底部の長径を主に分類の基準とした。(底径を長径対短径の比率で見ると、真円とはならないもののおおむね、円形または不整円形のなかに含まれると考えて、その代表としての基準に長径を選んだ。) また、全ての土層断面を観察する余裕がなかったことから、今回はこの面からの分類はしなかった。

フラスコ状土坑は以下のように分類した。

I類(21基) 底部径が120cm未満のものを分類した。120cm未満でも30・51号フラスコ状土坑のように径65cmほどのものから、13号フラスコ状土坑のように径118cmまでと差が大きいために更に細分できる。径65cm(30・51)、径78~95cm(15・18・24・25・35・44)、径98~106cm(4・6・14・20・22・23・40・43・45・53)、径113~118cm(13・32・37)に分類できる。I類の確認面からの平均深度は61cmである。

II類(20基) 底部径が120~160cm未満を区分した。造構深度は12号フラスコ状土坑の37cmというものを別にすれば50~104cmあり、平均深度は約80cmである。

III類(13基) 底部径が160cm以上のものを一括した。最大は55号フラスコ状土坑の底部長径224cm、短径218cmがある。造構確認面からの平均深度は約110cmである。

フ拉斯コ状土坑の土層堆積 54 基を対象とし、そのうち自然堆積の状態と考えられるもの 11 基 (20%)、人為堆積と考えられるもの 23 基 (42%)、自然堆積に人が一部埋め戻しを行なったもの (あるいはその逆) 8 基 (16%)、堆積状況不詳のもの 12 基 (22%) に分類できる。これを細かく見ていくと、I 類では 21 基のうち自然堆積 5 基、人為堆積 6 基、自然堆積+人為堆積が 1 基、不詳 8 基となる。II 類では 20 基のうち、自然堆積 5 基、人為堆積 11 基、自然堆積+人為堆積が 4 基。III 類では 13 基のうち自然堆積 1 基、人為堆積 6 基、自然堆積+人為堆積 3 基となっている。この結果から見ると、I 類で不詳が 8 基と多いものの、I 類から III 類につれて自然堆積の割合が減少していくことが分かる。それに替って人為堆積を示す例が増加している。これは比較的規模の小さい遺構は使用されなくなった後、一時的に埋め戻されず放棄されるものが多いのに対し、規模の大きいフ拉斯コ状土坑は放棄してのち、全部あるいは一部に埋め戻しが行われたものが多いことを物語っているのではないだろうか。ある程度規模の大きい遺構のなかに、上部に焼土や破損した土器が集中して出土する層がある。これは埋没の完了しない凹地を、ゴミ穴等として利用していたのではないかと考える。

2) 土 坑 (第 2 表 図版 41・284・285)

土坑と認定したものは全部で 61 基ある。分類基準に記述したように、径 1 m 以上のものを原則として取り扱ったが、それ以下の規模でも覆土や堆積状況などから柱穴と認められないものは土坑とした。また、平面形が基準を満たしていれば、遺構確認面からの深度が浅くても土坑とした。土坑は上端の平面形で分類すると、幅が長さの 80% 以下のものを橢円形とし、それ以上を円形として分類した。その基準で分類したところ円形 26 基、橢円形 29 基、不整形 2 基、不詳 4 基となつた。

分布は昭和 56 年度調査区の 1 地区で 3 基検出されているが、遺構の希薄さを反映して数はない。分布の中心は 2 地区にあり、フ拉斯コ状土坑と同様にはば遺構集中地区に重複する。この土坑分布を見ると調査区の東側 (I・J-12 区) にはフ拉斯コ状土坑が集中するが、土坑は認められない。また、23 号住居跡の柱穴の列に重複するように、7 基の土坑が集中している点も注目される。このなかで分布の中心から外れたものが 3 群見られる。1 地区の斜面下の D-5・6 区にはフ拉斯コ状土坑 53・54、土坑 47-49 が集中して存在し、I-9・10 区に 9 基の土坑が集中する (37-43・45-62)。もう一つは G-3・4 区、H-4 区に確認された 5 基の土坑である (4・6・14-16)。I-9・10 区の土坑は平面の輪郭が判然とせず、覆土が单層 (黒~黄褐色) で砂質土が主体を占め、礫が多く混入するなど他の土坑と違った様相を示している。これらを土坑とするにはやや難があるかもしれないが、完全には否定できないので一応扱っておく。G-3・4 区、H-4 区の 5 基の土坑は出土土器とその規模、形態から後期初頭の所産と考えられる。後期の土坑は半径約 11.6 m の半円を描くように配置されている。その共通し

第1表 フラスコ状土坑観察表

No.	分類	規 模		土 層 堆積	備 考
		上部cm 長×幅	下部cm 長×幅		
1	II	128×119	141×132	53	自然+人為堆積
2	II	118×113	134×117	64	自然堆積か
3	II	112×87	135×117	70	人為堆積
4	I	111×98	98×88	45	自然堆積か
5	II	102×79	134×77	81	人為堆積
6	I	89×76	104×87	39	人為+自然堆積
7	III	59×58	176×143	173	不詳
8	II	— × 104	135×122	85	人為+自然堆積
9	II	—	142×137	92	人為堆積か
10	II	75×69	127×115	57	人為+自然堆積
11	III	97×93	185×173	158	人為+自然堆積
12	II	123×96	121×94	37	人為堆積
13	I	163×139	118×106	57	人為堆積か
14	I	104×80	101×73	35	人為堆積か
15	I	95×69	93×51	97	不詳
16	II	112×105	124×103	84	人為堆積
17	III	82×69	162×150	107	人為+自然堆積
18	I	66×62	95×80	38	不詳
19	III	50×35	165×127	90	不詳
20	I	92×89	100×88	39	自然堆積
21	III	170×157	168×151	115	人為堆積
22	I	89×70	106×90	43	不詳
23	I	101×86	98×100	81	不詳
24	I	77×69	86×79	52	自然堆積
25	I	94×79	80×84	76	不詳
26	III	64×62	187×173	112	自然堆積
27					
28	II	112×67	126×105	100	人為+自然堆積
29					
30	I	— —	65×62	68	人為堆積
31	III	140×106	180×162	130	人為地盤
32	I	—	115×97	74	不詳
33	II	108×104	154×106	59	人為堆積
34	II	118×63	136×131	63	自然堆積
35	I	70×64	78×76	48	人為堆積
36	III	159×128	170×141	73	人為堆積
37	I	118×97	113×99	84	自然堆積か
38	III	148×139	160×154	121	人為堆積
39	II	132×120	126×116	126	人為堆積
40	I	105×84	99×87	67	不詳
41	III	135×107	164×154	99	人為堆積
42	II	80×70	126×99	52	人為堆積
43	I	109×101	101×92	60	不詳
44	I	106×81	81×76	80	人為堆積
45	I	82×72	99×91	62	人為堆積
46	II	162×120	156×107	48	自然堆積か
47	II	100×98	143×130	81	人為堆積
48	III	127×106	186×185	68	人為+自然堆積
49	II	87×81	131×109	97	人為堆積
50	II	85×78	120×112	95	自然堆積
51	I	78×68	65×56	28	不詳
52	II	120×113	133×128	70	人為堆積
53	I	113×82	98×82	102	自然堆積
54	II	126×—	126×—	104	自然堆積
55	III	— —	224×218	125	人為堆積
56	III	177×82	177×110	60	不詳

第2表 土坑観察表

No.	観 機			形態	土 層 墓 級	備 考
	上端cm 長×幅	下端cm 長×幅	深度 cm			
1	107×59	89×30	31.5	椭円形	不詳	覆土は淡茶褐色土。砂質の地山土を含む。
2	94×86	82×73	41	円 形	自然堆積	覆土は灰褐色土が主体。
3	84×72	63×53	24	円 形	不詳	
4	252×216	141×113	126	円 形	自然堆積	後期の土坑である。
5	150×113	129×89	15	椭円形	自然堆積	淡褐色認定と同レベル附近に遺物が多い。
6	313×249	122×109	151	円 形	自然堆積	後期の土坑である。底部に巨礫が1個あった。
7	155×84	148×75	14	椭円形	不詳	10cm程の深い入り込みである。
8	158×95	139×75	11	椭円形	不詳	覆土は淡灰褐色で、径2mm程の地山土を含む。
9	154×153	133×110	98	円 形	人為+自然堆積	2層以下は埋め戻し土が堆積。底部に巨礫が入る。
10	95×94	77×74	14	円 形	不詳	
11	154×107	95×86	64	椭円形	人為堆積	29号住居跡より古い。覆土は暗褐色土主体。底部に礫多い。
12	175×133	123×99	21	椭円形	不詳	
13	256×139	219×114	96.5	椭円形	人為+自然堆積	上部 20cm程が自然堆積で、下半は地山土と区別が困難。
14	177×171	122×121	124	円 形	自然堆積	後期の土坑である。中位 122×118 cm。
15	181×151	147×130	110	椭円形	自然堆積	後期の土坑である。中位 122×103 cm。
16	235×222	166×157	125	円 形	自然堆積	後期の土坑である。底部から後期の土器出土 (I232)。
17	102×86	73×58	18	円 形	人為堆積	底部に堆積物が多く、貯蔵穴の可能性あり。
18	140×95	105×78	60	椭円形	人為+自然堆積	底部に炭化物が多い。
19	58×62	70×69	32	円 形	人為堆積	上部に礫が多い。
20	107×96	72×70	—	円 形	人為+自然堆積	下半部は一時の堆積で施肥・地山土・細隙を多く含む。
21	107×92	100×65	—	円 形	不詳	底部は藍色。
22	131×130	110×102	—	円 形	不詳	
23	120×110	109×77	—	円 形	不詳	
24	120×70	103×56	14	椭円形	不詳	礫が壁際にある。
25	117×106	98×87	38	円 形	不詳	
26	118×107	102×84	98	円 形	自然堆積	華大の礫が割合多い。
27	127×—	117×104	130	円形か	人為堆積	地山ブロックが主体で、礫が多い。
28	—×125	—×96	119	不 詳	自然堆積か	3号住居跡出土土器と同時期。
29	172×—	151×—	29	不 詳	人為堆積	3層に分かれ、2層には炭化物が非常に多い。
30	123×—	158×—	101	不 詳	不詳	
31	180×101	149×84	33	椭円形	不詳	
32	150×117	90×89	25	椭円形	自然堆積	底部東側に長さ35cmの礫がある。
33	137×129	84×59	45	円 形	人為堆積か	地山上の筋はないが、地山ブロックの混入が割合多い。
34	121×85	85×53	36	椭円形	自然堆積	
35	285×227	280×194	40	椭円形	人為堆積か	覆土は黒褐色土。中位に礫が多い。フラスコ状土坑 15より新しい。
36	126×107	82×65	30	円 形	自然堆積	
37	176×139	163×110	33	椭円形	不詳	
38	130×—	125×—	39	不整形	不詳	覆土は黒褐色土。全形はつかめない。
39	205×141	165×110	60	椭円形	人為堆積か	礫と砂の互層。
40	166×128	148×96	61	椭円形	不詳	覆土は分層不可能。
41	138×88	129×76	16	椭円形	不詳	覆土は砂質土に礫が多量に入っている。混亂が進む。
42	188×125	141×94	37	椭円形	不詳	覆土は分層不可能。土器が少量出土しているが焼れ込みか。
43	164×72	125×41	49	椭円形	不詳	長楕円形の土坑である。
44						欠矯。
45	263×140	113×107	83	椭円形	人為+自然堆積	下部に黄褐色土が入り上部は黑色土に礫が多い。
46	112×75	70×57	54	椭円形	不詳	
47	94×89	83×65	68	円 形	自然堆積か	下部に健削土が見られる。灰黑色から灰褐色土で砂質土主体。
48	134×122	98×90	70	円 形	不詳	
49	182×166	95×82	80	円 形	人為堆積か	
50	246×124	160×74	59	椭円形	不詳	黒灰土を主体に地山土が多く入る。
51	146×106	135×93	5	椭円形	不詳	底部は2段腰張りで、深い方で40cmの深度がある。
52	134×89	123×76	26	椭円形	人為堆積か	通溝取り込みはばかり上方であろう。土器細片が多い。
53	67×62	57×49	10	円 形	不詳	覆土は暗褐色土。16・46号住居跡よりも古い。
54	132×93	126×83	11	椭円形	不詳	覆土は暗褐色土。完形土器出土 (I219)。
55	88×77	58×55	26	円 形	人為堆積か	上部に土器あり。浅い皿状の土坑。
56	89×78	69×62	22	円形か	不詳	底面から巨礫と土器が出土している。覆土は暗褐色土が主体。
57	121×91	70×63	—	椭円形	不詳	程底面に凹窓あり。底部から土器出土。
58	102×80	84×60	15	椭円形	不詳	覆土は暗褐色土で地山ブロック。炭化物が多く入る。
59	—×73	—×85	84	不 詳	自然堆積	覆土は黑色土で、ほとんどが炭化物である。
60	171×131	159×114	30	椭円形	人為堆積	7号住居跡よりも古いか。
61	95×68	56×52	70	円 形	自然堆積	黄褐色土が1、3、5層に堆積。
62	443×278	384×259	35	不整形		

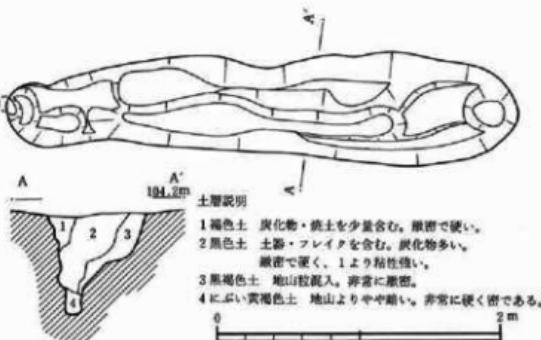
た特徴は他の土坑に比べ規模が大きいことにある。このなかで最大の6号土坑は上端規模 $313 \times 249\text{ cm}$ 、下端規模 $122 \times 109\text{ cm}$ 、深度 151 cm と大型であり、一番小さい14号土坑でも上端規模 $177 \times 171\text{ cm}$ 、下端規模 $122 \times 121\text{ cm}$ 、深度 124 cm である。規模と同時にもう一つの特徴は、土層の堆積状況が自然堆積の状況を示している。本遺跡で中期以外の遺構として、時期を明確に捉えられる数少ないものである。

3) 溝 状 土 坑 (第9図 図版285)

今回の調査で検出された溝

状土坑は1基のみであった。

H-4区の後期の土坑群の近くに位置する。平面形が細長い溝状を呈することから、溝状土坑と呼んだ。規模は上端で長さ 3.64 m 、最大幅 0.8 m 、最小幅 0.45 m 、深さ約 0.7 m を測る。北西側の壁側面の中位には、幅 $15\sim 25\text{ cm}$ の緩い傾斜の段がある。底部幅



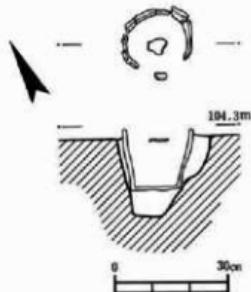
第9図 溝状土坑

は狭く、その両端部には小さなピットが掘り込まれている。北東側のピットは底面から約 20 cm 掘り込まれている。覆土の状態は自然堆積を示しており、黒色土から褐色土が主体で緻密で硬く縮っている。2層からは遺物が出土している。土器を見ると、A地区出土の中期前葉の土器に類似するものである。石器は剝片類が多く出土している。本遺構は調査区内では同類がないことや、陥し穴状遺構という性格から、遺構集中地点の遺構群とは時期を異にするものと考えられる。

遺物実測図：土器 662~667

4) 集 石 土 坑 (図版288)

1号集石土坑は昭和56年調査区のC-2-17区で検出された。土坑内には焼けた角礫が多量に入っていた。土坑の平面形は円形で、規模は直径約 75 cm 、深度は確認面から 32 cm を測る。断面形は摺鉢形である。なお、焼け礫は遺構確認面より約 10 cm 上から検出されている。本遺構は遺物の出土が見られず時期は確定できない。調査区全体で集石土坑は本例のみである。



第10図 1号埋設土器

D 埋設土器

1号埋設土器(第10図 図版288) 1号埋設土器はH-5-11区に位置し、39号住居跡柱穴7に接している。土器は正位に直立しており、上半部は欠失していた。土器中央部には土器片が1点置かれるように検出された。掘り方の平面形は円形で、規模は上端が直径49cm、底部が直径15cmである。深度は確認面から40cmを測る。埋土は暗褐色土が入れられており、基本層序III層の包含層の土と同質と確認された。他の遺構との関係は不明である。土器の時期は大木8a式土器に併行するものと考えられる。遺物実測図：土器1372

E その他のビット

ここで、その他のビットとしたものは住居跡及び関連ビット、土坑、フラスコ状土坑、溝状土坑、集石土坑以外のものを呼んだ。ビット扱いしたものと土坑との区別は上端の径が概して1mを境とした。(詳しい分類は土坑の項を参照。)ビットの分布は住居跡群の分布によく一致していて、I-8・9区、H-9区にはほとんど検出されていない。H・I・J-5～7区にかけて一番多く分布している。H・I-6・7区には柱穴状の土層断面を持ち、底部に柱痕を持つビットが特に多く検出されている。しかし、現在のところ、これ以上の住居跡や柱穴列は確認されていない。今回の調査で検出されたビットの総数は約1,180個である。ビットの出土遺物で実測図が掲載されたものについては、出土地点を明記するために、グリッド別の遺構実測図にビット番号を付した。

3 まとめ

A 住居跡

今回の調査で検出された住居跡は合計44基である。このうち調査時に現場で確認していたものが25基、残りの19基は整理段階で住居跡と確認したものである。調査の際に確認された住居跡は掘り込みを持つものや、柱穴規模が他に比べて格段に大きいものなどであった。また、遺構の重複が少ない地点では、掘り込みがなくても住居跡の確認は比較的容易であった。整理時に住居跡としたものは、柱穴規模と配置から決定した。

これらの住居跡を平面形と柱穴の配置から観察すると以下の4つに分類できる。

A類 掘り込みの平面形及び柱穴配置が長方形。28基（3・4A・4B・7・9・13・14・15・16・17・18・20・21・23・34・35・37・38・39・40・41・42・43・44・45・46・47・48号住居跡）

B類 掘り込み及び柱穴の配置が梢円形。3基（6・11・36号住居跡）

C類 挖り込みは確認できないが、中央の炉を中心に柱穴がほぼ対称となるように策かれる。

7基（1・22・28・30・31・32・33号住居跡）

D類 浅い掘り込みを持ち中央部に炉を持つが、主柱穴が明確でない。3基（5・25・29号住居跡）

E類 その他柱穴が不整形等の配置をとるもの。3基（8・19・27号住居跡）

1) 各類の細分と特徴

A類は更に下記のように分類できる。

A-1 長方形で主柱穴が8本。中央の炉（焼土）を中心に、片側4本の柱穴が相対する。

A-1-a 主柱穴の規模や並びが描かず、長さや幅がやや小型である。掘り込みは確認できない。4A・41・42・46号住居跡。

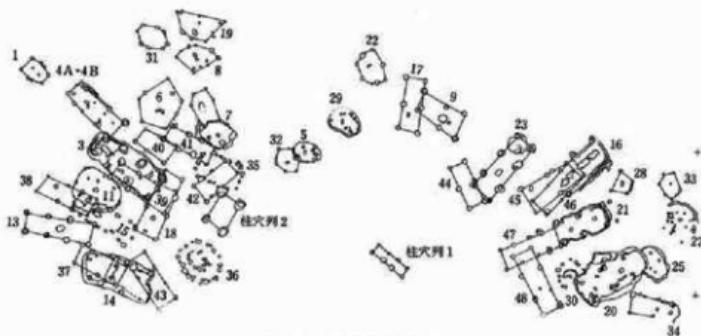
A-1-b 明確な掘り込みを持つが主柱穴の規模が貧弱である。柱穴が直線上に並ばない例や柱間距離が不規則である。7・14・20号住居跡。

A-1-c 明確な掘り込みを持ち、主柱穴の規模は大きく直線上に並ぶ。3号住居跡。

A-1-d 明確な掘り込みを持ち、主柱穴の規模は大きく直線上に並ぶ。床面に地床炉を複数持つ。16・21号住居跡。

A-1-e 主柱穴規模は小さいが柱穴は直線上に並ぶ。18・38・39・43・47・48号住居跡。

A-1-f 主柱穴が直線上に並ぶ。地床炉は1~2ヶ所。そのうち1基は規模が大きく炉に接して埋設土器を持つ。13・23号住居跡。

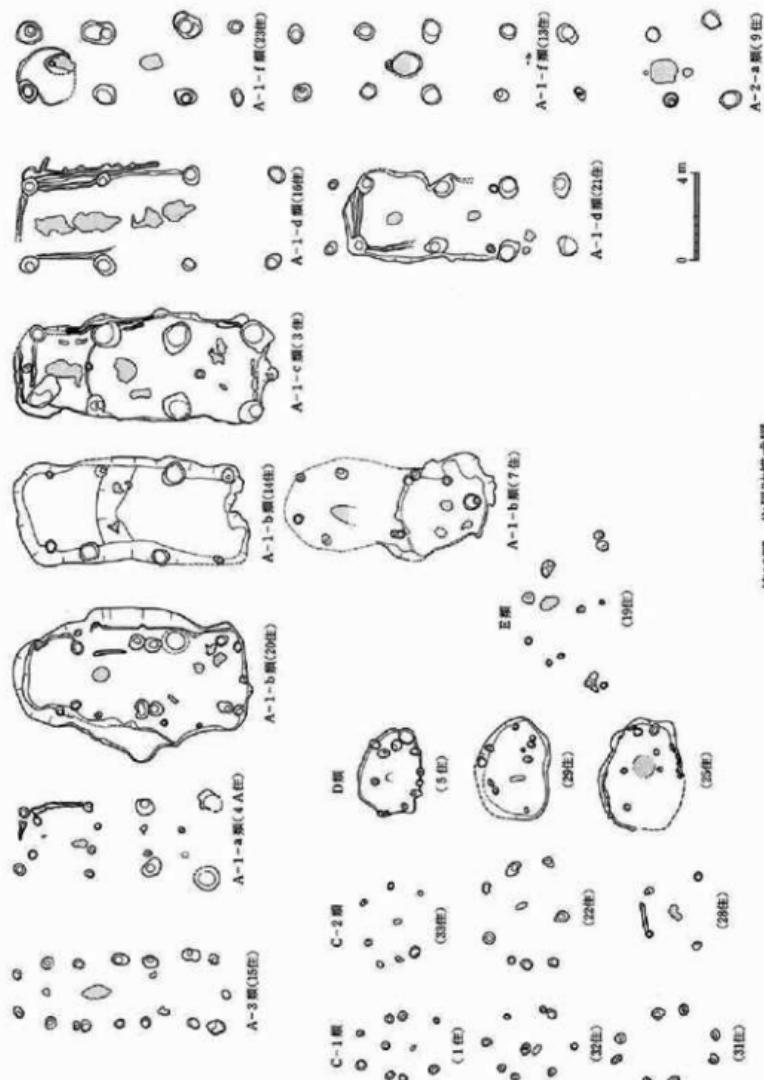


第11図 住居跡配置図

A-2 長方形で主柱穴が6本。中央の焼土を中心片側3本の柱穴が相対する。

A-2-a 主柱穴が直線上に並ぶ。ほぼ中央に地床炉を持ち、炉に接して斜位の埋設土器を持つ。9号住居跡。

A-2-b 主柱穴が直線上に並ぶ。詳細は不明。4B・17・37・40・44・45号住居跡。



第12図 生層結構式図

A-3 直線上に主・支柱穴が多く並ぶ。柱穴規模は小さい。15号住居跡。

A-4 長方形を基本とするが、各辺に小規模な柱穴が連続的に築かれる。35号住居跡。

B類

11号住居跡が代表的な例である。規模は長軸6.9m、短軸6m、床面積約26m²と橢円形の平面形を持つ住居跡のうち最も規模の大きいものである。本類は調査区の西側に位置するが類例が少なく、同時性も証明できない。C-1類は柱穴配置が橢円形であるが、規模に大きな差がある。

C類

本類は柱穴配置によって2分できる。

C-1 1号住居跡に代表されるように、左右対称となるように柱穴が橢円形に配置される。

1・31・32号住居跡

C-2 烧土を中心にはほぼ左右対称に柱穴が配置されるが、平面形は歪んだ橢円から台形状を呈する。22・28・30・33号住居跡

2) 住居跡の分布

A類の分布 A類の配置は調査区内を見る限り、I-9区辺りを中心とした広場の外縁に約20~30mほどの幅で環状に展開する。しかし、F・G-9・10区はA類が他よりも少ない。A類の住居跡のうち22基は住居の長軸方向を中央部の広場に向いている。6基(9・18・42・43・44・48号住居跡)は他の住居跡とは逆に、住居の長辺部(短軸方向)を中央部に向いている。この短軸を中央広場に向ける住居跡は、遺構集中区の内側部分が多い。

C~E類の分布 小型の橢円形・不整形の住居跡は、基本的に弧状を呈する遺構集中区の分布域上に位置する。これらは2つのグループに分かれている。一つはF-6・7区、F-9区、G-8・9区、H-8区に7基が分布する。このグループの西側に当たるG・H-7区では長方形のA類が築かれているため、柱穴等の重複が激しく小型住居の存在は確認できない。また、中心部分と北東部は調査前の工事で既に削平されていて、全容は捉えられないが、恐らく調査区外にも遺構は連続するものと考えられ、小型の環状もしくは馬蹄形の配置を示しているものと思われる。他方はH~J-12・13区に6基(25・27・28・30・33・34号住居跡)が一群をなしている。この群は前者よりも小規模であるが、円形を意識した配置となっている。このグループのうち25号住居跡はA類の20号住居跡と重複し、土層断面の観察では20号住居跡よりも古い。

3) 住居跡の変遷

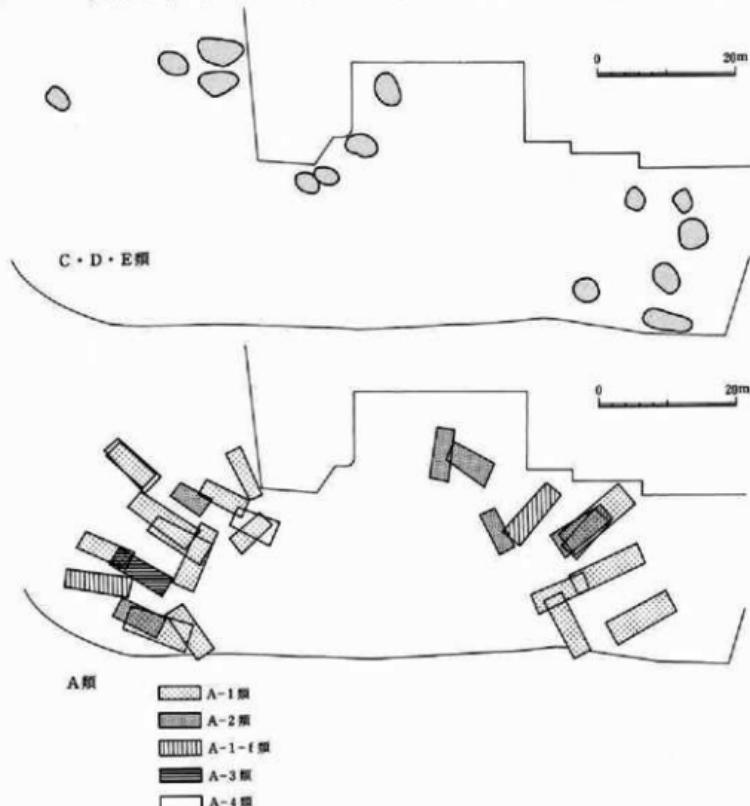
住居跡は平面形態と規模から大きく3つに分けられる。A類の長方形住居跡、B類の橢円形住居跡、C~E類の小型橢円形~不整形住居跡に分類される。

次にこれら住居跡群の時間的変遷はどのようなものであろうか。本遺跡の住居跡検出の埋設

土器・炉埋設土器や覆土・柱穴からの出土資料をもとに変化を考えてみたい。

埋設土器や炉埋設土器は、その住居跡が使用されていた時期のわずか前かほとんど同時期に作られたものと考えられる。覆土や柱穴出土の資料は埋設土器などよりも資料的には劣る。しかし、その住居が廃棄され埋没が完了するまでのある程度限定された時間に、投棄あるいは置かれたものが多いと考えられる。従って、そこから検出された土器のうちで一番新しい遺物は制約が付くが時間の「物差し」として使用できると考える。

今回調査の住居跡で最も古いものはC-1類の1号住居跡である。1号住居跡からは清水上編年案第I段階の北陸系の爪形文を多用する土器が出土している。本住居跡出土土器はA地区（土器の節参照）Aトレンチから出土する土器と同類で、他の遺構群よりも一段階古い様相を示している。同住居跡は、G-8区の杭を中心に分布する住居跡群から西方に外れて位置する



第13図 住居跡分布模式図

ことや、第Ⅰ段階の北陸系の土器が出土していることから、中央の広場を中心とした住居群が構成される以前に築かれた可能性が考えられる。

この1号住居跡と同様な柱穴配置を示すものに32・33号住居跡がある。出土遺物の資料が乏しく土器からは判断できないが、炉を中心に柱穴が対称に配置される形態から考えて、1号住居跡に続くものと考えられる。C-2類はC-1類と同様に対称形の柱穴配置であるが、若干歪んだ台形状の配置をとる。本類も基本的には炉を中心に柱穴が配置されることからC類で一括できると考えられ、同時期頃のものと考えたい。D類はC類のように柱穴が対称となるよう配置されていないが、C類などと一緒に小規模な環状配置を示していることから時期的にも大きな差は無いと考えられる。では、D類と長方形の住居跡のA類ではどれほどの時期差があるのか。D類の25号住居跡は20号住居跡と重複し、土層断面の観察からは20号住居跡が新しい。

前項で説明したようにC-E類は2群にまとまっていることや、A類に切られているD類があることなどからみて、本遺跡ではA類の長方形住居跡がより後出的であるといえる。

A類（長方形住居跡）の変遷 ここでA類の変遷について述べてみたい。A-1類は掘り込みの有無や柱穴規模、柱穴の並び、炉の形態でa-fに6細分した（前述）。ここでは各区分の形態的変化について考え、あわせて出土土器との関係に触れたい。

A-1-a類の4A号住居跡は切り合いから3号住居跡よりも古い。この2つを比較すると4A号住居跡は主柱穴の規模が比較的小さく、柱穴の幅が南側でやや開き気味になるなど不安定な要素が強い。一方、3号住居跡は掘り込み上端の長軸が11.75mと平面形が一段と大きくなり、主柱穴規模も大きく、直線上に配置するなど定型的な形となっている。これと同様な規模のものにA-1-d類の16号住居跡がある。同住居跡は長軸（推定）12.2mと3号住居跡よりさらに大きく、柱穴配置や柱穴規模、加えて長大な地床炉の存在等は8本の主柱穴・複数の地床炉を持った竪穴住居跡の1つの完成された姿を示しているようでもある。16号住居跡出土土器は第Ⅱ段階2期に位置付けられている。

A-1-f類の13-23号住居跡は地床炉の脇に埋設土器をもつ。炉はこの1基が主要なものになる。このf類は埋設土器等から第Ⅱ段階3期に位置付けられ、本遺跡で最も新しい住居跡である。

これまで見てきたように主柱穴が片側4本直線上に並び、加えて柱穴規模が大きいものが新しい要素であるとしたら、逆にこの反対のものが古いといえる。A-3類の15号住居跡は主柱穴・支柱穴の規模が小さく長辺上に多く並ぶこと、しかも今回確認されたのが1基だけであることから、同住居跡は発展段階にあったことを物語るものではないかと考えられる。

以上から住居跡の変遷を見ると次のようになる。A-3類(15号住居跡)→A-1-a類(4号住居跡)→A-1-c類(3号住居跡)→A-1-d類(16号住居跡)→A-1-f類(13-23号住居跡)。

A-1類とA-2類の新旧関係 住居跡間の切り合いからみると、A-1類（8本主柱穴）の16号住居跡とA-2類（6本主柱穴）の46号住居跡では16号住居跡が新しい。主柱穴6本の9号住居跡は床面中央部の地床炉のすぐ脇に斜位の埋設土器をもつタイプであることや、その土器が第II段階3期に位置付けられていることから、9号住居跡はA-1-f類と同じく調査区内でも最も新しいものといえよう。以上の例から、柱穴の本数をもって新旧関係は確定できない。A-2類では主軸方向を中央の広場へ向け、炉形態では地床炉の脇に埋設土器を持たないタイプの住居跡は古い傾向と考えられないだろうか。

4) 新潟県内における縄文時代中期の住居跡

前項で竪穴住居跡の形態をA-Eに分類し、更に各類を細分してきた。ここで県内の類例と比較してみたい。

新潟県内の中期前葉の竪穴住居跡 ここで該期の県内の類例を見てみたい。県内では中期前葉の住居跡の検出例は多くないが、三島郡出雲崎町タテ遺跡（高橋1985）、糸魚川市長者ヶ原遺跡（小島俊彰ほか1981）、上越市山屋敷I遺跡（小島幸雄ほか1978）、新井市原通ハッ塚遺跡（甘粕ほか1982）、中頸城郡吉川町長峰遺跡（室岡ほか1984）、中魚沼郡津南町堂尻遺跡¹⁾（石沢ほか1976）等で確認されている。これらの中共通した特徴は、炉の形態では地床炉が主体であること。これらの例と比較しても本遺跡のC・D類は中期前半の住居跡の特徴をよく備えていることが理解できる。

新潟県内で検出された大型住居跡（中期） 新潟県内では4遺跡で大型の住居跡が検出されている。三島郡三島町千石原遺跡（中村ほか1973）、佐渡郡小木町長者ヶ原遺跡（小林ほか1982）、中魚沼郡津南町沖ノ原遺跡（江板ほか1977）、長岡市岩野原遺跡（久形ほか1981）が挙げられる。以下、各遺跡の住居跡について略記する。

千石原遺跡 平面形は梢円形。長軸（遺存）7m、幅6.3m。実測図から推定して、住居跡の半分ほどが残っていたものと考えられる。壁際に周溝が巡り、端部では内側にも認められる。炉は地床炉が4基確認され、長軸方向に2基が並ぶ。報文では主柱穴を特定していないが、断面図や柱穴深度などから判断して、4本の遺存が予想される。遺物は少ないが爪形文土器と近



第14図 新潟県内の大型住居跡検出遺跡(中期)

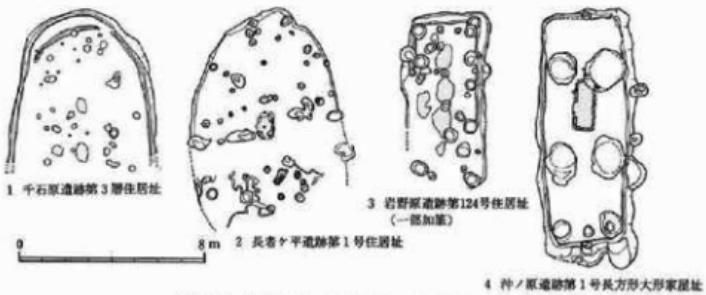
1) 堂尻遺跡第1号住居跡は埋甕炉を持つ。埋甕炉に使用されている土器は報文では中期後半とされているが、写真からは中期前半の土器である。

似性が強いと報告されていることから、新崎式土器に併行するものと考えられる。

現在、全体の平面形を知ることはできないが、完全に遺存していたならば長軸14mほどであったと考えられる。

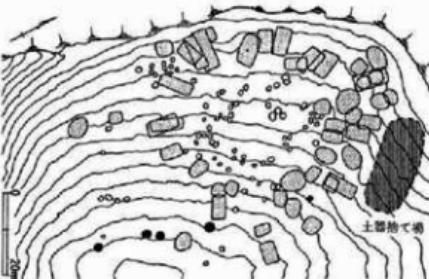
長者ヶ平遺跡 平面形は橢円形。長軸約10m、短軸6.4m。炉は中央部に石囲い炉が1基認められた。柱穴は多数認められたが、主柱穴は確定されていない。4基の埋甕が検出されたが無文であるため、中期のなかでの詳細な位置付けは難しい。炉の形態が石囲い炉であることから推して、中期中葉以降の可能性が考えられる。

沖ノ原遺跡 平面形は長方形。長さ10m、幅4m。東南東端部に入り口と見られる2段の階段が見られる。中央には1対の柱穴を持ち、直交するように6本の主柱穴を持つ。そのうち4本の柱穴の掘り方は特に大きく、最大直径が180cmにも達するものもある。炉は長方形石囲い炉である。長さ217.5cm、幅95cmでやや奥寄りに作られる。時期は大木8b期に併行するものである。沖ノ原遺跡では、本住居跡を含め3基の長方形大形家屋址が検出されている。しかし、遺跡全面の調査が行われていないため、同家屋址が何基あるかは不詳である。また、住居跡の時期も竈文中期のほぼ全時期に及んでおり住居跡の所属時期の細かな観察が必要である。



第15図 新潟県内で検出された大型住居跡(中期)

岩野原遺跡 平面形は長方形。長さ
(推定)7.8m、幅約3.1m。上記の住
居跡よりも規模は小さいが、柱穴配置
や平面形が清水上遺跡例に類似してい
る。報文では長辺約4.8mとされてい
るが焼土がそれよりも広がっているこ
とから、実測図から長さを推定した。
焼土(地床炉?)が7ヶ所認められる。
主柱穴が長軸上に並び片側4~5本が
想定される。本遺跡では長方形の竪穴



第16図 五丁歩遺跡(新潟県史から転載)

住居跡が4基確認されている。このほかに橢円形の平面プランを持ち、長軸が8m以上で周溝が巡り、地床炉を持った住居跡も確認されている。

このほかに南魚沼郡塩沢町五丁歩遺跡(新潟県教育庁文化行政課 1985)では住居跡が約60基検出され、数基を除いて環状に配置されている。中央の広場には墓坑を持つ中期前葉から中葉の集落跡である。この集落を構成する住居跡は平面形から大きく2群に分かれる。倒卵形と隅丸長方形である。後者は柱穴が直線上に並ぶ清水上A類に類似する。長方形住居跡の規模は、大きいもので長さが約8.5m、幅約4m。小型のものでは方形に近いものがあり一辺3mほどを測る。炉の形態は倒卵形の住居跡が地床炉や掘り込み炉であるのに対し、長方形住居跡は石囲い炉、地床炉、両方を併用するもの等がある。前後関係は倒卵形が古いと予想されている。

以上をまとめると、新潟県内で確認された大型住居跡は中期前葉の千石原遺跡第3層住居址が一番古いといえる。平面形態では橢円形と長方形が認められるが、時期差としては現れない。五丁歩遺跡では規模がやや小型であるが長方形の住居跡が環状集落を構成していることに特徴があり、清水上遺跡の住居のあり方と似ている。

5) 結論

a 大型住居跡の性格

住居跡の平面形が長方形又は橢円形の大型住居跡は東北地方・北陸地方に分布の中心を持っていることが70年代後半から明らかになってきて、その機能について様々な説が提示されている。大型住居跡について¹⁾冲ノ原遺跡の考察で渡辺誠氏は「一般住居址とは明らかに区別された、たとえば冬期の集中的なトチ・ナラ類の加工処理などの共同作業などの公共施設である可能性が強い。」(渡辺 1977)と具体的な機能の推定をしている。これに対して「大型住居跡」は「何らかの祭的・儀礼的な集会の「場」より具体的に「共食の場」」(小川 1985)と解釈する説なども出されている。また、小林達雄氏は「冬の共同作業小屋であったとすれば、積雪地帯の冬のセトルメントには全て建設されなくてはならないはずであった。しかし、実際は、超大型建物は、広場をもつ繩文モデル村のみ建設されたものであり、パターンB・Cにはない。つまり、一定範囲をとる集団領域内の単位集団群がかかる共同行事の一環としての施設」(小林 1986)とする意見を示している。これらに対して渡辺氏は、「共同作業所が公民館的な集会所として利用されることも当然予想され「どこに重点を置いているか」ということで、(中略)それぞれの説が全く矛盾するということではない」(渡辺 1988)と各説をまとめている²⁾。

1) 渡辺氏は「長方形大形家屋址」と呼んでいる。

2) 1987年11月富山市考古資料館において「長方形大型住居跡の性格について」という題目で渡辺誠氏の講演が行われた。その講演記録が1988年3月刊行の同資料館研究紀要に掲載された。

しかし、渡辺氏の示した共同作業所という考え方も、集落内の特殊な建物という認識のうえに成立しており、本遺跡のように一般の住居跡が長方形大形住居の形態をとることを予想していない。従って、長方形大形住居跡は特別に大きい秋田県杉沢台遺跡のS I 07 竪穴住居跡(推定長軸約33m、短軸約8.8m)例のようなものと、集落にあって普通の建物として位置付けされるものに分割して考える必要があろう。

清水上遺跡の長方形住居跡(A類)は、特殊な存在ではなく一般の住居跡として環状(?)集落を構成している点に特徴がある。当遺跡の住居では、共同作業所の機能が個々の家族単位の作業として、それぞれの長方形住居で行われていた可能性が強いという解釈も成り立つ。

大型住居跡の機能を渡辺氏は堅果類の加工・貯蔵を行う公共施設であった可能性が強いと指摘していることは先述したが、加工施設の条件とはどのようなものであろうか。

①大型で長方形である。②左右対称にきちんと柱が並び、柱穴が大きい例も多い。③炉跡が1個だけない場合が圧倒的に多い。1個だけの場合は大きな炉を作る。④1つの遺跡のなかで独立していて、特殊な形態を持っている。⑤全て豪雪地帯を背後に控えたところに分布する(渡辺1988)。

先述の規定が大型住居跡=堅果類加工の共同作業所であるとしたら、当遺跡の長方形住居跡は④以外は全て条件を満たしているのである。当遺跡の全ての長方形住居跡が集会所等の特殊な機能を持っていたとは考え難く、長方形住居跡(A類)は、堅果類の加工・貯蔵施設としての役目を個々の住居が果たしていたと理解することが最も受け入れやすいものではないだろうか。

以上のことから当遺跡の長方形住居跡はトチ・ドングリ類の加工・貯蔵に適応した施設と考えることが可能と思われる。縄文時代中期の清水上集落が堅果類加工技術(トチの実のアブ抜き等)を取り入れる際、共同作業所として超大型住居(建物)を建築するのではなく、個々の家族単位が必要とする規模で、大型の住居を築き植物利用に比重を置いた生産活動を行っていた可能性を考えることができる。このような長方形の平面形をとる住居跡は清水上遺跡ばかりでなく、遺跡が面する魚野川上流部の五丁歩遺跡でも長方形の住居跡が環状集落を構成していることが注目される¹⁾。

新潟県内では今まで当遺跡例のような長方形の大型住居跡の検出例はなかったが、今後県内の縄文時代中期のある程度の規模をもった集落跡からは、長方形住居跡の検出例が増えるものと思われる。

1) 清水上遺跡と五丁歩遺跡はほぼ同時期に營まれた集落と思われる。清水上遺跡では東北の大木系土器が優越するのに対し、五丁歩遺跡では北関東から三国山脈を越えた越後に分布圏を持つ土器が主体を成している。

b フラスコ状土坑・土坑

これらは住居跡との関係について不明な点が多い。50号フラスコ状土坑が20号住居跡に伴うが他については共伴関係が認められなかったり、不明であるものが多い。貯蔵穴と大型住居跡の関係など問題となるところがあるので、今後出土遺物を中心に詳細に検討を加える必要がある。

今回の調査では墓坑が確認されていない。先述した五丁歩遺跡は中央広場に墓坑を持つ典型的な例であるが、それと著しい相違を見せている。本遺跡では調査区外の広場に墓坑を持つものか、あるいは広場以外にあるものなのか、集落構造を知るうえで興味深い問題である。

c 溝状土坑

本遺跡の南東方向約700mの瓜ヶ沢遺跡では4基の溝状土坑が検出されている。遺構は長軸方向を段丘先端部に向けてほぼ並列している。遺構から遺物の出土は全くなく時期の決定はできない。これと類似した遺構に中頸城郡板倉町峯山B遺跡がある。同遺跡は標高約250mの高位段丘上にあり、73基の溝状土坑が検出されている。遺構は8群に分かれ、各群とも遺構の長軸方向は等高線に並行ないしは斜行し、配列方向に直交している。その構築時期は縄文時代中期前葉以降後期前葉までの間と考えられている。新潟県内における分布は「魚野川や信濃川流域に多く、次いで高田平野南部にも分布する。いずれも河川を眼前に控えた段丘面・火山山麓・丘陵斜面に構築されており、沖積面とは崖によって限られた地形面上に立地するものが多い。」(秦ほか1986)とされる。崖によって限られた地形とは、追い込み耕を行なう際の地形的な制約を示している。この例から見ると瓜ヶ沢遺跡例は、小規模ではあるが典型的な立地を示している。また、本遺跡の立地する段丘も同様な地形であるため、先端部に溝状土坑が集中している可能性もある。

引用・参考文献 遺構

- あ 青木 益・小林達雄 1982 「長者ケ平遺跡」II 新潟県佐渡郡小木町教育委員会
- 甘粕 龍・小野 昭 1982 「原通八ツ塚」 新潟県新井市教育委員会
- い 池田 亨 1981 「原・唐平遺跡」「堀之内町文化財調査報告書第2編」 新潟県堀之内町教育委員会
- 石沢寅二 1976 「堂尻遺跡」「津南町文化財調査報告書No.1」 新潟県津南町教育委員会
- お 小川 望 1985 「縄文時代の大形住居」について(その1)『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第4号 東京大学文学部考古学研究室
- か 金子拓男 1986 「第2章第5節 中期の文化」「新潟県史」通史編1 新潟県
- こ 小島俊彰ほか 1981 「長者ケ原遺跡範囲確認調査概要(第4次、第5次)」 新潟県糸魚川市教育委員会
- 小島幸雄 1979 「新潟県上越市岩本地区遺跡群発掘調査報告書」 新潟県上越市教育委員会
- 小林達雄 1975 「月岡遺跡」「日本の旧石器文化」 2遺跡と遺物 雄山閣
- 小林達雄 1986 「2原始集落」「岩波講座 日本考古学」 4集落と祭祀 岩波書店

- 小林達雄 1987 「縄文社会の集落形態」『世界考古学大系日本編補遺』 天山舎
- 胸形敏朗・寺崎裕助 1981 「埋蔵文化財調査報告書 岩野原遺跡」 新潟県長岡市教育委員会
- 佐藤雅一ほか 1985 「瓜ヶ沢遺跡」『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第31』 新潟県教育委員会
- 菅谷透保 1987 「縄文時代特殊住居論批判」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』 第6号 東京大学文学部考古学研究室
- 高橋 保 1985 「タテ遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第39』 新潟県教育委員会
- 永瀬福男ほか 1981 「杉沢台遺跡」『秋田県文化財調査報告書第83集』 秋田県教育委員会
- 中村孝三郎 1968 「月岡遺跡発掘調査報告書」 長岡科学博物館考古研究室
- 中村孝三郎・小林達雄ほか 1973 「千石原遺跡」『長岡科学博物館研究調査報告第11冊』 長岡科学博物館考古研究室
- 中村良幸 1982 「大形住居」『縄文文化の研究』8 社会・文化 雄山閣
- 新潟県教育庁文化行政課 1985 「新潟県埋蔵文化財調査だより」No.1
- 秦 繁治・岡本都栄 1986 「4 陥し穴状造構」『板倉町文化財報告第1 峰山B遺跡』 新潟県板倉町教育委員会
- 武藤康弘 1985 「縄文集落研究の動向」『民俗建築』第87号 日本民俗建築学会
- 室岡 博・関 雅之ほか 1984 「長峰遺跡II—新潟県中頸城郡吉川町長峰遺跡第3次発掘調査報告」 新潟県吉川町教育委員会
- 山崎文幸 1989 「(補遺)上ノ山II遺跡」『秋田県文化財調査報告書第186集』 秋田県教育委員会
- 渡辺 誠 1977 「第5章考察 第1節集落の構成」『沖ノ原遺跡発掘調査報告書』 新潟県津南町教育委員会
- 渡辺 誠 1980 「雪園の縄文家屋」『小田原考古学会会報』9 小田原考古学研究会
- 渡辺 誠 1988 「長方形大型住居跡の性格について」『富山市考古資料館紀要』第7号 富山市考古資料館

第IV章 遺 物

1 土 器¹⁾

A 資料提示の方法

1) 資料の取扱いについて

当該期の土器を出土した遺構には、住居跡・柱穴列・フラスコ状土坑・土坑・ピットがあり、それらが本遺跡の主体をなしている。これらの遺構の時期変遷を明らかにするべく、遺構出土の土器について多くの図化を試みた。遺構に伴うと判断できない包含層出土の土器は、土器自体で分類・編年等の好資料と思われるものを中心図示した。以下、それぞれの遺構について土器出土状況の概略と合わせ、資料提示の基準を記す。これら当該期の土器は多数出土しているにもかかわらず、図化されたのが少なく、特に、法量・形状がわかるように反転実測されたものは極端に少ない。このことが当地の研究の停滞の一つの要因ともなっている現状を踏まえ、時間の許す限り、多くの土器を図示することを心掛けた。径の出るものについては、反転し多少の文様復原を加えて、実測図を提示した。

住居跡

本遺跡の住居跡では、地山面まで掘り込みをもつものは多くない。掘り込みをもつものでも他の遺構と重複が多く、純粹に一つの住居跡のみに伴う豊富な覆土一括資料が得られたのは16号住居跡のみである。このように、住居跡出土の土器が単純に捉えられない状況から焼土・柱穴・覆土出土の土器を、それぞれ分けて掲げる。遺物の少ない遺構は、文様・器形がわかる土器は、細片でも図示する。また16号住居跡出土土器は編年の基準となる資料であり、とりわけ多くの土器を図化する。発掘時には、単独の住居跡覆土出土土器として取り上げられた土器で、整理作業により重複が明らかになったものについては、重複する双方の違った覆土として提示し、新旧の差を予想することとする。

柱穴列

住居跡と異なり、焼土・覆土出土土器が明確でないため、遺物量が極めて少ないと、そこで柱

1) 執筆については、5)a、cを除くAを川村浩司が担当した他は、高橋が主にあたったが、遺物の整理過程における実測、観察表は、池田敏朗・川村浩司がそのほとんどを行った。執筆についても3者協議のうえ分担して行う予定であったが、都合により高橋が大部分をまとめるとなつた。文責は高橋にある。

穴列を構成するピット出土土器は、無文及び地文のみの土器を除いて、極力図示した。

フラスコ状土坑・土坑

造構によってはかなりまとまった出土量がある。特に切り合いのないものは一括性が強いと思われるところから多くの図化を試みた。フラスコ状土坑埋没後の窪みを利用して住居跡の炉としている例（3号フラスコ・20号住居跡）など、明らかに他の造構との新旧関係を捉えられるものも重視する。

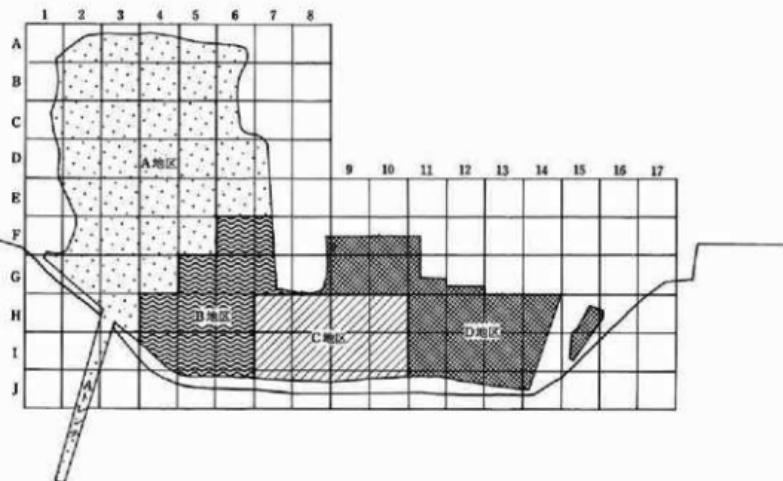
ピット

特徴的な資料、完形個体を中心に選択して図化した。全般的に、各ピットとも出土量は少ないが、比較的多いものについては、フラスコ状土坑・土坑に準ずる扱いをした。

遺構外

特徴的な土器、完形個体を中心に選択して図化した。また、遺跡内をいくつかのブロックに分け説明を加えた。

- ① A地区（F-4～6、G-4グリッド）—住居跡が比較的少なく、土石流の流れた地区
- ② B地区（G-5・6、H-5・6、I-4～6）—西側の住居跡密集区
- ③ C地区（F・G-7～9）
- ④ D地区（H・I・J-8・9）—住居跡が少なく東側の住居跡密集区



第17図 土器各説における地区割図

2) 図化の方法

完形に復原し得た土器の多くは、写真実測を用いた。焼付した印画紙に、マイラーベース(商品名 ダイヤエース)をかぶせ、鉛筆トレースした後、手取り補正し断面実測を加える方法を探った。ただし個体によって地文まで実測したものと、拓影を用いたものに分かれる。

破片資料は、拓影図と復原実測図を掲載した。口縁・頸部・底部等の破片で、径を出せるものはなるべく反転実測するように務めた。

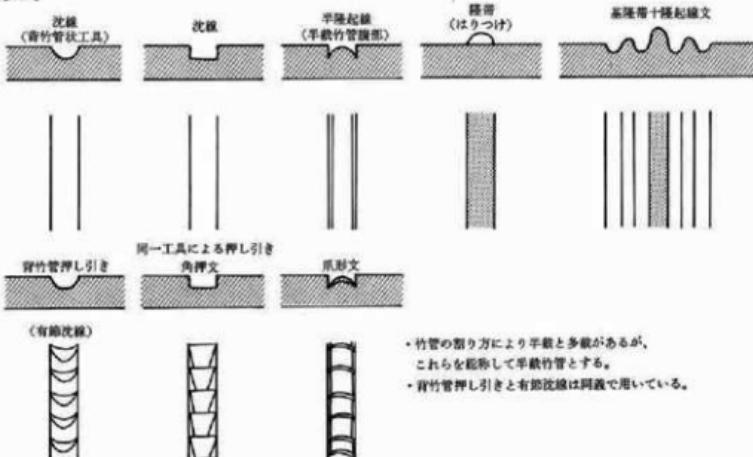
文様は、全て図化した。地文及び文様の表現方法は、第18図に模式図として示した。隆起・隆起線・半隆起線の区別は従来必ずしも明瞭とはいえない難かったが、ここでは第18図の如く扱う。ミガキ・ナデ等の調整は図示していない。

断面の表現は「輪積み」部分と、欠損部分を分けて表現した。「輪積み」痕を観察できた部分は、細い破線で示し、欠損部分は波形で表した。また、断面・拓影図とも、土器の理解の上で必要と思われる推定部分を書き加えた。その場合、実存部分を細線でくくる。推定部分と実存部分に間隔を設ける。復原部分を細い実線もしくは、破線とするなどの方法で、実存部分と復原部分を区別した。

3) 観察表の記載方法

掲載する土器は約1,750個体を数えるが、紙数の制限から全てを詳述できないため、観察表を用い説明を簡略化する。

項目は、器種・分類・出土層位・地点・法量・地文・色調・胎土・二次焼成・遺存・備考である。



第18図 土器文様の表現方法

器種 深鉢形土器・鉢形土器・浅鉢形土器・台付鉢形土器（以下、それぞれ「形土器」を省略）。

異形土器に大別し、それに沿って記す。

分類 後に詳述する器形・文様等の分類に基づいて記入する。

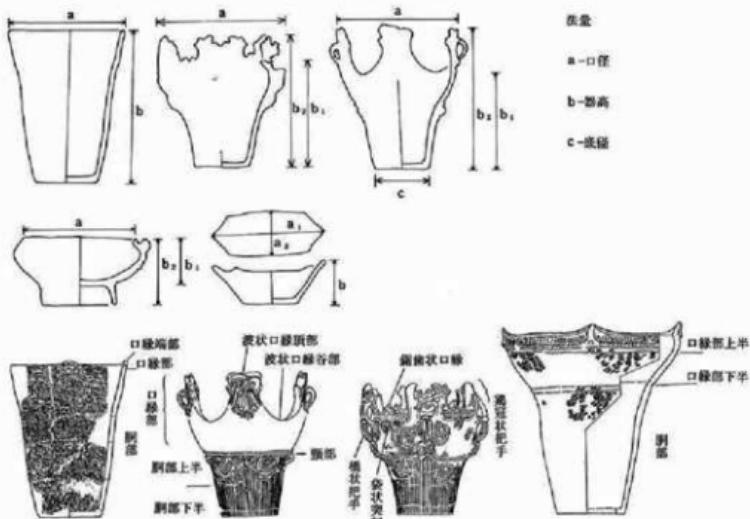
出土層位・地点 遺構出土のものについては、その遺構内の層位と地点、遺構外のものについて基本層序と小グリッド名を記した。

法量 口縁部径（以下、口径）・器高・底部径（以下、底径）をcm単位で示す。2ヶ所の測定が必要なものについては、 $a_1 \times a_2$ 、 $b_1 [b_2]$ 等のように併記する（第19図参照）。この表記は復原実測したものも同様であるが、推測の度合が強いものについては、（ ）内で示す。

地文 LR等の記号で表す。

色調 土器器表面の主体となる色調を、標準土色帖（小山・竹原 1970）を参考にして表わす。内・外面で著しい差のある場合は、双方の色調を併記する。ただし、スス付着・赤色塗彩などで、器表面が見えない場合は、断面の色調である。

胎土 胎土の粗密の度合を、密・やや密・やや粗・粗の4段階に分ける。特に際立つものには極めて密・極めて粗と表記する。胎土中に含まれる鉱物岩片等の混和材は、肉眼観察した結果では、石英・長石・雲母・頁岩片・結晶片岩片・赤褐色系の粘土粒・灰白～黄白色系の粘土粒等が認められた。このうち、石英・長石はほとんどの土器に含まれることから記述を省略した。ただし、石英のうち自形を保ち、透明度の高い結晶質のものは、一定の土器に認め



第19図 土器法量測定位置及び部位名称

られることから、大塚遺跡の報文（寺崎ほか1988）にならい「水晶」と記載する。なお、新潟県教育センター村松俊雄氏に、ごく一部の土器を顕微鏡観察して頂いており、シソ輝石等の鉱物が含まれるとの御教示を得たものについては、明示した。また、粒径2mmを境に砾と砂に分け、砾が特に多いものは記す。

二次焼成 二次焼成による色調の赤色化、器表荒れ、スス・オコゲ状のススの付着について記す。

遺存 図示した該当部分の遺存度を、分数表現で示すが、「約」は省略する。部位により遺存度が大きく異なる場合のみ、「口縁 $\frac{1}{2}$ 、胴部 $\frac{1}{4}$ 」などのように分けて表現する。

備考 赤色塗彩が認められるものは「赤彩」、他の遺構出土の土器と同一個体の（もしくは、同一個体の可能性のある）ものは「～と同一個体（？）」、復原実測において特に推定の度合いが高いものは「推定復原」と示す。また、遺構外包含層出土の土器で、住居跡が所在する小グリッドと対応するものについては「～号住グリッド」と示す。

4) 部位名稱

部位名稱は第19図のとおりである。他は一般的呼称に従う。

5) 土器分類¹⁾

当遺跡において主体を占める土器は縄文中期である。新潟県における縄文中期は、地域・時期によってそのあり方が複雑である。火焔土器をはじめとする新潟県独自の土器も出現するが他地域からの影響を受けた土器も多く見られる。また器形・文様についても、他の時代に比べてより多くのバラエティを認めることができる。文章中では、地域・時期等については各々述べることにするが、一覧表等においては、以下の数字・記号を用いることとする。

a 系統

1—汎北陸系………主に中期前半に多く見られる。北陸の新保・新崎系土器である。半截竹管文による半隆起線文・爪形文・蓮華文等を特徴としている。しかし、石川、富山県地方とは、かなりの違いを認めることができる。

2—越後系………いわゆる火焔型土器をはじめとする土器の一群である。縄文をいっさい用いておらず、渦巻文やS字文が特徴的である。当遺跡は、この越後系土器の成立期の遺跡と言える。

3—東北系………中期前葉から中葉にわたり、当遺跡では全般にその影響が認められる。いわゆる大木7b～8a式期のものである。地理的位置から特に福島県

1) 土器分類においては、型式論・様式論等さまざまな考え方があるが、ここでは時間的尺度として的一般的型式名を用い、それに地域性（～系）を加味して考えていくことにする。

の会津地方の影響が強く認められる。より大木系に近いもの、大木系とは言え越後特有のもの等があり、分離すべきかもしれないが、そこまでの検討はしていない。また東北系でも山形方面からの影響と考えられるものもある。

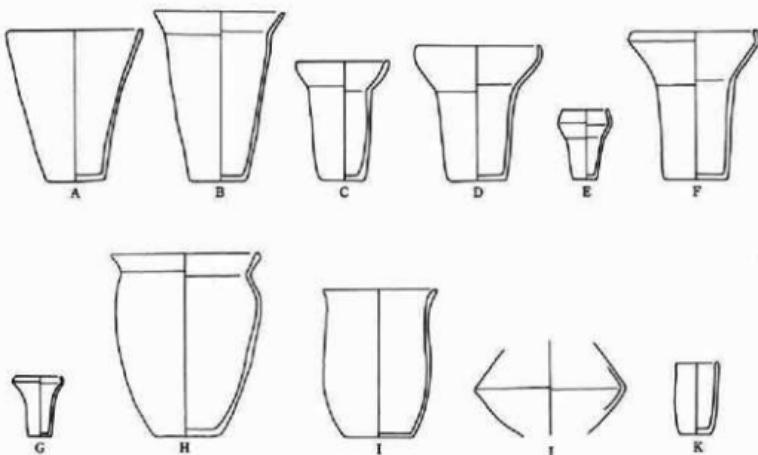
4 中部高地系……主に信州北部と関連すると考えられる。横帶梅円区画内を斜行沈線で充填するいわゆる斜向沈線文系土器等である。胎土等も違いを認めることができる。時期的には、落沢、新道式段階にあたる。この他、有孔鍔付土器等がある。

5 一関東系……阿玉台式系統の土器である。阿玉台式土器は、関東から東北南部に広く分布し県内においても強い影響が認められる。当遺跡では、阿玉台Ⅰ・Ⅱ段階の土器が認められる。焼成堅敏で、雲母が特徴的である。また、五領ヶ台系も數点存在する。

6 一系統判別不能……いろいろな要素が複雑に入った土器で、どの系統に入れたらいいのか分からないものである。

b 器形

器形には、多くのバラエティが認められ、分類が難しい。深鉢について一応以下のように分類したが数値的に明確なる分類基準は用いていない。したがって分類困難なものも多く認められるが、主観的判断によりどれかに分類した。破片等で全体を窺い得ないものについては空白としている。



第20図 器形分類図

〔器形〕(深鉢)

- A…いわゆるバケツ状に開く土器である。
- B…バケツ状の胴部に短く外折する口縁がつくものである。
- C…長い胴部にやや短く内縁する口縁がつくものである。
- D…口縁が内縁しながら長く伸び、胴部はCと比べ相対的に短いもの。
- E…算盤玉状に屈曲する口縁部をもつもの。
- F…長胴で口縁下位が外折して長く伸び、口縁上位が短く内傾するもの。
- G…胴部は外反して長く伸び、口縁が短く内傾するもの。
- H…胴部は樽状を呈し、口縁が緩やかに外反するもの。
- I…肩部が張る胴部に、短く外折する口縁がつくもの。
- J…胴部が算盤玉状に強く屈曲するもの。
- K…筒状を呈するもの。

〔口縁形態〕

- a…平口縁のもの。
- b…小突起もしくは把手がつくもの。
- c…波状口縁を呈するもの。

〔胴部形態〕

- B・C・Dについて胴部が膨らむものをそれぞれ
B'・C'・D'とした。

c 時期

時期については以下のような編年案を考えている。詳しくは後述する。

清 水 上		羽黒編年	北 陸	関 東・中 部 高 地	東 北
I	① A地区No. 1号住	羽黒3期	新 嶺 I	阿玉台1 a	大木7 b
	② A地区No. 1号住	羽黒4期	新 嶺 II	阿玉台1 b (路沢・新道) II	
II	① 3号住・11号フラ スコ状土坑	羽黒5期	上 山 田		大木8 a
	② 16号住				
	③ 23号住				

B 土器各説

1) 遺構出土の土器

1号住居跡（1～7）

1号住居跡では、床直上及びピットから土器が出土している。全て深鉢である。ほとんど北陸系の爪形文を使用する土器で占められる。2は半截竹管文の間に爪形がやや難に施される。3は沈線部がなぞられている。5は口縁部幅広の爪形文であり、胴部はカマボコ状の断面をもつ半隆起線文である。7では刺突が見られる。

番 号	器 種	分類		出 現 場 所	法 量		地 文	色 調	胎 土	二 次 焼 成	遺 存	備 考
		系 統	器形		時 期	口 径	底 径					
1	深鉢	?	?	F 4-3 山				RL	穂	やや密	外スス	1/4
2	?	1	B'-b	1-②	*	16.0		?	*	*	*	1/8 補修孔
3	?	1	A?b	P 3	12.6			?	灰白	*	内オコゲ	1/10
4	?	1	C	P 2				LR	にぶい黄緑	やや粗	外スス	
5	?	1	C-a	*	17.6			?	明赤褐	やや密		1/10
6	?	1	?	*	*			?	穂	やや粗		
7	?	?	?-a	?	P 8			?	にぶい穂	やや密		

3号住居跡（8～121）

3号住居跡では焼土及び柱穴から出土のもの（8～62）及び覆土から出土のもの（63～121）とがある。焼土及び柱穴から出土のものでは深鉢・浅鉢があり、法量的にもバラエティが見られる。4単位の波状口縁で上端が平らになるものが3点（8・10・51）出土しており、他にも覆土から1点（66）出土している。8は小形の鉢と言えるものである。頂部を欠損するが、恐らく水平になると考えられる。4単位の文様構成であり、主要モチーフは基隆帯で、基隆帯上には爪形文が付される。頭部には一周するような横帯区画は見られず、波状部から斜めに流れる文様モチーフをもつ。10も同様の器形である。文様モチーフでは、頸部に明確に横帯区画が見られる。また橋状把手がその部分に付される。主要モチーフは基隆帯によっているが、他は半隆起線文である。三角区画を中心にY字状の基隆帯や三角形三叉状陰刻・玉抱き三叉文等が見られる。

11は無文で臺に近い器形をもち、底部に穿孔痕がある。12は小形の深鉢である。2本一組の沈線により4単位に区画され、各々の上部には渦巻文がある。13は底部近くの無文の破片で、綫方向の沈線が見られる。15は頭部の大形橋状把手である。16は薄手で細い沈線による文様区画である。

17は隆帯上を指で抑えた連続押圧及び交互刺突による波状文が見られる。18は大形の浅鉢である。沈線による抽象画風の文様である。20は2個一対の小突起が4単位付される。22は口縁が「く」の字状に外反するものである。上部には隆帯による橢円区画が見られ、区画に沿って

有節沈線及び波状沈線が見られる。口縁部はつまみ出しによる小突起となっている。下半分は羽状繩文（LR・RL）を施文の後、沈線による藤手状の文様が施される。24には隆帯及び交互刺突が見られる。25・26は口縁部の突起、19・23は沈線及び半隆起線による文様である。27は小突起内面に玉抱き三叉文が見られ、口縁部に沿っては半隆起線文である。28は5個の小突起をもつ深鉢である。繩文を施文の後、口縁に沿って3本の沈線、その下に2本の波状沈線また頸部には4本の沈線が巡っている。29は口縁部にS字状の把手が4個付され、その把手間には梢円区画となり、その中を背竹管による押し引きが充填される。またS字把手や他の沈線部にも背竹管による押し引きが見られる。頭部は無文帶で橋状把手が付される。胴部はクランク状のモチーフである。30は、やや外反する口縁部破片。31・33は浅鉢である。34・36・37・38は越後系土器の破片である。40は浅鉢で沈線による文様構成で部分的に刺突が巡る。41は断面三角形の隆帯による梢円区画、42は繩文の側面圧痕、43・45は羽状繩文の後、沈線による文様区画、44は波状4単位の深鉢。46は渦巻文をモチーフとする胴部破片。48は繩文施文の後、口縁に沿って半隆起線文が2本巡る。口縁部には小突起があり、キザミも付される。49は22と同様の文様構成、器形をとる。51は前述の8・10と同様の器形であるが、口縁の外反が小さい。渦巻きを主要モチーフとし、基隆帯・X字状橋状把手が見られ、しっかりとした4単位構成をとる。内面波状部に沿って隆帯が巡る。

52は大きく外反する深鉢。口縁部には沈線状のキザミが巡り、中央に貼り付け隆帯が見られる。53は小形の鉢で口縁部に沿って背竹管による連続刺突が2列巡る。また胴下半部には、沈線による文様区画が見られる。54は筒状の土器で、類例は少ない。胴部は隆帯と沈線によるクランク状の文様である。上部は動物意匠と思われる突起が見られる。また、袋状の把手も付される。以上が施土及び柱穴から出土した土器である。

覆土の土器では、66～73は繩文を用いないいわゆる越後系の土器である。66は大形の水平波状口縁の土器である。主要モチーフは基隆帯による。三角部分には玉抱き三叉文が充填されている。内面口縁部に沿って隆帯が巡る。67は口縁部無文帶をもつ小形の鉢である。文様は半截竹管で描いた後、沈線部をなぞっている。基隆帯は見られない。文様は6個の渦巻を連結させている。また三角部分には三叉文が充填される。68はいわゆる火焰型土器の胴部と考えられる。主要モチーフは基隆帯になっている。胴部にしまりはない。69の渦巻も主要モチーフは基隆帯である。71には、背竹管による押し引き及び刺突が見られる。77・78は台付鉢である。81は復原実測にやや無理があり、器形は定かでない。半隆起線によるクランク状の横帯区画である。上端には、隆起線に交互刺突を施すことによる鋸歯状文が見られる。内面上端には断面三角形に近い隆帯が2本巡っている。79～85のうち84は台付鉢又は浅鉢の破片と考えられるが他は深鉢と考えられる。86は大形の土器である。口縁部無文帶で4個の橋状突起が付される。頸部には断面三角形の隆帯による梢円区画文が巡り、またそこからY字状隆帯が垂下している。梢

円区画に沿っては連続の刺突が見られる。胸部は沈線による区画である。87は燃糸文を地文とする。88は突帯に指頭圧痕が巡る。89も突帯が巡る。90・91は小形の深鉢で口縁が「く」の字状に外反するものである。92は受け口状の口縁をもつ。93はかなり内傾するので口縁は三角形を呈している。95は頸部に幅広の無文帶を2列もつものである。胸部は、交互刺突文及び沈線束によるクランク状の文様である。口縁部は交互刺突による鋸歯文・櫛歯状沈線文等を見る事ができる。把手は4個付されていたと考えられる。96は橋状把手をもつ口縁部破片。97は口縁部に3本の横沈線が巡り、それ以下には綫方向に竹管文が垂下している。98は口縁端部が直立する深鉢土器破片。99は隆帯に沿って半截竹管文が走る。100は沈線による区画。101は2本の貼り付け隆帯による渦巻で、その間を無文帯としている。102は貼り付けによる隆帯とやや深い沈線である。104は羽状繩文に沈線による文様である。105~111は深鉢の破片である。112は円孔の穿たれた波状の突起である。114は椭円区画に沿って背竹管の押し引き文が巡る。115は椭円区画に斜行沈線及び細かい刺突が巡っている。いわゆる斜行沈線文系土器である。117~119・121は浅鉢の破片である。120は有孔鉤付きのような胸部の張る器形になると考えられる。

番 号	器 種	分類		出 處			規 格		地 文	色 調	胎 土	二次施成	遺 存	備 考	
		系 統	形 態	時 期	地 方	規 格	口徑 底径 高さ	厚 度							
8	鉢	2		II-①	鹿児島	1	(21.2) 8.4	(12.2) 11.0		内にぶい褐色 外浅黄緑	雲母少 やや密	内外部スス	1/3		
9	深鉢	?	C-b	?			20.6		R L	にぶい縦	やや密	口外スス流れ	1/6		
10	鉢	2		II-①	P I	17.2	7.2	14.0 11.0		浅黄模	雲母少 カコク岩片 やや粗	外丸れ、ロス メ内ロ中鋼 ナヨゲ	底部1/5 ロ脚2/3		
11	深鉢	?	J	?	(P-I上面)		7.2			にぶい赤褐色	雲母多量 やや粗	外一面スス 削下丸れ	5/6	底無鉢成後穿孔	
12	*	3	K-a	II	P I	10.5	6.3	14.2	L	縦	縦やや多い やや粗	内内密一層スス 削下赤褐色	3/4		
13	*	?	?	?	?		13.4			#	やや粗	内ナヨゲ	1/4		
14	*	?	?	?	?				埋れ?	にぶい縦	#	#			
15	*	?	?	?	?				浅黄	雲母少、密			1/12		
16	*	3	?	II	#				R L	浅黄	やや粗	内スス	1/10		
17	*	3	F-b	II-①	#				L R	縦	#		1/12		
18	浅鉢	3		?	P2上面付近		14.8		L R	〈外〉浅 〈内〉灰 黄	雲母多 やや粗	内スス?	2/3		
19	便鉢?	?	?	?	P I					#	やや密				
20	*	?	H-b	?	P2上面付近	21.9			L	にぶい黄縦	#	内スス	1/2		
21	浅鉢	1		II-①	#	29.4				にぶい縦	雲母少 やや密			1/10	
22	深鉢	3	F-b	#	#	29.2 27.1			L R	にぶい・黄縦	雲母少 やや粗	外オス 内ナヨゲ	1/8		
23	*	2	?	?	P 3					縦	やや密	内スス			
24	*	?	?	?	#				浅黄縦	密					
25	*	?	F-b	?	#					にぶい縦	やや密	内オヨゲ			
26	*	?	?	?	#				縦	やや粗		内外丸れ	?		
27	*	3	F-b?	II-①	#	31.1			L R	#	粘土塊多 やや密		1/8		
28	*	3	C-b	#	P 4	22.5 19.8			L R	にぶい縦	雲母やや多 やや粗	外スス 内オヨゲ	3/5		
29	*	3	#	#	#	29.8 24.8			L R	にぶい赤褐	やや密	外スス	3/5		
30	*	?	B-a		#	19.5			L R	浅黄縦	やや粗		1/8		
31	浅鉢	1		II-①	#	36.1			R L	縦	#		1/12		

番号	器種	分類		出土所	法量		地文	色調	胎土	二次施成	遺存	備考	
		系統	器形		口徑	底径							
32	深鉢	?	?	?	P 4	14.8	R L	赤褐色 透	黄灰色の粘土質 やや粗		底完全 網3/4		
33	洗鉢	?	?	?	s.	13.0		にぶい緑 透	緑多、粗				
34	深鉢	2	?	II	s.	15.6		(外) 棕褐色 (内) 褐褐色	粗	底スヌ	1/2		
35	?	?	?	?	s.	14.0	R L	棕	やや密	外一層スヌ 内オコゲ	1/6		
36	?	2	?	?	s.			にぶい緑	タ				
37	?	2	?	?	s.			(外) 深褐色 (内) にぶい緑	タ				
38	?	2	?	?	s.			透	透				
39	?	3	F-a	?	P 7	?		淡黄	やや粗		1/8		
40	浅鉢	?	?	?	P 4			透	粗		1/12		
41	深鉢	3	?	?	s.		L R ?	にぶい緑	やや粗	外オコゲ 内一層スヌ			
42	?	3	B-b	?	s.	?	R L	?	密				
43	?	3	?	?	s.		R L · L R	にぶい黄褐色	粗	内スヌ?			
44	?	?	D-c	II-①	P 5	29.7	R L	にぶい緑	雲母少 やや粗	外スヌ	1/3		
45	?	3	?	?	s.		R L · L R	透	タ	内オコゲ	1/6		
46	?	3	?	?	s.		L	にぶい褐色	やや粗	外スヌ	1/8		
47	?	?	B-a	?		30.5	L	淡黃褐色	やや密		1/18		
48	?	3	C-b	?	P 6	17.0	R L	淡褐色	タ	外スヌ 内オコゲ	1/6		
49	?	3	F-b	II-①	P 7	27.8	L R	透	やや粗	外スヌ	1/8		
50	?	3	?	?	P 6	?	R L	淡黄	やや密	外スヌ 内オコゲ			
51	鉢	2	?	II-①	P 7	22.2 18.7	8.5 12.2	17.5	透 やや粗	内外ロスス 口3/5	網9/10 洞内黒斑		
52	圓鉢	3	F-a	?	s.	30.7	L R	淡黃褐色	透多、粗	外スヌ+オコゲ	口1/2		
53	鉢	3	?	II	s.	16.5 15.5	6.2 9.0	19.5	L R	淡褐~淡黃褐色 やや密	雲母多 安山岩 やや密	一層無	
54	圓鉢	6	K-a	II-①	s.	13.75 8.3	7.7	19.5	R L	透	やや粗	外スヌ 内中~下スヌ	網1/2 底4/5
55	?	?	?	?	s.	6.1	L R	にぶい透	雲母少、粗	内オコゲ	1/1		
56	?	?	?	?	s.	14.0	L R	にぶい透	やや粗	タ	1/6		
57	?	6	?	?	P 8	6.6	L	透	透		1/4		
58	?	?	?	?	P 1	13.3	L R	?	やや密	外一層スヌ 内スヌ	網3/4 底1/6		
59	?	?	K?-a	?	P 7	?	L R	にぶい透	雲母やや多 やや粗	外スヌ	1/12		
60	?	2	?	?	P 8		?	にぶい黄褐色	雲母少、粗				
61	?	3	?	?	s.		?	淡黃褐色	やや密	内オコゲ?	1/8		
62	?	3	?	?	s.		L R	?	タ				
63	洗鉢	1	?	I	覆土		?	透	タ	外一層スヌ	?		
64	圓鉢	3	?	?	?		0段多孔R	にぶい黄褐色	透				
65	?	2	?	II	「12往」			?	やや粗				
66	路	2	?	II-②	P 1 覆土	37.0 11.0 32.0		にぶい透	タ				
67	?	2	?	II	覆土	12.2 6.6 12.0		淡黃	雲母少 やや粗	ロ~網スヌ	9/10		
68	圓鉢	2	D	?	s.	8.7		にぶい黄褐色	雲母少、粗	外一層スヌ 内オコゲ?	4/5		
69	?	2	?	?	s.			透	やや粗	内オコゲ			
70	?	2	?	?	s.		?	(内) 黄褐色 (外) 淡褐色	タ	雲母少 内スヌ		同一個体か。	
71	?	2	C-a?	?	s.		?	?	雲母少 やや粗				
72	?	2	?	?	s.			にぶい透	粗				
73	?	2	?	?	s.			透	やや粗	内スヌ			
74	鉢	6	?	?	s.			にぶい透	雲母少 やや密	タ?			
75	深鉢	3	?	-c	?	s.	R L	にぶい黄褐色	粗				
76	鉢	2	?	?	s.	19.0		透	タ	内オコゲ	1/6		
77	台形	2	?	II	s.			明黃褐色	やや粗	雲母少 外一層スヌ	1/6		
78	?	2	?	?	s.	14.8		(内) 黑(外) 棕褐色 (外) 淡褐色	粗		1/10		
79	深鉢	3	?	?	s.		L R	(内) 黑(外) 淡褐色 (外) 淡褐色	タ	外一層スヌ			

番 号	器 種	分類		出 土 地	法 量			地 文	色 調	胎 土	二次焼成	追 存	備 考	
		系 統	器形		時 期	口徑	底径							
80	環鉢	3	?	?	覆土			LR	にぶい黄焼	砂多、粗	外スス			
81	?	3	A-a	II-①		45.0		RL・LR	にぶい焼	やや粗	〃	1/12		
82	?	?	?					RL						
83	?	3	?	?	覆土	?		RL	にぶい焼	やや粗	外スス			
84	?	3	?	?	?			LR	〃	〃	〃	1/12		
85	?	3	?	?	?			地系R	焼	やや密	内外オコゲ			
86	?	3	I-b	II-①	P 8	39.5			LR	浅黄焼	雲母やや多 やや粗	外の下端に削 上とロスス、 内の胴の下 中オコゲ	口 3/5 胴 3/4	
87	?	?	A-a	II	P 5		15.4	地系R	焼	粗	内の中スス 外スス混れ	1/3		
88	?	3	?	?	覆土下層			LR	にぶい焼	やや密	外スス	1/5		
89	?	3	?	?	覆土			LR	〃	密	外一部スス	1/4		
90	?	?	B-a	?	?	14.2		LR	(内)にら、褐 (外)褐	黄色斑土粒 やや粗	外スス	1/6		
91	?	?	I?-a	?	?	9.2		RL	にぶい黄焼	黄灰赤色粘土 やや粗	1/6			
92	?	?	C-a	?	?	27.0		RL	明赤褐	砂多、やや密	内外スス	1/3		
93	?	?	?	?	?	26.2		RL	にぶい焼	やや密	内スス	1/12		
94	?	?	?	II-①	?	20.5		焼	雲母少 やや粗	内オコゲ	1/8			
95	?	3	C-a	?	覆土一層 P 1	31.3	-	LR	明黄褐～橙	やや粗	口・胴スス 外荒れ	9/10 内一部スス		
96	?	3	F-b	II	?	44.1		?	焼	〃	外スス	1/16		
97	?	3	F-a	II-①	?	31.0		RL	ケ	砂多、粗	内スス	1/16		
98	?	?	F-a	II	①一添	?		LR	にぶい褐	水晶少、砂多 やや粗	外オコゲ	?		
99	?	3	?	?	覆土			LR	焼	やや粗				
100	?	3	?	II	?			LR	浅黄焼	雲母少 やや粗	内オコゲ 外スス			
101	?	3	II	?	?			RL	にぶい黄焼	やや粗	外スス			
102	?	?	A?-a	?	?	?		?	にぶい焼	〃	〃	?		
103	?	3	?	?	?			RL	(内)淡黄 (外)にら、褐	雲母少 やや粗	〃			
104	?	3	?	?	?			RL・LR	にぶい黄焼	雲母や多 やや粗				
105	?	?	?	?	?	?		にぶい焼	やや密	外スス				
106	?	?	FG-a	?	?			焼	雲母多 やや密		1/16			
107	?	?	F?-a	?	?	?		?	にぶい黄焼	やや密	外スス			
108	?	4	?	?	?			?	暗灰黄	やや粗	〃			
109	?	3	F-b	?	?	22.6		?	灰黄	雲母少 やや粗		1/16		
110	?	?	?	?	?	20.4		?	焼	やや密	内オコゲ			
111	?	3	?	?	?			?	焼	やや密	外スス			
112	?	?	?	?	?			にぶい黄焼	やや粗	外突起スス	突起1 単位復存			
113	?	?	F?	?	?			?	淡黄～灰黄	雲母少 やや粗	内スス 外スス混れ			
114	?	?	?	?	?			RL	(外)褐 (内)にら、黄褐	赤褐色の熟 土層多、粗				
115	?	4	?	I-②	?			にぶい褐	やや密	外スス				
116	?	4	?	I	?			RL	にぶい焼	〃	内オコゲ 外スス			
117	?	3	?	II	?			RL	焼	雲母多 やや密				
118	?	?	?	?	?	40.0		?	ケ	〃				
119	?	?	?	?	?	12.0		LR	にぶい黄焼	雲母や多 やや粗	1/6			
120	?	4	?	I	?			?	暗赤褐	やや密	内オコゲ 外スス	1/10		
121	?	?	?	?	?			RL	内底黄焼	〃	外荒れ	補修孔		

4号住居跡(122~159)

当住居跡においては123~144が柱穴から、またその他が覆土から出土している。122は中期初頭に位置する土器で、細い竹管及び三角形陰刻が見られる。123は幅広の竹管文及び間隔の広い爪形文・格子目文の構成である。文様に鋭さを欠き、だれた感じを受ける。124は口唇部にキ

ザミ目を有し、口縁上端を無文帶として、そこから波状沈線が垂下している。125は隆帯による縦区画及び竹管文による平行線文及びキザミである。127は細い沈線の縦区画、128は隆帯及び沈線による縦方向の文様区画である。129は口縁が「く」の字状に外反する深鉢で7個の小突起が付されている。胴部はR Rの繩文で類例が少ない。130は小形の深鉢で然糸文地上に細い沈線が見られる。131・132・136・137・150は越後系の土器である。140は半截竹管文によるが、一段おきに爪形文が付される。爪形文は押し引き状でなく刺突状である。141は底部で、籠状圧痕が見られる。142は隆帯による梢円区画文と思われ、隆帯は繩状のネジレを表わしたものがある。下部は半隆起線文、上部は押し引き文である。143は底部近くの土器である。地文はなく縦の隆帯が1本見られる。144は波状口縁で、口縁に沿って交互刺突による鋸歯文が見られる。145は爪形文、146は「く」の字状に外反する頸部で刺突が巡っている。147は幅広の半隆起線で細い格子目文が見られる。148は縦区画の半隆起線の間を細い横沈線が充填している。149は断面三角形に近い突帯を有するもので、突帯の上端には幅の異なる背竹管文が2本巡っている。151は繩文施文後、半隆起線による逆U字状の文様区画を行っている。152は台付鉢の口縁部破片である。153は隆帯による三角形状区画に沿って角押文(背竹管)が巡っている。154は縦文地上に縦の貼り付け隆帯である。155はやや深い沈線である。156は半截竹管による文様で口縁部は間隔のある爪形文である。157は頸部から外方に直線上に開く深鉢である。羽状繩文(R L・L R)施文後沈線による文様区画である。158・159は折り返し口縁の深鉢である。

番 号	器 種	分 類		印 記 點	法 量		地 文	色 調	胎 土	二 次 燒 成	道 存	備 考
		系 統	器形		時 期	口徑	底径	高				
122	深鉢	4	?	?	P 2				赤褐色	片岩、やや密		
123	"	1	C-D-a	I-②	"	33.7			にぶい黄緑	やや粗		1/8
124	"	3	F-a	II	P 2 上	19.3			LR	暗赤褐色	やや密	外スス少 1/6
125	"	?	?	I	"				(内)灰褐色 (外)にぶい緑	片岩片 やや密	外スス	ヨリのきついもの とあいまいもの の日わせヨリ
126	"	2	?	II	"				縫	やや粗		
127	"	1	?	?	"	(31.0)			LR	にぶい緑	やや密	
128	"	3	?	?	"				LR	(内)灰褐色 (外)にぶい緑	本品片岩片 か、やや粗	外スス
129	"	?	C? - b	?	P 5	25.4 24.0			RR	浅黄緑	やや粗	"
130	"	3	Bb-C?	?	"	5.8			然糸R	にぶい緑	"	底1/4 胴1/12
131	"	2	?	II	P 5 上	?			縫	繊多 粗	"	136 137) 同一部体
132	"	2	?	"	"				"	繊多 やや粗	内オコゲ	
133	"	3	?	?	"				LR	にぶい黄緑	やや粗	内スス
134	"	3	F?	?	"				LR	浅黄緑	繊多、粗	
135	?	?	?	?	"				"	黄白色 粘土塊、やや密		3/4
136	深鉢	2	D?	II	"				(内)にぶい緑 (外)粗	繊多 粗	内スス 外荒れ	1/5
137	"	2	?	"	"				縫	粗	"	1/10
												131 同一部体

番 号	分 類	出 土 点			共 量			地 文	色 調	胎 土	二次焼成	遺 存	備 考
		系 統	形 態	時 期	口徑	底径	器高						
138	深鉢	?	?	?	P6上			LR	にぶい縁	やや密			
139	?	?	?	?	〃			燃系段?	縁	〃			
140	?	?	?	?	〃			?	(内)にぶい縁 (外)にぶい褐色	黄白灰の粘 土塊、やや密	外スス	1/16	
141	?	?	?	?	〃		12.4	?	にぶい縁	繊多、チャ ト有、無	内オコゲ	底4/5 胴1/12	
142	?	4	G	I	P7				にぶい縁	やや粗	外スス?		
143	?	?	?	P2上	GLB				にぶい縁	雲母少、粗	内スス	1/6	
144	?	?	?-c	P6上	?			?	透板	やや密			
145	?	1	?	?	覆土?			?	にぶい縁	やや粗			
146	?	?	?	?	覆土?			?	残痕	〃			
147	?	1	C-a?	I	〃	?		?	灰黄	黄白粘土塊 やや密	外一部スス		
148	?	1	?	〃				?	にぶい黃斑	やや密	内オコゲ		
149	?	5	?	I	覆土			?	縫	水晶・片岩片 やや粗			
150	深鉢	2	?	?	覆土?			?	縫	やや粗			
151	?	?	?	?	〃			LR	縫	雲母わずか やや密	外スス		
152	刮削	2	?	II	〃	(底)			明赤褐	縫	外スス?	1/14	
153	深鉢	5	C-b?	I	〃			RL	にぶい赤褐	雲母少 やや密	外スス	1/12	
154	?	3	?	〃				LR	縫	繊非常に多 強めて縫	内スス		
155	?	3	F-a?	?	〃	?		LR	?	やや密			
156	?	?	C-a?	?	〃	?		LR	にぶい縫	〃	外スス		
157	?	3	F?	I	〃			RL	にぶい黃斑	やや粗		1/12	
158	?	3	A-a	?	〃			LR?	灰白色	黄白粘土塊 やや粗		1/12	
159	?	3	A-a	?	〃			LR	にぶい縫	やや密	外一部スス	1/12	

5号住居跡(160~166)

5号住居跡からの出土物は非常に少ない。160~164が柱穴出土で165~166は覆土出土である。162は頸部から口縁にかけて直線状に開き、口縁で内側に内折するものである。大きな袋状把手が4個付されると考えられる。文様は主要モチーフを基隆帯で描き、他は半隆起線文である。頸部は無文帯とし、口縁部は連弧状の文様となる。袋状突起は動物を表わしているものと考えられる。胴部はY字状のモチーフを主体として、その間を渦巻文・三叉文等で充填している。161は162と同様の文様構成をもつてることから同一個体の可能性が強い。基隆帯による逆U字状文様の内側の刺突は半截竹管によるものである。160は「く」の字状に外反する口縁をもつ深鉢で口唇部には浅い沈線が走り、また外面には指頭圧痕が連続する。163は細い半截竹管により文様を描いている。口縁部は縱方向、その下は横方向である。164は半隆起線文の間を細い矢羽根状沈線により充填している。165は文様構成等明確でないが隆帶に沿ってキザミが見られる。166は浅鉢と思われる。細く深めの沈線による平行線、三叉文が見られる。

番 号	分 類	出 土 点			共 量			地 文	色 調	胎 土	二次焼成	遺 存	備 考
		系 統	形 態	時 期	口徑	底径	器高						
160	深鉢	?	B-a?	?	覆土	18.0		L	にぶい縫	雲母少、裏灰 色の粘土塊 やや密	内一部スス 外スス	1/12	
161	?	2	F?	II	P7				縫	やや粗	内一部スス		
162	?	2	F?	?	?	27.8 (20.9) (15.0)		?	?	〃	内一部・縫 外スス	せて1/4	同一個体
163	?	1	?	II-(?)	?			?	にぶい縫	やや密	内オコゲ	1/2	
164	深鉢	1	?	?	P8			?	にぶい灰斑	〃	内スス		
165	?	?	?	?	覆土			?	(内)にぶい縫 (外)浅黄斑	やや粗	外スス		
166	浅鉢	1	?	II	〃			?	にぶい赤褐	雲母少、重			

6号住居跡(167~186)

6号住居跡も遺物はそれほど多く出土していない。167~172が柱穴より出土で、他は覆土よりの出土である。167はほぼ直立するが口縁が少し外反する深鉢で、4個の突起が付される。半隆起線文及び爪形文である。胴部には4単位に半隆起線文が垂下するが、胴中央部で切れ、下半には及ばない。169は浅鉢と考えられるが明確でない。沈線による縱方向の押し引きが見られる。170は深鉢の胴部破片で背竹管による沈線で文様を描いている。172は半隆起線による横方向の平行線文である。173は小形の深鉢で沈線により文様を描いている。口縁部は無文とし、その下に沈線を2本、また頸部にも2本を巡らし、その間に弧線文を連続させている。174は口縁部がやや外反する。背竹管による沈線である。175は縄文施文の後沈線により文様を描いている。176は貼り付け隆帯の上から指頭圧痕を連続させている。177は波状に隆帯を貼り付け、それに沿って下端から刺突を加えている。口縁部には縱方向の細い沈線が連続している。下部には縄文(LR)が施される。178はキャリバー状の口縁部破片である。隆帯による区画内を短い沈線により充填している。179は厚手の大形土器である。太い隆帯上には圧痕が連続する。180は浅鉢と考えられる。181は無文の深鉢。182~185は越後系土器の深鉢で、182はいわゆる王冠型土器である。

番 号	形 種	分類		出 土 地 点	法 量		地 文	色 調	胎 土	二次焼成	遺 存	備 考
		系 統	器形		時 期	P 25						
167	深鉢	1	H-b	I-②	P 25	26.2 25.0		LR 黄透	雲母少 やや粗	内一部スヌ 外スヌ	1/4	
168	#	?	?	?	P 2		?	#	やや粗	外スヌ		
169	#	?	?	?	#		?	明黄透	やや密			
170	#	3	?	II	P 16		LR 黒褐	雲母わずか やや粗	内外スヌ?			
171	#	2	?	#	P 23			にぶい模	やや密	外スヌ		
172	#	1	?	I	#		?	#	#	#		
173	#	3	C	II	覆土	13.0	燃魚L 模	透	内ロスヌ 外スヌ	1/8		
174	#	3	C-D-a	?	#	36.5	RL 黄模	やや密		1/16		
175	#	3	?	?	#		RL にぶい模	雲母わずか やや粗				
176	#	3	?	?	#	?	?	にぶい模	雲母少 やや密	外スヌ?	?	
177	#	3	?	?	#	12.9	LR にぶい黄模	透	外スヌ	1/8		
178	#	3	F-a?	?	#		RL 明褐	雲母少達多,粗	#	1/5		
179	#	?	?	?	#		?	灰褐	やや粗	#	1/13	
180	浅鉢	?	?	?	?	?	?	黄模	雲母少 やや密			
181	深鉢	?	?	?	#	?		模	#			
182	#	2	D-c	II	#	?		残黄模	雲母少 やや粗			
183	#	2	C-dD	#	#			模	粗	内スヌ		
184	#	2	?	?	#			#	黄白色の粘 土塊			
185	#	2	?	?	#			#	やや粗	内スヌ		
186	#	2	C-dD?	II	#			黄模	雲母少 やや密	#		

7号住居跡（187～190）

7号住居跡では187が北隅に埋甕として使われていた他、188が柱穴から、また189が床面から、190が覆土より出土を見ている。187は胴上半を欠損する。罫文を施文の後3本の半隆起線によりクランク状の文様を施文している。188は透し彫り様の大形把手である。眼鏡状の透しと、それに沿って有節沈線が巡っている。また中央には渦巻文が施文される。189は口縁部破片で口縁部は火焰型土器と同じような鋸齒状となる部分がある。また橋状把手及び貼り付け隆帯による鉗齒状の山形文が連続している。190は波状口縁の口縁部破片で半截竹管で施文した後沈線部分をなぞっている。頸部には基隆帯が巡っている。頸部には基隆帯が巡っている。

番 号	器 種	分類		出 土 場	法 量			地 文	色 調	胎 土	二次焼成	遺 存	備 考
		系 統	形 態		口徑	底径	高 度						
187	深鉢	3	?	II	埋甕		10.7	RL	穂	雲母少、粗 やや密	内側下ヌメ 外荒れヌメ	9/10	
188	*	2	?-b	*	P 16			?	明褐色	雲母多 やや密	一部ヌメ	突起は は完全	
189	*	2	C-b?	*	床直		31.5		穂	やや密	円ヌメ	1/2	
190	*	?	D-c?	*	腹土		30.9		にぶい穂	黄褐色の粘 土塊、粗	外ヌメ	1/8	

8号住居跡（191～204）

いずれもピット13からの出土である。191は有段の折り返し口縁をもつ6単位の波状口縁の土器である。192はA地区1500と同一個体である。口縁部はやや内傾しながら外方に開く。半隆起線文と爪形文とを交互に用いている。爪形文の間隔は短い。195は191同様折り返し口縁である。197は貼り付け隆帯による波状文が垂下する。頸部には波状の沈線が巡っている。198は王冠状の把手で沈線及び爪形文が見られる。204は浅鉢である。細く深い沈線及び三角形状の陰刻が見られる。

番 号	器 種	分類		出 土 場	法 量			地 文	色 調	胎 土	二次焼成	遺 存	備 考	
		系 統	形 態		口徑	底径	高 度							
191	深鉢	1	A-b	I	P 13	21.4		LR	褐色	穂多、やや粗	内ヌメ 外ロヌメ	1/5		
192	*	1	C-a	I-(D)	*	17.9		L	赤褐色	密	外ヌメ	1/8		
193	*	?	?	*		8.6		LR	にぶい穂	やや粗	ヌメ	複数		
194	*	?	?	?	*				褐色	密	内ヌメ			
195	*	3	A-a?	?	*	?		LR	にぶい、黄褐色	土塊、やや密	ヌメ	1/16		
196	*	?	?	?	*			RL	にぶい穂	粗	ヌメ	1/3		
197	*	3	?	?	*			RL	穂	水品わざか やや密	内ヌメ 外荒れヌメ	1/4		
198	*	?	?-c	?	*	?		?	にぶい穂	やや粗	外一側ヌメ			
199	*	3	?	?	*			RL・LR	にぶい、黃褐色	密				
200	*	3	?	?	*			LR	明褐色	やや密	外ヌメ			
201	*	3	?	?	*			RL	にぶい穂	やや粗				
202	*	?	?	?	*			抛光?	にぶい、黃褐色	やや密				
203	*	?	?	?	*		14.0		穂	ヌメ	内ヌメ	底1/4	底無正面からは 東北系か	
204	浅鉢	1	/	II	*	32.4		?	にぶい穂	雲母少 やや密	一部ヌメ	1/16		

9号住居跡 (205~227)

当住居跡は比較的しっかりした柱穴をもつもので焼土及び埋設土器を伴っている。205は埋設土器である。いわゆる王冠型土器で把手部及び胴部の破片である。底部を欠損する。把手は左向きに抉りをもつ典型的なものである。胴部も主要モチーフを基盤帶で描いており、4単位構成をとる。頭部の橋状把手は小さい。沈線部は背竹管状の工具でなぞられている。左斜方向の渦巻及び逆U字状のモチーフが主要のものである。底部に木葉痕がある。208~211は1号焼土からの出土である。208は王冠型土器で左に抉りを有する。212は2号焼土からの出土で、208と同一個体と考えられる。以上の208・212は205と同一個体の可能性もある。206は床面からの出土で、火焔又は王冠型土器の胴下半部である。207~213~227は柱穴からの出土である。207・216~225・226は越後系の土器の破片である。220はキャリバー状の口縁をもつもので深い沈線と指頭圧痕が見られる。219は小形深鉢で、2本の半隆起線によるクランク状の文様である。218は円孔があり、器台の可能性がある。223は浅鉢と考えられる。貼り付け縁帯による文様で、口縁部は緩やかな波状文である。213は大形の浅鉢で半隆起線による文様で胴部では無文となる。227も浅鉢で背竹管による文様である。224は底部破片で縫状圧痕が見られ、それをかき消した擦痕がある。

番 号	分 類	系 統	器 形	時 期	出 土 場 所	形 量	地 文	色 調	胎 土	二次燒度	遺 存	備 考
205	深鉢	2	D-c	II-③	埋設	CLD CLD CLG		灰褐色～にぶい緑	胎母少 やや密	頂部一部ス ス一部欠れ	附4/5 重複— 208・212と同一 個体か	
206	?	2	D?	II	床面	0.9		緑	緑多 やや粗		2/3	
207	?	2	D?	?	P6	0.9		にぶい緑	“		1/6	
208	?	2	D-c	II-③	鉢	?		灰褐色	やや粗			205・212と同一 個体か
209	?	2	?	?	?			にぶい黄緑	やや密			
210	?	2	?	?	?			グ	“			
211	台形鉢	2	/	?	?			緑	緑非常に多 く密めて粗	外荒れ	1/16	
212	?	2	D-c	II	?	?		灰褐色	やや粗			205・208と同一 個体か
213	浅鉢	LB-Q	/	II-③	P1	38.7		にぶい緑	やや密	外一部スス	1/10	
214	深鉢	?	?	?	?	9.2	RL	グ	“		1/6	
215	?	2	?	?	P2		?	(内)黄褐色 (外)緑	やや粗			
216	深鉢	2	?	II	P1			にぶい緑	やや粗			
217	?	3	?	?	P2	5.4	RL	緑	やや粗	外上スス	9/10	
218	?	2	?	?	P1			グ	やや密			器台か
219	深鉢	3	?	II	P2	5.6	LR	にぶい緑	“	外スス	底4/5	
220	?	3	F-a?	?	?	?	RL	黃褐色の點 土壤、やや密	?		1/16	
221	?	?	?-b	?	?	?	?	(内)黄褐色 (外)にぶい緑	緑多 やや粗	口内外スス		
222	?	?	?	?	?	?	?	緑	緑非常に多 く密		1/16	
223	鉢	3	/	II	P6	17.2	LR	にぶい緑	緑多 粗	口内外スス	1/3	
224	深鉢	?	?	?	P5	01.0		(内)黄褐色 (外)にぶい緑	黄褐色の點 土壤、やや密		9/10	
225	?	2	Cg-D	II	P6			にぶい緑	緑多 く密めて粗			
226	?	2	Cg-D	?	?			グ	粗			
227	浅鉢	1	/	?	?			?	グ	やや密		

11号住居跡 (228~246)

11号住居跡出土の土器は、小破片のみである。柱穴からは228~230が、他は覆土からの出土である。228は4単位波状の口縁部破片である。口縁に沿って縄文の側面圧痕文が巡り、また波頂部からは同じ側面圧痕文が垂下する。38号住居跡646と同一個体である。229は3本の半隆起線の上に細い鋸歯状の沈線が走る。覆土出土の土器では233・245が中部高地系の土器と考えられる。233は沈線部にキザミを入れている。242は波状の突起部分と考えられる。234は基隆帯の間に三叉文が見られる。246は膨らみのある胴部破片で、上方に鋸歯状の沈線があり、また背竹管による刺突を縦に配している。

番 号	器 種	分 類		出 発 地	法 量	地 文	色 調	胎 土	二 次 燒 成	遺 存	備 考
		系 統	器 形								
228	深鉢 折衷	2・3	D-c	I-②	P 13		LR	淡黄	粗		646と同一個体
229	*	3	?	?	P 19		LR	橙	黄灰色粘土 或 やや粗	外スス	1/16
230	*	?	?	?	P 16				(内) 橙 (外) 淡黄褐色	很多 粗	
231	*	?	?	?	覆土	8.0	RL	灰褐	木口わづか やや粗	内オコゲ	1/8
232	*	1	F?	I-②	*		?	浅黄棕	やや密		
233	*	4±5	?	I	*	?	?	橙	やや粗		
234	*	?	F-b	?	*			にぶい橙	*	内外スス	1/16
235	*	2	?	II	*			にぶい黄褐	*		
236	*	1	?	I	*		?	浅黄褐	やや密		
237	*	?	?	?	*		燃余L	にぶい黄褐	やや粗	内スス	
238	*	?	?	?	*		燃余R	淡黄	やや密		
239	*	2	F	?	*			灰褐	粗		
240	*	?	F-a	?	*		LR	(内) にぶい橙 (外) にぶい褐	青母わづか やや粗		
241	浅鉢	1	?	II	*		?	橙	やや密	外スス	1/10
242	?	?	?	?	*		LR	(内) にぶい黄褐 (外) にぶい褐	やや粗	*	
243	深鉢	2	C±D	?	*			浅黄褐	青母少 粗	内オコゲ	
244	*	2	?	II	*			橙	やや粗		
245	*	?	?	?	*	?		にぶい赤褐	*	内外スス	
246	*	3	?	?	*		RL	にぶい橙	粗	内オコゲ	

13号住居跡 (247~275)

当住居跡は方形の柱列のため掘り込みは分らない。247は住居跡南隅にあった埋甕である。越後系土器の胴部破片である。主要モチーフは基隆帶によるがあまり極端ではない。胴部はきちんととした4単位構成をとっている。垂下する渦巻は左斜方向からである。下半部は赤化が著しく非常に荒れている。248~258が焼土からの出土である。249は爪形文、250・256は背竹管の押し引き、255は沈線部にキザミをそれぞれ付している。254にも背竹管の押し引きが見られる。259~275が柱穴出土の土器である。259と267は同一個体で、柱穴3と6から別々に出土している。260は深鉢の口縁部破片である。半隆起線による文様で上部には爪形文、下部には細い縫方向のキザミが付されている。口縁部及び下半は無文である。261は胴部の破片である。上端は接合部できれいに割れている。2本の沈線で4単位に区画している。265は八の字状に開く小形

の深鉢である。口縁部には幅広の爪形文が一周し、その下には5本の半隆起線文が一周している。上半部に炭化物の付着が著しい。266は口縁部に沿って縄文の側面圧痕が2条巡っている。268は小形の深鉢である。縄文(LR)を施文の後、貼り付け隆帯を小波状に口縁に沿って一周させ、その下に同じく貼り付けで連弧文を配している。また頸部及び連弧文に沿って縄文の側面圧痕が見られる。口縁部には小突起が付される。269も小形の深鉢である。口縁部は受け口状となり円孔の穿たれた小突起が付され、口縁に沿って2本の沈線が巡っている。271は爪形文と半隆起線文を交互に施文しているが爪形文は押し引きに近い。273は信州系の土器と考えられる。

番 号	器 種	分類		出 現 地 点	法 盤		地 文	色 調	胎 土	二次焼成	遺 存	備 考	
		系 統	器 形		口径	底径							
247	深鉢	2	D	II-②	1-15 土坑 34	12.6	/	橙	穢多 やや粗	内スス?	剥9/10 口1/8		
248	*	?	?	?	陶土1	15.9	LR	*	やや密	内側下オロ ゲ	剥4/5 剥1/2		
249	*	1	?	I	印		?	浅黄模	*				
250	*	1	?-c	?	陶土1		RL	灰黄模	*	外スス			
251	*	1	?	?	*		?	にぶい・黄模	*	内オロゲ 外スス			
252	*	?	?	?	*		?	*	穢多・雲母少 粗	外スス			
253	*	?	?	?	*		?	*	やや粗				
254	*	?	?-c	?	*		RL?	橙	赤灰色の粘 土壤 やや密	外スス			
255	*	4	G?	I	*		/	にぶい・褐	雲母少 やや密	内外スス	1/8		
256	*	?	?-c	?	印		RL	にぶい・淡	やや密	内スス	1/10		
257	*	?	?	?	陶土1		LR	にぶい・褐	穢多 やや粗	*			
258	*	?	?	?	*		然系L	にぶい・黄模	密	外スス			
259	*	?	?	P3		8.0	LR	橙	黄灰色の粘 土壤 やや密	内スス?	1/5	267と同一個体	
260	*	1	E-a	I-②	*	22.5		?	にぶい・橙	黄灰色の粘 土壤多・水品 やや多 やや粗	外屈スス	1/3	
261	*	3	?	I	P4	00.0	LR	橙	雲母少 やや密	内下オロゲ 外・薄スス	1/2		
262	*	2	C+a-D	?	*	9.0	/	*	穢多・雲母 少・粗	内スス 外屈れ	9/10		
263	*	?	?	?	*		RL	にぶい・黄模	雲母少 やや密				
264	*	?	?	?	*		?	にぶい・橙	やや粗	外スス	1/8		
265	*	1	A-a	I-②	P6	16.8 6.5	7.0 14.9	RL	淡黄	*	内上オロゲ	1/2	
266	*	3	C-a	?	*	?	RL	橙	黄灰色の粘 土壤 やや密	外スス			
267	*	?	?	?	*		?	*	*		259と同一個体		
268	*	3	A-b	I-②	P7	17.5	LR	*	雲母・水晶わ ずか やや粗	内上スス 内下オロゲ 外スス	1/3		
269	*	3	B'-b	?	*	(11.5 (11.0)	RL	にぶい・橙	穢・雲母多 筋片苔? やや粗	外スス 内オロゲ 外下丸れ	9/10		
270	*	?	?-c	?	*		?	浅黄模	密	内外スス			
271	*	1	?-c	I	*		?	灰褐	やや粗	外スス			
272	*	1	?	?	*		?	(内)にぶい・黄模 (外)にぶい・橙	*				
273	*	?	?	?	*		?	橙	雲母わづか やや密	内スス			
274	*	?	?	?	*	5.0	RL	にぶい・橙	やや粗	内オロゲ	1/1		
275	浅鉢	1a-3	?	?	?	BS?	?	橙	やや密				

14号住居跡 (276~295)

当住居跡においても土器の出土量はあまり多くなく、276~283が戸からの出土である。276は越後系土器の胴部破片である。主要モチーフは基隆帯によっており、渦巻にはキザミが付される。281も同一個体の可能性があるが隆帯にキザミは付されていない。277は幅広の爪形文である。285は突起部が鋸歯状の口縁となるものである。291は口縁破片である。口縁部は小突起状となり、そこにX字状の貼り付け隆帯が見られる。またその下の陸帯には指頭圧痕が付される。292は越後系の口縁部破片で袋状突起が見られる。294は4単位の小突起の付される深鉢で地文は無節のしである。295は中部高地系又は関東系の土器と考えられる。沈線部に押し引き刺突が見られる。

番号	器種	分類			出土地点	法量			地文	色調	胎土	二次焼成	遺存	備考	
		系統	器形	時期		口径	底径	高さ							
276	深鉢	2	D?	II	手				縫	青白少 やや粗	内スス 外一部スス	1/5			
277	"	1	?-c	I	"				?	淡黄色	黄灰色の粘 土壤 やや密				
278	"	2	?	II	"				淡黃模	やや粗	内スス				
279	"	2	?	?	"				?	グ	グ				
280	"	3	?	?	"				LR	にぶい黄模	外一部スス				
281	"	2	Ca-D	II	"				にぶい模	やや密	内スス	1/4			
282	"	?	?	?	"				LR・RL	粗	やや粗	外一部スス	1/10		
283	"	?	?	?	"				撲	ア	粗				
284	"	?	?	?	P 2				LR	"	やや粗				
285	"	3	F-b?	?	P 4	(11.6 (11.0)			LR	明黄模	グ	口上スス 内スス	1/6		
286	"	3	F-b?	?	"				?	にぶい模	粗	外スス	1/12		
287	"	?	?	?	P 7				LR	黄灰色の粘 土壤 やや粗					
288	"	2	D-c?	?	P 14				縫	やや粗	外スス				
289	"	?	?	?	P 7				撲	にぶい黄模	やや密	内スス	1/6		
290	"	?	?	?	"				本日既出未 (内)にぶい模 (外)にぶい模	やや粗	外スス				
291	"	3	F-b	II-①	P 14	24.9			LR	にぶい模	薄赤紫に多 く並んで粗	グ	1/10		
292	"	2	D-c?	II	厚土	26.0			縫	やや密	内スス	1/4			
293	"	2	Ca-D	"	"	10.4			淡黃模	やや粗		1/6			
294	"	?	A-b	?	"	26.2			L	グ	褐色の粘土 塊多 やや密	外葉れ 一部スス	2/3	被移孔	
295	"	4b-5	?-b	I	"				?	縫	青白少 やや粗	外スス			

15号住居跡 (296)

15号住居跡で明確に遺構に伴うと判断される土器はほとんどなく、図示したものは296のみである。深鉢の胴部破片で頸部に3本の隆帯が巡り、そこから断面三角形の隆帯が垂下する。

番号	器種	分類			出土地点	法量			地文	色調	胎土	二次焼成	遺存	備考
		系統	器形	時期		口径	底径	高さ						
296	深鉢	3	?	?	P 24				LR	(内)にぶい 光色 (外)模	やや粗	内外スス	1/6	

16号住居跡（297～415）

当住居跡では多くの土器が出土しているが、そのほとんどは覆土からの出土である。297～303までが柱穴からの出土である。297は無文の浅鉢で口縁部が肥厚している。300も同じく浅鉢と考えられる。半截竹管文及び爪形文の文様である。内面には玉抱き三叉文が見られる。301は深鉢口縁部破片で沈線による文様である。304以下は覆土からの出土である。304はいわゆる王冠型土器である。突起部は小さく、抉りを有する王冠型土器とは大きく異なる。主要モチーフは基隆帯によっている。胴下半部は逆U字状の文様構成であるが無文部を多く残している。頸部には橋状の把手が付されるが、それを無文帶がつないでいる。底部は網代底である。305も波状4単位の深鉢である。波頂部は三角状に尖る。剥落がかなり見られ全体を窺いることはできない。主要モチーフは基隆帯であるが無文部を多く残している。頸部は半隆起線文が3条巡り、そこから綫に7単位に区画される。胴部はLである。306は深鉢の口縁部破片である。上半は交互の三角形状陰刻を施している。下部は沈線による三角区画である。307も波状4単位の深鉢である。主要モチーフは基隆帯による溝巻である。308は緩やかな波状口縁である。口縁部に沿って沈線及び波状文が配される。311も308と同様の構成をとるが波状部は大きい。309は無文である。310は口縁突起部を欠損するが、おそらく圓のようになるとされる。頸部の2本沈線によって口縁部と胴部が区切られる。文様はいずれも背竹管状の工具で部分的に押し引き状の文様がみられる。312は半隆起線による鋸歯状文や三叉文等が見られる。313は口縁部無文帯で頸部は直線文と波状文である。315は貼り付け隆帯による直線文と交互刺突の波状文が繰り返されている。314と316は同様の文様構成をとる。314は口縁部に沿って櫛歯状の短沈線を連続させている。口縁屈曲部には指頭圧痕が連続している。316も同様であるが櫛歯状の沈線は細くこまかい。また横S字になるとされる突起が付されている。317は口縁部を無文帯とし、その下に2本の縄文側面圧痕が2列まわる。318は小形の深鉢である。口縁部に沿って4本の深い沈線がまわるが、上の沈線には先の尖った工具による刺突が連続している。胴部羽状縄文である。319も小形の深鉢である。頸部に文様帶の区切りがなく、口縁部から斜めに垂下する溝巻と胴部には逆U字状のモチーフをとる。主要モチーフは基隆帯によりており、矢羽根状の細いキザミが付される。その他に玉抱き三叉文や三叉文、円形に近い刺突等がモチーフとして用いられる。北陸系の土器である。320は口縁部破片である。頸部には隆帯が1本巡り、隆带上には間隔のあいた爪形文が配される。口縁部も同じく隆帯により山形の文様が連続するものと考えられ、同じく爪形文が付される。321は小形の深鉢である。深い沈線が巡っている。322は小形の鉢である。口縁部には貼り付けによる把手が付され、また314と同様の文様モチーフとなる。内外面共に赤色塗彩されている。内面には突ついたような剥落が見られる。323は大きく内傾する口縁破片である。外面は縄文である。324は前述の314・316と同様の器形である。橋状把手が4個付される。口縁部には背竹管による沈線が3本巡る。またその下には隆帯が巡っており、そ

こに爪形文が配される。それ以下には背竹管による2本の沈線によりクランク様の文様を付している。胴部は地文に羽状縞文を用いている。

325は胴部のみで半截竹管による平行線文が見られる。326は縞文を施文後、太い2本の沈線によって文様を描いている。327は胴部にやや膨らみをもつ深鉢である。このように胴部に緩い膨らみをもつ深鉢は、県内ではあまり見られず、会津方面の器形である。口縁部に比べて胴部の比率の大きい土器である。胴部は背竹管による太い沈線でクランク状又は渦巻（末端部はまわらない）文が配される。口縁部は下半部が貼り付け隆帯による渦巻文様で、その隆帯に沿って背竹管文の押し引きが見られる。口縁部上半の細い連続刺突は半截竹管の爪形文の端部によるものである。口縁部上端には竹管工具による刺突が巡っている。把手は2個一対に付されている。328は口縁部破片で貼り付けによる太い隆帯が巡っている。329は胴部が膨らみ口縁部は「く」の字状に外反する。頸部には断面三角形の太い隆帯が巡っており、そこに指頭による圧痕が付されている。その下には幅広の沈線及び波状文が巡る。330は口縁部破片である。太い隆帯による楕円区画である。その中を沈線と交互刺突による波状文が充填される。沈線部には尖った工具による刺突が見られる。331は大形の深鉢である。楕円区画文及び橋状把手が見られる。楕円区画文の中は幅広の背竹管による連続刺突である。この楕円区画の上は無文帶とし、両端に沿って先の尖った三角形状の刺突が連続している。332は小形の深鉢である。沈線による文様で頸部には波状文が巡る。333は大形の深鉢である。口縁部の把手部を欠損する。頸部には隆帯及び交互刺突による波状文が巡る。胴部は2本1組の貼り付け隆帯によるクランク及び渦巻きを組み合せた文様である。口縁部は藤手状の文様である。上部には交互刺突による隆帯が巡る。334は深鉢の胴部破片である。2本の半截竹管によるクランク状の文様である。335は小突起をもつ深鉢である。336は口縁部が「く」の字状に外反する。頸部に沈線及び波状文が巡る。337は胴部に膨らみをもち口縁の外反する深鉢である。全体の文様を窺い知ることはできないが、やや深めの沈線で楕円形の区画文を描いている。338は表面の荒れがひどい。縞文地上はやや太めの沈線により三叉状の陰刻等を入れている。胴部も綫長の区画を基本としている。339は浅鉢である。底部には磨耗が見られる。無文で内面には朱が施されている。340は大形で深みのある浅鉢である。口縁に沿って太い2本の沈線が走り、小突起が4個見られる。地文は縞文(LR)である。341も浅鉢である。外面は縞文のみで口唇部に沈線及び玉抱き三叉文が見られる。内面に荒れが目立つ。342は「く」の字状に内傾する浅鉢である。半隆起線文及び爪形文・三叉文の陰刻が見られる。344は台付鉢である。346は胴下半部で沈線による区画内に細い沈線で矢羽根状文等を充填している。349は越後系の底部で網代底である。351~358は底部に敷物の圧痕を有するものである。351~358は數本を一組として組んでいる。355は木葉痕である。359はヘラ状工具による刺突、360は斜格子目文であるが、1本1本引かれている。361は波状口縁の波頂部である。半隆起線及び爪形文である。内面には5本の半截竹管文が見られる。362は深鉢の口

縁部破片である。爪形文及び三角形陰刻による鋸齒状文が巡る。363・364は口縁部破片である。口唇部に沿って背竹管の爪形が巡っている。また内面にも突帯が巡る。365は半隆起線文が縦に走りそれに沿ってキザミが施される。366は頸部破片である。頸部には爪形文が一周し、口縁部には格子目文が見られる。367は細い沈線による矢羽根状の文様である。368・372は同一個体である。頸部から口縁部にかけての破片で、頸部には爪形文が巡る。上半に見えるキザミは半截竹管文によるものである。369は断面三角形の隆帯による梢円区画内に鋸齒状の沈線が充填される。370は小形の深鉢の胴部破片である。半截竹管及び爪形文が見られるが、だれた感じを受ける。371は沈線による半月状区画の中に先の尖った工具による刺突が入る。373は波状口縁の波頂部である。主要モチーフは基隆帯による渦巻である。沈線内には部分的に先の尖った棒状工具による突き刺しが見られる。374は深鉢の口縁部破片である。半隆起線による梢円区画内に爪形文が入る。円錐形の突起も見られる。口縁からは棒状の隆帯が垂下する。375は指頭による連続の押えが見られる。376は沈線内に連続の刺突及び三叉状の陰刻が見られる。377は隆帯による渦巻文である。378は半截竹管文の沈線部を棒状工具によりなぞっている。381は口縁部破片である。口縁部を巡る沈線には連続の刺突が施される。383は波状口縁の頂部で、口縁に沿った突帯にはキザミが付される。384・385も波状口縁の土器であるが、384は突起状である。いずれも半隆起線で文様を描いている。386は鉢又は浅鉢の口縁部破片である。387は外反する口縁部破片で羽状織文(LR+RL)が施される。388は2個一対の突起が付され、口縁部は肥厚する。391は外反する口縁部破片である。背竹管沈線による連弧文が付される。392は半截竹管により文様を描いた後、棒状工具でなぞっている。また隆帯による3本指が見られる。393は貼り付け隆帯によるモチーフである。394は有孔鉢付土器である。400と401は同一個体である。頸部には断面三角形の隆帯が巡り、また環状把手が付される。口縁部はS字状の突起となっている。402は貼り付け隆帯によるものであるがまわりをなぞっている。403も貼り付けであるが、まわりになぞりは見られない。404は織文原体を渦巻状にして圧縮したものである。407は断面四角の張り付け隆帯に沿って背竹管の押し引きが施されている。408・409・411・415は浅鉢の破片と考えられる。爪形文及び半隆起線文を用いるもの(408・409・412)と沈線によるもの(411・413・415)とがある。

番 号	器 種	分 類		出 土地	出 量		地 文	色 調	胎 土	二次施成	遺 存	備 考
		系 統	器形		時 期	口 径	底 径					
297	深鉢	?		?	P 1			横	やや暗	ローラス?	1/16	
298	深鉢	?	?	?	?	7.6		標準r	?	粗	内スス	底壳 削下1/2
299	*	?	?	?	?	?	9.9	L	淡黄	雲母わざか やや暗		1/5
300	浅鉢	1		II	P 7	38.4		?	淡黄緑	雲母多 やや暗		
301	深鉢	3	D-c?	I	?			RL	(内)にい (外)にい	雲母少 やや暗	内外スス	
302	鉢	?		?	?			LR	淡黄緑	雲母有 やや暗		
303	深鉢	?	B-a	?	?	25.8		RL	にい	雲母有 やや暗	内オカゲ	1/16

番 号	類 型	分類		土 質 点	法 量			地 文	色 調	胎 土	二次虎成	道 名	備 考
		系 統	器形		時期	D深	底深	器高					
304 深鉢	2	D-c	II-②	No10	37.4 29.8	16.5	35.4 27.2		橙	やや粗	中-ロ 内中スス 外脚下やや 荒れ、内脚下 荒れ、コ	洞口1/2 底荒	
305 *	2	*	*	No132	21.6 29.5			L	にぶい-橙	*	内ロオゴ 内-裏オゴ みロ荒れ、ス ス付着	2/3	
306 *	3	F	*	No37	28.4			LR	*	黄灰色の粘 土塊少 やや粗	外ロスス	1/6	
307 *	2	D-c	*	No173	?				*	やや粗	内オゴ		
308 *	3	C-c	*	No26-312	22.1			RL	橙	チャ-青母少 やや粗	内スス 外荒れ	1/6	
309 *	?	A-c	?	No182	29.3 16.5	8.2	14.6		にぶい-黄緑	繊多 粗	内ロオゴ 外荒れスス	底原3/4 ロ1/4	
310 *	?	C-b	II-②	No55 No55+22 151+151+ 159+34+ 35+20+38	23.4 21.0	11.2	19.9 17.5	RL	橙	やや粗	外一郎スス	洞口9/10 ロ1/2	
311 *	?	*	*	No65	30.6 25.8			LR	(内)灰黃褐色 (外)灰黃	雲母少 やや粗	外スス	4/5	
312 *	?	E?	?	覆土	17.1			?	(内)灰黃 (外)にぶい-黃緑	やや粗	内外スス 一部オゴ	1/8	
313 *	?	B-b	?	*	14.9			?	にぶい-橙	*	内オゴ	2/3	
314 *	3	F-b	II-②	No58	35.8 32.5	13.4	37.4 35.4	RL	淡黃緑	やや密	外上スス 外下荒れ	ロ・洞口2/ 底1/10	
315 *	3	A-a?	*	覆土	25.7			?	明赤褐	繊多 粗	口内外と外 スス	1/8	
316 *	3	F-b	*	No115+ 416+25	29.8 26.2			LR	淡黃褐色	繊多 雲母少、粗	外スス荒れ	2/3	
317 *	3	CdD-b	II	No12	36.8			RL	黄	黄灰色の粘 土塊、やや粗	ロ外スス	1/8	
318 *	?	B'-a	*	No59	10.0			RL+LR	(口)に にぶい-黄緑	やや粗	内スス 外スス荒れ	ロ3/4 洞3/5	
319 *	1+5 前波	G-b	II-②	No34	15.2 13.6	6.4	17.9 16.3		にぶい-橙	*	内ロスス 外スス	底原4/5 ロ2/3	
320 *	?	D-a	?	No313	32.2			RL	*	やや粗	一部スス	1/10	
321 *	?	C-a?	?	覆土	?			LR	*	雲母わざか やや粗	外一部スス	1/6	
322 跡	6	?	?	*	12.0 (S.7) (S.0)			RL	淡黃緑	やや粗		1/6	内面・口唇外赤形
323 深鉢	3	F-a	?	*				RL	(内)にぶい-褐 (外)灰黃	雲母少 やや粗	外スス荒れ	1/12	
324 *	3	F-b	II-②	No119-95 No120-121 137-12	38.7 35.4	(12.5) GLO	(41.0) GLO	RL+LR	にぶい-黄緑	やや粗	洞口スス、内 脚底荒れ 外下荒れ	ロ2/3 洞2/4	
325 *	3	?	?		17.0			RL	*	雲母わざか やや粗	内一部スス 上スス	4/5	
326 *	3	?	?	拂土1	16.2			LR	黄緑	不明黑色粒子 外荒れ	内オゴ 外荒れ	4/5 底1/4	
327 *	3	C'-b	II-②	No115+ 125+113	29.0 23.1	12.7	35.0 31.3	RL	(内)灰黃色 (外)灰黃	雲母や多 やや粗	内ロスス 外オゴ 外一部スス	ロ3/4 洞1/3 底1/2	
328 *	3	?	II	覆土	25.3			RL	橙	(内)橙 (外)褐	外スス	1/6	
329 *	3	C-d-I	*	P7 No69-208				LR	にぶい-橙	繊多、雲母少 粗	*	1/8	
330 *	3	C-a?	*	No225+ 325	35.7			LR	淡褐	繊多 粗		1/8	
331 *	3と5	I-b	?	No1	38.3			RL	明褐灰	やや密	外スス	1/8	
332 *	3	C?	?	No72				RL	(内)明赤褐 (外)橙	黄灰色の粘 土塊 やや粗	内ロスス 外スス荒れ	1/5	
333 *	3	F-b	II-②	No30-30+ 30-30	39.0			LR	にぶい-橙	粗	外崩スス、ロ スス、ロ脚下 スス	ロ4/5 洞3/5	
334 *	3	?	*	No126				RL	淡黃緑	雲母少 粗	内一部スス 上スス	1/3	
335 *	?	B'-b	?	No191+ 333	27.7 28.2			燃燒LR	淡黃	繊多、雲母少 やや粗	外スス	ロ1/2 洞2/3	一部燃燒もどし
336 *	3	C'-b	II	No325	32.8			LR	*	雲母少 粗	内下スス 外スス	ロ3/4 洞1/3	

番 号	器 種	分類		出 土 地 点	法 量			地 文	色 調	胎 土	二次施成	遺 存	備 考
		系 統	形 態		口徑	底径	器高						
337	深鉢	3	C?	II				RL	橙	黄灰色の胎 土塊多 やや粗	外スヌ	1/2	
				No.3-101- 208-210- 211-212- 213-214- 215-216- 217-218- 219-220- 221-222									
338	ヶ	6	C-a	*	No.30-3D- 314-315- 316-317- 318-319	35.0	19.6 (C.0)	LR	明黃褐色 灰黃褐色	褐色多、赤灰色 の胎土 やや粗	外荒れ 或脚下スヌ	口1/3 脚1/8	
339	浅鉢	?		? P 6 No.30-E	14.0				にぶい黄緑	やや粗	外荒れ	底1/3 脚1/8	
340	鉢	3		II-(2) 褐土-No.50	43.2	12.5	20.7 20.2	LR	綠	青白多、青母 多、粗	外一部スヌ	口3/4 脚1/5 底1/2	
341	浅鉢	?		II No.50	39.6			RL	淡黃	砂粒多、青母 多、粗		1/6	
342	圓鉢	1	E	*	No.33?			?	浅黃褐色	青母多 やや粗		1/16	
343	ヶ	?	?	? No.25-2	4.6				(内)淡黃褐色 (外)にぶい黃緑	やや密		底不定	
344	台鉢	2		II 褐土					にぶい緑	やや粗	外一部スヌ	1/16	強部径 8.8 cm
345	深鉢	?	?	*				LR	明赤褐色	グ	外スヌ		
346	ヶ	?	?	? No.14	(9.2)				にぶい黄緑	青白多、粗		1/3	
347	ヶ	3	?	? No.131	15.0			RL	淡黃褐色	青母多、粗	内一部スヌ	底4/5 脚1/5	
348	ヶ	?	?	? No.140				?	綠	青白多、粗 やや粗	内オコゲ 外荒れ	1/8	
349	ヶ	2	?	? 褐土	(8.0)				にぶい緑	やや粗		1/8	
350	ヶ	?	?	*	(12.9)			?	綠	グ		1/3	
351	ヶ	?	?	? No.1-2	14.8			RL	*	グ	内下オコゲ 脚スヌ、外荒れ	脚1/3 脚1/4	
352	ヶ	?	?	? No.227- 325-6 212	15.1			RL	にぶい緑	黄白色の胎 土塊多 やや粗	内脚下オコゲ	底3/4	
353	ヶ	?	?	? No.12	12.6			LR	(内)淡黃褐色 (外)綠	青母少、粗多 やや粗	外底一部スヌ	底9/10	
354	ヶ	?	?	? 褐土	(8.9)				にぶい緑	青多 やや粗		1/12	
355	ヶ	3	?	II No.95	8.0			RL	グ	青母わざか 粗少、粗	外一部スヌ	9/10	
356	ヶ	?	?	? No.97-231	15.7			LR	綠	やや粗		1/5	
357	ヶ	?	?	? No.181	11.4				にぶい緑	やや密	底外スヌ	9/10	
358	ヶ	?	?	? No.190	13.3				グ	青母多、粗多 やや粗	*	2/5	
359	ヶ	?	?	? No.215				?	綠	やや粗			
360	ヶ	?	?	? No.146					黃褐色	青母少、粗	?	1/12	
361	ヶ	1	? -c	I-(2) 褐土					にぶい緑	青母少、粗 やや粗	内スヌ?		
362	ヶ	1	E	I No.246					淡黃褐色	やや密	外スヌ		
363	ヶ	3と4	A-b	? No.298					(内)淡黃褐色 (外)濃赤褐色	やや粗	外一部スヌ	1/16	999 同一個体
364	ヶ	?	A-b	? 褐土					グ	グ	*	1/16	
365	ヶ	?	?	? No.365-5					にぶい緑	やや密	内オコゲ	1/12	
366	ヶ	1	C?	I 褐土					グ	グ			
367	ヶ	?	?	? No.116					淡黃褐色	グ	内底スヌ		
368	ヶ	1	C?	I 褐土				LR	(内)淡黃褐色 (外)淡黃褐色	黄灰色の胎 土塊 やや粗		1/8	372 同一個体
369	ヶ	3と4	G?	? No.12					にぶい緑	やや密	内オコゲ 外スヌ	1/12	
370	ヶ	?	C?	? 褐土					灰褐色	グ	内オコゲ	1/12	
371	ヶ	3	?	? No.196				?	?	やや粗	外スヌ		
372	ヶ	1	C?	I 褐土				LR	(内)淡黃褐色 (外)淡黃褐色	黄灰色の胎 土塊 やや粗		1/8	368 同一個体
373	ヶ	2	? -c	II No.68					明赤褐色	やや粗	外スヌ		
374	ヶ	?	A-b	? No.283				L	にぶい緑	やや密	内スヌ 外一部スヌ		
375	ヶ	5	?	? 褐土					グ	グ	外スヌ		
376	ヶ	?	C-a?	? *	?				?	グ	外一部スヌ	1/16	
377	ヶ	2	?	II *					にぶい緑	青や多 やや粗	外スヌ		

番 号	器 種	分類		出 土 地 点	法 量			地 文	色 調	胎 土	二次焼成	遺 存	備 考
		系 統	器 形		口 径	底 径	厚 高						
378 鉢?	2 ?	II	覆土	24.6				にぶい模	やや粗	外スス	1/8		
379 深鉢	2 ?	〃	〃					〃	ケ	〃			
380 *	2 C?	〃	No39	?				ケ	黄褐色の粘 土塊やや粗	〃	1/12		
381 *	2 D-a?	〃	覆土	?				模	やや粗	〃	1/10		
382 *	2 ?	〃	No69					浅黃模	纏多、粗	〃			
383 *	3 ? -c	?	覆土					RL?	模	雲母わざか やや粗	内オコゲ 外スス		
384 *	3 ? -b	?	No244					RL	にぶい・真模	やや粗	外スス	1/12	
385 *	3 ? -c	?	No56					LR	にぶい・模	ケ	〃		
386 深鉢?	?	?	?	No71	?			RL	(内)黒色 にぶい・模	〃	〃		
387 深鉢?	C?	?	No331	?				RL + LR	ケ	ケ	〃		
388 *	?	?	?	覆土				LR	黄模	黄褐色の粘 土塊、密	内スス?		
389 *	?	A-a?	?	〃				L	浅黃模	やや粗	外一部スス	1/16	
390 *	?	?	?	No257				L	浅黄色~浅黃	ケ	外スス	1/10	
391 *	3 ?	?	?	表土No74	?			LR	模	砂やや多 やや粗	〃	1/8	
392 *	3 ?	?	?	覆土				LR	(内)明褐模 にぶい・模	黄褐色の粘 土塊、雲母少 やや粗	外一部スス		
393 *	3 ?	?	?	〃				模	やや密	内スス?	1/6		
394 *	4 K?	?	〃					〃	水晶多 やや粗		赤影?		
395 *	3 ?	II	No299					LR	浅黃模	やや粗	内オコゲ		
396 *	3 H?	〃	No230					LR?	模	雲母わざか やや密	1/5		
397 *	?	?	〃	覆土				RL?	(内)灰黃 (外)灰黃	やや密	内オコゲ	1/8	
398 鉢?	?	?	?	No109				LR	にぶい・真模	やや粗	内スス		
399 深鉢	3 ?	?	?	No141				LR	模	密	外スス	1/8	
400 *	3 I ? -b	II	No233	32.5				LR	にぶい・模	雲母やや多 やや粗	内外スス		401と同一個体
401 *	3	〃	No29					〃	〃	〃	〃		400と同一個体
402 *	3 ?	?	?	覆土				LR?	ケ	やや密	内オコゲ		
403 *	3 ?	?	?	〃				LR	模	密	〃	1/5	
404 *	3 ?	?	?	〃				RL	浅黃模	粗	内外一部オ コゲ		
405 *	?	?	?	No341				LR + RL	模	やや粗	内スス		
406 *	3 ?	?	?	No110				RL	〃	纏多、やや粗		567と同一個体 623と同一個体	
407 *	3-5	?	?	覆土				LR	にぶい・模	やや密	外スス		
408 深鉢	1	I	〃					LR	浅黃模	雲母やや多 やや粗	内一部ス ス	1/16	
409 *	1	?	?	〃				〃	にぶい・模	雲母非常に多 やや粗	外一部スス	1/16	
410 深鉢	1	?	?	〃				?	灰白	雲母わざか やや粗			
411 深鉢?	?	?	?	〃				RL?	模	やや密			
412 *	?	?	?	〃				灰黃	ケ		1/16		
413 *	1	?	?	?	?			?	模	雲母非常に多 やや粗			
414 *	1	?	?	No237	?			にぶい・真模	雲母多 やや粗	外スス			
415 *	?	?	?	?	?	?		模	雲母少 やや粗				

17号住居跡(416~418)

出土量は少なく、図示したものは3点である。416は鉢又は浅鉢の口縁部破片と考えられる。口縁部にはキザミ及び三叉状の沈線が施される。417は越後系土器の口縁下半の破片と考えられる。418は口縁に沿って爪形文が巡る。

番 号	分 類			出 土 点	法 量			地 文	色 調	胎 土	二次焼成	遺 存	備 考
	系 統	器 形	時 期		口 径	底 径	器 高						
416 浅鉢	?	/	?	P 5	15.9			LR	緑	雲母多 やや粗			
417 楕円	2	?	?	*					浅黄緑	粗			
418 *	1	?	I	*	?			?	黄緑	雲母わざか 粗			

18号住居跡（419～428）

当住居跡においては、焼土から比較的まとまって土器が出土している（421～427）。419は口縁が「く」の字状に屈折する浅鉢である。口縁に沿って半隆起線文が1本巡っている。420～426はいわゆる越後系の土器であるが器種は明確でない。421は貼り付け隆帯による。428は柱穴出土である。主要モチーフの渦巻は基隆帯による。

番 号	分 類			出 土 点	法 量			地 文	色 調	胎 土	二次焼成	遺 存	備 考
	系 統	器 形	時 期		口 径	底 径	器 高						
419 浅鉢	?	/	II	I-6125	43.2			RL	にぶい緑	やや密	外ヌス		
420 深鉢	2	C+D	*	P 5					(内)にぶい緑 (外)緑	*		1/12	
421 *	3	?	?	焼土 2				?	浅黄緑	雲母少 やや粗	外荒れ	1/12	
422 鉢	2	?	?	*					にぶい緑	*	外ヌス		
423 深鉢	2	?	II	*					緑	粗			
424 *	2	C+D	?	*					緑	雲母 粗	外荒れ		
425 *	3	?	?	*				LR	にぶい緑	やや粗			
426 白陶	2	/	II	*					(内)にぶい緑 (外)青黄緑	雲母少 やや粗	内ヌス?		
427 深鉢	?	B'-a	?	*				RL	にぶい緑	やや粗	内ヌス	1/12	
428 *	3	?	?	P 7				?	*	*	*		

20号住居跡（429～505）

当住居跡においては、多くの土器が出土している。429・430は住居跡床面直上の出土である。429は深鉢上半部である。文様に鋭さを欠く。主要モチーフは基隆帯による。他は半隆起線による渦巻等であるが、部分的にS線部をなぞっている。口縁部には4個の小突起が付されている。胴部には半隆起線文が垂下するが、他は無文である。430は小形の火焔型土器である。頸部のくびれが小さく、すんぐりした感じを受ける。二次焼成により赤化、剥落が著しく、把手部は推定復原である。

431～444が柱穴からの出土である。431は小形の鉢である。袋状把手が1個付される。また横S字状の文様も見られる。胴部は縞文である。432は薄手の土器である。半截竹管による文様である。433は台付鉢と考えられる。把手は、X字状の隆帯を組合せたもので、隆帯に沿って背竹管の押し引きが巡っている。また口縁部に沿っても同様に巡っている。口縁下半部は燃糸文を地文としている。434・435は521（21号住居跡）と同一個体である。436は波状口縁の土器で渦巻の主要モチーフは基隆帯によっている。439は、口縁部に縱方向の背竹管による押し引きが見られる。

441は、2本の沈線内に交互刺突を加えている。それ以下は羽状繩文である。442は浅鉢である。爪形文・半隆起線文及び刺突である。444は地文に撚糸を用いている。445は胴部に膨らみをもち口縁部は「く」の字状に外反する。地文には、やはり撚糸文を使用している。頭部には沈線（背竹管）が巡り、突起が付される。また突起部からは、沈線が逆U字状に垂下している。446は台付鉢と思われ、433と同一個体の可能性がある。隆帯による渦巻や突起で、沈線部分には押し引きが見られる。447は越後系深鉢の破片である。頭部には太い隆帯が一周する。胴部はS字状の渦巻きである。448は深鉢の口縁部破片である。沈線による文様で渦巻文・玉抱き三叉文等が見られる。隆帯上にはキザミが付される。口縁部は鋸歯状になると思われる。449は胴部が角ばって膨らむ器形になると考えられる。繩文地上に沈線が見られる。450は繩文地上に浅い沈線により直線文及び鋸歯文を一周させている。451は胴部破片で、半截竹管によるクランク状の文様である。452は深鉢の口縁部破片である。低い貼り付け隆帯による相対する連弧文が巡っている。内面には、断面三角形の突帯が2本巡る。453は小形の深鉢で口縁部は無文帶としている。454は胴下半部である。半隆起線文が垂下している。底部は網代底である。455は半截竹管文の沈線部をなぞっている。また太い隆帯が垂下する。無文部を多く残し、U字状の区画内には矢羽根状の沈線が見られる。456は胴下半部で、撚糸文地上に半隆起線文が垂下している。底部は上げ底風である。457は火焔系土器の底部である。458は無文の小形深鉢である。底部は木葉模である。459は浅鉢である。渦巻のある突起と縄文の側面圧痕が見られる。461は木目状撚糸文である。462は441と同一個体と考えられる。463は半隆起線上に細い沈線により矢羽根状のキザミを付している。464は頭部破片である。断面三角形の隆帯が巡る。465は波状口縁の土器で半隆起線及び爪形文が口縁に沿って巡る。467は沈線部に三角形状の刺突が巡る。468は沈線部背竹管による押し引きである。469は「く」の字状に外反する口縁部である。口縁に沿った隆帯に指頭圧痕が見られる。

470は口縁部破片である。X字状の貼り付け隆帯と半隆起線文である。471は鶴頭冠様の把手である。内外面共に貼り付け隆帯により文様を描いている。472は波状の口縁部破片であるが、磨耗著しい。473は貼り付け隆帯が一周し、端部が渦巻状となる。隆帯には爪形文が付される。474は大形の鶴頭冠である。横長で潰れた感じを受ける。475は頭部破片である。476は4単位波状口縁の土器である。端部は台形状に水平となる。主要モチーフの渦巻は基隆帯で太い。478もやはり波状口縁で頂部は尖る。半截竹管文の沈線部を細い工具でなぞっている。479は胴部破片で、モチーフの渦巻は太い基隆帯によっている。482は口縁部破片で、背竹管による押し引きが見られる。483も同じく背竹管による文様であるが、工具は尖端が丸くなっている。484は口縁部が大きく外反する。主要モチーフは断面三角形の隆帯で他は半隆起線文である。486は浅鉢の破片である。488は円形竹管による刺突が巡る。491・496は同一個体で前期の土器である。繩文は0段の多条である。

番 号	器 種	分類			出 土 地 点	法 量	地 文	色 調	胎 土	二次燒成	遺 存	備 考
		系 統	器 形	時 期								
429	深鉢	2	C-b	II-③	麻布P2	27.5 26.3		浅黄橙	粗	中-スヌ 外-スヌ焼れ	9/10	
430	?	2	D-b	?	?	G1.9 G1.9 (H.8)	(M.9 (E.9)	(内)褐 (外)褐-明褐	織多 やや粗	外口黒れスヌ 外側黒れ 内オコゲ	直4.5 日4.5 手1/2 頭1/2	
431	鉢	2と3 新直	?	P 3	G1.9 G1.9	5.7	8.8 7.3	RL	淡黃	織・雲母多 やや粗	下平1/2 上平1/4	
432	深鉢	?	?	?	?			LR	にぶい-褐	雲母少 やや粗	内オコゲ 外スヌ	
433	台付	3と2 新直	?	P 4	23.6 28.2			織糸R	浅黄橙	やや粗	1/6	
434	深鉢	3	?	?	?			RL	にぶい-橙	雲母少 粗	外スヌ	521と同一個体
435	?	3	?	?	P 5			?	?	外一部スヌ	*	
436	?	?	D-c?	?	P 23			?	?	織多 やや粗	内オコゲ	
437	?	?	?	?	P 4			浅黄橙	?	雲母や多 やや粗		
438	?	3	?	?	P 5			RL	にぶい-橙	雲母少 やや粗		
439	?	?	F-a	?	P 20			?	浅黄橙	雲母多 やや粗	1/16	
440	?	3	?	?	P 23			?	にぶい-黄橙	雲母少 やや粗		
441	?	?	?	?	P 20	G1.9		LR+RL	?	?	内オコゲ 外スヌ	462と同一個体
442	浅鉢	1	?	I	P 23			?	?	雲母や多 やや粗		
443	深鉢	?	F-b?	?	?			明褐色	?	やや粗	外スヌ	1/12
444	?	3	?	?	?			織糸R	にぶい-橙	やや粗	外一部スヌ	
445	?	4	B'-a	II	?	29.2		織糸R	織	雲母少 粗	1/4	
446	台付	2と3 新直	?	?	G1.9 G1.9			?	にぶい-褐	?		
447	深鉢	2	C+bD	?	I-2層			?	?	不明赤色粒子 やや粗	外スヌ	1/8
448	?	2	C-b	II-②	1層	26.7		?	?	黄褐色の粘 土壤 やや粗	?	補修孔
449	?	3	J?	?	2層			RL	浅黄橙	?	1/5	
450	?	3	H-a	II	覆土	13.2		LR	にぶい-橙	雲母多 やや粗	内オコゲ	1/14
451	?	3	?	?	1層			RL	?	雲母や多 粗	内オコゲ 外危れ	1/4
452	?	3	A-a?	II-①	覆土	34.7		RL+LR	?	?	1/8	
453	?	3	C-b	II	2層	13.7 11.0		LR	にぶい-黄橙	?	外スヌ	1/4
454	?	2	?	?	1層	15.2		?	?	内オコゲ	直3/4 銅1/8	
455	?	2	?	?	2層			?	?	?	1/6	
456	?	?	?	?	覆土	10.0		織糸R	にぶい-橙	?	内外一部ス ヌ	直4/5 銅1/4
457	?	2	?	?	1層	11.5		?	?	?	内スヌ?	1/6
458	?	?	?	?	2層	7.2		浅黄橙- にぶい-橙	?	?	直5/6 銅1/3	
459	深鉢	3	?	I-②	?	21.8		?	にぶい-黄橙	?		
460	深鉢	3	?	?	覆土			織糸R	(内)浅黄 (外)にぶい-黄	?		
461	?	1	?	I	2層			木目状然糸	織	黄褐色の粘 土壤 やや粗	内スヌ 外危れ	1/10
462	?	?	?	?	1層	?		LR?	?	?	内スヌ	441と同一個体
463	?	1	G-b?	I	覆土			浅黄橙	?	?	内オコゲ 外スヌ	1/6

番 号	器 種	分類			出 土 場 所	法 量			地 文	色 調	胎 土	二次焼成	遺 存	備 考
		系 統	形 態	時 期		D径	底径	器高						
464	深鉢	?	?	?	1層				LR	淡黃緑	雲母少、角閃石?, 粗			
465	*	1	?	I	*				?	綠	黃灰色の粘土塊やや粗	外スス		
466	*	2	G-b?	?	覆土				淡黃	雲母少、やや粗		1/10		
467	*	2	?	?	2層				?	淡黃緑	やや粗			
468	*	3	?	II	1層	?			にぶい-褐	雲母少、やや粗	外スス			
469	*	3	?	?	2層				明赤褐	*	*	1/12		
470	*	3	?	?	覆土				LR	にぶい-黄緑	粗	外荒れ		
471	*	?	?	?	2層				綠	やや粗		1/8		
472	*	4	?	I	*				橙赤褐	雲母少、粗	内スス 外荒れ			
473	*	?	?	?	1層				?	にぶい-黄緑	黃灰色の粘土塊 雲母少、やや粗	外スス	1/6	
474	*	2	D-c	II	覆土				*	粗		内外スス	447と同一個体か	
475	*	2	?	?	*				黄緑	*	外スス			
476	*	2	D-c	II	*				*	粗	内スス			
477	*	3	?	?	2層	?			綠	やや粗	一部スス			
478	*	2	D-c	II	*	?			にぶい-赤褐	粗	内スス 外荒れ			
479	*	2	?	*	*	*			淡黃緑	難多、粗				
480	*	2	C-s-D	*	*	?			にぶい-褐	黃灰色の粘土塊、粗	内スス			
481	*	2	*	*	*				*	雲母少 やや粗				
482	*	?	?	?	覆土	?			綠	やや粗		552と同一個体		
483	*	?	?	?	2層	?			L	にぶい-褐	やや密	外スス	1/12	
484	*	3	F?	?	*				LR	淡黃緑	やや粗	外荒れ		
485	*	?	H-a-K	?	*				?	にぶい-褐	*	内オコゲ 外スス		
486	深鉢	?	?	?	*	?			LR	淡黃緑	*			
487	深鉢	?	?	?	*	?			?	にぶい-赤褐	粗	外荒れ		
488	*	?	?	?	*				(内)灰褐色 (外)にぶい-黄緑	青	外スス	1/10		
489	*	?	B-a	?	*	?			LR	にぶい-黄緑	やや密	内オコゲ		
490	*	?	?	?	*	?			LR	にぶい-赤	やや粗			
491	*	?	?	?	1層				0段多条	雲母やや多 粗	外スス	1/8		
492	*	?	?	?	2層	?			にぶい-褐	やや密	内オコゲ 外スス			
493	*	?	B-a?	?	*	?			LR	灰腹	雲母少、角閃石?, 粗			
494	*	3	?	?	*				RL	淡黃緑	粗			
495	*	3	?	?	1層				RL	にぶい-黄緑	雲母少 やや密			
496	*	?	?	?	2層				0段多条	*	黄灰色の粘 土塊、雲母や 多、粗	外スス		
497	*	?	?	?	覆土				LR	淡黃緑	粗			
498	*	?	?	?	*				燃糸L	綠	やや粗			
499	*	?	?	?	2層				燃糸R	明黄緑	雲母少 やや密	内外スス		
500	*	3	?	?	覆土				燃糸r	にぶい-黄緑	粗	*	130と同一個体か	
501	*	3	F?	?	1層					黄緑	雲母少 やや粗	内オコゲ 外スス		
502	*	?	?	?	覆土				燃糸r	にぶい-黄緑	粗	内外スス	1/6	
503	*	?	?	?	*				淡黃緑	難多、粗		1/2		
504	*	?	?	?	2層				にぶい-褐	やや粗		1/10		
505	*	?	?	?	1層				*	*	外スス			

21号住居跡(506~570)

当住居跡から多くの遺物が出土している。506~510が床面直上の出土である。506は深鉢口縁把手部である。太い隆帯及び沈線によっている。507は沈線部に背竹管による押し引きが見

られる。509は台付鉢の可能性がある。510は越後系土器の胴部破片である。511～528が柱穴出土の土器である。511は浅鉢である。沈線による文様区画である。512は深鉢の胴部破片で全面縄文(RL)である。513は口縁部破片で、主要モチーフは渦巻を基隆帯によっている。514は鉢又は深鉢の口縁部破片である。口縁に沿って交互刺突が見られ、それ以下は縄文である。515は小形の深鉢である。516は王冠型土器の波状部の破片である。主要モチーフは渦巻文で基隆帯上にはキザミが施される。その他、三叉文等の文様が見られる。520は大形の浅鉢である。算盤玉状の器形で、突起を有する。文様は縄文の側面圧痕で、渦巻文や蕨手文が見られる。521は口縁部が緩く聞く深鉢である。口縁部上半には偏平な貼り付け隆帯による相対する連弧文が巡る。頭部には無文帶があり、胴部は縦横区画で、部分的に隆帯を用いている。同心円文か渦巻状文が見られる。

525は大形の胴部破片である。主要モチーフは隆帯によっており、同心円状に沈線がまわっている。中央には3本の連続刺突が見られる。526は底部の廉状圧痕、527は浅鉢の口縁部破片である。529は覆土からの出土で、舟形の土器である。無文であるが、内外面底部共によく磨かれている。530は、半截竹管で文様を描いた後、沈線部をなぞっている。

531は小形深鉢の口縁部破片である。細かいキザミが見られる。532は膨らみのある口縁部である。口唇部には小突起が見られる。口縁部には縄文を施し後、貼り付け隆帯による渦巻文が配される。533は半截竹管文と爪形文による。534は、全てが太い隆帯によっている。口縁部には渦巻文が見られる。535は、口縁部の膨らみの大きな破片である。「く」の字状に外反するくびれ部に焼成前の小孔が見られる。537は浅鉢である。内傾する口縁部は、端部で直立する。深い沈線により平行線を描いており、その間の半隆起状となった部分にキザミを施している。無文部には三叉状の陰刻が見られる。553・554・546・547・550は、半隆起線と爪形文による。540・543は格子目文、551・553・557は背竹管による文様。552は、482(20号住居跡)と同一文様であり、同一個体の可能性が高い。568・569は浅鉢と考えられる。568は無文で、口唇部には玉抱き三叉文が見られる。569は連華文と半截竹管文である。

番号	器種	分類		出土地點	地質		地文	色調	胎土	二次焼成	遺存	備考
		系統	形態		口底	底面						
506 深鉢	3	C+d-b	?	床直			?	にぶい赤褐	やや粗	内オカゲ	1/10	
507 #	4	?	I	#			?	淡黄緑	黄灰色の粉 土壤 雲母やや多 粗		1/14	
508 #	2	D-c	II	#			/	にぶい緑	粗	外スス荒れ	1/4	
509 #	?	?	?	#			/	淡黄緑	やや密	外スス		
510 #	2	C+d	II	#			/	にぶい緑	雲母 やや粗			
511 浅鉢	2		?	P1	?		?	綠	雲母非常に多 やや粗			
512 覆鉢	?	?	?	#	17.3		LR	#	雲母やや多 やや粗	内下一部スス 外スス	1/3	

番 号	形 種	分類			性 質			地 支	色 調	胎 土	二 次 燒 成	遺 存	備 考
		系 統	器 形	時 期	半 土 厚	口 徑	底 径						
513	深鉢	2	C	II	P 10	?			淡黃	やや粗 やや密	内外ス		
514	鉢	?	?	?	*			LR	#	雲母少、粗	内外ス		
515	深鉢	?	K-a	?	D-10	9.4	7.6	?	L	にふい粒 やや粗	内ス	1/4	
516	*	2	D-c	II	P 10	23.1			淡黃	#	内オコダ 外ス	1/4	
517	*	3	?	?	P 5			RL	#	水晶少、バ ス多 やや粗	内外ス		
518	*	?	?	?	P 9	?		RL	にふい粒 粗片有、粗	外ス	1/14		
519	*	1	2-b	?	P 12	?		?	灰黃褐	やや密	#	1/4	
520	*	3		I-②	P 4			LR	(内)灰黃 (外)淡黃 にふい粒	粗	内一器オコダ 外ス	1/8	内赤彩?
521	*	2+3 新波	H	II-①	P 8 P 10	27.8		RL	浅黃褐	雲母少、粗	内下ス 外ス	口9/10 434+435と同一 個体	
522	*	?	?	?	P 8			LR	橙	やや密	内ス	1/12	
523	*	?	?	?	#			?	(内)にふい粒 (外)C-1-2-3-4	雲母少、粗 やや密	外ス		
524	*	?	?	?	*			LR+RL	灰褐	雲母少、粗	#		
525	*	3	?	II	#			RL	(内)にふい粒 (外)にふい粒	#	#		
526	*	?	?	?	#			RL	にふい粒	やや粗		1/6	
527	*	?	?	?	#				(内)褐灰 (外)浅黃	黄灰色の粘 土壤、やや粗			
528	*	?	?	?	#				(内)灰白 (外)C-1-2-3-4	雲母少 やや密			
529	瓦器	?	舟形か	?	覆土	22.0 5.8	10.9 4.6	8.5 6.5	淡黃	雲母少 やや密		19/20	内面口下黒斑
530	深鉢	2	C-D-b	II	*	25.9 29.5			橙	粗	内ス	1/6	
531	*	2+3 新波	EFG-a	*	*	19.7		?	にふい黄褐	やや密	内オコダ 外ス	1/6	
532	*	3	C?-b	*	*	13.4		LR	#	やや粗		1/6	
533	*	1	?	I-②	*	15.4 16.5		?	淡黃	黄灰色の粘 土壤、やや密	内外ス	1/6	
534	*	3	?	?	*	30.8		RL?	橙	不明赤色粒子 やや粗	外荒れ	1/10	
535	*	3	?	?	*	14.3		?	にふい黄褐	バニズ有 やや粗	内ス	1/8	
536	*	2	FG-b	?	*	17.6		?	橙	雲母少 やや粗	内ス 外ロス	1/7	
537	浅鉢	1		II	*	39.6		?	浅黃褐	雲母多、やや粗		1/12	
538	深鉢	1	A-a?	I	*	24.6			(内)C-1-2-3-4 (外)にふい粒	やや粗	外ス	1/10	
539	*	1	?	*	*	?		?	橙	#	外スス荒れ		
540	*	1	?	*	*	?		?	(内)灰黃褐 (外)にふい粒	黄灰色の粘 土壤、やや粗	外ス		
541	*	3	?	?	*			?	浅黃褐	粗	内ス		
542	*	2	?	?	*	?		?	橙	やや粗			
543	*	1	?	?	*			?	#	雲母や多 やや粗	内ス		
544	*	?	?	?	*			?	#	やや密	#		
545	*	?	?	?	*			?	#	内オコダ			
546	*	1	C	I	*			RL?	にふい黄褐	雲母少 やや粗	外ス	1/16	
547	*	1	?	*	*	20.3		?	(内)橙 (外)にふい粒	雲母や多 やや粗	外荒れ	1/14	
548	*	?	?	?	*				木目状燃L	にふい粒 やや粗			
549	*	?	?	?	*			?	?	雲母多 やや粗			
550	*	1	H-a	?	*			LR	にふい粒 密	外ス			
551	*	?	C?	?	*			?	にふい黄褐	やや粗			
552	*	?	?	?	*			?	橙	#	482と同一個体		
553	*	?	?	?	*				にふい粒 やや粗				
554	*	2	?	II	*				にふい黄褐	雲母少 やや粗 密で粗	外荒れ	748+749と同一 個体か	
555	*	2	C-D	*	*				にふい粒 やや粗				

番号	器種	分類			出土所	法量			地文	色調	胎土	二次焼成	遺存	備考
		系統	器形	時期		口径	底径	都高						
556	深鉢	2	C+D?	?	覆土					灰黃褐	やや密			
557	鉢?	2	?	?	#					にぶい模	密		1/12	あるいはF-aか
558	深鉢	2	?	?	*					やや密	内外スス			
559	*	3	?	?	*				RL	(内)C+D? 模	豊田少 やや密	内スス	1/8	
560	*	?	?	?	*					模	外荒れ			
561	*	?	?	?	*				LR?	にぶい模	やや密	内スス	1/10	
562	*	?	A-a?	?	*				LR	にぶい模	ク	外スス	1/12	
563	*	?	?	?	*					豊多、豊少 やや粗	タ		1/16	
564	*	3	H-a?	?	*				LR?	淡黄褐	やや密		1/12	
565	*	?	?	?	*				LR	にぶい模	やや粗	内オコデ		
566	*	?	A-b?	?	*				LR	にぶい模	やや密	*		
567	*	3	?	?	*				RL	模	豊多 ス有 やや粗			406・523と同一 個体
568	深鉢	?			?	*				黄灰色の粘			1/16	
569	*	1		I	*					豊母有、粗				
570	深鉢	?	?	?	*					(内) 茶余褐 (外) 茶褐	豊母や多 やや粗	外スス?	1/16	
										豊母わずか 密			1/16	

22号住居跡(571)

確実に遺構に伴うと考えられる土器はほとんどない。柱穴から571が出土している。火焔系深鉢の胸部破片である。

番号	器種	分類			出土所	法量			地文	色調	胎土	二次焼成	遺存	備考
		系統	器形	時期		口径	底径	都高						
571	深鉢	2	?	II	F-9 P 15	6.9			模	豊母少 やや粗			1/2	

23号住居跡(572~598)

全て焼土・柱穴・及び住居跡に伴う土坑からの出土である。573・574が焼土からの出土で、574は埋設炉の土器である。572・573は、いわゆる王冠型土器の破片である。文様はやや異なるが、同一個体の可能性がある。573は、左側に抉りが見られる。574は胸部のみで口縁部を欠損する。文様は太い背竹管による沈線によっている。文様はクランク状で、端部が渦を巻いている。頸部近くには、交互刺突による鋸歯文が見られる。575以下は、柱穴からの出土である。575は大形波状口縁の深鉢であるが、波頂部は高くない。主要モチーフは渦巻で基隆帯を用いている。波状部の内面にも貼り付け隆帯による文様が見られる。576は、波状4単位の深鉢である。口唇部に沿っては棒状工具の押さえによる波状文が見られる。文様は沈線によっており、頸部には数本の沈線が巡る。577は口縁部破片であるが、全体の器形は不明である。隆帶上に交互刺突による波状文、縱方向の深い沈線、背竹管等が見られる。また口縁部内面にも2本の突帯が巡る。578は深鉢の把手部である。横S字のモチーフである。579は波状口縁の大形土器である。口縁部は、緩やかに大きく外反する。主要モチーフは基隆帯による渦巻文で三角部分に三叉文等を充填している。波頂部は環状の把手となる。口縁部と胸部を明確に区切る横帯区画は見られない。580は深鉢の口縁部破片である。口縁部に沿って橢円状の区画が見られ、それに沿って

背竹管による爪形文が巡っている。587-598は焼土に伴うピット9からの出土である。589は火焰型土器の袋状突起の破片である。587は半截竹管で文様を描いた後、沈線部を深くなぞっている。592-594は王冠状の突起である。

番 号	器 種	分類		出 土 地 点	性 量	地 文	色 調	胎 土	二次施成	道 存	備 考
		系 統	器形								
572	圓錐	2	D-c	II	P 9						
573	?	2	*	*	燒土 I						
574	*	3	?	*	*			RL	浅黄	雲母少 やや粗	内下オログ、 内上一部スヌ 外中スヌ ナビ状
575	*	2	D-b	*	P 1				にぶい緑	雲母少 やや粗	内外スヌ
576	*	2+3 折衷	D-c	*	P 1-7	GLD		RL	明赤褐色 にぶい赤褐	雲母少 やや粗	外スヌ
577	*	3	?	*	P 1	42.9			にぶい緑	雲母やや多 やや粗	外オコゲ
578	*	3	?	*	P 2			?	緑	雲母やや多 やや粗	スヌ
579	*	2+5 削波	A-c	II-(2)	フリス=34 土坑 27	42.3 45.5	16.6 48.4		*	褐色、バニス 品木、粗	内一部スヌ 内下オログ 外スヌ
580	*	3	F-b	?	P 2			RL	にぶい黄緑	雲母少 やや粗	外スヌ
581	*	?	?	?	P 3	6.2		RL	にぶい緑	雲母やや多 やや粗	底 7/8 底 9/10
582	*	3	D-c	?	P 5	?		RL+LR	にぶい黄緑	雲母やや多 やや粗	外スヌ
583	*	3	?	?				?	にぶい緑	雲母少 粗	
584	*	1	?	b?				?	淡黄	やや密	外スヌ
585	*	?	A-a?	?		?		?	緑	やや粗	
586	*	2	C=D?	?					*	雲母少 やや粗	
587	*	3	D-b	II	P 9	35.5		緑～にぶい緑	*	内スヌ・オログ 外荒れ一部 スヌ	1/6
588	*	2	*	*	*	*			*	?	
589	*	2	C=D-D?	?	*				*	やや密	外スヌ
590	*	3	F	II				?	?	内スヌ	
591	*	?	C=D-b?	?	P 9	24.8		*	やや粗	?	1/12
592	*	2	?	II	*			にぶい緑	やや密	外スヌ	
593	*	2	D-c	*	*			*	?	やや粗	?
594	*	2	C=D	*	*				*	真岩?	
595	*	?	C-c	?	*			?	赤色粘土粒 バニス?	内一部スヌ	
596	鉢?	?		?	*			刺突文	淡黄緑	やや粗	内オコゲ 外スヌ
597	圓錐	?	?	?	*			?	淡黄緑	?	外スヌ
598	洗鉢	?	?	?	*			LR	にぶい黄緑	やや密	内スヌ?
											1/8

25号住居跡(599~611)

602が柱穴から出土している他は覆土からの出土である。599は小突起をもつ深鉢である。600は台付鉢である。脚部を欠損する。横S字状の突起が4個付され、そこから渦巻文が斜めに垂下する。それ以下は逆U字状の沈線で三叉文等が三角部分に充填される。601は浅鉢である。口縁部は外側からの押圧により小波状となっている。文様は背竹管沈線の渦巻である。底部は木葉痕である。605は深鉢の口縁部破片である。611は浅鉢の胴部破片で縄文の側面压痕が見られる。609は波状口縁の土器で刺突が見られる。

番号	分類	出土場所			法量			地文	色調	胎土	二次施成	遺存	備考	
		系統	器形	時期	口径	底径	器高							
599	深鉢	?	C-b	?	覆土	28.7		LR	にぶい褐色	パニス?粗	内スス 外スス	1/10		
600	台脚	2	/	II-①	*	18.8	7.2		(内にぬき、 外)淡黃	やや粗	内一部スス? 外スス	上2/3 下19/20		
601	鉢	3	/	*	2層	(15.9 13.5)	9.6	7.5	LR	橙	黄灰色粘土 塊多、塊少 雲母少 やや粗	外一部スス	底1/2 全体1/5	
602	深鉢	?	?	?	P 4			黒赤L	淡黃	密			1/10	
603	*	?	?	?	覆土			?	にぶい褐色	やや密	内スス			
604	*	?	?	?	*			黒赤L	淡黃褐色	〃	外スス			
605	*	2	F-e?	?	*	*			にぶい褐色	粗				
606	*	3	F-b?	?	*			?	〃	雲母やや多 粗	内オコゲ 外スス	1/12		
607	*	?	G?	?	*				橙	やや粗	外スス			
608	*	?	?	?	*			LR	〃	木口多、粗			1/8	
609	*	?	?	?	*			?	灰黃褐色	粗	外スス			
610	*	?	?	?	*			黒赤L?	橙	やや粗	内スス			
611	浅鉢	3	/	?	*			RL?	淡黃褐色	〃	内一部スス 外スス			

27号住居跡(612~624)

全て覆土の出土で北陸系の破片が多い。612は頸部から口縁部の破片で、頸部には半隆起線文がまわり、口縁部には繩文施文の後、縦方向の細い沈線が走る。614・616は半隆起線と爪形文である。615は木目状燃糸文である。618は半截竹管によるB字状文で、その中の格子目文で充填している。621は浅鉢と考えられる。口縁部に沿って無文帶となっている。624は同じく浅鉢の胴部破片である。

番号	分類	出土場所			法量			地文	色調	胎土	二次施成	遺存	備考	
		系統	器形	時期	口径	底径	器高							
612	深鉢	1	?	I	覆土			?	にぶい褐色	やや粗				
613	*	1	?	*	*			?	淡黃	密	内スス			
614	*	1	?	*	*			?	にぶい褐色	やや粗	内オコゲ			
615	*	1	?	*	*			木口状燃糸文	〃	雲母多、雲母少 やや粗	外一部スス			
616	*	1	?	*	*			?	淡黃褐色	黄灰色の粘土塊 やや密	内オコゲ 外スス	1/8		
617	*	4	?	?	*				橙	やや粗	外スス			
618	*	1	?	I-②	*			?	にぶい褐色	やや粗	外一部スス			
619	*	?	A-?	?	*	(15.9)		LR	〃	雲母多 やや粗	外スス	1/8		
620	*	?	?	?	*	?			〃	〃	内オコゲ 外スス漏れ			
621	浅鉢	3	/	?	*			RL	淡黃	雲母多 やや粗		1/16		
622	深鉢	1	?	I	*	8.0		にぶい褐色	やや粗			1/6		
623	*	3	?	?	*			RL	にぶい褐色	雲母少 やや密		1/8	406-562と同一 個体	
624	浅鉢	?	/	?	*			RL	淡黃	雲母多 やや粗		1/16		

29号住居跡(625・626)

2片共に床面からの出土である。625はほぼ直立する深鉢で地文は燃糸文である。626は半隆起線文と、断面三角形の隆帯による区画及び格子目文が見られる。

30号住居跡 (627・628)

2点共にピットからの出土である。627は越後系土器の口縁部破片で大きな袋状突起が付される。628は完形に近い深鉢である。口縁部には4個の突起が見られ、そこから隆帯が梢円状に巡る。腹部は無節の繩文(L)である。

32号住居跡 (629)

629は小突起をもつ小形の深鉢で、口縁に沿って突帯が巡っている。突帯に沿っては背竹管の押し引きが見られる。頸部には波状文が巡る。

34号住居跡 (630~632)

いずれもピット5からの出土である。630・631は小形の深鉢の口縁部破片である。631も繩文が施されているが磨耗により消えている。

番号	器種	分類			主生点	法量		地文	色調	胎土	二次焼成	遺存	備考
		系統	器形	時期		口径	底径						
625	深鉢	?	A-a	?	29住床直	29.8		燃系	橙	黄灰色の粘土塊多粗	外スス	1/8	
626	*	?	F	?	*	17.5 19.8			波状～ にぶい黃	黄灰色の粘土塊 やや密		1/4	
627	*	2	C-b?	?	30住P7	25.7 22.2			橙			1/12	
628	*	3	D-b?	II	30住P6	26.0 28.3	13.0 27.9	L	にぶい橙 一褐色	雲母少 やや密	内口一部・脚 スス 外口～中スス 外側丸れ	口2/4 脚9/10	
629	*	?	?	?	32住P3	13.5		?	にぶい橙	やや粗	外スス	1/8	
630	*	3	?	?	34住P5	7.1		LR	*			1/8	底端有紋様
631	*	?	?	?	*	8.0		?	にぶい黃			1/5	
632	*	?	?	?	*			LR	(内)灰白 (外)にふい黃	黄灰色の粘 土塊 やや密	外スス		

35号住居跡 (635~637)

いずれもピット5からの出土である。637は波状4単位の口縁部破片である。頂部はS字状の隆帯である。正面には、眼鏡状の小突起が付される。

36号住居跡 (633・634)

633は縱方向の半隆起線文、634は半隆起線と格子目文である。

37号住居跡 (638~645)

いずれも燒土及びピットからの出土である。638・639は同一個体と考えられる。器形は明確でない。口唇部に沿って背竹管の刺突が巡る。また弧状の断面三角形の隆帯に沿っても同様の文様が付されている。640は小突起をもつ深鉢で縦横の沈線が見られる。他は越後系土器の破片である。

38号住居跡 (646・647)

いずれもピットからの出土である。646は波状口縁の深鉢である。口縁部に沿っては繩文の側面圧痕が巡り、また波頂部からも垂下している。647は大波状口縁の土器である。半隆起線及び

隆帯による文様で三叉文等が見られる。

39号住居跡（648～653）

いずれもビットからの出土である。648は袋状の突起で、隆带上には細く、浅い爪形文が付されている。649の内面には横S字文が見られる。650は膨らみをもつ口縁部破片で、口唇部は肥厚する。口縁からは隆帯が垂下する。651は「く」の字状に外反する口縁部である。外面に炭化物の付着が著しい。653は無文であり、浅鉢の可能性もある。

番 号	類 型 種 類	分 類		出 土 地 点		基 礎		地 文	色 調	胎 土	二 次 燒 成	遺 存	備 考
		内 底	器 形	時 期		口 径	底 径						
633	深鉢	?	?	?	36住P47			LR	棕	雲母多 やや粗	外荒れ	1/8	
634	ク	1	?	I	36住P22			?	灰黄	やや粗	内スス。オコゲ		
635	+	?	?	?	35住P5	?		?	にぶい櫻	雲母少 やや粗	外スス	1/16	
636	+	?	?	?	o			LR	油灰黄	粗			
637	+	2	D-c	II	*	32.8			にぶい櫻	雲母少 やや粗	内オコゲ 外荒れ		
638	+	?	?	?	37住桃I	?			淡黄	雲母多 やや粗			639と同一個体
639	+	?	?	?	*	?			淡黄櫻	雲母多 やや粗	内スス		638と同一個体
640	+	?	?-b	?	37住P4				にぶい黄櫻	雲母少、粗	外スス	1/16	
641	+	?	D-c?	?	*	?		櫻	やや粗	内外スス		645と同一個体	
642	+	?	?	?	37住P5			RL?	明黄褐	"	外スス		
643	+	2	D+c	II	37住P4				褐	粗			
644	+	2	?	?	*				粗	やや粗	内スス 外荒れ		
645	+	2	D-c	II	*	?			*	難石有 やや粗	外スス荒れ	1/16	641と同一個体
646	+	3	*	I-②	38住P6	23.8	10.5 (11.8 12.9)	LR	淡黄櫻	褐色粘土塊 雲母有、雲母 粗	内明下オコ ゲ 外スス荒れ	1/4	228と同一個体
647	+	3-1	D-b?	I	*			?	?	穢多、粗			650と同一個体
648	+	2	C-s-D	II	39住P2				にぶい櫻	やや粗			
649	+	3	?	?	*	?			にぶい赤褐	"	内外スス		
650	+	3	C-a?	?	*			RL	淡黄櫻	雲母やや多 やや粗	内オコゲ 外スス		
651	+	?	B'-a	?	39住P5	13.5		?	にぶい黄櫻	雲母わざか やや粗	外オコゲ	口1/2 脚1/4	
652	+	?	A-a?	?	39住P2			RL	(内)板 (外)陶	やや粗	外スス	1/16	
653	+	?	?	?	39住P3				粗	雲母やや多 やや粗			

43号住居跡（654～656）

いずれもビットからの出土である。654は波状口縁の深鉢で、波頂部には円孔がある。口縁に沿っては半隆起線文と爪形文が交互に施される。656は口縁内面に断面三角形の隆帯が巡る。外側には細い沈線が3条入る。

46号住居跡（657～660）

いずれもビット6からの出土である。657は浅鉢の破片と考えられる。口縁部に突帯が巡るのみで無文である。658は隆帯の上下端に刺突を交互に施し、波状文を作り出している。内面には2本の突帯が巡る。659は波状口縁の深鉢である。口縁部及び頸部に半隆起線文が巡る。また頸部からは半隆起線文が垂下し、口縁の谷部にはボタン状の浮文が見られる。660は緩い波状の深

鉢である。波頂部にはX字状隆帯が付されている。

柱穴列1 (661)

柱穴列ではピット7から信州系の有孔鍔付土器が出土している。推定復原のため器形・文様等に問題はある。断面三角形の貼り付け隆帯による文様である。胴上半には2本の隆帯が一周し、そこからS字状の隆帯が垂下するものと考えられる。

H4区 溝状土坑 (662~667)

662~667は浅鉢である。662は半隆起線文及び背竹管による爪形文である。667は半截竹管の後沈線部を深くしている。またキザミも見られる。666は背竹管による爪形である。664~665は半隆起線文による縦区画である。

番号	器種	分類		出土地点	法量		地文	色調	胎土	二次焼成	遺存	備考	
		直徑	器形		口徑	底径							
664	深鉢	1	? - c	I - II 43住P3	?	?	?	にぶい緑	密	内外スス			
665	*	?	C - c	?	43住P7	?	?	浅黄緑	雲母やや多 やや粗	内スス			
666	*	?	?	?	*	?	*	黄灰色の粘土質 雲母少 やや粗					
667	浅鉢	?	?	?	46住P6			(内)灰褐色 (外)緑	雲母多 やや粗	1/12			
668	深鉢	3	?	?	*	?		灰黄緑	やや粗	外スス		577と同一個体	
669	*	3	D - c	II	*	22.1 20.6	11.0 17.9	20.8 17.9	RL	浅黄緑	黄灰色粘土 外ロスス 雲母少 やや粗	口 1/4 胴 3/4	底 7/8
670	*	3	I - b	*	46住	25.4	13.2	30.2 29.2	LR	にぶい緑	やや粗	内オコゲ	4/5
661	*	4	K - a	*	柱穴列1 P7	18.6				にぶい緑	水晶・輝石わ すか、密	1/12	
662	浅鉢	1		I	溝H-4			LR	にぶい緑	やや粗	外胎スス?	1/16	指紋あり
663	深鉢	2	?	?	*			?	褐灰色	雲母少 粗			
664	*	1	?	I	*								
665	*	1	?	*	*			L	浅黄緑	雲母少 やや粗	外スス	1/6	665と同一個体
666	*	1	?	*	*			LR	にぶい緑	雲母少 やや密	*		
667	浅鉢	1	?	*	*	?		(内)灰黃緑 (外)にぶい緑	雲母多 やや粗	外一部スス			

1号フラスコ状土坑 (668~669)

668は波状口縁の深鉢である。無文で口縁部に沿って細い棒状工具による刺突が巡る。また頸部には、貼り付けの偏平隆帯がみられる。669は浅鉢で、口縁部内面が肥厚する。肥厚部内面には有節沈線文が2列巡る。

3号フラスコ状土坑 (670~674)

671は深鉢の波状口縁部である。背竹管で沈線をなぞっている。また交互刺突による鋸歯文も見られる。672は半隆起線文と爪形文である。670では縄文の側面圧痕と半隆起線文・爪形文が見られる。

5号フラスコ状土坑 (675)

675は波状口縁の大形深鉢である。波頂部下には円孔が穿たれている。

6号フラスコ状土坑 (676)

676は越後系土器の胴部破片である。

番 号	器 種	分類			出 土地 点	法 量	地 文	色 調	胎 土	二次焼成	遺 存	備 考
		系 統	器 形	時 期								
668	深鉢	5	B-3b-c	I-① (フラスコ1 (G4P6))				暗赤褐	やや粗	外スス	1/12	
669	浅鉢	5		?	?			褐	やや密			
670	深鉢 新波	1・3	B'-a	I (フラスコ3 (ISIP10))			LR	にぶい褐	やや粗	内外スス	1/15	
671	?	B?-b	?	?			LR	褐	やや密	?	1/16	
672	?	1	?	?			?	にぶい褐	?	内一層スス 外スス		
673	?	?	?	?			?	褐	やや粗	外スス	1/6	
674	?	?	I	?			?	にぶい褐	青白小片 やや多、密	?		
675	?	6	A-b'	?	フラスコ5 (G6P33)	36.2	LR	褐	稠多、粗	内外スス	1/4	突起部下側成形 穿孔
676	?	2	?	II (H7P9)				?	やや粗		1/8	

7号フラスコ状土坑 (677~707)

677は波状口縁の土器である。頸部には隆帯が3本巡り、陰刻による玉抱き三叉文が見られる。口縁部は、三角形区画で基隆帶によっている。三角部分は陰刻となる。678は小突起を有する深鉢の口縁部破片である。隆帯による三角区画文である。679は口縁部無文帯で、口縁に沿って繩文の側面圧痕が巡る。以下は繩文である。680は胴部に膨らみをもち、口縁部の外反する深鉢である。口縁部に沿って縱方向の櫛歯状の短沈線が連続する。端部は連続の押えである。以下は繩文となる。681は口縁部無文帯以下に直線文・波状文である。682は口縁部破片で無節の繩文である。683は小突起を有する小形の深鉢である。684は小波状口縁で、内面に折り返しの輪積み痕を有する。686は胴部の膨らみをもつ小形の深鉢である。692は直線的に開く深鉢で、全面に繩文が施される。695は基隆帶を用いている。

8号フラスコ状土坑 (708~728)

708はキャリバー形口縁の深鉢である。口縁部には3本の沈線が巡り、そこから半截竹管文が垂下する。地文は繩文である。709は小形の深鉢である。鶴頭冠を思わせる突起が付される。以下は繩文のみで底部近くは無文となる。710は突起を有する深鉢である。隆帯及び背竹管の爪形が見られる。711は頸部から胴部の破片である。半隆起線文及び基隆帶によっており、無文部を多く残している。三叉状の陰刻が見られる。715は大形の深鉢である。口縁部は無文帯で以下は繩文である。717は隆帶上に爪形文が付される。722は小波状突起の口縁部である。口唇部には、キザミが付される。721は円孔のある把手である。

番号	器種	分類			出土状況			法量			地文	色調	胎土	二次焼成	遺存	備考	
		系統	器形	時期	口径	底径	器高										
677	深鉢	2	C-c	II	フクスコ7	24.3					にぶい緑	雲母少 やや粗	外スス	1/6			
678	"	2	?	?	"	20.7					?	緑	やや密	内一部スス	1/8		
679	"	3	B-a-b	?	"	25.8				RL	にぶい緑	黄灰色の粘 土塊 やや密	外スス	1/8			
680	"	3	B'-a	II-①	"	31.2				LR	"	緑多 粗	"	1/3			
681	"	3?	L-a?	?	"	14.1				RL	明黄緑	やや粗	内オコゲ 外スス	1/6			
682	"	?	A-a	?	"	19.6				L	灰黄緑	穀粒 やや密	内外オコゲ	1/4			
683	"	?	A-b	?	"		6.5	11.8	LR	緑	やや粗	内ロオコゲ 底オコゲ 外下荒れ 上オコゲ	1/1				
684	"	?	"	?	"				LR	明黄緑	"	内外ロオコゲ	4/5				
685	"	?	AK-a	?	"	10.7				にぶい黄緑	水晶多 やや粗	内オコゲ 外スス	1/6				
686	鉢	?		?	"	14.9			LR	明緑	やや密	外スス	1/5				
687	深鉢	"	?	?	"		10.2		LR	緑	やや粗	"	1/2				
688	"	?	?	"	"	12.6				"	"	内ロオコゲ	1/1				
689	"	?	?	?	"		11.9				黄灰色の粘 土塊 粗		底左各 柄1/3				
690	"	?	?	?	"		5.7		L	にぶい緑	穀粒多		底1/1 柄1/5				
691	浅鉢	?		?	"		17.8		RL	淡黄緑	雲母多、水晶 わずか やや粗		1/6				
692	深鉢	?	A-b	?	"	23.7	23.2	(12.9)	RL	緑～にぶい 緑	穀多、ハイミク 粗	内一部スス 外上スス 外下荒れ や荒れ	4/5				
693	"	?	?	?	"					(内)緑 (外)灰白	黄灰色の粘 土塊 やや粗	内オコゲ 外オコゲ					
694	"	?	?	?	"					にぶい黄緑	やや粗	外スス					
695	"	2	?	?	"						雲母有、薄石?	内スス					
696	"	2	?	?	"						やや粗	外スス				同一個体か	
697	"	2	C-a-D	?	"					淡黄緑	雲母 やや粗	外スス	1/12				
698	"	3	F?	?	"					しか黒赤? 天板	やや粗	"					
699	台付 鉢?	2		II	"					(内)にぶい緑 (外)淡黄	雲母少、水晶 少 やや密	内オコゲ	1/16				
700	深鉢	?	?	?	"				L	淡黄	粗	内オコゲ 外荒れ					
701	"	2	?	?	"					?	?	内スス			703と同一個体 か		
702	"	?	?	?	"				RL	"	粗	内オコゲ	1/6				
703	"	2	?	?	"						?	内スス				703と同一個体か	
704	"	2	?	?	"					にぶい黄緑	雲母や 多 粗	"					
705	"	?	?	?	"					にぶい褐	やや粗	内オコゲ					
706	"	?	?-b	?	"					にぶい黄緑	"	外スス	1/10				
707	"	3	F-e-D	?	"				RL	明黄緑	粗	"					
708	"	3	C	II-③	フクスコ8	33.4	15.4	35.7	RL	にぶい緑	水晶、雲母少 且若? やや粗	内一層下オコゲ 外上ロスス	口3/4 底9/10 柄9/10				
709	"	3	(A-b)	"	"	19.6	11.4	14.3	RL	(内)褐色 (外)淡黄	不明赤褐色 雲母少 やや密	内一層オコゲ 外ロオコゲ	1/4				
710	"	4	C-b	?	"	30.2	32.2			にぶい黄緑	ベニヒテ いは長石 極めて多、雲 母多、やや粗	内外スス	1/8				
711	"	2	?	II	"					?	?	内オコゲ					
712	"	2	?	"	"				LR?	にぶい緑	やや密						
713	"	2	?	"	"					にぶい褐	"	外スス					
714	"	?	?	?	"		11.8		L	にぶい黄緑	やや粗	内オコゲ	1/8				

番号	器種	分類			出土場所	法量			地文	色調	胎土	二次焼成	遺存	備考
		系統	器形	時期		口径	底径	脚高						
715	深鉢	?	A-a	I	フラスコ8	35.4			RL	淡黄褐色	赤褐色の粘土地わざか 表面有光澤 やや粗	内外スス 外下荒れ	4/5	
716	#	?	?	?	#				淡赤L	にぶい褐色	やや密	内オコゲ		
717	#	?	?	?	#					にぶい黃褐色	やや粗	内オコゲ		
718	#	2	?	II	#					にぶい褐色	やや密	内オコゲ		
719	#	1	A-b?	?	#	?			?	〃	〃	外スス		
720	#	2	?	?	#					にぶい褐色	〃	外スス		
721	#	?	?	b	#				?	〃	〃	外スス		
722	#	3	#	?	#				RL	(内)淡 (外)灰褐色	〃	〃	1/10	
723	#	?	?	?	#				?	にぶい褐色	表面やや多 やや密	〃		
724	#	3	?	?	#				LR	淡黃褐色	やや粗	内オコゲ		
725	#	3	?	?	#				LR	褐色	黄褐色の粘 土塊、やや粗	内オコゲ		{ 同一個体 }
726	#	3	?	?	#				LR	〃	〃	外一部スス	1/8	
727	#	?	?	?	#				LR	にぶい黃褐色	やや密	外一部スス	1/8	
728	洗鉢	?		?	#				RL	褐色	表面やや多 やや粗	内オコゲ		

9号フラスコ状土坑 (729~738)

729・730・732は半隆起線文及び爪形文の付される土器である。733~735は同一個体で半隆起線文による文様である。737・738は洗鉢である。738は算盤玉状の器形で、半截竹管の平行沈線施文後、沈線部を深くなぞっている。キザミ及び爪形文が付される。また陰刻による玉抱き三叉文もある。胴部は繩文である。

番号	器種	分類			出土場所	法量			地文	色調	胎土	二次焼成	遺存	備考
		系統	器形	時期		口径	底径	脚高						
729	深鉢	1	?-a	I	フラスコ9	?			LR?	にぶい褐色	やや粗	内スス 外スス		
730	#	1	?	#	#				LR?	(内)にぶい褐色 (外)淡黃褐色	〃	外スス		
731	#	1	?	?	#					淡黃褐色	〃			
732	#	1	?	I	#				?	淡淡黃褐色 (内)にぶい黃褐色	やや密	外スス		
733	#	3	?	II	#				LR?	にぶい黃褐色	青褐色の粘 土塊多、やや粗	〃		{ 同一個体 }
734	#	3	?	?	#				LR	〃	〃	〃		
735	#	3	?	?	#				LR	〃	〃	〃		
736	#	?	?	?	#		7.4		LR	褐色	やや粗	底外スス 胴1/2		
737	洗鉢	3	?	?	#				LR	淡黃褐色	やや粗			
738	#	1		II	#	42.4			?	褐色	表面多 やや粗	外一部スス	1/8	

11号フラスコ状土坑 (739~776)

740は燃糸文地上に半隆起線文が継走する。部分的に沈線部をなぞっている。739・741・742は越後系土器の胴部破片である。743は火焔型土器の鶴頭冠部の破片である。鶴頭冠は低く横長である。内面は横S字状である。744・745・747は同一個体と考えられる。746はX字状の突起が付される。748は大形の深鉢である。橋状の把手と、渦巻文の把手とが付される。横帶区画を基本としている。文様は半隆起線文で端部が渦を巻く。749も類似の破片である。750は口縁部が部分的に折り返し口縁となる。751は胴の膨らむ深鉢である。752は深鉢口縁部破片である。口縁に沿っては交互刺突の連続波状文が巡る。その下には、重渦巻文及び横S字文が見られる。

753 は浅鉢である。翼状の突起が4個付され、その間には小橋状突起が見られる。体部は繩文施文の後、縄文の側面圧痕による渦巻文等が見られる。754 は外面は縄文のみである。内面には突起部に鶴頭冠状の文様が見られ、また貼り付け隆帯によるX字状の文様も見られる。755 の浅鉢は半隆起線文による文様である。756 は小形の鉢と考えられる。4条の沈線が巡っている。757 は台付鉢と考えられる。758 も台付鉢である。頸部に隆起線が巡る。759 は無文の浅鉢である。760 は深鉢の口縁部に近い破片である。基隆帶による渦巻文が見られる。761 も深鉢の口縁部破片である。765 は三叉状橋状把手の付いた頸部破片である。766 は波状口縁の頂部破片である。767 も波状口縁の土器で爪形文が見られる。770 は小形深鉢土器の口縁部破片である。背竹管の押し引きが見られる。773 も波状口縁で、半載竹管文による文様である。775 は外反する口縁が端部で強く内傾する器形で屈曲部に指押しによる波状文が連続する。上部は無文帯である。

番 号	器 種	分 類			出 現 地 点	法 量			地 文	色 調	胎 土	二次施成	遺 存	備 考
		系 統	器 形	時 期		口徑	底径	器高						
739	深鉢	2	?	II	フラス=11 下層				稚	黒褐色 やや粗	外荒れ			
740	?	1	?	?	?	12.7			淡黄橙	粗		1/4		
741	?	2	?	II	?	19.5			稚	?	内オコゲ	1/7		
742	?	2	?	?	?				(内)X字 (外)沿	やや粗		1/10		
743	?	2	D-b	II-①	?	22.6 20.6			にぶい、直規	?	内一帯スス 外スス	1/8		
744	?	2	?	II	フラス=11 下層				稚	?	内オコゲ			
745	?	2	?	?	フラス=11				?	?	?			同一個体
746	?	2	C+D	?	?				淡黄橙	?	外荒れ	1/12		
747	?	2	?	?	フラス=11 下層				稚	?	内オコゲ		744-745 同一 個体	
748	折 鉢	2-3	C-b	?	フラス=11	37.6			?	黒めて粗	内一帯スス 外スス	1/2		
749	?	+	C+D	?	?	40.4			にぶい、泡	粗	外荒れ	1/12		754 と同一 個体
750	?	A-a	?	?	?	21.6		L	にぶい、粗、 淡少	黒褐色粘土 やや粗	内外オコゲ	3/5		
751	?	B'-a	?	?	フラス=11 下層	28.0		RL	(内)厚壁 (外)にぶい粗	やや粗	外スス	1/4		
752	?	3	?	II	?	34.5		LR	にぶい、泡	粗	外首下スス	1/4		
753	深鉢	3	?	II-①	?	44.6		LR	稚	やや粗	内外一帯スス	3/5		
754	?	5と3	?	II-①	?	31.0 28.5	8.5 10.8	LR	にぶい、黄澄	?	内外スス	1/2		
755	?	?	?	?	?			?	にぶい、泡	黒褐色 やや粗				
756	鉢か 深鉢	?	?	?	?				(内)C-(外) (外)灰褐色	やや密	外スス			
757	深鉢	2	D-c	II	?	24.5			稚	やや粗	内オコゲ 外スス			
758	台付	2	?	?	?			?	?	粗				
759	浅鉢	?	?	?	フラス=11				淡黄橙	黒褐色 やや多粗		1/8		
760	深鉢	2	?	II	フラス=11 3中折				稚	黒褐色 わざか粗	外スス	1/8		
761	?	2	?	?	?				灰褐色	粗	?			
762	?	2	C+D	?	フラス=11 下層				稚	黒少、粗	内オコゲ		778 と同一個体	
763	?	2	?	?	フラス=11 下層			?	?	粗	外スス			
764	?	2	?	?	フラス=11 下層				にぶい、粗	?	?			
765	?	2	C+D	?	?				(内)C-(外) (外)淡黄	黒褐色 やや多粗	?			
766	?	?	?	?	?				淡黄	やや粗				

番号	器種	分類		出土場所	法量			地文	色調	胎土	二次施成	遺存	備考
		系統	器形		口径	底径	高さ						
767	深鉢	1	?	I	フラスコII 下層				にぶい緑	やや濃			
768	浅鉢	?	?	フラスコII				?	グ	やや粗			
769	深鉢	?	?	?				?	グ	やや粗			
770	?	?	?	?	フラスコII 下層			?	グ	グ	内外スス		
771	?	?	?	?	フラスコII 下層			LR	グ	グ	*		
772	*	3	?	?	*			RL	グ	雲母ねづか やや粗	外スス		
773	*	?	D-c	?	フラスコII				グ	やや粗	?		
774	*	3	C+d	?	フラスコII 下層			LR	緑	グ	外スス	1/6	
775	*	3	E?	?	グ			LR	グ	粗	グ		
776	*	3	C?	?	フラスコII			LR	にぶい緑	やや濃	グ	1/12	

13号フ拉斯コ状土坑(777~782)

777は波状口縁の深鉢である。780は頸部破片であるが頸部に文様帶の区切れは見られず胴部と口縁部の文様帶が連続している。

15号フ拉斯コ状土坑(783)

783は口縁部上端を欠損する深鉢である。雑文地上に浅い沈線により文様を描いている。胴部は横帯区画の中に蕨手状文が見られる。頸部は平行線及び波状沈線である。口縁部も平行線及び波状沈線の梢円区画文が見られる。

番号	器種	分類		出土場所	法量			地文	色調	胎土	二次施成	遺存	備考	
		系統	器形		口径	底径	高さ							
777	深鉢	3	C-c	?	フラスコII	41.0	14.3	(6.0)	L	緑	粗	内外スス	1/6	
778	*	2	?	II					にぶい緑	グ	外スス	782と同一個体		
779	*	2	?	?	フ			?	グ	やや粗		長石非常に多		
780	*	2	?	?	フ				グ	粗	外スス			
781	*	3	?	?	フ			RL	グ	やや粗				
782	*	3	?	?	フ			RL	淡黄緑	やや濃	内オコゲ 外スス			
783	*	3	F	I-(2)	フラスコII	?	(14.0)	(30.0)	RL	にぶい緑	グ	内外スス	底完存	

16号フ拉斯コ状土坑(784~800)

784は胴部の膨らむ大形の深鉢である。頸部をまわる隆起線文により文様帶が分れる。口縁端部にはS字を基本とした鋸歯文をもつ大小の把手が見られる。口縁上半は梢円区画で、区画に沿って押し引き文が見られ、内部は縦の連続刺突文である。口縁部下半は縦区画である。785は横走する繩文を有する深鉢である。786は筒状の深鉢で隆起線文によるクランク状の文様である。787は波状口縁の土器であるが、波状部はそれほど大きくない。主要モチーフは渦巻文で基隆帯によっている。790は深鉢の口縁部破片である。渦巻文の基隆帯には細く浅い爪形のキザミが付される。794は膨らみをもつ胴部に「く」の字状に外反する口縁部をもつ。全面雑文(RL)である。795~797は胎土・文様等から同一個体と考えられる破片である。頸部は「く」の字状に大きく外反する。口縁部には、橋状の把手や795のような鶴頭冠様の把手が見られる。798は一応波状口縁の土器としたが、浅鉢の可能性もある。半隆起線文と爪形文による文様である。799は浅鉢である。また800も浅鉢の可能性がある。

番号	分類			出土場所	法量			地文	色調	胎土	二次焼成	遺存	備考	
	系統	器形	時期		口径	底径	高さ							
784 保鉢	3	B'-b	II-②	フ拉斯コ	36.5 37.7			LR	模写	雲母少・薄石? やや粗	外スス	口1/2 脚1/6		
785 × ?	B-a	?	*		14.5			LR	にぶい・模写	雲母やや多 やや密	内オコゲ 外スス	1/6		
786 × 3	K-b	II	*		10.6			RL・LR	にぶい・模	雲母少 やや密	内一部スス 外スス	1/4		
787 × 2	D-b?	*	*	(8.9)					〃	雲母多 やや粗	外スス	1/6		
788 × 2	?	?	?	*					模	粗	内スス 外荒れ			
789 × ?	?	?	?	*					模写	やや密	内スス			
790 × 2	C?	?	*				15.5		にぶい・模	〃	内・外一部スス			
791 × 2	?	II	*						模	粗	内一部スス	1/6		
792 × ?	?	?	*	*					残黄椎	密		1/10		
793 × ?	A-a?	?	*					LR	模	やや粗	内一部スス	1/12		
794 × 1	B'-a	I	*	37.3 12.8 38.5	RL	明黄梅			黄褐色の粘土板 やや密	内外口スス 外下荒れ	口1/4 脚1/8 底2/3			
795 × 2	C-b?	II	*						模写	やや粗	内側オコゲ			
796 × 2	*	?	*						〃	〃	〃			同一個体
797 × 2	*	?	*	*					〃	〃	〃			
798 × 1	?-c	I	*					?	残黄椎	赤褐色土塊 やや粗	外スス			
799 深鉢	3	?	?	*				RL?	模	雲母やや多 やや粗			1/16	
800 深鉢	?	F-a?	?	*					残黄椎	やや粗				浅鉢にしては厚い。

17号フ拉斯コ状土坑 (801~816)

801 はいわゆる王冠型土器の波頂部である。802は波状口縁の土器で基隆部による横S字文が連続する。804にはミミズク様の突起がある。808は口縁の突起部である。中央の幅広の突起部には細い円形刺突が見られ、また口縁に沿っては背竹管による押し引きが見られる。815・816は浅鉢である。

18号フ拉斯コ状土坑 (817~820)

817は波状口縁の深鉢である。全面繩文(L)である。818は表面荒れが著しく地文は不明である。隆起線文による文様で、中央には把手が付される。819は小形の深鉢である。口縁部には半隆起線文が横走し、口縁端部に沿って横方向の刺突が巡る。以下は無文である。820は橋状把手をもつ口縁部破片である。

番号	分類			出土場所	法量			地文	色調	胎土	二次焼成	遺存	備考	
	系統	器形	時期		口径	底径	高さ							
801 深鉢	2	D-c	II	フ拉斯コ				にぶい・模	やや粗					
802 × 2	*	*	*		*			にぶい・模写	*	内オコゲ 外スス				
803 × ?	C-c?	?	*					?	にぶい・模	粗	外スス			
804 × ?	C-b-D	?	*					模	やや粗	内一部スス 荒れ				
805 × 2	?	?	*					?	模	内オコゲ	1/6			
806 × 2	?	?	*					模写	やや密	〃				
807 × ?	?	?	?	*				?	雲母やや多 やや粗					
808 × ?	?-b?	?	*					?	模	雲母多・粗	内オコゲ	1/14		
809 × ?	F-a?	?	*					残高L	〃	やや粗		1/16		
810 × 3	?	?	?	*				?	模	〃				
811 × ?	?	?	?	*				模	にぶい・模	粗				

番号	器種	分類		出土地点	法量		地文	色調	胎土	二次焼成	遺存	備考
		系統	器形		時期	口径						
812	深鉢	?	?	?	フラスコ型			縦	雲母多 やや粗			
813	#	?	?	?	#			LR	#	粗	内オコゲ 底窓有 銅1/3	
814	#	?		?	#			LR・RL	#	綱多、雲母少 やや粗	外スス荒れ	
815	浅鉢	?		?	#			RL	淡黄	雲母多 やや粗	外スス	
816	#	3		?	#			RL	進	雲母少、やや粗		
817	#	?	C-c	?	フラスコ型	21.3		L	にぶい縦	綱多、やや粗	内スス	1/3
818	#	2	C-b	II	#	20.0 21.9		?	#	粗	内一層スス 外荒れ	1/4
819	#	?	?	?	#	0.9 8.5		?	にぶい縦	水晶多 やや粗	内スス	口1/2 銅1/3
820	#	3	Cs-D-b	?	#			LR	#	粗	外スス	

19号 フラスコ状土坑 (821~827)

821は橋状把手をもつ深鉢である。口縁部は縄文のみである。822は小形の鉢である。口縁部に沿っては隆起線文、体部にはY字状の沈線文が見られる。825は底部破片と考えられる。底部内面には指頭圧痕が、底面は網代底である。827は頸部から口縁部の破片である。頸部には隆起線文が巡る。

20号 フラスコ状土坑 (828~831)

828は小波状の口縁部破片である。隆起線文及び三叉文が見られる。829は三叉文及び渦巻文が見られる。831は浅鉢である。薄手で焼成堅敏である。口縁に沿ってまわる隆起線は断面台形である。

21号 フラスコ状土坑 (832~839)

832は半隆起線文及び爪形文である。834は沈線内に刺突の巡る渦巻文が見られる。838は頸部から口縁部破片で半隆起線文による文様である。

22号 フラスコ状土坑 (840~844)

当土坑出土の土器は比較的古手のものがまとまって出土している。

840は波状口縁の土器である。口縁に沿って爪形文が巡り、縦方向の半隆起線文の区画内には、格子目文が充填される。また竹管による蓮華文も見られる。841は小形の深鉢である。口縁部に突起が付される。胴部は全面縄文である。842は胴部に膨らみをもち、口縁部は外方に広がる。折り返し口縁で、1ヶ所片口状に端部を指で押さえている。折り返し部分には、縄文の側面圧痕が巡る。胴部は横方向の羽状縄文である。843は波状口縁で折り返しとなる。折り返し部分には、縄文の側面圧痕が見られる。844は木目状撚糸文である。

番号	器種	分類		出土地点	法量		地文	色調	胎土	二次焼成	遺存	備考
		系統	器形		時期	口径						
821	深鉢	3	F-b	II	フラスコ型	36.0 39.0		RL	にぶい縦	やや粗	外荒れスス	1/8
822	鉢	3		#	#	10.5 6.4		RL	にぶい縦	#	外スス	1/3
823	深鉢	?	?	?	#			?	にぶい縦	雲母少 やや粗	内オコゲ	1/8

番 号	分 類			出 土 地 点	度 量			地 文	色 調	粘 土	二次焼成	遺 存	備 考
	系 統	器 形	時 期		口 径	底 径	高 度						
824	深鉢	3	?	?	フ拉斯コⅡ			RL	(内) 棱 (外) にぶい棱	やや密	外スス	1/8	
825	"	?	?	?	"			浅鉢	やや粗	片面スス			
826	"	3	?	?	"			LR	にぶい棱	やや密			
827	"	3	?	?	"			LR	"	不明赤色或黄 藍母多、粗	外スス禰れ		
828	"	2	C-b	?	フ拉斯コⅡ			△	にぶい鶴	極めて粗	内外スス	1/12	
829	"	2	?	?	"			△	"	"	"		
830	"	?	?	?	"			LR	にぶい鶴	水晶わざか やや密			
831	浅鉢	1	/	?	"			?	輪滑	やや粗		1/12	
832	深鉢	1	?	?	フ拉斯コⅡ			RL?	にぶい鶴	黄灰の粘土 塊、やや密	外スス		
833	"	?	?	?	"			?	にぶい鶴	やや密	内一層スス 外スス		
834	"	?	?	?	"			△	にぶい鶴	黄灰色の粘 土塊、密	内外スス		
835	"	?	?	?	"			△	鶴	6 mmの繊 やや粗	内オコゲ		
836	"	?	?	?	"			△	にぶい鶴	やや粗	"		
837	"	?	?	?	"			RL	"	"	"		
838	"	3	?	?	"			LR	"	黄灰色の粘 土塊やや多 やや密	外スス	1/6	
839	"	3	?	?	"			LR	浅黃地	やや粗	"		
840	"	1	C-b	1-②	フ拉斯コⅡ	40.0		?	(内) にぶい鶴 (外) にぶい鶴	やや粗	外スス	1/8	
841	"	?	A-b	"	"	13.4	0.9	RL	にぶい鶴	藍母・鶴やや 多、やや密	内オコゲ 外一層スス	底なし	
842	"	3	1-b'	"	"	35.4		LR	"	やや密	内外スス	1/6	
843	"	3	C? - b	"	"	22.2		LR	"	黄灰色の粘 土塊少 量	内オコゲ 外一層スス	1/6	
844	"	?	?	I	"			木質快熱火文	"	"	外スス		

24号 フラスコ状土坑 (845・846)

845・846、2点共に爪形文の土器である。

25号 フラスコ状土坑 (847・848)

847は浅鉢である。口縁に沿って隆起線文が巡る。848は深鉢の脇部で羽状の縞文である。

番 号	分 類			出 土 地 点	度 量			地 文	色 調	粘 土	二次焼成	遺 存	備 考
	系 統	器 形	時 期		口 径	底 径	高 度						
845	深鉢	?	?	?	フ拉斯コⅡ				淡黄	密			
846	"	1	?	?	"				にぶい鶴	やや密			
847	浅鉢	?	/	?	フ拉斯コⅡ	33.4		LR	鶴	藍母やや多 やや密		1/12	
848	浅鉢	3	?	?	"			LR	淡黃鶴	藍母少・粗	内スス		

26号 フラスコ状土坑 (849-872)

当土坑からは比較的多くの土器が出土している。849は下半部を欠損する。口縁部には小突起が付され、また口縁に沿って背竹管による押し引きが2条巡る。その下には同一工具による三叉文風の沈線が見られる。頸部には同一工具による平行線、波状文が施され、その下には縦の直線文が見られる。852は口縁部は接合しないものの、図のようになると想われる。燃糸文を地文とし、口縁部及び頸部には棒状工具による沈線が巡る。口縁部は小突起になると想われる。851は口縁部がやや肥厚する深鉢である。全面に縞文が施される。850も深鉢と考えられる。口縁部上端は無文とし、その下に指圧による小波状の隆起がまわる。それ以下は縞文地上に浅

い沈線がまわる。853は胴部が算盤玉状に屈曲する深鉢である。屈曲部には突帯が巡るが、他は無文である。有孔鈎付土器の可能性がある。854は口縁部に突起の付された土器である。三角形状の突起で、突起に沿ってはヘラ状工具の刺突がみられる。補修孔がある。中部高地系の土器である。855は把手である。連続の刺突が見られ、854に類似することから同一個体の可能性もある。856～859は浅鉢である。856は棒状工具による沈線と刺突が見られる。857は半截竹管文による平行沈線文である。858は小形の鉢で口縁端部は細く内傾する。859は下半部の破片で、屈曲部に半隆起線文以下は無文である。860は波状口縁の深鉢である。口縁に沿って爪形文・半隆起線文が巡る。863は口縁部の突起で円孔が穿たれている。867は丸味のある器形から台付鉢と考えられる。872は外反する波状口縁をもつ深鉢である。871は後期掘之内系の土器である。

番 号	器 種	分 類		出 土 場 所	法 量		地 文	色 調	胎 土	二次焼成	遺 存	備 考	
		器形	時期		口径	底径							
849	深鉢	3	C-b	I-②	フラスコ26	33.6 32.5	LR	(内)にひび (外)淡黄	雲母や多 やや粗	内スス・弱火 外ロスス	口9/10 脚1/2		
850	"	3	F-a	?	"	36.8	LR	にぶい粗	やや密	外スス	1/5		
851	"	?	B-a	?	"	26.2	RL	淡黄粗	やや粗	内外スス	口1/8 脚3/4 底1/4		
852	"	3	F-b	I	"	23.2 24.5	11.4	26.7 25.6	L	にぶい粗	やや密	外スス	口1/4 脚3/4 底1/1
853	"	4	J	I-②	"				緑	水晶多 やや粗	内一部スス 外下スス		
854	"	4	C-b?	"	"				ケ	雲母非常に多 やや密	外一部スス	1/8	補修孔
855	"	4	?	"	"				にぶい粗	やや粗	スス付着		
856	浅鉢	1		I	"	34.6			明赤褐	"		1/8	
857	"	1		?	"				にぶい粗	やや粗		1/12	
858	深鉢	?		?	"	16.1			緑多 やや粗	外スス		1/8	
859	?		?	?	"				淡黄	やや粗			
860	深鉢	1		I	"				?	にぶい粗	やや密	外スス	
861	"	3	F?	?	"				?	にぶい粗	"		
862	"	2	?	?	"				にぶい粗	やや粗	内スス		
863	"	?	?	?	"				にぶい黄粗	"	外スス		
864	"	2	?	?	"				にぶい粗	"	内スス		
865	"	3	?	?	"				LR	にぶい褐	多 やや粗	外スス	
866	"	2	?	?	"				?	にぶい粗	やや粗		
867	台付鉢	2		?	"				淡黄粗	やや密	内一部スス		
868	深鉢	3	?	?	"				RL	にぶい黄粗	やや粗	外スス	
869	"	2	?	?	"				RL	"	やや密	内オヨダ 外スス	1/12
870	"	3	?	?	"				RL?	淡黄粗	やや粗		1/12
871	"	3	?	?	"				RL	ケ	緑多 やや粗		
872	"	?	B-b	?	"				LR	にぶい粗	雲母少・緑多 粗	外スス	1/10

28号 フラスコ状土坑 (873～882)

873は三角状の波状口縁をもつ深鉢である。口縁部に沿って浅い沈線及び連弧文が巡る。頸部には沈線文が巡り、胴上半には、やはり連弧文が見られる。874は突起を有する深鉢である。突起部は台形状で円孔が穿たれ、また隆帶に沿ってはキヤミが付される。外面は半隆起線文による文様である。875は浅鉢の可能性がある。880は三角形状の波状口縁である。頂部の渦巻文は

断面三角形の隆帯である。

30号フラスコ状土坑 (883~885)

出土遺物は少なく、図示したものは3点である。883は浅鉢である。屈曲部に半隆起線文及び爪形文が見られる。

番 号	分 類	出 土 場 所			形 状			地 文	色 調	胎 土	二次焼成	遺 存	備 考
		系 統	器 形	時 期	口 径	底 径	高 度						
873	深鉢	3	C-c	?	フ拉斯コ 4層	18.7 21.3	10.5 23.4	LR	無文	赤褐色の胎 土 穂多・やや粗	外観 外上スス 中口スス 内下オカゲ	口1/3 脚2/3 底2/3	
874	*	3	B-b	II	*	18.0 19.0		RL	(内)にぶい 横	やや密	内口オカゲ	1/8	
875	*	1	?	I	*			?	にぶい縦	やや密			
876	*	1	?	?	*	?		にぶい縦	やや密	外スス			
877	*	2	C?	?	*			縫	穂多・粗	*			
878	*	2	?	?	*			縫	穂多・粗	*			
879	*	3	F?	?	*			LR	*	*			
880	*	2	D-c	II	*	?		縫	穂多 やや粗	外スス			
881	*	3	?	?	*			にぶい縦	穂多やや多 やや粗	内スス			
882	*	3	?	?	*			RL	*	やや粗			
883	浅鉢	1	?	?	フ拉斯コ 3層			LR	浅黄縫	*			
884	深鉢	?	?	?	*			LR?	縫	*			
885	*	?	?	?	*			LR	黄縫	*	外スス		

31号フラスコ状土坑 (886~903)

886は小突起をもつ深鉢である。縫文(L)の後、縫方向の波状沈線が垂下する。887は口縁端部が肥厚する。端部には櫛歯状の沈線が連続する。内側には突帯が巡る。888は胴部にやや膨らみをもつ深鉢である。口唇部に沿っては沈線が巡る。890・891は共に口縁部に沿って側面压痕が巡っている。901は浅鉢で口縁部に沿って沈線が巡っている。902・903は共に中部高地系と考えられる。902は有孔鉢付土器の胴部と考えられるものである。L字状の左右対象の隆帯が見られる。外面は朱彩される。903は把手部の破片である。やはり朱彩されている。

番 号	分 類	出 土 場 所			形 状			地 文	色 調	胎 土	二次焼成	遺 存	備 考
		系 統	器 形	時 期	口 径	底 径	高 度						
886	深鉢	3	?	?	フ拉斯コ 3層	31.2 30.3		L	黄縫	やや粗	外スス	2/3	
887	*	L-a	?	*	19.0			LR	にぶい縫	やや粗		1/8	
888	*	D-a	?	*	12.3			RL多生	*	やや粗		1/6	
889	*	?	?	?	*	14.6		LR	(内)明黄縫 (外)にぶい縫	穂母やや多 やや粗	内側オカゲ	底9/10 胴1/2	
890	*	C-a	?	*	?	?		L	にぶい縫	黄褐色の胎 土粒 やや密	外スス		
891	*	3	*	?	*	?		R	浅黄縫	密	内オカゲ 外スス		
892	*	?	?	?	*	61.0		RL	にぶい縫	やや密		1/4	
893	*	2	?	?	*				*	*	内スス		
894	*	3	?	?	*			淡黄	穂母少 やや粗	外スス			

番号	器種	分類			出土地點	法量			地文	色調	胎土	二次焼成	遺存	備考
		系統	器形	時期		口径	底径	器高						
895	深鉢	3	?	?	フラスコ31				LR	にぶい褐	雲母少 やや密	外スス		
896	#	3	?	?	#				RL	濃	やや粗			
897	#	3	?	?	#				RL	淡黄褐	雲母やや多 やや粗	外スス		
898	#	3	?	?	#				RL・LR	#	やや粗	外スス	1/8	
899	#	?	?	?	#				LR	にぶい橙	黄灰色の粘 土粒 密			
900	#	3	?	?	#				LR	#	#			
901	浅鉢	3	?	?	#	24.2			LR	(内) 橙 (外) 黄褐	雲母やや多 やや粗	ローポスス	1/10	
902	深鉢	4	K	I	#				後	赤彩、角閃 石? 水晶少 やや粗				
903	#	4	?	#	#				#	水晶多 やや粗				

33号 フラスコ状土坑 (904~916)

904は波状口縁の小形深鉢である。口縁に沿っては、沈線間に逆U字状の爪形文が4分の3周し、残りはキザミとなっている。また波状頂部からは釣手状の渦巻文が垂下している。頸部には沈線が一周する。その下部には繩文が一部見られる。906は頸部破片である。隆帯及び半截竹管文が巡る。隆帯上には「ハ」の字状のキザミ目が見られる。909は浅鉢と考えられる。繩文の側面圧痕が見られる。910~912は波状口縁の深鉢である。いずれも爪形文・半隆起線文によっている。914は信州系と考えられる。915・916は浅鉢である。

34号 フラスコ状土坑 (917~939)

917は深鉢の口縁部破片である。口縁部上端は、隆帯によるX字状文や横円区画が見られる。下半にはS字状の渦巻文が見られる。渦巻は基隆帯によっており、三角部分には三叉文が充填される。918は波状口縁の深鉢である。口縁部に沿っては、無文帶と指押えによる隆帯が巡っている。以下は全面繩文である。919は口縁部に小突起を有する小形の深鉢で胴部にやや膨らみを有する。全面に繩文(RL)が施される。920は円筒状の深鉢と考えられる。口縁部に沿っては繩文が施され、それ以下に沈線文と交互刺突文による鋸歯状文が見られる。921は有孔鉢付土器である。赤褐色で無文である。923は鉢又は台付鉢と考えられる。口縁部に沿っては交互刺突による鋸歯状文が巡り、胴部は基隆帯による渦巻文である。沈線部には全て連続刺突文が見られる。924は細長い胴部をもつ深鉢である。口縁部はやや内傾し、無文帶となっている。以下は繩文である。932は同一個体と考えられる。

35号 フラスコ状土坑 (940・941)

出土遺物は少ない。940は半隆起線文及び爪形文である。941は断面三角形の隆帯が見られる。

番号	器種	分類			出土地點	法量			地文	色調	胎土	二次焼成	遺存	備考
		系統	器形	時期		口径	底径	器高						
904	圓鉢	?	D-c	?	フラスコ33	11.0	11.6		LR	にぶい黃褐	密	内一部オコゲ 外スス	5/6	
905	#	?	E-a?	?	#	15.2			LR	にぶい橙	やや粗	内外スス	1/8	
906	#	?	C	?	#				#	密	内オコゲ	1/6		

番号	分類 種 類	系 統 形 態	時期	出土 場所			地文	色調	胎土	二次施成	造 命	備 考
				口径	底径	厚さ						
907	陶器	?	?	?	フラスコ33 瓶下部	15.0	LR	にぶい縁 やや粗	外スス荒れ	底9/10 側2/3		
908	?	?	?	*		11.0	?	縁 雲母やや多 やや粗	中下一部・外 底5/6 側1/2			
909	瓦器	3	?	?	*		RL	浅黄	やや密			
910	陶器	1	D-c	I	*	?	?	にぶい黄緑 縁	外スス	1/10	焼成良	
911	*	1	D-b	*	*	?	?	浅黄縁	赤褐色の粘 土粒、雲			
912	*	1	D-c	*	*	?	?	にぶい縁 雲母やや多 やや密	内オコゲ			
913	*	1	?-b	?	*	?	?	明褐	外オコゲ			
914	*	?	?	?	*	?	?	縁 錐石、やや粗	内外スス			
915	瓦器	?		?	*		LR	*	やや密	外スス		
916	*	?		?	*		RL	*	雲母多 やや粗	内部スス?		
917	陶器	2	F-b	II	フラスコ34 26.4	28.2	?	にぶい縁 雲母やや多 やや粗	外スス	1/4		
918	*	6 (2-3)	C'-c	*	フラスコ34 4・5層 13.0	25.6 13.2	29.6 0.8	LR	縁ににぶい縁 雲母色の粘 土粒 やや粗	外一部スス	口2/5 側1/3 底2/5	
919	*	3	B'-b	*	フラスコ34 4層	16.1	RL	浅黄縁	やや密	内外スス	1/4	
920	*	3-4	L-a?	?	フラスコ34 2層	14.7	LR	にぶい縁 角閃石? やや密	外スス	1/4		
921	*	4	K-a	I	フラスコ34 5層	25.8	?	縁 水晶多 やや粗			1/8	
922	*	6	B-a	?	フラスコ34 2層	24.9	LR	にぶい黄緑 やや粗	内外スス	1/14		
923	鉢	2-3		II	*	14.2	?	縁 やや密	内口スス 外尾れスス	1/4		
924	陶器	?	A-a	?	*	21.5	RL	にぶい縁 ケ	内外スス	口1/2 側1/4		
925	*	?	?	?	*		?	明褐	雲母やや多 やや粗	内オコゲ		
926	*	?	?	?	*		?	縁 やや密	外スス			
927	*	3	?	?	*		LR	縁 やや粗	内スス			
928	*	3	?	?	*		LR	にぶい縁 やや密				
929	*	?	?	?	フラスコ34 5層		?	明褐	やや粗	外スス		
930	*	2	?	II	*	?	?	縁 ケ		1/12		
931	*	3	?	?	フラスコ34 2層	?	LR	にぶい縁 やや密	内一部スス 外スス			
932	*	6	A-a?	?	フラスコ34 1層	?	RL	*	やや粗	外スス		
933	*	3	D-c	?	フラスコ34 5層		RL	縁 ケ	*			
934	*	?	?	?	*		?	浅黄縁 雲母少 やや粗				
935	*	3	?	?	フラスコ34 2層		RL?	*	*	内外スス	1/5	
936	*	3	?	?	フラスコ34 5層		RL	にぶい縁 ケ				
937	*	3	?	?	*		LR	(内)にぶい縁 (外)縁 やや粗	外スス			
938	*	3	?	?	フラスコ34 3層		RL	にぶい縁 やや粗	*	内外スス		
939	*	3	?	?	フラスコ34 2層		RL	浅黄	雲母やや多 やや粗	外スス		
940	*	1	?	I	フラスコ35		LR?	(内)にぶい縁 (外)縁 やや粗	内外スス			
941	*	3	?	?	*		LR	(内)明褐 (外)灰白	*			

36号フ拉斯コ状土坑(942・943)

942は小波状の深鉢口縁部破片である。口縁部に沿って半隆起線文が巡る。943は突起を有する深鉢である。文様は半隆起線文及び隆帶によっており、三叉文が充填される。

37号フラスコ状土坑 (944・945)

944は波状5単位の深鉢で折り返し口縁となっており、折り返し部は無文である。底部は箇状圧痕が薄く見られる。945は口縁部脛曲の見られる浅鉢で端部で直立する。口縁部は無文、以下は縄文である。

38号フラスコ状土坑 (946~968)

946は深鉢の口縁部破片である。半隆起線文による文様で、渦巻文・三叉文等が見られる。947は橋状把手を有する深鉢である。口縁部に沿って沈線が見られる。948は筒状の土器である。口縁部には縦方向の背竹管による連続押し引きが見られる。胴部は沈線による方形の区画で、その中には蕨手文が見られる。949も筒状の土器である。文様を区画する逆U字状の文様は隆帯によっており、区画内に見られる渦巻等は沈線によっている。964~968は浅鉢である。964は無文。965~968は半載竹管の後、沈線部をなぞっている。963は台付鉢の可能性がある。

番号	分類	出発点			地文	色調	胎土	二次焼成	道存	備考			
		系統	器形	時期									
942	深鉢	?	?-b	?	フラスコ形	RL 黄橙	やや密		1/10				
943	*	2	F+G-b	II	x	にぶい模	角閃石・雲母 パミス やや粗	内外スス	1/4				
944	*	1	F-b	I	フラスコ形	31.8 28.4	14.2 32.0	RL	"	黄灰色の粘土紋多 やや密	内オコゲ 外スス	9/10	
945	浅鉢	?	/	x	42.8 13.0	14.9	LR 橙	雲母多 やや粗	口4/5 胴9/10 底4/5				
946	深鉢	2	G-b	II	フラスコ形	26.2		にぶい模	パミス・水晶 少 角閃石 やや粗	内オコゲ 外スス	1/3		
947	*	?	?-b	?	x	16.5		"	やや密	内外スス	1/6		
948	*	3+5	K-a	?	x	18.8	LR	にぶい模	やや粗	内一層スス 外スス	1/6		
949	*	3	?	II	x		RL	にぶい模	x	内スス 外覗れ	2/3		
950	*	?	?	?	x		/	/	/				
951	*	?	?	?	x		/	にぶい模	やや密				
952	*	1	?	I	x		?	にぶい模	やや粗	外スス			
953	*	2	?	?	x	9.1		にぶい模	x	内スス 胴1/2			
954	*	2	C+D-c	II	x		淡黄	粗	内オコゲ 外覗れ				
955	*	2	C+D	?	x		にぶい模	やや粗	内スス				
956	*	?	?	?	x		にぶい模	やや密	外スス				
957	*	1+2	C+D	?	x		にぶい模	やや粗	内オコゲ 外スス	1/12			
958	*	2	?	II	x		淡黄模	やや密	底1/6				
959	*	3	?	?	x		LR?	にぶい模	やや粗	内外スス			
960	*	?	?	?	x		L 橙		雲母やや多 やや密	内オコゲ 外スス			
961	*	3	?	?	x		RL	にぶい模	やや粗	外スス			
962	*	3	?	?	x		LR?	x	やや粗				
963	油井鉢	?	/	?	x		/	シソ輝石	外スス				
964	浅鉢	?	?	?	x		/	やや粗					
965	*	1	/	II	x		?	模	雲母多 やや粗	1/12			
966	*	?	/	?	x		?	x	雲母少 やや粗	1/12			
967	*	?	/	?	x		?	浅黄模	x				
968	*	?	/	?	x		にぶい模	やや密		1/12			

39号フラスコ状土坑 (969~986)

当土坑で出土しているのは小破片のみである。979は爪形文及び半隆起線文が併用される。これと同一個体と考えられるのが、969・977・980・981である。975は口縁部が「く」の字状に外反する。口唇部にはキザミが付される。970は木目状燃系文、984・985は浅鉢と考えられる。986は底部兼状压痕である。

41号フラスコ状土坑 (987~993)

987は筒状の有孔飼付土器である。復原実測のため文様構成については明確でない。幅約3cmの隆帯上に三角形の陰刻が見られる。988は小形の深鉢である。口縁部には小突起を有し、文様区画は隆帯によっている。隆帯に沿って背竹管による浅い連続刺突が巡っている。いずれも中部高地系の土器と考えられる。991は浅鉢である。半隆起線による文様で、隆帯も見られる。992は半隆起線及び爪形文である。

番号	器種	分類		出土地点	法量			地文	色調	胎土	二次焼成	遺存	備考	
		系統	器形		時期	口徑	底径							
969	深鉢	I	?	I	フラスコ	27		LR	にぶい緑	やや密 黄灰色の粘土粒 やや密	外スス			
970	*	1	?	*	*	*		木目状燃系文	緑					
971	*	2	?	?	*				*	やや密	内外スス			
972	*	2	C&D	?	*				*	やや粗	内オコゲ 外スス			
973	*	2	?	?	*				にぶい緑	*	内外スス			
974	*	1	?	?	*	?	?	にぶい緑	やや密	外スス				
975	*	?	?	?	*	?	?	?	緑	*	*			
976	*	?	?	?	*			?	緑	黄灰色の粘 土粒 やや密				
977	*	3	?	?	*			LR	*	やや密	外スス	986・981と同一 個体		
978	*	?	?	?	*				*	シノアマガ やや密	内オコゲ			
979	*	?	?	?	*			LR	にぶい緑	*	外スス			
980	*	3	?	?	*			LR	緑	*	*	977・981と同一 個体		
981	*	3	?	?	*			LR	*	*	*	986・977と同一 個体		
982	*	3	C&D	?	*			LR	にぶい緑	*	内上スス 外スス			
983	*	3	?	II	*			LR	にぶい緑	*	外スス			
984	浅鉢	?	?	?	*			RL?	にぶい緑	雲母極めて多 やや粗		雲母の面積割合 7%		
985	*	?	?	?	*				*	雲母多 やや粗				
986	?	?	?	?	*				?	やや粗	内スス			
987	深鉢	4	L-a	I	フラスコ	15.9			*	雲母・水晶多 やや粗	外スス	1/8	1170と同一個体	
988	*	4	?	?	*	13.6	15.0		にぶい緑	水晶・雲母多 やや粗	内オコゲ 外スス	1/4		
989	*	3	?	?	*	16.6		LR	(内)にぶい緑 (外)緑	雲母・雲母多 やや粗 やや荒れ	内オコゲ 外荒れ	1/8		
990	*	?	?-a	?	*			?	浅黄緑	黄灰色の粘 土粒 水晶わずか やや密	内外スス	1/12		
991	浅鉢	?	?	?	*			?	にぶい緑	やや粗		1/12		
992	深鉢	1	?	?	*			RL	にぶい黄緑	やや密	外スス			
993	*	?	A-b	?	*			RL	にぶい緑	*	内オコゲ	1/16		

42号フ拉斯コ状土坑 (994~1004)

994は外反する口縁部破片である。口唇部には指頭圧痕による小波状が見られる。998は小形の浅鉢である。溝巻による小突起が4個付される。口縁部に沿っては、先の尖った棒状工具による縦方向の連続刺突が見られる。995はやや胴部の張る深鉢である。縦方向の無節羽状繩文である。997は小形の鉢である。口縁部に沿って交互刺突による波状文が巡っている。

44号フ拉斯コ状土坑 (1005~1006)

1005は胴部が樽状に膨らむ深鉢と考えられる。断面三角形の貼り付け縫合が口縁部に沿って巡り、また胴部に垂下している。1006には沈線及び刺突が見られる。

45号フ拉斯コ状土坑 (1007~1020)

1007は直線状に開く5単位波状の深鉢である。1008・1009は爪形文を有する。1010は太い沈線による逆U字状のモチーフである。1011は頸部の土器破片で、繩文の側面圧痕が見られる。1017・1018は浅鉢と考えられる。1020は底部に木葉痕が見られる。

番号	形態	分類		出土地点	法量		地文	色調	胎土	二次焼成	道存	備考
		系統	器形		時期	口径						
994	深鉢	3	B-b?	?	フ拉斯コ42	31.2		LR	縦・茂黄緑	やや粗	外スス	1/10
995	*	?	K-a?	?		01.0	L・RL	明褐	繩多	〃	1/4	
996	*	?	L-a	?		9.8	LR	にぶい縦	やや粗	内外スス	1/2	
997	鉢	?	?	?		12.8	LR	茂黄緑	〃	外スス荒れ	1/8	
998	浅鉢	?	?	II		24.9 23.3	5.8 8.1	6.6 8.1	横	雲母少々 1.3cmの縫 やや粗	外スス	19/20
999	*	?	A-b	?					にぶい縦	水晶わずか やや粗	外一部スス	1/12 363・364と同一 個体
1000	?	3	?	?								
1001	深鉢	3	?	?			RL	にぶい縦	やや粗	外スス		
1002	*	?	?	?				にぶい赤褐	バニス・水晶 少 極めて粗	内外スス	1/12	
1003	深鉢	?	?	?			LR・RL	茂黄緑	粗	内スス		
1004	*	2	?	II				〃	やや粗	外スス荒れ		
1005	*	3	Ka-H	?	フ拉斯コ44	33.5	LR	にぶい縦	雲母やや多 粗	外スス	1/6	
1006	*	3	?	?				にぶい縦	粗			
1007	*	6	?-e	?	フ拉斯コ45	20.0	LR	茂黄緑	やや粗	内オコゲ 外スス	1/6	
1008	*	1	?	I		?	?	縫	やや密	外スス		
1009	*	1	?	?			?	にぶい縦	雲母やや多 やや粗			
1010	*	2a-4	?	?			?	縫	やや密	内オコゲ	1/8	
1011	*	3	?	?			?	にぶい縦	〃	内オコゲ 外スス		
1012	*	?	?	?			縫系R	にぶい縦	やや粗	外スス		
1013	*	3	?	?			LR	にぶい縦	粗	外荒れ		
1014	*	?	?	?			縫系L	明黄緑	やや密	内オコゲ 外スス		
1015	*	?	?	?			RL	にぶい黄緑	雲母少 やや粗	内スス		
1016	*	?	B-a	?		?	RL	〃	やや粗	外スス		
1017	*	1	E	?			?	〃	雲母少 やや粗	内外スス		
1018	浅鉢	1	/	?			RL?	〃	やや粗			
1019	深鉢	?	?	?		?	LR	黄褐	やや密	内外スス		
1020	*	?	?	?		?	?	にぶい黄緑	繩多 粗		1/2	

47号フラスコ状土坑（1021～1028）

1021は深鉢の口縁部破片である。鋸歯状の突起が見られる。突起の沈線部には連続のキザミが内外面共に付される。1024は浅鉢で、爪形文が見られる。1026は口縁部が大きく外反する。口唇部には半隆起線及び沈線が巡っている。1028は羽状繩文の土器である。

48号フラスコ状土坑（1029～1033）

1029は深鉢の胴部破片である。文様は沈線及び渦巻文で、半截竹管で文様を描いた後沈線部をなぞっている。1030は頸部破片で交互刺突による波状文が見られる。1031は爪形文である。

49号フラスコ状土坑（1034～1041）

1034は口縁突起部の破片である。貼り付け隆帯による。沈線部には連続刺突が見られる。1036は浅鉢で、口縁部を欠損する。胴部には調文地上に4本沈線による横S字文が4単位に施文されると考えられる。1037は半隆起線文、1038・1041は貼り付け隆帯による文様である。

50号フラスコ状土坑（1042～1052）

1042は頸部破片である。中央には基壙帯が走っている。1044は木目状燃糸文である。1045は口唇部に沈線が巡っている。1046は波状口縁の波頂部で口唇部に沿って沈線が巡っている。1050は胴部破片で、円形の貼り付け文様が見られる。

1051は調文の深鉢で、口縁部に沿って側面压痕が巡っている。1052は綫の調文であるが口縁部のみ横羽状繩文となっている。

番 号	器 種	分 類		出 現 場 所	性 質		地 文	色 調	胎 土	二 次 燒 成	造 作	備 考
		系 統	器 形		時 期	口 径						
1021	深鉢	2・3	C-b	II	フ拉斯コ	47	LR	穀	やや粗	外スス	1/8	
1022	+	?	?	?	*		?	淡黄穀	不明赤色粒 やや粗	内スス やや粗		
1023	+	1	?	?	*		?	*	黃灰色の粘 土粒 やや粗	内外スス		
1024	浅鉢	1	?	?	*		?	穀	やや粗			
1025	深鉢	3	?	?	*		RL	(内)褐色 (外)褐色	雲母少・赤褐 色の粘土粒 やや粗	外スス		
1026	+	3	C-b-D	?	*		RL	穀	やや粗	内スス	1/12	
1027	+	3	?	?	*		LR	*	粗	*		
1028	+	?	?	?	*		LR+RL	にぶい穀	やや粗	内オコゲ 外スス		
1029	+	3	?	II	フ拉斯コ	48	L	明褐色	やや粗		1/8	
1030	+	3	?	?	*		?	淡黄	やや粗			
1031	+	1	?	1	*		?	穀	粗	外荒れ		
1032	+	?	?	?	*		?	淡黄穀	雲母やや多 やや粗			
1033	+	?	?	?	*		?	*	やや粗	外スス		
1034	+	3	O-F-U?	?	フ拉斯コ	22.8 25.9	RL	*	*	*	1/10	
1035	+	?	?	?	*		RL	*	*	*	1/6	
1036	鉢	3	?	II-(3)	*	13.8	RL	にぶい穀	*	内オコゲ 外スス	1/2	
1037	深鉢	?	C-b-D	?	*		LR	*	微多・雲母少 粗	外スス荒れ	1/6	
1038	+	3	?	?	*		LR	穀	やや粗	外スス		
1039	+	3	?	?	*		RL	*	*	*		
1040	+	3	?	?	*		LR	にぶい穀	*	*		

番号	器種	分類			出土場所			法量	地文	色調	胎土	二次焼成	遺存	備考
		系統	器形	時期	口徑	底径	脚高							
1041	深鉢	3	?	?	フラスコ				?	縦	やや粗	外スス荒れ		
1042	?	2	C-a-D	II	フラスコ	20			△	淡黄	〃	内スス	1/8	
1043	?	2	?	?	〃				縫	〃	〃			
1044	?	?	?	?	〃				縫余L	〃	やや密	外スス		
1045	?	?	?	?	〃				?	にぶい縦	やや粗	内外スス?		
1046	?	?	?-c	?	〃				?	にぶい縦	〃	外スス		
1047	?	3	C-a?	?	〃				RL	〃	雲母わざか やや粗	〃 ?		
1048	?	?	?	?	〃				△	縫	雲母わざか やや粗			
1049	?	3	?	?	〃				縫余r	にぶい縦	やや粗	外スス?	1/8	
1050	?	3	?	?	〃				LR	〃	〃	内スス 外スス荒れ		
1051	?	?	?	?	〃				RL	明赤褐色	〃			
1052	?	?	?	?	〃				RL	灰褐色	やや密	内外スス		

52号 フラスコ状土坑 (1053~1067)

1053は深鉢の口縁部破片である。口縁部には円形の突起が見られる。全面繩文であるが、上半は斜めの、下半は横の条となっている。1054は小形の深鉢で、口縁部に小突起が見られる。無文で貼り付け隆帯が巡っている。1055は波状口縁の土器で半隆起線文及び爪形文が見られる。頸部には爪形文及び半隆起線文が巡り、上半は渦巻となっている。胸部は繩文である。1057は小形の深鉢で無節の繩文である。1058は隆起線による渦巻文であるが、無文部を多く残している。1059・1060、1062~1064は、半隆起線文及び爪形文である。1062・1063は胴部に撚糸文が見られる。1065は底部近くの破片で格子目文及びB字状文が見られる。1066・1067は浅鉢である。1066は内面及び底部が非常に滑らかである。1067には蓮華文が見られる。

番号	器種	分類			出土場所			法量	地文	色調	胎土	二次焼成	遺存	備考
		系統	器形	時期	口徑	底径	脚高							
1053	深鉢	3-5	B-b	I	フラスコ	29.4		LR	にぶい縦	やや粗	外スス	1/8		
1054	?	?	?	?	〃	16.2		?	〃	やや密	内オコゲ 外スス	1/6		
1055	?	1	A-b?	I	〃	(21.0) (21.9)		?	にぶい黃緑	不明赤色 やや粗	外スス	1/12		
1056	?	2	C?	〃	〃			LR	(内)浅黄緑 (外)濃	やや粗	内内外スス	1/8	施成虫好	
1057	?	?	?-a	?	〃	16.8		L	にぶい縦	やや密	外スス	1/8		
1058	?	2	?	?	〃			△	縫	雲母やや多 やや密	内オコゲ	1/8		
1059	?	1	?	?	〃			?	明黄緑	やや粗	外スス			
1060	?	1	?	?	〃			LR	後黄緑	黄灰色の粘 土粒、やや密	〃			
1061	?	?	?	?	〃			?	〃	やや粗	内スス?			
1062	?	?	?	?	〃			縫余L	にぶい縦	〃	外スス			
1063	?	1	?	?	〃			縫余R	明黄緑	〃	〃			
1064	?	1	?	?	〃			?	縦	黄灰色の粘 土粒や多 やや密	〃			
1065	?	1	?	I-②	〃			?	〃	黄灰色の粘 土粒、木晶わざか 粗	内スス	1/6		
1066	浅鉢	?	?	I-②	〃	13.4		RL	にぶい縦	縫・雲母多 やや粗	外スス	2/3		
1067	?	1	?	I-②	〃			RL	縫	やや密				

53号フ拉斯コ状土坑（1068～1070）

出土遺物は少ない。1069は台付鉢になると思われる。半隆起線で太い基隆帯を用いる。1070は外反する口縁部破片で口縁は内側に折り返され断面三角形となる。

55号フ拉斯コ状土坑（1071～1080）

1071・1074・1075・1076は浅鉢である。1071は無文で内側に突帯が巡る。1074には蓮華文、1075には「ハ」の字状のキザミが見られる。1076は口縁部無文となる。1072・1077は同一個体と考えられる。頸部に半截竹管文が巡る。1073は頸部の沈線部分に刺突が施される。1078は口縁が外方に肥厚する。1079は沈線部に背竹管による押し引きが見られる。1080は簾状圧痕である。

56号フ拉斯コ状土坑（1081～1086）

1081は横S字状の把手を有する深鉢である。把手の内外面には、貼り付け隆帯による波状文が付される。口縁部上端は無文帯で、その下に突帯が巡り指頭圧痕が連続している。頸部には半隆起線文が巡り、その間には半隆起線文等による渦巻文などが見られる。1082は小形深鉢の下部破片である。最下部に沈線が3本巡り、そこから上は撚糸文となる。1083は半隆起線文・爪形文の土器である。1084は口縁部で、数条の沈線が巡っている。

番号	器種	分類		出発点	法蓋		地文	色調	胎土	二次焼成	遺存	備考
		系統	器形		口径	底径						
1068	深鉢	3	?	?	フ拉斯コ		LR	(内)橙 (外)黄裏橙	やや粗			
1069	台付鉢	2	?	II	ダ			橙	ダ			
1070	深鉢	3	C-a	?	ダ		RL	淡黄	やや密	外スス	1/10	
1071	?	?	?	?	フ拉斯コ	33.9		橙	やや粗		1/10	
1072	深鉢	3	?	?	ダ		RL	にぶい・透	ダ			
1073	?	3	?	?	ダ		RL	ダ	やや密	外スス		
1074	浅鉢	?	?	?	ダ		LR	橙	ダ			
1075	?	?	?	?	ダ		LR	にぶい・黄褐	シソ輝石・雲母少 やや密			
1076	?	?	?	?	ダ		LR	ダ	やや粗	外スス	1/16	雲母面積割合10%
1077	深鉢	3	?	II	ダ		RL	ダ	ダ			
1078	鉢	?	?	?	ダ			にぶい・黄裏	ダ	内オクダ 外スス	1/12	
1079	深鉢	?	?	?	ダ		RL	橙	ダ			
1080	?	?	?	?	ダ		?	ダ	やや密	外スス		
1081	?	3	F-b	II-①	フ拉斯コ	26.0	RL	にぶい・黄裏	やや粗	内オクダ 外スス	1/6	指紋あり
1082	?	3	?	?	ダ		撚糸R	ダ	ダ		1/8	
1083	?	1	?	I	ダ		?	にぶい・透	藍母やや多 やや粗	外スス		
1084	?	3	E-a	?	ダ		?	ダ	やや粗	内外スス		
1085	?	3	?	?	ダ		LR	ダ	粗	外スス		
1086	?	3	?	?	ダ		RL	(内)黄裏 (外)橙	ダ			

4号土坑（1087～1092）

1087は波状口縁の土器である。半隆起線文及び爪形文による文様でB字文等も見られる。1088は深鉢口縁部の破片で把手部である。把手には円形孔が穿たれる。1089には爪形文、1090には格子目文が見られる。

5号土坑 (1093~1101)

1093は口縁部がやや外反する深鉢で、底部を欠損する。口縁部は4単位の小波状をなす。頸部及びその上には半隆起線文が巡り、半隆起線文の両端にはキザミが付される。胴部には頸部からの半隆起線文が垂下する。1094は小突起を有する深鉢である。口縁部に沿っては交互刺突による鋸歯状文が巡り、その下には縦方向のキザミが連続する。頸部には沈線文が3条巡り、胴部上半には逆連弧文が連続する。1097は浅鉢で無文、1099は陸帯による梢円区画に沿って沈線が巡り、その中を斜行沈線で充填している。

6号土坑 (1102~1120)

1102は外反する深鉢の口縁部破片で小波状になると考られる。交互刺突による鋸歯状文、縄文の側面圧痕が見られ、下部には断面三角形の陸帯が一周する。1103には爪形文・蓮華文が見られる。1104には、口縁部に半隆起線文が一周する。1105・1106は類似した土器で同一個体の可能性がある。交互刺突による鋸歯状文が見られる。1108は半隆起線文、1112は竹管による刺突である。1113・1117・1119は浅鉢である。1117は内面に背竹管の連続押し引きが見られる。1119は半截竹管の後沈線をなぞっている。1115・1120は、縄文時代後期の土器である。

番号	器種	分類		出 土 地 点	基 礎		地 文	色 調	胎 土	二次焼成	遺 存	備 考
		系 統	器 形		口径 底径 器高							
1097	深鉢	1	? - c	I	土坑4 3層	?		?	にぶい-櫻	やや密		
1098	*	5	C-b?	*	土坑4 2層	?		?	浅黄桜	やや粗		
1099	*	1	? - c	*	*	?		?	にぶい-櫻	雲母少 無	外スス	
1100	*	1	?	?	*			?	櫻	やや密		
1101	*	3	?	?	土坑4 5層			(内)浅黄桜 (外)桜	粗	外スス窓れ		
1102	*	3	?	?	土坑4 2層			LR	浅黄桜	やや粗		
1103	*	1	B-b	I-(2) 上田面No.1	21.0			LR	にぶい-櫻	*	内スス 外スス窓れ	3/4
1094	*	5	*	I-(1)	*	17.3		LR	浅黄桜	雲母少 やや粗	内ナコギ 外スス	3/4
1095	*	?	?	?	*			LR	にぶい-櫻	やや粗	外スス	
1096	*	?	?	?	*			?	*	やや密		1/3
1097	深鉢	?	?	?	*			?	*	やや粗		1/12
1098	深鉢	?	?	?	*			?	*			
1099	*	4	?	I	*			RL?	*	やや密	外スス	
1100	*	3	?	?	*			LR	*	密	内スス	
1101	*	3	C-b?	?	*			LR	にぶい-黄桜	やや粗	外スス	
1102	*	3	H?	I-(2) 1-5.7層	(4.0)			?	にぶい-櫻	*		1/6
1103	*	1	?	I	*	?		?	櫻	雲母少 やや粗		
1104	*	1	?	?	土坑6 4層			LR	にぶい-櫻	やや粗	外スス	
1105	*	?	?	?	土坑6 2層			LR	浅黄桜	粗		1/12
1106	*	?	?	?	*			?	にぶい-櫻	雲母少 やや粗		
1107	*	?	?	?	土坑6 4層			?	櫻	やや粗		
1108	*	?	?	?	*			?	にぶい-黄桜	*		
1109	*	1	?	I-(2)	*			?	櫻	*		
1110	*	1	?	?	土坑6 2層			?	灰褐色	やや密	外スス	

番 号	器 種	分類			出 土 所	法 量	地 文	色 調	胎 土	二次焼成	遺 存	備 考
		系 統	器 形	時 期								
1111	深鉢	?	?	?	土坑 6 2層		?	にぶい緋	粗	外スス		
1112	?	?	?	?	"		LR	緋	やや粗	"		
1113	浅鉢	?	?	?	"		RL	にぶい緋	やや密	1/4		
1114	深鉢	?	?	?			土呂状無	(内)灰黒 (外)にぶい緋	やや粗	外スス		
1115	"			後期	"							1120と同一個体
1116	"	3	?	?	土坑 6 6層		?	明褐色	やや粗	外スス		
1117	深鉢	5	?	I-①	"		?	緋	やや密			
1118	?	?	?	?	土坑 6		?	"	"		1/12	
1119	浅鉢	1	?	?	土坑 6		?	淡黄緑	やや粗			
1120	深鉢	"		後期	土坑 6 2層	20.0 19.6	LR	淡黄～緋	密	外スス		1115と同一個体

9号土坑（1121）

後期の土器片が出土している。

11号土坑（1122～1124）

1122は半隆起線文を横方向に引いているが、かなりだれた感じを受ける。

14号土坑（1125）

1125は半隆起線文及びキザミで、中央に隆帯が垂下する。

15号土坑（1126～1129）

1126は口縁部が直立する深鉢で、口縁部は無文帶となる。大きな突帯が巡っている。1128は全面繩文の深鉢で口縁部に沿って繩文の側面圧痕が巡っている。1129は無文の深鉢の下半部で底部に網代痕が見られる。1127は後期の土器である。

16号土坑（1130～1132）

1130には小円形刺突文が見られる。1131は口縁部に沿って沈線が3条巡っている。1132は後期の土器で把手は鋸歯状である。

19号土坑（1133・1134）

1133は突起を有する深鉢である。突起部から半隆起線による渦巻文が垂下する。1134は太い、隆帯による縱方向の文様で中央の2本は隆帯で特に太い。

21号土坑（1135）

1135は胴部下半の深鉢である。

22号土坑（1136・1137）

1136は王冠状の把手であるが、波状口縁でなく平口縁に突起として付されるものである。

1137は隆帯による文様である。

23号土坑（1138～1140）

1138～1140は同一個体である。撚糸文であるが方向は一定しない。

24号土坑（1141～1145）

1141は波状口縁の土器で、波頂部は水平となる。無節繩文で、口縁に沿って沈線が巡ってい

る。1143は無文であるが、口縁部は剥落しており、不明である。

25号土坑(1146)

胴部破片で半隆起線文及び爪形文が見られる。979と同一個体である。

26号土坑(1147~1150)

小破片のみである。1148は口縁部の把手で内外面共に渦巻文である。1150は細い条線状の文様で矢羽根状文が見られる。

番号	器種	分類		出発点	法量		地文	色調	胎土	二次焼成	道存	備考
		系統	器形		口径	底径						
1121	深鉢			後期	土坑9			波黃模	青			
1122	+	1	A-a	?	土坑11	21.1		RL	にぶい模	雲母 やや粗	外スス	1/8
1123	+	2	?	?	?	*			*	*		
1124	+	?	?	?	*		波糸L	*	*	外スス		
1125	+	1	?	I	土坑14			?	(?)にぶい模 (外)にぶい模	やや密	内スス	
1126	+	?	?	?	土坑15	21.4		LR	(?)にぶい模 (外)渦黄	やや粗	外ロスス	
1127	+			後期	*			LR	灰白	雲母 渦多 やや粗	外スス	1/3
1128	+	3	A-a	?	*	26.1		L	模	やや密	*	1/10
1129	鉢	?	?	?	*		8.0		*	赤褐色粘土粒 多品少 やや粗	底完存 割1/4	
1130	深鉢	?	?	?	土坑16			?	にぶい模	やや密		
1131	+	?	?	?	*			RL	模	1.3cm岩片 やや粗	外スス	1/10
1132	+			後期	*	G1.3 G1.3		RL	灰褐	やや粗	内外スス	1/10
1133	+	3	?	?	土坑19	42.0 37.8		LR	にぶい模	粗	外スス	1/12 H6P44 土坑55と接合
1134	+	2	?	II	*				模	やや粗		1/8
1135	+	?	?	?	土坑21	6.2		RL	*	*	内オコゲ 外スス	底完存 割1/3
1136	+	2	C-b	II	土坑22	?			波黃模	*	外スス	
1137	+	2	C-bD	II	*				にぶい模	渦多 やや粗	内スス 外スス割れ	
1138	?	?	?	?	土坑23			波糸L	*	やや密	内スス	
1139	?	?	?	*				波糸L	*	*	*	
1140	?	?	?	?		11.4		波糸L	*	*	*	
1141	?	?	?	-c	?	土坑24		L	*	*	外スス	
1142	?	1	G-a?	?	*			?	*	*	内スス	
1143	?	?	?	?	*			模	青	?		
1144	鉢	?	?	?	*			波黃	青	内スス		
1145	深鉢	2	?	II	*			模	青	内スス		
1146	+	1	?	?	土坑25			LR	波黃模	やや粗	外スス	
1147	+	2	?	II	土坑26			模	雲母	内スス		
1148	?	2	?	?	*			にぶい模	やや粗	外スス		
1149	?	?	?	?	*			*	やや密	内スス		
1150	?	?	?	?	*			模	*			

27号土坑(1151~1179)

1151は口縁部が鋸歯状となる越後系の深鉢で、袋状突起が付される。渦巻文が見られ沈線部にはキザミが充填され、補修孔が見られる。1152は口縁部にS字状の突起が付される。やはり沈線部にはキザミが付される。1153は小形の深鉢である。1154は口縁端部が無文、内傾するものである。波状口縁として復原実測を行ったが、平口縁の可能性もある。1156は波状口縁の土

器で、角押文が見られる。1158は底部網代底である。1159は台付鉢である。やや深みのある器形である。渦巻文のモチーフは基隆帯によっている。1160・1169・1179は浅鉢と考えられる。1161は小突起が見られ、内面には貼り付け隆帯が見られる。1175・1176は王冠状の把手である。1175は三角形状であり、1176は右側に抉りが見られる。

番 号	分 類	系 統	器 形	時 期	出 土 点	法 量			地 文	色 調	胎 土	二 次 銘 成	遺 存	備 考
						口 径	底 径	器 高						
1151	深鉢	2	C-b	II-(2)	土坑	27	27.4		内にぶい縫 外にぶい縫	やや粗	外スス	1/12	1152と同一個体か 網代孔	
1152	〃	2	〃	II	〃	25.0			浅黄模	〃	〃	1/4	1151と同一個体か	
1153	〃	?	?	?	〃		4.0 3.7		無系L	粗	やや密	内外スス	底完存	
1154	〃	?	?	?	〃	18.2			LR	にぶい縫	〃	内オコゲ 外スス	1/6	
1155	〃	?	?	?	〃				L	にぶい縫	〃	外スス	1/5	
1156	〃	?	A-a?	?	〃	16.8			LR	にぶい縫	〃		1/6	
1157	〃	?	?	?	〃	15.2			LR	縫	やや粗	内オコゲ 外荒れ	1/5	
1158	〃	?	?	?	〃	14.5			LR	〃	〃	内一側オコゲ 外一側スス	底3/5 剥1/4	
1159	台付鉢	?		II	〃	(無)			にぶい縫	やや密	内外スス	1/2		
1160	浅鉢	?	?	?	〃	31.8			浅黄模	〃	外荒れ		1169と同一個体	
1161	深鉢	?	?	?	〃				浅黄	雲母少 やや密	外スス		1166と同一個体か	
1162	〃	?	?	?	〃				褐色	やや密	外オコゲ			
1163	〃	?	?	?	〃				?	〃	やや粗			
1164	浅鉢	1			〃				?	にぶい縫	雲母多 やや粗			
1165	深鉢	?	?-b	?	〃				?	縫	やや密	内オコゲ 外スス		
1166	〃	?	?	?	〃				にぶい縫	雲母少 やや密	外スス		1161と同一個体か	
1167	〃	?	?	?	〃				?	縫	粗	内スス 外荒れ		
1168	〃	?	?	?	〃				にぶい縫	やや密	外スス			
1169	浅鉢	?		?	〃				LR	浅黄模	〃	内外スス 外荒れ		1160と同一個体
1170	深鉢	4	L-a	?	〃	15.9			縫	雲母・水晶 やや粗			987と同一個体	
1171	〃	?	?	?	〃				?	灰白	雲母少 やや粗	内外スス	1173と同一個体	
1172	〃	3	?	?	〃				LR	にぶい縫	雲母やや多 やや粗	外スス		
1173	〃	3	?	?	〃				?	〃	雲母少 やや粗	内外スス	1171と同一個体	
1174	〃	3	?	?	〃				RL	灰褐	やや粗	外スス		
1175	〃	2	D-c	II	〃				?	〃	外スス			
1176	〃	2	?	?	?				にぶい縫	〃	外スス			
1177	〃	?	?	?	〃				RL	にぶい縫	〃	外スス		
1178	〃	?	?	?	〃				無孔	にぶい縫	〃	内オコゲ		
1179	浅鉢	?	?	?	〃				LR	縫-にぶい縫	〃	内外スス荒れ	1/6	

28号土坑 (1180~1196)

当土坑からは比較的多くの土器が出土している。1180は大形の深鉢である。口縁部に小突起を有し、上部には貼り付け隆帯による楕円区画文を配し、区画に沿って尖った工具による連続刺突を巡らしている。またその下には半隆起線文による逆連弧文が一周している。頸部には3本の半隆起線文が巡り、胴部は羽状繩文となる。1181は口縁部に大突起とX字状の小突起が付され、それに沿って隆起線が巡っている。胴部は繩文である。底部には網代痕が見られる。1182

は大形の波状口縁の土器である。隆起線束による連続横S字文で主要モチーフは基隆帯となっている。また、三角部分には三叉文や玉抱き三叉文等が充填される。胴部には渦巻文が見られる。1183は胴部にやや膨らみをもつ深鉢である。全体の文様構成は不明であるが主要モチーフは基隆帯によっており、三叉文等が見られる。1185は小波状の土器で、口縁に沿って2条の楕円側面圧痕が巡る。1186は交互刺突による鋸歯文が口縁に沿って巡っている。1187は鉢状の器形になると考えられる。半隆起線文が縦方向に垂下している。1189は羽状縄文、また1192は木目状の撚糸文である。1196は浅鉢である。口縁部に沿って2条の沈線が巡り、渦巻文が付される。口縁から内面にかけて朱が施されている。

番 号	種 類	分 類		出 土 地 点	法 量			地 文	色 調	胎 土	二次焼成	酒 存	備 考	
		系 統	形 態		面 積	口徑	底径							
1180	深鉢	3	F-b	II-①	土坑	28	33.0		LR・RL	にぶい緑	黄褐色の粘土粒多 少や粗	外上スス 外下荒れ	口1/2 脚1/3	
1181	*	3	A-b	*	*	28.3	11.5	25.9 27.7	LR	緑	やや粗	内口・脚上スス 外口スス	1/2	土坑21と接合
1182	*	2	D-c	II	*	33.7 38.3			浅黄緑	やや粗	外スス	1/4	*	
1183	*	2	?	*	*				にぶい緑	*	内オコゲ			
1184	*	?	A-a	?	*	22.7		RL	*	窓役少 やや粗	内外スス	1/10		
1185	*	3	?-b	?	*	34.4		RL	浅黄緑	黄褐色の粘土粒や多 少や粗	外スス荒れ	1/8		
1186	*	3	A-a?	?	*	16.8		LR	にぶい緑	やや密		1/6	土坑27と接合	
1187	?	3	?	?	*			LR	緑	やや粗				
1188	深鉢	?	?	?	*	15.1		RL・LR	*	やや密	内スス	底1/2 脚1/4		
1189	*	?	?	?	*	0.0		LR・RL	にぶい緑	やや粗	内オコゲ 外スス			
1190	*	?	?	?	*			RL	浅黄緑	*	内オコゲ	1/8		
1191	*	2	?-c	?	*			*	*	*				
1192	*	I	?	I	*			多目状熱帯文 L	緑	やや密	内オコゲ			
1193	*	?	?	?	*			RL	*	*	*			
1194	*	3	F-?	?	*			RL	浅黄緑	やや粗	外スス			
1195	*	?	?	?	*			RL	にぶい緑	*	内オコゲ 外スス			
1196	浅鉢	2	/	II	*	32.0		RL	浅黄緑	窓役やや多 少や粗		1/3	赤彩	

29号土坑(1197)

1197は爪形文及び半隆起線文の土器で小突起を有する。

31号土坑(1198~1200)

1198は鶏頭冠様の突起を有する深鉢である。文様は基隆帯による渦巻文であるが、頸部に文様帶の区切りは見られない。

32号土坑(1201~1202)

1201は木目状撚糸文である。

35号土坑 (1203~1205)

1203は半隆起線による文様、1205は貼り付け隆帯による鋸歯状文である。

番 号	器 種	分 類		出 現 地	法 量	地 文	色 調	胎 土	二 次 施 成	道 存	備 考
		系 統	形 期								
1197	深鉢	1	C-b	I-②	土坑 29	28.2		RL	にぶい推	質地少 やや粗	外オロゴ
1198	*	2	*	II-①	土坑 31	24.8			にぶい・黄緑	やや粗	内ロヌス 外ヌヌ
1199	*	?	?	?	*		?	*	?	やや薄	内ヌス
1200	*	4	?	?	*			横	やや粗	外ヌス	
1201	*	1	?	I	土坑 32		木目状撲 余文長	にぶい・推	*	*	
1202	*	?	?	*	*		?	*	やや密		
1203	*	2	?	II	土坑 35			*	*	内ヌス	
1204	*	2	?	?	*			横	やや粗	*	
1205	*	?	?	?	*		?	後黄緑	*	*	

36号土坑 (1206)

1206は爪形文及び半隆起線文の土器である。

40号土坑 (1207)

1207は頸部の破片で爪形文及び半截竹管文である。

47号土坑 (1208~1209)

1208は燃糸文の胴部破片である。

51号土坑 (1210~1216)

1210は口縁部が外反し、橋状把手を有する小形の深鉢である。橋状把手はX字状の貼り付けで、その下にY字状に隆帯が垂下する。口縁部に沿っては細い沈線が巡る。1211は口縁部が小突起状となる深鉢である。上半には蓮華文が見られる。それ以下は無文で頸部には半隆起線文が巡る。1212は小波状の無文深鉢である。波状部に小円孔が穿たれる。1214はやや薄手の土器である。細い沈線による文様で、交互刺突も見られる。1215~1216は浅鉢である。1215は口縁部がやや肥厚する。口縁部は無文帯で、その下に半隆起線文が巡る。胴部は繩文である。1216は無文である。

52号土坑 (1217~1218)

1217~1218共に半隆起線による文様区画で、1218には格子目文が見られる。

53号土坑 (1219)

1219は小形の深鉢である。透し彫りの把手を1個有する。口縁部は貼り付け隆帯による文様であるが、剥落してしまい、文様構成は不明である。胴部は浅い沈線による横帯区画である。

54号土坑 (1220)

1220は大形の深鉢で小突起を有する。口縁部は横羽状である。

番号	分類			出土場所	法量		地文	色調	胎土	二次焼成	遺存	備考	
	系統	器形	時期		口径	底径							
1206 深鉢	1	?	I	土坑 36			?	にぶい緑	やや粗	内オコゲ			
1207 *	1	?	I-(2)	土坑 40			LR	緑	*	*			
1208 *	?	?	?	土坑 47			黒糸L	淡黄緑	雲母やや多 やや粗				
1209 *	?	?	?	〃			LR	(内)淡黄緑 (外)灰褐色	やや粗				
1210 *	?	?	?	土坑 51	9.8		?	緑	粗	外ヌス	1/8		
1211 *	1	E-b	I-(2)	〃	26.0		?	淡黄緑	黄灰色の粘土粉 雲母やや密	外ヌス連れ	1/8		
1212 *	?	A-b?	?	〃	(11.0)			にぶい緑	やや密				
1213 *	?	?-b	?	〃	?		?	緑	やや粗				
1214 *	4?	?	I	〃			?	*	水晶多 やや粗	外ヌス			
1215 深鉢	?	I-(2)	〃	33.2	6.6	6.9	RL	緑 外赤化色	やや密		1/6		
1216 *	?	?	〃					緑	やや粗				
1217 深鉢	1	?	?	土坑 52			?	にぶい緑	やや密	外ヌス			
1218 *	1	?	I-(2)	〃			LR?	〃	〃	内ヌス			
1219 *	3	E-b	II-(1)	土坑 53	11.6 15.0	6.8 17.9	22.4	RL	〃	*	内オコゲ 底1/1 上位 3/4 外ヌス		
1220 *	?	C-a-b	?	土坑 54	33.0			RL	淡黄緑	〃	外ヌス	1/8	

55号土坑(1221)

1221は小形深鉢の下半部である。浅い波状沈線により縦の区画を行い、その間に弧線文が配される。

56号土坑(1222)

1222は台付鉢である。橋状の把手と基隆帯によるS字状文が連続し、複雑な文様を構成している。基隆帶上にはキザミが付される。また下半部には三叉文等が見られ無文部も残される。

59号土坑(1223)

1223も台付鉢である。橋状把手を有し、同文様をもつが、隆帶上にキザミは付されない。

61号土坑(1224~1226)

1224は口縁部が短く、肩の張る器形である。口縁部は波状の5単位で、文様は繩文施文の後太い沈線により描いている。肩部に太い沈線が巡り、そこから縱に波状文が垂下している。1225の深鉢は波状突起が付く。口縁部には貼り付け隆帶による横円区画文が見られ、区画内には縱方向の有筋沈線が充填される。また、その下には逆U字文が連続している。1226は頸部の破片である。X字状の把手が付される。

番号	分類			出土場所	法量		地文	色調	胎土	二次焼成	遺存	備考
	系統	器形	時期		口径	底径						
1221 深鉢	3	?	?	土坑 55	6.5 7.0		LR	にぶい緑	やや粗	内ヌス	1/1	
1222 台付	2	/	II	土坑 56	31.9			〃	〃	内オコゲ	1/4	
1223 *	2	/	〃	土坑 59	22.3			〃	雲母多 やや粗	内外ヌス	1/10	
1224 深鉢	3-5	H-c	II-(1)	土坑 61	19.2 18.5		RL+LR	〃	やや密	外ヌス	2/3	
1225 *	3	F-b	〃	〃	21.5 23.3		RL	〃	雲母やや多 やや粗	内外ヌス	1/8	
1226 *	2	C?	II	〃				淡黄緑	やや密	内オコゲ		

F-5 P1 (1227~1229)

1227は口縁部に半隆起線文が巡り、そこから綾くり文が垂下している。1228は口縁部が「く」の字状に屈曲する。細かい繩文で突起が2個認められる。1229はドーナツ状の大きな貼り付けである。

F-7 P1 (1230~1240)

1233は頭部に半隆起線文、その他には連続の刺突が認められる。1234~1236は半隆起線文及び爪形文が見られる。1236は波状口縁で波頂部に抉りが見られる。

F-10 P2 (1241~1245)

1241は胴部破片で上半に沈線が巡り、下部は無文となる。1242は沈線及び断面三角形の隆帯である。

G-6 P7 (1246~1248)

1246は深鉢の胴部破片である。渦巻文が見られる。1247は1246と同一個体と考えられる。

番号	器種	分類			出土地点	法量		地文	色調	胎土	二次焼成	遺存	備考
		系統	器形	時期		口径	底径						
1227	深鉢	3	C-a	?	F5P1	24.2		RL	にぶい緋	やや密	内外スス	1/6	
1228	?	?	?	?			?	LR	▲	やや粗	外スス		
1229	?	?	?	?				横	やや粗	▲			
1230	?	B-a	?	F7P1	14.4			RL	淡黄	赤褐色粘土質 やや密	内オコゲ	1/8	
1231	?	3	?	?				燃糸R	にぶい緋	やや粗	内外スス		
1232	?	?	?	?				?	淡黄緋	黒粉や多 やや粗	外スス		
1233	?	4	C-a	I		27.8		RL	緋	やや粗	▲	1/10	
1234	?	1	?	?				?	▲	▲	▲		
1235	?	1	?	?				?	(内)淡黄緋 (外)淡黄	▲			
1236	?	1	?-b	?				?	にぶい緋	▲			焼成良好
1237	?	?	?	?				?	▲	やや粗			
1238	?	?	?	?				LR	緋	やや密	外スス		
1239	?	?	?	?				?	▲	▲	▲		
1240	?	?	?	?				燃糸R	▲	やや粗			
1241	?	?	?	F10P2				?	にぶい緋	▲	外スス	1/8	
1242	?	?	?	?				?	▲	▲	▲		
1243	?	A-a?	?	?				燃糸R	にぶい緋	▲			
1244	?	?	?	?				?	(内)にぶい緋 (外)淡黄	▲			
1245	?	?	?	?				燃糸R	緋	やや密			
1246	?	2	?	II	G6P7			?	▲	やや粗	外スス		
1247	?	2	?	?				?	▲	▲	内スス		
1248	?	?	?	?				?	にぶい緋	▲			

G-7 P1 (1249~1251)

1249は小形の深鉢である。頭部には半隆起線文及び爪形文が巡り、それ以下には半隆起線文による区画の後、格子目文が施される。上半は半隆起線及び隆帯による区画である。1250は大型の深鉢の口縁部破片である。上部には橋状把手が付される。文様は太い沈線及び隆帯によつており、区画内には太い櫛齒状の短沈線が施される。頭部以下は燃糸文で、頭部には3本の太い沈線が一周する。1251は小形の深鉢である。口縁部は緩やかに外反する。口唇部には沈線が

巡り、頸部には沈線及び有筋沈線が巡る。

番 号	器 種	分類			出 土 地 点	法 量			地 文	色 調	胎 土	二次焼成	道 存	備 考
		系 統	器形	時 期		口徑	底径	器高						
1245	深鉢	1	C?	I-②	G 7 P 1	12.8	?	?	LR	淡黄緑	やや粗	内オコゲ 外スス	1/3	
1250	"	3+5	C-b?	II-①	"	47.4		燃余R	にぶい黄緑	"	外スス	1/6		
1251	"	?	H-b?	II	"	8.8		RL	淡黄緑	"	内スス? 外一部スス	1/6		

G - 9 P 22 (1252~1259)

1252は深鉢の口縁部破片である。口縁部には小突起が付される。頸部及び口縁部には沈線が巡る。1253は胴部破片である。上半には沈線及び鋸齒状文が巡り、下半部にはU字状の沈線がみられる。1254は台付鉢と考えられる。1256・1257・1258は浅鉢である。1256は口唇部に玉抱き三叉文があり、口縁部は半隆起線文及び三叉文である。1257は算盤玉状の器形となる。沈線による文様であるが、中央部の重弧線文は主要モチーフを基底帯によっている。1258は沈線部は深く、沈線間にキザミが付される。

G - 9 P 35 (1260~1264)

1260は大きな波状口縁の深鉢である。口唇部は無文帶で端部は内傾する。口縁に沿っては隆帶が貼り付けられ、指頭圧痕が見られる。以下は無筋の縄文である。1261は1260の胴部の可能性が高い。1263は浅鉢と考えられ、交互刺突文が見られる。1264は台付鉢である。

H - 5 P 126 (1265~1267)

1266は口縁がやや外反する深鉢である。下半部は焼け、赤化が著しい。全面縄文である。1265は爪形文が見られ、1267は口縁部が小波状となっている。

H - 5 P - 115 (1268~1271)

1268は大形の把手で橈状となっている。彫りの深い隆起線文である。

番 号	器 種	分類			出 土 地 点	法 量			地 文	色 調	胎 土	二次焼成	道 存	備 考
		系 統	器形	時 期		口徑	底径	器高						
1252	深鉢	3	F-b	II-①	G 9 P 22	22.7			LR	淡黄緑	やや粗	内オコゲ 外スス焼れ	1/8	
1253	"	3	?	II	"				LR	にぶい緑	やや粗	内外スス	1/4	
1254	鉢	2			"	"	(8.0)			"	"	外スス	1/6	
1255	深鉢	2	?	?	"					"	"	"		
1256	鉢	?		?	"	"	個		?	淡黄緑	藍母や多 やや粗		1/8	
1257	浅鉢	2		II-④	"	(5.9)			LR	にぶい緑	"	口1/4 脚1/12		
1258	"	?		?	"				?	淡黄緑	藍母非常に多 やや粗			
1259	深鉢	?	?-c	?	"				LR	緑	やや粗	内オコゲ 外スス		
1260	"	2-3 6	C-c	II	G 9 P 35	29.8			L	にぶい緑	やや粗	外スス	1/6	
1261	"	?	?	?	"				燃余R	"	やや粗	内下オコゲ 外上スス 外下焼れ	1/4	
1262	"	?	?	?	"					"	やや粗	外スス		

番号	器種	分類			出土地	法量			地文	色調	胎土	二次焼成	道存	備考
		系統	器形	時期		口径	底径	器高						
1263	鉢	?	?	?	G 9 P 35				?	にぶい緑	やや密	外スス		
1264	鉢	2		II						にぶい黄緑	〃	〃	1/12	
1265	深鉢	1	?	?	H 5 P 126				LR	にぶい緑	黄灰色の粘土粒 やや密	内オコゲ		
1266	〃	?	?	?	〃	(II)			RL	緑	やや粗	内オコゲ 外網ロスス	1/2	
1267	〃	?	?	?	〃				RL (直前洗刷)	〃	〃	外スス		
1268	〃	2	?	II	H 5 P 115					にぶい緑	無	〃		
1269	〃	2	?	〃	〃				?	灰褐	〃	内外スス		
1270	〃	?	?	?	〃				?	淡黄	黄灰色の粘土粒多 やや密			
1271	〃	?	?	?	〃	(III)			L	緑	穢多 やや粗	内オコゲ		

H - 6 P 133 (1272~1281)

1272 は大形の深鉢である。主要モチーフは基隆帶による渦巻文で、他は沈線によっている。三叉文様の陰刻も見られる。胸部は方形の区画で縄文が施される。1273 は小形の深鉢で口縁内側には断面三角形の突帯が巡り、外面頸部には沈線が巡る。1274 は外反する口縁部破片で、縱方向の背竹管の刺突が連続する。1275~1278 は隆帶系の深鉢である。1279 も同様であるが貼り付け隆帶による S 字文が見られる。1281 は網代底である。

H - 8 P 72 (1282~1285)

1283 はやや丸味のある器形になるとされる。口縁部は肥厚し外反する。頸部には刺突が巡り、胸部には波状文による区画内に幅広の条線様の浅い沈線が見られる。1284 は大形の深鉢である。口縁に沿って平行線・波状文が巡る。以下は波状文である。1282・1285 は浅鉢である。1282 は爪形文・蓮華文が見られる。1285 は爪形文である。

H - 12 P 20 (1286~1289)

1286・1289 は蓮華文及び爪形文が施される。1286 は半截竹管によるもの、1289 は陰刻によるものである。1288 は半隆起線で基隆帶は見られない。

H - 7 P 42 (1290)

1290 は小形の深鉢である。口縁部には幅広の把手が相対して付され、それと直角に小突起が付される。把手及び突起からは貼り付けの Y 字隆帶が垂下し、4 単位区画としている。また把手には貼り付け隆帶による波状文も見られる。最大径部分には半隆起線文・爪形文が一周する。また Y 字状隆帶の下には半隆起線文及び貼り付け隆帶が垂下する。把手の内側にも貼り付け隆帶による文様が見られる。内面上半部には炭化物の付着が著しい。

番号	器種	分類			出土地	法量			地文	色調	胎土	二次焼成	道存	備考
		系統	器形	時期		口径	底径	器高						
1272	深鉢	3	H	II-①	H 6 P 133 (III)		(III)		にぶい赤褐	パラス やや粗	内外スス	1/5		
1273	〃	?	?	?	〃	14.9			?	にぶい緑	やや粗	〃		
1274	〃	B-a?	?	?	〃				?	にぶい緑	〃	内外オコゲ		

番号	器	分類			BS 高さ	法量	地文	色調	胎土	二次焼成	遺存	備考
		系統	器形	時期								
1275	深鉢	2	?	II	H 6 P 133			浅黄緑	やや粗	内スヌ		
1276	*	2	?	*	*			緑	細	*		
1277	*	2	?	*	*			*	バニス多、粗	*		
1278	*	2	?	*	*			にぶい緑	黄褐色粘土 粒多、やや密	外スヌ		
1279	*	?	?	?	*		?	浅黄緑	粗	*		
1280	*	?	?	?	*		?	緑	黄褐色粘土 粒多、やや粗	*		
1281	*	?	?	?	*	?	?	にぶい黄緑	粗	内下オコゲ		
1282	浅鉢	1	?	?	H 8 P 72			?	浅黄緑	やや粗		
1283	深鉢	?	?	*	*	20.9	?	にぶい緑	やや密	内外スヌ		
1284	*	?	A-a?	?	*		LR	浅黄緑	密	外スヌ	1/10	
1285	浅鉢	1	I	*	42.4 16.6 (B.0)	RL	緑	雲母多 やや粗		口1/12 胸1/4		
1286	*	1	I-②	H 12 P 20			灰白	穂多、粗	外スヌ			
1287	*	?	?	?	*		?	緑	赤褐色粘土 粒多、粗		1/8	
1288	*	2	?	II	*			*	穂多、水晶少 粗			
1289	*	1	C-b	I-②	*	28.8	?	にぶい緑	黄褐色の粘 土粒、やや密	内オコゲ 外スヌ	1/14	
1290	*	6	E-b	*	H 7 P 42	14.5 14.9 10.1 16.7 15.7	LR	*	穂多・雲母少 やや粗	内オコゲ 外スヌ 外下丸れ	完存	

H-12 P 51 (1291・1292)

1291は大波状の深鉢である。隆起線による三角形区画で、沈線部には刺突が施され、三角部分には三叉状の陰刻が見られる。1292は底部がやや外方に張る深鉢である。

I-10 P 35 (1293・1294)

1293は王冠状の把手であるが、大きな波状にはならない。1294は浅鉢と考えられる。渦巻状の大きな把手が付される。口縁部には縄文の側面圧痕が見られ、胴部は縄文施文の後、沈線による渦巻文等が施される。

I-12 P 19 (1295~1298)

1295はいわゆる鶴頭冠である。1297には貼り付け隆帯による波状文と縄文の側面圧痕とが見られる。1298は隆起線文による渦巻文である。

I-12 P 154 (1299~1303)

1299は口縁部無文帶で、その下に2本の突帶が巡る。1300は口縁部が「く」の字状に外反する。口縁部に沿っては刺突文が巡る。1302は木目状撚糸文、1303は太い沈線である。

I-12 P 160 (1304~1307)

1304は縄文の後、頸部に半隆起線文が巡っている。1306は隆起線文による渦巻文である。

I-12 P 153 (1308~1311)

1308は王冠状の把手で隆帯上にはキザミが付されている。平口縁の土器と考えられる。1293と同一個体の可能性がある。1309は深鉢の口縁部近くの土器である。隆起線文が見られ、中央に袋状突起がある。1310は木葉痕の底部である。

番号	器種	分類			出土地点	法量			地文	色調	胎土	二次焼成	遺存	備考	
		系統	器形	時期		口徑	底径	厚高							
1291	深鉢	2・3 5	D-c	II-①	H 12 P 51	28.1			?	にぶい緋	やや密	内オコゲ 外スス	1/2		
1292	#	1	?	?	"		13.7		RL	縦	密				
1293	#	2	?-b	II	I 10 P 35					浅黄緑	やや粗	内外スス	1/12	1298と同一個体	
1294	浅鉢	3	CnD-b	II-①	"				LR	淡黄	ク	外スス			
1295	深鉢	2	CnD-b	II	I 12 P 19					淡黄	ク	ク			
1296	?	?	?	?	"				?	緋	ク	内スス			
1297	深鉢	3	?	?	"				?	ク	粗	ク			
1298	#	2	?	?	"				?	にぶい黄緑	やや粗				
1299	#	3	?	?	"	I 12 P 154			LR	縦	やや密		1/12		
1300	#	?	?	?	"				?	にぶい緋	やや粗				
1301	#	3	?	?	"				RL	明褐色	ク	外スス			
1302	#	?	?	?	"					木目状凹	*	やや密			
1303	#	?	?	?	"					木目状凹	*	やや粗	1/12		
1304	#	?	?	?	"	I 12 P 160	8.0		?	明赤褐	粗	内オコゲ			
1305	#	?	?	?	"					?	雲母わずか	内オコゲ 外スス			
1306	#	2	?	?	"				?	緋	やや粗	外スス			
1307	#	3	?	?	"				RL	にぶい黄緑	ク	ク			
1308	#	2	?-b	II	I 12 P 153					?	ク	外スス	1/12	1293と同一個体	
1309	#	2	CnD	#	"					?	?	内オコゲ 外スス	1/6		
1310	#	?	?	?	"	(5.0)				縦	複多			1/5	
1311	#	3	?	?	"				?	明赤褐	やや粗	外スス			

J-6 P 51 (1312~1318)

1313は半隆起線文と爪形文とが繰り返されるが、爪形文は逆U字状である。1317は小形の深鉢形土器である。縄文施文の後、相対する2本沈線による蓮弧が連続する。1312は浅鉢と考えられる。太い隆起線文を用いている。

J-13 P 15 (1319~1321)

1319は口縁部がやや内傾し、無文帶となる深鉢である。

番号	器種	分類			出土地点	法量			地文	色調	胎土	二次焼成	遺存	備考
		系統	器形	時期		口徑	底径	厚高						
1312	鉢	3	?	?	J 6 P 51				RL	浅黄緑	やや密			
1313	深鉢	1	?	?	"				LR	明黄色	青灰褐色粘土 豊多、やや密	内オコゲ		
1314	#	2	?	?	"					縦	やや粗	ク		
1315	#	?	?	?	"					?	複多	やや粗	外スス	
1316	#	3	?	?	"				RL	?	やや密		内オコゲ 外スス	1/3
1317	#	3	?-a	?	"	13.7			LR	?	ク	内オコゲ 外スス	1/6	
1318	#	?	?	?	"				?	?	ク	内オコゲ		
1319	#	?	A-a	?	J 13 P 15	26.7			RL	?	粗	外スス	1/8	
1320	#	?	?	?	"				?	にぶい緋	やや密	ク		
1321	#	?	?	?	"				LR	?	やや粗	ク		

その他のピット (1322~1429)

上記以外の各ピットで出土している土器を一括した。

1322は波状口縁の深鉢である。口縁部に沿って半隆起線文・爪形文が巡り、波状中央部に1本線描きによる溝巻文が見られ、中央に貼り付けボタンがある。1323は口縁部が外反する深鉢

である。口縁部は無文帶で以下に爪形文と半隆起線文とが繰り返される。頸部から半隆起線文が垂下する。1324は台付鉢と考えられる。主要モチーフは渦巻文で基隆帯上には爪形文が付される。1325～1329は爪形文や蓮華文を使用した土器である。1330は細い沈線や刺突による文様である。1331～1333は太い半隆起線による文様である。1335は深鉢の胴部破片である。隆起線による渦巻文及び縱区画が見られ無文部を残している。渦巻には基隆帶が用いられている。1337は口縁部が大きく外反する深鉢である。環状把手・渦巻文が見られるが主要モチーフは基隆帶によっている。頸部には隆起線文がまわり三叉文が見られる。1344は波状口縁の深鉢である。波頂部には三叉状に貫通する環状把手が付される。口縁部文様は隆帶による渦巻文である。1346は口縁部に付された袋状の突起である。1345は胴部破片で頸部に小さい橋状把手が付され、そこから隆帶による区画が行われる。区画に沿ってはキザミが付され、三叉文の陰刻も見られる。1347は口縁部に付された小突起である。逆三角形状で上面は水平となり、そこに渦巻文が付される。1349～1351は中部高地系の土器である。横帶の楕円区画文で区画内には斜行の沈線が充填される。また区画に沿っては刺突が連続する。1352は胴部の膨らむ土器である。突帯が巡り、X字状に把手も見られる。1353は波状口縁の波頂部である。半隆起線文による文様で、中央にはコブが付されている。1354・1355は中部高地系である。隆帶に沿って刺突文が連続する。1356は波状口縁をもつ小形の深鉢である。沈線部には連続したキザミが付される。波状部にはX字状の突起が見られる。1357は波状口縁の深鉢である。波頂部は明確でないが台形状になるものと考えられる。波状の口縁に沿って隆帶が巡り、谷部でX字状の突起となる。他は沈線による文様構成で、沈線部には連続の刺突が見られる。頸部には2本の半隆起線文が巡り、また胴部も2本の竹管文による縦横の区画である。1358は平口縁の土器で一対の突起が付される。口縁部は隆帶による三角形区画が見られ、隆帶に沿って巡る沈線には連続の刺突が見られる。胴部には縦方向に陰刻による波状文や三叉文が見られる。1359は口縁部を欠損する。胴部中央に幅広偏平隆帶が2本巡りその間に沈線による楕円区画文が巡る。隆帶上には列点文が配される。また隆帶は下半部でY字状に垂下する。1360は外面は粘土帶貼り付けによる円形浮文が付される。口縁部は鋸歯状となる。内側には連続のキザミが見られる。1361は隆帶上に細く浅いキザミが、また沈線部には尖った工具による連続の刺突が見られる。1362は小波状をもつ深鉢である。口縁部からはY字状の隆帶が垂下する。恐らく4単位と思われる。また隆帶上には爪形文（刺突による）が見られる。頸部には交互刺突による鋸歯状の波状文をもった隆帶が巡る。口縁部は半截竹管文による相対する連弧文や渦巻文が見られる。胴部は縦方向の半隆起線文である。1363は動物意匠の把手である。1365は隆帶による楕円区画文である。1366は阿玉台系の深鉢口縁部である。小波状で、波頂部はU字状に抉られる。口縁部には角押しによる楕円区画の押し引きが見られる。1367は胴部破片で太い隆帶による逆U字状の区画で、隆帶上には部分的にキザミが付される。隆帶に沿っては、内側に2列の連続刺突が巡る。その他沈線による鋸歯

文や櫛齒状の沈線が見られ、中部高地系の土器と考えられる。1368は波状口縁の深鉢である。口縁に沿って3本の縄文側面圧痕が巡る。1369は小波状口縁の土器で、口縁は「く」の字状に外反する。頭部に沈線が1本巡る。胴部は縱方向に鋸歯文が垂下し、その間に2本一対の沈線による弧線文が配される。1371は1369に文様構成が類似する。1372は埋甕である。上半部は欠損する。燃糸文を地文とし、その上に沈線により文様を描いている。文様単位は明確でなく、渦巻文・鋸歯文・逆U字文等が見られる。1373は大形の深鉢口縁部破片である。口縁部は直線的に外方に延びる。縄文施文の後、半隆起線文により文様を描いている。口縁部はやや肥厚する。1374は小形の深鉢で小突起を有するものと考えられる。沈線による文様区画であるが頭部には幅広偏平な隆帯が巡り、胸部へ垂下する。1380は波状口縁の土器である。口唇部に貼り付け隆帯による鋸歯文が付される。中心には円孔が穿たれる。1381は口縁部破片で隆帯上にはキザミが付される。また交互刺突による鋸歯文や沈線部の連続刺突文等も見られる。1388は折り返し口縁で無文となっている。1390は大形深鉢の土器で底部を欠損する。外面縄文のみである。1391は半隆起線文による文様で、口縁部及び頭部には横方向に沈線がまわり胴部は縱方向である。1392は小形の深鉢である。無節縄文の後、縱方向に列点文を配している。1393は胴部上半に膨らみをもち、口唇部が「く」の字状に小さく外反する深鉢である。1394~1399は縄文を地文とする胴部から口縁部の破片である。1400~1407は深鉢の胴部から底部にかけての破片である。1408は台付鉢である。脚部は短く無文である。上部は渦巻文を基本とし、S字状に連続するものも見られる。渦巻文は基隆帯によっている。上半にはS字状の端部が円形となる貼り付け突起が4単位に配されるものと考えられる。1409~1416・1418・1424は浅鉢と考えられる。1410には爪形文、1411は細い半隆起線文である。1423は半隆起線による渦巻文で、口唇部には三叉文が見られる。1415は大い沈線による文様区画で、区画内には縄文が見られる。1412は大きな突起が付され、円孔が穿たれる。縄文の側面圧痕が見られる。1425は縄文後期のいわゆる三仏生式土器である。5単位の波状である。口縁部は肥厚する。ヘラ描きの文様区画の後、その中に縄文を充填している。ボタン状貼り付けが見られる。1426は縄文時代早期の貝殻沈線文系の土器である。1427はいわゆる鍋屋町式土器で、細い半截竹管文による押し引き三角形陰刻が見られる。

番 号	器 種	分 類		出 土 場 所	法 量			地 文	色 調	粘 土	二 次 施 工	遺 存	備 考
		系 統	器 形		時 期	口 径	底 径						
1322	深鉢	1	?-c	I-②	H 5 P 135	(35.0) (34.4)		?	櫛	やや密	外ヌス		
1323	*	1	H-b	*	F 5 P 2	26.5		LR	にぶい櫛	黄灰色の粘土粒や多 少や密	内一凹オコゲ 外下丸れ ヌス	1/4	
1324	深鉢	2		II	F 10 P 2	14.5			櫛	やや密	ロヌス	1/4	
1325	深鉢	?	?	?	H 12 P 57			LR	にぶい櫛	密	外ヌス		
1326	*	1	C-b	I-②	G 9 P 49	25.8		LR	淡黄緑	黄灰色の粘 土粒や多 少や密	"	1/8	

番 号	器 種	分類		IS 分類	供 量		地 文	色 調	胎 土	二次焼成	遺 存	備 考
		系 統	形 態		時 期	口 徑	底 径	高 度				
1327	深鉢	I	?	I - ②	H 12 P 57				?	灰褐色	やや粗	内スス
1328	#	I	?	?	I 12 P 162				?	褐	粗	#
1329	#	I	A-b	I - ②	G 9 P 31	15.0	15.0		燃赤R	にぶい緑	やや粗	内一郎スス 外スス
1330	#	?	?	?					L	にぶい黄緑	密	内オコグ
1331	#	I	?	?					LR	浅黄緑	やや粗	外スス
1332	#	I	?	?					LR	#	#	#
1333	#	I	?	?	?	17	P 2		?	#	やや密	
1334	#	I	?	?	H 12 P 17				RL	にぶい緑	やや粗	外スス
1335	#	C-a-b?	?	G 7 P 57					後	やや密	内オコグ 外スス	1/6
1336	#	?	?	G 5 P 101				?	にぶい緑	やや粗	内スス	
1337	#	2	F?	II		42.1			にぶい黄緑	粗	外スス	1/12
1338	#	2	F-G-b	?	I 6 P 118	38.8			?	#	やや粗	内外スス
1339	#	2	?	?	I 4 P 118				?	纏	雲母わずか やや粗	内オコグ 外スス
1340	#	2	C-d-D	?	G 7 P 1				浅黄緑	やや粗	内オコグ 外荒れ	
1341	#	3	?	?	59号土碗				?	にぶい緑	#	内スス
1342	#	2	?	G 7 P 1				纏	やや密			
1343	#	?	?	I 12 P 155				?	#	やや粗		
1344	#	2	C-c	II	I 7 P 101	23.7	27.2		#	雲母少 粗	内オコグ	1/5
1345	#	4	?	I	H 4 P 29				にぶい黄緑	#	内スス	
1346	#	2	?-b	II	H 6 P 47				#	やや粗	外スス	
1347	#	?	?	F 4 P 5				?	纏	やや密	#	
1348	#	?	?	?				?	灰黄	#	内オコグ 外スス	
1349	#	4	?	I					にぶい黄緑	#		
1350	#	?	?	G 5 P 102				?	#	#	外スス	
1351	#	4	?	I - ②				纏	#	#		
1352	#	?	K-?	I				?	#	#	内外スス	
1353	#	?	?-b-c	?	I 4 P 18	16.7			LR	#	#	内スス
1354	#	?	?	G 7 P 31				LR	浅黄緑	#		
1355	#	6	?	I - ②					にぶい緑	やや粗		
1356	#	?	?	I	F 7 P 5	(11.0) (D.5)			纏	やや密	内オコグ	1/4
1357	#	?	D-c	#		24.1 19.4			RL	#	#	外スス
1358	#	5	C-b	II	S 8 P 6	24.6			LR	#	#	内オコグ
1359	#	?	?	#	F 6 P 64				RL	#	黄灰色の粘 土粒多 やや粗	外荒れ
1360	#	?	?	G 7 P 51	?			?	#	やや粗		
1361	#	?	?	?					浅黄緑	雲母少 やや粗		
1362	#	1-3 5	C-b	I - ②	F 7 P 8	18.5 19.2	(12.0) (C.7)		RL	にぶい緑	やや粗	内オコグ
1363	#	4	?	I	G 5 P 102				纏	明赤褐色	雲母極めて少 水晶有 理	外スス
1364	#	?	?	I	I 5 P 166				にぶい緑	やや粗	内オコグ 外スス	
1365	#	3	?	F 9 P 3	33.3 34.2			?	にぶい緑	密	内スス	1/12
1366	#	5	C-b	I - ②	H 7 P 22	30.1 30.5			にぶい緑	雲母多 やや粗	#	1/4
1367	#	4	?	I	H 4 P 28				纏	水晶多 やや粗	外スス	
1368	#	4	C-b	I - ②	G 6 P 117	25.0			LR	にぶい緑	黄灰色の粘 土粒多 やや粗	#
1369	#	?	?	II	I 12 P 165	C1.9			LR	赤褐色	雲母少 やや粗	#
1370	#	3	?	?					LR	にぶい緑	纏多、粗	#
1371	#	3	B-a	?	H 6 P 10	30.3			LR	にぶい緑	纏多、やや粗	#
1372	#	?	?	II								1/16

番号	器種	分類		出土場所	法量			地文	色調	胎土	二次焼成	遺存	備考	
		系	形		面積	底径	高さ							
1373	深鉢	3	A-a	?	57.6			LR	櫻	褐色、粗	外スズ	1/12		
1374	*	?	C-b	?	14 P 38	14.1		?	*	やや密	内オコゲ 外スズ	1/3		
1375	*	?	?	?	H 10 P 2			?	(内)淡黄赤 (外)にぶい赤	*	内外スズ			
1376	*	2	C+b-b	?		?			にぶい櫻	粗	外スズ			
1377	*	4	H	?					*	やや密	*		赤彩	
1378	*	?	G?	?		?		?	*	*	内オコゲ 外スズ			
1379	*	?	?	?	G 5			RL?	櫻	やや粗	外スズ			
1380	*	?	H-c?	?		30.2		LR	*	*	*			
1381	*	?	?	?		?		RL	にぶい褐	やや密	*			
1382	*	?	?	?				LR	にぶい櫻	*	*			
1383	*	3	?	?	G 9 P 39			RL	*	粗	内オコゲ			
1384	*	3	?	?	G 6 P 106			L	黒褐	やや密				
1385	*	3	?	?	H 5			RL	にぶい櫻	シソ葉形・茎付 水晶、やや粗				
1386	*	?	B-b	?	G 6 P 104			LR	*	やや粗	内オコゲ 外スズ			
1387	*	?	A-a	?	G 7 P 1			RL	櫻	*	外スズ	1/12		
1388	*	?	D	?	F 5 P 33	20.7		LR	*	黄灰色の粘 土粒	内一部スズ 外スズ	1/8		
1389	*	?	B?-a	?	I 5 P 23	?		RL	にぶい櫻	やや粗	内スズ			
1390	*	?	A-a	?	G 6 P 118	35.0		LR	淡黄緑	*	内下オコゲ 外スズ	口2/3 胴3/4		
1391	*	?	B-a	?	G 5 P 2	27.7		LR	(内)淡黄赤 (外)にぶい赤	やや密	外スズ	1/6		
1392	*	?	B'-a	?	H 7 P 65	15.8	6.5	17.6	L	淡黄緑	やや粗	内上スズ 外上スズ 外荒れ	7/8	
1393	*	?	D?	?	G 9 P 40	20.6		LR	にぶい櫻	*	内外スズ	1/16		
1394	*	?	D?-b	?	G 6 P 119	32.0		LR	櫻	やや密	外スズ	1/4		
1395	*	?	?	?	I 11 P 28	(D)		RL	*	やや粗	内外スズ			
1396	*	?	?	?	I 4 P 39			L	*	やや密				
1397	*	?	A-a	?	I 5 P 15	19.6		LR	にぶい赤周	粗	内外スズ	1/6		
1398	*	?	?	?	I 5 P 22			LR	淡黄緑	やや密	内オコゲ 外スズ	4/5		
1399	*	3	?	?		17.4		L	にぶい櫻	黄灰色粘土 粒多、やや密	内外スズ	1/3		
1400	*	?	?	?		14.6		LR	*	やや粗	内スズ	4/5		
1401	*	?	?	?	H 10 P 17	11.4	10.8	LR	櫻	黄灰色の粘 土粒	内一部オニ 外スズ荒れ	胴2/3 底1/1		
1402	*	?	?	?	H 10 P 5	6.7	6.3	LR	*	やや粗	内オコゲ 外スズ荒れ	3/4		
1403	*	?	?	?		10.8		LR	*	赤褐色の粘 土粒 雲母少 やや密	内一部スズ 外スズ荒れ	1/1		
1404	*	?	?	?	H 7 P 50	10.6		L	*	黄褐色粘土粒 やや多 やや密	内オコゲ 外スズ	4/5		
1405	?	?	?	?	I 5 P 154	6.9	5.9	?	*	やや密		底9/10 内面赤彩		
1406	深鉢	?	?	?	H 7 P 85	12.1		RL	にぶい櫻	*	内オコゲ	底完存		
1407	*	?	?	?	G 6 P 113			RL	櫻	*	*			
1408	鉢	2		H-①	I 2 P 9	22.6	14.5		*	緑やや多、雲 母少、やや粗	内オコゲ 外上スズ	4/5		
1409	深鉢	?		H 6 P 81	14.0			RL	にぶい櫻	やや粗	外スズ			
1410	*	1		I-②	H 4 P 29			?	*	雲母少 やや粗				
1411	*	?	?	H				LR	櫻	やや粗	外胴スズ			
1412	*	3		I-②	I 11 P 41	?		?	にぶい褐	やや密	一部スズ	1/4		
1413	*	1		I	H 6 P 81	36.0		LR	にぶい櫻	やや粗	外荒れ	1/6		
1414	*	?		I 4 P 38	34.6				櫻	雲母多 やや粗		1/12		
1415	*	?		H-①	H 6 P 21	26.2		RL	にぶい黄緑	雲母やや多 やや粗	外一部スズ			

番号	器種	分類		出土層点	法量			地文	色調	胎土	二次焼成	遺存	備考
		系統	器形		口径	底径	高さ						
1416	浅鉢	1	?	J 6 P 12	49.2			LR	褐色	雲母や多 孔多、粗		1/16	
1417	深鉢	?	?	F 6 P 12	?				?	褐色			
1418	深鉢	?	?	G 7 P 1	?			?	淡黄	やや密			内外赤影
1419	?	3	?	G 10 P 3	?			RL	褐色	外スス			
1420	?	?	?	G 6 P 106				LR	?	やや粗	内外ロスス		
1421	浅鉢	3	?					LR	?	黄灰色の胎 土粒多や多 孔		1/16	
1422	?	?	?	F 7 P 6				LR	にぶい橙	やや密			
1423	?	?	?	H 5 P 115				?	褐色	?			
1424	浅鉢	?	?	H 4 P 25				LR	淡黄	雲母多 やや粗			
1425	深鉢		後期	H 4 P 4	27.5			LR	にぶい黃綠 -黒褐	雲母や多 やや粗	内オコゲ 外スス	1/3	
1426	?		早期	J 13 P 4	?				にぶい黃綠	やや粗	内外オコゲ		
1427	?		前期	B 4 P 3					?	やや密	内外スス		
1428	?	4-5	?	H 6 P 270	?				赤褐	粗	?		
1429	?		後期					?	にぶい黃綠	やや密	外スス		

2) 包含層出土の土器

a D地区(1430~1464)

1430は細い半隆起線文による渦巻文である。1431は雲母粒を多く含んだ土器で口縁部に沿って2条の背竹管文が巡る。1432は貼り付け隆帯による山形文である。1433は波状口縁の土器で波状部は半月状に抉れている。口縁部に沿って半隆起線文・爪形文が巡る。1436は木目状燃糸文である。1437は波状口縁の土器で、渦巻文が見られる。1440は口縁部に沿って交互押圧による波状文が巡る。1441は深鉢又は浅鉢の口縁部破片である。口縁部に沿っては半隆起線文による椭円区画が見られる。1447は胴下半部の土器で、半截竹管による列点状の刺突が見られる。1450は把手部の破片である。隆帯に沿って連続刺突文が見られる。1449は口唇部にキザミ、外面に陰刻による鋸歯文が見られる。1451~1453は鶴頭冠である。いずれも横長で潰れた感じのものである。1454は半隆起線文による文様である。1457~1464は浅鉢と考えられる。1457には繩文の側面压痕が見られる。1458には半隆起線文・爪形文・交互陰刻による鋸歯文等が見られる。1460~1463は半隆起線文・爪形文による文様で、1459・1464は沈線部をなぞっている。

番号	器種	分類		出土層点	法量			地文	色調	胎土	二次焼成	遺存	備考
		系統	器形		口径	底径	高さ						
1430	深鉢	?	?	?	J 13-19				にぶい橙	粗			
1431	?	5	C-a?	?	J 13-25	?			赤褐	雲母兼めて多 孔多、粗	内外スス		雲母面積合20%
1432	深鉢	?	?	J 13-19	?			LR	にぶい黃緑	雲母少 やや粗	?		
1433	?	1	?	I-② H 13-6	25.0			?	褐色	やや粗	内スス	1/6	
1434	?	?	?	G 8-1				?	にぶい橙	やや密	内オコゲ 外スス		
1435	?	?	?	H 12-1				?	褐色	?	内オコゲ		
1436	?	?	?	J 12-21				木目状燃 糸文	にぶい橙	黄灰色の胎 土粒多や多 孔	外スス		
1437	?	2	C-c	II	I 12-16	25.2			(内)にぶい橙 (外)浅黄緑	褐色	外荒れスス		
1438	?	?	?	J 13-25				RL	にぶい黃緑	やや粗	内外スス		

番 号	器 種	分類			出 土 場 所	法 量			地 文	色 調	胎 土	二次施成	遺 存	備 考
		系 統	器形	時期		口徑	底径	高						
1439	深鉢	3	?	?	H 11-12				LR	穂	やや粗	外ヌス		
1440	“	3	B-a?	?	I 13-18	25.7			RL	“	“	“	1/4	
1441	浅鉢?	3		?	G 8-1 I 期	18.7			LR	にぶい穂	水晶やや多 やや粗		1/8	
1442	深鉢?	3	?	?	I 12-21				RL	穂	やや粗			
1443	“	?	?	?	H 11-16	?			?	にぶい穂	やや密	外ヌス		
1444	“	?	B'-a	?	G 8-1	34.8			LR	にぶい・直筒	雲母少、やや粗	“	1/12	
1445	“	2	D-c	?	アリコド				“	にぶい穂	やや密	内外ヌス		
1446	“	?	?	?	H 13-6	?			穂	黄灰色の粘 土粒	やや密	外ヌス		
1447	“	1	?	I	G 9-14	11.6 12.2			灰青～浅黄緑	雲母やや多 やや粗	外荒れ	3/5		
1448	“	?	G-b?	?	H 12-9	?			“	にぶい穂	雲母やや多 やや粗	内外ヌス		
1449	“	3	?	?	H 11-5	?			RL	穂	やや密	外ヌス		
1450	“	2	?	II	H 12-9				?	浅黄緑	やや粗			
1451	“	2	C-d-b	?	H 11-24				“	にぶい穂	穂	外荒れ		
1452	“	2	“	?	H 12-20				“	穂～明赤褐色	やや密			
1453	“	2	“	“					穂	やや粗	外荒れ			
1454	鉢	1a-2	?	?	J 13- 16-20	9.3			“	にぶい穂	黄灰色の粘 土粒多、粗	外一體ヌス	完存	
1455	深鉢	3	F-a?	?	H 14- 15-	?			RL?	浅黄緑	やや粗	外荒れヌス		
1456	“	?	?	?	G 10-5	?			“	“	“	内オコゲ		
1457	浅鉢	3		I	I 11-8				RL	穂	穂			
1458	“	1		“	G 11-2				RL?	にぶい穂	雲母多 やや粗			
1459	“	?		?	G 9-2				LR	穂	雲母やや多 やや粗		1/12	
1460	“	?		?	J 13-16 I 期				LR	“	やや粗			
1461	“	1		I	G 9-2	?			?	にぶい穂	雲母やや多 やや粗			
1462	“	1		“	J 13-25				LR	淡黄～ 浅黄緑	黄灰色の粘 土粒、粗			
1463	“	1		“	I 13-20	?			?	浅黄緑	雲母多 やや粗			
1464	“	?		?	G 9-2				RL	穂	雲母少 やや粗			

b 表採(1465~1473)

多くの表採品のうち一部を掲載した。1466は口縁部に沿って棒状工具による沈線が4本巡り、その下に連弧文が見られる。1467は口縁部にS字状の貼り付けが見られる。頸部には半陸起線文が巡る。1468~1471・1473は浅鉢である。1468は貼り付けの突帯が巡る。口縁部は欠損のため不明である。1469・1470は半陸起線文及び爪形文の土器である。

番 号	器 種	分類			出 土 場 所	法 量			地 文	色 調	胎 土	二次施成	遺 存	備 考	
		系 統	器形	時期		口徑	底径	高							
1465	深鉢	?	?	?	表採?	25.0			?	浅黄緑	やや粗				
1466	“	3	?	?	表採	20.3			LR	にぶい穂	やや密	外ヌス			
1467	深鉢	3	?	II-①	*	23.0			RL	にぶい穂	やや粗	内オコゲ 外ヌス			
1468	鉢?	3	?	?	*				LR?	淡黄	“				
1469	浅鉢	1		I	*	?			?	にぶい穂	“	外ヌス			
1470	“	1		“	*	?			RL	穂	“				
1471	“	1		?	*	?			?	浅黄緑	雲母やや多 やや粗				
1472	“	?			*				?	穂	やや粗	外荒れ			
1473	浅鉢	3		?	*	?			LR	浅黄緑	雲母少 やや粗			内面赤彩	

c Aトレンチ (1474~1490)

1474は頭部から口縁部にかけての破片である。頭部には爪形文・半隆起線文が巡り、口縁部にかけては縦の半隆起線文が不規則に走る。1475は爪形文と蓮華文との組合せである。1476~1478は半隆起線文と爪形文の組み合せである。1479も同じ文様の組み合せである。口縁部は波状となる。1485~1489は中部高地系の土器と考えられる。1485は、全体の文様構成が明らかでない。隆帯による波状文等の文様で隆帯に沿って刺突文や沈線が巡る。1486は隆帯と半隆起線文・爪形文の組合せである。1487も断面三角形の隆帯でそれに沿って刺突が巡る。1488は金雲母を非常に多く含む土器で波状突起部である。

番号	器種	分類		出発点	生量		地文	色調	胎土	二次焼成	遺存	備考	
		系統	器形		時期	口径							
1474	頭部	1	C?	I-①	Aトレンチ			LR	(内)淡黄褐色 (外)灰褐色	やや密	外スス欠れ		
1475	?	1	?	I-②	x	34.8		?	にぶい緑	青緑色	やや密	1/16	
1476	?	1	?	I-①	x	33.9		LR	浅黃緑	やや密	外スス	1/12	
1477	?	1	B'-a	x	x	27.3	12.0	36.5	RL	灰黄	パリス?	内一墨色コグ 外上スス	9/10
1478	?	1	?	I-②	x			RL	(内)にらみ緑 (外)灰黒	黄褐色の粘土質や多 やや密	外スス		
1479	?	1	?	x	x	65.0			淡褐	やや密	内外一部ス ス		
1480	?	1	?	?	x	13.4		L?	にぶい黄緑	x	外スス	1/6	
1481	?	?	A-a	?	x	18.1		L	にぶい緑	黄褐色の粘 土質多 やや密	外スス+オコ グ	1/8	
1482	?	?	A-b?	?	x	15.6		L	にぶい緑	黄褐色の粘 土質多 やや密	外オコグ	1/8	
1483	?	?	B-a	?	x	9.7		L	x	やや密	内オコグ	1/4	
1484	?	?	?	?	x	?		?	x	やや密	外スス		
1485	?	?	?	I	x			RL	浅黃緑	やや密			
1486	?	4	?	x	x			?	緑	x	内スス		
1487	?	4	?	x	x				緑+赤褐	胎	内外スス		
1488	?	5	C-c	x	x				明赤褐~赤褐	胎骨少當に多 やや密		青緑面積割合 25%	
1489	?	4	C-b?	x	x	?			x	水晶わざか 無	外スス		
1490	?	1	A-a	I-①	x	?		LR	にぶい黄緑	やや密	x		

d A地区Na付土器 (1491~1548)

A地区において一括性が高いと判断され、マッピングにより取り上げた土器である。

1491は細い竹管による山形文やY字文の見られる土器である。1492は爪形文及び半隆起線による山形文である。1493は波状4単位の土器である。頭部は半隆起線文・爪形文が繰り返され4つの突起も見られる。突起部からは、半隆起線文が垂下する。口縁部は上部に爪形文、下部は無文である。1494は3単位の小突起をもつ深鉢である。口縁部に沿っては半隆起線文と爪形文とが交互に施文される。その上端の口縁部にはヘラ状工具による沈線が連続する。胴部は浅い沈線が不規則に垂下している。1495~1496は半截竹管の工具が比較的小さいものである。1496は口唇部にのみ幅広の爪形文を用いている。1500は頭部及び口縁部に爪形文が一周する。純文は無節で口縁部と頭部の間では部分的に横方向の条となっている。1502~1504・1506・1507は

蓮華文が付される土器である。1505には格子目文が見られる。1508は爪形文と格子目文の組み合せ、1509はそれに蓮華文が加わる。1511～1516は浅鉢である。1513を除いては、口縁部が「く」の字状に屈曲する。いずれも半截竹管による爪形文・蓮華文等が見られる。1514は内面に赤採が見られる。1519は深鉢下半部の破片である。上半に垂下した半隆起線文の端部が見られる。1522は縱方向の半隆起線文を連続させている。1523～1526は折り返し口縁の土器である。1523は木目状撲糸文、1524は鋸齒状の突起を有する。1526は波状部をもった土器で下部に貼り付け隆帯が見られる。1527は口縁に沿って細い半隆起線文が巡っている。1530は小突起をもつ深鉢で地文は縱方向の撲糸文である。1532は繩文の条が横方向である。1535は繩文側面圧痕と鋸齒文とが繰り返される。1536は大形の深鉢である。胴部は細長く口縁部は短く外反する。口縁部には繩文の側面圧痕による文様が見られ、胴部には駒くり文が見られる。1537は口縁が「く」の字状に外反し、胴部にやや膨らみをもつ甕に近い器形である。繩文地上に半截竹管による縱方向の連続押し引きが2対で垂下している。頸部には貼り付け瘤が見られる。1538・1539、1541～1544は中部高地系の土器と考えられる。1538は隆帯による横帶梢円区画文を基本とし、部分的に端部が渦を巻く。区画内には斜向沈線文・波状文・刺突文・背竹管による押し引き等が見られる。1540は口縁部破片で区画に沿って背竹管の押し引きが見られる。1542は有孔鉢付である。1544は大きな把手の付される土器であるが、文様構成は不明である。1545は口縁部に沿って連続の指頭圧痕が巡る。1546・1547は関東の阿玉台系土器である。1546は浅鉢で口縁に沿って梢円区画の貼り付け隆帯が巡り、それに沿って角押文が巡っている。1547は無文で貼り付けの小突起が付されている。1548は筒状の深鉢で三十種場式類似の刺突文が見られる。後期の土器と考えられる。

番 号	器 種	分 類		出 所 地 方	法 量		地 文	色 調	胎 土	二 次 燒 成	遺 存	備 考
		系 統	器 形		時 期	口 徑	底 径					
1491	深鉢	?	?	I-(1)	E 6 No.25			RL	穂	埋多 やや粗		
1492	*	1	E-a?	*	E 5 No.27	?		LR	(内)黄黄 (外)灰白-褐	やや粗	外スス	
1493	*	1	B	I-(1)	E 5 No.1 No.5	25.4 28.5	7.2 39.0	LR	(内)黄灰 (外)灰黄	*	〃	3/5
1494	*	1	A	*	E 4 No.3, 21, D, H, 21, 22, 25, 26	24.5		LR	灰白 陶下半黃棕	粘土塊多 砂礫少 やや粗	〃	1/2
1495	*	1	?	I	E 6 No.163	18.2		?	にぶい褐	やや密	内オコゲ 外スス	1/8
1496	*	1	D-a	*	E 6 No.112	15.8		LR	〃	〃	内外スス	1/8
1497	*	1	?	I-(2)	E 5 No.17	18.6		穂	やや粗	内オコゲ		
1498	*	1	A-b	I-(1)	E 5 No.157	21.6		RL	にぶい穂	やや粗		1/4
1499	*	1	*	*	E 6 No.60	21.1		RL	〃	雲母やや多 やや粗	外オコゲ	2/5
1500	*	1	C-a	*	E 5 No.8	19.7		L	淡黄棕	黄灰色の粘 土塊多 やや粗		1/6
1501	*	1	?-b	I	E 6 No.162	36.5		LR	〃	やや密		1/6
1502	*	1	*	I-(2)	E 5 No.113	?		?	(内)淡黄 (外)灰白-褐	やや粗	外スス	
1503	*	1	?	*	E 6 No.163			?	にぶい黄	〃		1/8
1504	*	1	E-a	*	E 6 No.31	24.9		?	にぶい穂	〃	外スス	

番 号	形 態	分類			法 量	地 文	色 調	胎 土	二 次 燒 成	遺 存	備 考
		系 統	器形	時 期							
1505	深鉢	I	C-b?	I-(2) E 5Na203	35.6	?	浅黄緑	やや粗		1/8	
1506	?	I	C?	# E 5Na255		?	#	黄褐色の粘土粒多 やや密	外スス		
1507	?	I	?-b	# E 5Na67	?	?	にぶい-緑	やや密	#		
1508	?	I	?	# E 5Na 5 (88.0)		LR	#		内外スス	1/3	
1509	?	I	?	# E 4Na11 F 4Na21	13.1		(内)明赤褐 (外)明黄褐	#	#	3/5	
1510	?	I	C?-b	# ? ?		?	にぶい-緑	やや粗	内スス 外スス焼れ	1/8	
1511	浅鉢	I		# E 5Na207	?	?	浅黄	#			
1512	?	?	?	I E 5Na220		LR	灰白	#			
1513	鉢	I	?	I-(2) F 4Na20	42.7		浅黄緑	富田多 やや粗	内スス	1/8	
1514	浅鉢	I		I E 5Na350	37.7	LR	#	やや粗		1/8	内面赤彩
1515	?	I?		# F 4Na?		?	緑	雲母や多 やや粗			
1516	?	I	I-(2) E 6Na65			LR	浅黄緑	やや粗			
1517	深鉢	I?	?	E 6Na?	10.2	RL	緑	#	内スス	1/3	
1518	?	?	?	E 6Na36	8.9	RL	灰白	やや密		1/6	
1519	?	I	?	I E 6Na80	11.8 11.3	LR	浅黄緑	#		2/3	
1520	?	I	B?	I E 6Na144		?	緑	粗	内オコゲ 外スス	1/8	
1521	?	A-c?	?	F 4Na 1	17.8	燃糸R	にぶい-緑	やや粗	内オコゲ 外スス	1/4	
1522	?	?	?	E 6Na74	19.7	LR?	#	黄褐色の粘土粒 やや密	内オコゲ	1/6	
1523	?	I	?	I-(1) E 5Na?	21.2	?	緑	やや密	内オコゲ 外一部スス	1/3	
1524	?	I	?	# E 5Na 2	20.6	LR	#	#	内スス	1/3	
1525	?	6 (1-2)	A-a?	# E 5Na16	13.3	LR	#	やや粗	外スス	1/12	
1526	?	?	A-b?	# E 5Na183	23.9	LR	#	やや密	#	1/6	
1527	?	?	?-c	I E 5Na167 G19		LR?	赤褐	礫多、粗	内外焼れ	1/8	
1528	?	6 (1)	B-b?	E 5Na76	21.3	L?	にぶい-緑	繊維 やや粗	内スス 外瓦ルオコゲ	1/6	
1529	?	A	?	G 9Na32		?	浅黄緑	やや密	内外スス	1/3	
1530	?	6 (1)	B-b	I E 5Na345	29.3	燃糸	にぶい-緑	粗	外スス	1/6	
1531	?	?	?	E 6Na20	4.9		#	やや密		3/5	
1532	?	?	?	E 6Na145	8.0 8.9	LR	灰白	#	内外スス	底穴存	
1533	?	C	?	E 5Na28	21.2	LR	にぶい-緑	やや粗	#	2/3	
1534	?	L-a	?	E 5Na322	21.1 21.5		浅黄緑		外一部スス	1/6	
1535	?	3	C-a?	E 6Na63	?	?	#	雲母少 やや粗		1/12	
1536	?	3	B-b	I-(1) E 6-19 E 6Na81	Q1.0 (15.9) (44.9) (46.9)	LR	#	繊 やや密	外一部スス	3/5	
1537	?	6	B'-a	I E 5Na 2	Q1.9 (Q1.9) 7.5 (Q1.9)		浅黄緑-灰褐	繊多 やや密	外スス	1/4	
1538	?	4	C-b	I-(2) E 4Na 3	G1.9 ? Q5.9		にぶい-緑	雲母・繊 やや密	#	1/3	
1539	?	4	?	# E 5Na112		?	明赤褐色- にぶい-緑	やや粗	#		
1540	?	4	?	# E 5Na303		?	浅黄緑	#			
1541	?	4	?	# ?		?	緑	#	外スス		
1542	?	4	KaJ	? E 5-4		灰褐	輝石・水晶・ 雲母少、粗				
1543	?	4	?	I-(2) E 5Na111		?	にぶい-緑	やや密	内外スス		
1544	?	4	?	# E 6Na95		?	緑	やや粗			
1545	?	5	?	I E 6Na93	20.6		浅黄緑	#	外オコゲ		
1546	鉢	5	?	I-(2) E 6Na61	Q1.0 (15.9) (Q1.9)		粗	雲母少 やや粗	内スス	1/2	
1547	深鉢	5	?	# E 5Na132	25.0	?	にぶい-緑	#		1/6	
1548	?		後期	E 5 Na6, Na, 28.1%, 15, 32	19.5		黄緑	繊多 やや密	#	口～胸 9/10 胸中位 1/2	内面黒斑か

e A地区 (1549~1655)

1549は尖底の深鉢である。全体には無節の縄文が付され、口唇部にはヘラ状工具によるキザミが施される。胎土内に纖維を多く含む。1550も尖底になると考えられる。やはり、纖維を含む。小円形刺突による文様である。1551~1562は前期の土器である。1551は口縁部に爪形文を施文後、0段多条のRL・LRのループ文を配している。1552は縄文Rの押圧である。1553・1561はLRLの縄文を押圧している。1554は0段多条のRL・LRの羽状である。1555は縄文Lの押圧である。1562は口縁部に3列の縄文原体端部押圧の列点が巡り、以下は縄文Lの押圧である。1557はいわゆる鍋屋町式に見られるもので、沈線束による山形文、及び三角陰刻が見られる。1558~1560は細い半截竹管文による文様である。1563~1572は半隆起線文及び爪形文の組合せである。1565は口縁部に小突起を4個有する。地文に縄文を施文後、半隆起線文・爪形文を横帯に配している。区画内及び胴部には細いヘラ状沈線による雑な斜格子目文が見られる。1567は突起が3単位見られ、地文に燃糸文を用いている。1572は口縁部が折り返し口縁で縄文が施文される。1573~1578はいわゆる蓮華文の付される土器である。1579~1582は格子目文の見られる土器である。1595は幅広の半隆起線文を用いている。1596は波状口縁の深鉢で口縁に沿って半隆起線文2条が巡り、また頸部にも4条の半截竹管文が巡る。口縁部は無文帶で胴部以下は縄文である。1597は口縁部が短く外反する。頸部には断面三角形の突帯がまわり、そこに列点文が施されている。以下は縄文である。1598は口縁部上端無文帶で、そこに沈線が巡り以下は縄文である。1600は口縁部に沈線による連弧文が見られる。1604は半隆起線文による逆U字状の文様が見られる。1605・1606は同一個体である。口縁部には貼り付け隆帯による渦巻状の文様が付され隆帯上にはキザミが付される。口縁部に沿っては横方向の燃糸文である。1608・1610~1612には縄文の側面圧痕が見られる。1615・1616は小形の深鉢である。1617は縄文施文の後、5条の半隆起線文が頸部と口縁部に巡る。1614は小形の深鉢である。地文は無節の細い縄文である。頸部には背竹管の刺突が2条巡る。口縁部は沈線による連続三角形区画、胴部は継ぎの区画である。1621は把手で細い刺突が施される。1620・1622・1623は折り返し口縁である。

1628~1637は浅鉢である。1628には蓮華文(爪形の連続刺突)、1629には細いヘラ状工具による矢羽根文、1630には爪形文、1631には蓮華文、1632には三叉状の陰刻、1633は半截竹管による橢円区画で、その中に同一工具によるキザミが付される。1634は交互の三角形陰刻による鋸歯文、1635は無文である。1636は上半部無文で、口縁端部は肥厚し、小突起が付される。1643を除く1638~1651は中部高地又は関東系の土器と考えられる。1643は口縁部隆帯区画内に細い背竹管による連続刺突が充填される。胴部は沈線又は隆帯による継区画を基本とし、その中を沈線で充填している。1644は隆帯により文様区画され、それに沿って沈線が數状巡り、沈線内には連続の刺突が見られる。また弧状沈線も見られる。1649は無文で隆帯による十字状

の区画である。1651は大把手である。1652・1653は同一個体で押圧又は削り取りにより凹凸を出している。1654は押圧による。1655は底部で、渦巻状の網代底である。

番号	器種	分類		出 産 地	形 状	地文	色調	胎土	二次焼成	道存	備考
		系統	器形								
1549	深鉢			早期	B 2 - 斜 20.1		にぶい緋	やや密	内外スヌ	1/2	
1550	#			"	G 3 - 17.2		?	"	外一部スヌ		
1551	#			中期	D 4 - 18	?	?	"	内一部スヌ 外スヌ		
1552	#			"	A 1 - 18 1層		?	"	外一部スヌ		
1553	#			"	D 5 - 6		?	浅黄緑	"	外スヌ	
1554	#			"	B 5 - 7 1層	LR・RL	"	やや粗	内スヌ		
1555	#			"	A 2 - 7.2 1層		?	にぶい緋	"	内外スヌ	
1556	#			"	D 5 - 6		?	緋	"		
1557	#			"	B 4 P 3		?	にぶい黄褐	やや密	外スヌ	
1558	#			"	F 4 - 21		浅黄緑	やや粗			
1559	#			"	B 3 - 5 1層		?	緋	"	内スヌ	
1560	#			"	H 2 - 7		?	"	"		
1561	#			"	D 5 - 2		にぶい緋	"			
1562	#			"	E 7 - 5	?	浅黄緑	やや密			
1563	#	I	C-b	I - ①	E 4 - 1 24.4	RL	浅黄緑	"	内外スヌ	1/4	
1564	#	I	"	I	E 4 - 2 17.7	LR	"	やや粗	"	1/3	
1565	#	I	A-b	I - ②	G 3 - 24 0.0	?	緋	"	外スヌ	1/3	
1566	#	I	C-b	I	F 4 - 1 29.9	LR?	(内)浅黄緑 (外)にぶい緋	粗	"		
1567	#	I	A-b	"	G 3	20.1	燃糸	灰白	胎土小塊 やや粗	外スヌ?	3/4
1568	#	I	B-a	"	G 3 - 3	12.2	RL	にぶい緋	やや密	内オコゲ	
1569	#	I	A-a	"	D 6 - 7	16.6	?	浅黄緑	"	外一部スヌ	
1570	#	I	C-c	"	G 4 - 5	24.1	LR?	にぶい緋	やや粗	外スヌ	
1571	#	I	?-b	"	G 3 - 22		?	"	やや密		
1572	#	I	"	"	E 4 - 1		(内)灰白 (外)にぶい緋	やや粗	外スヌ		
1573	#	I	D-c	I - ②	E 6 - 14 No.160	?	浅黄緑	粗	内スヌ		
1574	#	I	?	"	E 6 - 24		?	"	やや粗	内外スヌ	
1575	#	I	?	"	E 4 - 7	?	緋	"	内スヌ		
1576	#	I	?-b	"	E 6 - 17.8	RL	灰褐色	"			
1577	#	I	?	"	D 6 - 3		?	にぶい緋	"	内外スヌ	
1578	#	I	?-b	"	E 5 - 6	14.0	?	"	内スヌ		
1579	#	I	?	"	D 6 - 3		?	"	外スヌ		
1580	#	I	?	"	E 5 - 5	10.2	LR	"	やや密	外一部スヌ	1/2
1581	#	I	?-b	"	D 6 - 4 41.4		浅黄緑	"			
1582	#	I	?	"	F 4 - 2 26.2	?	浅黄	"	外スヌ		
1583	#	I	?-a	"	C 6 - 4	17.2	?	淡黄緑～緋	胎土やや多 やや粗		
1584	#	I	?	"	G 4 - 25		にぶい緋	やや密	内オコゲ		
1585	#	I	?	"		10.2	LR	"	"	外一部スヌ	1/2
1586	#	I	?-b	"	E 6 - 24	?	浅黄緑～灰褐色	やや粗	外スヌ		
1587	#	I	A-a	"	G 4 - 25	12.0	浅黄緑	やや密	内スヌ		
1588	#	I	L-a	"	E 6 - 25 0.9	(B 8.0)	にぶい緋	やや粗	"		
1589	#	I	?	"	D 6 - 3		"	"	内オコゲ		
1590	洗鉢	I		I	E 5 - 3		浅黄緑	やや密	内一部スヌ		
1591	#	I	?				灰白	"			
1592	#	I		I	E 5 - 3	LR	緋	やや粗			
1593	#	I		I	E 5 - 6		?	にぶい緋	やや密	内オコゲ	
1594	#	I		"	E 6 - 1-2	?	?	淡黄	やや粗		
1595	洗鉢	I	A-b	I - ②	G 3	28.0 11.1	RL	緋	やや密	内スヌ	
1596	#	I	B-b	?	E 6 No.81	?	浅黄緑	やや粗	外スヌ		
1597	#	I	K-?	?	B 3 - 5	?	?	"	"		

番 号	分 類	系 統	器 形	時 期	法 量			地 文	色 調	胎 土	二 次 燒 成	道 存	備 考
					口徑	底径	高						
1596 深鉢	1	D-a	I	F 3-22	34.9			LR	赤褐色	やや粗	内外スス		
1599	?	?	C 6-2	?				?	明褐色	“			
1600	?	B-a	G 3-19	23.7				?	にぶい緑	ケ	内外スス		
1601	?	D?	F 4-15 1層	?				LR	浅黄褐色	やや密	内オコゲ 外スス		
1602	?	?	G 3-8					?	綠	やや粗			
1603	?	?	E 6-1					?	淡黃	やや密	内スス		
1604	?	?	D 6-3 8-13						明黃褐色	粗			
1605	?	?	E 6-25	?				?	綠	やや粗	外一部スス		
1606	?	?	“	?				?	浅黃褐色	やや粗			
1607	?	A?	E 5-6	?				LR	綠	やや密	内スス		
1608	?	3	?	F 4-2				?	浅黃褐色	粗	内外スス		
1609	?	?	H 12-20	18.2				LR	にぶい緑	やや密	ケ		
1610	?	3	?	G-F-15	?			LR	“	やや粗	ケ		
1611	?	3	?	D 6				?	後黃褐色	ケ			
1612	?	3	?	E 5-6				?	にぶい緑	ケ	内外スス		
1613	?	?	E 6-9					?	“	やや密			
1614	?	C-a	E 7-5	6.8				?	“	ケ	内スス		
1615	?	?	E 5-6					?	綠	ケ	ケ		
1616	?	F-a	E 5-6					?	にぶい黃褐色	ケ	内外スス		
1617	?	B-b	F 4-22	24.0				LR	綠	やや粗	外スス		
1618	?	A-a	F 4-1	20.6				LR	“	ケ			
1619	?	A-b	G 4-10	16.8				撲条L	浅黃褐色	ケ	外スス		
1620	?	A-a	E 5-3	15.3				RL	綠	ケ			
1621	?	?	D 6-29					/	赤褐色	ケ			
1622	?	H-a	I-① G 3-24	21.1				撲条I	灰白	ケ	内外スス		
1623	?	C-?	E 5-4-5	?				LR	浅黃褐色	ケ			
1624	?	L-b	F 4-1	9.7				?	綠	やや密		網1/6	
1625	?	A-b	G 4-15	13.4	24.0 22.6			LR	綠～赤褐色	ケ	内外スス		
1626	?	B-a	E 6 №72	17.2					赤褐色	ケ	外スス		
1627	?	?	G 4-24	22.6				?	綠	やや粗	外一部スス		
1628	?	?	H 2-7 1層	?				?	浅黃褐色	やや密	内外スス		
1629	?	1	?	G 3				LR	“	ケ			
1630	?	1	C 6-2 1層					?	綠	やや密	内外スス		
1631	?	1	?	?	29.6			RL	灰白	やや粗			
1632	?	?	D 6-1	?				?	綠	雲母多、やや粗	内外スス		
1633	?	?	E 5 №33						“	粗			
1634	?	1	G 4-15	38.6				?	にぶい緑	やや粗			
1635	?	?	G 3-18-23	32.8				?	綠	雲母わずか、 やや粗	外スス		
1636	?	?	E 4-3 1層	47.3				?	“	やや密			
1637	?	?	G 4-25					/	灰褐色	ケ	内外スス		
1638	?	?	D 6-3					?	浅黃褐色	やや粗			
1639	?	?	G 4-15					?	にぶい緑	やや密	内スス		
1640	?	?	G 3-18 3層					?	黒褐色	雲母非常に多 やや粗	内外スス		
1641	?	?	E 6-14					?	にぶい緑	やや粗	外スス		
1642	?	?	F 4-24 1層					?	“	やや密	内外スス		
1643	?	2	C-a	G 2-19	20.9	?		?	浅黃褐色	やや密	内外オコゲ		
1644	?	4	?	E 5-9 №37-38				?	にぶい緑	ケ	内オコゲ		
1645	?	?	F 5-16-17	?				?	綠	やや粗			
1646	?	?	E 6-25					?	にぶい緑	やや密	内外スス		
1647	?	?	E 5-9					?	赤褐色	やや粗	ケ		
1648	?	?	?	?				?	にぶい緑	ケ	内スス		
1649	?	?	E 6-14					?	にぶい黃褐色	やや密			
1650	?	?	C 6-4					?	褐灰	やや粗			
1651	?	?	E 6 №25					?	にぶい緑	やや密			

番号	器種	分類			出土場所	出土地質			地文	色調	胎土	二次焼成	遺存	備考
		系統	形態	時期		口縁	底盤	表面						
1652	深鉢	?	?	?	E 5-2				?	にぶい緑	やや密			
1653	?	?	?	?	E 5-4				?	?	?			同一個体
1654	?	?	?	?	E 5-10				?	?	雪母少、やや粗			
1655	?	?	?	?	F 2-2				?	?	やや密			

f B地区 (1656-1708)

1656-1657は波状の口縁で爪形文が付される。1656は波頂部が抉れている。1658は貼り付け隆帯による文様で、細長い連続刺突が見られる。1659は折り返し口縁である。貼り付け隆帯による三角区画で、その中を細い沈線の斜格子目文で充填している。1660は沈線による区画で、陰刻の三叉文・刺突文等が見られる。1664は纏文の側面圧痕を口縁部に沿って縱方向に配している。1663-1665・1666はいわゆる王冠型土器の波頂部である。1667は台付鉢の下半部である。1668・1669は越後系の土器である。1670も越後系の土器である。口縁部は横走する隆起線文、胴部には渦巻文が4単位配される。1671は太い断面三角形の隆帯による三角区画及び横走する半隆起線文によっている。三叉文の陰刻も見られる。1672は幅広の半隆起線文による文様で、区画に沿った刺突も見られる。1678は横S字文と眼鏡状の文様を組合せた把手である。1679は折り返し口縁の土器で折り返し部は無文となる。1682は折り返しでなく沈線が1本巡り、その上は無文となっている。1692-1694は浅鉢である。1692は、半隆起線文及び細く深い沈線。1693は半隆起線による橢円区画。1694は三角形陰刻による鋸歯文である。1695は捺糸文上に貼り付け隆帯及び半隆起線文により文様を描いている。1696-1698・1701・1703・1705は中部高地系の土器と考えられる。1700は角押文を用いている。1703は1671と同一個体である。1704は外面隆帯による橢円区画を行い、その中に背竹管の爪形を充填している。また内面にも貼り付け隆帯による文様が見られる。1706は背竹管による文様である。1707は三叉状の隆帯とそれに沿った沈線及び背竹管文が見られる。1708は後期の土器である。

番号	器種	分類			出土場所	出土地質			地文	色調	胎土	二次焼成	遺存	備考
		系統	形態	時期		口縁	底盤	表面						
1656	深鉢	1	C	I-②	H 4-22 28.3				L	浅黄緑	やや密	外スス	1/6	
1657	*	1	*	?	H 5-16				?	にぶい緑	やや粗	内外スス		
1658	*	?	?	?	I-20-25				?	?	やや密	外スス		
1659	*	1	?	?	H 5-24				?	*	やや粗	*		
1660	*	?	?	?	I 5-12				?	にぶい緑	やや密	内外スス		
1661	*	?	?	?	I 4-7				R	*	*			
1662	*	?	?	?	G 6-2				?	?	?			
1663	*	2	D-c	II-③	I 5-18				?	にぶい緑	粗	内外スス		
1664	*	2	?	?	I 5-10	?			?	?	?	*		
1665	*	2	D-c	II	H 5-6-21				?	*	やや粗	外スス		
1666	*	2	*	*	H 5-13				?	*	*	*		
1667	台付鉢	2	*	*	H 6-25				?	?	粗	内オコダ	1/10	
1668	深鉢	2	?	?	I 5-23				?	にぶい緑	やや密	外スス		
1669	*	2	?	?	I 5-10				?	?	?	内スス		
1670	*	2	C-a	II-③	I 6-21 27.6				?	?	やや密	内外スス	1/2	
1671	*	2	?	?	I 5-20-25				?	?	*	外スス		1703と同一個体
1672	*	4	?	?	F 6-16				?	?	やや粗	*		

番 号	分類			出 土 地 点	形 量			地 文	色 調	胎 土	二次焼成	遺 存	備 考
	系 統	器 形	時 期		口徑	底径	器高						
1673	深鉢	?	?	F 7-13				LR	桜	褐色 やや粗	内外スス		
1674	*	?	?	H 5-4-8				LR	にぶい桜	やや密	ク		
1675	*	?	?	I 5-20-25				RL	〃	やや粗	外スス		
1676	*	3	D-a	I 5-14				RL	にぶい鶴	粗	内外スス		
1677	?	?	?	H 5-24				RL	にぶい桜	やや密	内一部スス		
1678	深鉢	3	?	II H 5-4 34.9				LR	〃	やや粗	外スス		
1679	*	?	?	I 5-2				RL	浅黄橙	粗			
1680	*	?	?	F 6-16 16.1				LR	にぶい桜	やや密	内オコゲ		
1681	*	?	?	?									
1682	?	3	F-a	H 5-2 28.7				LR?	浅黄橙	やや密	内外スス		
1683	?	3	*	G 6-14 30.0				LR	桜	やや粗	内オコゲ		
1684	深鉢	3	B-a	H 5-2 21.4				LR	〃	〃	内外スス		
1685	*	?	F-a	I 4-8 32.7				LR	浅黄橙	〃			
1686	*	?	?	I 4-7-8 ?				櫻赤r	〃	粗	内スス		
1687	*	?	?	I 5-8-9 8.7				?	桜	やや密	ク		
1688	*	?	?	F 6 P31				?	にぶい黄桜	やや粗	外スス		
1689	*	?	L-a	H 5-4				櫻赤r	〃	〃	口内外スス	1/8	
1690	*	?	?	F 7-14 7.0				LR	桜	やや密	内オコゲ	底 2/3	
1691	*	?	?	I 4-1 14.3				?	にぶい桜	〃	ク	底 4/5	
1692	浅鉢	2		II G 7-10				LR	桜	雪舟多、やや密	外一部スス		
1693	*	2		# F 7-8 35.6				?	にぶい桜	〃	内外スス		
1694	*	?		H 4-21				LR	桜	やや密			
1695	直鉢	2	C-a-D	H 4-8				?	赤褐	粗			
1696	*	?	?	G 6-18				/	赤	やや密			
1697	*	?	?	E 5-20 1周				?	にぶい桜	やや粗	外スス		
1698	*	?	?	G 5				?	〃	〃			
1699	*	?	?	G 6-13				?	桜	やや粗	内スス		
1700	*	5	?	I H 6-1 35.9				?	赤褐	やや粗	内外スス		
1701	*	?	?	G 5-12				?	赤褐	やや密	ク		
1702	*	?	?	G 5				?	にぶい鶴	やや粗			
1703	*	?	?	G 5-12 1周				?	赤褐	やや密	外スス		1671と同一個体
1704	*	?	?	G 6-23				?	浅黄橙-桜	やや粗	内一部スス		
1705	*	?	?	G 6-16				?	桜	〃	内外スス		
1706	*	?	?	I 5-17				?	浅黄橙	〃			
1707	*	5	?	I 4-23				?	〃	〃			
1708	*	?	?	F 6-4				?	にぶい黄褐	〃	内外スス		

g C地区 (1709~1720)

1709・1710は爪形文・半隆起線文の土器である。1711・1713は王冠状の把手である。1714は口縁部で袋状の突起が見られる。1712は胴部破片で、渦巻文が見られるが、沈線部分にはキザミが付される。1715は台付鉢と思われる。1717も口縁部の把手である。外面の沈線部分には背竹管による押し引きが見られる。1718は大きな貼り付け隆帯である。1720は口縁の把手部である。桶状の把手が付される。上端にはヘビ頭と思われる突起が付されている。

番 号	分 類			出 土 地 点	形 量			地 文	色 調	胎 土	二次焼成	遺 存	備 考	
	系 統	器 形	時 期		口徑	底径	器高							
1709	深鉢	1	C-b	I -②	H 8-6	?		?	にぶい桜	やや粗	内スス	1/3		
1710	*	1	B-c	# H 8				?	明黄橙	〃	外スス			
1711	*	2	D-c	II I 7-20	?			?	にぶい桜	やや密	ク			
1712	*	2	?	# H 9-21				?	灰白	やや粗	内一部スス			
1713	*	2	D-e	II I 10-9				?	にぶい桜	やや密				
1714	*	2	?	II H 8-23-24				?	〃	〃				
1715	*	2	?	# H 7-3				?	赤褐	やや粗	内外スス			

番 号	器 種	分 類			出 土 年 代	法 量			地 文	色 調	胎 土	二次焼成	遺 存	備 考
		系 統	器 形	時 期		口徑	底径	器高						
1716	深鉢	2	?	?	I 10-25				?	橙	やや密			
1717	?	?	?	?	I 7-20				+	“	“	外ヌス		
1718	深鉢	3	?	?	H 8-14				LR	灰黄褐	橙	“		
1719	?	?	?	?	H 8-21				?	にぶい橙	やや粗			
1720	“	4	?	II	H 10-9	45.7			?	“	“	外ヌス		

3) その他の土器 (1721~1734)

平安時代 (1721~1723)

1721・1722は甕である。1721は口縁部ヨコナデの後、体部は縱方向の浅いケズリを加えている。1722は口縁端部が直立する。ヨコナデである。1723は杯底部で糸切底である。

中世 (1724~1728)

いずれも珠州焼の破片である。甕の破片と考えられる。

近・現代 (1729~1734)

1729・1730は壺鉢である。1729は赤褐色、1730はアメ色で光沢をもつ。1731は器種不明で内面に白色釉が見られる。1732は碗で外面銅緑釉がかかる。1733は染付皿である。見込みに釉はぎが見られる。文様は渦巻文等である。

C 分 析

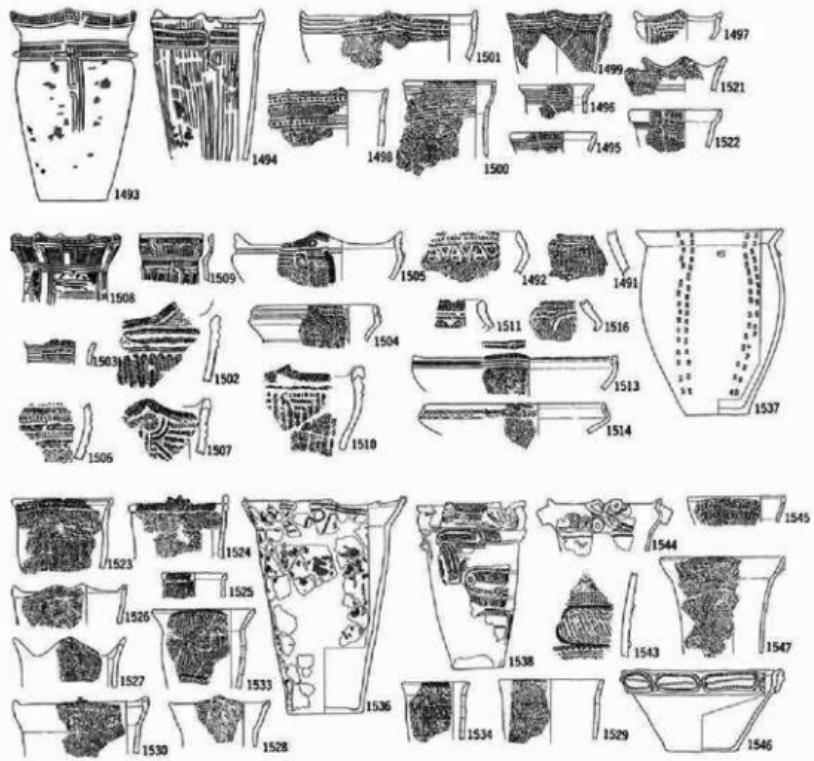
1) A 地区出土の土器について

Aトレンチ及びA地区出土の土器は、土石流と思われる層の中に包含されており、上流からの流れ込みと考えられるものである。爪形文を基調とする北陸系の土器を主体とし、これに中部高地系・関東系の土器が混入している。Aトレンチ (1474~1490) 及びA地区でマッピングで取り上げた遺物 (A地区No=1491~1548) については一括りが高いと判断されるが、二次堆積層中であるため同時期と判断するには到らない。しかし環状集落の地点とは土器の様相が全く異っているため、時期的には一線を画することができる。

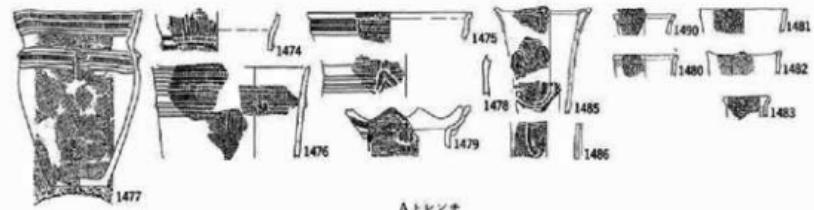
北陸系土器

当該期の土器編年については、石川・富山両県で多くの編年案が示されている。最近のものでは、真鶴遺跡の報告で集大成された感が強い。それによると、新保式は3期(加藤)、新崎式も3期(山田)にそれぞれ細分されている。新崎式の3期区分については、細分した著者も問題が残るとしているため、ここでは2期区分と考える。まず、山田氏は新保式と新崎式を区分するメルクマールとして次の点をあげている。

- ① 新保式に見られた木目状燃糸文・縦位羽状繩文・結節繩文が消失すること
- ② 4単位の主突起(入の字状)の口縁加飾
- ③ 蓮華状文の創設



A地区



Aトレンチ



第21図 A地区及びAトレンチ出土土器

次に新崎式を I・II式に細分するメルクマールとして蓮華文から幅せまの横位無文帯の上下縁に楔形刻目文を巡らす意匠が出現することをあげている。

以上の諸点をもって A トレンチ及び A 地区出土の土器を検討すると、まず新保式と呼ばれているものは、ほとんど存在せず、(A トレンチ出土の 1474 に新保式の様相が窺われる)すべて新崎式の範疇で捉えることができる。

しかし、北陸地方の新崎式とは、多くの違いを指摘することができる。

- ① 新崎式では消失するとされる木目状撚糸文・縦位羽状繩文が残存する。
- ② 口縁部に無文帯を残すものは少なく、繩文の施文されているものが多い。このことは県内全般に言えるが、北陸地方に近い上越方面では、吉川町長峰遺跡(関はか 1984)・上越市山屋敷遺跡(小島はか 1978)等で無文帯を残すものが比較的多く見られる。
- ③ 新崎 I・II式を区分するメルクマールとなる横位無文帯上下端に楔形刻目文を施す土器は当遺跡ではない。県内でも上越市山屋敷・吉川町長峰・三島町千石原遺跡(中村はか 1973)等に散見される程度である。

このような大きな違いがあることから北陸地方の分類基準を即新潟県にあてはめることは危険性がある。ここでは土器の特徴から前後 2 段階に分類し、前半・後半とする。

a 前半の土器

器形では A 及び B が主体を占める。口縁部文様では上端部に爪形文をもつものはほとんどなく、半隆起線文と爪形文が交互に施文され一周する。口縁部下半は繩文のみのものが多く(1477・1500)無文帯とする(1493)ものは少ない。頸部にも口縁部上端と同様に半隆起線文と爪形文とが交互に施文され一周する。そして口縁部には縦位文様がほとんど認められない。胴部文様帶も繩文のみのものが多く、頸部から垂下する半隆起線文程度である。口縁部に突起は見られず、波状口縁のものはほとんどない。前半期の土器は A 地区以外ではあまり認められない。繩文のみの土器では折り返し口縁の土器が認められ、木目状撚糸文も存在する。

b 後半の土器

器形では A 及び B の他に C の器形が認められるようになる。また大きな波状口縁も出現する。文様では、蓮華文・格子目文が新たに見られる。格子目文は、口縁部・胴部双方に認められる。蓮華文は、連鎖状竹管手法によるもので、三角形陰刻手法は認められない¹⁾。また、蓮華文には、縦長のものと短いものの 2 種類が存在する。口縁部に縦位の区画が認められるようになる。また、入組状の半隆起線文から渦巻文等が出現してくる。胴部文様帶では頸部から垂下する半隆起線文の条数が増加すると共に、格子目文を伴った B 字文等が認められる。

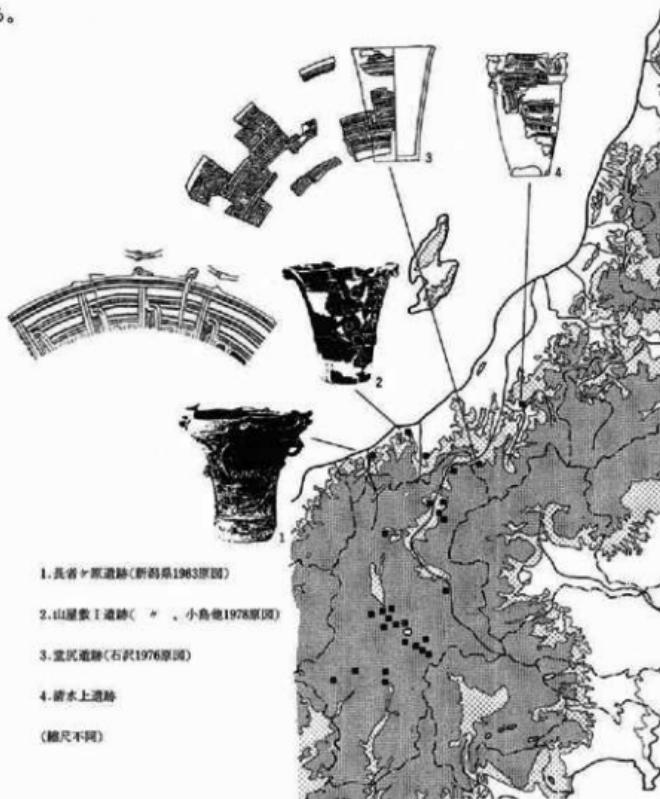
1) 蓮華文については、陰刻手法から竹管手法への変遷が一般的に認められている。寺崎(1988)氏によると北陸方面では連鎖状竹管手法が目立つ、県内では陰刻手法のものが目立つとされている。そして米山以西に連鎖状のものが多く、中・下越方面では、陰刻手法が多いとしている。

北陸分類では、およそ新崎I・IIに各々対応すると考えたい。

以上の北陸系在地土器の他に外来形の土器が認められる。

信州系土器

A地区においては、1538・1543・1544が出土している。最近、信州方面で注目されている斜行沈線文系（寺内1984・1986・1987）の土器と考えられる。梨久保遺跡の報告（寺内1986）においては、この土器を第I段階と第II段階とに分類している。第I段階は、落沢（勝坂I）式の中頃に並行する。区画文の多段化が進むが、区画内を沈線で充填する手法は口縁部に集中する傾向がある。また指頭圧痕が見られる。第II段階は落沢（勝坂I）式の新しい段階から新道（勝坂II）式の古い部分に併行する。区画文内及び器面全体に斜行沈線による充填手法が広がる。指頭圧痕文が欠落するという分類を行っている。この斜行沈線文土器はA地区以外でも数点認められる。



第22図 斜行沈線文系土器出土遺跡(寺内1988に加筆)

A地区においては1652~1654に見られるような指頭圧痕のものが見られるが、系統が異なると考えられ、他は全て横帯区画のものであり、分類による第II段階に比定できる。

県内における斜行沈線文系土器は信濃川流域の魚沼地方及び上越方面にその分布が認められる。上越市山屋敷遺跡(小島ほか1978)出土の土器は、斜行沈線文系の土器の第II段階(洛沢の新しい段階から新道の古い段階)にあたるものと考えられ、これに北陸系新崎II式が住居跡で出土している。また、津南町堂尻遺跡(石沢1976)においても住居跡から出土している。堂尻遺跡2号住居跡では、第II段階に相当する土器及び第I段階と考えられる土器(指頭圧痕)が出土している。この2号住居跡からは北陸系と考えられる爪形文をもった土器や蓮華文風のもの等が出土しており、伴出状況は山屋敷遺跡と一致している。このように見てくると当遺跡出土の斜行沈線文土器も新崎II式に伴うと考えられる。

なお、この斜行沈線文系の土器の系譜は明らかでないが、津南町上野遺跡(江坂1962)、新井市原通八ヶ塚遺跡(甘船ほか1982)等に口縁部に隆帯による区画を行ない、区画内に半載竹管文による連続斜行沈線を施したものがあり、これらが文様技法の祖形となり、これと信州方面に見られる横帯区画が影響して斜行沈線文土器が成立したのではないかと考えられる。

関東系の土器

1546・1547は胎土及び文様等から阿玉台式土器と考えられる。1546は浅鉢である。口縁部は隆帯による梢円区画で、それに沿って背竹管による連続刺突が巡っている。胎土等は、金雲母を多量に含み、明らかに区別されるべきものであるが、やはりこちらで作られた土器であろう。胎土についても阿玉台式土器を作る目的で選択したものである。区画内には波状の沈線が見られる等から西村氏の分類(西村1976)のI b式にあたるのではないかと考えられる。

A地区以外で阿玉台系と考えられるものに1366がある。深鉢で口縁部は高さがない。やはり梢円区画で、区画に沿って背竹管の押し引きが見られるのみである。頸部には浅い指押えが認められる。また胎土には雲母はほとんど含まれていない。古い様相を残しているものの、やはりI b式に比定できるのではないかと考えられる。

東北系の土器

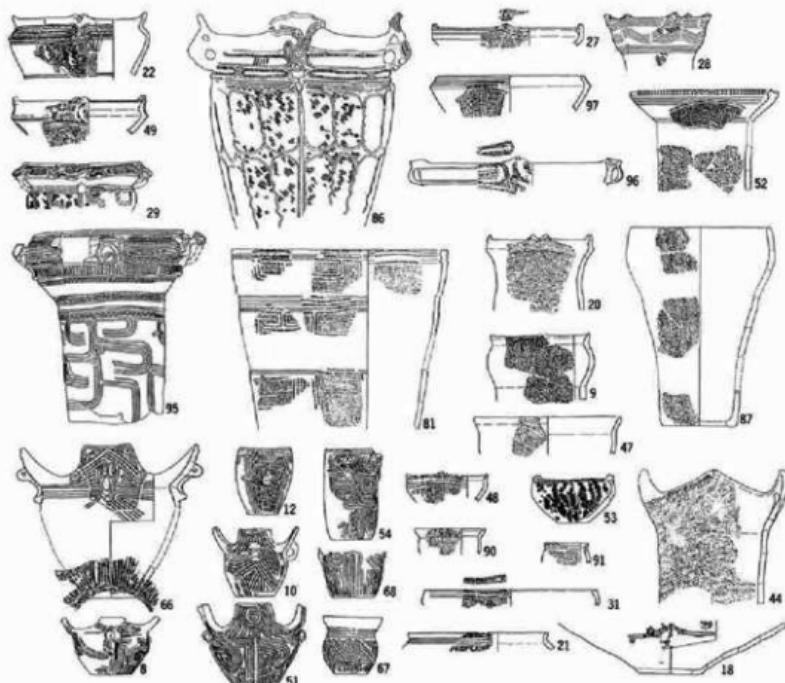
A地区において東北系と考えられる土器は1536の1点である。直線的に開く胴部が口縁部にきて「く」の字状に外反する。胴部の長い土器である。口縁部の縄文側面圧痕の文様構成は明確でない。大木7b式の古段階にあたると考えられる。

2) 各 遺 構 出 土 土 器 に つ い て

各遺構から出土している土器は、A地区及びAトレンチ出土の土器とは明らかな時期的違いを示している。ここでは、比較的よく遺物がまとめて出土している遺構について検討を加えたい。



1号住居跡



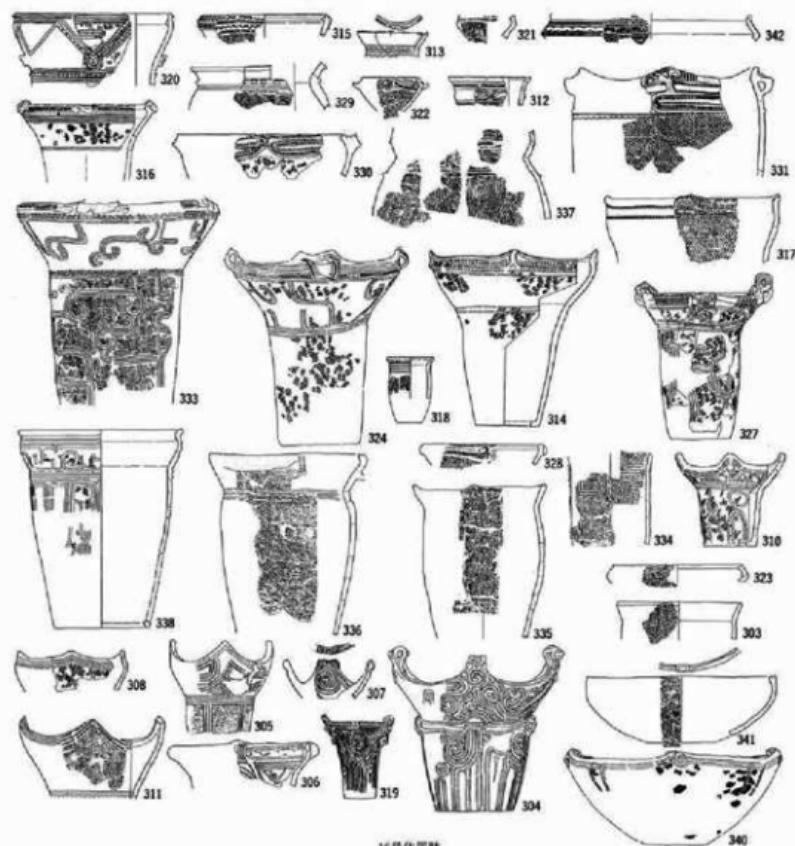
3号住居跡



13号住居跡

0 20 40cm

第23図 各造構出土土器 (1)



第24図 各遺構出土土器 (2)

1号住居跡

全て北陸系の新崎式（II式）で占められ、他地域の土器は認められない。

3号住居跡

まず焼土及びピット出土の土器8~62であるが、系統的には、北陸系の土器はほとんど認められない。そして最も特徴的なことは、越後系の波状タイプの小形鉢が3個体出土していることである（8・10・51）。いずれも波頂部が水平となる特徴を有している。10の文様は半截竹管（断面カマボコとはならず）文による半隆起線文で三角形又はY字状の文様を作っている。また三角部分には玉抱き三叉文が充填されている。頸部には橋状把手が付されたものと考えられる。この土器に対して51は、隆帶及び隆起線文で文様を描いており、文様には渦巻文が採用されている。また玉抱き三叉文は消失している。このように10とは明らかな違いを見い出すことができ、10の方が先行土器であることが窺える。

次に東北系の土器であるが、22・49・52等は、器形Fで当遺跡では特徴的な器形である。口縁上半の文様は梢円区画文であり、大木7b的な様相を残している。また52のように口縁上半の文様に連続の短沈線を巡らすものは、東北地方の大木8a式によく見られ、県内でも五泉市大蔵遺跡などはその好例である。29には、大木8a式に盛行するS字状の把手が見られ梢円区画内は背竹管による連続刺突である。95も29同様に頸部に無文帯を残している。頸部や胴部に巡る波状文は交互刺突によるもので、東北地方では大木7a~7b段階で多用される。また86は、県内ではその類例は認められないが、福島県小屋田遺跡¹⁾に同様の器形・文様構成をもったものがあり、やはり大木7b的な梢円区画文や断面三角形の隆帶がY字状に垂下している。このように、3号住居跡出土の土器は、22・49・86等の7b的要素も残していることから、大木8aの古段階を中心とした時期であると言える。

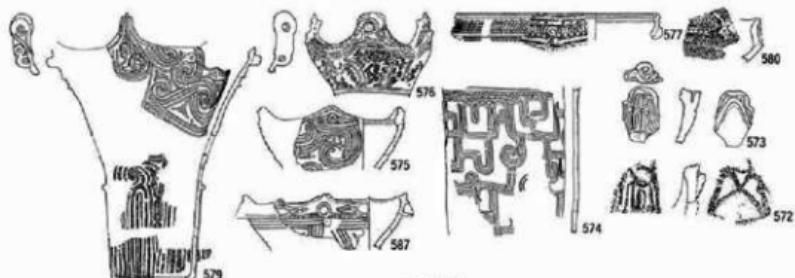
13号住居跡

当住居跡出土のものは、住居跡の埋甕（247）と覆土出土のものとは、時期的に異なり、覆土出土の土器（260・268）の方がより古相を示している。住居跡の年代と覆土出土土器の年代が逆転しているようであるが、覆土出土の土器は、1号住居跡とはほぼ同時期とすることができます。

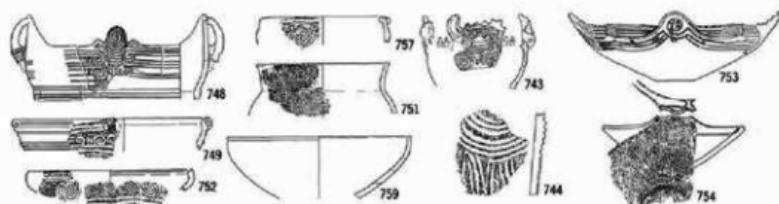
16号住居跡

当住居跡出土の土器は、そのほとんどが覆土の出土である。東北系のものでは器形はやはりFが目立って認められる（316・333・324・314）。3号住居跡出土のものに比べると、このFでは口縁上半部の文様が連続短沈線のものが多くなり、また梢円区画は接合部で突起状に変化し

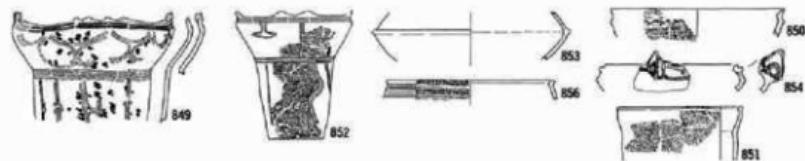
1) 小屋田遺跡出土のものは、小突起はあるものの、把手は付されていない。また頸部の区画内には連続の刺突は見られず沈線である。大木7b式とされており、当遺跡のものより先行する。



23号住居跡



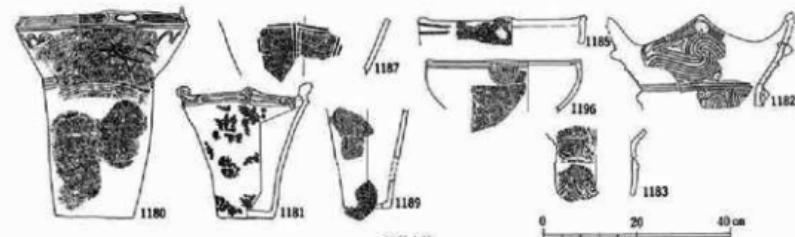
11号 フラスコ状土坑



26号 フラスコ状土坑



22号 フラスコ状土坑



第25図 各遺構出土土器 (3)

ている（314・324）。333ではクランク状の横帯区画の端部が渦巻を描くようになる。317は縄文の側面圧痕が見られ、古い手法と言える。北陸系のものは319のように上山田古式類似のものがあり、また爪形文使用のもの（320）もあるが末期のものである。

浅鉢では、340・341のように丸味をもつものが見られる。340のように4単位の簡単な渦巻のものは、五泉市大蔵遺跡にも認められる。

また、342のように爪形文・三角形陰刻のものは、新崎系統の手法であるが残存する。越後系では304～307のような、いわゆる王冠型の土器が出土している。304では、副部文様に無文部を残しているが、口縁部文様帶は渦巻文が複雑に入り組んでいる。3号住居跡のものに比べると明らかに新しい傾向を示すものである。同じ波状口縁のものでは、305・308・311がある。以上のように16号住居跡では、大木7b的色彩のものはほとんどなく、3号住居跡より後出の土器と考えられる。時期は大木8a式期である。

21号住居跡

当住居跡出土の土器は、小形品が多い。浅鉢では縄文の側面圧痕をもったものや、北陸系の爪形文をもったもの等が見られるが、およそ3号住居跡と同時期と考えてよいであろう。

23号住居跡

当住居跡では、北陸系のものは全く見られない。越後系では、王冠タイプ（572・573・575・579）が目立って多い。573のように抉りの見られる王冠も出現する。3・16・21号住居跡には見られなかったものである。また器形Fもここでは見られない。より後出のものと考えられる。

11号フ拉斯コ状土坑

深鉢の748・749・752等は、あまり類例がないが大木8a段階に入るものと思われる。浅鉢が多く3点の出土がある。753は側面圧痕を用いているが、貼り付け隆帯を用いているのは、新しい傾向で大木8a的である。754は内面隆帯による鶏頭冠に近いS字状文様が見られる。743の火焰型土器は、鶏頭冠が横長で、また口縁部文様も確立されてないものである。このことから、当土坑は、3号住居跡とはほぼ同時期のものと言える。

22号フ拉斯コ状土坑

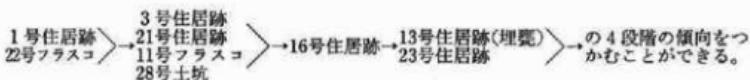
840は新崎系土器である。842・843は、側面圧痕をもつ土器で特に842は折り返し口縁をもっている。1号住居跡出土土器と同時期といえる。

28号土坑

1180は口縁部に梢円区画を残し、区画に沿って連続刺突がまわっている。口縁部下半では、半截竹管により逆連弧文が見られ、また副部は羽状縄文といった古い傾向が見られる。1185には側面圧痕があり、3号住居跡と同じ傾向にある。

以上、比較的まとまった資料の出土している遺構について検討したが、これを前後関係で並

べると



他の遺構出土の土器については、単独出土や破片のみのため全体が明確でないもの等が多いため、基準資料としては有効性にとぼしい。また、遺構間における土器の接合資料も多くあるが、遺構の埋没状況の違い（自然埋没による土器の流入、投げすて、整地等による埋戻し）があり、同時期と判断することもできず、編年を考える時積極的には採用できない。単独出土の土器については、完形及び完形に近い土器について、土器自体の文様・器形の特徴から、編年資料として採用を考えた。

3) 清水上遺跡における出土土器の編年について

以上前項で検討してきたことを踏え、清水上遺跡出土土器の編年を考えてみたい。

まず、大きく第Ⅰ段階と第Ⅱ段階とに区分し、第Ⅰ段階を2時期に、第Ⅱ段階を3時期に細分した。順を追って説明を加えたい。大きくは第Ⅰ段階は新崎式期・大木7b式期、第Ⅱ段階は大木8a式期である。羽黒編年（寺崎1982）の第3・4期が第Ⅰ段階に、第5期が第Ⅱ段階にそれぞれあたると考えられる。

第Ⅰ段階 第1期

A地区及びAトレンチ出土の土器がほとんどである。北陸系の土器が圧倒的多数を占める。いわゆる新崎式土器である。これに東北地方の大木7b式、関東地方の五領ヶ台II式、阿玉台Ia式が各々数点加わる。

a 北陸系土器

器形ではA・B・Cが認められ、口縁部文様帯の発達は少ない。口縁部上端及び頸部に半截竹管による半隆起線文・爪形文を繰り返している。北陸地方の土器では口縁最上端に爪形文が配されるのに対し、ここでは半隆起線文→爪形文というものが多い。これは越後の特徴である。これら文様帯に挟まれた口縁部下半は縄文が施文されるものが多く、無文となるもの（1493）は少ない。胴部はほとんどが縄文のみで、頸部から半隆起線文が垂下する程度である。1494は細い沈線束が垂下しており、五領ヶ台式との関連を窺うことができる。1491・1492等も当該期に入るものと考えられる。

b 東北系土器

1536のみである。器形はBで胴部が極端に長く、大形である。器形及び文様に立体的装飾が全くないことから大木7b古式と考えられる。浅鉢の1412も当該期の可能性がある。

c 関東系土器

阿玉台式¹⁾と五領ヶ台式の2型式が認められる。阿玉台式ではI.a式と考えられる668のみである。五領ヶ台式と考えられるものは、669・1117の浅鉢2点でいずれも特徴的なもので、関東地方では五領ヶ台II式段階に認められるものである。669は1号フラスコ状土坑で出土しているが、共伴しているものに668がある。この他に五領ヶ台式土器と考えられるものに1094がある。

以上の他、折り返し口縁をもった191・1523・1524等も当該期に入るのではないかと考えられる。

第I段階 第2期

第I同期様北陸系の土器は依然として多く認められるが、他に東北系・関東系もやや多くなり、これに中部高地系も認められるようになる。また越後系土器も出現してくる。造構出土では、1号住居跡・13号住居跡覆土・22号フラスコ状土坑出土の土器がある。

a 北陸系土器

Aトレンチ及びA地区以外でも散見される。第I期に比べると器形ではFが加わる。第I期では口縁上端部と頸部とに分れていた文様が幅広の口縁部文様帶として成立する。文様では蓮華文・格子目文・B字文が特徴的である。また胸部の文様も発達してくる。いわゆる新崎式の新しい段階である。浅鉢では算盤玉状の器形で爪形文を基本文様とし、交互陰刻による鋸歯状文・玉抱き三叉文等が見られる。

b 東北系土器

大木7b式土器でメルクマールとされるのは、縄文の側面圧痕である。当遺跡においてもかなり使用されている技法であるが、東北地方では大木8a段階までも確実に残るということである。深鉢では268・1102・1368・843・646等がある。268のように貼り付け隆苔の見られるものは新しい傾向を示していると考えられる。浅鉢では459・520・1294等の側面圧痕を付し、大きな突起を有するものが当該期のものと考えられる。これら側面圧痕を持ち大きな把手を付す浅鉢は県内でも散見される。長岡市山下遺跡では良好な土器が3個体出土している。他には柏崎市十三仏塚遺跡・安田町横峰遺跡等に見られる。東北では福島県方面にはほとんど見られず、秋田・山形県²⁾といった日本海側に比較的多く見られ、浅鉢に関しては福島県地方より秋田・山形方面の関連が強い。

この他に当該期に入れるべきか、次の第II段階第1期（大木8a期）に入れるべきか定まらない土器群がある。3号住居跡のピットから出土している22・49をはじめ、291・1225・783で

1) 県内における阿玉台式土器は、魚沼・十日町方面を中心にその分布が知られ、北は北蒲原郡佐神村杉野遺跡にI.b式期の土器がある。

2) 秋田県では大塙台遺跡（小玉ほか1979）、本道端遺跡（田村ほか1986）、山形県では水木田遺跡（阿部ほか1983）などがある。

ある。これらはいずれも器形Fで、口縁部に小突起を有し、口縁部文様帶は梢円区画となるものである。22は梢円区画に沿って有節沈線及び波状文が見られる。口縁部下半は羽状織文で蕨手状の文様が見られる。また783等も同様の文様を持っている。849は器形Cであるが、口縁部X字状の沈線である。86は会津方面にも見られる東北地方の器形である。口縁部にY字状の把手をもっている。また梢円区画、Y字状の隆帶等いずれも大木7b式に見られる文様をもつものである。これらの一群は、県内での大木7b式の実態が明確でないため、どちらとも言い難い土器である。

c 越後系土器

この頃から北陸系の土器から独立して、越後系土器の萌芽が見られる。器形では大形の波状口縁の出現があげられる。1322ではすでに渦巻文が見られ、次期に多用される渦巻文・S字文の祖形となっている。他遺跡では三島町千石原遺跡(中村ほか1973)、見附市羽黒遺跡(寺崎ほか1982)等に良好な資料がある。上面が水平となるものは、器形的には東北地方の大木7a~7b式期の深鉢口縁部に多く見うけられ、これら一群の土器の成立に際して無関係でなかったと考えられる。361のように裏側に半截竹管による短沈線が走るものは、大木7a~7b式期に見られる叉状の口縁と共通するものである。このように頂部が水平となるものは、千石原遺跡をはじめ、吉野屋遺跡(中島1974)、新発田市石田遺跡等の中越~下越地方に比較的多く認められるが上越方面の吉川町長峰遺跡でも出土している。

d 関東系土器

阿玉台系の1366・1546・1547が認められる。文様等から阿玉台Ib式にあたるのではないかと考えられる。

e 中部高地系土器

いわゆる斜行沈線文系の土器である。1351・1538・1543・1544等がある。1538・1544は口縁部にやや大きめの突起があり、北信方面とはやや違いが認められる。また、987等の有孔鈎付土器も当該期に入ると考えられる。

f 判別不能の土器

各地域の要素の入った土器で、どちらとも判別のつかないもので、1093・1362・1357・1537・1485等がある。1093は北陸色が強く、無文帶部の両端にはキザミが見られ、新崎II式との関連を窺わせる。1362の口縁部に付されるY字状の隆帶は大木7b式期によく付されるものであり、清水上遺跡でも1290・1081・86等に見られる。また頸部の梢円区画や交互刺突は関東的であり、胴部は北陸系に近いといった複雑な土器である。1357は全く系統をつかめないものであるが、おそらく当該期にあたるものと考えられる。

第1段階 第1~2期

縄文のみのものでA地区出土のものの多くは、当該期に入るものと考えられる。一般的には

折り返し口縁をもつものが古手とされているが、明確さを欠く。1523のように木目状撲糸文をもつものは確實に古いと言える。

第II段階 第1期

北陸系の土器はほとんど姿を消し、越後系土器が確立する。いわゆる火焔型土器等の出現もこの段階と考えられる。また東北系の土器がよりいっそう浸透してくる。遺構では3号住居跡・21号住居跡・11号フラスコ状土坑出土土器がある。

a 北陸系土器

第II段階に入ると、北陸系土器は、ほとんど見られなくなるが、浅鉢のみが停滯して残存している。器形・文様共に前段階のものとほとんど変化はない。

b 東北系土器

この段階から東北系土器が多く見られるようになる。3号住居跡床及びピット出土の土器を中心とした一群である。前にもふたように大木7bの要素を持つ22・49の他52のように口縁上端に連続の短沈線をもつものも出現する。またS字の把手の付されるもの(29・1467)も出現する。この29では有筋沈線が見られる。その他大形深鉢の1272等も古い要素をもっている。1272は横帯区画で三角形陰刻等が見られる。また44等の波状口縁の縄文のみのものが見られることから918・1260等もこの時期に入るのではないかと考えられる。また9・20等も3号住居跡で出土している。3号住居跡覆土で出土している大形深鉢の81はクランク状の文様モチーフで区画内に小波状文が充填され口縁部内面には断面三角形の隆帯が走り、やはり古い様相である。また16号住居跡覆土出土の333では文様モチーフは前段階の蕨手文の変化したもので渦巻文になりきっていないものが用いられている。このように当期の深鉢ではS字状把手の出現、梢円区画文→クランク文等を特徴としてあげることができる。浅鉢では共伴関係から側面圧痕の土器が前段階から依然として残存したものと考えられる。

c 越後系土器

前段階から発展して、よりいっそう越後の地域性を強めている。まず前段階に用いられた爪形文手法はほとんど姿を消す。波状口縁で口縁端部の水平となる鉢は10のように半隆起線で描かれるようになり、次に8・51のように基隆帯を用いる土器に変化していったと考えられる。また大波状で端の尖る深鉢でも、基隆帯を用いる手法に替り、渦巻文が主流となってくる。いわゆる火焔型土器もこの段階にその萌芽を見い出すことができる。11号フラスコ状土坑では大木系の浅鉢に火焔型土器(743)が併せて出土している。鷦頭冠は小さい。口縁部文様帶は明確でないが、渦巻文が用いられている。また同じく出土している浅鉢内面には鷦頭冠類似の文様が付されており、同時性を物語っている。この他に1198にも鷦頭冠状の突起が付されている。次に平口縁又は突起の付される器形Fの一群がある(943・946・306・1337・1671)。基隆帯による渦巻文や三叉文等を主要モチーフとしているが、隆帯は密でなく無文部を残している。また、

口縁部は上半部と下半部とに文様帯が二分されることが特徴である。このような文様構成は、東北系のF器形の土器に共通している。このタイプについては、完形品及び共伴関係を捉えられたものが多く、どの時期と限定できないが、第II段階1期又は2期に納まるものと考えられる。また、北関東との関連も考慮する必要があろう。

d その他

関東系か中部高地系か明確でないので、その他として一括する。1291・1358は三角形区画の土器で、中に三叉文等が充填され関東地方との関連が窺われる土器である。

第II段階 第2期

この段階に入ると東北系と越後系がほとんどで、北陸系・信州系・関東系は見られなくなる。遺構では16号住居跡・21号住居跡出土土器がある。

a 北陸系土器（第26図）

319が16号住居跡覆土で出土している。上山田式系の土器であろう。

b 東北系土器（第27図）

16号住居跡覆土出土土器を中心とした土器群である。器形Fはこの段階でも主流を占める。第I段階と同様、口縁部文様帯は二分される（314・316・324）。口縁上半の文様は短沈線の連続で椭円区画は見られなくなる。口縁下半部には文様はあまり付されない。また胴部も同様である。324ではクランク様の文様が見られる。また器形Cが安定した形で見られる（330・327）。327は胸部にやや膨らみをもち、より東北らしい器形のもので、口縁上半には有節沈線が見られる。有節沈線の使用は当遺跡では少ない。器形C又はDで大波状となるもの（305・310・311・308）も安定してみられる。

大形の深鉢では331・784といったものが当該期に入るものと思われる。次に浅鉢であるが、340・341といった大形で胸部にやや膨らみのある器形が出現する。

c 越後系土器（第26・27図）

この段階に入ると越後系土器はいっそう明確さを増していく。まず大きな波状口縁をもつもので、D器形のものでは516・637・304といった頂部に動物意匠の突起をもつものが特徴的である。また頂部が水平となるものでも307・66など動物意匠をもったものが見られる。304等は胴部にもやや膨らみをもつものであるが、無文帯を残しており波状部もあまり大きくない。これら動物意匠をもつタイプとそうでない575・1711・1182といったタイプの前後関係は明確でないが、第I段階 第2期からの発展を考えると、動物意匠をもたないタイプがより先行的であると言える。その他では、器形Cの深鉢で448・1151・1344といった隆起線と有節沈線の組合せのものがある。器形Fの文様構成に共通するが、完形品がなく明確に時期限定はできず、今後の課題として残したい。また台付鉢の1720・1222・433等にも同様のことが言える。火焰型土器は明確でないが、304と同様の器形をもつ247等がくるものと考えられる。鶴頭冠は、前段

階とそう変化のない漬れた感じのものであったと考えられる。

第II段階 第3期

当遺跡の最終段階である。越後系土器では、火焔型土器・王冠型土器・台付鉢共に安定した存在となる。また東北系土器の変化はあまり認められない。遺構では23号・9号・20号住居跡等がある。その他北陸系・関東系は全く姿を消してしまう。

- a 北陸系土器 全くなし
- b 東北系土器 變化はあまり認められない。
- c 越後系土器

王冠型土器では、波頂部左側に抉りのあるものが出現し、波状部も縦に長くなる火焔型土器も脣部にややしまりが認められるようになるが、口縁部に付される鶴頭冠は依然として横長で小さい。他では、C器形の1670・429等がある。

台付鉢では前段階で、有節沈線のものが主流であったのに対し、隆帶・隆起線文のみとなる。浅鉢では1257を典型とする。羽黒遺跡・大蔵遺跡等に類例を求めることができる。

この第3期以降1~2期において大木8b式段階となると思われる。

以上のように、清水上遺跡出土の土器を遺構出土土器中心に2段階5時期に細分したが、各時期により土器の系統的な在り方が異なっている。第I段階では北陸系の土器が主体を占めるとしたが、石川・富山県方面との違いはいくつか指摘される。上越方面を除けば今後、北陸方面との違いにより越後の地域性を引き出せるものと考える。またこの段階に関東・中部高地系の土器が客体として存在する。関東系土器の流入ルートは、当遺跡より上流の塩沢・湯沢方面の土器に¹⁾関東・中部高地的なものが多いことから考えて、上野より三国越えで流入したと考えられる。また中部高地系の斜行沈線文土器は分布から考えて、信濃川ルートで入ってきたものと思われる。このように第I段階では、西からの動きが主流を占めていたのに対し、次の第II段階では、北、東からの流れに一変し、東北地方色が強くなる。一大画期と言える。このことはすでに指摘されているとおりである。第II段階は、第I段階でその萌芽の見られた越後独自の土器が確立、発展した時期である。越後系土器の発展過程を考慮し、第II段階を3時期に細分したが、II-1・2期で区分の明確でないもの、II-2・3期で区分の明確でないものがそれぞれ存在する。特に2・3期については明確さを欠く。東北系土器の流入ルートは只見川ルートが考えられる。そして只見川ルートを入ってきた東北系土器は、清水上から魚野川上流部にはあまり進出せず、むしろ平野部の長岡周辺により強い影響を及ぼしていったと考えられる。

1) 桜沢町五丁歩遺跡、湯沢町川久保遺跡(佐藤1986)などが好例である。特に川久保遺跡では、大木7b~8a式期の土器が出土しており、佐藤雅一氏による詳細な文様系統の論考があり注目される。

4) 越後系土器について(第29図)

清水上遺跡ではI-2期において越後系土器の発生を見るにしたが、その成立について、波状口縁の土器及びいわゆる火焰土器に限定して検討してみたい。

波状口縁の土器

I-2期は大木7b式期にあたり、県内では各系統の土器の出土が知られる。関東では阿玉台式・勝坂式、中部高地では、猪沢・新道式土器等が成立する時期であり、各地で複雑な様相を呈している。東北地方に目を向けると最近各地で大木7a~7b式期の資料の増加が目立っている。それらの深鉢について見ると、端部が水平で波状口縁の土器が多いことに気づく。山形県水木田遺跡・福島県小梁川遺跡等などが好例である。また関東地方の五領ヶ台II式の中にも類似のものが見られる。一方北陸地方では、新崎式のII段階では、波状口縁の土器はほとんど認められない。しかし、県内を見るとこの時期、波状口縁の土器を多く認めることができる。清水上遺跡においても、端部が尖るものと、水平になるものとの2種が認められる。この2種は、千石原・長峰・吉野屋・羽黒・長者ヶ平各遺跡でも認められる。このように北陸色の強い文様技法を用いている中で、器形は北陸地方ではなく、東北・関東地方に近いものがあらわれる所で越後系土器の成立を窺うことができる。

a 波頂部が尖るもの

波頂部の尖るものでは、I-2期で千石原遺跡、吉野屋遺跡に良好なものがある。波状口縁に沿って半隆起線文と爪形文とが交互に施文され、三角部分は無文又は玉抱き三叉文となる。調部は繩文・半隆起線文である。吉野屋遺跡のものは爪形文と言うよりむしろキザミに近い。次に来るのは、当遺跡出土の1322・1507といったもので、渦巻状の文様の発生が見られる。1322では、前段階の三角形状無文部分に、また1507では爪形文の端部が渦巻となっている。前段階では見られなかった文様である。つぎのII-1期になると、半截竹管文による半隆起線文や爪形文は姿を消す。基隆帯・隆起線による渦巻文やS字文が主流を占める。そして、しだいに渦巻は端部を強く巻くようになり、トンボ状突起などが付される(516・637・304)。いずれも胴部にしまりは見られない。また、この段階のころからいわゆる王冠型土器に見られる決りのある把手(573)等が付されるようになり、II-3期で205のような完成された王冠型土器となる。このような変遷は、清水上遺跡を中心としてその過程を追ったものであり、他地域には別タイプのものも存在している。

b 波頂部が水平となるもの

I-2期では、654・1433・1656・1710といったものが見られるが、波頂部が尖るものと文様構成にあまり変化はない。この水平となるものでは口縁部文様帶が狭く、ほとんど波状部のみで占められていることや、胴部にしまりがなくやや丸味をもち、短いことが特徴で、波頂部の尖るものと大きな違いを指摘することができる。654では、端部に円孔が認められるが、佐渡・長

清水上遺跡における土器編年試案 (1)					北 陸 系									
		水	北陸	関東部										
		水	北陸	関東部										
I	A	羽黒3期	朝 岐 I	五箇ヶ台白IIa	大木		1476	1494	1477	1493	1474	1491	1500	1492
I	A	羽黒4期	新 築 II	河 玉 新道b	7b		1595	1582	1502	1508	1505	1593	1504	1211
II	3号羽 11号ラ スル	羽 黒 5	上 山	大 木			265		167	1323	1249	1289	840	260
II	30号田	期 田	8a								319			
II	33号田													
II	29号田													

第26図 清水上遺跡における土器編年試案 (1)

		越後系
856		
1513 1514	1636 1215 945	1322
1416 1285		
1534 537 342 1458 21 738	419 754	1198 743 474 516 637 1711 1182
1693 1415 213	341	247 304 575
1257		430 205 573 579

第二主遺物編年						越後系		
第	土器	年	北陸	中部	東北			
I	A 地区	羽黑3期	新崎I	五箇ヶ台I 河玉台I	大木			
①								
I	A 地区	羽黑4期	新崎II	(阿 波・五 箇ヶ台) IIb	7b			
②								
II	日引 ラスコ	明上	大木					
I		日引 ラスコ	黒山					
①								
II	36号Ⅱ	期田	8a					
I	36号Ⅲ							
②								
II	39号Ⅱ							
I	39号Ⅲ							
③								

第27図 清水上遺跡における土器編年試案 (2)

東 北 系



1536



268



849



1290



783



1685

1683



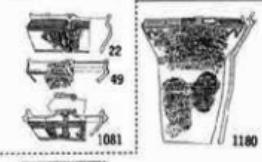
1272



680



95



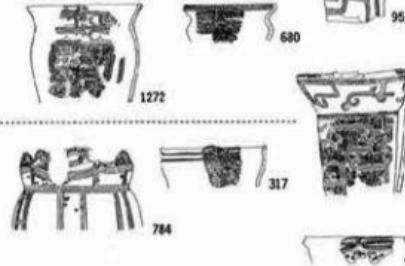
52



1467



29



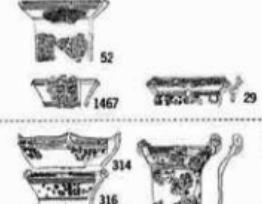
784



317



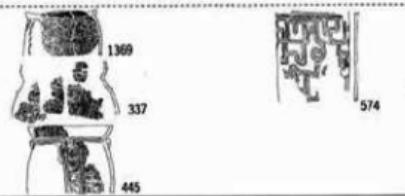
333



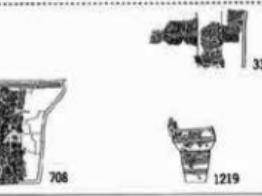
324



305



445

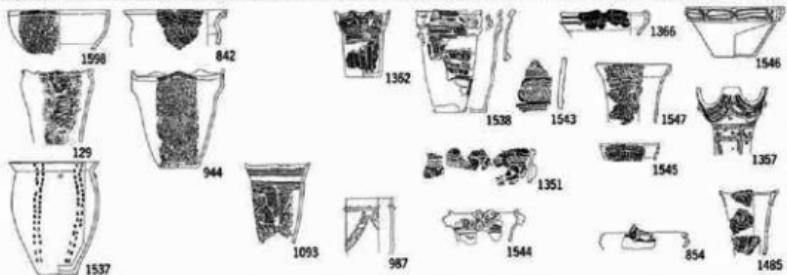


709

								東 北 系			
海上生遺物年 代別出年		羽林 北陸		國中 東北		支北					
I	A	羽黑3期	新崎	五箇 大				1412		1523	1524
I	地区層		I	五箇 大					191	1526	
①									1525	1490	1622
								520		1530	1533
I	A	羽黑4期	新崎II	新 五 台					459	1053	1684
I	地区層 1号層							1224		1625	1626
②								645			
								1294			
II	3号層 11号 ラス	羽黑上		大				44	20	18	53
II	3号層 11号 ラス	羽黑山		本				1260	9	27	
①										753	
								918		1196	
II	3号層 30号層	湖田		8a					340		998
II	3号層 30号層							311			
②								308			
II	3号層 23号層							576		1036	431
II	3号層 23号層									601	223
③											

第28図 清水上遺跡における土器編年試案 (3)

関 東 中 部 高 地 系 · そ の 他



I	直筒口縁 頭部尖るもの	直筒水平 直筒口縁	火鉢型土器	その他
	1507	1392	1281	1934年(中村ほか)
II	1397 1771 575	1186 10 6 5 207 743 247 66 204 59 209	1186 10 6 5 207 743 247 66 204 59 209	① ② ③ ④ 十石原遺跡(中村ほか) 1934年(中村ほか) 吉野川遺跡(中村) 1974年(中村) 山下遺跡(小林) 1968年(中村) 小千谷市(金子) 1968年(中村) 石狩遺跡(〃〃〃) 吉野川遺跡(小林) 1968年(中村) 木本田遺跡(河原) 1963年(中村) 小栗川遺跡(相原) 1964年(中村) その他 深水土器群 (縮尺不明)

第29図 越後糸上器の展開

者ヶ平遺跡にも同様のものがある。II-1期になると器形が明確化するが、いずれも小形である。爪形文・半隆起線文は姿を消すが、10などは基隆帶を用いているもの他は半隆起線文である。文様ではY字状のモチーフが残っている。また新たに環状把手が付される。8・51などがこの段階を特徴付けている。渦巻文・半隆起線文の採用は、波状部の尖るものと同形である。次のII-2期では大形のもの(66)も見られるが、307といった小形のものも存在する。このタイプ自体は、数が少なく短時期にしか存在しない。

火焰型土器

当遺跡で出土している火焰型土器は、数個体にすぎない。火焰型土器の位置付けについては大木8a式から8b式段階にあることは多くの意見の一一致するところである。火焰型土器を特徴付けるのは何といつても鶏頭冠である。これについても東北大木系土器のS字状の把手との関連を指摘する意見が多く、共通的見解をもっている。またS字状モチーフの鶏頭冠をもつ火焰型土器はすでに完成された火焰型土器である(金子1981)というのも指摘のとおりである。

なお、最近の火焰型土器の文献については、(金子1977・1981・1986)、(小林1977・1981・1988)等がある。

鶏頭冠については、横長から縱長への変化が捉えられているが、横長と言ってもすでに横S字のモチーフをもつものは必ず口縁部が鋸歯状口縁となっている。当遺跡の1198の土器は、鋸歯状の突起をもちながらも、口縁部が鋸歯状となっていないものである。この土器は、口縁部文様帶と胴部文様帶との区別がなく、やや特殊である。把手はS字状となっておらず、環状でY字状のモチーフをもっている。同様にS字状の把手をもたず、火焰型土器とされるものに山下遺跡出土のものがある。これも同じくY字状のモチーフを用いている。小形で口縁部文様帶が未発達である。Y字状の把手については、II-1期の86・1081・1290等に付されている。これらは、貼り付け隆帯による鋸歯状のモチーフによっており、1081などはS字に移行する一步手前といった感じである。また同様のモチーフが大木7b段階にあることはすでに指摘したところである。従って、このような把手の付される1198等は、古い文様モチーフを残していると言え、このことが火焰土器の発生に大きく関わっていたと思われる。つまり発生段階の火焰型土器では、

①把手は鋸歯状のフリルの付くもので横S字文になっていない。またY字状のモチーフが用いられる。

②小形の土器が多く、口縁部文様帶が未発達である。

そして次の段階でS字状のモチーフによる鶏頭冠が確立するが依然として土器は小形である。また口縁部文様帶が明確となる。鶏頭冠は、横長に水平に近いものが多く、S字の端部(尻部)は少し跳上がった程度である。この段階の土器には当遺跡の743の他、山下遺跡、小千谷市出土例、柄尾市石倉遺跡出土例がある。そして次の段階(II-3)では鶏頭冠は斜め上向き

となり、尻部も長くなりしだいに横長から縦長へと変化している。このように把手を中心として発生段階の火焔型土器の変遷を追ってみたが、古手のものはやはり中越地方に求められそうである。王冠型土器、火焔型土器の変遷については、各地域により違いが認められるが、把手については大木系土器の7b～8a式の段階の把手の変遷に呼応するように変化を認めることができる。

5) 東北系浅鉢の系譜について(第30図)

東北系の浅鉢は当遺跡においては数が少なく、北陸系のものが主体を占めている。後半には、東北系の土器が多くなるにもかかわらず、浅鉢の数はそう多くはない。東北系土器について見ると深鉢については福島県会津地方に系統を求めることができるが、浅鉢についてはどうであろうか。

側面圧痕を主とする大木7b式土器の浅鉢について検討を加える。清水上遺跡で側面圧痕を有する土器については3タイプが存在する。

A：口縁が内傾ぎみに立ち上り、4個の肥厚する把手が付され、そこに渦巻状の側面圧痕の見られるもの(459)。

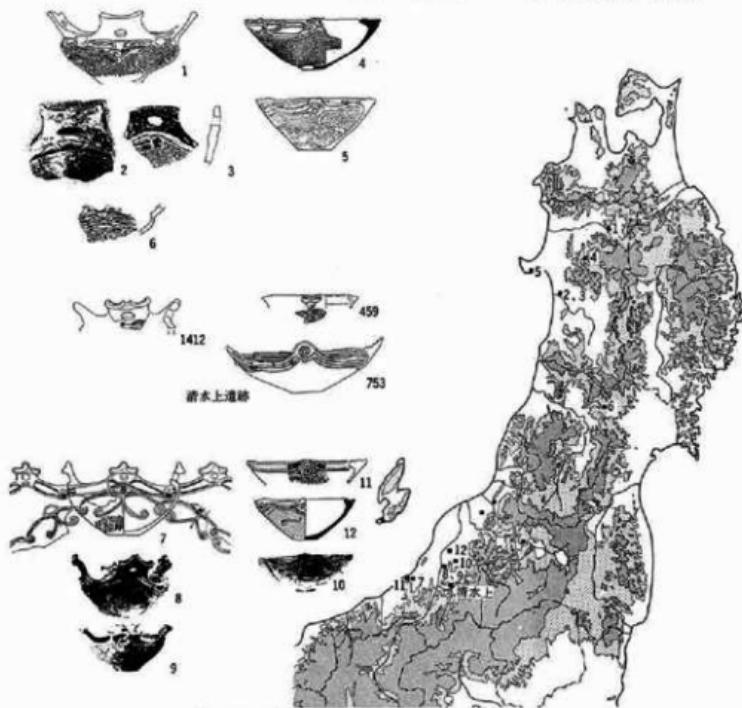
B：同じく口縁は内傾ぎみに立ち上り、丸い偏平な把手が付され、そこにやはり側面圧痕の渦巻の見られるもの(753)。

C：円孔のある四角の大きな把手の付される土器(1412)。

さて、この3つのタイプについて県内で類例を求めるに、まずAタイプは、柏崎市川内・楊尾市柄倉・栄町吉野屋・長岡市岩野原・笹神村杉村・新発田市石田・小木町長者ヶ平の各遺跡で出土している。いずれも類似の文様構成をもっている。このAタイプは、福島県内においては今のところ認められておらず、秋田県方面にむしろ類例を求めることができる。秋田県では大烟台遺跡・不動羅遺跡に類例が認められる。次にBタイプのような扇状となる把手は類例が少なく、吉野屋遺跡・柄倉遺跡等に認められるのみである。しかし柄状の把手が付くかどうかは不明である。県外でこのタイプは認められない。

次にCタイプであるが、このタイプは、柏崎市十三仏塚遺跡・長岡市山下遺跡に類例がある。特に山下遺跡では3個体の完形品が出土している。県外では会津方面でも認められるが秋田・山形方面に濃密に分布している。秋田県のものは台形状のものに円孔のみのものであるが、県内出土のものはより装飾性に富んでいる。東北地方において、このような台形様の把手は、深鉢にも認めることができる。また山下遺跡出土のもののように二股に分かれるような把手も大木7a～7b式の深鉢に認めることができる。従ってこれらと関係が強いのではないかと考えられる。A・B・C 3タイプの前後関係であるが、Aの発展形態としてBを捉えることができる。突起の発達や貼り付け隆帯による環状の把手等は、むしろ大木8a的である。次にCタイ

- 1 本道塙遺跡(田村 1986原図)
 2、3 下総A遺跡(西谷 1988原図)
 4 不動薬遺跡(上小河仁村教委 1971原図) 10 吉野薬遺跡(〃 " ")
 5 大槻台遺跡(小玉 1979原図) 11 川内遺跡(金子 1982原図)
 6 水木田遺跡(阿部 1983原図) 12 桥倉遺跡(寺村 1961原図)



第30図 東北系浅鉢出土遺跡分布図(縮尺不同)

ブであるが把手については、円筒上層式・大木7a～7b式に共通的に認めることができる。文様については、側面压痕を用いるものと、そうでないものとが認められる。山下遺跡出土の9(第30図)ではC字状の爪形燃糸压痕文が連続しており、円筒土器との関連を窺うことができる。この文様は、円筒上層b式に特徴的に認められるものである。このようにCタイプは、日本海側を中心として分布していることが知られ、会津方面出土のCタイプの浅鉢も越後経由でもたらされた可能性もある。

以上、3タイプについて概観したが、Bタイプを除いてはいずれも日本海側の秋田・山形方面に共通性を見い出すことができ、同時期（大木7b期）に新崎系の土器が、日本海側を秋田方面にまで及び、また会津地方にも認められるという相互間の交流を見い出すことができる。

北陸系の土器のうち東北地方で出土しているものは、そのほとんどが深鉢である。しかるに東北地方から入ってくるものは浅鉢という対称は何を表わしているのであろうか。

6) ま と め

土器については、編年を中心にまとめてみた。土器編年にあたっては、明確な考え方（型式論・様式論・地域性）を示したうえで行うべきであったが、これも力不足のため使用を避けた。新潟の編年については、関東・北陸・東北各地域の型式名を用いて行っている場合が多く、独自性に欠けている。このことも越後の土器の在り方をよく示していると言える。

遺構出土土器として捉えられた土器は多くにわたったが、確実に切り合い関係で捉えられたものはあまり多くない。遺構について切り合いが明確であっても、良好な土器資料を得られない場合がむしろ多かったと言える。遺構が多いにもかかわらず、土器資料では大きく段階を捉えたにすぎず、短期間であったことがわかる。第Ⅰ段階・第Ⅱ段階の区別は、かなり明確と考えられるが、その中の細分は多分に流動的であり、どこの範囲、地域で通用するかは明確でない。またそのことを地域を広げて検討すべきであったが、力不足でそこまでは及んでいない。土器は各器種により、その使われ方、使用程度が異なっていたと考えられ、また各々の器種により、その変遷はまちまちで、各時期にいざれの土器も同様に変化していったとも限らない。これだけ多量の土器が出土しているにもかかわらず、共通的な器形をもっていないこと、また文様の細部では共通性が認められても全体では異なった土器となっているもの等、当該期の土器編年の難しさがここにある。特に器形分類については、深鉢について一応の目安で行ったがうまくあてはまらないものの方が多く、器形により明確な使い分けが行われていたかどうか疑問である。深鉢については、そのほとんどに炭化物・ススの付着が認められ、そのことも観察項目としてとりあげたが分析するまでには致らず、有無を提示する程度となってしまった。今後の検討事項としておきたい。

(1989. 1. 20)

引用・参考文献 土器

- あ 相原淳一ほか 1986 「小堀川遺跡遺物包含層土器編」 宮城県教育委員会
- 阿部明彦ほか 1983 「水木田遺跡」 山形県教育委員会
- 甘粕 錦・小野 昭・古川知明ほか 1982 「原通八ヶ塚」 新潟県新井市教育委員会
- い 石沢寅二 1976 「堂尻遺跡」「苗場山麓地域国宮総合農地開発事業区域内遺跡調査報告書」 新潟県津南町教育委員会
- う 上原甲子郎ほか 1964 「大蔵遺跡」 新潟県五泉市教育委員会
- え 江坂輝弥ほか 1962 「上野遺跡」 新潟県津南町教育委員会

- 江坂輝亦 1977 「沖ノ原遺跡」 新潟県津南町文化財調査報告書 №12 新潟県中魚沼郡津南町教育委員会
- 海老沢 稔 1984 「茨城県内における縄文中期前半の土器群相(2)『婆良絞考古』第6号 婆良絞考古同人会
- お 小野 昭・前山清明ほか 1988 「巻町豈原遺跡の調査」『巻町史研究IV』 新潟県巻町
- か 加藤三千雄 1986 「第6章縄文時代の遺物、第一節土器、第8群土器」『真鍋遺跡』 石川県能登町教育委員会
- 金子拓男ほか 1974 「森上遺跡調査報告」 新潟県中魚沼郡中里村教育委員会
- 金子拓男 1977 「火焔型土器考」『にいがた5号』 県立新潟図書館
- 金子拓男 1981 「火焔土器」『縄文文化の研究4』 雄山閣
- 金子拓男ほか 1982 「柏崎市史資料集・考古篇2」 柏崎市史編さん室
- 金子拓男・寺崎裕助ほか 1982 「羽黒遺跡」 新潟県見附市教育委員会
- 金子拓男 1986 「第2章第5節中期の文化」『新潟県史通史編1原始・古代』 新潟県
- 上小阿仁村教育委員会 1971 「不動置遺跡報告」 秋田県上小阿仁村教育委員会
- こ 小出義治・寺村光晴・寺田兼方 1961 「絕括」「傍倉」 新潟県柳尾市教育委員会
- 小糸一夫・小島正裕・丹野雅人 1987 「馬高系土器群の系譜 一土器型式の伝播と情報の流れー」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』V 東京都埋蔵文化財センター
- 小島幸雄ほか 1978 「山星Ⅰ遺跡」『岩木地区遺跡群発掘調査報告 昭和52年度』 新潟県上越市教育委員会
- 児玉 勝ほか 1979 「大畠台遺跡発掘調査報告書」 日本鉛業株式会社船川製油所
- 児玉 勝 1985 「黒倉B遺跡」—第一次発掘調査報告— 秋田県田沢湖町教育委員会
- 小林達雄 1977 「縄文土器」『日本原始美術大系1』 講談社
- 小林達雄 1981 「越後新潟火炎土器のタ」『月刊文化財』8月号
- 小林達雄・青木 豊 1983 「長者・平」 新潟県佐渡郡小木町教育委員会
- 小林達雄編著 1988 「縄文土器大観」3 中期II 小学館
- 小山正忠・竹原秀雄 1976 「新版 標準土色帖」 日本色研事業株式会社
- さ 佐藤雅一 1986 「川久保遺跡」 新潟県添沢町教育委員会
- 佐藤光義・長尾 修 1985 「上小島A遺跡調査概要」 福島県西会津町教育委員会
- し 岩田高志 1987 「十三古塚遺跡」『柏崎市史資料集 考古篇1』 新潟県柏崎市史編さん委員会
- 神保孝造 1977 「縄文時代の土器」『蔚波市嚴照寺遺跡緊急発掘調査概要』 富山県教育委員会
- す 菅原俊行ほか 1976 「小河地下遺跡」 秋田市教育委員会
- せ 関 雅之ほか 1984 「長峰遺跡II」 新潟県吉川町教育委員会
- た 田沢湖町教育委員会 1986 「黒倉B遺跡」—第2次発掘調査報告— 秋田県田沢湖町教育委員会
- 田中耕作 1980 「石田遺跡発掘調査報告」 新潟県新潟市教育委員会
- 田村 栄ほか 1986 「本道端遺跡」 秋田県北内町教育委員会
- て 寺内隆夫 1984 「角押文を多用する土器群について」『下総考古学』7
- 寺内隆夫 1986 「V章 1節土器4中期中葉土器の分類と検討」『奈良久保遺跡』 長野県岡谷市教育委員会
- 寺内隆夫 1987 「勝坂式土器成立期に見られる差異の顕在化」『下総考古学』9
- 寺内隆夫 1988 「祖原遺跡出土土器の検討」『平出遺跡考古博物館・歴史民族資料館紀要』第5集 塩尻市立博物館
- 寺内隆夫 1988 「五領ヶ台式土器から勝坂式土器へ」『長野県埋蔵文化財センター紀要1』 長野県埋蔵文化財センター
- 寺崎裕助ほか 1982 「羽黒遺跡」 新潟県見附市教育委員会
- 寺崎裕助 1988 「新潟県長者・原遺跡出土の縄文土器」『新考古学談話会会報』第2号
- 寺崎裕助・高橋昌也・田中 靖ほか 1988 「北陸自動車道糸魚川地区発掘調査報告書IV」 新潟県教育委員会
- と 富樫雅彦・佐藤雅一 1985 「信濃川中流域を中心とした縄文中期土器群の様相について」『三条考古学研究

会機關紙誌』第3号 三条考古学研究会

- な 中島栄一 1974 「吉野屋遺跡」 新潟県立三条商業高校
 中村孝三郎 1955 「馬高」 長岡市立科学博物館
 中村孝三郎 1966 「先史時代と長岡の遺跡」 長岡市立科学博物館
 中村孝三郎 1970 「古代の追跡」 講談社
 中村孝三郎・小林達雄・竹田裕司 1973 「千石原」 長岡市立科学博物館
 永峯光一 1981 「縄文土器大成II中期」 講談社
- に 新潟県教育委員会 1979 「火焔型土器」 新潟県埋蔵文化財図録1
 新潟県 1983 「新潟県史 資料編1 原史・古代」 新潟県
 新潟県 1986 「新潟県史 通史編1 原史・古代」 新潟県
 西谷 隆・石野田誠一 1988 「下堤A遺跡」『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』
 秋田市教育委員会
 西村正衛 1976 「阿玉台式土器編年の研究の概要」『早稲田大学研究科紀要』18
- の 野村一寿ほか 1988 「II時代と縄文(5)縄文中期の土器」『長野県史考古資料編全1巻(4)遺構・遺物』 長野県史刊行会
 ふ 藤田亮策・清水潤三ほか 1964 「長者ヶ原」 新潟県糸魚川市教育委員会
 ま 松本 茂ほか 1982 「七郎内C遺跡」『福島県文化財調査報告書第108集』 福島県教育委員会
 真山 信・伊藤 格・今野 隆ほか 1987 「小栗川遺跡」 宮城県教育委員会
 馬目順一 1975 「大畠貝塚調査報告」 福島県いわき市教育委員会
 む 村越 審 1984 「増補 円筒土器文化」 雄山閣出版
 や 山田芳和 1986 「第6章縄文時代の遺物、第一節土器、第9群土器」『真駒遺跡』 石川県能都町教育委員会

2 石 器

A 石 器 の 記 述

1) 記述の方針

本遺跡から出土した石器の数量は膨大であり多器種にわたる。これらの石器は伴出する土器から、縄文時代早期・前期・中期・後期の所産と考えられる。さらに時期を限定しようとすれば、出土土器の大半が縄文時代中期前半で占められることから、石器も土器と同じく縄文時代中期前半に属するものと考えることが可能であろう。また、遺跡との関連において、大半が集落跡から出土した石器といえる。

ところで、県内の縄文時代遺跡の発掘調査及び調査報告書に目を転じると、大集落跡の発掘調査例は少なく、仮に発掘調査例があったとしても、調査報告書においては遺構・土器が記述の中心であり、石器の記述は付属的なものであったように見受けられる。しかし、縄文時代遺跡の発掘調査では土器とともに石器も多く出土し、また旧石器時代の石器に比べ器種も増加する。これは石器を用いた作業の増加と作業内容の分化を推定させる。そして、これらの石器の大部分は直接的または間接的に、食料獲得のための生産用具として製作され、使用されたのであり、ここに土器研究と異なる石器研究の重要性が存在する。従って、石器の製作・機能・用途・組成等の石器研究を追求してゆくことにより当時の生産活動や人々の生活の様子の一部が明らかにされ、これを時間的・空間的に追求することにより、生産活動の変化や地域性等が解明されると考える。もちろん、これらは容易に解決できるものではなく、石器に関する多くの基礎資料が必要である。しかし、この基礎資料の蓄積と整理を通してことにより、少しずつはあるが上記の目的にせまることは可能であろう。

以上の事柄を念頭におき、本節では縄文時代中期前葉から中葉への比較的限られた時期に當まれた集落の石器様相を明らかにすることを記述の方針とした。従って、多くの基礎資料を提示することに努めた。

2) 資 料 の 提 示 方 法

基礎資料の提示については、各器種の数量・個々の石器の器種名・出土地点・諸特徴等を一覧表・実測図・觀察表等を用いて提示した。

a 一覧表の記載

一覧表は、まず遺構の内・外とに整理し、遺構内出土石器はそれぞれの遺構ごとに器種別数量を記入した。また遺構外出土石器は基本的には大グリッドごとに処理した。

器種名 石器の器種名については、機能・用途に即した名称を与えるべきであると考えるが、分析が不十分でそこまで至っていない。従って、定形的な石器の器種名については、從来からつけられている名称を使用した。不定形な石器については、素材が剥片である場合は「不定形石器」とし、これ以外で不定形な石器または從来からの器種名で分類できないものは、その石器の特徴を考慮した名称または「分類不明石器」とした。

数量 基本的には完形品・破損品・破片¹⁾の別を問わず、1個を1点として数えた²⁾。未製品については、()をつけて數を記入し、完形品・破損品・破片とは區別した。未製品と完形品との區別は、本遺跡の同一器種の完形品や他の報告書のものを参考にしながら、明らかに製作途中と考えられるものを未製品とした。破損品・破片が接合した場合は、同一遺構内または同一大リッド内（大グリッド）のときは接合後のものを1点とし、これ以外の接合はそれぞれで1点ずつとして数を記入した。転用品については転用後の器種に入れた³⁾。

b 実測図の表示方法

実測図は個々の石器の諸特徴を図化したものであり、可能な限り多方向から実測するよう努めた。図化数量は、器種別数量・出土状況を勘案し決定した。主な出土石器の図化数量と図化率は第3表のとおりである。

実測図の図法と展開 第31図のとおり図法は入影図法である。図の展開については、はじめに正面図を描き、90°ずつ回転させながら側面図や裏面図を、また必要に応じ断面図を加えた。これらの図をいくつか組み合わせ、1つの実測図とした。

図の縮尺率 基本的には各器種ごとに統一した。しかし、大小不揃いの一部の石器について縮尺率を変えてある。また磨製石斧D類（小型磨製石斧）は1%とした。主な器種の縮尺率は第4表のとおりであるが、実測図にはスケールもつけた。

図の表現 それぞれの石器の諸特徴を正確でわかりやすく表現する際、線描や点描だけでは十分とはいえない。これを補うために記号・文字・スクリーントーンを使用した。表現例は下記のようになり、具体的な例は第32図のとおりである。

○外形線・剥離線・リング・稜線・打面と主要剥離面との境界線・破損線・推定線等は基本的に線の太さを変えた。

○同一の剥離が2面に表現されている場合（例えば刃部の二次加工が正面図と側面図に描かれている場合など）は適宜、リング・フィッシャー・剥離等を省略した。

○自然面は石質にかかわらずほぼ同じような表現で統一した。節理面についても同様である。

○使用痕の範囲と磨石類・石皿・砥石の磨り面の範囲は、同一スクリーントーンを用いた。石錐・尖頭器・不定形石器で使用痕が縁辺のみに認められるものは、実測図の外側にスク

1) 完形品・破損品・破片の区別は、C観察表の記載の項で述べた。

2) 接合しなくとも形態・製作技術・石質等から、明らかに同一石器の破損品とわかる場合は、1点として記入した。

3) 磨製石斧が他石器に転用されている例が1点認められたが、磨製石斧として取り扱った。特に意味はない。

第3表 主な出土石器の固化数量と固化率 (%) 内は未製品

遺産名 出土地點	石	尖	石	石	肉	三	板	打	磨	繪	磨	風	石	肉	不	分	剥	石
	塙	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭
出 土 数	9 (2)	1	19		7	20	24	138 (6)	17 (4)	4	140	1	16	35	243	7	2621	22
実測数	8 (2)	1	10		6	13	11	76 (2)	11 (4)	4	35	1	11	30	73	2		7
固化率(%)	88.9 (2)	100	51.6		0.86	65.0	45.8	55.1 (32.3)	64.7 (300)	100	25.0	100	68.6	66.7	30.0 (26.6)	31.8		
柱 土 数																		
穴 実測数																		
固化率(%)																		
フ マスコタ 次	2 (1)	2	5	1	3	3	9	38 (3)	4 (1)	3	67	1	8	2	94	2	1011	11
次	2 (1)	2		1	1	1	6	4 (1)	2 (1)		15	1	4	1	26			3
固化率(%)	100 (1)	100		100	33.3	33.3	66.7	10.0 (32.3)	50.0 (300)		22.4	100	50.0	50.0	21.3			27.3
土 砂	3		3		1	5	6	16	1		19	1	4	1	38	2	571	8
実測数	2				1	3	3				3		2		10			3
固化率(%)	66.7				100	20.0	50.0	18.8			15.8		50.0		26.3			37.5
鐵	出土数																	3
実測数																		
固化率(%)																		
その他のビタミン	8	1	4		3	3	11	49 (22)	5	6	83	2	15	3	99	2	902	17
固化率(%)	87.5				66.7	100	36.4	38.4 (2)	89.0	66.7	21.7	50.0	60.0		28.9	50.0		17.6
造	出土数	16 (4)	8	36	4	7	37	55 (22)	36	31	322	9	31	32	807	76	5932	81
模	実測数	11 (2)	5	12	4	6	9	13 (2)	9	9	27	3	15	14	115	1	54	20
外	固化率(%)	68.5 (2)	62.5	33.3	100	85.7	24.3	23.6 (2)	25.0	29.0	8.4	33.3	48.4	43.8	14.3	1.0	0.9	24.7
倉	出土数	38 (7)	12	67	5	21	68	106 (34)	63 (5)	44	642	14	74	54	1275	39	11,100	139
	実測数	30 (2)	8	22	5	16	27	37 (31)	26 (5)	17	102	6	41	25	244	4	54	36
計	固化率(%)	78.9 (2)	66.7	32.9	100	76.2	39.7	34.9 (3.4)	41.2 (100)	38.6	15.9	42.9	55.4	46.3	19.1	4.5	0.5	25.9

リーントーンを貼った。

○磨石類・石皿の敲打痕の範囲は同一

スクリーントーンを用いた。

○磨石類・石皿・砥石の断面図の ←→

は使用痕の範囲である。また ←→

の間には必要に応じて文字で使用痕

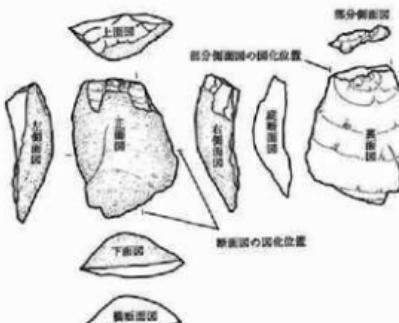
の名称を記入した。

○打製石器の ←→ はつぶしの範囲で

ある。側面図には点描で表現した。

○不定形石器の ←→ は刃部と考えら

れる範囲である。



第31図 固の展開例の模式図

- 使用痕のうち線条痕について、必要に応じて←→を記入した。
- 磨製石斧の←→は、研磨方向である。

○ 不定形石器D類・石錐

の→は、極状剥離の位置と方向である。

○ 不定形石器D類の記号Vは、尖端部の位置である。

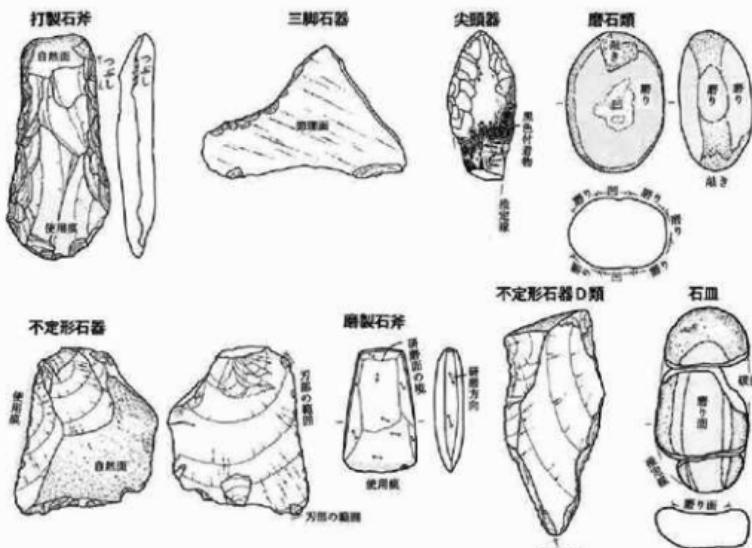
○ 黒色付着物は、黒く塗り潰した。

c 観察表の記載

個々の石器についての出土位置・器種名・分類・諸特徴等は、観察表に記入した。観察項目は器種ごとに少しずつ異なるが、主な項目は法量（長さ・幅・厚さ・重さ）・石材・素材・遺存状態等である。各器種固有の観察項目の説明は、次項B出土石器の分類と分析で記述したものもある。

第4表 主な器種の縮尺率

器種名	石核	尖頭器	石錐	両面加工石器	三脚石器	板状石器	打製石斧	磨製石斧	被覆器	磨石	砥石	石三日石	周邊石器	不定形石器	剝片	石核
縮尺率	2/3	1/2	1/2	1/2	1/2	2/5	2/5	1/3	1/3	1/4	1/4	1/5	1/2	2/5	1/3	1/3



第32図 実測図の主な表現例

出土地点 石器の出土した場所である。その他のピットから出土したものは、グリッド名とピット番号を記入した。遺構外から出土したものは大グリッド名を記し、小グリッドや出土層位のわかるものは大グリッド名の後に記入した。

図No. 実測図番号であり、通し番号をつけた。実測図番号・観察表図No.・写真図版の遺物番号は一致する。

分類 器種ごとに細分類した分類記号である。

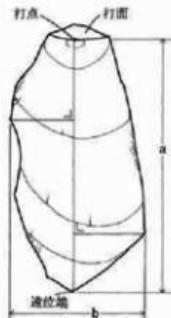
法量 器種ごとに計測基準を設定し、計測値を記入した。計測基準は第34図のとおりである。破損品・破片の場合は現存値を記入し（）をつけた。

石材 使用した石材名は次のとおりである。

メノウ・ひすい・花崗岩・閃緑岩・はんれい岩・変はんれい岩・蛇紋岩・黒色質密安山岩¹⁾・²⁾玢岩・安山岩・ホルンフェルス・輝緑岩・千枚岩・結晶片岩・砂岩・礫岩・珪岩・硬砂岩・鉄石英（赤白珪石も含まれる³⁾・チャート（青白珪石）・頁岩・黑色頁岩⁴⁾・粘板岩・泥岩・綠色凝灰岩・綠泥片岩・流紋岩・凝灰岩・黑曜石・石英はん岩・石英

素材 第33図のとおり、主要剥離面の打点から遠位端⁵⁾の長さ（a）とこれに直交する最大長（b）を比べ、aがbより大きい場合は縦長剥片、aがbより小さい場合は横長剥片とした。打点が除去されても素材の区別ができるものは記入し、ある程度区別のつくものは（）をつけた。打製石斧については側縁側に打点があったと考えられるものは横長剥片、刃部または基端側に打点があったと考えられるものは縦長剥片とした。

自然面 自然面の有無について記入した。両面加工石器・三脚石器・板状石器・打製石斧・礫器類・部分的に研磨のある石斧については、自然面のある部位名称も記入した。



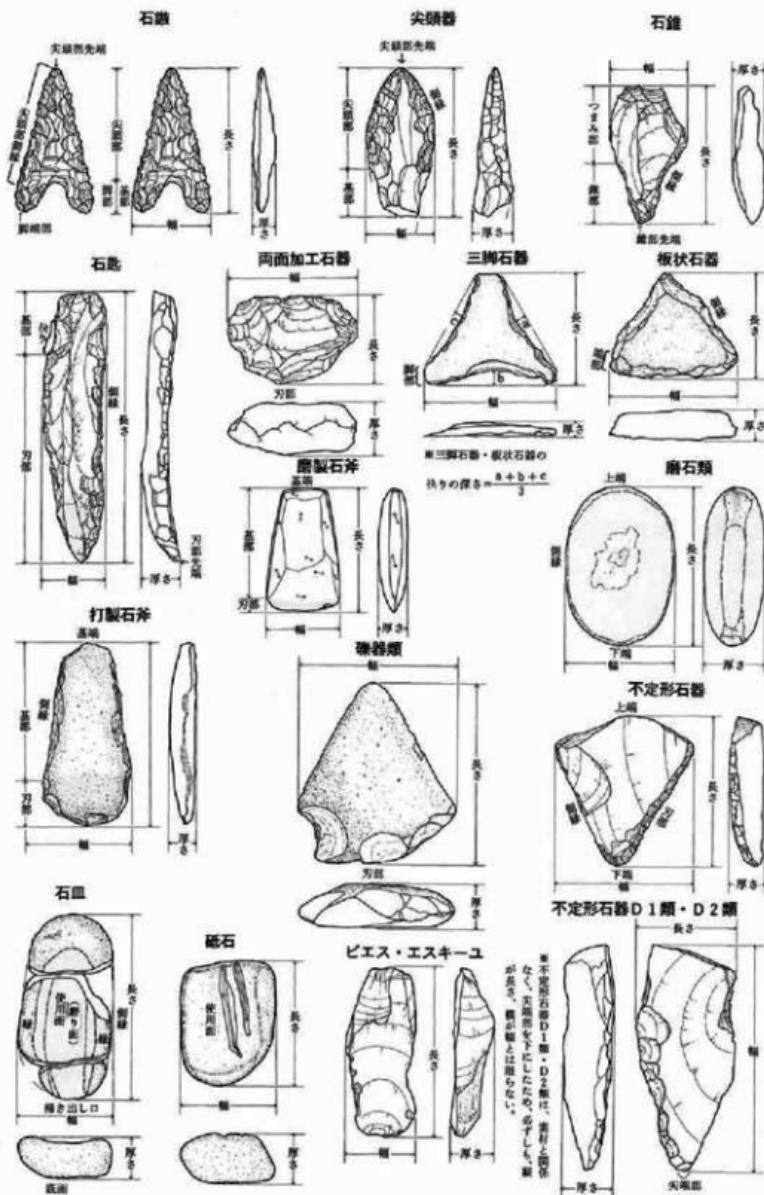
第33図 素材の計測部位と名称

1) 従来の報告書で玻璃質安山岩と報告されていたものと同じであり、古鋼輝石安山岩ともいう。西日本に産出するサマカイトに近似する。

2) 本遺跡では、赤色・茶色・黄色の鉄石英が多く出土したため青白珪石と区別した。鉄石英と赤白珪石との判別は困難であるため全て鉄石英とした。

3) 本遺跡で出土した頁岩のうち、風化が比較的早く、表面が灰色または暗灰色で、内部が黒色を呈するもの、さらに珪質化されていないものを黑色頁岩として頁岩と区別した。

4) 縦長剥片と横長剥片の決め方については、「石器の記録と計測」『図録石器の基礎知識II』（加藤・鶴丸 1980）を参考にした。



第34図 主な器種の部位名称と計測基準

遺存状態 完形品・略完形品・破損品・破片の区別¹⁾をし、破損品は破損部位も記入した。

備考 観察項目のないもので、特に必要と思われる事柄を記述した。使用痕・黒色付着物・被熱等については、注意深く観察した。

○使用痕 剥片石器の使用痕については、次の4種類²⁾に分け記入した。

線条痕 石器の表面に観察される線条のキズ。

光沢痕 石器の表面が、研磨されたように光沢を帯びるもの。

磨耗痕 石器の表面や縁辺が、滑らかになったもの。光沢を帯びない。

つぶれ 石器の表面や縁辺が、敲打されたようにザラザラしているもの。

欠損（例えは打裂石斧の折れなど）は、使用の結果の場合もあるが、遺存状態の項目でふれることから使用痕として記入しなかった。刃こぼれまたは使用痕的微小剥離痕と称されている剥離も使用痕の一つと考えられるが、不定形石器J類でこの一群を取りあげた以外、他器種については顕著なものだけ記入した。

○黒色付着物 アスファルトまたは漆などと考えられるが、化学的分析をしていないため全て黒色付着物として取り扱った。

○被熱 表面の赤変・黒変、煤の付着、熱によるはじけや剝落等から判断し記入した。

○折断 石器の縁辺が折り断ったようになっているものを全て折断とした³⁾。従って折断と記入されているものの中には、折断状に見えるだけで折断でないもの⁴⁾も含まれている。

その他 各器種の部位名称については第34図のとおり、基本的には統一するように努めた。

なお観察項目の空欄は不明または観察不可能である。

1) 完形品は完全な形で法量(長さ・幅・厚さ・重さ)が計測できるものである。略完形品はわずかに欠損しているが完形時の形が想定でき、法量も完形品の時とはほとんど変わらず、法量計測では誤差が少なく完形品扱いとしても支障のないものである。破損品は大きく欠損し、完形時の形がある程度想定できるが、法量は完形時と大きく異なり法量計測ができないものである。破片は器種のみ特定できる程度のものである。

2) 使用痕の区別については「使用痕」「縄文文化の研究7道具と技術」(中島 1983)を参考にした。

3) 明らかに破損によるものと判別できるものは、折断には含めていない。

4) 石核から剥片を生産する時、剥離作業面の縁辺や剥離業面同士の境界線(稜)付近と考えられる部分で剥片を生産すると、折り断ったような剥片ができるものが多い。折断面の観察によりある程度判別できるが、できないものも多い。これらも全て折断として記入してある。

B 出土石器の分類と分析

出土石器の総数量は、25種類 14,432点(未製品は含まない)である。このうち剥片類 11,108点・石核 139点・石製品 4点を除いた数は、3,181点である。これらの数は個体数の数え方にによるが、二次加工や使用痕の認められるものを全て完形品・略完形品・破損品・破片の別なく数えたものである。

石器は大きく分類すると、生産・生活用具に使用されたと考えられる狭義の石器と剝片石器の素材になった剝片や二次加工の際に生じた剝片などのいわゆる剝片類、剝片生産の素材となる石核、そして精神生活に関わるものや宗教的性格を持つと考えられる石製品に分けられる。

機能・用途の分析が不十分である本節において、このように分類するのは問題であるが、一応、石器・石核・剝片類・石製品に分類した。以下、石器について器種ごとに分類と分析を行い、次いで石核・剝片類・土製品・石製品の説明をする。

第5表 石器の差種別数量

() 内は未製品の数値、百分率には未製品・鉄片類・石類・石製品を除いた。
充形品・吸形品・破片の区分できないものは合計のみ記入した。石類・石頭は密度があり合計は合わない。

1) 石 鏽 (7·78~80·165·216·269·270·284·285·346·347·371~377·462~472)
圖版 367)

「矢の先端に装着される石製の矢じり」(鈴木 1983)であり、総数 38 点出土し、石器の中では 1.2%と低い比率である。内 2 点の完形品は発掘調査時に盗難にあった。このほか未製品と思われるものが 7 点出土している。分析の対象となるものは 36 点である。

分類 第6表参照。まず基部形態で3つに細分した。

A類 基部が凹状のもの。いわゆる凹基無茎鐵である。A類は尖頭部側縁の形状、脚端部の形状でさらに3つに細分できる。

A 1類 尖頭部側縁が直線状のもの。(371・462~464)

A 2 類 尖頭部側縁が内凹状に膨らみ、脚端部が丸味をもつもの。(165・270・284・372・
373・465～468 図版 367)

A 3類 尖頭部側縁が内眞状に膨らみ、開端部が鋭く尖るもの。(269-285-346-347-374)

第6表 石器分類表

基部形態	尖端部側縁の形状	背端部の形状	分類	
A類 基部が凹状のもの	1類 側縁が直線状のもの	——	A 1類	
	側縁が内湾状に膨らむもの	2類 丸味をもつ	A 2類	
		3類 鋸くたる	A 3類	
B類 基部が丸いもの	——	——	B類	
C類 基部が棒状のもの	——	——	C類	

375・469~472 図版 367)

B類 基部が丸いもの。いわゆる円基器である。

(78・376・377 図版 367)

C類 基部が棒状のもの。いわゆる尖基器である。

(79 図版 367)

分類別出土数と出土分布状況 第7表・第35図参

第7表 石器分類別出土数

分類別 分類	住居跡	フラスコ状土坑	土坑	その他	ビット	遺構外	合計
A 1類				1	4	5	
A 2類	2	1		2	6	11	
A 3類	1	1	3	3	4	12	
B類	1			2		3	
C類	1					1	
分類不可	3	1				4	
合計	8	3	3	8	14	36	

照。36点のうち、遺構内より22点(61%)、遺構外より14点(39%)出土し、遺構内の出土比率が他器種に比べ高い。遺構内では住居跡(22%)とその他のビット(22%)からの出土が多い。分類別ではA 2類(31%)、A 3類(33%)が多く、A類が78%を占める。つまり凹基無基器が多く出土しているといえる。

個々の遺構では、16号住居跡より3点、36号フラスコ状土坑で2点、I-6区ビット(地点不明)で2点出土している。これ以外は単独出土である。

遺跡全体での出土分布状況は、F-I-4-13区の遺構集中地区から大半が出土している。

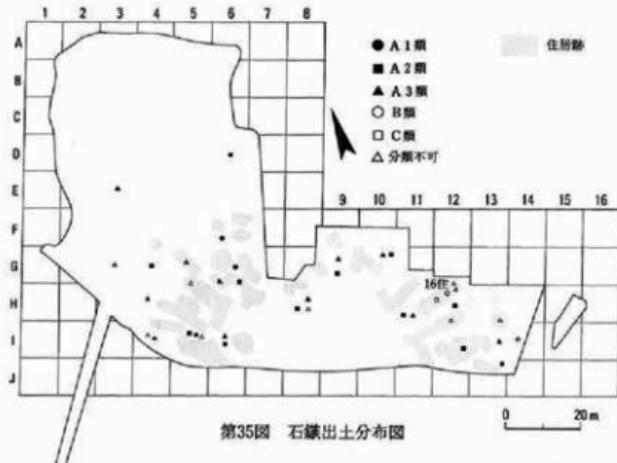
長さと幅 第36図参照。完形品・略完形品の20点を対象とした。資料数は少ないが、A類は長さ2.2~3.3cm、幅1.4~1.8cmを中心に分布する。長さと幅の比率(以下「長幅比」という。)は、1.5:1~2.5:1の範囲にはば含まれる。

重さ 第37図参照。完形品・略完形品の20点を対象とした。資料数が少ないが、A類は1.0~2.0gを中心に分布する。B類は資料数が2点であるが、4.0g以上で非常に重い。

石材 第8表参照。いずれも硬質で緻密な石材を使用している。流紋岩(31%)¹⁾、鉄石英(17%)、チャート(17%)が多く使用されている。黒曜石は少なく3点(8%)しか出土しなかった。

素材 素材の区別ができたものは7点で、縦長剥片3点、横長剥片4点である。

1) 流紋岩は風化が早く歯質のように感じられるが、新しい割れ口を観察すると硬質で緻密である。



第35図 石鎌出土分布図

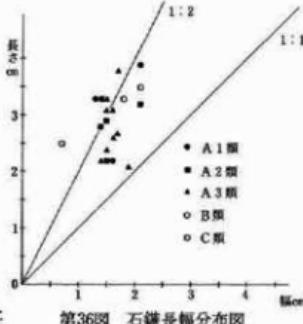
遺存状態 破損品・破片の16点を対象とする。脚部が欠損するもの7点(44%)、尖頭部先端が欠損するもの4点(25%)、尖頭部先端と脚部の両方が欠損するもの3点(19%)、尖頭部の破片が2点(13%)であり、脚部の欠損するものが多い。

その他 B類は2点しか出土しないが、重さがA類に比べ非常に重い。長さ・幅もA類の長幅分布の中心よりやや大きく、厚さも厚い。尖頭部の先端角もやや鈍角である。これらの諸特徴から、本道跡では石鎌に含めたが、岡村道雄氏が「新器種」(岡村 1979)または「尖頭器様石器」(森嶋・岡村 1984)と仮称した石器の可能性が高い。

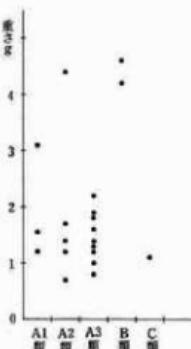
基部に黒色付着物のあるものが1点(464)認められる。アスファルトかどうかは不明だが、矢柄との膠着材と推定される。

第8表 石鎌石材表

石材分類	緑色 無色 無色 岩	黒 石 英 岩	メノウ	黒色 無色 無色 岩	流紋岩	チャート	直 岩	直 岩	黒 礁 石	合計
A 1 類	1					2	1	1	5	5
A 2 類	2	1	2	4			1	1	11	11
A 3 類	1	1		5	3	1	1	1	12	12
B 類		1			2				3	3
C 類		1							1	1
分類不可	1	2				1			4	4
合計	1	6	4	2	11	6	3	3	36	36



第36図 石鎌長幅分布図



第37図 石鎌重量分布図

尖頭部側縁が鋸歯状に仕上げられたものが数点（462・463）認められる。

2) 尖頭器 (81・286・287・473~477 図版 367)

石鎚・石錐・不定形石器D類以外の石器で、先端の尖ったものを全て尖頭器として一括した。総数は 12 点と少ない。完形品 5 点、破損品 6 点、破片 1 点である。

資料数が少なく、しかも形態分類の対象となる完形品も少ないため、分類はしていない。

全て単独出土であり、このうち 9 点は遺構外からの出土である。遺跡全体での出土分布状況は遺構集中地区からの出土であるが、集中的な出土は認められず散漫に分布している。

大きさでは完形品が 5 点と少ないが、いずれも長さが 10 cm 以上もあり大型品といえる。しかし、破損品の中には 477 のようにやや小型品も認められる。

石材はいずれも硬質で緻密なものを使用している。頁岩 5 点 (42%)、鉄石英 3 点 (25%) とやや多く出土している。

素材は扁平疊 1 点、横長剥片 3 点、縦長剥片 2 点、不明 5 点である。

遺存状態は破損品・破片 7 点のうち全て尖頭部側が欠損している。

製作技術上の特徴として、二次加工が丁寧なものとそうでないものに二分される。前者は 2 点と少ないが、二次加工の剥離が素材の中央部にまで及び、両側縁の形状は左右ほぼ対称形の弧状を描く (475・477)。これに対し後者は、二次加工の剥離が粗雑で素材獲得時の剥離や自然面を多く残し、両側縁の形状も左右非対称のものが多い (81・286・287・473・474・476)。このほか、基部に弱い抉り状の二次加工があるもの (286・287・473) や側縁につぶしのあるもの (81・473) も認められる。これらの諸特徴が単なる技術上の違いによるか、機能・用途の違いによるものか、時期的差異によるものかは不明である。

477 は基部に黒色付着物が認められ注目される。この痕跡から、着柄に際し紐を最低 8 回巻きつけ、黒色付着物を充填したことがわかる。黒色付着物の成分は不明である。474 は尖頭部先端に磨耗が認められる。

3) 石錐 (8・36・57・82~86・217・218・478~489 図版 368)

石錐とは「ドリルとも呼ばれるごとく、回転穿孔のための道具と考えられている。」(矢島・前山 1983) ものであり、総数 67 点出土している、石器の中では 2.1% の比率を示す。

分類 第 9 表参照。まず錐部とつまみ部の形状により二分し、さらに A 類以外は素材・剥片の形状により 4 つに細分した。形態分類できたのは 48 点である。

A 類 錐部とつまみ部の区別が比較的明瞭なもの。(57・217・478)

B 類 錐部とつまみ部の区別が不明瞭で、中型で厚手の剥片からなるもの。(82・83・479)

C 1 類 錐部とつまみ部の区別が不明瞭で、縦長剥片からなるもの。(218・480~484)

第9表 石錐分類表

錐部とつまみ部の形状	素材・剝片の形状	分類	
錐部からつまみ部にかけて大きく広がり、錐部とつまみ部の区別が比較的明瞭なもの		A類	
錐部からつまみ部にかけて次第に広がり、錐部とつまみ部の区別が不明瞭なもの	中型で厚手の剝片 形状は不定形を呈する	B類	
	縦長剝片 形状はほぼ逆二等辺三角形を呈する (一部不定形を呈するものがある)	C1類	
	縦長剝片 形状は不定形を呈する	C2類	
	角柱状の剝片	D類	

C2類 錐部とつまみ部の区別が不明瞭で、横長剝片からなるもの。(36・485~488)

D類 錐部とつまみ部の区別が不明瞭で、角柱状の素材からなるもの。(8・84)

製作技術上の特徴 上記のように分類された石錐は、次のような製作技術上の諸特徴が認められる。

A類 資料数は4点と少ない。全て二次加工が全周またはそれに近い範囲で、また、正裏の両面に施されている。従って、素材獲得時の形状は大きく変えられている。57・217は特に丁寧に製作されている。

B類 資料数は4点と少ない。全て二次加工は全周またはそれに近い範囲で施され、部分的に両面加工も認められるが、片面加工を中心である。しかし、二次加工の剥離は急角度で浅く、正裏面には素材獲得時の剥離痕が多く残されている。これは素材が厚手の剝片によるためと考えられる。A類に比べ二次加工は明らかに粗雑である。

C1類・C2類 素材が縦長剝片または横長剝片で区別されるが、二次加工の特徴は同様である。剝片の端部に比較的細かい二次加工を施し、錐部としている。錐部先端付近は若干しぶり込むようにされているものが多い。錐部以外の二次加工は全周またはそれに近い範囲のものではなく、あっても錐部とつまみ部との境付近までのものがほとんどであり、片面加工のものが多い。従って、多くの石錐は主要剥離面の打面及び素材獲得時の形状をよく残している。A類に比べ二次加工は明らかに粗雑である。

D類 角柱状の素材の端部に比較的細かい二次加工を施し、錐部としている。錐部以外の二次加工は少なく、ほとんどが錐部付近に集中する。従って、つまみ部は素材獲得時の形状をよく残している。A類に比べ二次加工は明らかに粗雑である。

このようにA類とそれ以外では、二次加工において明確な差異が認められる。これが時期的差異に基づくものかは不明である。しかし、本遺跡出土の石錐の大部分は、錐部に細かな二次

加工を施しただけの粗雑なつくりであるということを一つの特徴としてあげることができる。

分類別出土数と出土分布状況 第10表・第38図参照。67点のうち、遺構内より31点(46%)、遺構外より36点(54%)出土し、遺構内では住居跡からの出土が多い。分類別では、C1類(28%)、C2類(22%)が多い。他分類と二次加工・形状が著しく異なるA類は3点(4%)と非常に少ない。

分類不可が19点(28%)認められる。この内訳は破損品・破片のため分類できないもの5点(8%)、折断状の加工があり素材の分類ができないもの9点(48%)、尖頭器からの転用と考えられるもの2点(8%)、素材が両極端離異のある剝片によるもの1点、その他2点である。

個々の遺構では、16号住居跡より7点(完形品4点・破損品3点)、21号住居跡より4点(完形品2点・破損品2点)、20号住居跡より2点、26号フラスコ状土坑より2点出土している。これ以外は単独出土である。

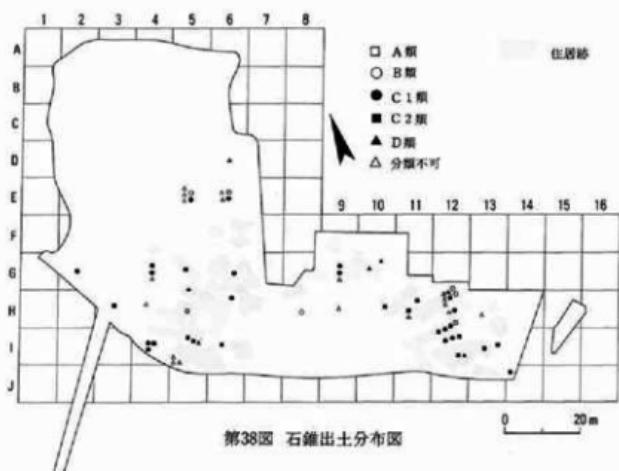
遺跡全体での出土分布状況は、G~I-4~13区の遺構集中地区からの出土が多い。その中でも16号住居跡・21号住居跡及びこの付近とG~I-4・5区に集中する。また土石流跡のE-5・6区からの出土も多い。分類別では片寄った出土分布は認められない。

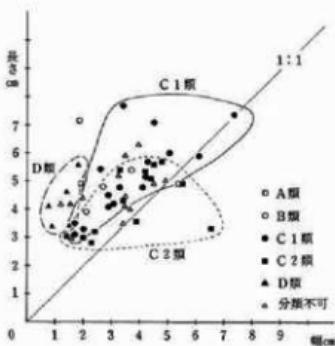
長さと幅 第39図参照。完形品・略完形品の53点を対象とした。C1類・C2類・D類において長幅分布傾向の差異が認められる。

C1類は長さ3.0~6.0cm・幅2.0~5.0cm。

第10表 石錐分類別出土数

分類	住居跡	カラコロ坑	土坑	その他	遺構外	合計
A類	2				1	3
B類	2				2	4
C1類	3	2	1	1	12	19
C2類	5	2	1		7	15
D類	4	1		1	1	7
分類不可	3		1	2	13	19
合計	19	5	3	4	36	67





第39図 石錐長幅分布図

第11表 石錐石材表

石材分類	メノウ	頁岩	透灰岩	鉄石英	珪岩	黒色絶縁 安山岩	粘板岩	黑色頁岩	合計
A類			2				1		3
B類		2		1	1				4
C1類	9	1	8			1			19
C2類	1	5	1	8					15
D類	3	2	1	1					7
不可	4	4	6	4				1	19
合計	8	22	11	22	1	1	1	1	67

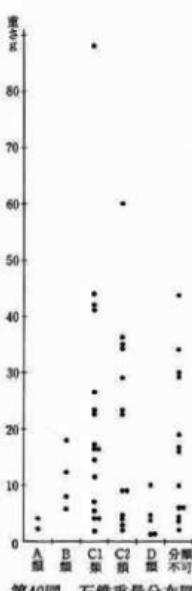
C2類は長さ3.0~5.5cm・幅2.0~4.5cmを中心に分布する。このように分布の重なりも見られるが、おおむねC1類はC2類に比べ長く、大型品が多い。逆にC2類は幅がせまく小型品が多い。D類はC1類・C2類に比べ幅がせまい。これらの差異が認められるのは、素材・剝片の形状を分類基準の一つとしたためである。また分類不可の長幅分布がC1類・C2類・D類の分布の一部と重なるのは、素材の形状において多様なものが含まれているからと考えられる。

概して石錐全体では、長さが幅より大きい傾向にあり、長さ3.0~5.5cm・幅1.5~5.0cmのものが多いといえる。

重量 第40図参照。完形品・略完形品の53点を対象とした。C1類は5~20gを中心分布し、C2類は10gまでのものと20~30g前後のものとに分布が分かれる。D類は資料数が少ないが軽量のものが多く、分類不可は分布に集中化が認められない。

全体の傾向を見ると2~20g前後に40点(75%)が集中する。しかし、2g程度の軽いものから40g前後の重いものまで存在することは、穿孔の対象物や孔の大きさ等により、使い分けが行われていたものと推定される。

石材 第11表参照。C1類・C2類は石材の選択において著しい共通性が認められた。すなわち、頁岩・鉄石英が多くこの2種類で90%近くを占めている。D類では資料数が7点と少ないながらも、メノウがやや多く3点認められた。これは、メノウが小型ながらも比較的の角柱状



第40図 石錐重量分布図

の素材を得るのに適しているためと考えられる。分類不可は流紋岩・鉄石英・頁岩・メノウの4種類で95%を占めるが、C 1類・C 2類・D類のような片寄りは見られない。

石錐全体では67点のうち頁岩22点(33%)・鉄石英22点(33%)・流紋岩11点(16%)・メノウ8点(12%)であり、この4種類で63点(94%)を占める。これらはいずれも硬質で緻密な石材といえる。

素材 C 1類・C 2類・D類は、分類基準に素材・剝片の形状を求めていたため、当然のことながら片寄りが認められる。分類不可は素材・剝片の形状が多様で、片寄りは認められない。

全体的に素材・剝片の形状を見れば、縦長剝片32点(48%)・横長剝片21点(31%)、両極剝離痕のある剝片1点(1.5%)、不明13点(19%)であり、縦長剝片が横長剝片に比べやや多い傾向にある。これは前述のように石錐の長さが幅より大きいということ、従って、縦長剝片が横長剝片より石錐の素材としてやや適しているからとも考えられる。しかし、横長剝片も少なからず認められる。また1点の出土ではあるが両極剝離痕のある剝片を素材としたもの的存在が注目される。

遺存状態 破損品・破片の14点のうち、錐部を欠損するもの8点(57%)、つまみ部を欠損するもの4点(29%)、残りの2点は錐部の破片である。錐部を欠損するものが多いが、これは錐部がつまみ部に比べて小さく、発掘調査において検出されなかったことも考えられる。いずれにしろ破損部位は全て錐部で破損している。

破損品・破片には使用痕が認められないものが多い¹⁾。しかし、少ないながらも使用痕の認められるもの(85)や略完形品としたもので錐部がわずかに欠損するものにも使用痕が認められる(8・481・483)ことから、破損には製作によるものと使用によるものとが存在すると考えられる。

錐部断面形 第12表参照。完形品・略完形品は錐部先端より5mm前後の位置、破損品は破損部分の断面形を観察し、台形状・菱形状・三角形状の3つに分けた。

分類別では、C 1類・分類不可は断面三角形状のものが多く、C 2類・D類はあまり片寄りが認められない。全体では67点のうち断面三角形状のものが約半数を占める。このことは、素材の形状によることがあるが、むしろ錐部の二次加工が片面加工によるための結果と考えられる。

使用痕 67点のうち、使用痕の認められるものが20点(30%)ある。使用痕の内訳は、磨耗痕が19点、磨耗痕と光沢痕があるもの1点である²⁾。これとは別に使用の結果生じたと考えられる錐部先端に槽状剝離のあるもの2点

第12表 石錐錐部断面形表

分類	断面形					合計
	台形状	菱形状	三角形状	不明	合計	
A類	1	2				3
B類	3	1				4
C 1類	3	3	13			19
C 2類	6	4	5			15
D類	3	1	3			7
分類不可	2	5	10	2		19
合計	18	16	31	2		67

1) 使用痕は肉眼による観察である。

2) 錐部の破損品の中には使用の結果破損したものも含まれるが、使用・未使用の区別が困難なため使用痕としては触れていない。

(482・487)、錐部の両側縁に微細剝離のあるもの 1 点が認められた。使用痕の状態から、石錐が回転穿孔のために使用されたことは明らかである。しかし、椎状剝離の例から刺突等の用途もあったと考えられる。

折断 67 点のうち、折断状の加工が施されたものが 16 点(24%)ある。折断については不明の部分もあるが、折断後二次加工が施されているものも存在することから、素材獲得段階または整形・二次加工の一環として、折断の技術が用いられたと推定される。

その他 図示していないが、1つの石錐で 2ヶ所に錐部を持つものが 2点認められた。1点は横長剝片の両側縁の端部に、他の 1 点は剝片を三角形に折断後 2つの頂点に錐部を作り出しているものである。また尖頭器から転用されたと考えられるものが 2 点存在する。1 点は尖頭器と推測される端部に椎状剝離が施された破片、もう 1 点は尖頭器の基部破片の一部に錐部を作り出している。どちらも錐部以外の二次加工は認められない。ただ 86 は尖頭器の二次加工と錐部の二次加工を比較すると、風化状態から明らかに錐部の二次加工が新しいことがわかる。石材も珪質化した頁岩で、色調も他の頁岩と異なり、本遺跡では非常に少ないものである。288 の石匙の石材によく似ている。風化状態から尖頭器が製作・破損した時から石錐に転用されるまではかなりの時間がかったと推測される。このことや錐部の二次加工が本遺跡出土の他の石錐に似ていることを考えると、石錐として転用されたのは本遺跡の営まれた中期前半、尖頭器が製作・破損した時はこれ以前であり、それも風化の状態からかなり古い時期と推定される。

4) 石匙 (288・490~493 図版 368)

「つまみ状の突起を一端につけ、鋭い刃を持った打製石器」(坪井 1959)で、総数 5 点と非常に少ない。うち 4 点は完形品、1 点は刃部を欠くつまみ部の破片である。完形品の 4 点はいずれも縦型石匙、破片の 1 点も遺存部の形状より同様と考えられる。

288 は細身で長身なもので、丁寧な片面加工が施されている。これ以外はつまみ部と刃部の一部に粗雑な二次加工を加えただけのものあり、492 は刃部にほとんど二次加工は施されていない。490 は縄文時代中期に長野県を中心とした中部高地で多出する大型粗製石匙に近似する。

石材は頁岩 4 点、流紋岩 1 点(492)で、いずれも硬質で緻密な石材を用いている。288 は珪質化した頁岩で、色調・風化状態において他の石器の頁岩とは異なり、86 の尖頭器から石錐に転用された石器の石材に近似する。このことや二次加工が他の石匙と著しく異なることから、本遺跡の営まれた中期前半より時期的に古くなるものと推定される。

素材は縦長剝片 3 点(288・490・492)、横長剝片 1 点(491)、不明 1 点(493)である。

使用痕の認められるものが 2 点ある。288 は刃部先端を中心に両側縁・正裏面にかけて著しく磨滅痕・光沢痕が認められ、490 は刃部の両側縁が磨耗するものである。491 は使用の結果と考えられる微細剝離が刃部の両側縁に著しく残る。

5) 両面加工石器 (9・10・37・58・87・88・289・348・378・379・494～499 図版 368・369)

器種分類上、不定形石器の一つとして取り上げるべきものかもしれないが、二次加工・刃部形状・平面形態において、下記の諸特徴が認められるため、両面加工石器（仮称）とした。

二次加工 比較的厚手の剥片の両面にわたり、やや大きな剥離を全周またはそれに近い範囲に施されている。交互剥離も少なからず認められる。

刃部形状 平面形は波状、側面から見るとジグザグ状を呈する。

平面形態 円形・梢円形。打面が大きく残るものまたは折断状の加工があるものは、半円形・半梢円形に近い形を示す。

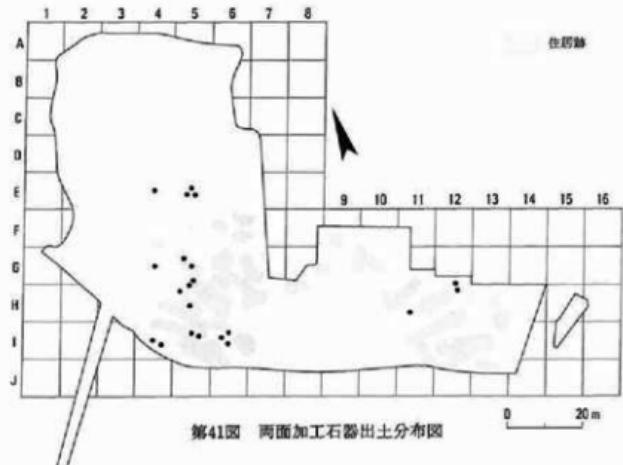
总数 21点出土している。完形品・破損品の区別が困難なため、全て完形品扱いとした。

出土分布状況 第41図参照。21点のうち、遺構内より 14点 (67%) 遺構外より 7点 (33%) 出土しており、石器とともに遺構内からの出土が多い。遺構内からのものは、住居跡より 7点、フラスコ状ピットより 3点、土坑より 1点、その他のピットより 3点である。

個々の遺構では 3号住居跡より 2点、4号住居跡より 2点、16号住居跡より 2点のほかは単独出土となっている。

遺跡全体での出土分布状況は、遺構集中地区の西部分つまり G～I ～ 4～6 区、また、土石流跡の E～4～5 区からの出土が目立ち、他器種の出土分布とは著しく異なる。

長さと幅 第42図参照。長さ・幅とともに 3.0～6.0 cm を中心に分布、長幅比が 1:1 の比率に近いものが多い。これは二次加工が全周またはそれに近い範囲に施され、円形ないし梢円形に仕上げられるためである。



厚さと重さ 第43・44図参照。厚さ1.1~2.5cm、重さ20~50gの範囲のものが多い。他の剝片石器に比べ、長さと幅の割には厚く、重い石器が多いといえる。

石材 第13表参照。鉄石英(24%)、流紋岩(19%)、頁岩(19%)、黒色緻密安山岩(14%)がやや多く用いられ、この4種類の石材で76%を占める。これらの石材は、いずれも硬質で緻密である。

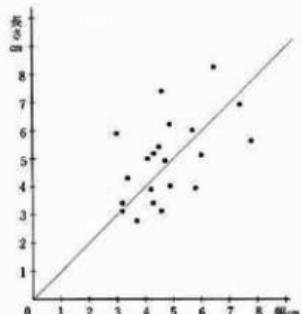
素材 全て剝片を素材とするが縦長剝片3点、横長剝片5点、不明13点である。縦長・横長剝片の区別ができないのは、二次加工や折断状の加工によるためである。また石器のいづれかに自然面を残すものは11点(52%)もあり、注目される。

その他 使用の結果かどうか不明であるが、刃部と思われる縁辺の一部がつぶれているもの3点(37・379)が認められる。また折断状の加工があるもの5点(10・87・378・497・498)が存在する。

以上の結果が両面加工石器の特徴であり、定義の一部にもなると考えられる。この石器の類似資料としては長野県「梨久保遺跡」の不定形石器⑧類(山田1986)、北海道「聖山遺跡」の不定形石器IV類(阿子島1979)、宮城県「田柄貝塚」の不定形石器IVcl類(笠原・茂木1986)等がある。

6) 三脚石器・板状石器

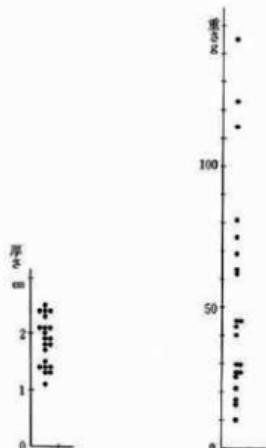
三脚石器について初めてふれたのは、八幡一郎氏であり「…三脚なる打製小石器が出土する



第42図 両面加工石器長幅分布図

第43図

両面加工石器厚さ分布図



第44図

両面加工石器重量分布図

第13表 両面加工石器石材表

石 材	黒色緻密 安山岩	頁 岩	流紋岩	鉄石英	安山岩	珪 岩	ホルン フェルス	メノウ	合 計
点 数	3	4	4	5	1	1	2	1	21

…中略…この石器の特徴は三脚あり、背面が内灣していることである。…中略…取敢えずその形から三脚石器と名づけておく。」(八幡 1932)と記述してある。一方、板状石器については、中村孝三郎氏が「偏平石器¹⁾は薄い板状剥離片、あるいは平坦な自然石を用い、その周縁に加削して、円形または橢円形に作出した石器である。周縁加工は一面から切りたつように剥離を加えているので、断面形は台形をなす。片刃状の周縁端は鋭い刃状を呈する。」(中村 1961)と述べてある。

これ以降、三脚石器と板状石器が特異な形状を示すにもかかわらず、その出土が富山県以北の日本海側及び東北地方に限られることや一遺跡における出土数が少ないとあってか、この石器の明確な定義や分類基準さらには用途・機能に至る論考は、多くはなかったように思われる。しかし、本遺跡では三脚石器・板状石器の出土は非常に多く、合わせて 174 点を数える。これは不定形石器・磨石類・打製石斧に次ぐ数であり、全石器に対して 5.4% の比率を示す。さらに個々の石器を観察すると、様々な形状を呈し、従来の定義では三脚石器と板状石器のいずれに属するか区別するのさえ困難なものが存在する。

そこで、まず従来の定義をふまえつつ、二次加工・素材・裏面の様子等の要素を検討し、三脚石器と板状石器の区別を行った。第 14 表参照。

第 14 表の三脚石器・板状石器の区別で最も大きな違いは、三脚石器は両面加工で裏面が平板状でない石器、板状石器は片面加工で裏面が平板状の石器ということである。

a 三脚石器 (20・21・110~113・161・185・186・225~228・311・359・406~408・629~637
図版 373・374)

第 14 表や第 45 図から、三脚石器とは平面形は脚部を結ぶ辺（以下「側縁」とする）が内湾する三角形（以下「抉入三角形」とする）または三角形を呈し、二次加工は正裏の両面に施され、裏面が平板状でない石器である。総数 68 点出土しており、全石器の 2.1% を占める。

第 14 表 三脚石器・板状石器区別表

分類基準	三脚石器	板状石器
二次加工	両面加工	裏面から正面への片面加工（一部裏面にも剥離のあるものも存在するが、正面の二次加工に比べると著しく少ない）
裏面の様子	平板状でない（四面状のものがやや多い）	平板状
素材 (厚さ)	主要剥離面が曲面をなす剥離片 主要剥離面が節理面または平板状の剥離片 薄手と両手	扁平な自然縦 主要剥離面が節理面または平板状の剥離片 薄手が多い
断面形	不整形（裏面側は凹状のものがやや多い）	台形状

1)その後、中村氏は「板状石器」の名称を使用している（中村 1978）。

分類 完成品と未製品の区別が困難なため、全て完成品扱いとし分類の対象とした。第15表のとおり、まず平面形態で2つに分けた。しかし、両者の中間形態も少なからず存在する。

A類 平面形態が抉入三角形を呈するもの。さらにA類は長さ・幅に対しての厚さにより、2つに細分される。

A 1類 厚さが長さ・幅に対して厚手のもの。從来よりいわれている「三脚石器」の典型品である。(110~112・225・311・359・406・629~632)

A 2類 厚さが長さ・幅に対して薄手のもの。(20・21・161・226・227・407・408・633~635)

器種名	分類	形 式 図					二次加工	表面形	裏面の形状
		(厚手)	(薄手)	(厚手)	(薄手)	(厚手)			
A類	A類						不 定 形	（中間形態が多いあり、必ずしも明確に区分できない）	（中間形態が多いあり、必ずしも明確に区分できない）
三脚石器	A 2類						不 定 形	（中間形態が多くあり、必ずしも明確に区分できない）	（中間形態が多くあり、必ずしも明確に区分できない）
B類	A類						不 定 形	（中間形態が多くあり、必ずしも明確に区分できない）	（中間形態が多くあり、必ずしも明確に区分できない）
板状石器	A類						不 定 形	（中間形態が多くあり、必ずしも明確に区分できない）	（中間形態が多くあり、必ずしも明確に区分できない）
B類	B類						不 定 形	（中間形態が多くあり、必ずしも明確に区分できない）	（中間形態が多くあり、必ずしも明確に区分できない）
C類	C類						不 定 形	（中間形態が多くあり、必ずしも明確に区分できない）	（中間形態が多くあり、必ずしも明確に区分できない）
D類	D類						不 定 形	（中間形態が多くあり、必ずしも明確に区分できない）	（中間形態が多くあり、必ずしも明確に区分できない）

第45図 三脚石器・板状石器細分類図

B類 平面形態が三角形を呈するもの。(113・185・186・228・636・637)

分類別出土数と出土分布状況 第16表・第46図参照。68点のうち、遺構内より31点(46%)、遺構外より37点(54%)出土している。遺構内出土のものは住居跡(65%)からの出土が多い。分類別ではA類が48点(71%)を数え、この中ではA2類が多く全体の半数近く(43%)を占める。なお、分類不可は破損品・破片のため分類できないものである。

個々の遺構では、3号住居跡より5点、16号住居跡より5点、21号住居跡より4点、20号住居跡より2点出土しており、これ以外は単独出土である。

遺跡全体での出土分布状況を見ると、遺構集中地区の両側、つまりG~I・4~6区とH・I・12区の住居跡及びこの付近に集中する。また土石流跡のE~5・6区からの出土も多い。なお分類別に片寄った分布は認められない。

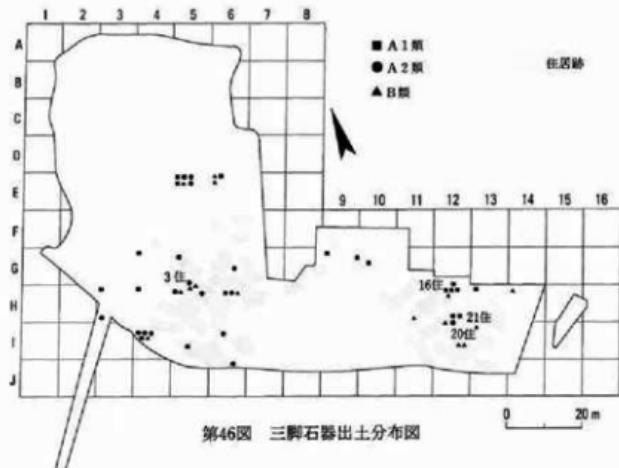
長さと幅 第47図参照。完形品・略完形品の52点を対象とした。A2類は長さ3.5~6.5cm・幅4.5~7.5cmの範囲にやや多く集中する傾向にあるが、A1類・B類では分布の集中が認められない。B類の分布範囲よりやや大きいものがA1類・A2類に散点ずつ認められる。つまりB類に比べA類はやや大型化の傾向にある。

第15表 三脚石器分類表

平面形	素材	分類	模式図
A類 抉入三角形	1類 長幅に比べ薄手	A1類	第45図参照
	2類 長幅に比べ薄手	A2類	
B類 三角形	—	B類	

第16表 三脚石器分類別出土数

遺構 分類	住居跡					その他の ビート	遺構外	合計
	アスコ底 坑	アスコ底 坑	土 坑	その他				
A1類	6	1	1	1		10	19	
A2類	8		2	2		17	29	
B類	6	2	2			9	19	
分類不可						1	1	
合計	20	3	5	3		37	68	



第46図 三脚石器出土分布図

長幅比の分布では、正三角形の長幅比率（高さと底辺の比率 $1:1.154$ ）よりやや幅の大きい $1:1.25$ 前後を中心で分布する。

三脚石器全体では長さ $3.0\sim7.0\text{ cm}$ ・幅 $4.0\sim8.5\text{ cm}$ ・長幅比 $1:1.25$ を中心で分布する。しかし、個々の石器を見ると、 3 cm 程度のものから 10 cm をこえる大型のものまで大小様々な石器が存在する。

厚さ 第48図参照。完形品・略完形品の52点を対象とした。A1類は $1.7\sim3.7\text{ cm}$ 、A2類は $0.9\sim1.7\text{ cm}$ 、B類は $0.8\sim2.4\text{ cm}$ を中心で分布する。A1類とA2類の差異は分類基準の厚手と薄手によるものである。A類とB類を比較するとA類の方が厚いものが多い。

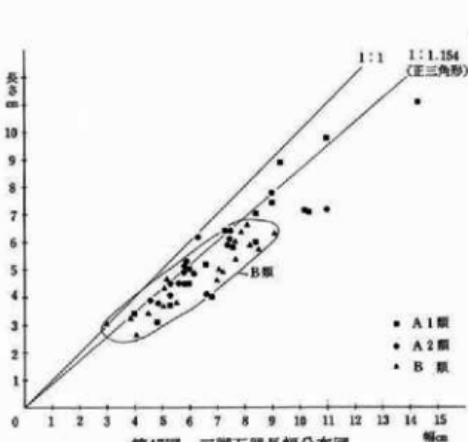
全体の傾向は $1.0\sim2.0\text{ cm}$ のものが多い。しかし、個々の石器を見ると 0.5 cm 程度のものから 3.5 cm 前後のものまで様々な厚さのものが存在する。

重さ 第49図参照。完形品・略完形品の52点を対象とした。A1類は $17\sim90\text{ g}$ 、A2類は $10\sim50\text{ g}$ 、B類は $10\sim70\text{ g}$ にやや多く分布する。しかし、A1類には 180 g 以上のものも数点認められる。

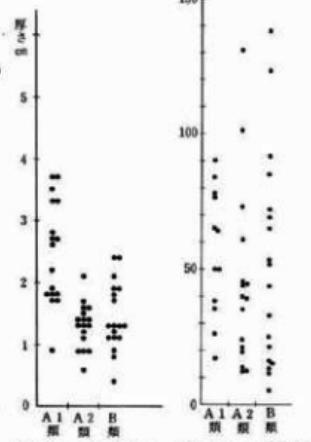
全体の傾向を見ると $10\sim90\text{ g}$ にかけて多く分布するが、個々の石器では 5 g 程度のものから 40 g までのものが存在する。

以上、長さ・幅・厚さ・重さの分析を見ると、それぞれ計測値の集中は認められるが、個々の石器では大きな差異がある。

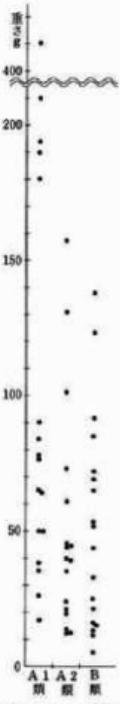
石材 第17表参照。A1類とA2類・B類では石材選択に著しい違いが認められる。A1類は黒色頁岩・頁岩・流紋岩等の硬質で緻密な石材を多



第47図 三脚石器長幅分布図



第48図 三脚石器 厚さ分布図



第49図 三脚石器 重量分布図

第17表 三脚石器石材表

石材	粘板岩	結晶片岩	カルン フォニクス	流紋岩	黒色頁岩 安山岩	黑色頁岩	頁岩	凝灰岩	鉄石英	砂岩	平 滑	合計
A 1 類	1	2	2	4	2	5	3	1	1			19
A 2 類	26	6	1							1	1	29
B 類	18	4			2	1				1	1	19
分類不可	1											1
合計	32	12	3	4	4	4	3	1	1	2	2	68

第18表 三脚石器自然面集計表

有無	有 (残存部位)	無	合計
A 1 類	17 (正面 16, 側縁 1)	2	19
A 2 類	29 (正面 28, 正裏面 1)		29
B 類	18 (正面 17, 正裏面 1)	1	19
分類不可	1 (正面)		1
合計	65 (正面 62, 正裏面 2, 側縁 1)	3	68

く用いているのに対して、A 2 類・B 類は粘板岩・結晶片岩などのやや軟質の石材を使用している。中でも A 2 類はこの 2 種類の石材が 90% を占めている。流紋岩・黒色頁岩・頁岩等は貝殻状剝離をする性質があり、A 1 類の正裏面が内凹状を呈するのはこの性質によるものが少なくない。粘板岩・結晶片岩は節理面等で板状に剝離したり、階段状に剝離する性質がある。A 2 類・B 類の主要剝離面がやや板状であったり、側縁の二次加工が階段状剝離であるのが多いのはこのためである。また A 1 類は厚手、A 2 類・B 類は薄手のものが多いのも、石材の性質によるものと考えられる。

素材 第18表参照。68点のうち、2点は扁平礫を素材とし、これ以外は剝片である。剝片のうち縦長剝片・横長剝片の区別は、主要剝離面が節理であったり、風化が激しかったり、また、二次加工で打面が除去されているものや著しく剝片の形状が変えられていたりするものなどが多くいため、大部分は不明である。

しかし、石器のいずれかに自然面を残すものが各類とも非常に多く認められ、全体で 65 点 (94%) 存在する。このうち 61 点は正面のみに自然面を残すものである。さらに、正面の自然面を観察すると、A 2 類・B 類は緩やかな曲面をなすものが多い。このことや三脚石器の剝片生産後の残骸が認められないことなどから、この石器の素材となるものは扁平でそれほど大きくなり難い礫と考えられる。ただし、A 1 類は厚みのある素材で曲面が緩やかでないものも存在することから、梢円礫も含まれると推定される。

遺存状態 第19表参照。破損品・破片は全て脚部が欠損したものである。A 2 類が A 1 類・B 類に比べ、著しく多い。これは、A 2 類の側縁が抉れ、石材も軟質で薄手のものが多いめである。逆に A 1 類は側縁が抉れているにもかかわらず石材が硬質で厚手のものが多いこと、B 類は石材が軟質にもかかわらず側縁が抉れていないことによると思われる。

第19表 三脚石器遺存状態表

遺存状態	完形	一脚欠	二脚欠	合計
A 1 類	17	2		19
A 2 類	16	11	2	29
B 類	18	1		19
分類不可		1		1
合計	51	15	2	68

その他 裏面や側縁の一部に磨耗痕や擦痕¹⁾が 16 点に認められた。石材が軟質な石器は風化のため、擦痕と区別できないものも多くあり、実際にはもっと多く存在したと考えられる。中でも 226・228 は磨耗痕、359・635 は磨耗痕と擦痕が顕著に認められる。これらの痕跡は使用痕の可能性がある。しかし、三脚石器の用途・機能が不明なため断定はできない。いずれにしろ、三脚石器においてこのような痕跡が認められたことは、今後、用途・機能を考えていくうえで重要といえる。

A類については側縁の抉りの深さを計測した。計測方法は第 34 図に示したように、完形品・略完形品は三側縁の抉りの深さの平均値、破損品は遺存する側縁の抉りの深さを計測した。A 1 類は 1.3~9.0 mm の範囲にあり、2.0~4.5 mm に集中し、平均値は 3.9 mm である。A 2 類は 1.0~13.3 mm の範囲にあり、2.0~5.0 mm に集中し、平均値は 5.1 mm である。A 2 類の方が全般的に抉りが深いのは、薄手で軟質の石器が多いためと考えられる。個々の石器でも薄手で軟質の大型品には、抉りの深いものが多い傾向にある。

b 板状石器 (22・40・62・114~116・229~232・263・312~317・360~362・409~412・638~650 図版 374・375)

第 14 表・第 45 図参照。板状石器とは、扁平な自然縁または平板状の剥片を素材とし、裏面から正面への片面加工が施され、裏面が平板状の石器である。断面形は台形状を呈する。総数 106 点出土しており、全石器の 3.3% を占める。

分類 第 45 図参照。未製品と完形品の区別が困難なため、全て完形品とし、分類の対象とした。分類は平面形態で 4 つに分けた。分類可能なものは 100 点である。不可能なものは 6 点で全て破損品・破片である。

A類 平面形が抉入三角形のもの。(22・40・62・114・229・230・360・409・410・638~641)

B類 平面形が三角形のもの。(115・116・231・232・263・312~315・361・411・642~648)

C類 平面形が円形・椭円形のもの。(317・362・412・649・650)

D類 平面形が不整形のもの。(316)

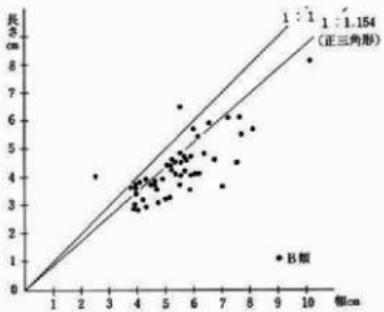
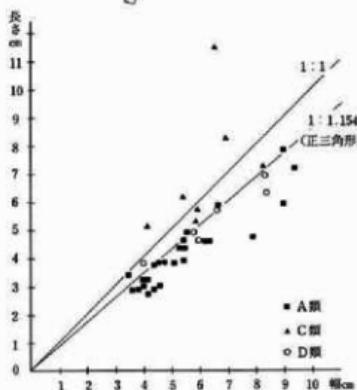
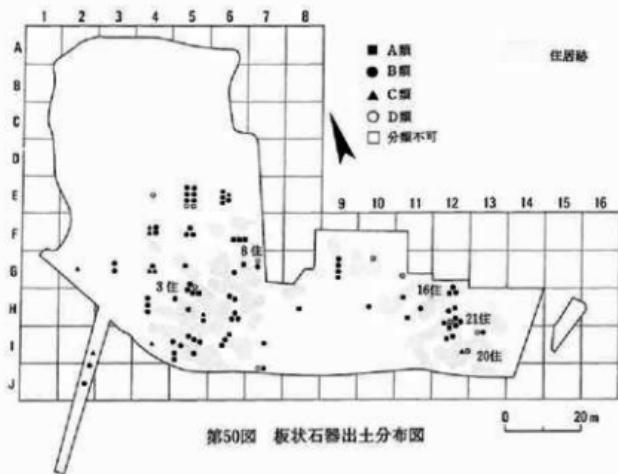
A類と B類の中には、両者の中間形態も存在し、必ずしも明確に区分することができないものもある。

分類別出土数と出土分布状況 第 20 表・第 50 図参照。106 点のうち、遺構内より 51 点 (48%)、遺構外より 55 点 (52%) 出土して

第 20 表 板状石器分類別出土数

遺構 分類	住居跡	プラスチック 成	土 坑	溝状土坑	その他の ビット	遺 構 外	合計
A 類	13		3		2	14	32
B 類	7	6	1	1	8	28	51
C 類		1	1		1	8	11
D 類	3	1				2	6
分類不可	1	1	1			3	6
合 计	24	9	6	1	11	55	106

1) 磨られたような擦痕と線条痕の区別が困難なため、観察表には全て擦痕として記述した。



いる。遺構内出土のものは、住居跡(47%)が多い。分類別ではB類(48%)とA類(30%)の出土が多く、C類(10%)は少ない。つまり本遺跡から出土する板状石器は、抉入三角形または三角形のものが多く、従来一般的な形と考えられてきた円形・橢円形のものは少ないと見える。

個々の遺構では、3号住居跡より5点、8号住居跡より3点、16号住居跡より3点、21号住居跡より5点、7号住居跡より2点、28号フラスコ状土坑より2点、H-I-12区P51より2点出土している。これ以外は単独出土である。

遺跡全体での出土分布状況では、遺構集中地区の両側、つまりG-I-4~6区、H-I-12区の住居跡及びこの付近からの出土が多い。また土石流跡のE-5・6、F-4区からの出土も多い。分類別では、C類のはほとんどが6列区より西側に分布することが注目される。

第21表 板状石器石材表

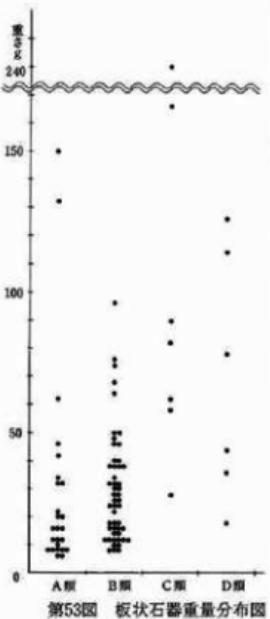
石器 分類	粘板岩	砂 岩	結晶片岩	千枚岩	硬砂岩	黑色頁岩	泥 岩	不 明	合計
A 類	17	10	1	1	1	1	1		32
B 類	21	9	5		2	2		2	51
C 類	5	2	4						11
D 類	3	1	2						6
分類不可	4	1	1						6
合 計	68	23	13	1	3	3	1	2	106

第22表 板状石器自然面集計表

石器 分類	有無	有 (残存部位)		無	不明	合計
		無	有			
A 類	31 (正面30、側縁1)			1		32
B 類	47 (正面44、正面2、側縁1)			3	1	51
C 類	10 (正面8、正面側縁1、正面縁1)			1		11
D 類	6 (正面6)					6
分類不可	6 (正面6)					6
合 計	100 (正面94、正面2、正面側縁1、側縁2)			5	1	106

第23表 板状石器遺存状態表

遺存状態 分類	完 形	一端欠	破片	1/2 残	2/3 残	合計
A 類	25	7				32
B 類	50	1				51
C 類	7		1	1	2	11
D 類	6					6
分類不可		2	4			6
合 計	88	10	5	1	2	106



長さと幅 第51図・第52図参照。完形品・略完形品の88点を対象とした。A類は長さ3.0~4.5cm・幅3.5~5.5cm、B類は長さ3.0~5.0cm・幅4.0~6.0cmを中心に分布し、B類の方がやや大きい傾向にある。長幅比では、正三角形の長幅比よりやや幅の広い1:1.25を中心分布する。

厚さ 完形品・略完形品の88点を対象とした。A類は0.5~2.1cmの範囲にあり、0.5~1.3cmのものが多い。B類は0.6~1.8cmの範囲にあり、0.6~1.5cmにかけて多く存在し、A類に比べやや厚い傾向にある。C類・D類は資料数が少なく、計測値の集中は認められない。

重さ 第53図参照。完形品・略完形品の88点を対象とした。A類は5~20g、B類は5~50gにかけての分布が多い。B類はA類よりやや重い傾向にある。

石材 第21表参照。分類別の片寄りは認められず、ほぼ同様の石材を選択している。粘板岩が半数以上(57%)を占め、砂岩(22%)・結晶片岩(12%)も多く使用され、この3種類で全体の91%を占める。これらの石材は軟質で、節理面等で板状に剥離する性質のものが多い。

素材 第22表参照。扁平礫を素材とする3点を除き、全て平板状の剝片である。剝片は主要剝離面が節理面、風化のため、また二次加工により打面が除去されたり等、剝片の形状を著し

く変えられたりするものが多く、縦長・横長剝片の区別は不明なものが多い。

しかし、石器のいずれかに自然面を残すものが非常に多く認められ、全体で 100 点 (94%) を数える。このうち 94 点は正面のみに自然面を残すものである。自然面の様子を観察すると、非常に緩やかな曲面をなすものが多い。これらのことや板状石器の剝片生産後の残核が認められないことなどから、この石器の素材となるものは扁平でそれほど大きくない礫と考えられる。

遺存状態 第 23 表参照。観察表には A 類・B 類・分類不可は端部の欠損状態を、C 類は遺存の割合を記入した。A 類の破損が最も多く端部で欠損するものである分類不可の 6 点も端部で破損した石器である。A 類の破損が多いのは側縁が抉れているためと考えられる。

その他 裏面や側縁の一部に磨耗痕や擦痕が認められるものが 15 点 (14%) 存在し、360・643・646 は顕著に認められる。これらの痕跡は使用痕とも考えられるが、用途・機能が不明なため断定できない。いずれにしろ、このような痕跡が認められたことは、用途・機能を考えていくうえで重要といえる。

A 類については抉りの深さを記入した。計測方法は三脚石器と同様である。抉りの深さは 1.0~5.8 mm の範囲にあり、1.7~3.8 mm にかけて多く、平均値は 2.7 mm である。三脚石器の抉りの深さに比べ浅いのは、三脚石器が両面加工であるのに対して、板状石器は片面加工によること、また概して三脚石器の方が大きく、板状石器が小さいことによるためと考えられる。

以上の結果を三脚石器と比べ、まとめてみると次のようになる。

- 平面形は三脚石器が全て抉入三角形・三角形であるのに対し、板状石器は抉入三角形・三角形が多いながらも、円形・椭円形・不整形も存在する。
- 出土分布状況はほぼ共通する。ただし、板状石器 C 類 (円形・椭円形のもの) は分布に片寄りが認められる。
- 長さと幅・厚さ・重さにおいては、三脚石器の方が大きく、厚く重い傾向にある。特に三脚石器 A 1 類はその傾向が顕著である。また三脚石器は計測値が広範囲にわたり、大きさが様々である。
- 石質は粘板岩・結晶片岩等の軟質で板状剝離しやすい性質のものがとともに多く用いられている。しかし、三脚石器 A 1 類は、硬質で緻密、ア貝殻状剝離を呈する性質のものが多い。
- 素材は自然面を残す剝片が非常に多いという点に強い共通性がある。そして、三脚石器 A 1 類を除き、素材は扁平礫と考えられる。
- 遺存状態は軟質で薄手の抉入三角形 (三脚石器 A 2 類・板状石器 A 1 類) のものが破損しやすい点で共通する。
- 使用痕の可能性のある痕跡については、同じような痕跡が両者に認められる。
- 平面形が抉入三角形を呈するもの (三脚石器 A 1 類・A 2 類・板状石器 A 類) の抉りの深さは、三脚石器の方が深い傾向にある。

7) 打製石斧 (2・23・29・45・46・54・55・70・71・76・117・142・187・205・233・246・254・256・264・267・318・322・363・365・413・421・651・681 図版 375・376・377・378)

総数 594 点出土し、不定形石器、磨石類に次いで多い。全石器の 18.7% を占める。他に未製品と思われるものが 34 点出土している。

分類 第 24 表参照。まず素材が剝片か扁平礫かで二分した。さらに剝片のものは、平面形態からいわゆる撥形と短冊形、また刃部形状・石質・二次加工等により直刃式片刃打製石斧（鈴木 1977）と考えられるものの 3 つに細分した。

撥形と短冊形の分類については、その中間形が多く、従来の分類では観察者の主觀で、仮に分類基準があっても必ずしも明確に分けられていいくことが多かった。本書では第 54 図のようにまず刃部幅と基部幅の計測基準を設定し、刃部幅が基部幅の 1.5 倍以上上のものを撥形、1.5 倍未満のものを短冊形とした。

A類 剥片を素材とし、平面形が撥形を呈するもの。撥形は側縁の形状でさらに 4 分される。



第54図 打製石斧分類図
短冊形の分類基準図

第 24 表 打製石斧分類表

素材	平面形類	刃部形状・石質	側縁の形狀	分類	
剝片	A類 撥形		1 番 両側縁やや抉れる	A 1類	
			2 番 片側縁やや抉れ、片側縁直線状またはややふくらむ	A 2類	
			3 番 両側縁直線状 片側縁直線状、片側縁ややふくらむ	A 3類	
			4 番 両側縁ややふくらむ	A 4類	
	B類 短冊形		1 番 両側縁やや抉れる	B 1類	
			2 番 片側縁やや抉れ、片側縁直線状またはややふくらむ	B 2類	
			3 番 両側縁直線状 片側縁直線状、片側縁ややふくらむ	B 3類	
			4 番 両側縁ややふくらむ	B 4類	
D類 扁平礫	C類 直刃・片刃	石質で無骨	——	C類	
	——	——	——	D類	

- A 1 類 両側縁がやや抉れるもの。(76・122・187・413・414・651~655 図版 375)
- A 2 類 片側縁がやや抉れるもの。(2・120・121・123・124・363・656・657 図版 375・376)
- A 3 類 両側縁が直線状のもの、または片側縁が直線状で他の側縁がやや膨らむもの。(54・70・117・119・188~191・233・234・256・318・364・415・658~663 図版 376)
- A 4 類 両側縁がやや膨らむもの。(45 図版 376)

B 類 剥片を素材とし、平面形が短冊形を呈するもの。A 類と同様に側縁の形状でさらに 4 分される。

- B 1 類 両側縁がやや抉れるもの。(267・664 図版 376)
- B 2 類 片側縁がやや抉れるもの。(23・125・192・665~667 図版 376)
- B 3 類 両側縁が直線状のもの、または片側縁が直線状で他の側縁がやや膨らむもの。(24~26・46・71・126~135・193~201・235~238・319・365・416~419・668~673 図版 377)
- B 4 類 両側縁がやや膨らむもの。(27・118・136・137・239~242・254・674~676 図版 377)
- C 類 直刃式片刃打製石斧、またはトランシェ様石器(宮澤 1976)と呼ばれていたものに近似し、片刃で直線的な刃部を持ち、硬質で緻密な石材を使用している石器である。(202・420・677~679 図版 377)

製作技術上の諸特徴 二次加工を見ると、A 類・B 類・D 類と C 類では違いが認められる。A 類・B 類 粗雑な二次加工を両側縁に施したものが一般的で、両側縁に比べ刃部・基端への二次加工はやや少ないものが多い。側縁の二次加工は素材の形状にもよるが、A 類は B 類より、また 1 類・2 類の方が 3 類・4 類より概して多いといえる。各類とも側縁につぶしを施したものが多く認められる。

- C 類 二次加工は両側縁に集中し、刃部と基端には著しく少ない。刃部に二次加工がまったく認められないもの(202・678・679)も存在する。しかも、刃部には 1 点を除き、自然面を残し、礫の曲面を利用し、片刃になるような素材を使用している。両側縁の二次加工は、両面加工のもの(202・677)と片面加工のもの(420・678・679)が存在する。正面側の二次加工は裏面側に比べ急角度剝離である。また側縁につぶしが施されるもの(202・677)もある。
- D 類 扁平で長大な礫の素材を生かし、二次加工は粗雑で少ない。両側縁に二次加工がまったく認められないもの(681)も存在する。

このように A 類・B 類・D 類は、素材では異なるが、二次加工の粗雑さは比較的似ている。しかし、C 類は明らかに素材・二次加工において、これらと異なることがわかる。

分類別出土数と出土分布状況 第 25 表・第 55 図参照。総数 594 点のうち、完形品・略完形品が 326 点(55%)、残りの 268 点(45%)が破損品・破片・接合完形品¹⁾である。

完形品・略完形品の 326 点のうち、遺構内より 133 点(41%)、遺構外より 193 点(59%)出土

1)破損品・破片が接合し、完形品になったものを、便宜的に接合完形品と呼ぶことにした。

している。遺構内出土のものは住居跡が60%を占める。分類別ではB類(52%)とA類(33%)が多く、この2種類で85%を占める。すなわち、本遺跡で出土する打製石斧は剥片を素材とし、平面形が楔形または短冊形が多いといえる。しかし、礫を素材とするD類も11%を占める。出土の多いA類・B類の側縁の形状を見ると、側縁が直線状または片側縁がやや膨らむ3類が多い。

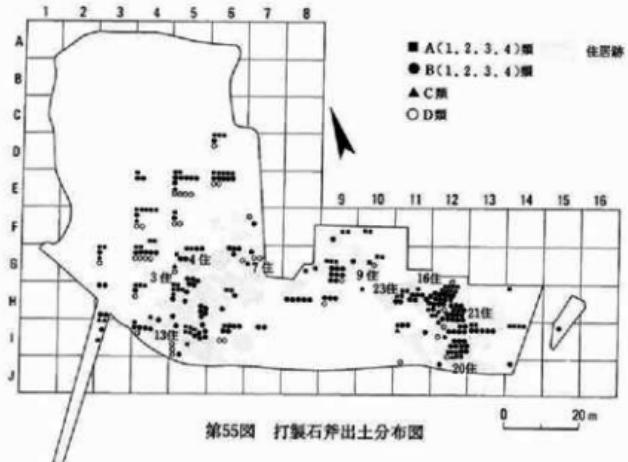
また直刃式片刃打製石斧としたC類は、少ないながら7点出土したことが注目される。しかし、これが繩文時代早期に東北地方北部から北海道南部にかけて出土するトランシェ様石器や繩文時代中期中葉から末葉の神奈川県尾崎遺跡(鈴木1977)で多出した直刃式片刃打製石斧に関係するかどうかは不明である。

個々の遺構ごとの出土を見ると、3号住居跡より13点、4号住居跡より5点、7号住居跡より4点、9号住居跡より5点、13号住居跡より4点、16号住居跡より35点、20号住居跡より25点、21号住居跡より18点、23号住居跡より6点、16号フ拉斯コ状土坑より3点、26号フ拉斯コ状土坑より5点、41号フ拉斯コ状土坑より3点、55号フ拉斯コ状土坑より4点、27号土坑より3点、61号土坑より4点、F-10区ピット2号より3点と出土

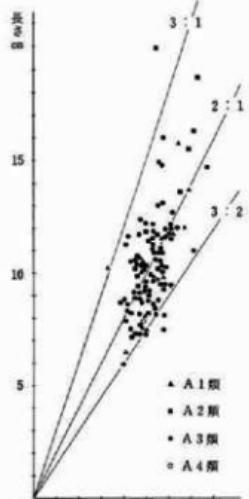
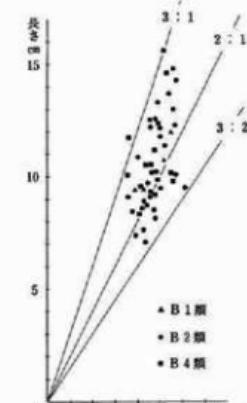
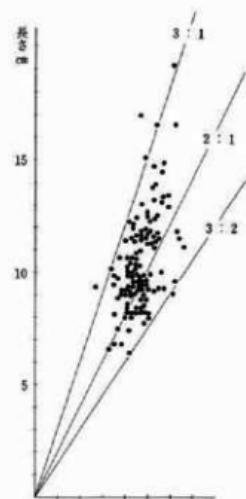
第25表 打製石斧分類別出土数

(定期・略定期)		住居跡	フ拉斯コ状 土	土坑	その他の ピット	遺構外	合計
遺構	分類						
A 1 類	4				4	8	16
A 2 類	7	1	1	1	1	15	25
A 3 類	14	5	1	7	39	66	
A 4 類	1					1	
A 類 小計	26	6	2	12	62	108	
B 1 類	1			1		2	4
B 2 類	4	2	1	1	19	27	
B 3 類	32	7	4	11	67	121	
B 4 類	10				8	18	
B 類 小計	47	9	6	12	96	179	
C 類	1				2	4	7
D 類	5				4	28	37
分類不可	1					3	4
合計	89	15	8	30	193	326	

(破損品・破片ほか)		住居跡	フ拉斯コ状 土	土坑	その他の ピット	遺構外	合計
遺構	分類						
破損品・ 破片	54	22	8	19	159	262	
統合完形	4	1				1	6
合計	58	23	8	19	160	268	



第55図 打製石斧出土分布図

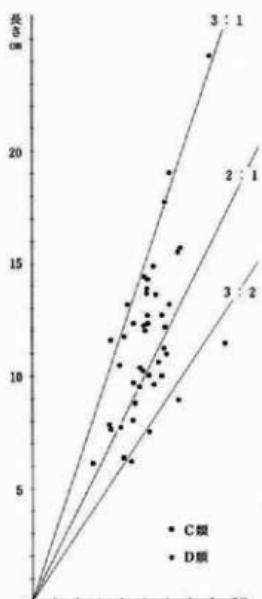
第56図 打製石斧A類
長幅分布図第57図 打製石斧B(1・2・4)類
長幅分布図第58図 打製石斧B 3類
長幅分布図

している。この中でも 16 号住居跡より出土した 117~121 は、5 本一括して床面付近に並べ置かれたような状態で出土したことは注目される。

遺跡全体での出土分布状況は、G~I-5~12 区の遺構集中地区や土石流跡の E-5・6 区からの出土が多い。中でも H・I-12 区の住居跡及びこの付近に濃密に分布する。分類別では、D 類が 7 列区より西側、C 類が 5 列区より西側からやや多く出土し、片寄った分布を示す。

一方、破損品・破片を見ると、268 点のうち遺構内より 108 点 (40%)、遺構外より 160 点 (60%) 出土し、完形品・略完形品の比率とはほぼ同じである。遺構内出土のものは住居跡が多い。

長さと幅 第 56~59 図参照。完形品・略完形品の 326 点を対象とした。A 類は長さ 7.5~12.0 cm・幅 4.0~6.0 cm、B 類は長さ 8.0~13.0 cm・幅 3.5~5.5 cm を中心に分布する。長幅比は A 類・B 類ともに 3:2~3:1 にはほとんど含まれるが、A 類は 2:1~3:2 寄りに、B 類は 2:1~3:1 寄りに分布する傾向がある。つまり、A 類 (撥形) と B 類 (短冊形) を比べると、A 類は B 類より幅が広く、B 類は A 類より長い傾向にある。



第59図 打製石斧 C・D 類長幅分布図

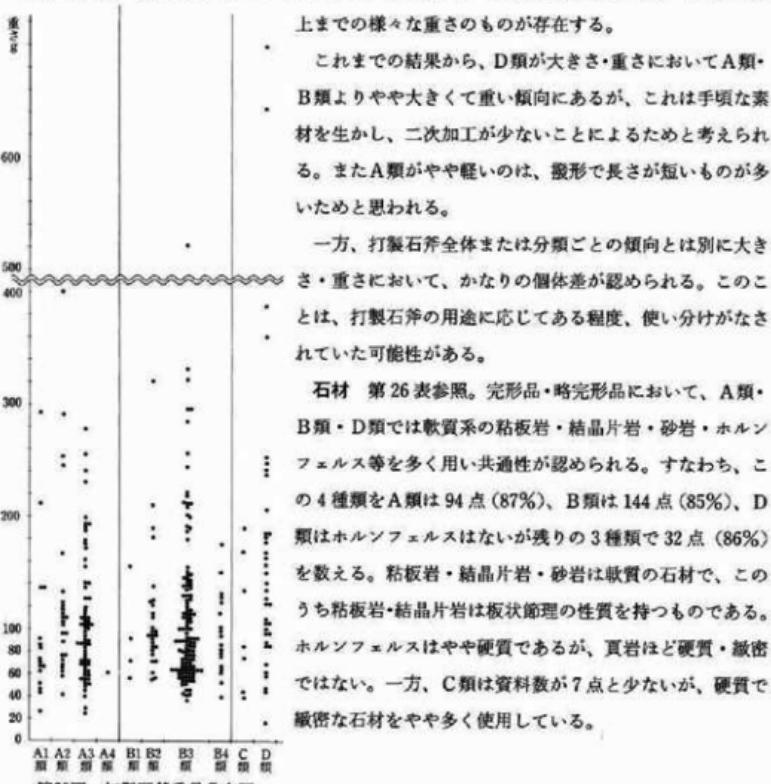
といえる。

D類は資料数が少なく、必ずしも明確でないが長さ9.5~14.0 cm・幅4.5~6.0 cmにやや多く分布し、長幅比は3:1~3:2に多く含まれる。A類・B類に比べ、ある程度ばらついた分布といえる。

全体の傾向としては、長さ7.5~12.5 cm・幅4.0~6.0 cmのものが多い。しかし、個々の石器を見ると長さが6.0~7.0 cm程度の小型品から、15.0 cmを超える大型品まで様々な大きさのものが存在する。

重さ 第60図参照。完形品・略完形品の326点を対象とする。A類は50~120 g、B類は50~150 gにかけて多く分布し、B類がA類に比べ重い傾向にある。A類内ではA1類にやや軽いものが多い。D類は80~180 gに多く分布し、A類・B類よりやや重い傾向といえる。

全体では50~150 gにかけてのものが多い。しかし、個々の石器では40 g程度から300 g以



第60図 打製石斧重量分布図

(完形・略完形品)

第 26 表 打製石斧石材表

石材 分類	粘板岩	結晶片岩	砂 岩	ホルン フェルス	結晶片岩	黒色頁岩	硬砂岩	真 岩	安山岩	輝 岩	黑色巖岩	はんれい 岩	輝灰岩	綠色灰岩	流紋岩	合計
A 1 類	6	4	2	1				1	1					1		16
A 2 類	10	1	5	6			1	2								25
A 3 類	19	22	12	6	1		2	2	2							66
A 4 類															1	1
A類小計	35	27	19	13	1	3	5	3					1	1		100
B 1 類	3		1													4
B 2 類	9	8	1	6		1	2									27
B 3 類	49	24	19	22	2	1	5	5	1	2	1					121
B 4 類	5	5	2			1	3			2						18
B類小計	66	37	23	38	2	1	7	10	1	2	3					170
C 類			1		3		1		2							7
D 類	12	14	6			1			4							37
分類不可	1			1				1			1					4
合 計	114	79	48	35	3	1	12	15	7	6	3	1		1	1	326

(破損品・破片ほか)

石材 分類	粘板岩	結晶片岩	砂 岩	ホルン フェルス	結晶片岩	黒色頁岩	硬砂岩	真 岩	安山岩	輝 岩	黑色巖岩	はんれい 岩	輝灰岩	綠色灰岩	流紋岩	合計
結晶片岩片	80	63	72	36	5	1	8	2	3	2	2	2	1		1	262
複合完形	3	2		1												6
合 計	83	65	72	31	5	1	8	2	3	2	2	2	1	1	1	268
総 合計	197	144	120	56	8	2	20	17	10	8	5	3	1	1	1	594

破損品・破片を見ても、完形品・略完形品と同様、粘板岩・結晶片岩・砂岩・ホルンフェルスが多く、この4種類の石材で241点(90%)を数え、比率は完形品・略完形品よりも高い。これは破損品・破片では砂岩の比率が高いためである。つまり、これらの石材の中では砂岩製の打製石斧が最も破損しやすい石材であるといえよう。

素材 第27・28表参照。完形品・略完形品の362点を対象とする。素材を分類基準としたため、当然のことながらA類・B類・C類は全て剝片、D類は扁平礫である。

素材の不明なものは、節理面や風化等により縦長剝片か横長剝片かの区別ができないものである。従って、扁平礫を素材とする37点(11%)を除き、残りの289点(89%)の大半は剝片を素材としている。剝片を素材とするものでは、A類・B類ともに横長剝片が非常に多い。

また素材のいずれかに自然面を残すものが非常に多く認められ、全体で289点(89%)を数える。自然面の残存部位を見ると、A類・B類では正面に自然面を残すものが多い。C類は資料数は少ないので、全て刃部に自然面を残すものであり、この滑らかな自然面を刃部として用いている。D類は当然のことながらほとんどのものが、正裏面に自然面を残している。正面に自然面を残すA類・B類を見ると、その自然面は平坦、または緩やかな曲面を呈しているのがほとんどである。

第 27 表 打製石斧素材表

(完形・略完形品)

石材 分類	粘長剝片	縦長剝片	扁平礫	不規則片	合計
A 1 類	10	3		3	16
A 2 類	16	3		6	25
A 3 類	43	6		15	66
A 4 類	1				1
A類小計	70	14		24	106
B 1 類	2	1		1	4
B 2 類	20	4		3	27
B 3 類	74	16		33	121
B 4 類	15	2		1	18
B類小計	111	21		38	170
C 類	2	3		2	7
D 類				37	37
分類不可	3	1			4
合 計	185	39	37	64	326

第28表 打製石斧自然面集計表

分類 存在部位	(完形品・略完形品)												不 合 台 計		
	正 面 の ふ る	正 面 ・ 刃 部 の ふ る	正 面 ・ 基 端 側 の ふ る	正 面 ・ 片 側 の ふ る	刃 部 の ふ る	片 側 部 の ふ る	基 端 ・ 刃 部 の ふ る	基 端 ・ 片 側 の ふ る	刃 部 ・ 片 側 の ふ る	正 面 ・ 基 端 側 の ふ る	正 面 ・ 基 端 側 ・ 片 側 の ふ る	略 合 成 面			
	正 面 ・ 正 面 と 同 様 部	周 縁 部	部	の み	正 面 ・ 正 面 と 同 様 部	の み	正 面 ・ 正 面 と 同 様 部	の み	正 面 ・ 正 面 と 同 様 部	の み	正 面 ・ 正 面 と 同 様 部	正 面 ・ 正 面 と 同 様 部			
A 1 期	11	1					1	1					2	16	
			12				2								
A 2 期	17	1			2	1	2						2	25	
			18				5								
A 3 期	47	1			2	4	2	1	1				5	2	66
			48				11								
A 4 期													1	1	
全 期	75	2	1		4	4	4	4	1	1			10	2	108
		76			18										
B 1 期	2			1										1	4
			2				1								
B 2 期	20	2			3	1	1							1	27
			22				4								
B 3 期	88	1	1	1	1	4	2	5	2				14	2	121
			92				13								
B 4 期	13				1								4		18
			13				1								
B 小計	123	3	1	1	1	8	3	5	3				19	3	170
			129				19								
C 期				1			5							1	7
				1			5								
D 期				1	1	1				13	9	7	1	5	37
				2						35					
不分	1					1							2		4
				1			1								
合計	199	5	4	1	1	1	12	13	9	7	1	1	32	5	326
				211			43			35					

このように剝片を素材とする打製石斧では、自然面を残すものが多いこと、その自然面が平坦または緩やかな曲面をなすこと、さらに打製石斧の出土が多いにもかかわらずその残核が見られないことから、素材となる原石は扁平礫と考えられる。つまり、板状に剥離しやすい扁平礫を2分割または3分割し、横長剝片を得たと推定される。この技法は、時期はやや下るが縄文時代中期後葉の遺跡である長野県「曾利遺跡」(小林 1978)の打製石斧の素材獲得方法に近似する。

遺存状態 第29表参照。破損品・破片の262点を対象とした¹⁾。第61図のように遺存部分と破損の仕方の基準を設定し、観察表に記入した。

破損部分については、基端側で破損したもの(AA')、ほぼ中央部で破損したもの(BB')、刃部側で破損したもの(CC')の数に大きな差が認められず、破損しやすい部分の片寄りは見い出

1)接合完形品も破損品であるが、分析には含めていない。



第61図

打製石斧遺存部分と破損の仕方

第29表 打製石斧遺存部分と破損の仕方

遺存部分・折れ方	個数	小計	遺存部分・折れ方	個数	小計	小計
A 1	18	A	A' 1	14	A'	
A 2	20	45	A' 2	10	34	A'A'
A 3	7		A' 3	10		79
B 1	13	B	B' 1	14	B'	
B 2	17	37	B' 2	8	34	B'B'
B 3	7		B' 3	12		71
C 1	14	C	C' 1	6	C'	
C 2	23	63	C' 2	8	20	C'C'
C 3	26		C' 3	6		83
D	10	—	D'	13	—	
E	3	—				
不明	3	—				
破損品・破片数 262 点						

存するものもかなり存在することは、集落内での打製石斧の頻繁な使用も推測される。

破損の仕方(折れ方)は、打製石斧の長軸方向に対して横方向に折れたもの 79 点、斜め方向に折れたもの 86 点、複雑に折れたもの 68 点、縦方向に折れたもの 23 点を数え、横方向や斜め方向に折れたものが多い。

刃部平面形・断面形 第30・31表参照。完形品・略完形品の 326 点を対象とした。

刃部平面形については、使用の結果による変形も考えられるが、現状の平面形から大まかに円刃・直刃・扁刃¹⁾の 3 つに分け、観察表に記入した。A 類・B 類にはほぼ同じような傾向が見られ、円刃が多く A 類 72 点 (67%)、B 類 114 点 (66%) を数える。D 類は円刃が 32 点 (86%)

第30表 打製石斧刃部平面形 第31表 打製石斧刃部断面形

平面形 分類	断面形 分類					合計
	円刃	直刃	扁刃	不明	合計	
A 1 類	12	2	2		16	A 1 類
A 2 類	11	4	10		25	A 2 類
A 3 類	48	11	7		66	A 3 類
A 4 類	1				1	A 4 類
A 横小計	72	17	19		108	A 横小計
B 1 類	3		1		4	B 1 類
B 2 類	14	1	11	1	27	B 2 類
B 3 類	79	20	22		121	B 3 類
B 4 類	18				18	B 4 類
B 横小計	114	21	34	1	170	B 横小計
C 類	5	2			7	C 類
D 類	32	5			37	D 類
分類不可	2		1	1	4	分類不可
合計	220	43	61	2	326	合計

せない。また、刃部から基端にかけて縦方向に破損したもの (DD') 23 点 (9%) を数える。

遺存部分を見ると、基端側を残すものの (A・B・C・D) 155 点 (59%)、刃部側を残すもの (A'・B'・C'・D') 101 点 (39%) である。このように基端側が多く認められるのは、打製石斧が集落外で使用され破損した時、基部の着柄された柄だけを集落に持ち帰るためと考えられる。しかし、刃部側が遺

1) 扁刃というのは「長軸に関して……非対称でその刃が一方へ片寄っている」(佐原 1977) ものである。さらに扁刃は、刃部が直線状のもの(扁直刃)、刃部が円弧状のもの(扁圓刃)に分かれるが、観察表では区分せず扁刃とした。

もあり、比率ではA類・B類よりさらに高くなる。これに対しC類は分類基準に刃部形状を含めていたため、当然のことながら直刃である¹⁾。

一方、刃部断面形については、平面形と同様に現状の形を両刃と片刃に分け、観察表に記入した。A類・B類・D類は、両刃が多く、A類77%、B類72%、D類70%を占める。逆にC類では分類基準に刃部断面形を含めたため、全て片刃である。

使用痕 第32表参照。完形品・略完形品の326点のうち、154点(47%)に使用痕が認められる。使用痕は磨耗痕が多く、線条痕は全て石器の長軸に対し縦方向のものである。分類別ではA類・B類において多く認められ、C類・D類には少ない。これは、C類の石質が硬質で緻密なため使用痕が残りにくいためであり、またD類は自然面が多く使用痕との区別が困難であったためである。

一方、刃部の使用痕とは別に着柄部と考えられる基部に磨耗痕のあるものが、4点(652+661・670)認められたことは注目される。

つぶし 第33表参照。側縁の稜線が潰れているつぶしが、完形品・略完形品326点のうち123点(38%)に認められた。つぶしは片側縁だけにあるものと両側縁にあるものが存在するが数に片寄りはない。石質が軟質のためということもあるが、どちらも着柄を意識した製作時の加工と考えられる。

その他 141は刃部欠損後、再び二次加工を加え、刃部を作出しようとしたものと考えられる。当然のことながら破損品でも使えるものは、このように修理し再生品として利用したと推測される。202は正面に凹状の痕跡が認められ、磨石類からの転用品と考えることができる。322は未製品であるが、他の打製石斧に比べ特異な形状を示す。長さの割りに幅が狭く、厚みがあり、刃部は一部を残し完成していないが円刃で片刃になると思われる。石材は硬質の緑色凝灰岩を用いている。縄文時代早期の遺跡である「小瀬が沢洞窟」(中村1960)から出土した打製石斧に形状が近似することから、この石器もほぼ同時期と推測されよう。

第32表 打製石斧使用痕

部位 分類	磨耗痕	つぶれ	磨耗・つぶれ	磨耗・直刃	磨耗・つぶれ か・被生産	合計
A 1 類	4		1			5
A 2 類	9	1	2	1		13
A 3 類	23		6	2		31
A 4 類				1		1
A類小計	36	1	9	4		50
B 1 類	2			1		3
B 2 類	7		5	2	1	15
B 3 類	36	3	12	9		60
B 4 類	6	1	2	1		10
B類小計	51	4	19	13	1	88
C 類				1		1
D 類	8	1	1	2		12
分類不可	1		1	1		3
合 計	96	6	30	21	1	154

第33表
打製石斧つぶし

部位 分類	片側縁	両側縁	合計
A 類	19	20	39
B 類	36	32	68
C 類	1	2	3
D 類	6	7	13
合 計	62	61	123

1)直刃が2点存在するが、いずれも刃部が直線状の扁直刃である。

8) 磨製石斧 (47・63・143~146・164・206~208・247・248・261・262・278・323~325・422~425・682~690 図版 378)

総数 63 点を数え、全石器の 2.0% を占める。この他未製品と考えられるものが 5 点出土している。

分類 まず形状と製作技術により、いわゆる定角式磨製石斧・擦切磨製石斧・乳棒状磨製石斧¹⁾に近似するもの²⁾の 3 つに分けた。

A類 定角式磨製石斧。A類はさらに大きさで 4 つに細分される。

A 1 類 長さが 11 cm 以上のもの。(261・422・682~685 図版 378)

A 2 類 長さが 4 cm 以上 11 cm 未満、幅が 2 cm 以上のもの。(47・143・164・206・207・247・323・423・686~689 図版 378)

A 3 類 長さが 4 cm 以上、幅が 2 cm 未満のもの。(63 図版 378)

A 4 類 長さが 4 cm 未満、幅が 2 cm 未満のもの。(248・324・690 図版 378)

B類 擦切磨製石斧。(144 図版 378)

C類 乳棒状磨製石斧に近似するもの。(425 図版 378)

A類(定角式磨製石斧)と B類(擦切磨製石斧)は、形状と製作技術による分類のため、A類の中には、磨切痕は残っていないが擦切技術により製作されたものが含まれている可能性がある。しかし、現状での区別は不可能なことから、明らかに擦切技術の痕跡を残すものだけを B類とした。また A 4 類は一般的に小型磨製石斧と呼ばれている石斧である。

分類別出土数と出土分布状況 第 34 表・第 62 図参照。63 点のうち、遺構内より 27 点(43%)、遺構外より 36 点(57%) 出土している。遺構内出土のものは住居跡が多い。分類別では A類が 46 点(73%) と多く、分類不可もその大半は A類の

破損品・破片と考えられることから、磨製石斧のはほとんどは定角式磨製石斧である。A類の中では大型または中型の A 1 類・A 2 類が多く、小型の A 3 類・A 4 類は少ない。明らかに擦切磨製石斧とわかる B類や乳棒状磨製石斧に近似する C類は、わずか 1 点しか出土せず、非常に少ないといえる。

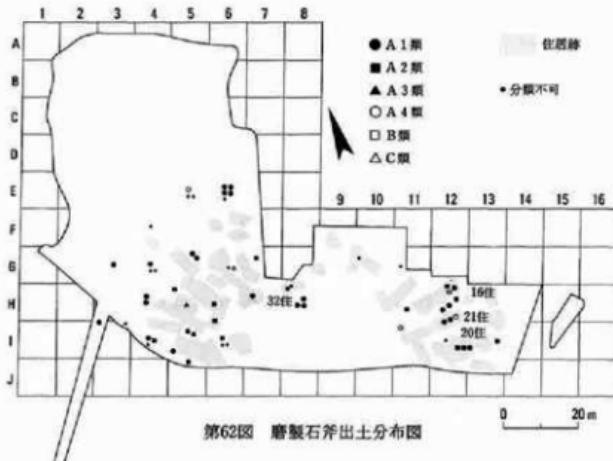
個々の遺構では 16 号住居跡より 4 点、20 号住居

第 34 表 磨製石斧分類別出土数

遺構 分類	住居跡	ツラヌコ 灰土塊	土坑	その他の 部	遺構外	合計
A 1 類	8			1	18	24
A 2 類	7	1		1	9	16
A 3 類	1	.				1
A 4 類	1	1			1	3
A類小計	16	2		2	28	46
B 類	1					1
C 類				1		1
分類不可	2	2	1	2	8	15
合計	17	4	1	5	36	63

1) 定角式磨製石斧は「両側縁および頭部の研磨されたもので、石斧主面とのあいだに棱をつくり断面は隅丸長方形となる」もの、擦切磨製石斧は「板状の石材に一方あるいは裏裏から偏平な砥石状工具で V 字状の溝を切り込み、薄くなったところを折り取り、その後これを研磨する擦切技術によって製作された石斧である」もの。

2) 出土数が 1 点しかなくしかも破損品であるため、乳棒状石斧と考えられるが、分類では一応近似するものとした。



跡より 3 点、21 号住居跡より 3 点、32 号
住居跡より 2 点出土している。

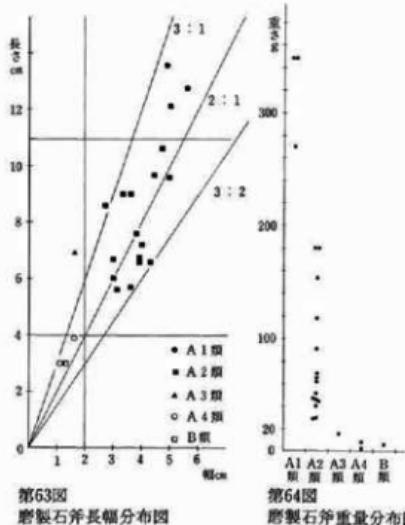
遺跡全体での出土分布状況では、G～I
～4～8 区や H・I-12 区の遺構集中地
区、土石流跡の E-5・6 区からの出土
が多い。なお分類別に片寄った出土分布
状況は認められない。

長さ・幅・重さ 第 63・64 図参照。完
形品・略完形品の 22 点を対象とした。

完形品・略完形品は B 類の 1 点を除き、
全て A 類である。A 類内の細分類は大き
さで分けたため、当然のことながら分布
は片寄る。長幅比においては、A 2 類の
やや小型に近いものは 3:2～2:1 に
分布する以外、大半は 2:1～3:1 に
分布する。

一方、重さも長さ・幅と同様に分布は
片寄る。

大きさと重さの全体的傾向について



第35表 磨製石斧石材表

石材 分類	蛇紋岩	閃長岩	砂岩	板灰岩	安山岩	はんれい岩 鉄鉻片	D'すい	頁岩	綠色岩	硬砂岩	岩片	不明	合計
A 1 類	12	5	2	2	1	2					1	3	24
A 2 類	9	1		1	1		1	1				3	18
A 3 類	1												1
A 4 類	2							1					3
A種小計	24	6	2	3	2	2	1	1	1	1	1	3	46
B 類	1												1
C 類												1	1
分類不可	9		2				1			1	1	1	15
合計	34	6	4	3	2	2	2	1	1	1	1	5	63

第36表 磨製石斧遺存部分と破損の仕方

種類 分類	A 1	A 2	A 3	A' 1	A' 2	A' 3	B 1	B 2	B' 1	B' 2	C 1	C 3	C' 3	D'	E	不明	合計
A 類				1	1	2	2	2	1	2	6	4	2		2	3	26
B 類																	
C 類										1							1
分類不可	1	1	1								3	1	2	1	4	14	
合計	1	1	1	1	1	2	2	1	3	3	6	5	4	1	2	7	41

第37表 磨製石斧使用痕

使用痕 分類	磨耗痕	磨耗痕・縫隙	磨耗痕・つぶれ	磨耗痕・縫隙	磨耗痕・縫隙	磨耗痕・縫隙・つぶれ	縫隙・光沢痕	合計
A 1 類	1	1		1			1	4
A 2 類	1	4			2		1	8
A 3 類		1						1
A 4 類	1	1						2
C 類	1							1
分類不可	3					1		4
合計	7	7	1	2	2	1	20	

は、A 1 類において破損品・破片が多いため、明確でない。しかし、個々の石器については、小型のものから大型なものまで、また軽いものから重いものまで様々な石斧が存在する。

石材 第35表参照。63点のうち、蛇紋岩が多く用いられ34点(54%)を数える。これ以外は、少數ずつ多種類の石材を使用している。これは、蛇紋岩以外で磨製石斧に適する石材が少なかったことを意味すると考えられる。

蛇紋岩は県内では糸魚川地方と南魚沼郡の三国山脈で产出(茅原1977)する。しかし、三国山脈の蛇紋岩は産地も限られ色調も本遺跡出土のものとは異なる。従って、蛇紋岩製の磨製石斧は糸魚川地方から搬入されたものと推定される。しかも、蛇紋岩の原石や剝片が無いことから、そのほとんどが半製品や製品として持ち込まれたと思われる。

遺存状態 第36表参照。63点のうち、破損品・破片が他器種に比べ著しく多く、41点(65%)を数え、使用の頻度が窺える。遺存部分と破損の仕方の観察は、打製石斧と同じである。

破損部分では、基端側で折れたもの(AA') 7点(17%)、ほぼ中央部で折れたもの(BB') 9点(22%)、刃部側で折れたもの(CC') 15点で、刃部に近づくほど破損しやすいことがわかる。遺存部分では、基端側が遺存するもの(A・B・C) 17点(41%)、刃部側が遺存している

もの (A'・B'・C'・D') 15 点 (37%) とあまり差は見られない。破損品同士がほとんど接合しないにもかかわらず、刃部側の破損品がかなり遺存することは、集落外で使用され破損しても、集落に持ち帰ったためと推定される。磨製石斧の再生品や転用品が少なからず認められることからこのことが裏付けられると考えられる。それは蛇紋岩に見られるように石材が貴重なこと、製作に多くの労力を費やすこととも関係があると思われる。

一方、破損の仕方については、長軸に対し横方向に折れたもの 13 点 (31%)、斜め方向に折れたもの 6 点 (15%)、複雑に折れたもの 12 点 (29%) である。多くの場合は、折れ面は通常の剥片石器のようにきれいではなく、ザラザラした面を呈している。磨製石斧の石材には他石器に比べ、堅く粘り強い石質のものが選ばれたためと考えられる。

刃部平面形・断面形 刃部形状を判別できるものは、平面形が 34 点、断面形が 44 点である。

平面形では円刃のものが 26 点 (76%)、直刃状のものが 7 点 (21%)、扁刃のものが 1 点 (3%) である。大型品ほど円刃になる傾向があり、A 1 類は全て円刃である。

断面形では片刃のものが認められず、全て両刃のものである。

使用痕 第 37 表参照。総数 63 点のうち、20 点 (32%) に使用痕が認められた¹⁾。使用痕の種類として磨耗痕と線条痕が多く、線条痕は全て長軸に対し縱方向のものである。324 は破損面の剥離の様子から、櫻あるいは鑿のような使われ方をした可能性が考えられる。

その他 262・278 などのように破損した後、未完成ながら再研磨が施されているものがある。これらはいずれも蛇紋岩であり、貴重な石材であったと推定される。247 はひすいを石材とし、破損や使用痕が認められることから実際に使用されたものと考えられる。143 は正面に使用痕より新しい溝が施され、再利用として 2 本の擦切石斧を製作しようとした意図が窺われ注目される。

1) 破損や刃部の剥離も使用によると考えられるが、使用痕の中には含めていない。

9) 碓器類 (30・147・257・258・426~429・691~699 図版 378~379)

穂器とは旧石器時代においてチャッパーまたはチャッピングツールと呼称され「その一端に一方向からまたは両面から連続的に加えられた剝離によって作られた石器であり、素材は穂でその表面に原面を残している。」(赤澤・小田・山中 1980) ものである。しかし、本遺跡の石器は、これらの穂器とは時代が異なり、また素材も大型で厚手の剝片も含められることから名称を穂器類とした。従って、穂器類に分類した石器は、穂または大型で厚手の剝片の一部に片面からあるいは両面から、連続的に二次加工を加え刃部を作り出した石器である。打製石斧D類(素材が扁平砾)との区別は、穂器類は打製石斧のように定形的でなく不定形であること、また不定形石器や両面加工石器との区別は、穂器の素材が大型で厚手なことから明確に分けられる。

総数 44 点出土し、全石器の 1.4% を占める。しかし、完形品と破損品・未製品との区別が困難なため、全て完形品扱いとして分析の対象とした。

分類 第 38 表参照。まず素材が穂か剝片かで 2 つに分けた。

A類 穂を素材とするもの。A類はさらに二次加工により、2 つに細分される。

A 1 類 片面加工(片刃)のもの。(258・426・691・692 図版 378)

A 2 類 両面加工(両刃)のもの。(30・693 図版 378)

B類 大型で厚手の剝片を素材とするもの。A類と同様、B類も二次加工により、2 つに細分される。

B 1 類 片面加工(片刃)のもの。(147・427・694・695 図版 379)

B 2 類 両面加工(両刃)のもの。(257・428・429・696~699 図版 379)

分類別出土数と出土分布状況 第 65 図・第 39 表参照。総数 44 点のうち、遺構内より 13 点

第38表 穂器類分類表

素 材	二次加工(刃部形状)	分 類	
A 類 穂	1 類 片面加工(片刃)	A 1 類	
	2 類 両面加工(両刃)	A 2 類	
B 類 大型で厚手の剝片	1 類 片面加工(片刃)	B 1 類	
	2 類 両面加工(両刃)	B 2 類	

(30%)、遺構外より 31 点 (70%) 出土し、遺構内からの出土の比率は他器種に比べかなり低いといえる。また遺構内出土のものを見ても、住居跡からの出土が少なく他器種とは異なった様相を示す。

分類別では B 1 類 (41%) と B 2 類 (34%) が多く、剥片を素材とする B 類が 33 点 (75%) を数える。また片面加工 (片刃) のものが 59% を占め両面加工 (両刃) のものよりやや多いといえる。

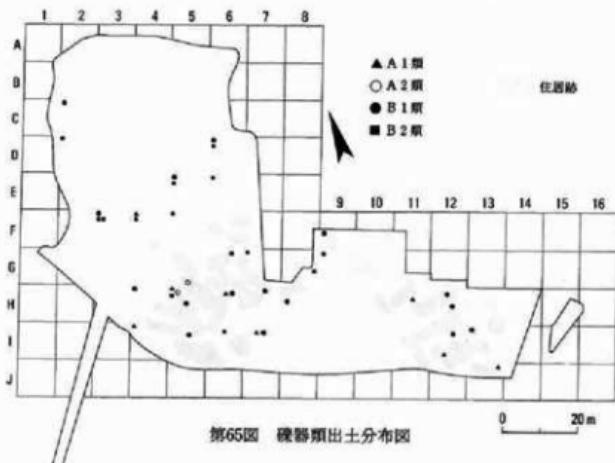
個々の遺構での複数出土は認められない。遺跡全体での出土分布状況では、H・I-5~7 区の遺構集中地区や土石流跡を含む D~F-3~6 区に帶状にやや多く出土している。しかし、H・I-12 区の遺構集中地区からの出土が少なく、他器種と分布が若干異なる。

長さと幅と重さ 第 66・67 図参照。長さと幅においては分類ごとに分布の片寄りは認められない。全体的に見て長さ 6~11 cm・幅 7~11 cm を中心に分布する。長幅比は 1:1 を中心に分布し、2:1~1:2 の範囲に全て含まれる。

一方、重さは比較的資料数の多い B 1 類が 200~250 g、B 2 類が 140~280 g にかけてやや多く分布する程度である。

第39表 碓器類分類別出土数

器種 分類	住居跡	フタスロその他 の他の 出土地	遺構外	合計
A 1 類	1	1	1	3
A 2 類	1		2	3
B 1 類	1	1	2	4
B 2 類	1	1	3	5
合計	4	3	6	14

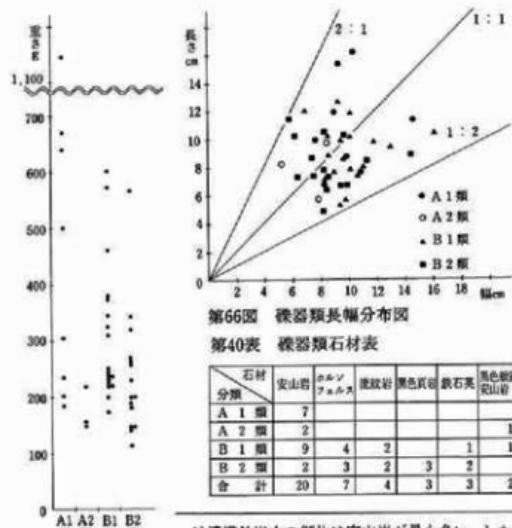


石材 第40表参照。多種類の石材を使用し、その多くは比較的硬質で緻密な石材である。なかでも安山岩(45%)とホルンフェルス(16%)が多く用いられ、安山岩の比率は石皿・磨石類に次いで高く注目される。本遺跡では安山岩は礫石器に多用され、剥片石器ではあまり用いられない¹⁾。礫器類においてもA類(砾素材)には多く、B類(剥片素材)ではそれほど多くない傾向がある。

素材 分類基準に素材を含めたため、当然のことながらA類は礫、B類は剥片を素材とする。剥片素材のものは、風化や二次加工のため縦長・横長剥片の区別ができることが多い。しかし、自然面を残すものが多く認められ、B類では82%の石器に自然面が認められる。これは、B類が大型で厚手の剥片を素材としているからと考えられる。

その他 安山岩は風化が激しく、使用痕の観察が困難にもかかわらず、428のように敲打状のつぶれが顕著に認められるものがある。また427は正面にごく一部ではあるが黒色付着物が認められた。しかし、成分は不明である。

本遺跡では全体の石器からすればわずかな比率であるが、比較的まとまった量の礫器類が出土した。類似する資料として、時期的にも比較的近い神奈川県「尾崎遺跡」の礫器II類・III類(鈴木1977)が存在する。



第66図 磋器類長幅分布図

第40表 磋器類石材表

石材 分類	安山岩	ホルン フェルス	流紋岩	黑色頁岩	鐵石英	白色玻璃 安山岩	真岩	花崗岩	砂岩	熱板岩	地晶片岩	合計
A 1 類	7					1						8
A 2 類	2											2
B 1 類	9	4	2		1	1				1	18	
B 2 類	2	3	2	3	2		1	1	1	1	15	
合計	20	7	4	3	3	2	1	1	1	1	44	

第67図
礮器類重量分布図

1)遺跡外出土の剥片は安山岩が最も多い。しかし、風化が激しく石器として認定できないという問題があり、必ずしも剥片石器に安山岩が少ないかどうか検討する余地がある。詳細は剥片類の分析の項を参照。

- 10) 磨石類 (3~6・31~34・48~49・52~56・64~72・73~77・148~152・162~209~212・
249~251・255~259・265~268・273~274・280~283・326~340・366~368・
430~447・700~726 図版 379・380)

從来より磨石・凹石・敲打石として呼称されてきた器種は、石器の表面に残された磨痕・凹痕・敲打痕の様子により抽出された石器である。しかし、これらの痕跡が別々の石器に一つの痕跡だけ残されていれば、器種分類上の問題は少ない。ところが、実際の石器では一つの石器に複数の種類の痕跡が多く認められる。また、痕跡の定義のあいまいさから必ずしも十分な分類でなく、特に出土数が多くなると磨石・凹石・敲打石と明確に3分類できないことが多い。

そこで、まず石器の表面に残された痕跡の定義¹⁾を次のように定め、これらの痕跡が認められるものを抽出した。

磨痕 正裏面または側縁が磨耗し、ある程度の面積を持つもの。磨耗面は石質等により滑らかなものからザラザラしたものまで、比較的に平面的なものから曲面的なものまである。

凹痕 正裏面に残された敲打状の痕跡である。痕跡はあまり広くなく、しかも正裏面の中央部に存在するものが多い。いずれも凹凸があり、特に敲打状の痕跡が激しい場合や1点に集中する場合は明確な凹状の痕跡になる。逆に敲打状の痕跡が弱い場合や広い範囲にわたる場合は浅い凹状の痕跡になる。

敲打痕 側縁や端部に残された敲打状の痕跡である。痕跡は比較的広い範囲のものも存在するが一般的に狭い範囲のものが多い。痕跡はいずれも凹凸である。敲打状の痕跡が激しくても、側縁や端部という狭い場所に存在することから、凹痕のように明確な凹状の痕跡を残すことはまれであり、多くは凹凸が大きくなる。逆に敲打状の痕跡が弱い場合は小さな凹凸状の痕跡になる。

凹痕と敲打痕はどちらも敲打による痕跡と考えられるため、痕跡の認められる部位により凹痕と敲打痕を区別した。

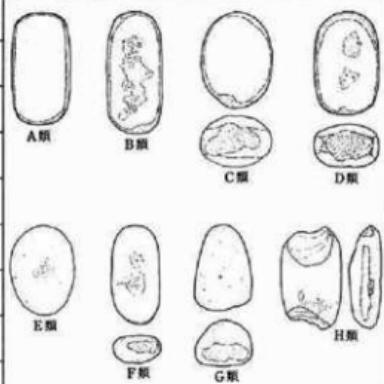
このような痕跡が認められる石器で、礫を素材とし、砥石・石皿・台石以外の石器を磨石類として取り扱った。総数642点出土し、不定形石器に次いで多い数である。全石器の20.2%を占める。

分類 第41表参照。石器の表面に残されている磨痕・凹痕・敲打痕の組み合わせにより7つに分類し、さらに少数ながら両端に抉りの入った磨石が出土していることから、仮に「抉入磨石」として1分類加えた。

1) 痕跡の定義・磨石類の分類については『聖山』(後藤1979)によるところが多い。

第41表 磨石類分類表

使用痕による組み合わせ	分類						
磨痕	A類						
磨痕+凹痕	B類						
磨痕+敲打痕	C類						
磨痕+凹痕+敲打痕	D類						
凹痕	E類						
凹痕+敲打痕	F類						
敲打痕	G類						
抉入磨石	H類						



A類 磨痕だけのもの。(3・72・148・209・

273・280・326・328・430・434・700・704

図版 379)

B類 磨痕と凹痕が認められるもの。(31・

48・49・149・151・250・281・329・332・

366・435・437・705・708 図版 379)

C類 磨痕と敲打痕が認められるもの。

(152・333・334・438・709・711 図版

379)

D類 磨痕と凹痕と敲打痕が認められるも

の。(162・210・249・251・255・265・274・335・338・367・439・441・712・715 図版 379)

E類 凹痕だけのもの。(52・64・211・339・716・719 図版 379)

F類 凹痕と敲打痕が認められるもの。(4・32・33・73・77・212・259・282・340・442・446・

720・721 図版 380)

G類 敲打痕だけのもの。(5・6・34・268・283・447・723・725 図版 380)

H類 両端に抉りのあるいわゆる「抉入磨石」。(56・368・726 図版 380)

第42表 磨石類分類別出土数

完形品・略完形品								
分類	住居跡	柱穴跡	フラスト 灰土塊	土 块	焼 土	その他の ビザ	遺物外 合計	
A類	19	2	9	3	1	18	49	101
B類	31	1	17	3		16	64	132
C類	2		5			3	12	22
D類	18	1	8	3		11	41	82
E類	18		10	2		8	31	69
F類	20	3	5	3		10	31	72
G類	10	2	1	1		4	25	43
H類	1						1	3
合計	119	9	55	16	1	70	254	524
(破壊品・破片)								
分類	住居跡	柱穴跡	フラスト 灰土塊	土 块	焼 土	その他の ビザ	遺物外 合計	
破壊品	17	1	12	3	10	60	103	
破片	4				3	8	15	
合計	21	1	12	3	13	68	118	



分類別出土数と出土分布状況 第42表・第68・69図参照。総数642点のうち、完形品・略完形品524点、破損品・破片118点である。完形品・略完形品と破損品・破片の出土分布状況や遺構別出土数の比率は、ほぼ一致するため、分析の対象は完形品・略完形品とした¹⁾。

524点のうち、遺構内より270点(52%)、遺構外より254点(48%)とはほぼ半々の出土であ

1)破損品・破片でも分類可能なものは観察表に分類記号を記入した。しかし、分類別出土数に加えても比率はほとんど変わらないこと、また、分類別出土数に加えると集計分析が繁雑になることから、完形品・略完形品だけを分析の対象に限った理由もある。

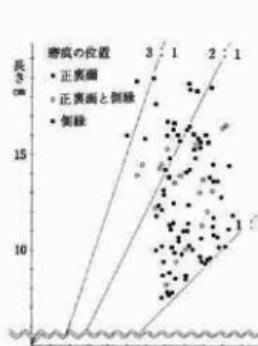
る。遺構内からの出土のものは住居跡（44%）が最も多い。しかし、フラスコ状土坑（20%）やその他のピット（26%）からの出土もやや多く認められる。

分類別出土数では、B類が132点（25%）、A類が101点（19%）を数えやや多いといえる。しかし、これ以外の石器もかなり存在する。使用痕の種類が単独に認められるA類・E類・G類は合わせて213点（41%）、複数認められるB類・C類・D類・F類は合わせて308点（59%）を数え、本遺跡出土の磨石類は異なった種類の痕跡が組み合わさったものが多いといえる。また使用痕別に集計すると、石器のいずれかに磨痕が存在するもの（A・B・C・D類）は337点（64%）、凹痕の存在するもの（B・D・E・F類）は355点（68%）、敲打痕の存在するもの（C・D・F・G類）は219点（42%）を数える。つまり、磨石類の約2/3は磨痕と凹痕が認められ、約半数近くは敲打痕が認められるといえる。

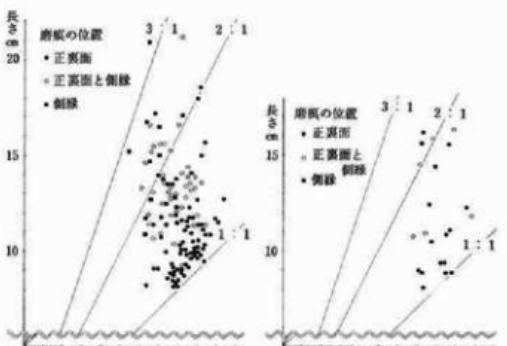
個々の遺構では、1号住居跡4点、3号住居跡23点、4号住居跡4点、5号住居跡3点、7号住居跡9点、9号住居跡3点、11号住居跡9点、13号住居跡7点、16号住居跡19点、20号住居跡14点、21号住居跡4点、23号住居跡11点、30号住居跡4点、36号住居跡5点、43号住居跡3点、2号柱穴列10点、7号フラスコ状土坑5点、9号フラスコ状土坑3点、11号フラスコ状土坑7点、16号フラスコ状土坑3点、19号フラスコ状土坑4点、22号フラスコ状土坑5点、31号フラスコ状土坑5点、38号フラスコ状土坑5点、41号フラスコ状土坑3点、55号フラスコ状土坑3点、6号土坑3点、28号土坑3点、55号土坑3点、G-6区ピット32より5点、I-12区ピット151・153よりそれぞれ3点と出土している。

遺跡全体での出土分布状況では、G～I-4～13区の遺構集中地区、土石流跡のE-5・6区、遺構集中地区の外側にあたる4列区より西側からの出土が多い。分類別の出土分布状況では片寄った分布は認められず、ほぼ同様の分布を示す。

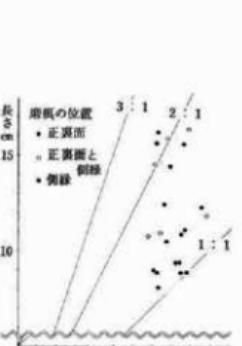
長さと幅 第70～76図参照。分類ごとに長幅分布は若干の違いを見せる。その中でも使用痕の種類が単独に認められるA類（磨痕）・E類（凹痕）・G類（敲打痕）は、比較的大きな違いが見られ、A類は長さ8.0～16.5cm・幅6.5～9.5cm、E類は長さ8.5～11.5cm・幅6.5～9.5cmを中心に分布し、G類は分布の中心がややはっきりしないが長さ8.5～17.5cm・幅4.0～9.0cmにかけてやや多く分布する。これを平均値から見ると、A類は長さ12.8cm・幅8.0cm、E類は長さ10.8cm・幅8.0cm、G類は長さ12.8cm・幅6.3cmを示す。このように長さにおいてはA類とG類がE類より長く、幅においてはA類とE類がG類より広い傾向にある。長幅比を見ると、A類は1：1～3：1にはほとんど含まれ、1：1～2：1にかけて多い。E類は1：1～2：1にはほとんど含まれ、1：1～1.5：1にかけて多い。G類は1：1～3：1以上のものも存在し、2：1～3：1前後のものがやや多い。平均値から見るとA類は1.6：1、E類は1.51：1、G類は2.03：1を示す。これを平面形に例えると、E類は円形に近く、G類は長梢円形や棒状に近い形、A類は両者の中間の形といえる。使用痕が複数組み合わさったB類はA



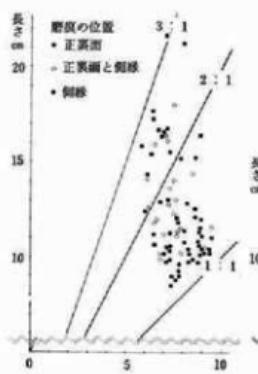
第70図
磨石類A類長幅分布図



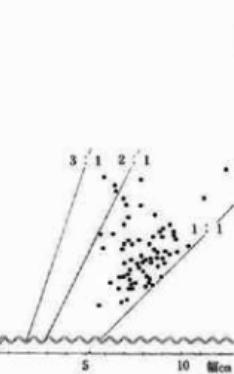
第71図
磨石標 B類長幅分布図



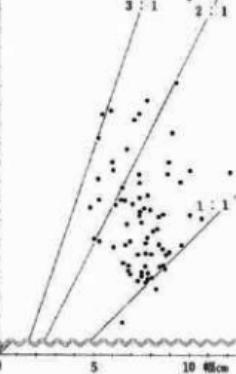
第72図
磨石類C類長幅分布図



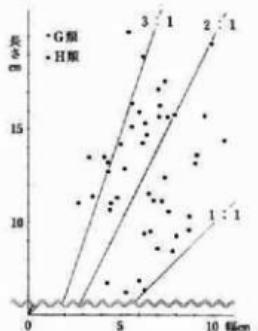
第73圖
磨石類D類長幅分布圖



第74図
磨石類E類長幅分布図



第75図
磨石類 F類長幅分布図



第76圖
磨石頭G·H翻長幅分布圖

類とE類の、F類はE類とG類の、D類はA類とE類とG類の中間のような分布を示しているといえる。C類は資料が少なく明確でないが、A類とG類の分布範囲に含まれる。

一方、使用痕の位置と長幅分布の関係について、磨痕を例にとって見ると、磨痕の位置が正裏面に認められるもの、側縁に認められるもの、正裏面と側縁の両方に認められるものでは違いが見られる。最も顕著なA類では、平均値で正裏面に認められるものが長さ 10.9 cm・幅 8.2 cm・長幅比 1.33:

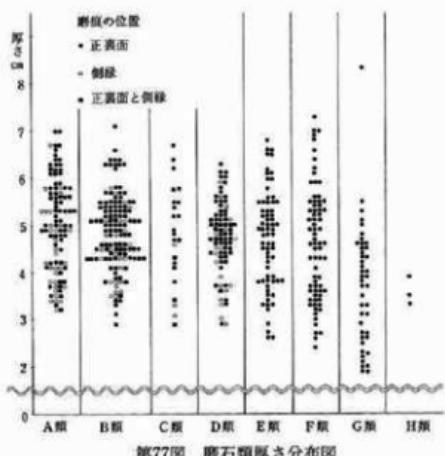
1.98 : 1、正裏面と側縁の両方に認められるものが長さ 13.1 cm・幅 7.8 cm・長幅比 1.68 : 1 の数値を示し、側縁に認められるものは長く、正裏面に認められるものは短いといえる。両方認められるものはその中間の長さといえる。つまり平面形に例えると側縁に認められるものは長楕円形、正裏面に認められるものは円形に近い形であり、両方に認められるものはその中間の形といえる。B類・C類・D類も磨痕が認められる石器はA類ほど明確でないが、ほぼ同様の分布傾向といえる。A類のように明確でないのは、B類・C類・D類は磨痕のほかに凹痕・敲打痕が組み合わさった石器であるためと考えられる。

厚さ 第 77 図参照。A類から F類までは厚さにおいて差は認められず、3.0~7.0 cm にはほとんど含まれるが、G類は 2.0~5.0 cm に大半が含まれ、分布は異なる。平均値で見ても、A類 5.0 cm・B類 4.9 cm・C類 4.9 cm・D類 4.7 cm・E類 4.7 cm・F類 4.6 cm・G類 3.7 cm という結果であり、G類とそれ以外では差が認められる。

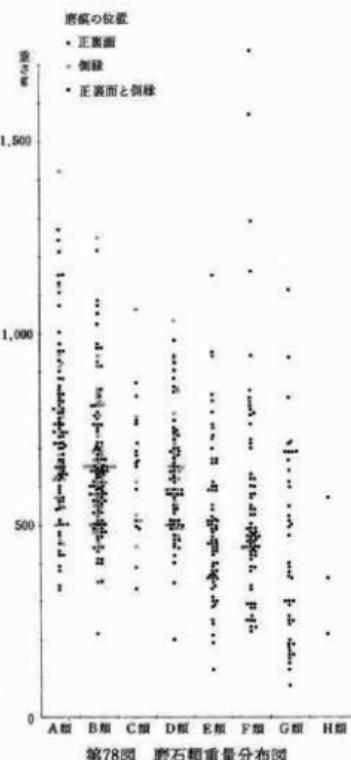
一方、使用痕の位置と長幅分布の関係について、磨痕を例にとって見ると磨痕の位置が正裏面に認められるものは厚く、側縁に認められるものは薄い傾向があり、正裏面と側縁の両方に認められるものはその中間の厚さといえる。最も顕著な A類を見ると、平均値で正裏面に認められるものは 5.5 cm、側縁に認められるものは 4.4 cm、両方に認められるものは 4.8 cm の数値を示している。B類・C類・D類についても、A類ほど明確でないがほぼ同様である。あまり明確でないのは B類・C類・D類には磨痕のほかに凹痕や敲打痕が組み合わされているためと考えられる。

重さ 第 78 図参照。長さ・幅・厚さの分析から、重さは、分類ごとに違いが見られる。その中でも使用痕の種類が単独に見られる A類（磨痕）・E類（凹痕）・G類（敲打痕）において大きな違いが見られ、A類は 450~950 g、E類は 300~700 g、G類は 100~700 g の範囲にかけて多く分布する。平均値で見ると A類が 726 g、E類が 501 g、G類が 427 g の数値を示す。つまり、A類が重く、G類が軽い。E類が両者の中間の重さといえる。使用痕の種類が複数組み合わさった B類は A類と E類の間に分布し、平均値は 640 g である。C類は A類と G類の間に分布し、平均値は 637 g である。D類は A類と E類と G類の中間の分布を示し、平均値は 627 g である。ところが、F類は E類と G類の間に分布せず、平均値は 548 g である。しかし、分布と平均値は E類と比べ特に異なる結果とはいえない。

一方、使用痕の位置と重量分布の関係について、磨痕を例にすると、磨痕の位置が正裏面に認められるものは軽く、側縁に認められるものは重い傾向がある。両方認められるものはその中間の重さといえる。比較的差の見られる A類において、平均値では正裏面に認められるものは 688 g、側縁に認められるものは 788 g、両方に認められるものは 719 g の数値を示す。これは、幅・厚さでは差があまりないが、長さでは側縁に認められるものが長く、正裏面に認められるものが短いということが重さに反映しているものと考えられる。B類・C類・D類にお



第77図 磨石類厚さ分布図



第78図 磨石類重量分布図

いても、A類ほど明確でないがほぼ同様な傾向が認められる。

以上、長さ・幅・厚さ・重さの観察の結果、使用痕の位置で違いが認められた。なぜ違いが認められるのか使用痕が単独に存在するA類(磨痕)、E類(凹痕)、G類(敲打痕)の結果から推定してみたい。長さと幅の分布から、E類は比較的円形に近いものが多い。これはE類が正裏面のほぼ中央部分を使用すること、使用方法は垂直運動が主体であったと考えられることから、石器の片面全体を包み込むように持ち、使用したと推定される。これにより比較的円形に近い形のものが多いと考えられる。G類は長さが長く、幅が狭いものがやや多く、側縁や端部を使用したものであること、使用面が平面的でないことから必ずしも垂直運動だけではないと推測される。このことから長さが長く、幅の狭い形、つまり棒状や長楕円状のものが多いと考えられる。E類・G類は握るように持つと、持ちやすい大きさの石器である。これに対しA類はE類・G類のように持つという行為は考えられず、押さえつけながら動かすものと考えられる石器である。従って側縁に磨痕のあるものは長くなれば使用面が広くなり、作業効率が

良くなると考えられる。また正裏面に磨痕のあるもので比較的円形に近くなるものは、石器の片面全体を包み込むようにし、動かすのに都合のよい形と考えられる。ところで磨痕が側縁にあるものと正裏面にあるものでは、使用方法の違いが考えられる。それは前者の使用面が平面的なものが多いのに対して後者は曲面的なものが多いことから推定される。

厚さにおいては、G類が薄く、長さ・幅との関係から細いというより、前述のように握り持つのに都合よい太さと考えられ、A類では正裏面に磨痕のあるものは厚いが、薄いとつかみにくいからと推定される。

重さは、長さと幅・厚さの結果として出てくるものである。A類が最も重いのは、前述のようを持つという行為ではなく、押さえつけながら動かす石器であり、重さも当然重い方が良いと考えられる。これに対し、E類・G類が軽いのは握り持つ行為のためであり、E類がG類よりも重いのは、垂直運動が主体で重さも重要な要素であったためと考えられる。またA類で磨痕が側縁にあるものは重く、正裏面にあるものが軽いのは前述のように使用方法の違いによると考えられる。

これらの磨痕・凹痕・敲打痕が組み合わされた石器は、それぞれの大きさ・形・重さの特徴の範囲に含まれるか、中間の特徴を持つものであることは、B類・C類・D類・F類の各分布図から証明されよう。

一方、各分布図に集中域が見られることは、素材獲得時にある程度、磨石類として使いやすい大きさ・形・重さの選択が行われ、また、各分布図の分布域に幅があり重なるため必ずしも明確でないが、一部の素材（特にA類・E類・G類）においては、さらに用途に合わせた素材の選択が行われたと想定される。

石材 第43表参照。安山岩が451点(70%)と非常に多く用いられ、次いで花崗岩57点(9%)である。この他、砂岩・輝緑岩などが少數ではあるが認められる。これらの石材は、結晶の粒が比較的粗く、表面がざらついた感じの石材で、とくに花崗岩は顕著である。ちなみに安山岩が多用される器種は礫器類(45%)と石皿(47%)である。分類ごとに見ると、H類を除いていずれも50%以上のものが安山岩を用いており、A類(76%)とB類(83%)とE類(82%)が多く、C類(54%)とG類(53%)が少ない。全般的に磨痕・凹痕のある石器は安山岩の使用率が高く、敲打痕のある石器は低くなる傾向がある。

遺存状態 破損品・破片は118点を数え、総数の18%を占める。他器種に比べ、破損の割合は低い。形状からして当然ながら他器種に比べ壊れにくい石器といえる。磨石類は礫を素材とし無加工のものがほとんどであることから、素材獲得段階で完形品とされるため、破損の原因は使用の結果と考えられる。しかし、破損品・破片の中には被熱しているものが28点もあり、完形品・略完形品の2倍の比率である。従って被熱により破損したものもあると推定される。

第43表 磨石類石材表

石材 分類	安山岩	花崗岩	砂岩	凝灰岩	閃長岩	はんれい いわ	粘板岩	護石岩	板岩	礫岩	硬砂岩	頁岩	粉岩	ホルン フェイク	珪岩	石英 はんい いわ	霞けん いわ	アノリ	不明	合計
A 類	77	10	3	4	2	1					1	1				1			101	
B 類	110	2	1	1	1						1	1					1	1	132	
C 類	12	4	1	1		1				1								2	22	
D 類	53	9	3	5	5	2		1	1		1				1				81	
E 類	57	3		1	1	1		2		2		1			1				69	
F 類	50	5	5	3	2	2	2	2	1									3	73	
G 類	23	2	2	1	4	1	5	1				1	1	1				1	43	
H 類	1		1																3	
分類不可	68	10	7	5	4	2	4	5	4	2	1	2		1	1			2	118	
合計	451	57	24	22	19	11	11	9	6	5	4	4	3	3	2	1	1	8	642	

その他 被熱しているものが91点認められ、総数の14%を占める。被熱しているものが多いのは石皿(18%)と磨石類だけである。なぜ被熱しているものが多いのか不明であるが、石皿が磨石とセットで使用されると言われていることから、他器種に比べこの2種類にだけ被熱しているものが多いのは両者に何らかの関係があるものと推定される。

H類は両端に抉りの入った磨石であり、関東地方では「その形状の特異性から「抉入磨石」という名称が与えられ…早期後半のうちに発生し消滅する、きわめて短期間しか存在しない特徴的な石器」(小葉 1983)とされ、その分布は多摩川中流域に多く出土するといわれている。一方、東北地方の秋田県大畠台遺跡(小玉 1979)では、長軸両端を打ち欠く磨石として多数出土し¹⁾、併出した土器の年代から中期初頭から後葉に限定できる。本遺跡のH類はこれらの資料に非常に似ている。また、「半円状偏平打製石器」の一部に似たものが存在する。この石器は「地域性の強い石器として、東北地方北半において縄文時代早期末～中期頃にかけての遺跡で普遍的に出土する」(高橋 1988)ものである。本遺跡のH類は3点と少なく、時期は明確でない。しかし、出土土器が中期前葉から中葉にかけてのものが大半で、早期のものは非常に少ないとから、H類は中期に属する可能性もある。いずれの時期に属しても抉りのある磨石の分布から見ると注目される石器である。なお、H類はいずれも側縁に磨痕、正裏面に凹痕のある石器である。

観察表の観察項目 A・B・C・Dについて、次のように決め○・○・×の記号を記入した。

- Aは正裏面の磨痕であり、両面にある場合は○、片面の場合は○、ない場合は×で示した。
- Bは側縁の磨痕であり、両側縁にある場合は○、片側縁の場合は○、ない場合は×で示した。
- Cは正裏面の凹痕であり、両面にある場合は○、片面の場合は○、ない場合は×で示した。
- Dは側縁または端部の敲打痕であり、両側縁・両端部の4ヶ所のうち、2ヶ所以上にある場合は○、1ヶ所の場合は○、ない場合は×で示した。

1) 大烟台遺跡では総数は出ていないが、24点の実測図が図示してある。

11) 磨石 (50・341・448・727~729 図版 380)

砥石とは「ものを研ぎ磨く工具」(宮下 1984)であり、総数 14 点出土している。石器全体の中では 0.4% と非常に低い割合である。完形品 5 点、破損品 2 点、破片 7 点で完形品は非常に少ない。資料数が少なく、しかも、形態分類の対象となる完形品も少ないため、分類はしていない。

出土分布状況では、ほとんどが遺構集中地区からの出土である。しかし、集中分布や片寄りが見られず、散在しているといえる。遺構内より 5 点、遺構外より 9 点出土し、全て単独出土である。

大きさでは完形品だけを見ると長さ 8.8~17.9 cm・幅 6.4~14.9 cm・厚さ 2.9~7.7 cm・重さ 140~2,460 g の範囲にあり、様々な大きさと重さの砥石が存在する。磨石類の重量分布から推察すると 1,000 g 程度以上のものは置砥石、以下のものは手持ち砥石と考えられる。従って 50・448 のように 2,000 g を越える大型で重いものは置砥石、341・728 のように 500 g より軽く小型のものは手持ち砥石といえよう。

素材はいずれも円形・橢円形で比較的扁平な礫をあまり加工せずに使用したと思われる。石材は花崗岩 5 点、凝灰岩 3 点、砂岩 2 点、泥岩 2 点、結晶片岩 1 点、不明 1 点で、石材の粒子の大きさにより、花崗岩は荒目、凝灰岩・泥岩は細目の砥石、砂岩は両者の中間の荒さの砥石といえる。

使用痕を観察すると、磨面を有するもの 7 点 (727・729)、溝を有するもの 4 点 (50・448・728)、磨面と溝を有するもの 3 点 (341) であり、有溝砥石といわれるものも多く存在する。また、溝は太いもの (50・341・448) と細いもの (728) がある。使用面数では破片が多く不明な点も多いが、重さの重い置砥石と思われるものは使用面が 1 面であり (50・448)、逆に軽い手持ち砥石と思われるものは 2 面以上の使用面が存在するようである (341・728)。

このように様々な砥石が存在するのは、使用工程と方法・機能・対象物の違い等により使い分けがなされた結果といえよう。

12) 石皿 (35・53・153~157・213・214・260・279・342~345・369・370・449~457・
730~744 図版 380~382)

石皿とは「通常磨石を上石として、対象物を磨り潰したり粉化する機能を持ち、梢円あるいは長方形に近い形態で、中央に浅い凹みのある皿形の石器を指す。」(安達 1983) ものである。総数 74 点で、全石器の 2.3% を占める。このうち接合するもの 5 点、接合しないが同一石材の破片とわかるもの 2 点、発掘調査時の壺難が 1 点あり、実数は 70 点である。

分類 第 44 表参照。まず縁や使用面の加工の有無により 2 つに分けた。

A 類 縁や使用面を加工しているもの。さらに縁や使用面の形状により 3 つに細分される。

A 1 類 縁があり、使用面が平坦または緩く窪むもの。(213・449~451・730~732 図版 380)

A 2 類 縁があり、使用面が弓状にやや深く窪むもの。(153・154・214・279・452・453・733~737
図版 381)

A 3 類 縁がなく、使用面が平坦または緩く窪むもの。(53・155・156・260・342・343・369~
454・738~740 図版 381)

B 類 縁や使用面を加工していないもの。さらに使用面の形状により 2 つに細分される。

B 1 類 使用面が平坦または緩く窪むもの。凸状になっているものも少数含まれる。(344~
370・455・741~744 図版 381)

B 2 類 使用面が弓状にやや深く窪むもの。(35・157・345・456 図版 382)

使用の結果により縁や使用面の加工が不明なものが存在する。従って、明らかに加工のあるもの、加工があったと推定されるものは A 類に、明らかに加工のないもの、なかったと推定されるもの、不明なものは B 類に入れた。また、使用面の形状は石材・使用の頻度等により変わるものであり、1 類・2 類のいずれに含まれるか判断しかねるものがあった。

第 44 表 石皿分類表

加工の有無	縁の有無	使 用 面 の 形 状	分 類	
A 類 あり	あり	1 類 平らまたは緩くくぼむ	A 1 類	
		2 類 弓状にやや深くくぼむ	A 2 類	
	3 類 なし	平らまたは緩くくぼむ	A 3 類	
B 類 なし		1 類 平らまたは緩くくぼむ、凸状に緩く ふくらむ	B 1 類	
		2 類 弓状にやや深くくぼむ	B 2 類	

分類別出土数と出土分布状況 第45表・第79図参照。74点のうち、遺構内より43点(58%)、遺構外より31点(42%)出土し、遺構内のものは住居跡とその他のピットからのものが多い。分類別ではB1類が19点(26%)と最も多く、これ以外は分類ごとにあまり大きな差が認められない。またA類が31点(42%)、B類が25点(33%)で縁や使用面を加工した石皿がやや多いといえる。

個々の遺構ごとでは、16号住居跡より6点(完形品2点)、20号住居跡より3点(完形品1点)、40号フラスコ状土坑より2点(完形品1点)、31号フラスコ状土坑より2点(完形品0点)出土している。

遺跡全体での出土分布状況では、G-I-5~12区の遺構集中地区、土石流跡E-5・6区遺構集中地区より西側のG・H-4区付近での出土がやや多いが、全般的に見れば他器種に比べ著しい集中は認められないといえよう。

第45表 石皿分類別出土数

遺構 区分	住居跡	フラスコ 状土坑	土 坑	その他の ピット	遺構外	合 計
A 1類	1			3	3	7
A 2類	4			2	7	13
A 3類	4	2	1	1	3	11
B 1類		4	1	2	12	19
B 2類	2	2		1	1	6
分類不可	5		2	6	5	18
合 計	16	8	4	15	31	74



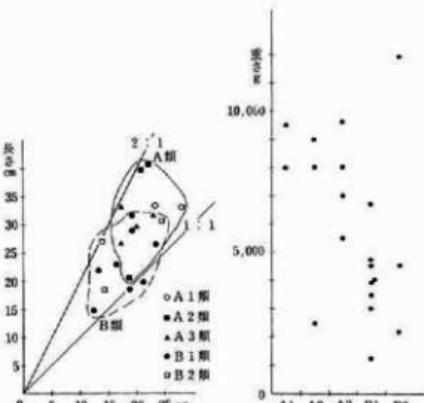
長さと幅 第80図参照。完形品・略完形品の20点を見ると、資料数が少なく分類別の比較はできない。しかし、A類とB類ではA類は長さ20~40cm・幅15~25cm、B類は長さ15~30cm・幅10~25cmの範囲に大部分が含まれる。分布に重なりも見られるがA類はB類より長さ・幅ともに大きいといえる。なお、長幅比は両類とも1:1~2:1の範囲にはとんど含まれる。

重さ 第81図参照。A類が8,000~10,000g、B類が3,000~5,000gにかけてやや多く分布し、A類はB類よりかなり重い。

石材 第46表参照。実数70点を対象とする。きわめて特徴的な石材の選択が認められ、花崗岩34点(49%)、安山岩33点(47%)を数え、この2種類で96%を占める。ちなみに花崗岩が多く使用される石器は磨石類(9%)だけであり、安山岩が多く使用されるのは礫器類(45%)と磨石類(70%)である。しか

し、石皿の安山岩は多孔質であるものとそうでないものの2種類ある。しかし、磨石類と石皿の石材選択は似ている。花崗岩と安山岩(特に多孔質のもの)は器面の凹凸が激しく、「石皿の主用途が植物質食料の磨り潰し、粉化であった。」(安達1983)とすれば、この用途に適した石材である。分類別の石材選択を見るとA類は全て花崗岩と安山岩で占められ、安山岩はいずれも多孔質のものである。花崗岩は結晶の粒子が大きく、多孔質の安山岩はやや軟質であり、敲打による整形・加工が容易なことから、A類の石材として選択されたものと考えられる。

遺存状態 第47表参照。実数70点のうち、完形品・略完形品が19点(27%)であり、他器種に比べ著しく比率が低い。分類別の完形品・略完形品の比率はA類が28%、B類が44%でA類の方が低い。破損品・破片を観察すると、50点のうち40点(80%)は1/2以下の細片である。また破損品・破片の中には被熱したものが13点(26%)も認められ、完



第80図
石皿長幅分布図

第81図
石皿重量分布図

第46表 石皿石材表

石材 分類	花崗岩	安山岩	砂岩	斑状岩	片岩	合計
A 1 類		7				7
A 2 類	3	8				11
A 3 類	10	1				11
B 1 類	5	12		1	1	19
B 2 類	5	1				6
9種不可	11	4	1			16
合計	34	33	1	1	1	70

第47表 石皿遺存状態表

遺存状態 分類	完 形	%以上	%以下		破 片	合 計
			%	%以下		
A 1 類	2	1	3	1		7
A 2 類	2(1)	3		4	1	11
A 3 類	4	1	1	3	2	11
B 1 類	8	3	4	1	3	19
B 2 類	3	2	1			6
9種不可						16
合 計	19(1)	10	9	9	22	70

() 内は複合完形品

形品・略完形品の中には被熱したものがないことから、被熱による破損も十分考えられる。

被熱 前述のように石皿には被熱したものが多く、磨石類とともに他器種に見られない特徴である。この被熱は使用時、廻棄時、他用途に転用後のどの時点で被熱したものかは明らかでないが、磨石類とともに一般的にいわれている使われ方以外の使用も考えられる。

使用面 使用面の数をみると、70点のうち片面が50点(71%)、両面が17点(24%)である。片面使用のものは多いが、両面使用のものも少なからず認められる。A1類は7点の全てが片面使用である。一方、使用面の形状は、平坦または緩く窪む程度のもの37点、弓状にやや深く窪むもの17点である。また、平面形は素材の形状に合わせ橢円形のものがほとんどであり、長軸方向の一端に掃き出し口があるものもある。掃き出し口はA類には多く、A1類4点(213・451・731・732)、A2類4点(153・733・736・737)存在する。使用面の形状・掃き出し口の位置等から、石皿は使用面の長軸方向を前後に置き、この中で掃き出し口のある石皿はこれを手前に置き使用されたと考えられる。また、使用面の平坦なものや、やや窪むものに対応すると考えられる磨石類もある¹⁾ことから、石皿と磨石類はセットとして使用されたものと考えられる。

その他 A類の中には縁や使用面の加工だけでなく、側縁(周縁)や底面(裏面)も整形されたもの非常に多くあり、213・451のように側縁の一部に曲線状の彫刻が施されているものもある²⁾。また、石皿は磨りとしての用途だけでなく、敲打(ものを碎く)としての用途も考えられる。738・741のように明確な敲打痕が認められる³⁾ことは、それを裏付けるものといえよう。

以上の分析を通して、石皿の実用的な面のはかに下記の事柄から、従来よりいわれている非実用的な面や「完形で廻棄される打製石斧とは異なる廻棄行動」(安達1983)的な面があったと考えられる。

- 完形品・略完形品は少なく、破損品・破片が多い。しかも、加工のある石皿ほどこの傾向が強い。
- 破損品・破片は1/2またはこれ以下の細片が多い。
- 被熱の比率が高い。
- 側縁に彫刻を施したものがある。

これらの事柄は、他器種にほとんど認められることからも、石皿の特殊性を裏付ける特徴といえるであろう。

1)磨石類のA・B・C・D類の磨痕を参照のこと。

2)23号住跡ピット5から出土した石皿にも、両側縁にそって213の文様に似たものが彫刻されていた(図版380)が、発掘調査時に盗難にあった。

3)A類では、使用時の敲打痕か、製作時の整形・加工による敲打痕か判別できないものがあった。詳細に観察すれば、使用時の敲打痕はさらに多く認められると思われる。

- 13) 両極剝離痕のある石器（略称両極石器）（65・74・89・90・166・167・219・
220・272・275・290・500～513 図
版 369）

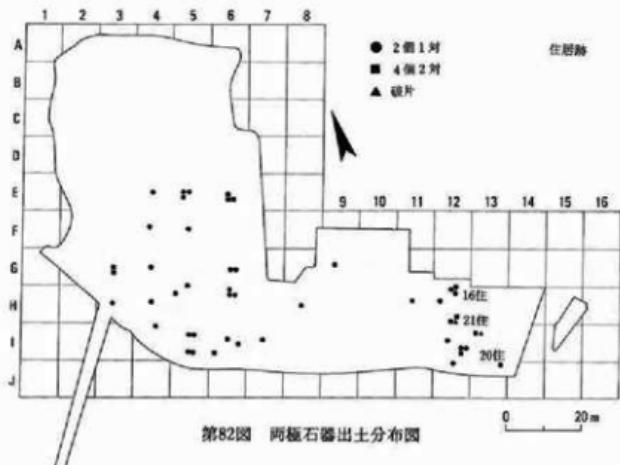
器種名からもわかるように両極剝離痕のある石器（以下、両極石器といふ）は、剝離痕の連続する縁辺を上下に置いた場合、上下両縁辺または両尖端から向かい合うように剝離痕が入る¹⁾石器である。総数 54 点出土している。この中の大半は阿部朝衛氏がビエス・エスキュー（楔形石器）とした「両極剝離痕と 2 個 1 対（4 個 2 対）²⁾の鋭い刃部を有し、小形で、四角形の石器」（阿部 1979）に近似するものである。また、必ずしも明確でないが極めて少數ながら両極剝離痕のある剝片（以下、両極剝片といふ）の可能性のものも含まれていると考えられる³⁾。しかし、大半はビエス・エスキューと考えられることから、分析結果はほぼビエス・エスキューのあり方を示すと見てよい。

分類 観察表には、分類記号を記入しなかったが、両極剝離痕の数により 2 つに分けた。

2 個 1 対の両極剝離痕のもの（以下、2 個 1 対といふ）。（74・89・90・167・220・275・290・
500～513 図版 369）

4 個 2 対の両極剝離痕のもの（以下、4 個 2 対といふ）。（65・166・219・272 図版 369）

分類別出土数と出土分布状況 第 48 表・第 82 図参照。54 点のうち、遺構内より 22 点(41%)



1) 定義については、岡村道雄氏のビエス・エスキューの定義（岡村 1976）から一部を引用した。

2) () 内は加筆してある。

3) 極めて少數ながら両極石核（両極剝離痕のある石核）（783・784）や両極剝片を素材とした石錐が出土していることからも裏付けられよう。しかし、既に指摘されているように（阿部 1983）ビエス・エスキューと両極剝片・両極石核を実際の資料で明確に区別するのは不可能である。

遺構外より 32 点 (59%) と遺構外からの出土がやや多い。遺構内からのものは住居跡が多く 68% を占める。分類別では 2 個 1 対が 40 点 (74%)、4 個 2 対が 12 点 (22%) で 2 個 1 対が多いといえる。

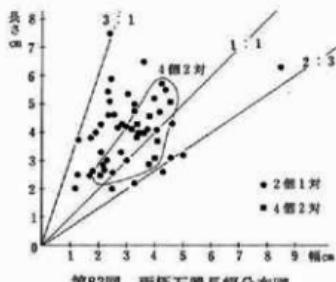
個々の遺構ごとでは、16 号・20 号・21 号住居跡より、それぞれ 3 点ずつ出土している。

遺跡全体での出土分布状況を見ると、遺構集中地区の両側にあたる G-I-4-6 区と H-I-12-13 区、土石流跡の E-5・6 区からの出土が多い。

長さと幅 第 83 図参照。全体的に見ると長さ 2.0~6.0cm・幅 1.5~5.0cm・長幅比 3:1~2:3 の範囲にはほとんど含まれる。分類別では 2 個 1 対が長さ 2.0~5.5cm・幅 1.5~4.5cm・長幅比 2:1~2:3 の範囲に分布するのに対し、4 個 2 対は資料数が少ないので、長さ 4.0cm・幅 3.5cm 前後に、長幅比 1:1 を中心にやや多く分布する。平面形はいずれもほぼ四角形を基本とするが、4 個 2 対は長幅比より正方形に近いものが多く、2 個 1 対は長方形のものが多い。

重さ 第 84 図参照。全体的に見ると 4~13g にかけて多く分布する。分類別では 4 個 2 対の資料数が少なく必ずしも明確でないが、2 個 1 対よりやや重い傾向にある。これは厚さでは違いが認められないことから、長さと幅の違いの結果といえる。

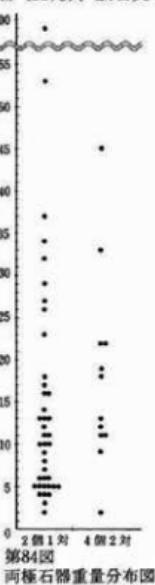
石材 第 49 表参照。全体的に見ると頁岩 17 点 (31%)、メノウ 12 点 (22%)、鉄石英 12 点 (22%) が多く、この 3 種類で 41 点 (75%) を数える。これ以外の石材も含め、硬質で緻密な石質のものを使用している。分類別では石材選択に差異は認められない。



第 83 図 両極石器長幅分布図

第 48 表 両極石器分類別出土数

遺構 分類	住居跡	柱穴跡	フタスリ 灰土層	土 坑	その他の ビット	遺構外	合 計
2 個 1 対	9	1	2		2	26	40
4 個 2 対	5			1		6	12
破 片	1				1		2
合 計	15	1	2	1	3	32	54



第 84 図 両極石器重量分布図

第 49 表 両極石器石材表

石材 分類	メノウ	鉄石英	濃紋岩	石 英	真 岩	黑色頁岩	ホルン フェルム	粘板岩	合 計
2 個 1 対	9	8	3	1	11	5	1	2	40
4 個 2 対	2	4	1			5			12
破 片	1				1				2
合 計	12	12	4	1	17	5	1	2	54

素材 ピニス・エスキューの素材が「礫核を素材としたものと剝片を素材としたもの…」(岡村1976)と指摘されているように、本遺跡でも礫を用いたもの(513)と剝片を用いたもの(501・505・508・509)が存在する。しかし、半数以上は素材が不明であり、これは両極剝離痕が進行したためである。一方、自然面の有無を観察すると、自然面が有るもの21点(39%)、無いもの33点(61%)を数える。

その他 501のように対になる両極剝離痕が平行でなく、交叉するものが2点存在する。

- 14) 不定形石器 (1・11~19・38・39・42~44・51・59~61・66~69・75・91~109・
158~160・163・168~184・221~224・253・266・271・276・277・291~310・
349~358・380~405・514~628 図版 369~373)

縄文時代の遺跡から出土する剝片石器で定形的でないものは、従来より「搔・削器類」「スカライベー」「二次加工のある剝片」「使用痕のある剝片」「微細剝離のある剝片」「不定形石器」などと様々な名称で記述され、定形石器の分類範囲に含まれない石器の一部または全てを含む代名詞のように使用されてきた。また、出土数が多く、全石器に対する比率が高いにもかかわらず、これらの石器の一部を抽出し、簡単な記述ですませた報告書が多かったように思われる。このことに対して、既に「縄文時代の石器群の、剝片生産から機能の推定まで含めた総合的理解に対して、みずから眼界を設けることを意味する。」(阿子島1979)、また「従来不定形石器と呼ばれる一群の中に、かなり定形的な石器として抽出される場合があり、実際の資料は一応の検討を加える必要がある。」(阿部1985)などの指摘がなされている。

このような指摘から、本書においては不十分ながら、次のような方法により、定形的でない剝片石器を抽出した。なお、器種名については出土数が非常に多いこと、形状も様々なもののが存在することから、一応「不定形石器」として括した。

- まず礫石器・石錐・尖頭器・石錐・両面加工石器・三脚石器・板状石器・打製石斧・磨製石斧・礫器類・両極剝離痕のある石器・部分的に研磨のある石斧・擦痕のある剝片¹⁾・搔器²⁾・分類不明石器³⁾・石核を除外した。
- 残ったものを不定形石器と剝片類⁴⁾に分けた。なお、不定形石器として分けられた石器は、剝片を素材とし、二次加工や使用痕の認められるもの、または使用によると考えられる微細剝離の認められるもの⁵⁾である。

1) 18) 掘痕のある剝片を参照。

2) 19) 搔器を参照。

3) 20) 分類不明石器を参照。

4) 22) 剥片類を参照。

5) 抽出は肉眼観察である。石材の中には風化が激しく、不定形石器として認定できなかったものがある(例えば安山岩は剝片類の中で最も多い石材であるが、不定形石器の中ではそれほど多くない。風化的ためとも考えられる)。従って、不定形石器はさらに多くが存在したと推定される。

このようにして抽出された不定形石器は 1,275 点を数える。これは石器全体の 40.1% を占め、全器種中最も高い比率を示す。

分類 第 51・52 表参照。分類は主として、刃部形状に着眼して行った。その結果、おおよそ 10 種類に分けられた。さらに各分類内で素材・刃部ライン・加工部位等により細分類を行った。

1,275 点のうち分類可能なものは 981 点、不可能なものは 294 点である。

A 類 いわゆるスクレイパー。刃部は中型¹⁾で急角

度の二次加工が連続的に施されている。

..... 55 点

B 類 いわゆるスクレイパー。刃部は小型で急角度の二次加工が連続的に施されている。..... 52 点

C 類 鋸歯縁石器。刃部は大型・中型で急角度の二次加工が鋸歯状に施されている。..... 171 点

D 類 銳利な尖端部を持つ石器。..... 62 点

E 類 挟入石器（ノッチ）。..... 74 点

F 類 刃部は中型・小型で二次加工が不連続に施されている石器..... 257 点

G 類 刃部は大型・中型で浅角度の二次加工が施されている石器。..... 103 点

H 類 背面に礫表皮を多く残す素材を用い、刃部は小型で浅角度の二次加工が施されるか、使用の結果と考えられる微細剝離痕や磨耗痕・光沢痕等の認められる石器。..... 36 点

I 類 素材の一端部の限られた部分に、連続的な二次加工を施す石器。..... 21 点

J 類 刃部の二次加工は施されず、使用の結果と考えられる微細剝離痕や磨耗痕・線条痕・光沢痕の認められる石器。..... 150 点

第 50 表 不定形石器分類別出土数

分類別	住居跡	柱穴	表土	土流	トレンチ	ビオライト色	遺構外	小計	合計
A	1 類	8				2	20	36	55
	2 類	6				2	17	25	
B	1 類	2	2		1	15	20	52	
	2 類	7	1		4	20	32		
C	1 類	17	1	5	5	6	31	65	171
	2 類	5		5	1		11	22	
	3 類	15		6	3	4	52	80	
	4 類	1					3	4	
D	1 類	1	1	2		2	8	14	62
	2 類	2		2			11	15	
	3 類	10	2	2		2	17	33	
E	1 類	3	6	1		3	16	29	74
	2 類	8	2	2			33	45	
F	1 類	17	7	1	1	10	45	81	257
	2 類	13	2	1		4	44	64	
	3 類	14	6	5		9	78	112	
G	17	9	3		7	67	103	163	
H	9	6	2		3	16	36	56	
I	3					1	17	21	
J	35	15	4		16	80	150	186	
分類不可	56	1	17	6	14	206	294	294	
合計	243	2	94	38	1	90	807	1275	1275

1) 二次加工の割離の大きさは、おおよそ次のような目安で分けた。

大型の割離のものは約 1 cm 以上。

中型の割離のものは 6 mm 程度。

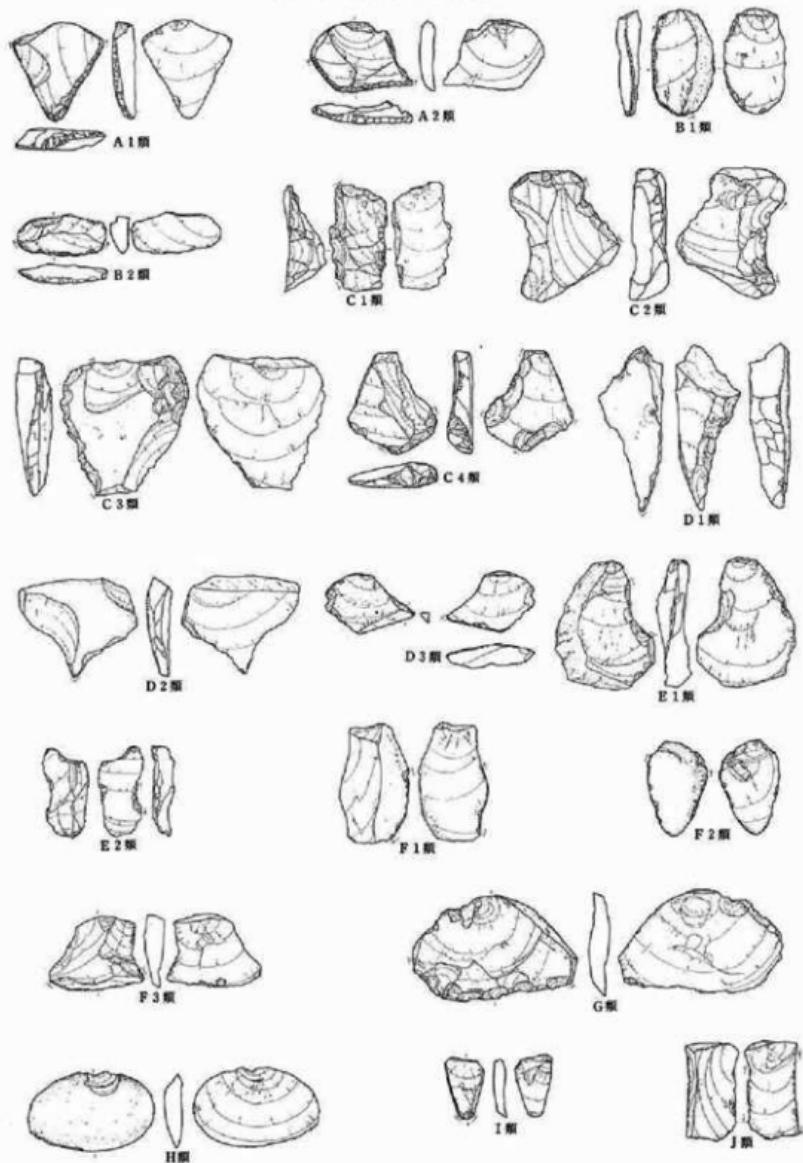
小型の割離のものは 2 ~ 3 mm 程度。

第51表 不定形石器分類表(1)

分類	刃 部 形 状		刃部ライン	素 材	二 次 加 工 部 位	細 分 類	
A類	スクレイパー 中型・急角度・連続剥離		——	縦長	側縁と端部	A 1類	
				横長	片側縁と底縁	A 2類	
B類	スクレイパー 小型・急角度・連続剥離		外 弧 状	縦長	片側縁と端部	B 1類	
				横長	底 縁	B 2類	
C類	鋸歯状石器 大型・中型・急角度・鋸歯状剥離		直 線 状	縦長・厚手	片側縁	C 1類	
				横長・厚手	底 縁		
			内 弧 状	縦長・厚手	片側縁	C 2類	
				横長・厚手	底 縁		
			外 弧 状	縦長・厚手	片側縁	C 3類	
				横長・厚手	底 縁		
スクレイパーと鋸歯状石器の複合形		——	厚手	——	——	C 4類	
D類	鋸利な尖端部を持つ石器 大型・急角度剥離		直 線 状	厚手	片側縁 (一方の片側縁は古い剥離面や折断面等を利用する)	D 1類	
			内 弧 状	厚手	片側縁(D 1類と同じ)		
	大型・浅角度剥離		直 線 状	厚手	両側縁	D 2類	
			内 弧 状	厚手	片側縁(D 1類と同じ)		
	小型剥離		直 線 状	厚手	片側縁(D 1類と同じ)	D 3類	
			内 弧 状	薄手	両側縁	石 錐	
			直 線 状	薄手	——		
			内 弧 状	薄手	——		
E類	挿入石器 (ノット)	大型・中型・急角度剥離	内 弧 状	縦長・厚手	側縁	E 1類	
				横長・厚手	底縁		
		大型・中型・浅角度剥離		縦長	側縁		
				横長	底縁		
	小ノット	中型・急角度剥離	内 弧 状	縦長	側縁	E 2類	
		横長		側縁・底縁			
		小型剥離		縦長	側縁		
		横長		側縁・底縁			
F類	中型・小型・急角度・不連続剥離		——	縦長	側縁	F 1類	
			端部に丸味	縦長	側縁と端部	F 2類	
			——	横長(台形状)	底縁	F 3類	
			——	横長	底縁と側縁		
G類	大型・中型・浅角度剥離		直 線 状	縦長	側縁	G 類	
				横長	底縁		
			外 弧 状	縦長	側縁		
				横長	底縁		
H類	無加工(使用痕の微細剥離・使用痕) 小型・浅角度剥離		外 弧 状	背面は自然面	底縁	H 類	
I類	端部に小型・連続剥離		端部に丸味	縦長・薄手	端部	I 類	
J類	無加工(使用痕の微細剥離・使用痕)		——	縦長	側縁	J 類	
			——	横長	側縁・底縁		

新ゴシック以外の明朝体は、一般的の傾向を表したものが多い。

第52表 不定形石器分類表(2)



第53表 不定形石器石材表

石材 分類	真 岩	黒色頁岩	鉄 石英 鐵 紋 岩	安 山 岩	東安 色山 岩 岩	ヒラ ルム ソス	砂 岩	復 砂 岩	珪 岩	結 晶 片 岩	メ ノ ウ	網 灰 岩	緑 色 板 岩	粘 板 岩	ナ セ ー ト	模 岩	石 英 透 岩	輝 綠 岩	矽 岩	不 明	合 計
A	1種	4	1	20	1			1	1	1	1										30
	2種	6	1	13	3	1					1										25
B	1種	7		7	1		1	1	1	2											20
	2種	8	3	12	1	1	1			2		2	2								32
C	1種	35	5	11	7			1	1	2	1						1			1	65
	2種	8	1	7	2			2		1	1										22
D	3種	21	9	20	7	7	2	2	1	3	1	4			3	1					80
	4種	1	1	2																	4
E	1種	5	3	1	1	3							1								14
	2種	11	1	14	2	1		1		1	1	1					1				15
F	1種	6	2	8	4	1	1			4		1	1	1	1	1					29
	2種	18	2	13	8	2	1		1												45
G	1種	30	5	20	7	7		3	2	1	2	2			1				1	81	
	2種	29	1	15	10	1	1	2		1		1	1			2					64
H	3種	42	4	30	16	5	4	3	1	2		1	4								112
	4種	14	23	8	10	2	12	9	3	7	2	4	2	2	1	1	1	1	1		103
I	1種	8		3	3	1	2	3	4		5			1	5						36
	2種	50	14	46	20	3	3		5	6	1	2	2		1	1	2				150
合計	304	85	256	183	15	43	28	15	27	30	16	15	15	2	10	6	6	1	1	2	981

a A 類 (59・66・91・158・168・169・380~382・514~527 図版 369)

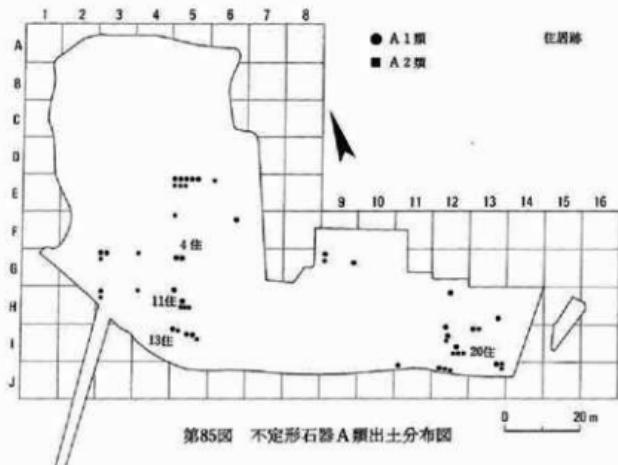
第 51・52 表参照。刃部の二次加工は中型で急角度の剥離が連続的に施されている石器で、從来からスクレイパー、搔器、削器などと呼ばれていたものに相当する。素材により 2 つに分けられる。

A 1 類 縦長剥片からなるもの。(91・158・380・381・514~520 図版 369)

A 2 類 橫長剥片からなるもの。(59・66・168・169・382・521~527 図版 369)

二次加工部位は A 1 類が下端(打面の反対側)を中心に片側縁または両側縁に、A 2 類は底縁から片側縁にかけて施されるものが一般的である。いずれにしても 2 側縁に施されるものが多い。従って、刃部ラインは二次加工が連続的に施されるため、凹凸が小さく滑らかな曲線を描く。しかし、素材の違いから刃部ラインが 2 側縁にわたる場合、A 1 類がやや急で、A 2 類が緩やかな曲線を描くのが多い。刃部形成にあたっては、6 mm 前後の大きさの剥離を施し、片面加工がほとんどである。片面加工は背面側が剥離され、主要剥離面は平坦なものが一般的である。従って、刃部断面形は片刃である。これらの諸特徴は 1 類・2 類とも同様で、素材・二次加工部位・刃部ライン以外は顕著な違いは認められない。

分類別出土数と出土分布状況 第 50 表・第 85 図参照。総数 55 点出土し、不定形石器全体の 4.3% を占める。全体的に見ると遺構内より 18 点 (33%)、遺構外より 37 点 (67%) と遺構外からの出土が多い。遺構内では住居跡からのものが多い。分類別では、A 1 類 30 点 (55%)、A 2



類25点(45%)とややA1類が多い程度であり、遺構別ではほぼ同様の出土傾向を示す。

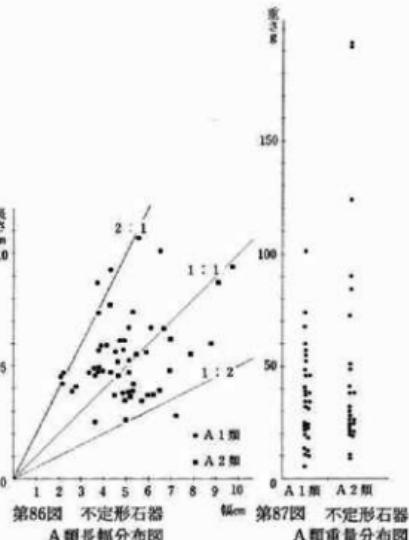
個々の遺構では、4号住居跡より2点、11号住居跡より2点、20号住居跡より4点出土している。

遺跡全体での出土分布状況では、遺構集中地区両側のG-I-5区とI-J-5・6区、土石流跡のE-5区に比較的集中する。またG-H-3区からもやや多いのが注目される。

大きさと重さ 第86・87図参照。全体的に見ると、長さ3.5~6.0cm・幅3.5~6.0cmを中心分布し、長幅比2:1~1:2にほとんどが含まれる。分類別ではA1類が長さ4.5~6.0cm・幅3.5~5.0cm・長幅比2:1~1:1、A2類が長さ3.5~5.0cm・幅4.5~6.0cm・長幅比1:1~1:2を中心に分布する。この違いは、分類基準に素材を含めたからである。

重さについては両類とも20~50gを中心分布し、その差異は認められない。

石材 第53表参照。A1類とA2類では石材の選択に差異は認められない。A類全体を見る



と鉄石英(60%)と頁岩(18%)が多く、この2種類で43点(78%)を数える。これらの石質は、これ以外で使用された石材も含め硬質で緻密である。

その他 使用痕が認められるものについては、A1類で2点(158)存在する。

b B類 (92・170・221・222・383・384・528~537 図版369)

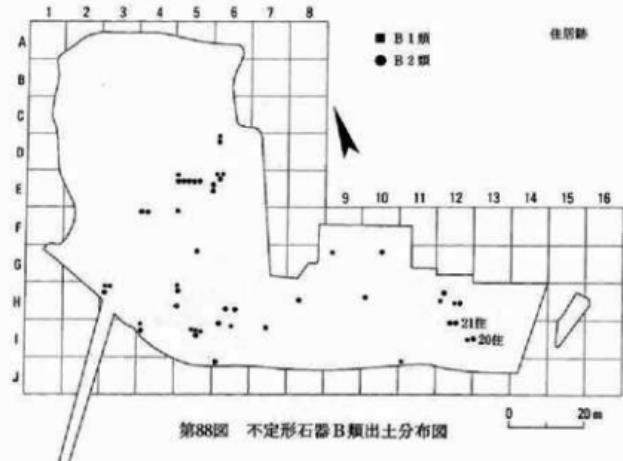
第51・52表参照。刃部の二次加工は小型で急角度の剥離が施されている石器で從来からスクリイバー、搔器、削器などとよばれていたものに相当する。素材により2つに分けられる。

B1類 縦長剥片からなるもの。(383・528~531 図版369)

B2類 横長剥片からなるもの。(92・170・221・222・384・532~537 図版369)

二次加工部位については、B1類が片側縁と下端を中心に施されるのが一般的であり、A類のように2側縁の広い範囲になるものは少ない。また、二次加工が連続的に施されることから、外輪状(弧状)の滑らかな曲線を描く。刃部形成では2~3mm前後の大きさの剥離を施し、片面加工がほとんどである。片面加工は背面側が剥離され、主要剥離面は平坦なままのものが多い。従って、刃部断面形は片刃が多い。これらの諸特徴は1類・2類ともほぼ同様で、素材・二次加工部位以外は顕著な差異が認められない。

分類別出土数と出土分布状況 第50表・第88図参照。総数52点出土し、不定形石器全体の4.1%を占める。B類全体で見ると、遺構内より17点(33%)、遺構外より35点(67%)出土している。遺構内では住居跡からの出土がやや多い。分類別ではB1類が20点(38%)、B2類が32点(62%)を数え、B2類が若干多い。また、B2類は遺構別で住居跡からの出土が多いほかは、両類ともほぼ同様の出土状況である。



個々の遺構では 20 号住居跡より 2 点、21 号住居跡より 2 点出土している。

遺跡全体での出土状況を見ると、遺構集中地区の両側にあたる H・I-5・6 区と H・I-12 区、土石流跡の E-5・6 区からの出土が多い。

大きさと重さ 第 89・90 図参照。全体的に見ると、長さ 3.0~7.0 cm・幅 3.5~6.5 cm を中心に分布し、長幅比は 2:1 ~ 1:2 の範囲にはほとんど含まれる。分類別では B 1 類が長さ 4.0~7.0 cm・幅 3.5~4.5 cm・長幅比 2:1 ~ 1:1、B 2 類が 3.0~5.5 cm・幅 4.5~7.0 cm・長幅比 1:1 ~ 1:2 を中心に分布する。この違いは分類基準を素材に求めたためである。

重さ は両類とも 10~50 g の範囲に大半が含まれ、違いは認められない。

石材 第 53 表参照。B 1 類と B 2 類では石材の選択に差は認められない。B 類全体を見ると鉄石英(19 点)と頁岩(15 点)が多く、65% を占める。これ以外に用いられた石材も含め、硬質で緻密な石質のものを使用している。

その他 使用痕は両類でそれぞれ 2 点ずつ認められた。

B 類における出土分布状況・大きさ・重さ・石材等の諸特徴は、A 類とはほぼ同様のものであり、大きな違いは刃部の二次加工が中型(A 類)か小型(B 類)かということである。

c C 類 (11~13・67・93・94・159・171~176・266・291~297・349~353・385~389・538~560 図版 370)

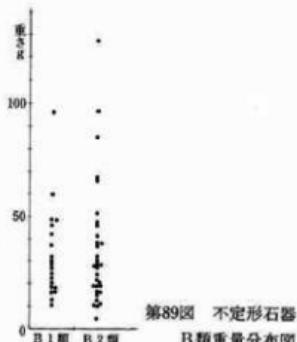
第 51・52 表参照。鋸齒縁石器である。刃部の二次加工は大型または中型¹⁾で急角度の剥離が鋸齒状に施されている。刃部平面形は大型の剥離の場合は凹凸が大きく、中型の剥離の場合は凹凸が小さくなるのが一般的な傾向である。刃部ラインの形状により 3 つに分けられる。このほか、スクレイバー状の刃部との複合形がある。

C 1 類 刃部ラインが直線状のもの。(93・94・171~173・291・349~351・385~388・538~544 図版 370)

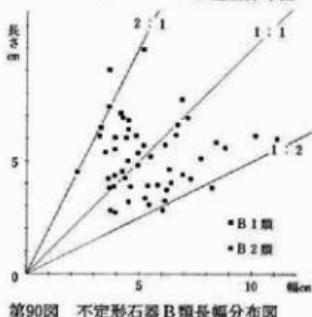
C 2 類 刃部ラインが内凹状のもの。(11・292~295・352・545~547 図版 370)

C 3 類 刃部ラインが外凸状のもの。(12・13・159・174~176・266・296・297・353・389・

1) 中型剥離の石器はやや少ない。



第 89 図 不定形石器
B 類重量分布図



第 90 図 不定形石器 B 類長幅分布図

548~558 図版 370)

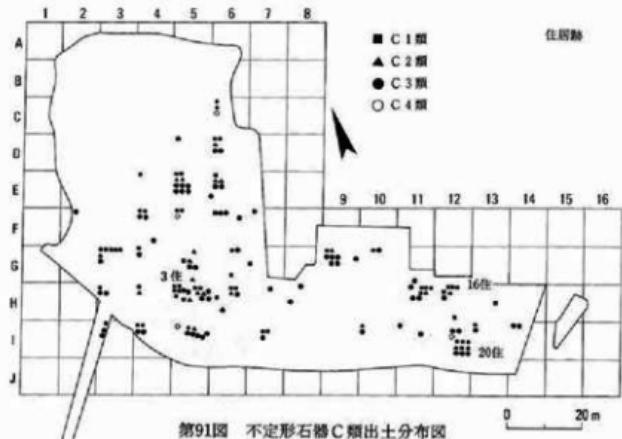
C 4 類 鋸歯状の刃部とスクレイバー状の刃部を持つもの。(67・559・560 図版 370)

二次加工部位は縦長剥片の場合が側縁に、横長剥片の場合が底縁に施されるのが一般的である。刃部形成は片面加工のものがほとんどである。従って、刃部断面形は基本的には片刃である。しかし、剥片の平坦面でなく曲面に二次加工を施すものも存在するため、両刃的な刃部のものも少なからず存在する。なお、片面加工は主要剥離面側または背面側のいずれにも片寄ることはない。また、刃部が2ヶ所以上に認められるもの(93・295・386・542・543・546・547)もかなり存在する。刃部の範囲についてはC 2 類が小さく、C 3 類が大きいのが一般的であるが、刃部ラインと素材の関係を見れば当然の結果といえる。

分類別出土数と出土分布状況 第50表・第91図参照。総数171点出土し、不定形石器の中ではF類に次いで多く、13.4%を占める。C類全体では遺構内より74点(43%)、遺構外より97点(57%)出土し、遺構内では住居跡からの出土が多い。分類別では、C 3 類が80点(47%)、C 1 類が65点(38%)と多く、C 2 類が22点(13%)と少ない。C 4 類は4点と非常に少なく、一般的な石器といえない。各分類ともほぼ同様の出土状況を示す。

個々の遺構ごとでは、3号住居跡7点、5号住居跡4点、11号住居跡2点、16号住居跡4点、20号住居跡8点、21号住居跡2点、23号住居跡3点、7号フラスコ状土坑2点、9号フラスコ状土坑3点、11号フラスコ状土坑2点、31号フラスコ状土坑2点、28号土坑3点、31号土坑2点出土している。

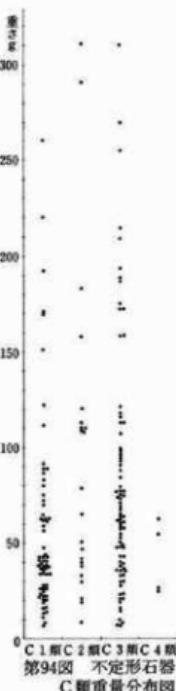
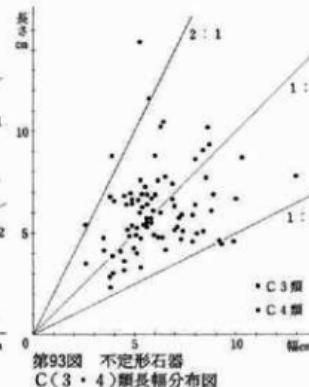
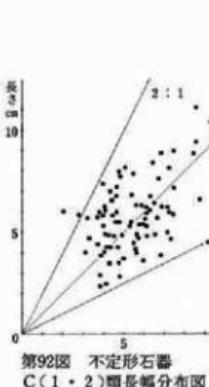
遺跡全体での出土分布状況では、G—I—5~12区の遺構集中地区、土石流跡のE—5・6区、遺構集中地区の外側のG—3区からの出土が多い。なお、分類別に出土が片寄ることは認められない。



第91図 不定形石器C類出土分布図

大きさと重さ 第92~94図参照。分類別の大さに差は認められない。資料の少ないC4類を除き、長さ4.0~7.0cm・幅4.0~7.0cmを中心分布する。長幅比は1:1を中心に分布し、2:1~1:2の範囲にはほとんどが含まれる。また具体的に集計はしていないが、石器を観察すると大きな凹凸のある鋸歯縁には大型で厚手の素材が用いられ、逆に小型の鋸歯縁には小ぶりの素材が使用されているものが多い。しかし、全般的には厚手の素材が多く認められる。

重さについても分類ごとの差は認められず、10~90gを中心に分布する。しかし、個々の石器を見ると、10g前後のものから150gを超える重いものまで、かなりの差が認められる。



石材 第53表参照。C1類・C2類・C4類では石材選択に差は認められない。C類全体で見ると頁岩（65点）、鉄石英（40点）、黒色頁岩（16点）、流紋岩（16点）が多く、この4種類で79%を占める。これらの石材は硬質で緻密な石質といえる。一方、C3類はこれらの石材の他に安山岩がやや多いのが注目される。安山岩は不定形石器全体で15点しかなく、C3類で7点を数える¹⁾。また、C3類は他のC類に比べ多種類の石材を使用しているといえる。

その他 出土数が多いのに対し使用痕の認められたものが少なく、わずか1点（385）刃部に磨耗やつぶれが認められただけである。また、291は黒色付着物がわずかに認められるが成分は不明である。

1) 安山岩は風化が激しく、他の不定形石器では、石器として認定できないものも存在した可能性もある。

d D 類 (14・95~99・223・298~300・354・355・390・561~572 図版 371)

鋭利な尖端部を持ち、尖端部に続く片側縁または両側縁に二次加工が施される石器である。二次加工の剥離の大きさ及び角度、二次加工の部位等により 4 つに細分した。

D 1 類 大型で急角度の二次加工が施されるもの。(95・298・354・561~563 図版 371)

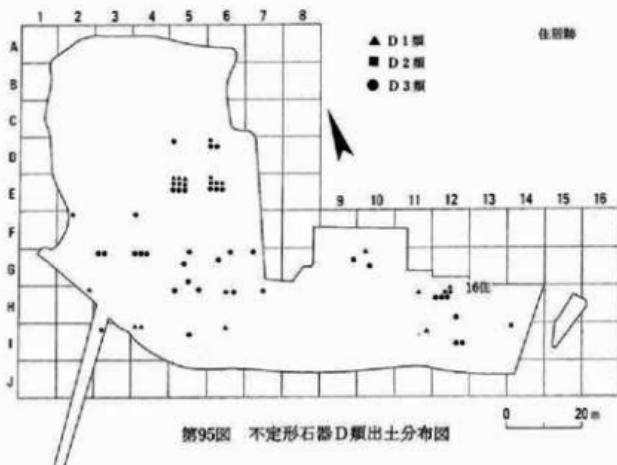
D 2 類 大型で浅角度の二次加工が施されるもの¹⁾。(96・97・299・564~569 図版 371)

D 3 類 小型の二次加工が片側縁に施されるもの。(14・98・99・223・300・355・390・570~572
図版 371)

D 4 類 小型の二次加工が両側縁に施されるもの。(石錐の C 1 類の一部と C 2 類に同じであ
り石錐に含めた)

二次加工部位は、各分類とも片側縁のものと両側縁のものがあり、片側縁のものは、残りの片側縁が古い剥離面や切断面等を利用し、急角度になっているのがほとんどである。また、片側縁のものは片面加工がほとんどであり、D 1 類は全て片面加工である。素材については縦長剥片・横長剥片いずれもあり、D 4 類以外は厚手の剥片を用いている。尖端部に続く側縁の平面形は、直線状または内凹状を呈し、外凸状のものはほとんどない。

分類別出土数と出土分布状況 第 50 表・第 95 図参照。D 4 類以外を分析の対象とする(以下同じ)。総数 62 点出土し、不定形石器全体の 4.9% を占める。D 類全体を見ると遺構内より 26 点(42%)、遺構外より 36 点(58%) 出土し、遺構内では D 3 類が住居跡からの出土が多いが、その他は分散して出土する。分類別では D 3 類 33 点(53%) と最も多く、残りを D 1 類(14 点)



1) 中型の剥離のものがわずかに認められる。

とD2類(15点)で二分する。

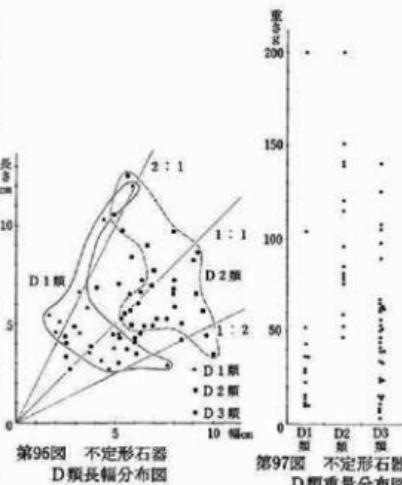
個々の遺構ごとでは、3号住居跡より2点、16号住居跡より6点出土している。

遺跡全体での出土分布状況では、遺構集中地区両側のG・H-4・5区とH・I-12区、土石流跡のD・E-5・6区、調査区西側のG-3・4区からの出土が多い。分類別ではD2類が土石流跡のD・E-5・6区からの出土が多いほかは、片寄りは認められない。

大きさと重さ 第96・97図参照。各分類別に差が見られ、D1類が長さ・幅が小さく、D2類は大きい。D3類はD1類とD2類の分布とほぼ重複する。すなわち、D1類は長さ2.7~5.8cm・幅1.7~5.8cmに、D2類は長さ4.9~9.7cm・幅5.5~9.5cmに、D3類は長さ3.0~7.5cm・幅2.5~8.0cmの範囲に大半が含まれる。長幅比では差が認められず、2:1~1:2の範囲にはほとんど含まれる。

厚さ 厚さは長さ・幅のようには差が認められず、1.2~2.8cmの範囲にD1類・D2類は全て、D3類は大半が含まれる。

重さ 重さには、D1類が10~50gにほとんど含まれるのに対し、D2類は50g以上のものが大半を占める。D3類は5~70gの範囲に多いが、D1類・D2類の分布に重複する。つまり、長



第96図 不定形石器

D類長幅分布図

第97図 不定形石器

D類重量分布図

さと幅の差異がほぼ反映している。D1類が軽いのは、厚みはあるが小ぶりの素材を用いているためと考えられる。

石材 第53表参照。分類ごとに若干の差が認められ、D1類は頁岩・鉄石英・安山岩が多く(79%)、D2類は黒色頁岩・鉄石英・ホルンフェルスが多い(60%)。D3類はさらに石材は限定され、鉄石英と頁岩で76%を占める。硬質で緻密な石質のものを使用する点で共通する。

使用痕 尖端部に極端な削離が認められたものが、D1類1点(95)、D2類2点(565)、D3類10点(14・99・223・570)存在する。また尖端部の先端のみ磨耗しているものが、D1類1点(95)、D2類2点(96・97)ある。極端な削離は石錐においてわずかに認められただけであり、他器種では認められない。磨耗は石錐の錐部のように広い範囲にわたるものとは明らかに異なる。D類は鋭利な尖端部を持つ石器であることから、この極端な削離や磨耗は使用の結果によると考えられる。つまり、尖端部を強い力で敲くような機能が想定される。また、尖端部に統く両側縁には使用痕が認められないことから、主に尖端部付近を使用したと考えられる。

その他 類似資料として、長野県『梨久保遺跡』の不定形石器⑦類(山田 1986)、宮城県『田柄貝塚』の不定形石器Ic類(笠原・茂木 1986)、同じく『大栗川遺跡』(佐藤・赤澤 1988)の不定形石器II C類の一部等がある。

e E 類 (38・100・224・301~303・356・391・573~586 図版 371・372)

抉入石器またはノッチと呼ばれている石器であり、刃部ラインは当然内凹状を呈している。刃部の大きさにより、2つに分けた。

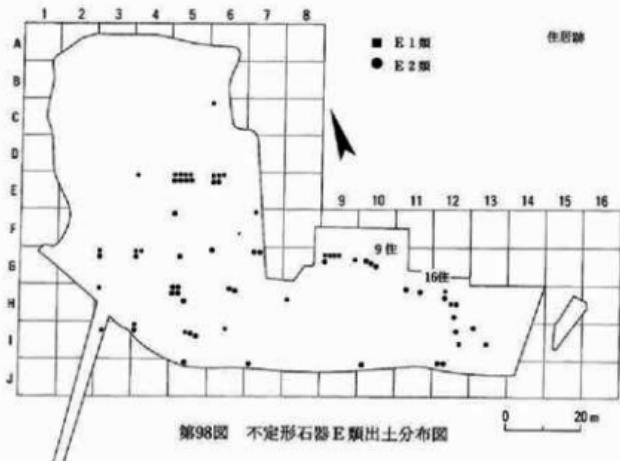
E 1 類 刃部が大きいもの(大ノッチ)。(100・301・302・356・391・573~578 図版 371)

E 2 類 刃部の小さいもの(小ノッチ)。(38・224・303・579~586 図版 372)

刃部形成では当然のことながらE 1 類は大型剥離を、E 2 類は中型または小型剥離を連続的にまたは数回施す。片面加工が一般的である。また、E 1 類には浅角度剥離も見られるが、急角度の剥離を基本とする。素材については縦長剝片・横長剝片のいずれも使用するが、E 1 類は厚手がやや多く、E 2 類は薄手が多い。二次加工部位は縦長剝片の場合は側縁に、横長剝片の場合は底縁または側縁に行うのが一般的である。

分類別出土数と出土分布状況 第50表・第98図参照。総数74点出土し、不定形石器全体の5.8%を占める。遺構内より25点(34%)、遺構外より49点(66%)出土し、遺構外のものが多い。遺構内出土のものはE 1 類がフラスコ状土坑から、E 2 類が住居跡からのものが多い。分類別ではE 1 類29点(39%)、E 2 類45点(61%)で、E 2 類が多い。

個々の遺構ごとでは、9号住居跡3点、16号住居跡2点、31号フラスコ状土坑3点が出土している。



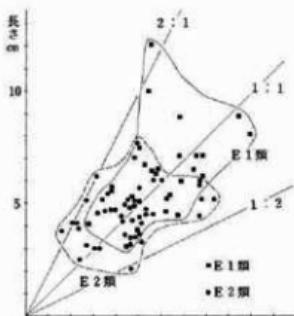
遺跡全体での出土分布状況では、G～J～5～13区の遺構集中地区、土石流跡のE～5・6区からの出土が多い。

大きさと重さ 第99・100図参照。E 1類は長さ4.4～7.1 cm・幅4.5～7.8 cmに、E 2類は長さ3.0～6.0 cm・幅2.1～5.6 cmにかけて多く分布し、E 1類は長さ・幅が大きく、逆にE 2類は小さい。厚さもE 1類が厚く、E 2類が薄い傾向にある。

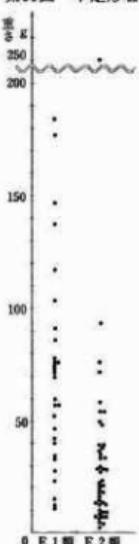
重さについては、大きさが反映しE 1類が10 g以上に散在するのに対し、E 2類は5～40 gにかけて集中し、E 2類が軽い傾向にある。大きさ・重さの差は、刃部の大きさに関係しているといえよう。

石材 第53表参照。E 1類・E 2類では、ほぼ同様の石材を選択し、頁岩(24点)、鉄石英(21点)、流紋岩(12点)が多く用いられ、この3種類で77%を占める。これ以外に使用された石材も含め、硬質で緻密な石質のものを選んでいる。

その他 刃部の数は1個を基本とするが、E 2類では14点に複数の刃部が認められた。しかも、E 1類に含めたが356のように大・小2種類の刃部を持つものも存在する。刃部の使用痕については1点も認められなかった。その中で391は刃部以外の両側縁の一部に敲打状のつぶしが認められる。



第99図 不定形石器E類長幅分布図



第100図 不定形石器E類重量分布図

f F 類 (15・16・42・43・60・68・101～104・160・177～180・271・277・304～306・392～399・587～606 図版 372)

刃部の二次加工は、中型または小型で急角度の剥離が不連続に施される石器である。しかし、小型剥離のものが非常に多い。一部浅角度の剥離のものも含まれている。素材と刃部位置より3つに分けた。

F 1 類 縦長剥片を素材とし、側縁を刃部とするもの。(15・16・42・101・160・177・178・271・277・304～306・392～396・587～592 図版 372)

F 2 類 縦長剥片を素材とし、下端または下端と側縁の一部を刃部とするもの。(43・102～104・179・397・593～599 図版 372)

F 3 類 横長剥片を素材とするもの。(60・180・398・399・600～606 図版 372)

いずれも素材の形状を変えることなく刃部とするため刃部ラインはF 2 類以外さまざまなものが多い。F 2 類は端部の丸味を利用し刃部とするものが一般的である。二次加工部位は刃部の位置に一致し、大半が片面加工である。なお、F 3 類は台形状の素材を多く用いている。

分類別出土数と出土分布状況 第50表・第101図参照。総数257点出土し、不定形石器全体の20.2%を占め、最も高い比率を示す。遺構別では遺構内より90点(35%)、遺構外より167点(65%)と遺構外出土が多い。遺構内のものは住居跡からが多い。各分類でもほぼ同様の出土傾向を示す。分類別ではF 3 類112点(44%)、F 1 類81点(32%)、F 2 類64点(25%)出土し、素材別に見ると縦長剥片が145点(56%)を占める。

個々の遺構ごとでは、3号住居跡4点、7号住居跡4点、16号住居跡8点、17号住居跡3点、20号住居跡8点、46号住居跡2点、11号フラスコ状土坑2点、33号フラスコ状土坑2点、39号フラスコ状土坑2点、28号土坑より2点出土している。

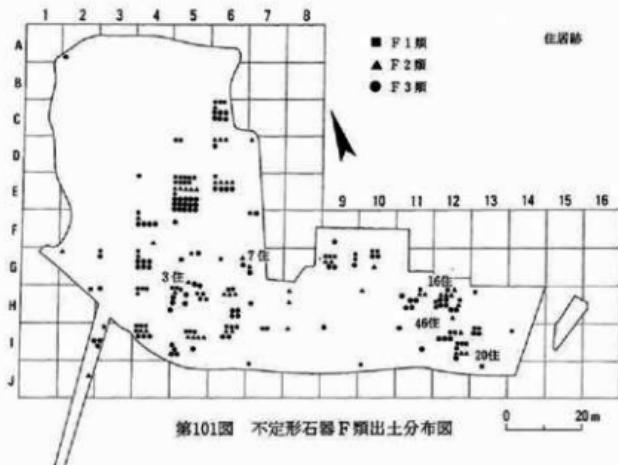
遺跡全体での出土分布状況を見ると、遺構集中地区のG～I-5～13区、及びその西側のG～I-4区、土石流跡E-5・6区からの出土が多い。このほか本遺跡より一段高い斜面で、しかも遺構の全く存在しないC-6区からの出土がやや多く注目される。

大きさと重さ 第102～104図参照。F 1 類とF 2 類はほぼ同様の分布を示し、長さ4.0～7.5cm・幅3.0～6.0cm・長幅比2:1～1:1を中心に分布する。F 3 類は長さ3.0～5.0cm・幅4.0～6.0cm・長幅比1:1～1:2を中心に分布する。素材を分類基準に求めたため、F 1 類・F 2 類は縦長、F 3 類は横長の傾向である¹⁾。長幅比ではF 1 類・F 2 類がやや分散化傾向にあるといえる。

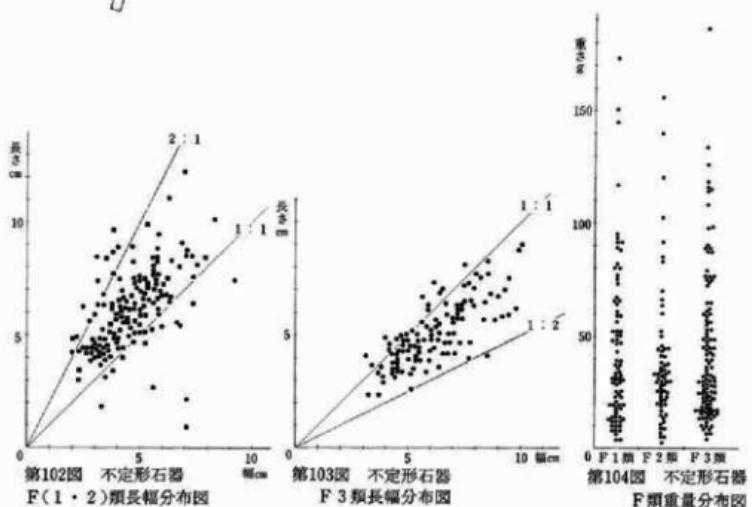
重さについては、分類ごとの差は認められず5～55gにかけて多く分布する。

石材 第53表参照。各分類ともほぼ同様の石材を使用している。全体的に見ると頁岩(101

1) ダグラフ上では、いずれの分類でも長幅比1:1の外側に存在するものが一部ある。しかし、これは折断等の加工によるもので、素材獲得時にはそれぞれ縦長剥片・横長剥片であったと考えられる。



第101図 不定形石器F類出土分布図



点)、鉄石英(65点)、流紋岩(33点)が多く、この3種類で77%を占める。これ以外に使用されている石材も含め、硬質で緻密な石質のものを用いている。

その他 使用痕の認められるものは、F1類で8点(271・277・394・587)、F2類で11点(102・104・397・595)、F3類で6点(60・600)存在し、いずれも刃部の縁辺に磨耗痕や光沢痕を残るものである。このことは、F類のような粗雑な造りの石器も十分石器として用いられたことを意味するといえる。

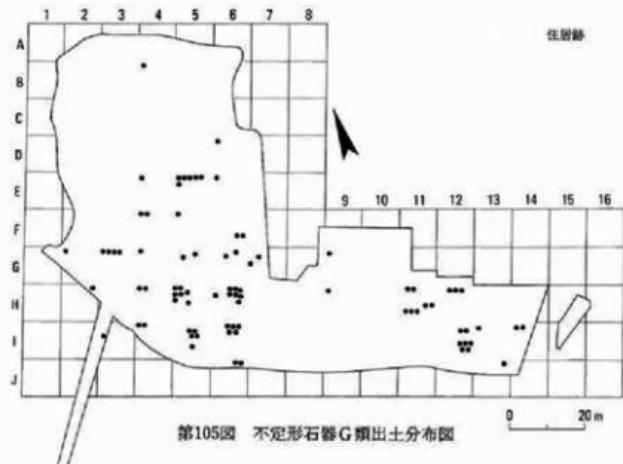
g G 類 (39・51・105・106・181・182・276・307・308・357・400~403・607~613 図版 372)

刃部の二次加工に、大型または中型の剥離を浅角度に施す石器である。剥離の大きさが一定しないが、連続的に施されるものもかなり存在する。素材は他の不定形石器に比べ、やや大型の剥片を用い、縦長剥片は剥離に、横長剥片は底縁に二次加工を施すものが一般的である。しかし、この部位より広い範囲に施される石器も多い。刃部ラインについては直線状や外彎状を呈するものが大半で、内彎状のものはほとんど存在しない。これは、二次加工の剥離が大きいために、ある程度もとの素材の形状を変えているためと考えられる。

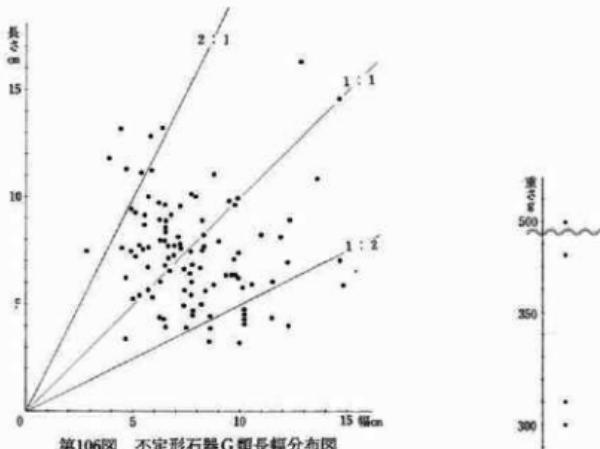
出土数と出土分布状況 第50表・第105図参照。 総数103点出土し、不定形石器全体の8.1%を占める。遺構別では遺構内より36点(35%)、遺構外より67点(65%)と、遺構外からの出土が多い。遺構内では住居跡から約半数出土している。

個々の遺構では、8号住居跡2点、16号住居跡3点、20号住居跡5点、23号住居跡2点、46号住居跡2点、11号フ拉斯コ状土坑3点、52号フ拉斯コ状土坑2点、28号土坑2点が出土している。

遺跡全体での出土分布状況を見ると、遺構集中地区の両側のG-I-5・6区とH-I-12区、及び遺構集中地区の西外側のG-3区、土石流跡のE-5区からの出土が多い。



第105図 不定形石器G類出土分布図

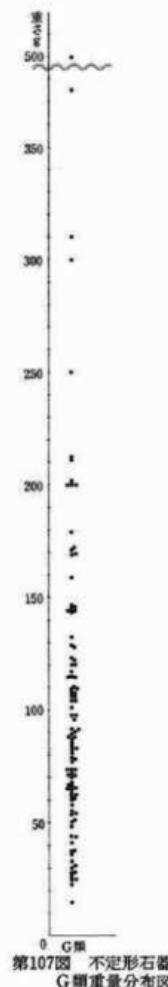


第106図 不定期石器G類長幅分布図

大きさと重さ 第106・107図参照。集中的な分布が見られず、長さ3.0~11.5cm・幅4.5~12.5cmの広い範囲に散在する。長幅比においても2:1~1:2の範囲に含まれないものも多い。重さについては20~130gに多く分布する。個々の石器を見ると小さく軽いものから大きく重いものまで、個体差の大きい石器といえる。しかし、他の不定形石器に比べると、大きくて重いものが多い傾向にある。

石材 第53表参照。他の不定形石器に比べ、それほど石材選択の集中化は見られず、多種類の石材を用いている。また硬質で緻密な石質の頁岩(14点)や黒色緻密安山岩(12点)、これらよりやや硬さが劣ると考えられる黒色頁岩(23点)やホルンフェルス(9点)、軟質系の石材である結晶片岩(4点)や砂岩(3点)などと、石質から見ても様々なものを使用している。

その他 使用痕の認められるものは13点(39・105・182・357・403・611)存在する。その多くは刃部の縁辺の磨耗痕や光沢痕やつぶれである。しかし、39・182のように刃部の内側までの広範囲に使用痕が残るものもある。



第107図 不定期石器G類重量分布図

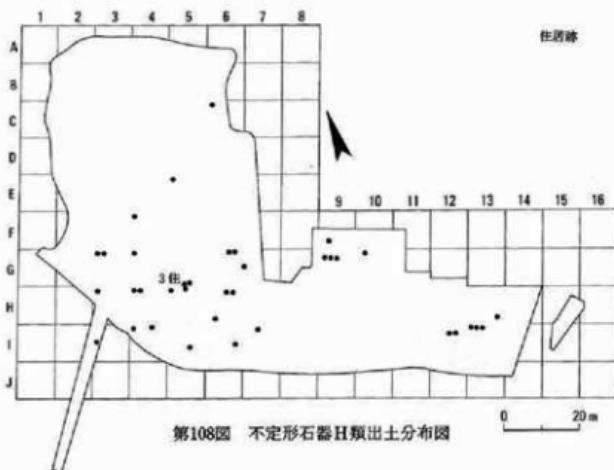
h H 類 (17・18・163・614~617 図版 373)

背面（正面）が全て自然面または広く自然面を残す剥片を素材とし、刃部には小型で浅角度の剥離が施されたり、または使用の結果によると考えられる微細剥離や磨耗痕・光沢痕等が認められる石器である。なお、少數ながら中型の剥離が施されているものも含まれている。また素材は横長剥片を基本とするが、縦長剥片も一部含まれている。刃部は橢円形状に剥離された素材の最も長い縁辺を利用するため、横長剥片は底縁、縦長剥片は側縁を刃部とするのが一般的である。また、素材の形状から刃部ラインは外輪状を呈し、刃部範囲を決めかねるものが多い。

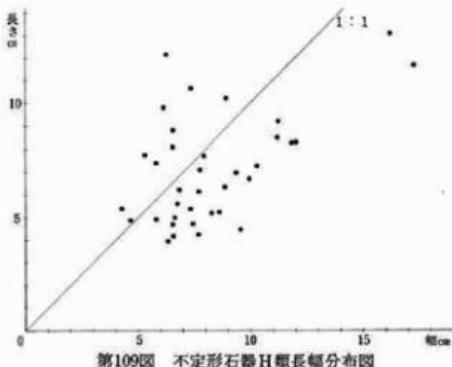
出土数と出土分布状況 第50表・第108図参照。総数36点出土し、不定形石器全体の2.8%を占める。遺構別に見ると、遺構内より20点(56%)、遺構外より16点(44%)と遺構内からがやや多い。遺構内出土のものは住居跡から約半数出土している。

個々の遺構ごとでは、3号住居跡より3点、26号フラスコ状土坑より2点出土している。

遺跡全体での出土分布状況は、資料数が少なく、遺構集中地区のG・H-5・6区やG-9区、I-12・13区にやや多く分布する程度で、あまり集中的な分布は認められない。



大きさと重さ 第109・110図参照。長さ4.0~11.0cm・幅4.0~12.0cmの範囲にはとんど含まれるが、集中化は認められず散在する。長幅比は1:1より幅が広いものが多く、横長剥片が多い。重さも集中的な分布は認められないが、20~110gのものがやや多い。G類と同様に個体差の大きい石器であり、また、他の不定形石器に比べ大きく重い傾向にある。



第109図 不定形石器H類長幅分布図

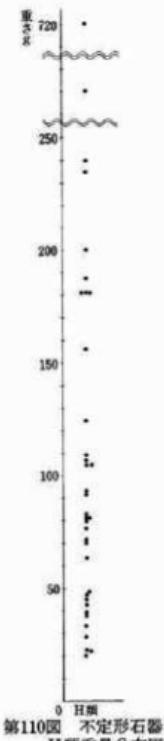
石材 第53表参照。黒色頁岩(8点)、結晶片岩(5点)、粘板岩(5点)が多く用いられ、他の不定形石器で多用された頁岩や鉄石英が存在しない。つまり、硬質で緻密な石質ではなく、一般的に軟質で板状に大きく剥離する石質のものを利用している。

その他 使用の結果と考えられる散剝離痕以外に使用痕の認められる石器は3点(615)存在し、このうち615は刃部の縁辺が磨耗している。

H類の類似資料として、県内では「貝殻状剝片」(高橋・小池 1986)とされたものの中に二次加工や使用痕のある石器がある。貝殻状剝片は糸魚川地方の各遺跡で多数出土している¹⁾。一方、県外では、長野県で²⁾「横刃型石器」(桜井 1986)と呼称されている石器で背面に礫表皮を多く残すものや東京都「恋ヶ窪遺跡調査報告III」(砂田 1982)で「打製石斧素材剝片」として報告された石器で使用痕のあるものなどがある。横刃型石器は中期に入ると出土量が増加し、八ヶ岳山麓・天竜川流域において普遍的に見られるといわれている(小林 1988)。H類のような石器は、原石を無加工のまま加刷し、剥離した剝片をそのまま利用したものが多いため、石器として認定するのは困難なものが多い。従って、類例はさらに増え、分布も広いものと考えられる。機能・用途は、貝殻状剝片について「鋭利な縁辺を使用した石器、打製石斧などの素材」(高橋・小池 1986)や「磨耗痕などから皮はぎや土掘り具」(山本 1988)、横刃型石器について「鋭い刃部による切断、用途は植物質食料の採集・収穫」(桜井 1986)や「刃部に平行ないし、わずかに斜位に磨滅痕…切削のために残された痕跡」(小林 1988)と推定されている。いずれにしても、H類は二次加工や使用痕などから打製石斧の素材とは明確に異なる石器であり、それは打製石斧より小さいことからも裏付けられる。そして、鋭い縁辺を使用した石器といえる。

1)原山・大塚遺跡(寺崎 1988)、三屋原・三屋原B・四割・杉沢遺跡(山本・池田 1988)等から出土している。

2)横刃型石器は昭和40年代に認知された(小林 1988)といわれるが、器種名の初見については不明である。



第110図 不定形石器H類重量分布図

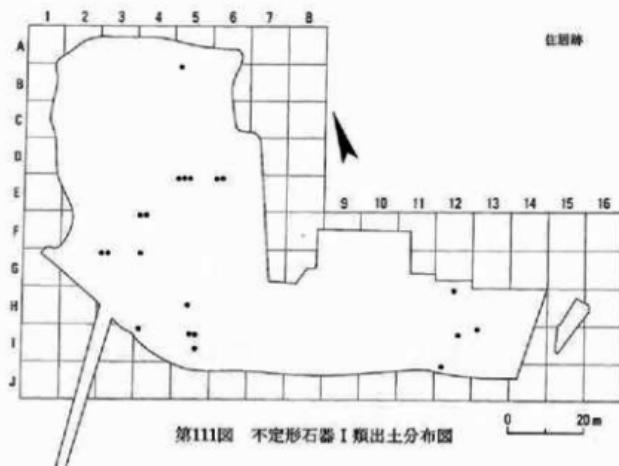
i I 項 (61・618~621 図版 373)

素材の端部の限られた部分に小型の剥離を連続的に施した石器である。二次加工は片面加工で背面に施されるのが大半を占め、主要剥離面は平坦のままである。従って刃部断面形は片刃である。刃部ラインは小型の剥離が連続的に施されるため、丸味を持つ。素材は薄手で小型のものが一般的である。

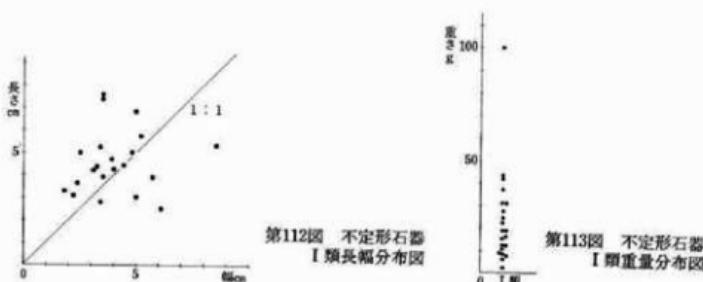
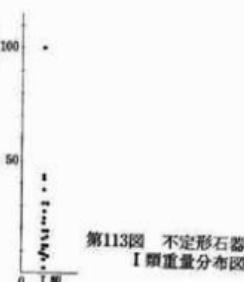
出土数と出土分布状況 第50表・第111図参照。総数21点出土し、不定形石器全体の1.6%を占め、比率は最も低い。遺構外より17点(81%)出土し、遺構内からは非常に少ない。

全て単独出土である。

遺跡全体の出土状況を見ると、資料数が少なく散在する程度であるが、土石流跡のE-5・6区、遺構集中地区西外側のF-4区・G-3区、遺構集中地区の両側のH・I-5区やH-I-12区に分布する傾向が見られる。



第111図 不定形石器I類出土分布図

第112図 不定形石器
I類長幅分布図

大きさと重さ 第112・113図参照。長さ2.5~7.5cm・幅2.0~6.0cmにはほとんど含まれ、中心は長さ4.5cm・幅4.0cm程度である。長幅比では1:1よりやや長いものが多く、縦長剥片も多く用いているといえる。重さについては5~30gにかけて多く分布する。他の不定形石器に比べ、小さく軽い石器が多い。

石材 第53表参照。他の不定形石器に比べ、最も著しい石材の選択が認められる。鉄石英(10点)と頁岩(8点)が多く、この両者で86%を占める。いずれも硬質で緻密な石質である。

その他 使用痕のあるものが2点(61・621)あり、61は刃部の縁辺が磨耗し、621は光沢を帯びるものである。

j J類 (19・44・107・108・183・309・310・358・404・405・622~626 図版373)

刃部には二次加工が施されず、使用の結果によると考えられる微細剝離痕や使用痕(磨耗痕、光沢痕、線条痕・つぶれ)が認められる石器を一括した。從来より「微細剝離痕のある剥片」「使用痕のある剥片」と呼ばれていたものである。様々な形状の素材を用いているため、刃部ラインも多様である。しかし、刃部となる部位は、縦長剥片の場合は側縁に、横長剥片の場合は側縁または底縁になるのが多く、刃部断面形が鋭角になる部分を使用している。

出土数と出土分布状況 第50表・第114図参照。総数150点出土し、不定形石器全体の11.8%を占め、やや高い比率を示す。遺構別に見ると遺構内より70点(47%)、遺構外より80点(53%)とはほぼ同じ。遺構内からのものは住居跡から半数出土している。



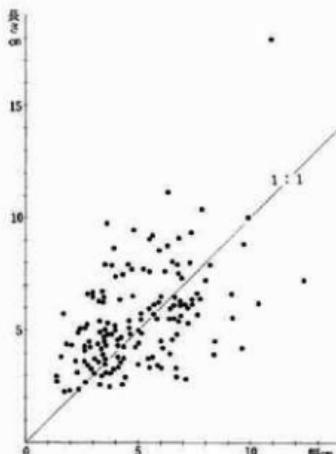
個々の遺構ごとでは、4号住居跡2点、16号住居跡11点、20号住居跡6点、21号住居跡2点、39号住居跡2点、42号フ拉斯コ状土坑2点、27号土坑2点、G-9区ピット35より3点、H-11区ピット20より3点が出土している。

遺跡全体での出土分布状況は、遺構集中地区のG-I-5-13区、土石流跡のE-5・6区、調査区西側のG-4区に多く分布する。

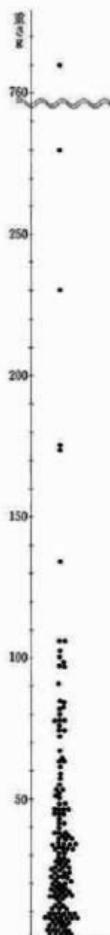
大きさと重さ 第115・116図参照。長さ3.0~6.5cm・幅2.5~7.0cmを中心には分布するが、長さと幅及び長幅比にかなりの差が認められる。重さにおいては5~40gにやや多い。しかし、これ以上の重さのものも多く存在する。これは様々な形状の素材が用いられたためと考えられる。

石材 第53表参照。頁岩(50点)、鉄石英(40点)、流紋岩(20点)、黒色頁岩(14点)が多く使用され、この4種類で124点(83%)を数える。これらの石材は硬質で緻密な石質である。

その他 使用痕の認められるもの23点(19・44・626)、使用の結果と考えられる微細剥離痕のあるもの127点が存在する。微細剥離痕は全て刃部の縁辺にあるもので、使用痕も刃部の縁辺にあるものが多い。しか



第115図 不規形石器J類長幅分布図



第116図 不規形石器J類重量分布図

し、19のようすに刃部の内側まで磨耗痕や光沢痕があるものも存在する。また、626は非常に大型の剥片からなり、主要剥離面の中央部に広く磨耗痕や光沢痕が顕著に認められ、縁辺部は使用痕が認められないものである。他の石器とは異なった方法で使用されたと考えられる。

k 分類不可 (1・69・75・109・184・253・627・628)

前述のようにA類からJ類まで分類した。しかしながら、これらの分類に含められない石器が294点も存在し、これは不定形石器全体の23.1%を占める。分類不可の石器は全て剥片を素材とする。図示した石器では、刃部の二次加工が極めて急角度で大型の剥離が連続して施されるもの(1・184)、一個の石器に異なる形状の刃部が複数あるもの(69・75・109・627・628)などがある。数量的には少數で1分類としてまとめることができない石器である。また、図示していないが、欠損品や破片のため分類できないもの、不定形石器という性格上単に二次加工が認められるものなどがある。また、未製品と完成品の区別が困難なことから未製品も含まれていると考えられる。分類不可とした石器の石材はその多くが硬質で緻密な石材である。いずれにしても、これらの石器のほとんどは、不定形石器の大半で扱われるものであり、一つの道具として使用された可能性は高い。

以上の分析のはかに素材(剥片)の観察をおおまかに行った。観察の集計は第54表のとおりである。観察や計測できない石器も多く存在するが、一般的傾向を把握するために項目ごとにまとめてみる。分析の対象は、分類不可以外の981点である。

素材の種類 第54表参照。全体的に見ると、縦長剥片413点、横長剥片431点でいずれにも片寄る傾向は見られない。両極剥離痕のある剥片(以下、両極剥片とする)が6点と少ないながら存在することは注目される。両極打法(バイボーラーテクニック)は前期旧石器時代から古墳時代の各時期にわたって確認されており(阿部1983)、本遺跡でも両極打法の剥片生産が行われていたといえる。しかし、その数量が極めて少ないとから、主体的なものではないといえよう。分類別に見ると、著しく横長剥片の比率が高いのはB類・G類・H類であり、この3者の共通点は、刃部ラインが直線状または外彎状を呈し、刃部が比較的長い石器ということである。逆に縦長剥片の比率が高いI類は、素材の端部の限られた部分を刃部とするものである。このように刃部形状と素材の種類にある程度関係が認められる不定形石器も存在する。これ以外の分類では、それほど素材の種類に片寄りは認められない。これは素材の種類にこだわらないのではなく、素材の形状を有効に利用したためと考えられる。それは既に各分類の分析で述べたように、素材と二次加工部位(刃部位置)がある程度関係ある¹⁾ことからも裏付けられる。もちろん、これらのこととは一般的な現象であり、この傾向にあてはまらないものも多い。なお、A類・B類・F類内の細分類で素材の種類が一方に片寄るのは、分類基準に素材の種類を含めたため

1)第51表の素材と二次加工部位を参照。

である。

剝片の形状¹⁾ 第54表参照。観察可能数665点である。背面の様子を観察するとC型(背面が全て剥離面)のもの404点(61%)、B型(背面の一部が自然面)のもの199点(30%)、A型(背面が全て自然面)のもの62点(9%)である。打面の様子を観察すると1型(自然面打面)のもの296点(45%)、2型(剥離が1つの剥離面打面)のもの266点(40%)、3型(剥離が2つ以上の剥離面打面)のもの103点(15%)である。さらに細かく見るとC1型のもの185点(28%)、C2型のもの147点(22%)、B2型のもの106点(16%)を数え、これらの剝片が多いといえる。各分類ごとに見てもH類以外はほぼ同様の傾向といえる。H類でA1型が非常に多いのは、背面に自然面を残す素材が多いためである。

打面の大きさ²⁾ 第54表参照。打面と最大幅の大きさを相対的に比較したもので、計測可能数665点である。最大幅の1/2より大きいものは458点(69%)で、このうちほぼ最大幅と同じものが88点を数える。最大幅の1/2以下のものは207点(31%)であり、最大幅に比べ打面幅の大きい剝片が多いといえる。各類別では、A1類とE1類が約半数ずつになり、これ以外は全体の傾向とほぼ一致する。

転位痕³⁾ 第54表参照。主要剥離面と背面との剥離方向の比較であり、観察できたのは810点である。0°(同方向)のもの457点(56%)、90°(約90°ずれる)のもの264点(27%)を数え、これらの剝片が多い。各分類別ではC2類・D類・E類が0°と90°とがほぼ同数になり、これ以外は全体の傾向とほぼ一致する。

折断状の痕跡 第54表参照。素材のいづれかに折断状の痕跡が認められるのが364点(37%)存在し、非常に多い数といえる。分類別では、A類(60%)・C類(47%)・D類(60%)が多い。全てが折断とは限らないが、このように折断状の痕跡が多く認められることは、素材獲得段階または整形・二次加工の一部として折断の技術がかなり用いられていたと考えられる。

-
- 1) 22)剝片類の分類を参照。
 - 2) 22)剝片類の打面の大きさを参照。
 - 3) 22)剝片類の転位痕を参照。

第54表 不定形石器素材(剝片)観察表

項目 分類	出土 数	素材の種類		剝片の形状						打面の大きさ			主要剥離面と背面との軸位置			折断状の観察										
		巻長 剝片	巻長 剝片	A型	B型	C型	1型	2型	3型	1型	2型	3型	1型	2型	3型	可	不可	無・ 不明								
A 1頭	30	28	1	1	1	1	1	2	4	7	3	11	1	8	10	11	15	9	2	4	20	10				
A 2頭	25	25	1	1	1	1	3	1	3	5	3	8	2	11	4	8	11	8	3	3	13	12				
B 1頭	20	18	1	1	1	1	4	1	3	2	8	9	3	8	11	3	2	4	9	11						
B 2頭	32	31	1	2			2	2	6	2	5	13	2	13	4	13	12	9	4	3	4	10	22			
C 1頭	65	19	26	20	2	1	4	11	1	10	9	4	23	5	23	12	23	14	4	2	11	36	29			
C 2頭	22	11	6	5			1	3	3	2	3	10	2	6	4	10	11	10		1	11	11				
C 3頭	80	18	35	2	25	6	2	9	5	3	12	3	4	36	6	27	11	36	15	5	2	32	31	49		
D 4頭	4	2	1	1	1					1			2		1	1	2	1	1		2	2	2			
E 1頭	14	5	2	7	1				1	2		10		3	1	10	5	2			7	12	2			
F 2頭	15	5	9	1			2	1	2	1	9		4	2	9	5	4		1	5	7	8				
G 3頭	33	12	14	1	6			4		6	9	2	12	5	9	8	11	14	14	2	1	2	18	15		
H 4頭	29	13	11	5	1	1	2	5	1	5	3	1	10	1	8	10	11	10	1	3	4	14	15			
I 2頭	45	18	16	11		1	2	4		8	10	3	17	5	13	10	17	18	14	2	3	8	17	28		
J 1頭	81	80	1	1	1	1	4	13	5	21	17	8	11	11	33	21	11	44	28	5	2	2	30	51		
K 2頭	64	61	1	2	3	1	2	11	1	18	12	5	11	7	37	9	11	33	18	6	7	14	50			
L 3頭	112	110	2		1		13	11	5	29	22	10	21	4	48	36	22	72	27	7	1	5	34	78		
M 4頭	103	32	60	11	7	2	8	13	1	21	11	5	35	11	34	23	35	51	24	6	4	18	29	74		
N 5頭	36	7	26	3	18	3	1	4	1				9	2	15	10	9	4	1	31	6	30				
O 1頭	21	12	6	3			2	5	2	1	2	3	6	3	5	7	6	9	10		2	4	17			
P 1頭	150	72	53		25	1		6	10	6	30	33	10	54	21	56	19	54	70	44	10	7	19	47	103	
合計	981	413	431	6	131	45	13	4	66	106	27	185	147	72	316	88	370	207	316	457	264	57	32	171	394	617

15) 石 錘 (747・748 図版 382)

漁網鍤または縫物を編む際のおもりと考えられる(鈴木 1981)石錘は 2 点(747・748)と非常に少ない。いずれも梢円形の礫を用い、短軸の両端を打ち欠いた礫石錘である。出土数が少ないことは、石器組成や生業を考えるうえで注目される。

16) 台 石 (458・459・745・746 図版 382)

大型の礫の表面に敲打痕が認められる石器で、石皿のように磨面のないものである。しかし、石皿に含めたものの中には、磨りと敲打痕の混在していたものもあり、石皿と兼用されていた石器ともいえよう。総数 4 点と非常に少ない。いずれも正面または正裏面のほぼ中央部が敲打され、表面が荒れたり、弱い凹みなどが認められる。出土状況はその他のビットより 2 点(458・459)、造構外より 2 点(745・746)出土している。大きさ・重さについては長さ 15 cm 前後から 25 cm 程度、重さ 1,400 g から 6,000 g までの様々なものからなる円形または梢円形の礫を用いている。石材は花崗岩(458・459)、頁岩(745)、安山岩(746)である。

17) 部 分 的 に 研 磨 の 有 る 石 斧 (749 図版 382)

石材、形状、製作技術等は、打製石斧に極めて近似するが、部分的に研磨されている石斧である。打製石斧か磨製石斧のどちらに分類するか判別できなかった。総数 2 点と非常に少ない。749 は扁平礫に粗雑な剥離を加え、刃部は右下りに、両側縁は横方向に研磨を加えたもので、石材は結晶片岩である。図示していないもう 1 点は素材が剥片、石材が黒色頁岩、大きさが 749 より小さいだけで、ほぼ同様のつくりの石斧である。これ以外に未製品としたものが 2 点ある。いずれも欠損品である。詳細は不明であるが、磨製石斧または石製品の未製品の可能性もある。

18) 摺 痕 の 有 る 剥 片 (460)

節理面で割がれた剥片に線条痕のような痕跡が残る石器である。いずれも破片で詳細は不明である。総数 6 点出土しているが、460 を含む 4 点は石材から同一個体と考えられ、実数は 3 点になる。

19) 摺 器 (41 図版 382)

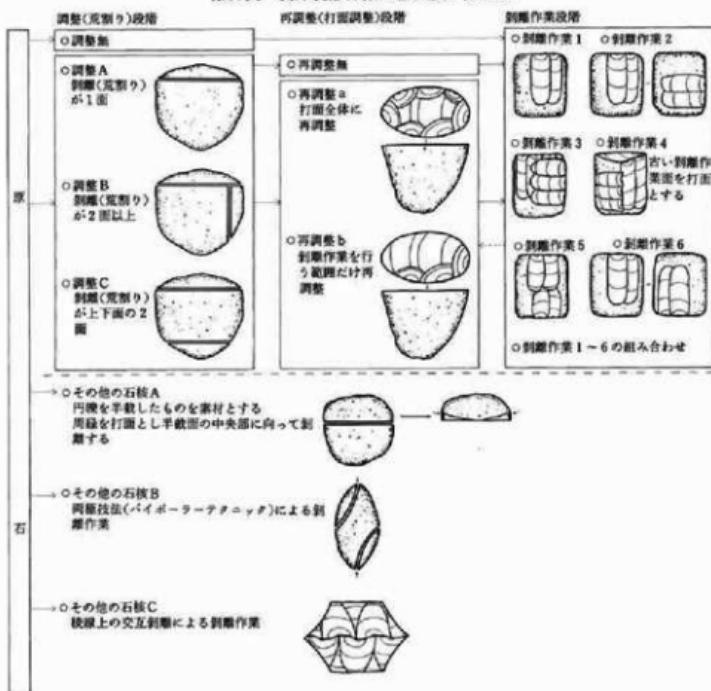
1 点のみ出土である。平面形は梢円形を呈し、二次加工は片面加工で、丁寧な剥離が周縁に連続して施されている。横長剥片を素材とし裏面は平坦な面である。平面形、二次加工等から「小瀬が沢洞窟」(中村 1960)出土の石器に近似する。また、風化状態は、同質の他の石器より激しいことから、縄文時代中期前半より古い時期のものと考えられる。

20) 分類不明石器 (215・252・461・750)

前項までの器種のいずれにも含まれない石器を一括した。総数89点を数え、石器全体の2.8%を占める。図示した石器では、215が剥片を素材とし、周縁から二次加工を加え、長方形に仕上げ、特に上下端側はやや小型の剥離が施されている。打製石斧からの転用品の可能性もある。252は棒状の礫に剥離が加えられた石器で、正面は潰れており、側面から裏面にかけて黒色付着物がついている。付着物の成分は不明であり、また、破損品と考えられる石器である。461は継長剥片の片側縁に横方向の磨痕が認められる石器で、磨面は尖らず平坦になっている。750は円柱状の礫の端部に敲打痕が認められる石器で、破損品と考えられるが、重さ4,800gの大型品である。

これ以外で図示していない石器の多くは、石核状の素材の一部に二次加工を加え、鋭い刃部を作出したもので、いわゆる石核石器の一種である。形は不定形を呈し、石材は硬質で緻密なものが多く用いられている。今後はこれらの石器にも分析を加えていく必要があると考えている。

第55表 剥片剥離作業工程表及び分類表



21) 石核 (752~787 図版 383・384)

石核に分類されたものは、剥片剥離作業の行われたと推定される残核、剥片剥離作業の前段階と考えられる調整石核である。これらの石核の总数は 136 点ある。石核及び剥片の分析は、剥片剥離技術を解明するうえで、極めて重要なことといえる。しかし、本遺跡においては、剥片の接合を行っていない¹⁾。従って、不十分ではあるが、一応出土した石核をもとに剥片剥離作業工程で推定した。第 55 表参照。

分類 第 55 表の剥片剥離作業工程表をもとに石核を分類した。剥片の接合等を行っていないため、分類不明の石核も多く存在する。以下、各段階ごとに記述する。

ア、原石獲得段階 石核や剥片のものとなる原石を獲得する段階である。各器種の分析で述べたように、器種ごとに石材や大きさなどにある程度違いが存在することから、その石器の素材となる剥片（以下、目的剥片とする）に適した石材や大きさなど、また、剥離作業の行いやすい大きさや形などを考え、原石を採集したものと推定される。しかし、本遺跡は段丘上に立地するため、段丘内の砾と原石との区別が困難である。また明らかに他地方から搬入された原石（例えば黒曜石や蛇紋岩）が存在しないことから原石か否かの判別がつかなかった。

イ、石核調整（荒割り）段階 剥片剥離作業の前段階で、目的剥片を得るために石核をつくる段階である。4 つに細分できる。

調整無 荒割りの行われない石核で、原石と同じ。原石と同様に確認されていない。しかし、再調整段階を経ず、剥離作業段階に進行すると考えられるため、原石のまま既に剥離作業のできる形状をしていたといえる。752 は調整無から剥離作業 1 を行ったものである。

調整 A 大まかな剥離（荒割り）が 1 面だけに行われるもの（753 ほか）。この剥離面が打面になるもの（755・756）とならないものがある。

調整 B 大まかな剥離（荒割り）が 2 面以上に行われるもの（757 ほか）。この剥離面が打面になるもの（760 ほか）とならないもの（758）がある。

調整 C 大まかな剥離（荒割り）が上下面の 2 面に行われるもの。この剥離面が打面になる（780）。

なお、調整 A・調整 B・調整 C で剥離（荒割り）された剥片が、極めて大型で厚手の場合石核、そうでない場合は石器として使用されたものも存在すると考えられる。

ウ、再調整（打面調整）段階 剥離作業段階の前段階で、調整（荒割り）段階で得られた石核の打面に調整を行い、打面を作出する段階である。3 つに細分される。

再調整無 打面調整を行わないもので、調整（荒割り）段階で打面は作出された石核であ

1) 土坑内の出土剥片については、接合を行った。しかし、接合した剥片は皆無であった。

る。

再調整 a 打面の周縁全体に再調整を施し、打面を作出する石核（754 ほか）である。

再調整 b 打面の一部に再調整を施し、打面を作出する石核（765 ほか）である。

エ、剥離作業段階 剥離作業面に剥離を加え、目的剥片を生産する段階である。剥離作業の基本型は 6 通りである。さらに、この基本型の組み合わせで多くの剥離作業がある。しかし、これらが複雑に組み合わさったり、剥離作業が進行したりすると明確に分類できず、不明なものも多く存在する。

剥離作業 1 同一打面で、剥離方向が同一方向に行われる。打面が 1 面で、剥離作業が 1 面の場合（752・758 ほか）と、打点が打面の周縁に移動することにより剥離作業面が 2 面以上になる場合（760・762 ほか）とがある。

剥離作業 2 別々の打面で、しかも、別々の剥離作業面で、剥離方向が約 90°ずれる方向で行われる。打面が 2 面で、剥離作業面が最低 2 面の場合（767）と、打点が打面の周縁に移動することにより剥離作業面が 3 面以上になる場合（766 ほか）とがある。

剥離作業 3 同一剥離作業面で、剥離方向が約 90°ずれる方向に行われる。打面が 2 面で剥離作業面が 1 面である（770・771）。

剥離作業 4 別々の打面で、しかも、別々の剥離作業面を用いるが、片方の打面は古い剥離作業面を利用する。打面が 2 面で、剥離作業面が最低 2 面の場合と、打点が打面の周縁に移動することにより剥離作業面が 3 面以上になる場合とがある。

剥離作業 5 同一剥離作業面で、剥離方向が約 180°ずれる方向に行われる。打面が 2 面で剥離作業面が 1 面である（772）。

剥離作業 6 別々の打面で、しかも、別々の剥離作業面で、剥離方向が約 180°ずれる方向で行われる。打面が 2 面で、剥離作業面が最低 2 面の場合と、打点が打面の周縁に移動することにより剥離作業面が 3 面または 4 面になる場合とがある（773）。

以上の剥片剥離工程の調整（荒割り）段階、再調整（打面調整）段階、剥離作業段階の段階順序を組み合わせ、石核の分類を行った。一方、前述の剥片剥離作業工程では、必ずしも十分に説明できない石核をその他の石核として 3 分類した。

その他の石核 A 調整石核は円錐を半載したものであり、半載面を剥離作業面とする。自然面である半載面の周縁から、半載面（剥離作業面）の中央部に向かって剥離作業が行われる石核である（781・782）。

その他の石核 B 両極枝法（バイボーラーテクニック）による剥離作業が行われる石核であ

る(783・784)。素材は縦長の角柱状または橢円形状の礫と考えられ、また、加撃点(両端)の潰れ、彎曲のない剥離面やバルブ(打瘤)の発達しない剥離面などビエス・エスキーニ(楔形石器)の諸特徴(岡村1983)と一致する。

その他の石核C 石核の稜線上から交互剥離により、剥離作業が行われる石核である(785・786)。素材は扁平な礫または剥片を用いたと考えられる。

これらの分類は、観察表や実測図では略号を用いて表示した。調整段階の調整無・調整A・調整B・調整Cはそれぞれ空欄・調A・調B・調Cとし、再調整段階の再調整無・再調整a・再調整bはそれぞれ空欄・再a・再bとし、剥離作業段階の剥離作業1~6はそれぞれ作1~6とし、その他の石核A~Cはそれぞれその他A~Cとした。

分類別出土数と出土状況 第56表参照。総数139点のうち、住居跡22点、フラスコ状土坑11点、土坑8点、その他のピット17点、遺構外81点が出土している。分類別に見ると、調整・再調整段階の調整石核と考えられるものは17点を数える。調整石核の中では、調整Bの石核が82%(14点)を占める。つまり、調整石核は大まかな剥離(荒割り)が2面以上に行われているものが多いといえる。

剥離作業段階の石核及びその他の石核は122点である。この中では調整Bを経て剥離作業段階に入った石核が59点(48%)を数え多い傾向にある。剥離作業が複雑または不明の石核も大半が調整Bを経ていると考えられることから、さらに数は多くなる。つまり、調整・再調整段階の石核とはほぼ同様の傾向を示す。このことは、

第56表 石核分類別出土数

剥離作業段階

目的剥片を生産する石核は、大まかな剥離(荒割り)を行い、作り出されたといえよう。

再調整(打面調整)を見ると、剥離作業段階のもので18点を数え残核122点のうち15%を占める。多少は別にしても、再調整(打面調整)が行われていたことは事実といえる。

剥離作業では、剥離作業1が38点で最も多く、調整B以外は全て剥離作業1で占められる。剥離作業1は打面が1面であり、またその他の石核B(両極打法の石核)も打点(打面)は固定され、打面は転移しない石核である。これ以外の石核は全て打面が転移する石核である。つまり、剥離作業の行われた石核で約1/3は打面転移が行われず、約2/3は打面転移が行われた石核といえる。

調整・再調整段階

分類	点数
調A	1
調B	14
調C	1
調A 再a	1
合計	17

分類	点数	小計
作1	1	1
調A 作1	2	
調A 再a 作1	1	5
調A 再b 作1	2	
調B 作1	21	
調B 作2	7	
調B 作3	6	
調B 作5	3	
調B 作6	3	
調B 作2+4	2	
調B 作4+5	1	59
調B 作5+6	2	
調B 再a 作1	6	
調B 再a 作2	2	
調B 再b 作1	3	
調B 再b 作2	2	
調B 再b 作2+3	1	
調C 作1	1	
調C 再a 作1	1	2
複雑・不明	37	37
合計	104	104

石材 第57表参照。鉄石英(60点)と頁岩(43点)が多く、両者で74%を占める。これ以外の石材は少數ずつ多種類出土している。これらの石材の大半は硬質で緻密な石質である。また、剝片石器の中では少ない石材のメノウが7点とやや多く出土し、他地方からの搬入石材と考えられる黒曜石¹⁾が1点出土していることが注目される。一方、打製石斧・三脚石器・板状石器などに多く用いられた粘板岩、結晶片岩、砂岩などの軟質系の石材は1点も出土していない。また、剝片類のなかで最も出土の多い安山岩(角閃石安山岩)の石核も出土していない。

第57表 石核石材表

石材	鉄石英	頁岩	メノウ	流紋岩	黒色頁岩	漂灰岩	黒色巖質 安山岩	頁岩	ホルン フェルス	硬砂岩	黒曜石	不明	合計
点数	60	43	7	6	5	4	3	3	2	2	1	3	139

大きさと重さ 図示した石核を見ると²⁾、長さ3.4~7.3cm・幅4.8~7.5cm・重さ60~190gの範囲のものがやや多い。しかし、これより大きくて重いものも多く存在し、かなりのばらつきがあるといえる。これは、調整段階の石核、剝離作業段階の石核で剝離作業があまり進行していないものと進行したものとの多様な石核が含まれているためと考えられる。では、調整段階の石核はどれくらいの大きさであろうか。調整石核としたものや剝離作業段階の石核で自然面の残るもの観察から、拳大よりやや大きい程度と推定される。

ところで、石核から得られる目的剝片は当然石核より小さい。これを念頭に、石核の大きさと剝片石器の大きさを比べると、これらの石核の大部分は小型の剝片石器の石核ではないかと思われる。

以上の分析をまとめると、

- 石核の素材を得るために荒割り(調整)が多く行われている。
- 石核の打面調整(再調整)が認められる。
- 石核の約1/3は打面転移が行われず、逆に約2/3は打面転移が行われている。
- 両種技法(バイボーラーテクニック)が認められる。
- 石材では硬質で緻密なものが多く、軟質系の石材や剝片類が多い安山岩が出土していない。
- 石核の素材は、拳大よりやや大きい様と推定される。

1) 黒曜石は遺跡近くでは入広瀬村大字大白川で産出する。黒色で透明感がなく、小さなものが多い。しかし、出土した石核は灰黒色でやや透明感がある。また、繊維状の結晶(不純物)や大きさが異なることから、大白川産の黒曜石とは別で、他地方から搬入されたものと考えられる。

2) 図示した石核は、剝片剝離作業工程のわかりやすいものであり、大きさ・重さに対しては無作為に抽出した石核である。

22) 剥片類 (788~841 図版 382・383)

剥片類に含めたものは、石核から剥離作業によって得られた目的剥片及び屑片、目的剥片や礫から石器を製作する際に生じる剥片(チップや屑片など)、また、打面のない剥片や風化等により詳細不明の剥片などである。このように様々な剥片類は、総数 11,108 点を数える¹⁾。剥片類の分析は、このうちの遺構外から出土した 5,932 点とし、さらに、この中でも剥片類に多く用いられた石材を対象とした。対象数は 5,585 点を数え、剥片類の 50% にあたる。全体の 1/2 の数であるが、分析数が多いことから、得られた結果は、ほぼ全体の傾向を反映すると考えられる。

分類 剥片は一般的に打面と主要剥離面(腹面)と背面で構成される。主要剥離面は個々の剥片同士での比較が困難であるため、打面の様子と背面の様子を中心に観察分類した。

ア、背面の様子

A型 背面の全てが自然面であるもの。

B型 背面の一部が自然面であるもの。なお、剥片の下端だけに自然面がある剥片はC型に含めた。

C型 背面の全てが剥離面であるもの。

イ、打面の様子

1型 自然面打面。

2型 剥離面打面。剥離が 1 つのもの。

3型 剥離面打面。剥離が 2 つ以上のもの。

背面の様子と打面の様子を組み合わせると、次のような分類になる。

分類	背面の様子	打面の様子	
A 1型	自然面	自然面	(788~795)
A 2型	自然面	剥離が 1 つ	(796~798)
A 3型	自然面	剥離が 2 つ以上	(799~801)
B 1型	一部自然面	自然面	(802~810)
B 2型	一部自然面	剥離が 1 つ	(811~815)
B 3型	一部自然面	剥離が 2 つ以上	(816~818)
C 1型	剥離面	自然面	(819~828)
C 2型	剥離面	剥離が 1 つ	(829~836)
C 3型	剥離面	剥離が 2 つ以上	(837~841)

1) 16 号住居跡以外は覆土や包含層の水洗いをしていないため、実際はさらに多い剥片類が存在すると考えられる。また、出土した剥片類は、小型のチップや屑片が少ない。

分類別出土数と出土状況 第58・60~62表参照。総数11,108点のうち、遺構内より5,176点(47%)、遺構外より5,932点(53%)出土しており、遺構内のものはほぼ半数が住居跡より出土している。

分類別の出土数は前述のように遺構外出土の5,585点を対象とした。分類可能な剝片は2,660点(48%)であり、約半数は分類不可能であった。分類不可能な剝片の多くは打面が欠損しているものであり、この他の理由として、風化や節理等により打点の不明なもの、チップまたは屑片の小型の剝片などで剝片分析に含めない方がよいと考えられるものなどである。また、少數ではあるが打面再生剝片と考えられる剝片もある。なお、分類不可能な剝片の多い石材は、結晶片岩・ホルンフェルス系(59%)、粘板岩系(81%)、砂岩(55%)、流紋岩(55%)であり、その多くは軟質系石材または風化しやすい石材である。

分類別出土数は、C1型794点(30%)、B1型546点(21%)、C2型488点(18%)、A1型409点(15%)が多く、この4種類で84%を占める。また、背面の様子と打面の様子を別々に見ると、背面が剥離面(C型)のもの1,436点(54%)、打面が自然面(1型)のもの1,749点(66%)と多い傾向にある。

石材別に見ると、それぞれの石材で得られる剝片に大きな違いが認められる。安山岩は、B1型(43%)、A1型(28%)、C1型(26%)が多い。つまり、打面が自然面(1型)のものが非常に多く、97%を占める。硬質系の鉄石英では、C1型(30%)、C2型(36%)が多く、これ以外ではC3型(10%)が比較的多い。つまり、背面が剥離面(76%)のものが多い。同質の石材である頁岩もほぼ同様の傾向を示し、また、同じく流紋岩、黒色緻密安山岩もほぼ同様の傾向を示すが、B2型(ともに13%)も少なからず認められる。一方、軟質系の粘板岩はA1型(56%)、B1型(18%)、C1型(18%)が多く、この中でもA1型が半数以上の割合を示すのが注目される。同質の石材である砂岩は、A1類の比率が低くなり、C2類(16%)も認められるようになるが、ほぼ同様の傾向を示すといえる。また、軟質系の結晶片岩、やや硬質のホルンフェルスなどの剝片が混在する石材は、C1類(28%)、C2類(25%)、B1類(19%)、A1類(14%)が多く、軟質系と硬質系の中間的な傾向といえよう。

第58表 剥片類遺構別出土数

遺構別	住居跡	柱穴跡	フチスコ 灰土坑	土 坑	廻 土	溝 土坑	その他の ピット	遺構外	合 計
出土数	2651	17	1011	571	3	51	902	5932	11108

不定形石器の剝片形状はC1型・C2型・B2型が多く、剝片全体の傾向と一致しない。これは、剝片類には、不定形石器にはほとんど使用されていない安山岩や軟質の石材が含まれているためである。これらの石材を除き、硬質系の石材と比較するとほぼ同様の傾向を示す。

石材 第59表参照。遺構外出土の剝片5,932点のうち、安山岩(ほとんどが角閃石安山岩である)が2,005点(34%)と最も多い。硬質系の鉄石英・頁岩系・流紋岩・黒色緻密安山岩は

合わせて 2,763 点 (47%)、三脚石器・板状石器・打製石斧等で主に用いられた軟質系の結晶片岩・粘板岩・砂岩とやや硬質系のホルンフェルスは合わせて 781 点 (13%) である。剝片石器の石材と剝片類の石材を比べると、安山岩の剝片が多い割には、石器は異常に少ない¹⁾。これは安山岩の風化が激しく、二次加工が大型の剥離でないと痕跡が残らず、石器として認めにくいためと考えられる。

一方、その他の剝片は 347 点 (6%) であり、この中には石材不明や少數ながら多種類の石材が含まれている。その中でも、メノウは石蕊 (11%)・石錐 (12%)・両極石器 (22%)・石核 (5%) にやや多く用いられているが、出土剝片は少數である。これは、メノウの剝片が石器や石核から推定するとかなり小型であることから、調査時の見過ごしとも考えられる。また、他地方からの搬入石材と考えられる黒曜石は 1 点、磨製石斧に多く (54%) 用いられている蛇紋岩は 1 点も出土していない。黒曜石が少ないので、出土石器の少なさからもわかるように主要な石材でなかったからであり、蛇紋岩が少ないので磨製石斧が半製品または製品として搬入されたためと考えられる。

第59表 遺構外出土剝片石材表

石 材	安山岩	鉄石英	頁岩系	流紋岩	結晶片岩・ホルンフェルス系	粘板岩	砂 岩	黒色巖岩 安山岩	礫 岩	その他	合 計
出土数	2005	1314	813	532	357	285	139	104	36	347	5932

打面の大きさ 第 60~62 表参照。打面の大きさ (打面長) と剝片の最大幅を相対的に比較したものである。

≒最大幅 打面が最大幅と同じか、ほぼ同じ大きさのもの。計測値で表すと、最大幅の約 9 割以上はここに含めた。

>最大幅の 1/2 打面が最大幅の 1/2 以上から約 9 割未満のもの。

<最大幅の 1/2 打面が最大幅の 1/2 未満のもの。

全体的に見ると、1/2 以上のもの 1,843 点 (84%)、1/2 未満のもの 360 点 (16%) であり、1/2 以上のものの中には最大幅とほぼ同じものが 787 点ある。剝片の多くは打面が大きいといえる。

剝片タイプ別では、1/2 以上のものが多いのは B 1 型 (91%)・B 3 型 (94%)・C 3 型 (90%) であり、少ないので B 2 型 (69%)・C 2 型 (72%) である。

石材別では、1/2 以上のものが多いのは安山岩 (90%)・粘板岩 (92%) である。つまり、打面の大きい剝片の中でも、安山岩と粘板岩は特にその傾向が強いといえる。

不定形石器は、1/2 以上のものが 69% であり、剝片類の 84% とは著しく異なる。これは不定形石器にはほとんど用いられない安山岩や粘板岩が剝片類に含まれているからである。従ってこの石材を除き、硬質系の鉄石英などの石材で比較すると近い比率を示す。

1) 安山岩の新しい剥離は、硬質でややガラス質の石材であり、鋭いエッジを作出することができることから、実際は剝片石器として多く用いられたと考えられる。

転位痕 第60~62表参照。主要剥離面(旗面・実測図裏面)と背面(実測図正面)との剥離方向の比較である¹⁾。

- 0° 主要剥離面と背面の剥離方向が同じもの。背面の剥離が複数あっても、全て主要剥離面と同じ方向である。
- 90° 主要剥離面と背面の剥離方向が約90°ずれるもの。背面の剥離が複数存在する場合は1面でも90°ずれるものがある場合90°に含めた。
- 180° 主要剥離面と背面の剥離方向が約180°ずれるもの。背面の剥離が複数存在する場合は、1面でも180°ずれるものがある場合180°に含めた。
- 90°+180° 主要剥離面と背面の剥離方向が約90°ずれるものと、約180°ずれるものが同時にあるもの。背面の剥離が3面以上存在する場合は1面でも90°と180°ずれるものがある場合90°+180°に含めた。

一般的に0°は打面転移が行われない場合、90°は打面が90°に転移された最初の剥離に、180°は打面が180°に転移された最初の剥離に、90°+180°は打面が頻繁に転移する場合に多い剥片と考えられる。なお、A型は背面が全て自然面であり、剥離方向の比較はできない。しかし、背面に全て自然面を残す剥片は、石核から剥片を剥離する最初と考えられ、最も剥離しやすい部分に加擊されると推定される。つまり、剥離方向は比較できないが、0°として処理できる。また、B型・C型でも0°が大半を占めることからも、0°に含めても問題はないであろう。第60~62表の石材別剥片観察集計表には()をつけて数を記入した。

全体的に見ると、主要剥離面と背面の剥離方向が0°のものが2,285点(86%)を数え、ほとんど剥離方向が同じ方向といえる。これ以外は非常に少なく90°が255点(10%)、180°が99点(4%)、90°+180°が21点(1%)である。

石材別では、0°が多いのは安山岩(97%)・砂岩(94%)で、逆に少ないのは鉄石英(76%)・頁岩系(77%)である。

この数値から判断すると、安山岩・砂岩は鉄石英・頁岩系より打面転移が少なく、逆に鉄石英・頁岩系は安山岩・砂岩より打面転移が多いと考えられる。

不定形石器は0°のものが60%であり、剥片類とは著しく異なる。これは前述のように不定形石器にはあまり用いられない安山岩や砂岩が剥片類に含められていたためであり、これらを除き、不定形石器の主要石材である鉄石英・頁岩系と比較するとややその比率は近くなる。しかし、それでも約15%の差がある。

折断状の痕跡 第60~62表参照。必ずしも十分な観察ではないが²⁾、全体で518点(19%)の折断状の痕跡が認められた。折断状の痕跡は、古い急角度の剥離面、主要剥離面の剥離と同

1)剥離面が複数の場合は、小さな剥離面を無視したものもある。

2)黒色緻密安山岩においては折断についての観察はしていないが、特に意味はない。

時に側縁が折断状に剥離する面、当時の欠損面なども含まれるが、意図的な折断もかなり行われていたものと推定される。

石材別では、鉄石英（32%）が多く、安山岩（13%）・流紋岩（13%）・粘板岩（2%）が少ない。

なお、不定形石器と比較すると、不定形石器の折断状の痕跡は37%である。剥片類で安山岩や軟質系の石材を除いたもので比較すると、鉄石英（32%）・頁岩系（21%）・流紋岩（13%）といずれの石材も比率は低い。このことは、剥片から石器が製作される過程で折断が行われたことを裏づけるものといえる。

大きさ 第117・118図参照。長幅分布図に図示した石材は、最も出土量の多い安山岩、硬質系の石材の鉄石英と頁岩系、変成岩系で軟質な結晶片岩と同じくやや硬質なホルンフェルス系、軟質系の粘板岩と砂岩である。A3類はどの石材においても出土数が少ないので省略した。計測方法は、打点から遠位端¹⁾までの長さではなく、最大長を長さとし、幅は最大幅を計測した。

石材別に見ると、安山岩は長さ4.0～9.0cm・幅4.0～10cm、鉄石英・頁岩系は2.0～6.0cm・幅2.0～6.0cm、結晶片岩・ホルンフェルス系は長さ4.0～8.0cm・幅4.5～8.0cm、粘板岩・砂岩は長さ4.5～6.5cm・幅6.0～9.0cmの範囲に多く分布する。また、長さや幅が10cm以上の剥片は安山岩に多く、結晶片岩・ホルンフェルス系、粘板岩、砂岩は少ない。しかし、鉄石英・頁岩はほとんど存在しない。長幅比では、安山岩・結晶片岩・ホルンフェルス系は1：2寄りにやや多く、鉄石英・頁岩系は1：1を中心均等に分布し、粘板岩・砂岩は1：1～1：2のものが多い。これらの長幅分布の諸特徴をまとめると、安山岩は大型の剥片で、横長剥片がやや多く、鉄石英・頁岩系は小型の剥片で、縦長剥片・横長剥片がほぼ同数である。結晶片岩・ホルンフェルス系、粘板岩・砂岩は中型の剥片で、結晶片岩・ホルンフェルス系は横長剥片がやや多い。粘板岩・砂岩も横長剥片が多い。なお、粘板岩の剥片で打面がなく観察対象に含めなかったもの多くは横長剥片であったと推定されるものである。

剥片の形状別に見ると、石材により必ずしも明確ではないが、A1型が各型に比べ、一般的にやや大型で横長化の傾向にある。

これらの剥片類を剥片石器の大きさと比べて見ると、剥片類の大きさが小さすぎ剥片石器の素材にならないものが多い。安山岩は礫器類のB類（剥片素材）で多く33%使用されているが、多くの礫器類は安山岩の剥片類より大きい。従って、安山岩の剥片類で礫器類の素材となり得るものはごく一部と考えられる。鉄石英・頁岩系は石錐（25%）・石錐（67%）・両面加工石器（43%）・両極剥離痕のある石器（63%）・不定形石器（66%）に多く使用されているが、石錐・石錐の一部・両面加工石器の一部・両極剥離痕のある石器の一部に使用できる程度の大きさである。不定形石器においては、それに見合う大きさの剥片類は極めて少ない。結晶片岩・ホル

1) 第33図参照。

シフェルス系・粘板岩・砂岩は三脚石器（72%）・板状石器（91%）・打製石斧（87%）に多く使用されているが三脚石器や板状石器の一部に使用できる程度の大きさであり、これ以外、特に打製石斧の素材になり得る剥片類はほとんど存在しない。安山岩は剥片類の出土数に比べ、石器が少ないため除外するが、これらの剥片類の多くは、一部の小型石器以外には素材になり得ないといえ、目的剥片を生産する際に生ずる屑片や石器製作の際に生ずる屑片が多いのではないかと考えられる。

第60表 剥片類石材別観察集計表(1)

石材名		剥片類				总数	5585	計測不可能数	2925
							計測可能数	2660	出土地点 遺跡外
剥片 イメイ	出土数	打面の大きさ				軸位	偏	考	
		大	中	小	大	0°	90°	180°	90°+180°
A 1	409	—	—	—	(486)	—	—	—	剥削101
A 2	62	17	29	15	(—)	—	—	—	剥削17, 打面の大きさを決めかねるもの1
A 3	19	2	10	4	(85)	—	—	—	剥削3, 打面の大きさを決めかねるもの3
B 1	546	203	284	56	504	30	12	1	剥削32, 打面の大きさを決めかねるもの9
B 2	155	32	75	46	129	22	3	1	剥削16
B 3	33	8	23	2	28	2	3	—	剥削4
C 1	794	376	306	91	639	111	33	11	剥削66, 打面の大きさを決めかねるもの6
C 2	488	102	244	136	374	69	38	7	剥削126, 打面の大きさを決めかねるもの6
C 3	154	47	85	14	121	21	16	2	剥削35, 打面の大きさを決めかねるもの6 剥削3, 打面の大きさを決めかねるもの3
合計	2660	787	1056	360	(1795)	255	99	21	—

(上の表は各石材を合計したものである。)

石材名 安山岩		剥片類				总数	2005	計測不可能数	1063
							計測可能数	942	出土地点 遺跡外
剥片 イメイ	出土数	打面の大きさ				軸位	偏	考	
		大	中	小	大	0°	90°	180°	90°+180°
A 1	260	—	—	—	(380)	—	—	—	剥削83
A 2	6	3	3	—	(4)	—	—	—	剥削1
A 3	5	—	4	1	(5)	—	—	—	—
B 1	404	152	213	36	385	15	4	—	打面の大きさをきめかねるもの3
B 2	7	2	4	1	7	—	—	—	剥削2
B 3	3	—	3	—	3	—	—	—	—
C 1	245	112	98	26	235	8	2	—	剥削37, 打面の大きさをきめかねるもの3
C 2	9	3	4	2	9	—	—	—	剥削2
C 3	3	—	2	—	3	—	—	—	打面の大きさをきめかねるもの1
合計	942	272	331	66	(642)	23	6	—	—

第61表 剥片類石材別観察集計表(2)

石材名	鉱数	計画不可能数			備考
		計画可能数	出土地点	遺構外	
鉄石英	1314	633			
A 1	28	—	—	—	—
A 2	21	7	11	2	打面の大きさをめかねるもの1 打面の面積の1/2
A 3	7	4	2	(7)	打面の大きさをめかねるもの1 打面の面積の1/2
B 1	46	8	31	6	打面の大きさをめかねるもの1 打面の面積の1/2
B 2	52	8	25	19	打面の大きさをめかねるもの1 打面の面積の1/2
B 3	13	4	8	1	打面の大きさをめかねるもの1 打面の面積の1/2
C 1	201	94	76	25	打面の大きさをめかねるもの1 打面の面積の1/2
C 2	242	40	127	72	打面の大きさをめかねるもの1 打面の面積の1/2
C 3	71	15	45	4	打面の大きさをめかねるもの1 打面の面積の1/2
合計	681	176	327	131	打面の大きさをめかねるもの1 打面の面積の1/2

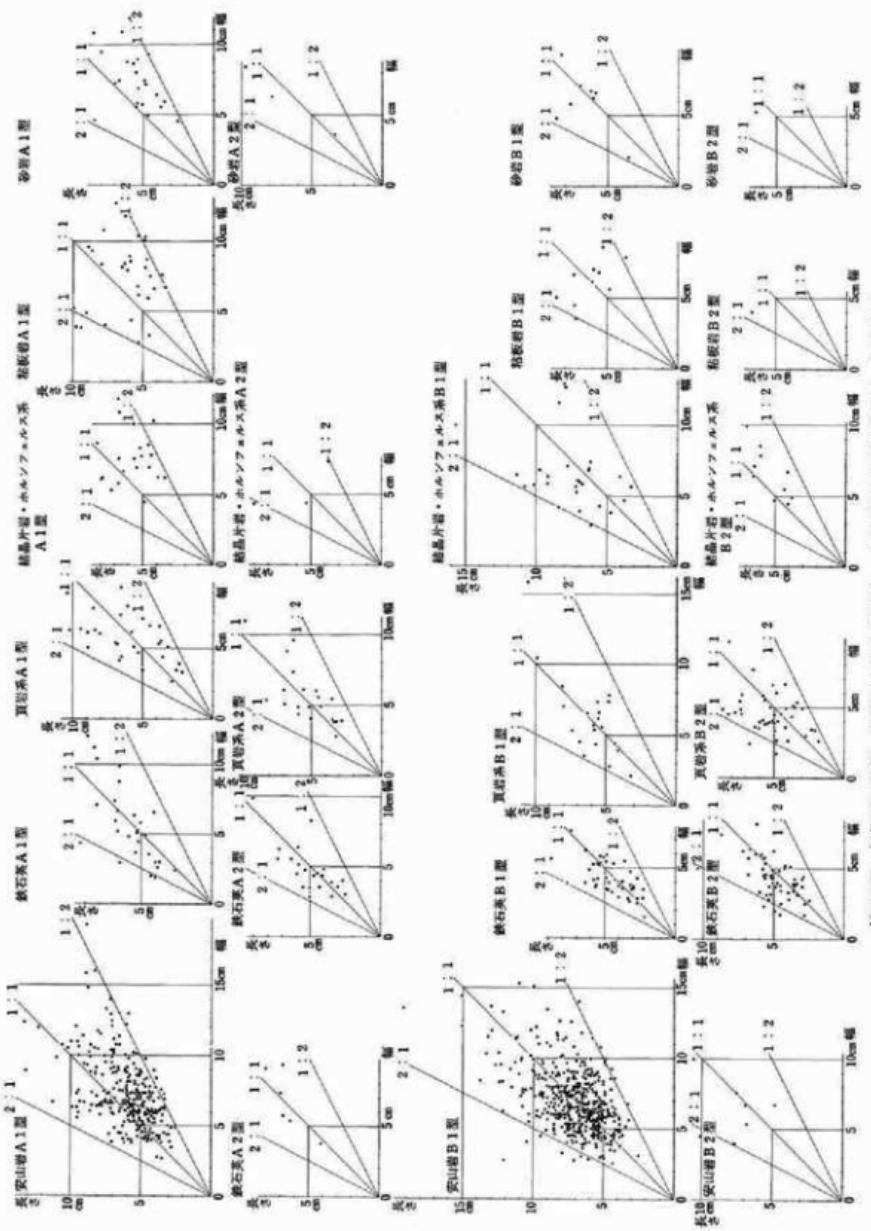
石材名	鉱数	計画不可能数			備考
		計画可能数	出土地点	遺構外	
真岩系	813	363			
A 1	30	—	—	—	—
A 2	21	5	9	7	打面の大きさをめかねるもの1 打面の面積の1/2
A 3	3	2	—	(1)	打面の大きさをめかねるもの1
B 1	21	16	9	2	打面の大きさをめかねるもの1 打面の面積の1/2
B 2	43	16	23	10	打面の大きさをめかねるもの1 打面の面積の1/2
B 3	10	2	7	1	打面の大きさをめかねるもの1 打面の面積の1/2
C 1	163	87	57	18	打面の大きさをめかねるもの1 打面の面積の1/2
C 2	113	27	55	29	打面の大きさをめかねるもの1 打面の面積の1/2
C 3	46	20	23	3	打面の大きさをめかねるもの1 打面の面積の1/2
合計	450	163	183	70	打面の大きさをめかねるもの1 打面の面積の1/2

石材名	鉱数	計画不可能数			備考
		計画可能数	出土地点	遺構外	
斑紋岩	532	293			
A 1	12	—	—	(2)	—
A 2	7	2	3	2	打面の大きさをめかねるもの1 打面の面積の1/2
A 3	2	—	—	1	打面の大きさをめかねるもの1 打面の面積の1/2
B 1	19	11	4	2	打面の大きさをめかねるもの1 打面の面積の1/2
B 2	31	8	13	12	打面の大きさをめかねるもの1 打面の面積の1/2
B 3	6	2	4	—	打面の大きさをめかねるもの1 打面の面積の1/2
C 1	90	46	46	8	打面の面積を決めかねるもの1 打面の面積の1/2
C 2	55	15	27	13	打面の面積を決めかねるもの1 打面の面積の1/2
C 3	17	6	7	4	打面の面積を決めかねるもの1 打面の面積の1/2
合計	239	84	96	42	打面の面積を決めかねるもの1 打面の面積の1/2

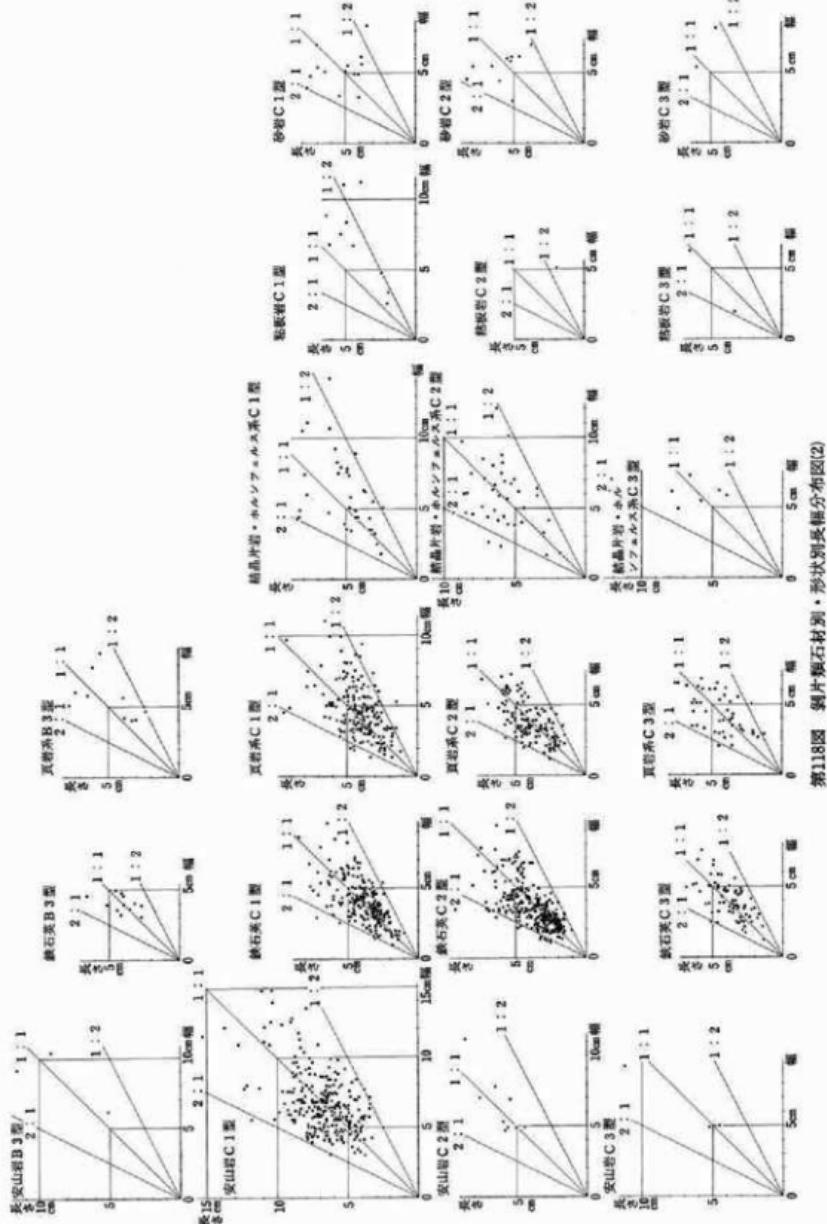
石材名	鉱数	計画不可能数			備考
		計画可能数	出土地点	遺構外	
結晶片岩・ホルンフェルス系	357	212			
A 1	21	—	—	(3)	—
A 2	3	—	3	(3)	—
A 3	—	—	—	—	—
B 1	27	12	14	1	打面の大きさをめかねるもの1 打面の面積の1/2
B 2	10	—	8	2	打面の大きさをめかねるもの1 打面の面積の1/2
B 3	—	—	—	—	—
C 1	41	12	21	8	打面の大きさをめかねるもの1 打面の面積の1/2
C 2	36	8	13	14	打面の大きさをめかねるもの1 打面の面積の1/2
C 3	7	2	4	1	打面の大きさをめかねるもの1 打面の面積の1/2
合計	145	34	63	26	打面の大きさをめかねるもの1 打面の面積の1/2

第62表 剥片類石材別観察集計表(3)

石材名		粘板岩系		总数 285	計画不可用数 230			
				計画可能数 55	出土地点 遺構外			
剥片タ イプ		打面の大きさ 出土数 当該 大削 面の 割合の %		転 位 幅		備 考		
				0° 90° 180° 90°+ 180°				
A 1	31	— — — —		(3)		— — —		
A 2		— — — —		(1)		— — —		
A 3		— — — —		(1)		— — —		
B 1	10	2	7	1	7	3		
B 2	1		1		1?			
B 3								
C 1	10	8	2		8	2		
C 2	1			1	1			
C 3	2	1	1		1	1		
合計	55	11	11	2	(4)	3	4	計画不可能なものは横長剥片が中心となる
石材名		砂岩		总数 139	計画不可用数 77			
				計画可能数 62	出土地点 遺構外			
剥片タ イプ		打面の大きさ 出土数 当該 大削 面の 割合の %		転 位 幅		備 考		
				0° 90° 180° 90°+ 180°				
A 1	23	— — — —		(3)		— — —		折断 5
A 2	3	— — — —		(1)		— — —		折断 1
A 3	1	— — — —		(1)		— — —		折断 1
B 1	8	5		8				打面の大きさを決めかねるもの 3
B 2	1		1	1				
B 3								
C 1	14	5	7	2	11	3		折断 2
C 2	10	4	5	1	10			折断 2
C 3	2	1	1		1	1		面と面との接線線上を打面とするもの 2
合計	62	15	15	6	(2)	4		
石材名		黒色凝灰岩安山岩		总数 104	計画不可能数 40			
				計画可能数 64	出土地点 遺構外			
剥片タ イプ		打面の大きさ 出土数 当該 大削 面の 割合の %		転 位 幅		備 考		
				0° 90° 180° 90°+ 180°				
A 1	1	— — — —		(1)		— — —		
A 2		— — — —		(1)		— — —		
A 3		— — — —		(1)		— — —		
B 1	8	3	5		5	3		
B 2	8	3	2	3	7	1		
B 3	1		1		1			
C 1	21	12	3	3	16	4	1	打面の大きさを決めかねるもの 3
C 2	19	4	11	4	16	1	2	
C 3	6	2	2	2	5		1	
合計	64	24	24	12	(5)	9	4	
石材名		礫岩		总数 36	計画不可能数 14			
				計画可能数 22	出土地点 遺構外			
剥片タ イプ		打面の大きさ 出土数 当該 大削 面の 割合の %		転 位 幅		備 考		
				0° 90° 180° 90°+ 180°				
A 1	3	— — — —		(1)		— — —		
A 2	1	— — — —		(1)		— — —		
A 3	1	— — — —		(1)		— — —		
B 1	3	1	2	3				
B 2	2	1		1	1		1	
B 3								
C 1	9	6	2	1	7	1	1	
C 2	3	1	2		2		1	
C 3								
合計	22	8	6	5	(8)	1	2	1



第117図 刃片類石別・形状別長幅分布図(1) A, B型は出土数が少ないので省略した。



第118図 剥片類石材別・形状別長幅分布図(2)

23) 土 製 品 (842~857・861~863 図版 385)

三角形土版 (842~845 図版 385) 842は全面丁寧に研磨され、串状施文具により表面に刺突と沈線が施されている。843は一辺9cmを超す大型の三角形土版で、径3.5mmほどの棒状施文具により表面と側面に刺突が施され、裏面には指頭圧痕が残る。844は径2mm程の竹管状施文具により一脚の表面と側面に刺突が施されている。845は径2mm程の竹管状施文具により側面に刺突が施されている。三角形土版としてはやや細身であり、四脚状を呈するいわゆる「鳥形？土製品」(江坂ほか 1977)である可能性をもつ。

耳飾り (846~850 図版 385) 846は径5cm程の粘土盤の側縁に粘土紐を貼り付け、側縁に凹凸をつけている。表面には沈線により文様が施される。847~850は全面丁寧にナデられ、848・850は全面赤彩されている。

土製円盤 (851~852 図版 385) 851は無紋の土器片を、852はLR縞文の土器片を打ち欠いてほぼ円形に成形している。

土偶 (853~856 図版 385) 853は頭部のみ遺存しており、串状施文具による刺突で目と耳を表現している。後頭部には指頭圧痕が残る。854は頭部の約2/5が遺存しており、顔の輪郭・眉・鼻を1本の隆線でハート形に表現している。目はヘラ状施文具による沈線で表現されている。855は胸部から腰部にかけて約2/3遺存しており、胸部側縁には棒状施文具による沈線が施されている。胸部は平板に作られており、中央に粘土を貼り付けて隆起させた後、刺突を加えて胸を表現している。856は胸部約1/2が遺存しており、胸部側縁には串状施文具による刺突が施されている。胸部から腹部中央にかけては断面M字形の隆線が施され、背中はへこんでいる。

性格不明土製品 (857 図版 385) 857は側面に爪形文が施され、また表裏面のほぼ同じ位置には未貫通の穿孔がなされている。

焼成粘土塊 (861~863 図版 385) 861は粘土紐をつまんだものが熱を受けたもので、指の摸跡を明瞭に残す。862は粘土塊に柳状工具による沈線が施されたもので、863には刺突が施される。862・863は土偶の一體とも考えられる。

24) 石 製 品 (751・858~860 図版 385)

性格不明石製品 (751~858 図版 385) 858は高師小僧の頭部に穿孔がなされているものであるが貫通はしていない。男性器を表現したものと考えられる。751は扁平な凝灰岩のほぼ全面がよく研磨されており、部分的に黒色の付着物が残る。

玉 (859~860 図版 385) 859は緑色凝灰岩を穿孔・研磨して環状に仕上げている。表面には擦痕が残る。860は復元径約65mmの環状の玉である。石材は凝灰岩で表裏面に条痕が残る。

第63表 土製品・石製品観察表

No.	分類	出土地点	残存度	色調	焼成	胎土(石製品は石材)	備考
842	三角形土版	8号住P12 (F-6-1)	完形	赤褐色	良	粗密	表面裏面共によく研磨され表面には半状態文具により刺突文と沈線を施す。
843	三角形土版	不明	1/4	淡黄褐色	やや良	やや良	一边9cm以上で裏面には指頭圧痕が残る。径3.5cmの棒状施文具により刺突文を施す。
844	三角形土版	3号住P4	1/4	褐色	やや粗	やや粗。長石・石英・雲母などを多く含む。	径2mm程の竹管状施文具により側面に刺突文を施す。表面の風化が著しい。
845	三角形土版	42号住P3	1/4-1/2	褐色	良	やや粗。多量の長石と少量の雲母を含む。	径2mm程の竹管状施文具により側面に刺突文を施す。島形土製品か?
846	耳飾り	47号土成	1/2	にぶい褐色	良	やや密。長石・石英・雲母などを多く含む。	径5.5cm程の鈍円錐の個体に粘土を貼りつけ凹凸をつけている。表面には沈線を施す。
847	耳飾り	E-5-3	ほぼ完形	にぶい褐色	良	密。長石・雲母を多く含む。	表面は丁寧になでられている。
848	耳飾り	8号住P13	1/2	にぶい褐色	良	堅密。石英・長石を少量含む。	中央孔以外赤影されている。
849	耳飾り	36号住P12	完形	にぶい褐色	良	堅密。長石を多く含む。	表面は丁寧になでられている。
850	耳飾り	20号住P5	完形	褐色	良	堅密。石英・雲母を多く含む。	全面施文。折れ部に明顯に接合痕を残す。
851	土製円盤	3号住覆土	完形	褐色	良	やや密。長石・石英・雲母などを少量含む。	無文の土器片利用。
852	土製円盤	E-6-2+3	完形	褐色	良	堅密。長石をやや多く含む。	L R網文施文の土器片利用。磨耗著しい。
853	土偶	42号フラスコ状土坑	頭部のみ	にぶい褐色	良好	長石・石英・雲母などを多く含む。	半状施文具による刺突で目と耳を表現する。後頭部には指頭圧痕が残るが全面施文である。
854	土偶	16号住覆土	頭部1/2	褐色	良	堅密。長石をごく少量含む。	ヘタ状施文具による沈線で目を表現する。額・眉・鼻を1本の施線でハート形に表現する。
855	土偶	20号住P5	頭部1/2	にぶい褐色	良	やや密。長石を少量含む。	棒状施文具により頭部側縁に沈線を施す。腹面中央を盛起させ刺突で睛を表現する。
856	土偶	1-7-29	頭部1/2	黒褐色	良	やや粗。長石・石英・雲母を多く含む。	頭部側面に棒状施文具により刺突文を施す。
857	不明土製品	3号住P4	1/2	灰白色	やや良	密。少量の長石と多量の雲母を含む。	側面に爪形文を施す。表面には同位置に穿孔されているが貫通はしていない。
858	高鶴小僧	不明	?	にぶい黃褐色	--	鉄分飛出物	頭部穿孔
859	玉	16号住覆土	完形	淡褐色	--	褐色玻璃岩	外径21mm内径7mm
860	玉	不明	1/4	にぶい赤褐色	--	緑色玻璃岩	椭定復元径5.6cm
751	不明石製品	不明				安山岩	黑色付着物、綠色斑が残る。丁寧に磨かれている。

C ま と め

前項では器種ごとの分類と分析を行い、各器種における諸特徴や一般的の傾向を明らかにした。ここでは、それらの結果をふまえ、若干の問題点・今後の課題等を記述し、まとめとしたい。

1) 三脚石器の分布・時期・性格について

本遺跡の石器組成のうち特徴的なものに三脚石器と三角形の板状石器¹⁾の大量出土（合計約150点）がある。本稿では従来あまり明確でなかった三脚石器の分布と時期を示し、合わせてその性格について考察する。

三脚石器の分布については過去に集成が行われ（金子 1983）、その後の新資料も併せて次第にその時期も明らかになりつつある。三脚石器は、青森・秋田・山形・福島・栃木・新潟・富山の各県に分布し、円筒上層式・大木式土器の分布域とはほぼ一致し、類似遺物である三角形土版・三角形岩版とも分布が共通する（第 119 図）。ただし、三者の前後関係は未だ不明である。

三脚石器はその出現が前期後葉まで遡る可能性も指摘されているが、現在確認されている最古の三脚石器は山形県の大木 7 a 式期のものである（渋谷 1986）。次の大木 7 b 式には福島県（高橋ほか 1987）・新潟県²⁾に、さらに中期中葉に秋田県・栃木県³⁾へ、後期前葉には青森県に現われる（今井ほか 1969）。富山県出土例は後・晚期とされるが（渋谷 1972）詳細は不明である。現時点における確実な存続時期は中期初頭から晚期前葉⁴⁾までである。その分布と時期について要約すると、山形県を中心にして同心円状に伝播したと言えよう。

なお、新潟県への伝播経路については、現時点での新潟県内の分布が山形県と接する新潟県北部（阿賀野川以北）では全く確認されていない。中越地方では山間部でのみ確認され、平野部・海岸部では確認されていないことから、山形県から直接伝播してきたとは考え難く、福島県会津地方を経由して中越地方（信濃川中流域）へ伝播したと考えるのが妥当であろう。

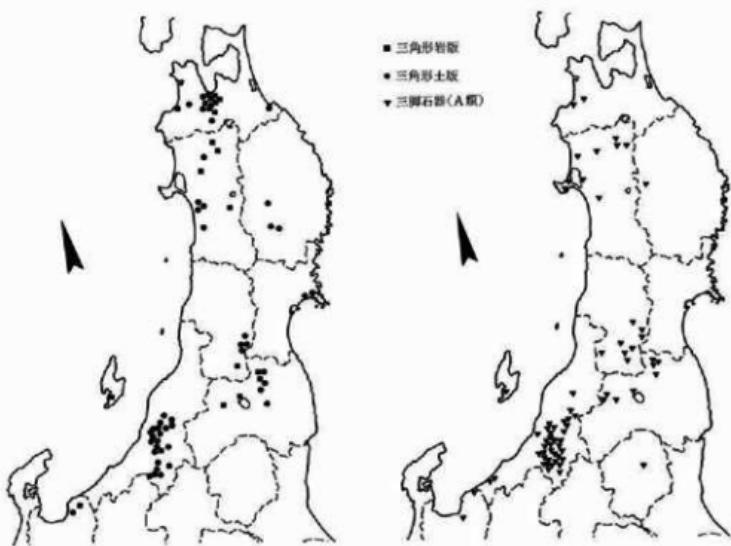
三脚石器の性格については、1 遺跡あたりの出土数が少ないと形状の特異さから類似遺物である三角形土版・三角形岩版と関係づけられて非実用的な石製品と見做されることが多かった（目黒 1956・江坂 1960）。しかし、本遺跡における出土状況は、その大多数が長方形住居跡をはじめとする住居跡内堆積土から出土し、集落中央のいわゆる広場では見られないという一

1) 三脚石器と三角形の板状石器の定義については、第 IV 章 2 項 B 6) を参照。

2) 新潟県において現在最古の三脚石器と見られるものは本遺跡出土例である。

3) 秋田県男鹿市の大畠台遺跡、栃木県矢板市の坊山遺跡出土例から、遅くとも大木 8 b 式期には秋田県・栃木県に出現していたと見られる。

4) 三脚石器が 46 点出土している秋田県鹿角町の藤株遺跡では土坑底面直上出土例に大洞 B 式の土器に伴う例が 1 点ある。ただし、その他の 45 点は全て後期前葉の土器に伴うと見られること。また、後期後半の三脚石器が現在のところ明確でないことから、その消滅する時期を晚期とすることは時期尚早かも知れない。



第119図 三角形土版・三角形岩版・三脚石器(A種)の分布 (原図金子1983一部改変)

一般的なあり方を示すこと(第46図)。また本遺跡と西倉遺跡(佐藤1988)出土例では使用痕が確認されることから、実用品であったことは明らかである。本遺跡で認められた使用痕には側縁の擦痕(360・646 ほか)と裏面の擦痕(226・635 ほか)があり、西倉遺跡出土例では側縁中央に打痕(つぶれ)が認められる。側縁部の擦痕は正裏面方向のものであり用途はスクレイバー的なものと考えられる。ただし、石材は粘板岩・結晶片岩・砂岩など比較的軟質なものがその大部分を占めることや、刃部が鈍いことなどから対象物は限定されよう¹⁾。

今回は使用痕観察により三脚石器が実用に供されたことを明らかにし得たが、これが三脚石器全般に共通するものかどうかなどは、今後の徹底した使用痕観察と新たな発掘資料などを待たなければならぬ。

1) 例え、「植物から繊維を探るのに用いた刃物」(石倉1950)と見ることも可能である。

2) 器種と石材選択

本遺跡で使用された石器の石材は、極めて多種類にわたる。しかし、既述のように一つの器種で多種類の石材を用いるのではなく、器種ごとで2~3種類の石材を多用するという石材選択が認められた。それらを大まかにまとめるとほぼ4群に分けられる。

A群 石鏃・石錐・尖頭器・石匙・両面加工石器・両極剝離痕のある石器・不定形石器・三脚石器A 1類

主な石材 流紋岩・鉄石英・頁岩・黒色緻密安山岩・黒色頁岩（石鏃・両極剝離痕のある石器等の小型の石器には、これ以外にメノウやチャートが用いられている。）

石材の特徴 硬質で緻密な石質であり、剝離は貝殻状の断口が著しい。

B群 三脚石器（A 1類を除く）・板状石器・打製石斧

主な石材 粘板岩・砂岩・結晶片岩

石材の特徴 A群の石材に比べ軟質であり、砂岩以外は層状節理が発達し、比較的板状に剝離しやすい。また、風化しやすい石質である。

C群 磨石類・砥石・石皿

主な石材 安山岩（多孔質安山岩を含む）・花崗岩・砂岩・輝緑岩

石材の特徴 岩石を構成する粒子はやや粗く、表面はやや凹凸のある石材である（細粒質の砥石を除く）。

D群 打製石斧

主な石材 蛇紋岩

石材の特徴 繊維を束ねたような石材であり、折れにくい。

これらの器種の中には、機能・用途がはっきりせず、使用部分が不明の石器も存在するが、おおむねA群の石器は鋭い刃部または尖頭部を持つ石器、B群はA群ほど鋭い刃部を必要とせず、板状の素材から製作される石器で、両群ともほとんど剥片石器である。逆にC群は刃部や尖頭部を持つ石器でなく、使用面に磨痕や敲打痕の認められる碌石器である。つまり、石器の用途・機能・形状・製作技法等と石材は密接な関係があり、多くの石材の中から器種に最も適した石材を選択していたといえる。

ところで、D群の蛇紋岩以外は全て遺跡周辺（具体的には遺跡近くの魚野川）で採集されたものと考えられる。それは『新潟県地質図』（茅原ほか1977）によれば、魚野川とその支流である破間川・佐梨川・水無川等の流域及びこれらの河川をとり聞く山岳には、多くの種類¹⁾の石材が産出し、しかも、本遺跡の立地する魚野川下流付近は、これらの石材が河川により運ばれてく

1) 鉄石英・メノウ・黒色緻密安山岩は『新潟県地質図』に図示されていないが、鉄石英・メノウは破間川で容易に採集できる。黒色緻密安山岩は魚沼層に含まれているということから魚野川にも存在すると考えられる。なお、信濃川（遺跡から約5kmの距離に存在する）では黒色緻密安山岩が容易に採集できることが確認されている。

る場所であり、採集するのが極めて容易であったと推測されるからである。

一方、D群の磨製石斧に多用されている蛇紋岩は、既述のように糸魚川地方から半製品または製品として搬入された可能性が高い。それは、同地方の長者ヶ原遺跡(藤田ほか1964)や寺地遺跡(寺村ほか1987)等では、中期前半から磨製石斧が大量に生産され、磨製石斧の供給地と考えられること(阿部1987)、また、これを裏づけるかのように魚沼地方や上越地方の遺跡においては、蛇紋岩製の磨製石斧の出土が普遍的に認められることからも妥当であろう。では、なぜ多くの蛇紋岩製の磨製石斧が搬入されたのであろうか。それは、蛇紋岩にかわる石材が遺跡周辺で採集できなかったからである。つまり、磨製石斧の用途¹⁾に対して最も蛇紋岩が適した石材であったと考えられる。また、多く搬入された背景には、直接的あるいは間接的にそれを可能にした交流があったものと思われる。

ところで、搬入石材と関連して黒曜石の石器・剣片の出土が少なかった²⁾。これは黒曜石にかわる石材(メノウ・鉄石英・頁岩等)が遺跡周辺で容易に採集されたからと考えられる。

3) 石器組成について

出土した石器は、土器との関連において、その大半が縄文時代中期前半に所属する。その内訳は第5表のように様々な器種により構成されるが、不定形石器・磨石類・打製石斧が極めて多く、石器組成の主体を占める。残りを石錐・三脚石器・板状石器・磨製石斧・石皿・両極削離痕のある石器が占め、石鏃・尖頭器・石匙・石鍤は非常に少ないといえる。

魚沼地方における縄文時代中期の遺跡は、他時期と複合するものが多く、石器組成では不明な点が多い。従って、これらの遺跡と必ずしも十分な比較はできないが、時期が比較的限られ、器種別の出土数の明記してある中魚沼郡津南町「沖ノ原遺跡」(渡辺ほか1977)(中期中葉から後葉が主体)、同じく「八反田遺跡」(渡辺ほか1984)(中期中葉・後期前葉から中葉が主体)、同郡中里村「森上遺跡」(齊藤・高橋ほか1974)(中期中葉から後葉が主体)の石器組成と比較して見る³⁾。なお、この3遺跡は、本遺跡に比べ時期がやや新しく、地域的にも魚沼地方の北と南という隔たりがあり、しかも集落跡の一部を発掘調査しただけのものである。

石器組成は打製石斧・磨石類(凹石・敲石を含む)の出土が極めて多い。また不定形石器はその抽出が観察者により左右される面を持つものの、八反田遺跡では43.8%、森上遺跡では

1) 大型磨製石斧は木材伐採具、小型磨製石斧は木材加工工具と一般にいわれている。このような用途で使われた場合石斧にかかる衝撃は極めて大きいと考えられる。

2) 中魚沼郡中里村森上遺跡では剣片1057点のうち黒曜石は11点である。魚沼地方の中期における黒曜石の使用はそれほど多くないと考えられる。

3) 八反田遺跡では、中期中葉が主体の地区、後期前葉から中葉にかけての遺跡と地区に石器を分け、組成表を提示している。従って、本書においては中期中葉が主体の地区的石器を対象として比較した。

43.6%の高い比率を示す¹⁾。従って、打製石斧・磨石類・不定形石器の占める割合は、沖ノ原遺跡で71.3%、八反田遺跡で78.0%、森上遺跡で86.0%を示し、本遺跡の81.5%と比べ、極めて類似し高い比率を占める。石皿・磨製石斧・石錐は多くはないものの、ある程度の比率を示す。

本遺跡で多く出土した三脚石器・板状石器は、森上遺跡で三脚石器が4点出土したにすぎず、板状石器は皆無である。逆に本遺跡で出土していない厚手の片刃打製石斧や石笠が、森上遺跡で石笠が90点、八反田遺跡では片刃打製石斧が34点も出土しており、組成に差異が認められる。これが地域的な違いによるものか、時期的な違いによるものは不明であり、今後の課題といえよう。三脚石器は魚沼地方及び長岡市周辺の中前期または後期の遺跡では、1遺跡の出土数は多くないもののかなりの類例が認められている。しかし、本遺跡のように68点もの出土は、現在のところ例がない。板状石器についての分布傾向も三脚石器とはほぼ同様と考えられるが、長岡市『岩野原遺跡』(駒形・寺崎1981)の後期集落から約500点、南魚沼郡塩沢町『五丁歩遺跡』(中前期前半主体)から数百点²⁾の出土が認められる³⁾。しかし、これらの遺跡から出土している板状石器は、平面形が円形・橢円形状を呈するものが多く、本遺跡のものとは平面形が大きく相違する。いずれにしても、中期前半に属する本遺跡から三脚石器と板状石器がかなり出土したこと、組成において注目されるといえよう。

第64表 主な出土石器の組成

器種 区分	石 錐	尖 底 鋸 鋸 鋸	石 斧	森上 遺跡 工 石	三 脚 石 器	板 状 石 器	打 製 石 斧	磨 製 石 器	磨 石 類	磨 石 類	石 皿	の内 ある 石 器	不 定 形 石 器	石 錐	台 石	合 計		
全 体 (%)	38 (0.3)	12 (0.0)	67 (0.0)	4 (0.0)	21 (0.0)	68 (0.0)	106 (0.0)	594 (0.0)	63 (0.0)	44 (0.0)	642 (0.0)	14 (0.0)	74 (0.0)	54 (0.0)	1275 (0.0)	2 (0.0)	4 (0.0)	3082 (0.0)
土石流跡 (D-5~7, E-4~6区) (%)	4 (0.0)	1 (0.0)	10 (0.0)	1 (0.0)	4 (0.0)	9 (0.0)	14 (0.0)	65 (0.0)	8 (0.0)	5 (0.0)	44 (0.0)	2 (0.0)	6 (0.0)	7 (0.0)	206 (0.0)			386 (0.0)
集落跡(%) (P-7~H, G-1~H, H-5~14, I-4~14, J-3~14C, A+シングル)	25 (0.0)	10 (0.0)	49 (0.0)	1 (0.0)	16 (0.0)	45 (0.0)	67 (0.0)	398 (0.0)	47 (0.0)	26 (0.0)	491 (0.0)	10 (0.0)	51 (0.0)	33 (0.0)	747 (0.0)	1 (0.0)	4 (0.0)	2022 (0.0)

* 明らかに中期前半に所属しないと考えられる石器、または未製品は除外した。

* 土石流跡の遺構内から出土した石器は除外した。

* E-3, F-2~6, G-2~4, H-3~4区のすべての石器は、後期の土坑が存在したり、集落跡や土石流跡と近接するため除外した。

* 柱穴列からの石器、出土地不明の石器は除外した。

1)八反田遺跡では「削器」、森上遺跡では「使用痕・加工痕のある剝片」とされている器種が、本遺跡の不定形石器に相当すると考えた。沖ノ原遺跡では「削器」とされているものが3点(0.6%)と少なく、これ以外で不定形石器に相当すると思われる器種がない。観察者の抽出の差と考えられる。

2)現在、県教育委員会で整理中である。

3)この他に長岡市の藤橋遺跡(駒形・寺崎1977)・(縄文時代後期前葉・晩期後葉が主体)からもかなり出土していると考えられるが、出土数は明記されていない。

石鎌・尖頭器・石匙・石錐については、石鎌が八反田遺跡と沖ノ原遺跡でやや認められるものの、多量とはいはず、尖頭器・石匙は極めて少なく、石錐は皆無である。ほぼ本遺跡と同じ傾向を示すといえよう。なお、魚沼地方及び長岡市付近では、石錐は小千谷市『城之腰遺跡¹⁾』や岩野原遺跡の後期集落、同地方の中期から後期の遺跡の例から、中期末葉以降に増加するものと考えられる。

一方、本遺跡の石器組成をさらに検討すると、第64表のとおり地区により若干の組成の変化が窺える。地区別の土器年代は、土石流跡からのものが中期前葉（新崎式・大木7b式）を主体とし、集落跡のものは中期中葉（大木8a式）を主体とする。土石流跡からの石器は、土石流により運ばれてきたという制約があるものの、その比率を比較すると、不定形石器は土石流跡では高く、集落跡では低い。打製石斧・磨石類・石皿は土石流跡では低く、集落跡では高い比率になる。このことを土器年代の時期にあてはめると、中期前葉から中葉に移るに従い、不定形石器の比率が低くなり、かわって打製石斧・磨石類・石皿の比率が高くなるといえる。このような石器組成の変化は、他器種では認められないことから、不定形石器の減少と打製石斧・磨石類・石皿の増加という相互作用の結果と考えられる。なお、既に述べてきたように各器種において土石流跡から出土した石器と集落跡から出土した石器との形態差は認められなかつた。

以上のような石器組成の諸特徴を周辺地域と比較して見ると²⁾、大略的には中部高地の組成に近似する³⁾といえよう。しかし、三脚石器・板状石器の出土のように相違も認められる。三脚石器・板状石器については、その分布等⁴⁾から地域的な違いの結果といえるであろう。また、時期的に見ると、縄文時代中期前半は打製石斧・磨石類・石皿主体の組成の確立する時期（小林1983）といわれ、ほぼ同様の傾向で一致する。

1)現在、県教育委員会で整理中である。

2)不定形石器を組成から除外して比較した。

3)比較については、「縄文時代の東日本における生産用具の時間的空間的様相」（日下部1972）、「縄文時代生産活動のあり方」（小林1975）を参考にした。

4)第119図及びCまとめ 1)三脚石器の分布・時期・性格について 参照。

4) 石器の出土分布状況と遺跡のあり方

各器種の出土分布状況で述べたように、石器の多くは遺構集中地区（環状？集落跡）からの出土であり、残りはE-5・6区を中心とする土石流跡からの出土である。これ以外の場所すなわち環状？集落跡の外側や内側の空間（いわゆる中央広場）からは、ほとんど出土しない。特に中央広場では石器及び剝片類が極めて少なく、むしろ皆無といってよい程である。

個々の石器の出土状況を詳細に検討してはいないが、土石流跡の石器は土石流とともに流されてきた石器と考えられ、環状？集落跡からの石器は一部を除き、その大半が廃棄されたものと推定される。つまり、石器廃棄にあたっては、遺構の落ち込み（多くは住居跡）やその周囲に限定して行ったとも考えられ、中央広場は石器を廃棄してはならない、またはされなかつた場所であったといえる。¹¹⁾

現段階における広場の具体的な機能については不明（小林1987）といわれており、本遺跡の石器出土分布状況からも遺物がほとんど出土しないということ以外、何ら具体的な機能を推定することはできなかった。

1) 土器の出土分布状況についてはふれなかつたが、石器とはほぼ同様といえる。

引用・参考文献 石器

- あ 赤澤 威・小田静夫・山中一郎 1980 「日本の旧石器」 立風書房
 赤堀長一郎 1957 「三脚石器について」『山形考古』 山形考古友の会
 阿子島香 1979 「不定形石器」「北海道亀田郡七坂町下綱文時代遺跡出土資料 壬山一考古学資料別冊一」2 東北大文学部考古学研究会
 安達厚三 1983 「石皿」「縄文時代の研究」7 雄山閣
 阿部朝衛 1979 「ビエス・エスキュー（楔形石器）」「北海道亀田郡七坂町下綱文時代遺跡出土資料 壬山一考古学資料別冊一」2 東北大文学部考古学研究会
 阿部朝衛 1983 「バイボーラーテクニックの技術的有效性について」『考古学論叢』 東出版事業社
 阿部朝衛 1985 「縄文時代石器研究の視点と方法」「法政考古学」第10集 法政考古学会
 阿部朝衛 1987 「磨製石斧生産の様相」「史跡寺地遺跡」 新潟県青海町
 い 今井富士男・磯崎正彦 1969 「青森県十勝原内縄文遺跡調査予報」「岩木山 岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書」 十勝内調査団
 石倉惣吉 1950 「成島の珍石器考」「羽賀文化」7 山形県文化財保護協会
 え 江坂輝弥 1960 「三脚石器と三角形土製品」「土偶」 校倉書房
 江坂輝弥・渡辺 誠之 1977 「新潟県沖ノ原遺跡発掘調査報告書」「津南町文化財調査報告書」12 新潟県津南町教育委員会
 お 関村道雄 1976 「ビエス・エスキューについて」「東北考古学の諸問題」 東北考古学会
 関村道雄 1976 「縄文時代石器の基礎的研究法とその具体例」1「東北歴史資料館研究紀要」6 東北歴史資料館
 関村道雄・森嶋秀一 1984 「里浜貝塚西端地点出土の石器」「東北歴史資料館資料集9里浜貝塚I-宮城県
 鴨瀬町宮戸島里浜貝塚西端地点の調査・研究Ⅲ」 東北歴史資料館
 か 笠木信男・茂木好光 1986 「不定形石器」「宮城県文化財調査報告書第11集 田柄貝塚II土製品・石器・
 石製品編」 宮城県教育委員会

- 加藤吉平・鶴九俊明 1980 「石器の記録と計測」『縄文石器の基礎知識』II 柏書房
- 金子拓男 1983 「三角形土板・三角形岩板」『縄文文化の研究』9 雄山閣
- く 日下部善巳 1972 「縄文時代の東日本における生産用具の時間的空間的様相」『福島考古』13 福島県考古学会
- こ 小栗一夫 1983 「縄文時代早期後半における石器群の様相—南関東を中心に—」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』II 東京都埋蔵文化財センター
- 後藤秀一 1979 「敲石・凹石・磨石」『北海道鬼田郡七飯町出土縄文時代遺跡出土資料』聖山一考古学資料別冊一』2 東北大学文学部考古学研究会
- 児玉 勉はか 1979 「大煙団遺跡発掘調査報告書」 日本鉛筆株式会社船川製油所
- 小林公明 1978 「打製石斧の製作技術」『曾利』 長野県富士見町教育委員会
- 小林達雄 1987 「縄文社会の聚落生態」『世界考古学体系日本編補遺』 天山舎
- 小林康男 1974-1975 「縄文時代生産活動のあり方」1・2・3 「信濃」第26卷第12号 第27卷2・4・5号 信濃史学会
- 小林康男 1983 「縄成像」『縄文文化の研究』7 雄山閣
- 小林康男ほか 1988 「縄文時代の道具」『長野県史考古資料編全一巻(四)遺構・遺物』 社団法人長野県史刊行会
- 鈴木敏朗・寺崎裕助 1977 「藤橋遺跡」 新潟県長岡市教育委員会
- 鈴木敏朗・寺崎裕助 1981 「岩野原遺跡」 新潟県長岡市教育委員会
- き 斎藤基生・高橋恭子ほか 1974 「森上遺跡調査報告」 新潟県中里村教育委員会
- 桜井弘人・山下誠一ほか 1986 「恒川遺跡群—一般国道153号座光寺バイパス用地内埋蔵文化財発掘調査報告—遺物編」 長野県坂田市教育委員会
- 佐藤雅一 1986 「川久保遺跡」 新潟県湯沢町教育委員会
- 佐藤雅一 1988 「西倉遺跡—第2次発掘調査—」『川口町埋蔵文化財調査報告』2 新潟県川口町教育委員会
- 佐藤廣史・赤澤清章 1988 「七ヶ宿ダム開削発掘調査報告書IV」大槻川遺跡・小槻川遺跡(石器編)『宮城県文化財調査報告書』第126集 宮城県教育委員会・建設省七ヶ宿ダム工事事務所
- し 柴田秀賢・須藤俊男 1964 「原色鉱物岩石検索図鑑」 北隆館
- 渡谷孝雄 1986 「薄野前遺跡」『山形県埋蔵文化財報告書』102集 山形県教育委員会
- 鈴木次郎 1977 「直刃式片刃打製石斧について」『神奈川考古第2号』 神奈川考古同人会
- 鈴木次郎 1977 「尾崎遺跡」『神奈川県埋蔵文化財調査報告』13 神奈川県教育委員会
- 鈴木道之助 1981 「縄文石器の基礎知識」III 柏書房
- 鈴木道之助 1983 「石錄」「縄文文化の研究」7 雄山閣
- 砂田佳弘ほか 1982 「東京都国分寺市恋ヶ窪遺跡調査報告書」III 東京都国分寺市教育委員会・恋ヶ窪遺跡調査会
- た 高橋信一・芳賀英一 1987 「国営会津農業水利事業開削遺跡調査報告V—清水上遺跡・中江聖の宮遺跡—」『福島県文化財調査報告書』117 福島県教育委員会
- 高橋 保・小池義人 1986 「北陸自動車道糸魚川地区発掘調査報告書I—中原遺跡・岩野A遺跡・岩野B遺跡—」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第45集』 新潟県教育委員会
- 高橋 学ほか 1988 「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書II—上ノ山I遺跡・館野遺跡・上ノ山II遺跡」『秋田県埋蔵文化財調査報告書第166集』 秋田県教育委員会
- ち 芽原一也編 1977 「新潟県地質図」 新潟県
- つ 坪井清足 1959 「國解考古学事典」 東京創元社
- て 寺村光晴ほか 1987 「史跡守地遺跡」 新潟県青柳町
- と 富樫泰時・高橋忠彦・柴田陽一郎 1981 「藤株遺跡発掘調査報告書」『秋田県文化財調査報告書第85集』 秋田県教育委員会
- 戸沢充則 1983 「絶論—石器研究の視点と方法—」『縄文文化の研究』7 雄山閣

- 栃木県立博物館 1984 「第7回企画展 はなひらく縄文文化」
- な 中島庄一 1983 「使用旗」「縄文文化の研究」7 雄山閣
- 中村孝三郎 1960 「長岡市立科学博物館研究調査報告 第三冊 小彌が沢洞窟」長岡市立科学博物館
- 中村孝三郎 1961 「長岡科学博物館考古研究室調査報告 第4冊 越後の石器」「長岡市立科学博物館研究報告(第2号)」長岡市立科学博物館
- 中村孝三郎 1978 「越後の石器」学生社
- に 新潟県 1983 「新潟県史」資料編1 原史・古代 新潟県
- 新潟県 1986 「新潟県史」通史編1 原史・古代 新潟県
- ふ 藤田亮策・清水潤三ほか 1964 「長者ヶ原」新潟県糸魚川市教育委員会
- ほ 本間桂吉 1988 「三脚石器についての覚書」「新潟県考古学談話会会報」2 新潟県考古学談話会
- ま 増山 仁・南 久和 1984 「金沢市新保本町カモリ遺跡一石器編」「金沢市文化財紀要41」金沢市教育委員会
- 馬目順一 1975 「大畠貝塚調査報告」福島県いわき市教育委員会
- み 漢 昇ほか 1972 「富山県史」考古編 富山県
- 宮下健司 1984 「日本における研磨技術の系譜—先土器・縄文時代の砥石と研究技術を中心として—」『論集日本原史』吉川弘文館
- め 日置吉明 1956 「三脚石器について」福島県考古学会会報 2 福島県考古学会
- や 矢島國雄・前山耕明 1983 「石錐」「縄文文化の研究」7 雄山閣
- 八幡一郎 1932 「三脚石器」「人類学雑誌」47-4 東京人類学会
- 山田晃弘ほか 1986 「一括資料の分析—定量的分析の可能な資料について」「梨久保遺跡」長野県岡谷市教育委員会
- 山本 幸・池田敏郎ほか 1988 「北陸自動車道糸魚川地区発掘調査報告書VI—三尾原遺跡・三尾原B遺跡・塚ノ越遺跡・西割・杉沢遺跡—」新潟県教育委員会
- わ 渡辺 誠ほか 1984 「八反田遺跡発掘調査報告書」「津南町文化財調査報告書」14 新潟県津南町教育委員会

第V章 まとめ

今回の清水上遺跡の調査では、縄文時代中期前葉から中葉の集落跡が発掘された。その集落跡は円形から橢円形の竪穴住居跡と、長方形で大型の竪穴住居跡、貯蔵穴等で構成される。

遺構配置は直径約30mの中央広場を中心に、環状から馬蹄形を成すものと考えられるが、約半分が調査区外に延びるため全容は明らかにできなかった。

この集落跡を土石流が襲った跡が確認できた。その土石流内に多量の遺物を含んだE-5・6区を中心とするA地区からは、清水上編年案第I段階の土器が集中的に出土した。該期の土器は北陸地方の新崎I・II式に並行するもので、北陸地方の土器が主体をなし中部高地系の斜行沈線文系土器、関東系の阿玉台式土器が散見される。中期前葉は北陸地方、つまり西との交流が顕著であったことが窺える。第I段階に伴う遺構は1号住居跡などごく少数を挙げ得るのみで、A地区出土の多量の土器は、調査区外の土石流上部から流入したと理解される。

第I段階の1号住居跡は橢円形の柱穴配置をとり、住居跡分類のC-1類に分類される。この柱穴配置に近い住居跡C~E類が時期的に後続するものと考えられる。また、調査区内に弧状に展開する長方形住居跡A類は住居の切り合いや出土遺物から後出的なものと考えられる。

この長方形住居跡の確立が土器の第II段階の成立期とほぼ一致する。この第II段階1期はそれまで主流であった北陸系の土器が退潮し、第I段階2期に萌芽した越後系土器が確立するのである。これがいわゆる火焔型土器群である。この時期では火焔型土器の特徴である鶏頭冠はまだ小さく口縁部に低く付けられている。この越後系土器の発達と共に顕著になるものが東北の大木系土器群である。3号住居跡ではこの時期の好資料がみられ、越後系土器の王冠型土器と大木8a式古段階の資料が共存している。本住居跡は長方形住居の確立した姿を示しており、大きい柱穴が4本直線上に2列並び、地床炉が長軸上に2基以上配される。このあとには更に規模の大きい長軸12.2m、短軸約5mの16号住居跡が出現する。出土土器は大木8a式と越後系土器によって占められ、古い土器要素はほとんど認められない。次の段階には13・23号住居跡を挙げることができる。これらの特徴は炉の脇に埋設土器を伴い、これまでの複数の地床炉が1つに集約される傾向を示す。今回の調査ではこの時期以降の住居跡は現在のところ確認されていない。

以上から長方形住居跡は土器編年案第II段階1期頃出現し、柱穴が長辺上に多く並ぶタイプから始まり、16号住居跡例に見られる8本主柱穴で複数の長大な地床炉が長軸上に築かれる形態へと発展する。さらに23号住居跡に見られるような若干掘り込んだ炉の脇に埋設土器を伴う形へ変化すると考えられる。

この長方形住居がさらにどのような発展を遂げるか、今後の調査によって解明されることが期待される。また、C～E類の小型の住居が長方形住居に完全に移り変わるとか、あるいは一部共存する場合があるのかなども今後の検討課題である。

これまで土器変化と住居跡の変遷を見てきたが、石器についてはどうであろうか。

北陸系土器が多く出土しているA地区では不定形石器の出現率が高い。それが次の段階になると遺構集中区を中心に磨石類・石皿・打製石斧の比率が増加し、中部高地などの石器組成と類似するようになる。これは從来から言わわれているように、植物加工により適応した石器組成への変化と考えられる。また、三脚石器・板状石器が多く出土した事実も特筆すべきで、県内の遺跡では最古の出土例となろう。三脚石器の機能は從来、非実用的なものとする意見が多かったが遺構などから検出される際も、他の石器と同様な出土傾向を示すことや磨耗痕が認められることから、実用品であったと考えられる。

以上を総括すると、清水上遺跡の集落の始まりは縄文時代中期前葉で、使用されている土器は北陸系が主体を占める。しかし、遺構は数例と数少ない。中葉になると長方形住居跡が成立する。それまでの北陸系土器に替わって越後系土器が成立し、加えて東北の大木系土器が主体を占めるようになる。この頃に東北地方の縄文時代前期に発生した長方形大形住居をもつ文化が清水上遺跡の周辺に伝播してきたものと考えられる。

現在、遺跡の発掘調査後に建設された関越自動車道堀之内パーキングエリアを改修し、インターチェンジを建設する計画が進められている。建設に際しては遺跡に対する配慮が望まれることはもちろんあるが、発掘調査が不可避となった場合、集落構造の解明・遺構と遺物の関係などを究明するための綿密な調査が行われなければならないと考える。

要 約

1. 清水上遺跡は新潟県のはば中央部北魚沼郡堀之内町大字根小屋字清水上に所在する。遺跡は信濃川支流の魚野川に面した河岸段丘上に位置する。標高は調査区で 104~107 m である。
2. 発掘調査は関越自動車道堀之内パーキングエリアの建設に伴って、昭和 56 年 10・11 月、57 年 4~7 月に実施した。調査面積は 6,395 m² である。
3. 調査の結果、縄文時代中期中葉の集落跡を主体とした遺構が確認された。遺構で確実に時期の判るものは中期の竪穴住居跡・柱穴列・フ拉斯コ状土坑・土坑、後期の土坑がある。また、遺物は縄文時代早期から後期、平安時代の土師器、中世の珠洲焼、近・現代の陶磁器類が検出された。このうち縄文時代中期の土器・石器が主体を占める。
4. 遺構群は中央に広場を持ち、その周囲を環状もしくは馬蹄形に巡るものと予想されるが、調査区域内では弧状に配置する。遺跡を土石流が襲ったあとも確認された。
5. 竪穴住居跡は合計 44 基確認され、平面形と柱穴配置から 4 分類できた。そのうち A 類は掘り込みの平面形が長方形で、柱穴も直線上に並び対称するように築かれていた。長方形住跡で最大のものは 16 号住跡で規模は長さ 12.2 m、幅約 5 m である。このほかに小型の梢円形から不整台形の住跡があったが、長方形住跡に先行すると考えられる。
6. 全ての住跡の炉は地床炉か浅い掘り込みを持つものである。
7. 出土した縄文土器は多量であった。土器は中期前葉と中葉に 2 大別できる。前葉のものは遺構集中区からやや外れた土石流跡を中心とした区域から検出された。この土器群を清水上遺跡土器編年案第 I 段階とした。土器は北陸の新崎式の影響を強く受けており、これに中部高地系、関東系のものが混在する。
8. 第 II 段階には東北の大木式系土器が浸透する。それと共に在地系の火焰型土器群が成立する時期もある。
9. 石器では第 I 段階の土器の多い地区出土のものに不定形石器が高率で含まれている。第 II 段階の遺構群からのものは打製石斧・磨石類・石皿の比率が多くなる。これは中部高地の遺跡群の出土傾向に一致する。注目される石器に三脚石器・板状石器の大量出土が挙げられる。三脚石器は中期前葉から出土することで県内最古の例となろう。
10. 長方形住跡が成立するのは、大木系土器が魚沼地方に浸透する時期とはほぼ一致すると考えられる。

新潟県埋蔵文化財調査報告書第 55 集

関越自動車道関係発掘調査報告書

(本文編)

清水上遺跡

平成 2 年 3 月 20 日印刷

平成 2 年 3 月 31 日発行

発行 新潟県教育委員会

〒950 新潟市新光町 4-1

電話 (025)285-5511

印刷 株式会社 第一印刷所

〒950 新潟市和合町 2 丁目 4 番 18 号

電話 (025)285-7161

正誤表

本文編 例言 7

誤

正

柳 恒 男→柳 恒 雄